

約20cm前後の深さを測るが南端では僅か2cm前後と浅い。埋土は北側では底面に粗い砂層があり、上面には凝灰岩粒を含む黒褐色土が覆う。出土遺物はない。形状から疑似畦畔CかDの可能性はある。

**S D0004** ①-1区 I VA08~VC08 (第248図)

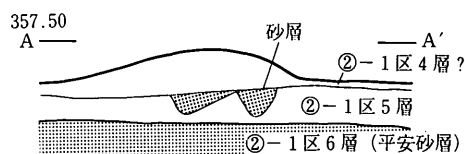
東西に走る短い溝で走行方向はN-75°-Eと、ほかの溝とは大きく走行方向がずれている。この溝は周囲の調査区壁で掘り込み面は確認できず、埋土の記録もないため所属時期は不明である。検出面からここで報告することにしたが、本溝の西端延長先では中世II面の足跡状の落ち込みが南北に連続するため、中世II面水田の所産でない可能性がある。溝の規模は長さ約4.4mを確認し、幅は約30cmで中世II面からの深さは約3cm前後と非常に浅い。埋土は記録がないため不明である。出土遺物はない。疑似畦畔の可能性はある。

**S D0006** ②-1区 I UL01・02 (第248図)

②-1区西端で南北に走る短い溝である。調査区壁では上層のS D0009に切られるため本来の構築面は不明であるが、埋土がS D0002と類似することから中世II面の遺構と捉えた。ただし、S D0002ほど砂の混入がなく、やや異なる様相も認められる。調査区内では約3m検出し、幅は36cm、断面は浅いU状を呈して検出面からの深さ約10cmを測る。埋土は上層に風化凝灰岩粒を含む暗褐色土、下層に黒褐色粘土がある。出土遺物はない。疑似畦畔の可能性はある。

**S C0018** ②-1区 I UQ01~UP07 (第248・252図)

②-1区内で検出された畦、もしくは疑似畦畔である。調査所見の記録がないため、構築面等不明な点があるが、検出レベルからすると中世II面で検出されたと思われる。しかし、他の疑似畦畔と比べてかなり高く盛り上がった特異な存在であり、中世II面とするには疑問も残る。この畦で注目されるのは畦下部に下面の水田面足跡等が残存しており、疑似畦畔のあり方を知る例となっている。



第252図 S C0018断面図

**B** ①-2・②-2区 (N-30°-W前後の走行方向の水田群) (第249~251図)

この走行方向の水田群は②-1区S C0017を西限とし、東限は判然としないがS D0025、北限は④・⑥区境の東西坪境に一致する現用水までの範囲とみられる。この範囲では南北に通る畦によって南北に長い水田に分割される。検出された遺構は溝2本と畦1本で、田面の遺存状況は不良であるが、①-2区西端で足跡と思われる砂を埋土とする小規模な凹地が多数検出されている。人間の足跡と思われるものと先端が二つに割れた牛のひずめ跡と思われる2者があり、牛の足跡と思われる凹地の歩行方向は多様で切りあいもある。また、N-30°-Wの類似方位で帯状にこの凹地が並列するものがあるが、これは疑似畦畔の可能性が高い。検出された遺構のなかで中世II面の土層が畦状に盛り上がるS C0017が古い所産で、S D0025やN-30°-W方向の足跡列の疑似畦畔はS C0017に後続する、基本土層に残らないが、部分的に残る洪水以後の所産と思われる。また、S C0017の位置には後代も継続して用水が構築されており、N-30°-W前後の水田の西限の大きな境として踏襲されることが知られる。上記のようにこの水田群で検出された遺構も複数時期の所産のものが含まれる。なお、S D0007杭列S A0001がこの調査面で検出されているが、両者ともに調査区の壁セクションや近世遺構との関係から上層の遺構と判断した。

**S C0017** ①-2区 I WM02・03 (第249図)

①-2区西端に位置する畦状遺構で、約1.5mを検出した。幅は1~1.3m、高さは約5~10cmを測り、畦上部には幅約90cmの溝が付属する。この畦上の溝は上層から掘り込まれている可能性もあるが、砂混土が入

る足跡状の凹地が西側の①-1・②-1区東部では認められないものの、再びこの溝周辺で分布する。したがって、用水周辺の足跡に残る砂層が用水を媒介して運ばれたとみられ、中世II面にさかのぼる用水があった可能性がある。

この畦は幅もかなり広く、中世II面の黒褐色粘土層が盛り上がる疑似畦畔となっていることからN-30°-W前後の方向の水田群の西端の境として位置づくと思われる。出土遺物はない。先にも述べたように本畦も疑似畦畔の可能性があるが、ほかの疑似畦畔のように畦内部には砂層が残存しない。したがって中世II面で部分的に残存する洪水砂堆積以前から存在する畦とみられる。

#### S D0022 ②-2・③区 I ON15~0016 (第250図)

S D0025とほぼ平行して位置する。幅約1.2m、深さ約10cmの断面逆台形を呈する浅い溝である。北側は調査区壁際の排水溝で破壊し、南側は浅く消えて長さ約2.4mのみを検出した。埋土は風化凝灰岩粒を多く含む砂質土である。埋土の薄さからも疑似畦畔と思われる。

#### S D0023 ②-2区 I TE02~OK19 (第250図、PL54)

S D0022の西側に位置し、ほぼ直交する方向で走る。接続関係は把握できなかったが、走行方向からするとS D0022と接続する可能性が高い。溝の規模は幅約80cmで深さ約10cm、東端は調査区壁際の排水溝で破壊し、西側は浅くなって消えるものの約8.9mの長さを検出した。埋土はS D0022と同じである。本溝はS D0022とほぼ直交する方向で走ることや形状が類似することからS D0022と関連した疑似畦畔の可能性はある。

#### S D0025 ③区 I ON14~TS01 (第251図、PL54)

③区北西部に位置し、S D0022と平行するN-30°-W前後の方向にやや蛇行しながら走る。北端は排水溝で破壊し、南端も調査時に削平してしまっているため、調査区内では約17.8mを検出したのみである。幅は北端では約30cmを測るが、南では幅広く最大で約1.5mを測る。このもっとも幅広くなる部分では礫が散在して検出されている。深さは約10cm前後であり底面の高低差は見られない。埋土は風化凝灰岩粒を多く含む砂に近いシルトで出土遺物はない。この溝も疑似畦畔の可能性はあるが、この部分に礫の集中があることから洪水以前においても畦であった可能性がある。

#### C ③・④区 (N-2~5°-Wの走行方向をもつ水田群) (第251図)

この水田群はS D0025を西限とし、東限については④・⑥区ともに対応する土層が消えて不明である。この範囲は⑥区の平安時代坪境にあたる現用水下で平安時代以後の畦が認められ、さらに④区畦とS D0021が連続していないことを考えると、中世II面でも平安時代の条里型水田と同方向の畦が存在したと見られる。したがって、この場所は坪境を挟んで大きく2つの区画に分離されることになるが、④区もごく一部のみが調査されただけなので一括して扱う。検出された遺構は④区西端で中世II面と断定できないが、その可能性がある畦が1本、③区では洪水砂層の遺存状況が悪くS D0021を検出したに過ぎない。なお、この範囲内部の区画のあり方は詳細不明であるが、中世II面以上の遺構ながら③区を中心とした範囲で検出された土坑は直線的に配列することから畦区画に沿って構築されていると考えられ、その場合は少なくとも中世II面以上では東西方向に通る区画が存在すると見られる。

#### S D0021 ③区 I OQ07~OQ12 (第251図)

南北方向に走る溝である。北側は調査区外へのび、南端は重機掘削で削平したため調査区内では約10.5mを検出したに過ぎない。幅は1.1~1.6mと広いが、深さは約10cmと浅い。底面は比較的平坦であるが細かな凹凸が認められている。溝の性格の子細は不明であるが、疑似畦畔の可能性はある。

#### D 小結

中世II面で検出された遺構には上層の疑似畦畔、下層から継続する疑似畦畔も存在するため、時期幅を

考慮しなくてはならない。しかし、その年代は出土遺物からほぼ14世紀前後と推測される。中世II面の特徴をまとめると以下のとおりである。

第1点に条里と異なる方向の小ブロックの水田群の出現が認められる。その代表となる①-2・②-2区ではそれまで存在しなかった用水の構築によって出現していることが確認された。なお、周辺の現地表面水田区画をみると、条里とは異なる畦方向で並列する水田が集まる小ブロック水田群とも呼べるものが点在している点は上記の例と同様にとらえられるだろうか。

第2点に水田区画のあり方は疑似畦畔のところで述べたように、同じ走行方向の水田が並列する水田群、そのなかで南北方向に通る畦で区画された中区画水田、さらに推測であるが、中区画内部で小規模畦で区画された水田の3ランクの区分があると思われた。そして、あまり顕著な枝用水が見られないことから水田群が用水と接し、内部の中区画以下は畦越し配水によっていると推測される。

3点目には水田の継続性である。平安時代の条里区画との関係では、新たな用水の出現や異なる方向の水田区画の出現が知られ、やや断絶した様相もある。その一方で南北方向の中区画とした畦区画は比較的踏襲されているようである。また、この中世II面以後では基本的に中世II面の区画方向が近世まで踏襲されるが、①-1・②-1区のように地形の変化の著しい場所では地形にあわせて東西方向優位な区画に変化する。つまり、基本的に中世II面の様相を踏襲しながらも、地形変化の著しい場所はそれ以後でも変化する様相が知られる。

#### エ 中世II面以上とその他の遺構

中世II面で検出されたものの、本来はより上層に構築面があり、中世II面以上の帰属遺構と思われるもや、中世の基本土層が残存しないが中世の可能性のある遺構をまとめる。

##### A 溝跡

石川条里遺跡西端の①-1・②-1区では中世II面よりも上層に掘り込みが確認できる溝跡が数本ある。ただし、②-2区のように中世I面を覆うシルト質土が確認できないため、その対応関係の子細は明らかでない。これらの溝跡は中世II面のN-2~5°-Wの走行方向をもつA水田群上部に位置してほぼ同じ走行方向が確認できる。

##### S D0003 ①-1・②-1区 I PS19~UT10 (第248図、PL53)

中世II面で検出したが、①-1区では中世II面の溝、②-1区では中世II面より上層に立ち上がるとされ、矛盾した所見となっている。整理ではどちらとも判断できなかったのでここで扱う。溝北端は調査区外へ延びており、南端は調査区内で消えるように検出されたが、その延長先は調査区南壁でも確認できないため、ほぼ調査地区内で立上るとされる。調査区内では約22.6mを確認し、平面形は細かな蛇行があるもののN-2°-W方向にほぼ直線的に走る。幅は約40cmを測り、断面形はU字状を呈して深さは最大50cmを測る。埋土は底面に砂層があり、その上面に砂質灰褐色土が載る。また、溝底面には所々石が検出されている。本溝は用水と思われる。白磁碗が出土している。

##### S D0007 ①-2区 I WN01、WN02 (第249図)

①-2区西端でわずかに検出された。平面検出は中世II面であるが、周囲の調査区壁の観察から立ち上がりは中世II面以上と判断された。しかし、上層は連続して溝が構築されているため子細不明である。切りあいはS K0037に切られる。幅は約1mで深さ約20cm、埋土は青灰色砂質土で出土遺物はない。位置的に四ノ宮集落背後の沢水取水用水と思われる。

##### B 土坑跡

微高地西側低地の③区周辺では中世II面、それ以东の中世II面对応土層が不明瞭な範囲では平安時代洪水砂層上面で検出された土坑がある。これらの土坑は埋土や形態の類似、配置場所の規則性からほぼ近接

した時期の所産とみられる。出土遺物がないため子細な時期は決めかねるが、中世II面で部分的に確認される粗砂のブロック土が埋土に含まれ、しかも中世II面溝と切りあう可能性がある土坑もあることから、中世II面に後出すると思われる。さらに、⑥区では近世水田耕作土によって上面が削平されている土坑もあるので、中世II面以後～近世水田以前の所産と推定される。ただし、近世前半の所産の可能性は残される。

これらの土坑は石川条里遺跡内では西側低地に偏在し、しかも①-1区-1基、①-2区-1基、②-1区-1基、②-2～③区-36基、⑦-2区で11基、⑥区南壁・⑦区南壁にかかってそれぞれ1基ずつと微高地西側低地内でも地点によって分布密度が異なることが知られる。なお、⑦-2区の低地境付近で検出された土坑の一部にはこれに類するものがある。また、この偏在する分布のなかで、群をなして集合・直線的に並列する土坑群がある。特に②-2区東側から③区にかけて直線的に並ぶ土坑群は一定間隔で並列するようにも見え、畦区画に沿って構築された可能性もある。

土坑の形態は方形・円形があり、規模も様々あるが、埋土に顕著なブロック土を含む点は共通し、いずれも構築から廃棄までの時間が短いと推定される。したがって、形態は多様ながら配列の仕方や埋土の共通性からほぼ類似した時期の所産と捉えることができると思われる。これらの土坑の性格は明らかでないが、塩崎用水開鑿以前には非常に水確保が難しい場所と思われる微高地西側低地に顕著に認められること、一つの土坑跡が継続的に維持されていないと見られることから、干害に際して構築された井戸跡か、何らかの耕作に関わる施設の可能性も推定できる。

#### **SK0001** ①-1区 IQT20 (第253図、PL53)

ほぼ単独で存在する土坑であり、中世II面で検出した。平面形は長軸約164cm、短軸は84cmの長方形の平面形で、断面は逆台形を呈して検出面からの深さ約80cmを測る。

#### **SK0002** ②-2・③区 IOO17、OP17 (第253図、PL54)

SK0003・0010～0012とほぼN-65°-E方向で並列する。検出は中世II面である。平面形は直径約124～130cmの円形、断面形はU字状で検出面からの深さ約70cmを測る。埋土は灰褐色シルト、赤褐色粘土ブロック土で凝灰岩粒は含まない。

#### **SK0003** ②-2・③区 IOO17・18 (第253図、PL54)

SK0002・0010～0012とN-65°-E方向で並列する。検出は中世II面である。平面形は直径約132～154cmの円形、断面形は逆台形で検出面からの深さ94cmを測る。埋土はSK0002に同じである。

#### **SK0004** ③区 IOO13 (第253図)

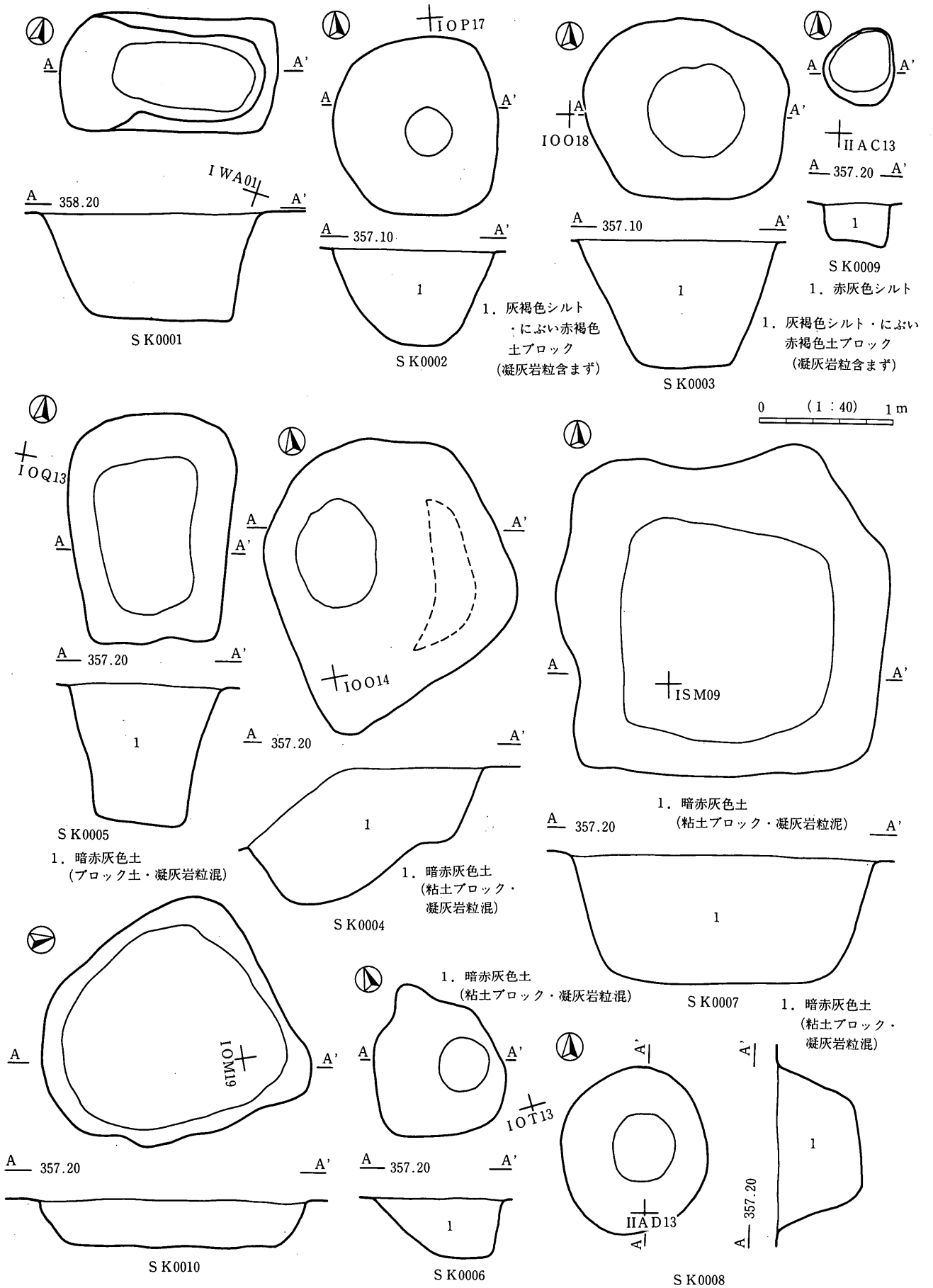
SK0005～0009とほぼN-82°-E方向で並列する。検出は中世II面である。北側を排水トレンチで破壊してしましたが、平面形は1辺178～186cmの隅の丸い方形を呈するものと思われる。深さは検出面から約1mで断面形は逆台形を呈するが、南東側の傾斜が緩い。埋土は凝灰岩粒を多く含む暗赤灰色土でブロック土が含まれる。

#### **SK0005** ③区 IOQ12・13 (第253図、PL54)

SK0004・0006～0009と並列する。検出は中世II面である。平面形は南北に長い長方形で長軸170cm、短軸約124cmを測る。断面形は逆台形で検出面からの深さは約1mである。埋土は暗赤灰色土を基本とし、多量の凝灰岩粒とブロック土を含む。出土遺物はない。

#### **SK0006** ③区 IOS12 (第253図)

SK0005等と群在する。検出は中世II面である。平面形はやや不整形な方形を呈し、南北約112cm、東西約98cmを測る。断面形は逆台形で検出面からの深さは44cmと浅い。埋土はSK0005に類似する。出土遺物はない。



第253図 微高地西側低地中世II面以上の土坑1

**S K 0007** ③区 I OR13・14 (第253図、PL53)

S K 0006に隣接する一連の土坑群内にあるが、やや規模が大きく、しかも軸方向は東西南北に一致する点でやや異質な存在となっている。検出は中世II面である。平面形はやや不整形な方形を呈し、南北240cm、東西250cmを測る。断面形は逆台形で検出面からの深さは92cmを測る。埋土は上記S K 0005と同じである。出土遺物はない。

**S K 0008** ③区 I I K C12、K D12 (第253図、PL53)

③区北西に位置する土坑群内にあり、検出は中世II面である。平面形は直径114～124cmの円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは62cmである。埋土はS K 0005と同じで、出土遺物はない。

**S K 0009** ③区 I I K B12、K C12

③区北西に位置する土坑群内にあり、検出は中世II面である。平面形は直径56cm前後の円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは約30cmと小規模である。埋土は凝灰岩粒をあまり含まない赤灰色シルトである。出土遺物はない。

**S K 0010** ②-2・③区 I O L18・19 (第253図)

S K 0002・0003・0011・0012と並列する。検出は中世II面である。平面形は長軸182cm、短軸172cmの不整形円形で、断面形は逆台形を呈して検出面からの深さは36cmと浅い。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 0011** ②-2・③区 I O K19 (第254図、PL53)

S K 0002・0003・0010・0012と並列する。検出は中世II面である。平面形は長軸106cm、短軸82cmの不整形楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは30cmと浅い。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 0012** ②-2・③区 I O J19・20 (第254図)

S K 0002・0003・0010・0011と並列する。検出は中世II面である。平面形は長軸が252cm、短軸が185cmの不整形楕円形を呈し、深さは34cmと浅く断面形は台形である。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 0013** ③区 I I P F15・16 (第254図)

S K 0014と隣接する。③区南側は中世II面調査を実施しなかったため、検出は平安洪水砂層上面である。南半分を排水トレンチで破壊してしまったため、子細は不明であるが、東西方向は164cmを測り、平面形は方形を呈すると思われる。主軸方向はN-20°-Eを指向する。上部40cmしか記録していないため断面や深さは子細不明である。埋土は下部にブロック土を混入する黒褐色粘土、その上部にブロック土からなる土層が入る。出土遺物はない。

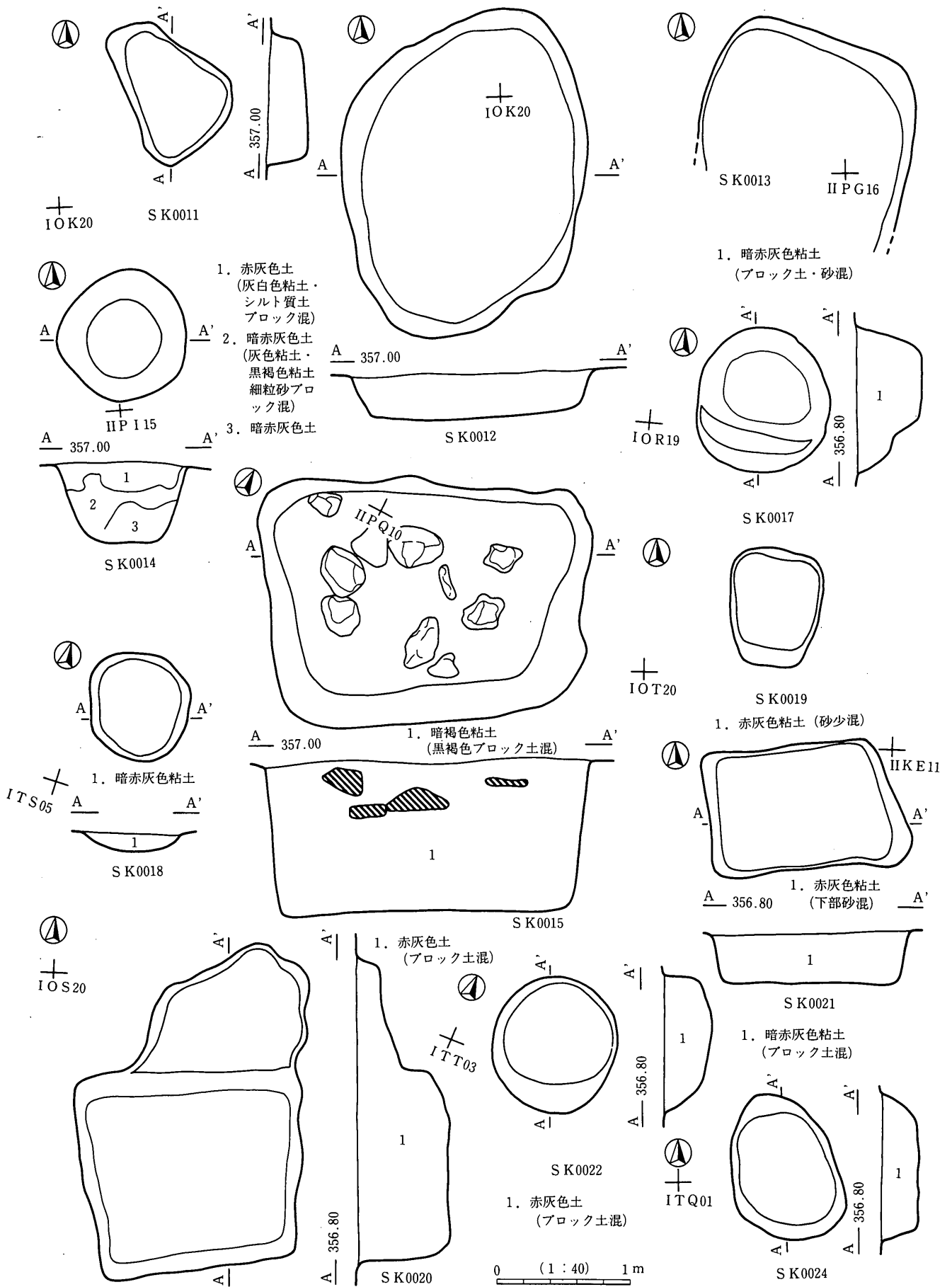
**S K 0014** ③区 I I P H14、P I14 (第254図)

S K 0013と隣接する。検出面はS K 0013と同じである。平面形は直径100cmの円形を呈する。深さは検出面から約60cmで、底面が平坦なU字状を呈する。埋土は上層に灰白色粘土・シルトブロック土を含む赤灰色土、中層に灰色・黒褐色粘土・細粒砂ブロックを含む暗赤灰色土、下層に暗赤灰色土がみられる。出土遺物はない。

**S K 0015** ③区 I I P P09・10 (第254図)

ほぼ単独で存在する土坑で、検出面はS K 0013と同じである。平面形は主軸方向がN-68°-Eの長方形を呈し、長軸252cm、短軸184cmを測る。断面形は箱形で検出面からの深さは112cmを測る。埋土は黒褐色ブロック土を混入する暗褐色粘土で人頭大の礫が多数投げ込まれていた。出土遺物はない。

**S K 0017** ③区 I O R18・19 (第254図)



第254図 微高地西側低地中世II面以上の土坑 2

S K0018～0020・0022・0024と群在している。検出は平安洪水砂層上面であるが、中世II面以上の遺構を見逃したものと思われる。平面形は円形を呈し、直径約100～108cmである。断面形は逆台形を呈して南側に小さなテラスが形成され、検出面からの深さは約40cmを測る。埋土は暗赤灰色粘土を基本としてブロック土・砂を含む。出土遺物はない。

**S K0018** ③区 ITS04 (第254図)

S K0017・0019・0020・0022・0024と群を成す。検出はS K0017に同じで本来は中世II面以上の所産と思われる。平面形は直径78～81cmの円形を呈する。断面形はU字状で検出面からの深さは17cmと浅い。埋土は暗赤灰色粘土を基本としてわずかに砂が混じる。出土遺物はない。

**S K0019** ③区 IOT19 (第254図)

S K0017・0018・0020・0022・0024と群を成す。検出はS K0017に同じで本来は中世II面以上の所産と思われる。平面形は隅丸方形で南北88cm、東西72cmを測る。断面形は箱形で検出面からの深さは約30cmを測る。埋土は赤灰色粘土を基本としてわずかに砂が混じる。出土遺物はない。

**S K0020** ③区 IOS20、TS01 (第254図)

S K0017～0019・0022・0024と群を成す。検出は平安砂層上面であるが、本来は中世II面以上の所産と思われる。平面形は1辺154～164cmの方形に北側が浅く約90cmほど突出する形態である。方形部分は箱形の断面形で深さ約70cmを測る。埋土は砂ブロックを含む黒褐色粘土である。遺物はない。

**S K0021** ③区 IIKD11 (第254図)

S K0004～0009・0027～0030の土坑と東西方向に並列する。平安砂層上面で検出したが、中世II面以上の遺構と思われる。平面形は長軸N-82°-E方向の長方形を呈し、長軸152cm、短軸96cmを測る。断面形は箱形で検出面からの深さは38cmを測る。埋土は赤灰色粘土を基本として下部には砂ブロックを混入する。遺物はない。

**S K0022** ③区 ITT02・03 (第254図)

S K0017～0020・0024と群を成すものと思われる。検出はS K0017に同じである。平面形は直径92～102cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直で断面形はU字状を呈して検出面からの深さは36cmを測る。92～102cm。埋土は砂ブロックを含む赤灰色粘土である。遺物はない。

**S K0023** ③ IOT05、KA05 (第255図)

平安砂層上面で検出したが、本来の検出面は中世II面以上にあると思われる。また、遺構と認定しなかったが、平安砂層上面で周囲に不定形の落ち込みがいくつか検出されている。これらとの関連は不明である。平面形は直径86～90cm前後の円形を呈し、断面形は箱形で検出面からの深さは28cmを測る。埋土はごく少量の砂を交える赤灰色粘土である。出土遺物はない。

**S K0024** ③区 IOQ20、TQ01 (第254図)

S K0017～0020・0022と群を成すものと思われる。検出はS K0017に同じである。平面形は南北に長い楕円形で長軸112cm、短軸約82cmを測る。断面形は逆台形で検出面からの深さは30cmを測る。埋土はブロック土を混じえる赤灰色粘土である。遺物はない。

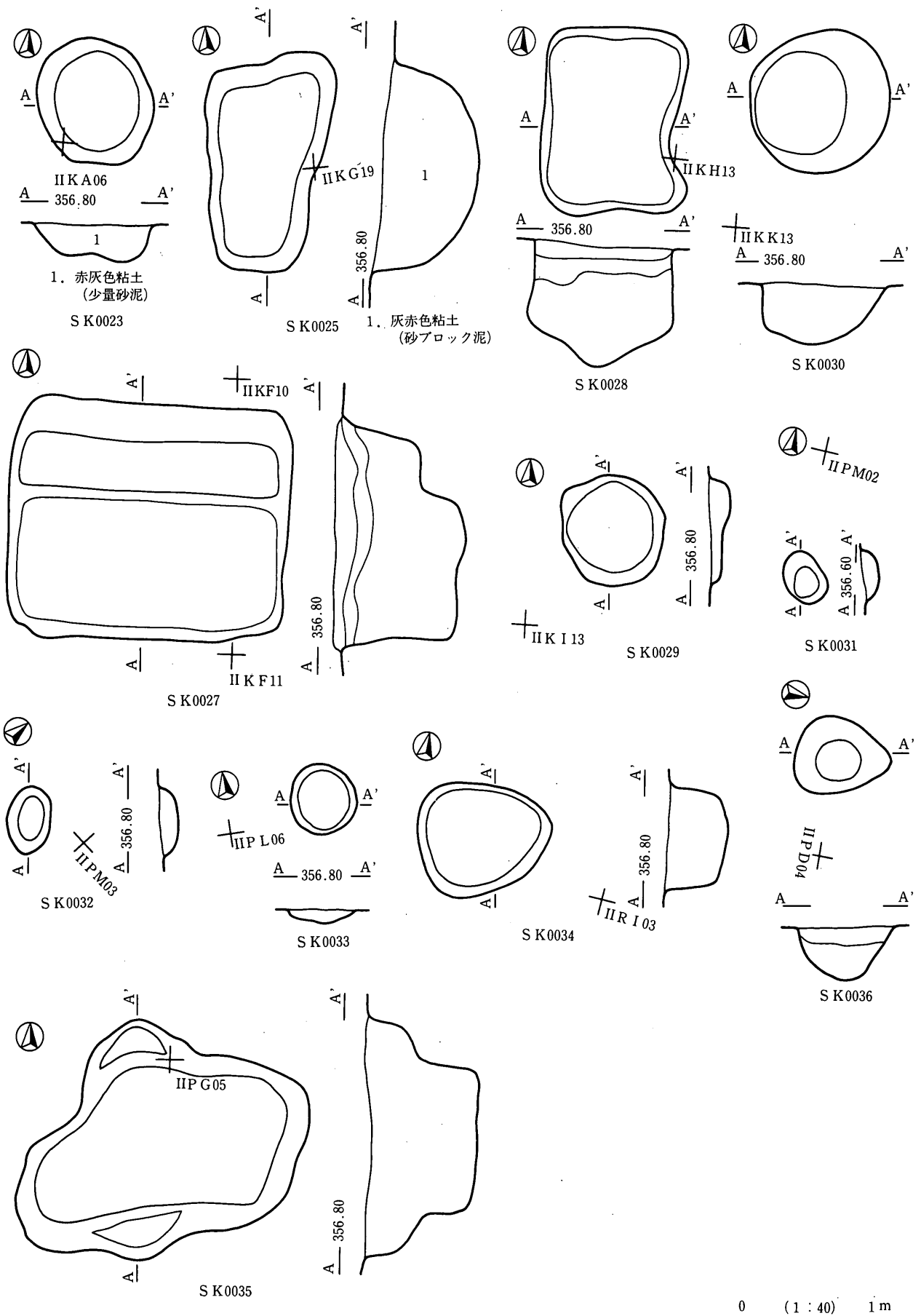
**S K0025** ③区 IIKF18・19 (第255図)

平面形は長方形で、長軸156cm、短軸96cm、主軸方向はN-5°-Eである。検出は平安砂層上面であるが、本来の検出面は中世II面以上にあると思われる。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは80cmを測る。埋土は砂ブロックを含む灰赤色粘土の単層で出土遺物はない。

**S K0027** ③区 IIKE10、KF10 (第255図)

S K0004～0009・0021・0028～0030と東西方向に並列する。検出は調査の都合で平安洪水砂層上面で





第255図 微高地西側低地中世II面以上の土坑3

あったが、周囲の土坑から類推すると本来は中世II面以上にあると思われる。平面形は東西方向にやや長い方形で、東西方向は206cm、南北方向は176cmを測る。断面形は北側にテラスをかたちづくり、南側が深い逆台形であり、検出面からの深さは86cmを測る。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 0028** ③区 IIKG12・13 (第255図)

S K 0004～0009・0021・0027・0029・0030と東西方向に並列する。検出面はS K 0027に同じである。南北に長い長方形の平面形で南北134cm、東西104cmを測る。断面形は底中央がやや鋭角的なU字状で検出面からの深さは88cmを測る。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 0029** ③区 IIKI12 (第255図)

S K 0004～0009・0021・0027・0028・0030と東西方向に並列する。調査および検出面はS K 0027に同じである。平面形は直径76～80cmの円形で、断面形は底面がやや凹凸のある箱形を呈する。検出面からの深さは16cmを測る。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 0030** ③区 IIKK12 (第255図)

S K 0004～0009・0021・0027・0028・0030と東西方向に並列する。調査および検出面はS K 0027に同じである。平面形は直径104cmの円形、断面形はU字状で検出面からの深さは42cmを測る。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 0031** ③区 IIPM02 (第255図)

S K 0032と近接して位置する。検出はS K 0027に同じである。平面形は直径30～40cmの円形を呈し、断面形はU字状で検出面からの深さは12cmと浅い。埋土は記録ミスで不明であるが、形態的には③区に多くみられる土坑とはやや異質である。

**S K 0032** ③区 IIPL03 (第255図)

S K 0032と近接して位置し、形態も類似する。検出はS K 0027に同じである。平面形は長軸52cm、短軸30cmの楕円形で、断面形はU字状で検出面からの深さは14cmである。埋土は記録ミスで不明であるが、S K 0031同様に③区内ではやや異質である。

**S K 0033** ③区 IIPL05・06 (第255図)

S K 0032南西にやや離れて位置するが、形態はS K 0031・0032に類似する。検出はS K 0027に同じである。平面形は直径50cmの円形で、断面形はU字状で検出面からの深さは約10cmである。埋土は記録ミスで不明であるが、S K 0031同様に③区内ではやや異質な土坑である。

**S K 0034** ③区 IIPH02 (第255図)

位置関係からS K 0035・0036と関連する可能性が高い。平安砂層上面で検出したが、本来は中世II面以上の遺構と思われる。平面形は長軸100cm、短軸82cmの楕円形を呈し、断面形はU字状で、検出面からの深さ44cmを測る。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

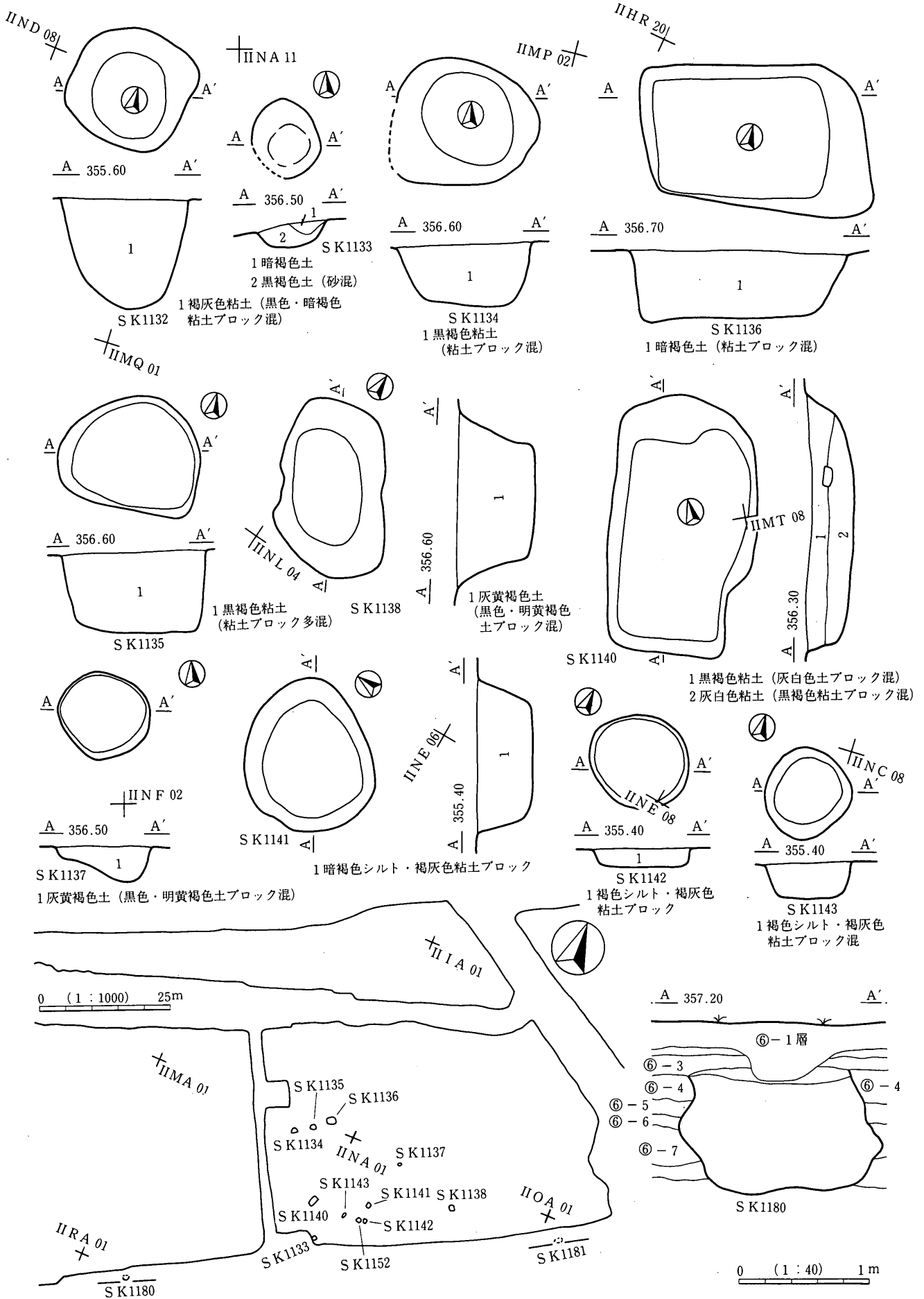
**S K 0035** ③区 IIPF05、PG05 (第255図)

S K 0034・0036と群をなす可能性が高く、検出状況は上記S K 0034と同じである。平面形は長軸を東西方向にとる不整楕円形で長軸230cm、短軸176cmを測る。断面形は下部が箱形で上部が広がる形態となり、深さは検出面から約80cmを測る。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 0036** ③区 IIPC04 (第255図)

位置的には上記S K 0034・0036と関連すると思われ、形態的にはS K 0031に近い。検出はS K 0034と同じである。平面形は直径58～72cmの不整円形で、断面形はU字状で検出面からの深さは36cmを測る。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**S K 1132** ⑦-1区 IIND07・08 (第256図)



第256図 微高地西側低地中世II面以上の土坑4

低地境に位置し、SK1140～1143と群をなしている。検出は平安耕作土の上面であるが、この部分は洪水砂が残存せず、上面は近世耕作土にあたる。平面形は直径90cmの方形ぎみの円形を呈し、断面形はU字状で検出面からの深さは84cmを測る。埋土は褐灰色粘土を基本として黒褐色や暗褐色シルトブロック土を混える。出土遺物はない。

**SK1133** ⑦-1区 IINA11 (第256図)

低地境に位置し、SK1132・1141～1143と近接する。SD1033調査中にSD1033を切る本土坑の存在に気付いた。平面形は直径53～60cmで、断面形は深さ約0.3mの台形を呈する。埋土は上層に暗褐色土、下層に砂混じりの黒褐色土がある。出土遺物はない。

**SK1134** ⑦-1区 IIMO02 (第256図)

低地境に位置し、SK1135・1136とN-42°-Eの方向に並列する。検出はSK1132と同じである。平面形は直径102～112cmの不整形円形で、断面形は逆台形を呈して検出面からの深さは46cmを測る。埋土は褐灰色粘土を基本として黒褐色や暗褐色シルトブロック土を混える。出土遺物は奈良時代の須恵器の杯A片があるが、混入の可能性が高い。

**SK1135** ⑦-1区 IIMQ01 (第256図)

低地境に位置し、SK1134・1136とN-42°-Eの方向に並列する。検出はSK1132と同じである。平面形は直径90～110cmの不整形円形、断面形は逆台形で検出面からの深さは62cmを測る。埋土はSK1134に同じである。出土遺物はない。

**SK1136** ⑦-1区 IIHR19・20 (第256図)

SK1134・1135とN-42°-Eの方向に並列する。平面形はN-55°-E方向に長軸をとる長方形で、長軸は168cm、短軸は112cmを測る。断面形は逆台形で検出面からの深さは54cmを測る。埋土はブロック土を混じえる暗褐色土である。出土遺物はない。

**SK1137** ⑦-1区 IINE01、NF01 (第256図)

微高地寄りにほぼ単独で位置する。検出は1面目で近世耕作土の下で検出されている。SD1038を切る。平面形は直径66～70cmの円形を呈し、断面形は箱形で検出面からの深さは32cmと浅い。埋土は黒褐色・明黄褐色粘土ブロックを含む灰黄褐色粘土である。出土遺物はない。

**SK1138** ⑦-1区 IINK02、NL02 (第256図)

微高地境付近に他の土坑からやや離れて位置する。検出は1面目の平安砂層上面であるが、構築面はより上層の可能性が高い。SD1036を切る。平面形はN-25°-Wの方向に主軸をとる楕円形で長軸136cm、短軸86cmを測る。検出面からの深さは58cmで上部が広がる箱形である。埋土はSK1137に類する。

**SK1140** ⑦-1区 IIMS07・08 (第256図)

低地境に位置し、SK1132・1141～1143と群をなしている。検出は古墳面であるが、形態や埋土から上面のは見逃しと思われる。平面形はN-15°-Eの方向に長い長方形で、長軸198cm、短軸110cmを測る。断面形は北側の傾斜が緩い逆台形を呈し、検出面からの深さは34cmを測る。埋土は上層に灰白色粘土ブロック混じりの黒褐色土、下層に黒褐色粘土混じりの灰白色粘土がある。

**SK1141** ⑦-1区 IIND06 (第256図)

SK1132・1140・1142・1143と並列する。SK1140同様に上層で見逃して古墳面で検出した。平面形は長軸114cm、短軸100cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは42cmを測る。埋土は暗褐色シルトと褐灰色粘土ブロック混成層の単層である。

**SK1142** ⑦-1区 IIND07、NE07 (第256図)

SK1132・1140・1141・1143と並列する。検出はSK1140と同様である。平面形は直径72～82cmの円形

を呈し、断面形は逆台形である。検出面からの深さは約14cmと浅いがこれは2面目で検出したためである。埋土はSK1141に同じである。

**SK1143** ⑦-1区 IINB08、NC08 (第256図)

SK1132・1140～1142と並列する。検出はSK1140と同様である。平面形は直径62～82cmの円形を呈し、断面形は逆台形である。上部は削平しているが検出面からの深さは約26cmを測る。埋土はSK1141に同じである。

**SK1180** ⑥区 IIRO02、RE02 (第256図)

調査区壁にかかって検出された土坑である。一部は調査区壁際の排水トレンチで破壊したため平面形は不明である。

**SK1181** ⑦-1区 IIOC02

調査区壁際で検出された土坑である。用水を隔てた⑦区東低地境付近以外にこの周囲には類似土坑がなく、ほぼ単独で存在している。片側を調査区壁際に設定した排水トレンチで破壊したため詳細不明であるが、平面形は直径140cmの円形で、断面は筒形と思われる。

**SK0037** ①-2区 IWN01・02

調査時0004とされたが、同番号を別の遺構に使用したため、この番号に変えた。①-2区のSD0007を切る円形土坑と認められ、直径156～178cm、深さ15cmを測る。埋土はやや緑かかった青灰砂質土でSD0007と類似する。ほかの土坑とは埋土も異なるため、別種の遺構と捉えるべきかもしれない。

**(2) 微高地東側低地の遺構**

ここで扱う範囲は微高地東側の⑩-2区・⑤-3区以東～⑯区までの後背低地である。ここは調査区内で最も低い部分にあたり、平安時代では聖川へ向かって傾斜する地形であつものの、中世後半以後は徐々に聖川沿いの部分が高くなっていくようである。中世の土層は各調査地区の堆積環境の違いや調査者の分層観点の違いから、分層や各土層の捉え方が異なっているが、土層の標高の比較や概略の土質の類似から対比させるとほぼ2枚の粘土層が認められる。⑫区を標準としてみると上層粘土層は⑫区第4層とされた褐灰色粘土層で、聖川近くではシルト質になる。下層が⑫区第5層とされた黒褐色粘土層で、聖川へいくにしたがって色調が褐色・青灰色に変化する。2枚の粘土層分布と層厚・層の傾斜をみると微高地東側周辺では第4層と思われる土層が1枚、⑨～⑫区で第4層と第5層に分層されるようになり、⑬区前後まではいずれも薄い、⑭区前後から層厚を増していく。⑮区以東では第4層が聖川へ向かって低く傾斜して、第5層の間に別の堆積土を挟むようになる。そして上層は聖川へむかって逆に高くなっていくようである。しかし、聖川沿いを除く部分では洪水性堆積土が見られないため、残存する遺構も深い掘り込み遺構のみである。こうして検出された遺構には溝数条と土坑数基がある。ここでは先にみた第4層・第5層2枚の粘土層によって、第4層を中世I面、第5層を中世II面、さらに平安時代の洪水砂層上面で検出された遺構にわけて報告することにした。

**ア 微高地東側低地中世I面**

⑫区のみで調査したが、遺構は検出されておらず、遺物採取のみで終了した。出土遺物には内耳鍋片、カワラケ、常滑、白磁などがあり、第4層は15～16世紀の所産と考えられる。しかし、第4層の上層も粘土層であるため本来の地表面は残存しておらず、しかも地区によっては第4層の上に乗る土層の枚数が異なるので、同じ土層と捉えたものの、地点別では同層で連続耕作される時間幅が異なる可能性がある。また、上記で推測された年代は微高地西側低地中世I面に近似しているが、微高地西側低地I面のように上層にシルト質土の堆積が認められず、しかも上層が直接近世の耕作土にあたるため、微高地西側低地中世

I面より年代幅が広いことが想定される。

#### イ 微高地東側低地中世II面

この調査面は⑫・⑬区境を中心に東西坪境を走るS D3006、S D3006から派生するS D3007・3008、南北坪境を走るS D3015・3010の5本の溝が検出された。この東側低地では⑫・⑬区境周辺以外では溝跡は不明瞭であるが、これは浅い溝は残存しないためとも考えられるものの、中世水田が近世水田のように密に用水を配置する形態ではなかったことや、この⑫・⑬区境周辺が広大な後背低地域の地形変換点にあたるため溝跡が構築されたと考えられる。なお、⑫・⑬区境の東西・南北方向坪境交差付近は未調査で、溝の接続関係は不明であるが、個別の溝の検討からは以下のような変遷が推測できる。

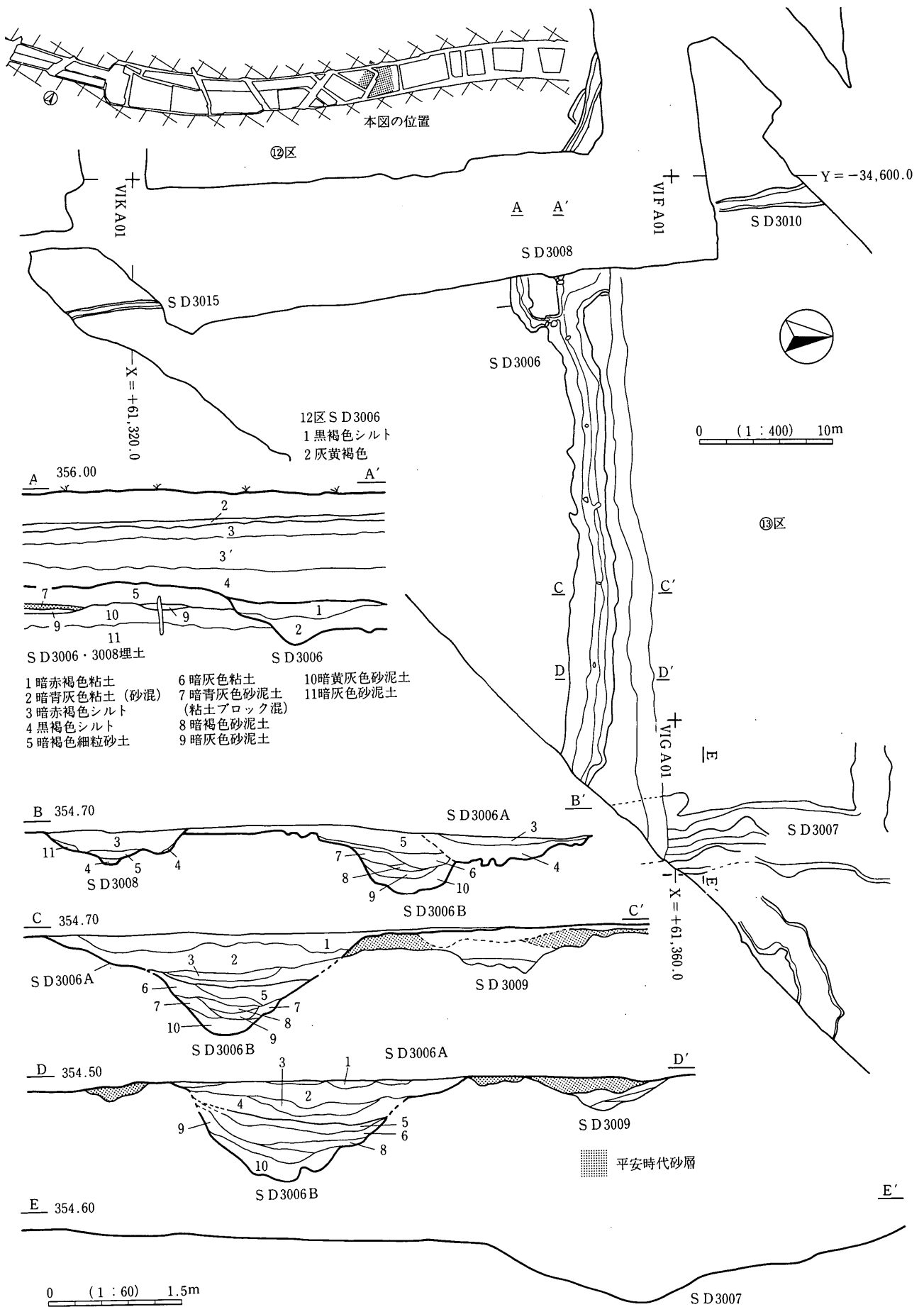
平安時代では⑬区北西部にかかる南北坪境に沿った溝が東西方向坪境と交差する付近で東に折れでL字状になっていたと思われる。この用水は聖川を水源とし、地形との関係から後背低地内の聖川系用水の西限にあたると思われる。この様相はそのまま洪水以後も踏襲され、12世紀後半以後にS D3006Bとして大規模な用水が構築される。ところが、時期は不明ながらある段階でS D3006Aとして改修されたと推測される。やがて14世紀末～15世紀前半（初頭）ではこの東西方向のS D3006が廃絶してしまい、以後は南北方向の用水が現代まで踏襲されるようである。この推測は検証不十分であるが、上記のような変遷とすれば、中世前期以後では聖川系用水をより西側の高い方へ迂回させて灌水範囲の拡大が計られたとみられる。そして、この傾向のなかでS D3006が廃絶してしまうのは、より西側の高台側へ用水が構築されたためと考えられる。これに該当する用水遺構は調査では明瞭に把握できなかったが、微高地の館跡の所在する「耕下」地籍外縁部をめぐって微高地を貫く現用水にその可能性が残される。また、この溝の変遷の推測から微高地東側低地では平安時代以後も安定して水田耕作が行なわれたと推測され、そのために東側低地では現地表面に条里的な地割が残存することになったのかもしれない。なお、溝跡の検出された中世II面とした第5層の年代については、第4層で内耳鍋が出土しているものの、5層上面検出溝内では内耳鍋片が全く含まれていない点、さらに4層で覆われるS D3006の遺物から14世紀後半～15世紀前半も早い段階以前を下限とすると推測される。

#### S D3006 ⑫・⑬区 VJP03～VIGF01（第256図、PL55）

⑫～⑬区の2地区にわたる溝跡で、⑬区ではさらに上・下層の溝A・Bに分離して調査している。検出面は第5層上面であり、⑫区東壁の土層観察からは溝上部が第4層水田耕作土に覆われていることが知られた。

本溝跡は東西方向の平安時代水田坪境に沿った位置にある。溝の形態は坪境交点から東側の⑬区内ではS D3006Aが上幅約3.6m、深さ約0.6mで幅広く、立ち上がりが緩やかなU字型の断面形を呈する。S D3006Bとした部分は上幅は子細不明ながら約1.8m前後、深さも詳細不明ながら検出面までは約1.1mを測る。また、調査区南端でS D3007、北端ではS D3008が接続しているが、S D3007はS D3006との交点が調査区壁で確認され、S D3006A・Bに接続する溝であることが判明した。これに対して北側ではS D3008がS D3006Bを切ることが知られたが、この溝の延長位置とも思われる⑫区S D3006とされた溝の関係は接続部分が未調査なので不明である。ただし、底面の比高差で見ると⑫区S D3006と⑬区S D3006Aが接続していた可能性がある。また、S D3015との関係が問題となるが、これについても交差点付近が未調査であるため接続関係がはっきりしない。

埋土はS D3006Aでは上部に上層の水田耕作土が部分的に入り、埋土中位では砂を多く含む暗青褐色粘土、下部に砂を多く含む暗赤緑色のシルト、黒褐色シルトが入る。S D3006Bは場所によりやや様相が異なるが、色調の異なる砂質泥土、砂土、粘土層で構成され、底面近くでは植物遺体小片が含まれていた。また、堆積状況を見るとS D3006Bでは数回の改修が推測される。なお、底面上では杭が散在的に検出さ



第257図 微高地東側低地⑫・⑬区溝跡

れた。

出土遺物としては古墳時代～古代の焼物とわずかな中世焼物、銅銭・用途不明の鉄製品、呪符木簡、種子（モモ核多数とオニクルミ1点）などが出土している。なお、溝底面上には一定間隔で石が置かれ、その下には金属製品や銅銭が出土したが、これは溝への金属製品の意図的な埋納に伴うものであると考えられる。また、上層のSD3006Aからは折敷状の入れ物と8枚の呪符木簡が出土している。

本溝の性格は用水と考えられるが、溝底の銅銭の出土と上層の呪符木簡の出土からきわめて祭祀的な色彩が強いことが知られた。また、本溝は坪境交点で複数溝と接続するものの、重複部分が未調査であるため詳細は不明であるが、個別の溝からいくつかの段階に分離して用水機能や接続関係が把握できそうである。変遷の推測を述べると平安時代洪水埋没水田では北から流れ下る用水が微高地からの地形的な影響を受けて坪境交点で東へL字状に曲がっていたと思われる。そして、平安時代の洪水以後から中世前期の間にその形態を踏襲しながら、ややずれた地点にSD3006Bが構築され、そのまましばらくは同じ場所で継続使用されたとみられる。次に、西側から流れる⑬区用水SD3006Aとされた溝が構築され、合わせて接続部分に近いところでは位置を若干ずらしてSD3006Aが構築される。そして中世のある段階で全く廃絶してしまい、以後は南北方向の坪境を流れる用水に限定されるようである。上記のなかで平安洪水直後にも先行する用水の存在が推測されるが、SD3006Bとして構築されるのは底面出土の銅銭や出土陶磁器から12世紀後半前後以後に求められると思われる。そして、SD3006Aに改修される年代は不明であるが、廃絶する時期は出土した在地産すり鉢の年代推定と、15世紀前半には大量に出土する内耳鍋が全く含まれない点から14世紀末～15世紀前半も早い段階と思われる。なお、このような用水変化の理由は不明であるが、上記のような変遷の推測からは、聖川系用水の西限となる用水が時代をおってより西側に迂回して灌水する範囲を拡大する傾向は窺える。そして、本溝が廃絶されるのは、より西側の山手を迂回して館のある微高地を貫く用水が構築されたことによるものではないかと憶測する。

#### SD3007 ⑬区 VIBE17～GE01（第257図）

SD3006から北側へ分岐する溝跡で、平安洪水砂層上面と古墳面に2分して調査した。遺構掘り込み面はSD3006同様に⑬区5層上面にあり、平安時代のSD3009を切り、SD3006と接続する。調査では上下2枚に分割調査されたが、土層記録がないためSD3006A・Bいずれと接続していたかは詳細不明である。底面の標高から対比すると下面検出の溝はSD3006B、上層はSD3006Aに対比されうる。なお、本溝跡東側に北東方向に走るやや蛇行する浅い落ち込みが検出されたが、この部分と上層の溝が接続していた可能性がある。SD3006から分岐する部分は幅約5m、平安時代調査面からの深さ85cmで、SD3006北辺から約22.8m南北方向に延び、先端は浅く立ち消える。この先端近くで西側に約4mほど枝状に突出する部分がある。埋土は記録がなく不明である。出土遺物は山茶碗の可能性のある破片が出土している。本溝跡はSD3006と一連の溝跡と捉えうるが、先端が立ち消えることから詳細な性格は不明である。

#### SD3010 ⑬区 VIAA15～AB19（第257・261図）

⑬区の平安時代南北坪境にほぼ一致した位置にある平安時代の溝跡である。ただし、調査区壁の土層観察からはほぼ重複した位置に中世の溝跡が構築されており、本溝も一部は重複するため、ここでも扱うものである。この溝の精査された状態については古代水田の節、近世まで連続した状態については中世水田の現用水下の調査の項で扱っているのでそれぞれ参照していただくことにし、ここでは本溝跡の位置についてのみ記述する。本溝跡は古代水田の南北坪境地点に位置し、周辺の中世溝跡としては南延長先の調査区南端にSD3015がある。しかし、その途中の未調査地点で東西坪境を走るSD3006と交差するものの、溝の接続関係が判然としないため別の溝跡とした。また、SD3006との関連についても詳細不明である。このように周辺の溝との連続関係は直接把握できていないものの、南延長先のSD3015では重複する場所



に平安時代水田の溝が検出されていないことから、平安時代については本溝は直角に折れて東流しており、この用水はそのままS D 3006に踏襲されていると推測される。したがって、当初は直接S D 3015に接続していなかったと考えられる。

**S D 3015** ⑬区 VIFE20～KE03 (第257図)

本溝跡は⑫・⑬区境の南北坪境に一致して位置している。調査では平安時代水田面を拡張調査した際に検出されたもので、構築層位等は記録がなく不明である。その調査範囲は非常に狭く、北側は未調査部分、南は調査区外へ延びる。直接切りあいは確認されていないが、走行方向を延長すると北端はS D 3006と交差することが予想される。この交差点付近は未調査なのでS D 3008と接続するものか、S D 3006北側で検出された坪境を南流するS D 3010いずれの溝と接続するかは明らかにできなかった。溝の規模は調査区内で長さ約8.2mの長さを確認し、幅は約1.0～1.6m、断面形は浅いトライ状で深さ約20cmを測る。埋土および、基本土層との関係は調査記録がなく不明である。出土遺物は古代の焼物のほかにカワラケと思われる破片1片があるのみで中世と思われるものの、子細な年代は不明である。ただ、この位置には現代まで継続して溝が構築されている。

ウ 平安砂層上面検出遺構

ここで扱う遺構は平安洪水砂層の上面で検出され、中世の可能性はあるが詳細な時期不明の遺構である。

**S K 2896** ⑨区 VSH03、SI-03 (第258図)

平安砂層上面で検出。長軸方向をほぼ東西にとる楕円形を呈し、長軸150cm、短軸75cmを測る。深さは5cmと非常に浅く、底面上に礫が若干入る。埋土は黄褐色ブロックを含む灰褐色土である。遺物は染付小片が出土しているが、近世の肥前系染付か中世の青花か判然としない。近世の可能性もある。

**S K 2897** ⑨区 VSH04、SI04 (第258図)

S K 2901にやや離れて並列するように検出された土坑である。長軸は東西方向で140cm、短軸80cmを測る。深さは約6cmと浅く、埋土はS K 2901に同じである。出土遺物はない。

**S K 2898** ⑨区 VSN08、SO08 (第258図)

平安砂層上面で検出。長軸80cm、短軸62cmの楕円形を呈する。深さは8cmと浅く、埋土は暗オリーブ褐色土が入る。出土遺物はない。

**S K 2899** ⑨区 VSP08 (第258図)

S K 2903と並列するように検出された土坑である。規模は長軸80cm、短軸は56cmの楕円形を呈し、深さは記録がなく不明である。埋土はS K 2903に同じで、出土遺物はない。

**S K 3001** ⑪-2区 VIINH18 (第258図)

平安砂層上面で検出。平面形は長方形に近い楕円形を呈し、壁はほぼ垂直で底は平坦である。長軸はほぼ東西にとり、長軸94cm、短軸42cmを測る。検出面からの深さは約70cmである。埋土は灰褐色シルト質土に黒褐色泥炭層ブロックを多く含む。形態・埋土の状況は微高地西側低地で検出された土坑と類似する。出土遺物はない。

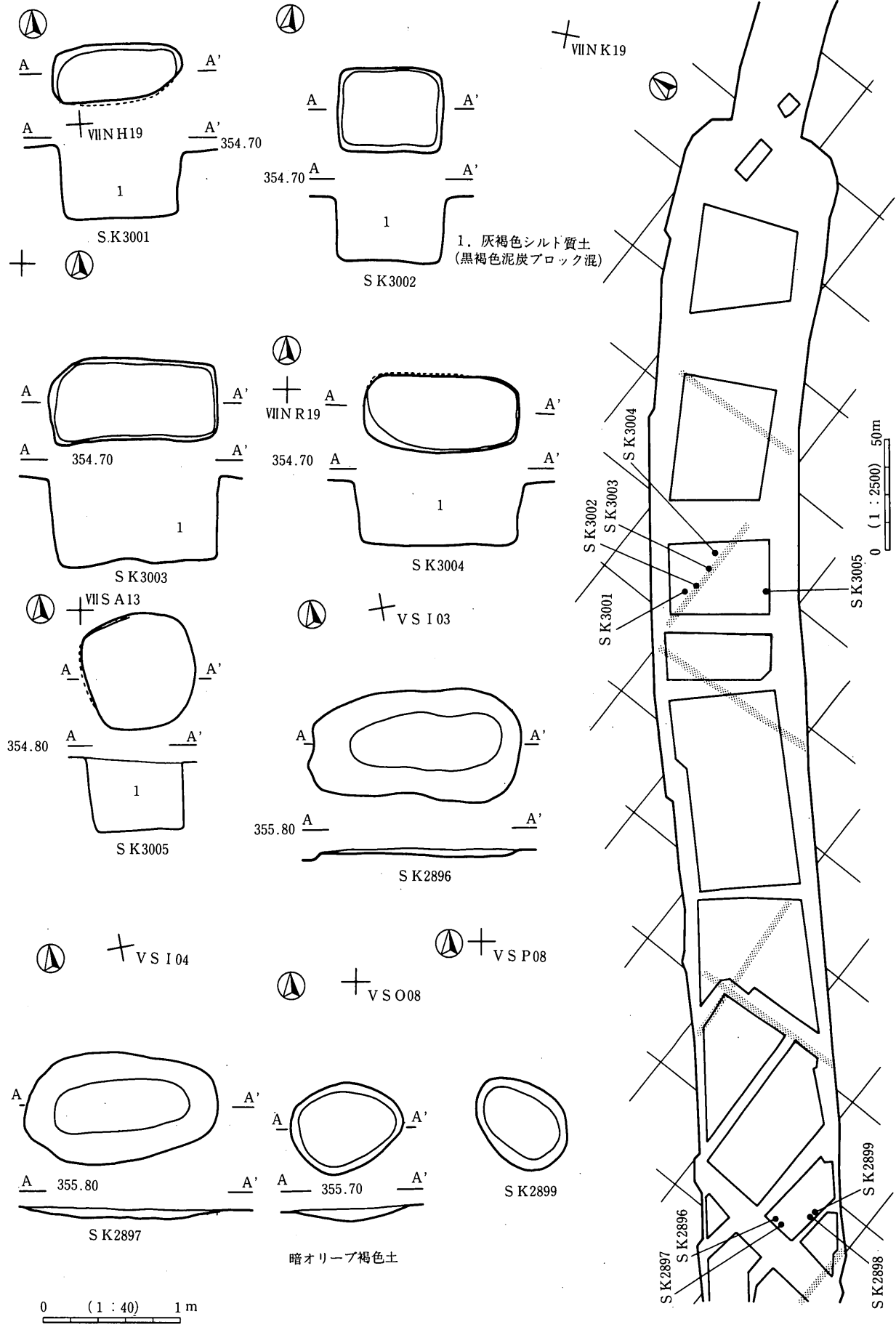
**S K 3002** ⑪-2区 VIINJ19 (第258図)

平安砂層上面で検出。平面形は長軸77cm、短軸62cmの方形を呈し、壁はほぼ垂直で底は平坦である。検出面からの深さは約50cmを測る。埋土はS K 3001に同じである。

**S K 3003** ⑪-2区 VIINO19 (第258図)

検出面・形態共にS K 3001に同じで、規模は長軸122cm、短軸62cmを測る。検出面からの深さは約66cmである。埋土はS K 3001に同じである。出土遺物はない。

**S K 3004** ⑪-2区 VIINR19 (第258図)



第258図 微高地東側低地の土坑

検出面・形態共に上記S K3001と同じで、規模は長軸114cm、短軸56cmを測る。検出面からの深さは46cmである。埋土はS K3001と同一である。出土遺物はない。

**S K 3005** ①-2区 VIIISA13 (第258図)

検出面は上記と同じである。平面形は1辺84~86cmを測る方形を呈し、壁はほぼ垂直、底面は平坦である。深さは検出面から42cmである。埋土はS K3001と同じである。出土遺物はない。

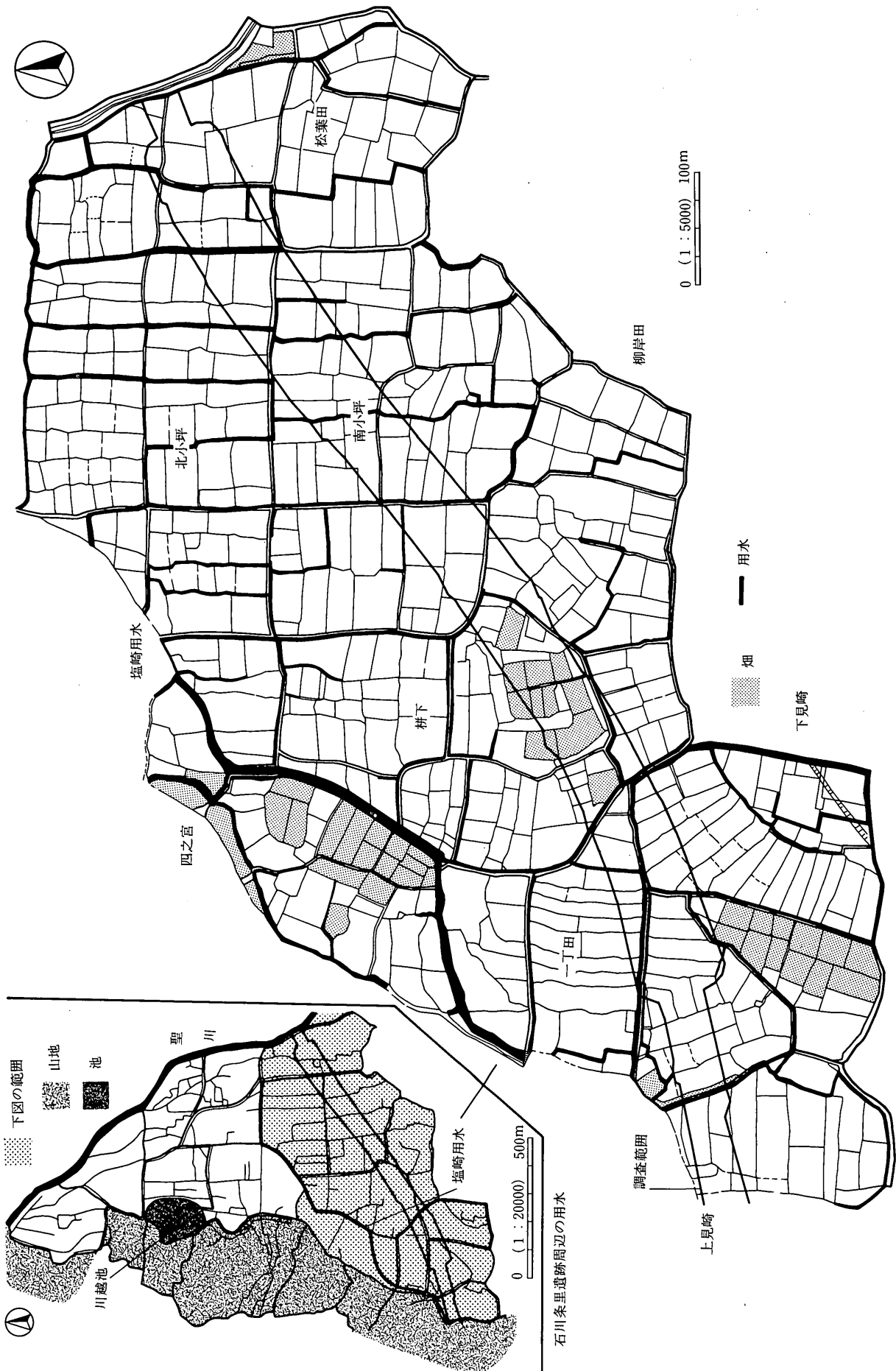
**(3) 現用水下の調査**

**ア 現用水のありかた**

発掘調査では積極的に現用水を調査対象としなかったため、必ずしも十分な記録が得られていない。しかし、現用水も歴史的な経過を経て完成されたもので、その出現時期を明らかにすることにより、より体系的に水田域の変遷の様相を明らかにしうると思われる。そこで、調査域内にかかった用水の構築時期について土層断面記録を中心にまとめてみることにした。その際に現景観は圃場整備、高速道路建設などを経て過去の景観は一変してしまっているため、明治23年の公図を参考に現在の水回しと比較しながら復元してみた。なお、圃場整備に先立って、現地割や水利慣行などの調査が長野市教育委員会を中心に実施されているが、今回は参考としなかったことは断っておきたい。

まず、明治年間作成の公図から全体の用水構成を概観してみる。石川条里遺跡周辺での用水水源には聖川(溜め池)、山手の沢、千曲川の3者がある。聖川系用水は聖川の扇状地扇頂部から取水し、基本的にその扇状地帯=石川条里遺跡北部を南北方向に流れて後背低地に至るものである。この聖川取水の用水は近世前期には水争いの中心となっており、塩崎用水構築以前では主体となる水源と思われる。ただし、取水口は旧石川村に所在し、しかも水配分が塩崎村は少ないためか、近世前期に塩崎村境に溜め池が構築され、聖川系用水を一旦ここに溜めて分水するシステムとなったようである。また、沢水から取水する用水として現四ノ宮集落背後の沢から取水するものがあり、現在では西から東へ傾斜する地形のなかで西側に迂回させて灌水範囲をできるだけ広くとっているが、現在の流量からも灌水範囲は用水周辺の狭い範囲と思われる。なお、西側山地内の猪平池から取水する用水があるが、これは近世に構築されたもので、上記の四ノ宮集落背後の沢から取水する用水よりも西側を灌水するようである。これらに対して、千曲川取水の用水は塩崎用水を代表とし、上記2者の水源用水とは交差もしくは接続しながら山際の等高線にそって流れる。そして、聖川扇状地先端付近で南に折れて、現在は聖川の下を交差して東へ流れていく。この塩崎用水の灌水範囲については子細に調べられなかったが、塩崎地区南西部、塩崎用水周辺、後背低地の水田もこの用水から引水するものが多いようである。ただし、塩崎用水と聖川扇状地を流れくだる用水が交差する付近は塩崎用水自体が不明瞭となり、しかも扇状地を下る聖川系用水が交差・接続して複雑になっている上に、現在は開発が著しく進んで旧状が窺いにくくなっている。そのため、聖川系用水との関係については十分調査できなかった。

用水の配置形態をみると調査地区中央の微高地を挟んだ東西低地で大きく様相が異なることが知られる。すなわち、微高地西側低地では小微高地と谷状地形が入り組んでおり、西から東へ傾斜する地形のなかで等高線にそって用水が構築されている。そのため、用水は西に湾曲したカーブを描くラインが多い。それに対して、聖川扇状地から微高地東側低地はほぼ単一の傾斜方向となるため、条里方向と一致して南北方向に流れるものが主流である。また、微高地西側低地では大きく湾曲しながらも比較的直線的に構築されるが、東側低地では条里的な区画に合わせながらアミグくじ状に複雑に屈曲している。この違いは微高地西側低地の用水が地形に合わせて単一の契機で構築されたもので、微高地東側低地用水は条里的地割の継続的な耕作のなかで用水が追加されたためと見られる。つまり、このような用水の配置のあり方の違いは



第259図 遺跡周辺の地表面地割

地形環境と歴史的な開発のされ方の違いを表現している可能性がある。

なお、個別水田と用水の関係について現況の様相を若干補足しておく。まず、明治時代の公図では後背低地水田では多数の用水が設置され、各水田の最低1辺が用水に面している。そして、直接南北方向の用水に面していない水田でも細い枝用水を引き込む。つまり、各水田は用水と個別に接することを基本としている。この様相は少なくとも塩崎用水が完成して用水が豊富に確保できる段階まではさかのぼると考えられる。また、この塩崎地区の用水では同一場所に底面高の異なる2本の溝を並列あるいはコンクリート製の側溝を上下に配する例が多い。これは高いほうが取水、低いほうが排水となり、公図をみただけでは取水・排水を区別できないものが多い。以下に比較的古い所産と思われる聖川取水、沢水取水用水を取り上げてみる。

#### A 聖川取水の用水

聖川扇状地扇頂部で取水し、緩やかな扇状地域からその先端の千曲川の後背低地までの範囲を灌水すると思われる。しかし、近世には扇状地上部が旧石川村、下部が旧塩崎村に所属していたためか、用水のあり方は複雑で、しかも圃場整備後や道路構築によって旧状が窺いにくくなっている。取水口は旧石川村内の扇状地扇頂部付近にあり、取水後に扇状地上部の範囲を灌水する用水と山際をめぐって川越池にいたる用水に分岐する。前者の用水は旧石川村域を中心に灌水するが、枝用水の一部は旧塩崎村域まで流下するものもあるようだ。後者の用水は山手をまわって旧村境周辺で近世前期に構築された川越池に一旦流れ込む。この川越池は旧塩崎村にとってかなり重要な溜池と思われ、川越池をターミナルとして旧塩崎村域に広がる用水が分岐する。すなわち、池南端から聖川系用水の西限となる山手の用水・後背低地にいたる用水が分岐し、池入口から扇状地扇端部付近から後背低地域にいたる用水が溜池入口から出ている。なお、池の入口で分水する用水のほうが、池で調整されることがないため、優先的な水利権をもっていたと思われる。

これらの用水は基本的に聖川の扇状地を流れくんだり、後背低地に至るものだが、扇端付近で等高線にそって横断する塩崎用水と交差する。この交差付近での接続関係は公図の上では読み切れなかった。ただ、大きくみると塩崎用水付近を境としてその上下で用水のあり方が異なることは窺える。すなわち、塩崎用水を境として聖川扇状地上部側では川越池手前で分岐した用水、および旧石川村域から流れくだる用水が配されるが、後背低地側ではこの用水に加え、塩崎用水?と川越池南端から分水する用水が加わるようにみえる。なお、後背低地と扇状地部分では枝用水のあり方にも違いが見られる。後背低地では表面の条里地割が明確に認められて枝用水も細かく配置されるが、扇状地部ではあまり枝用水が認められない特徴がある。

上記より、聖川系用水は地形に添って扇状地から先端の後背低地を主体的に灌漑するもので、館の所在する微高地の西側低地までは及んでいない。また、扇状地から後背低地へ単純に傾斜する地形に立地しながらも用水配置方法は複雑である。これは旧塩崎村境に位置する川越池へ一旦流し込み、ここをターミナルとして再分配する体系であることや、塩崎用水周辺を境として交差付近の様相が窺いにくいためによる。これは近世における旧塩崎村と石川村といった村境意識、あるいは塩崎用水構築以後の供給水量の増大といった近世の様相が強く投影されていると見られる。ただし、これをもって現景観すべての用水の初源を近世とすることは問題がある。それは塩崎用水を挟んで用水のあり方が大きく異なるとしたが、塩崎用水を挟む扇状地部と後背低地で直接連続しないものの、断続的に同一直線上ラインに配置される用水が数本ある。これらの用水は現景観では等高線の方向に近い東西方向の用水と接続して途中途切れているが、本来は接続していた1本の用水ではなかったかとも想像できる。なお、扇状地扇頂部がなぜ旧石川村域なのか明らかにできなかったが、これは聖川の旧流路の位置が異なることや、中世荘園域境にあたるためだろうか。いづれにしろ、古段階での取水口のあり方は現景観とは大きく異なっているともみられる。

なお、この聖川系用水の灌水範囲の西限は地形と現景観から、館の検出された字「柘下」地籍周辺と推測される。このことから県史<sup>(註1)</sup>や宮脇氏<sup>(註2)</sup>は聖川取水用水と館が関連していたと指摘している。

#### 註

- 1 井原今朝男1986「中世村落の形成」『長野県史』通史編中世1、第6章
- 2 宮脇正実 1995「中世四宮荘北条における居館と用水」『長野県の考古学』(勸長野県埋蔵文化財センター)

### B 沢水の用水

調査地と交差する用水には四ノ宮集落背後の谷から取水する用水がある。この用水は四ノ宮集落内で分岐し、1本は北側の山添いに中郷神社方面へ流れ、もう1本は南下して塩崎用水の上を交差して低地に至る。この用水は調査結果からも中世に遡る可能性があるが、現在はこの用水周辺でも塩崎用水から取水するものが多いため本来の灌水範囲はよく分らない。しかし、この用水から分岐する枝用水の範囲や現状の西から東へ傾斜する地形からみると、灌水範囲は調査地中央の微高地西側低地の字「見崎」「北見崎」「鍵田」周辺に限られているようである。

以上から、塩崎用水以前では、聖川系用水が聖川扇状地帯から微高地東側の後背低地を灌水し、四ノ宮集落背後から取水する沢水用水は微高地西側低地を灌水する様相とみてとれる。そして既に指摘されているように両者の境となるのが館の検出された微高地と中郷神社をむすぶラインであり、ここが大きな地形変換点でもある。このラインの西側では全体的に西側から東側へ傾斜する地形のなかで小規模な微高地と谷状地形が入り組み、東側では北部に扇状地・南に後背低地と比較的単純な傾斜となる。そして、この微高地を境として用水のあり方も異なることは先にみたとおりである。こうしてみるとすでに指摘されるように館の位置する微高地が用水体系のなかできわめて重要な位置を占めていることが推測されるのである。

また、上記のような用水体系のなかで、地形からみてもっとも用水確保がしやすいのは水源に近い上流に近いほうで、微高地東側低地一特に扇状地側と思われる。それに対して、微高地西側は地形的にもやや高く、地形が複雑な上に沢水も豊富でない様相からは用水確保が非常に難しい場所ではなかったかと思われる。

#### イ 現用水下の調査

##### A 微高地西側低地の用水

###### 用水1 (第313図)

②-1区北東～①-2区南西を貫く用水である。現用水下では①-2区で検出されたSD0001があり、土層図は①-2・②-2区近世面の項で掲載している。この用水は四ノ宮背後の沢水から取水するとみられ、塩崎用水との関係は明らかでないが、本来は用水3から分岐して塩崎用水と交差して流れると思われる。この場所では平安時代洪水で埋没した水田では全く溝が存在しておらず、中世II面上面において類似位置に溝をはさむ?畦が確認される。そして、中世II面以上では多数の溝が連続して構築されており、調査したSD0001・0007はその過程の1つに過ぎない。したがって、中世II面前後の14世紀頃が初現とみられ、そして中世後半以後はほぼ確実に存在し、近世まで連続するようである。

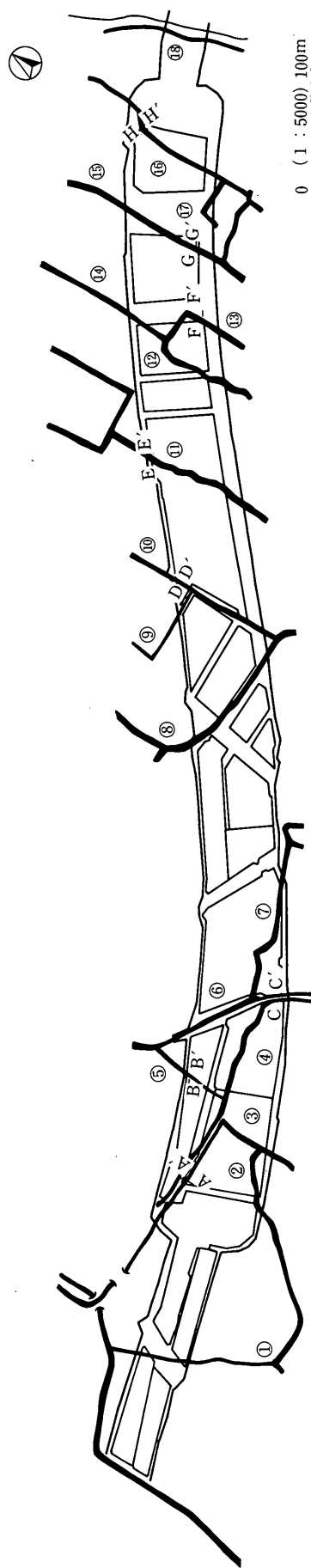
###### 用水2 (第314図)

⑥区SD1017とした溝跡にあたる。この用水は上記用水1と連続する溝で、一旦調査区外へ延びた用水1が、⑥区南西微高地に添って大きく迂回して再び調査区内に入ってくるものである。そして、その先端は用水3(SD1063)に接続する。調査所見からは埋土に平安時代洪水砂層と類似した砂層が見られたことから平安時代に存在した可能性があると考えられるが、用水1では全くそのような状況が確認されていない

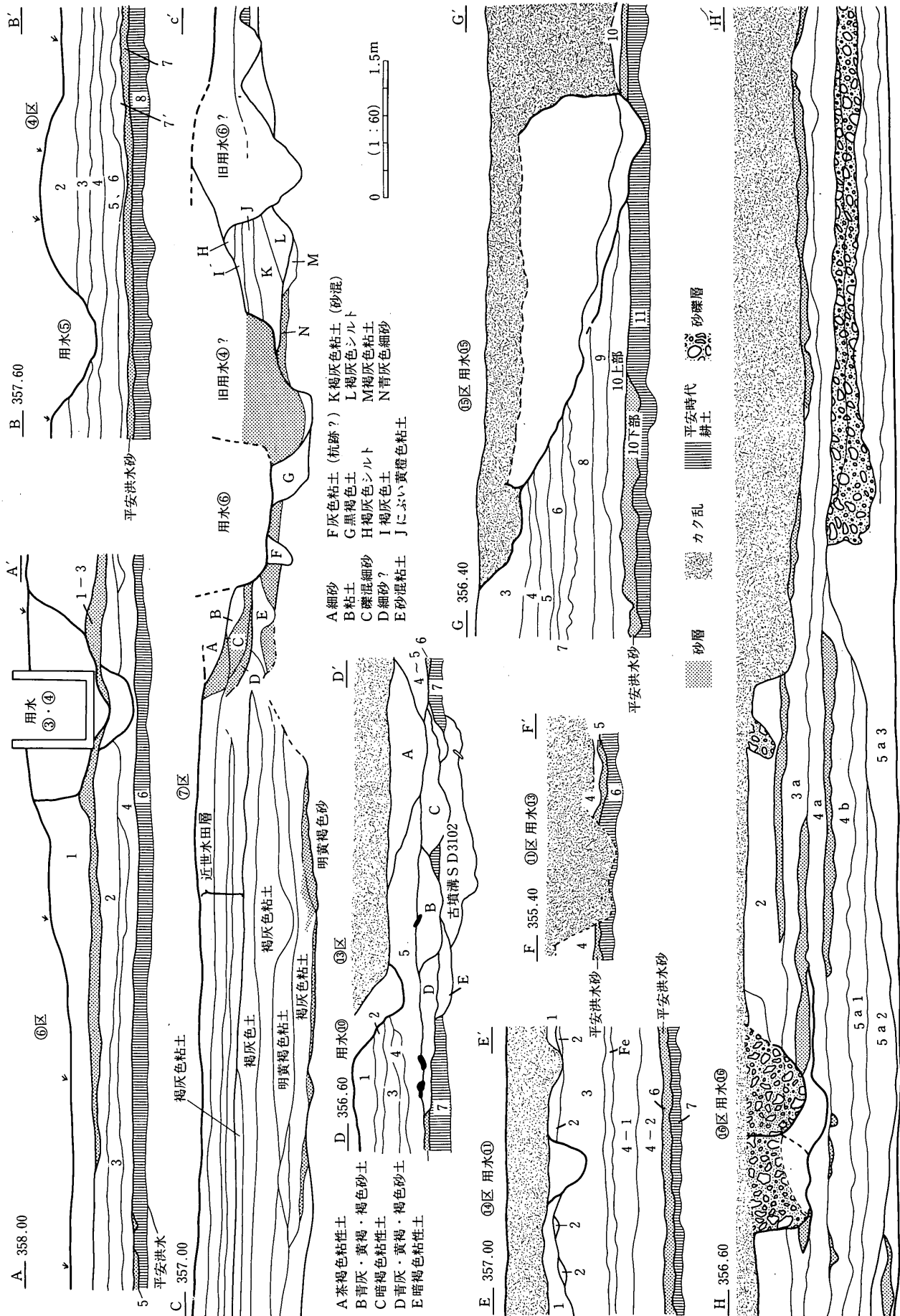
ことや、平安時代に帰属する根拠が弱いので古代に存在したかは疑問が残る。また、面的調査で精査された状態も近世末期の所産でそれ以前は判然としない。ただし、傾斜も緩やで、用水1のような厚い堆積土がみられにくいなかで、溝跡が繰り返し保守されたために古い形態が分かりにくいともみられる。いずれにしろ、近世以前の様相は不明ながら用水1と連続した溝なので、中世にさかのぼる可能性があるともみられる。用水3（第261・314図）

四ノ宮集落背後の沢から取水する用水が、⑦区の微高地先端付近で直角に折れて、途中SD1017と接続しながら南流する部分を用水3とした。SD1063はこの用水底部の残存部である。⑥区調査区南壁にかかった断面をみると溝埋土の注記がなく詳細は不明であるが、数回の掘り直しが確認され、一部に⑥区の微高地4層が本溝埋土に入り込んでいる。この微高地4層の年代は不明であるが、その上層の微高地1層で近世の遺物が出土していることを考えれば、少なくとも近世後半以前に存在したことが知られる。遡及年代の確実なところは不明であるが、SD1017が本用水に接続することからはSD1063とした部分は中世に遡る可能性は十分ある。ただし、⑥区の西壁断面からは平安時代の洪水砂層上面の粘土層段階（中世II面下）では溝が構築されていた様相は確認できない。用水4（第317図）

この用水は四ノ宮集落背後の沢から取水し、塩崎用水の上を交差して低地に流れる用水3から分岐して⑦区の微高地に至る用水である。調査前では用水3と一つにまとめられて直線的に流れるコンクリート製三面側溝に変えられていたが、明治時代の公図では③区北で2本に分岐し、1本は微高地上に延長される用水4、もう1本が南へ直角に折れる用水3となり、接続形態からは用水4が新たに追加されていることが推測される。ちなみに用水4が③区北で用水3から分岐してしばらく平行して流れる理由は、微高地を貫くために一定の高さを確保する必要があったためと思われる。この用水4は用水3が直角に折れて離れた以東では大きく形態が変化し、坪境からずれて蛇行するようになる。これは用水の配置場所が土地区割よりも地形に合わせた結果と思われる。この微高地にかかる部分はSD1022として面的調査されたが、数回の掘り直しが確認されたものの、その初現は近世末もあまり遡らない可能性が捉えられた。この点で用水3が中世に遡る可能性もある点と矛盾するように思われる。これについて、本来は微高地西端で用水3が南に直角に折れていたが、近世末



第260図 現用水断面位置



第261図 現用水断面 (土層注記のないものは各地区の基本土層番号)



期に微高地に延長される用水4が追加されたと考えられる。その年代は塩崎用水の構築時期とほぼ一致しているとみられ、本来用水3が灌漑していた山際の水田の一部が塩崎用水からの取水に変更され、相対的に余裕を生かすために、微高地の水田化が計られて本用水が構築されたと推測できる。

#### 用水5（第261図）

「楨下」地籍の西縁辺を流れる用水6から分岐して微高地西端を南北に流れ、微高地に延長される用水4に接続する。この用水は④区の調査区壁にかかって断面のみ調査したが、溝は表層しか確認できず、中世に関わる土層まで達していない。したがって、この用水は近世末以後～近代の所産と考えられる。

#### B 微高地上の用水

##### 用水6（第261図）

現在は中郷神社前付近で塩崎用水から取水し、館の所在する字「楨下」地籍西縁辺に沿って西に大きく湾曲しながら南流する用水である。西へ大きく湾曲する理由は、西から東へ傾斜する谷状地形を横断するため、等高線に添って用水が作られたことによる。調査範囲内では④区と⑤-1区境、⑦-1・-2区中間の微高地を横断している。現在はコンクリート製の三面側溝に変えられ、⑦区内で用水4が直角に用水6と接続している。明治時代の公図では用水4と用水6が直接接続しておらず、接した後も並列して流れるように描かれており、接続の仕方からみると用水6が先行し、用水4が後で追加されたと見られる。

調査では用水脇まで面的な調査を実施し、最後に⑦区内で断ち割り調査をおこなった。その結果、⑦-1・-2区の用水脇周辺では用水に関連するとみられる類似方向の溝が検出され、断ち割り調査ではコンクリート製の三面側溝下に溝跡が確認された。なお、明治時代の公図では2本並列して記載されるが、⑦-2区の調査地区にかかった溝跡は明治時代に確認できる本来の用水6とみられ、現用水部分が用水4に該当する可能性がある。ただし、三面側溝下で確認された溝跡の埋土が、用水4にあたるSD1022埋土と異なるので直接対比はできず、三面側溝下で検出された溝跡はより古い別の溝跡である可能性も残される。しかし、この三面側溝下の溝跡は本来の構築面が明らかでない上に、出土遺物もない。また、⑦-2区から延びる古墳時代の溝が交差する地点に近いので、この溝跡は古墳時代溝の可能性もあり、溝跡の帰属時期が判然としない。

周囲の状況としては本用水から分岐、接続する現用水5・7は何れも中世に遡りえず、近世末期の所産の可能性が高い。その一方で隣接した⑦-1区では中世に遡る可能性がある砂層埋土のSD1052があり、中世の井戸や柱穴もこの用水を境として西側では検出されない状況がある。このことから本用水の設置場所は中世に遡る地境であったことはほぼ確実視でき、SD1052の存在を重視すれば、本用水は近世の所産ではなく、中世に先行する用水が存在したともみられる。この推測ではSD1052が小規模であることや、本用水に接続する用水5・7は近世末期以後の可能性が高い矛盾点があるが、中世段階ではそれほど流量が多くなかったが、近世末期に塩崎用水と接続して大量の水が確保され、しかも低地の埋没による地表面上昇によって近世に水田化範囲が拡大することによっても考えられる。

以上のように本用水は初源となる遺構が特定できなかったため、用水の構築時期の年代は明らかにできなかった。しかし、状況証拠からは中世に遡りうる地境、あるいは用水が存在していた可能性はある。なお、⑦-1区の本用水に隣接した南壁のみに大きな落ち込みが確認されているが、これは上面が近世末期の水田で覆われ、埋土には平安時代洪水砂層が確認できないので平安時代～近世末期以前の所産と思われる。また、埋土に平安時代の砂層と異なる砂が含まれ、何らかの流水に関連した施設と推測された。溜池状の遺構なのか、本用水と交差する縦方向の溝端部が調査地区にかかったものか判然としないが、この用水との関連が注目される。

## 用水7

⑦区内で用水6から取水して東へ流れる用水である。その位置は館外堀SD1008、近世のSD1001の一部、あるいはSD2036・2037と重複する。SD1008と重複することからも少なくとも中世館段階では存在しないと考えられる。

## C 微高地東側低地の用水

## 用水8

微高地東端付近を流れ、後背低地へ東流する用水である。現在は塩崎用水から取水するが、本来は聖川系用水と思われる。調査ではこの用水付近にガス管が埋設されていることもあって断ち割り調査は実施していない。しかし、この用水に隣接した⑤-2区で本用水に関連すると見られるSD2013、⑤-3区でSD2048が検出された。特にSD2013は規模も大きく、現用水に先立つ用水と思われる。このSD2013は流量が比較的多かったようで、埋土には粗砂層が含まれる。館外堀SD1008とSD2013は直接切りあう部分は未調査であるが、走行方向から交差する可能性がある。SD1008埋土はSD2013と全く異なって流水は確認されておらず、しかもSD1008の延長先と推測されるSD2049は、SD2013より低地よりあって枝用水の可能性のあるSD2048に切られる。したがって、SD2013は館廃絶後の所産である可能性が高い。また、低地の埋没によって微高地東端の水田化が近世に始まると見られることから、この用水は中世まで遡らないと見られる。なお、この用水は後背低地側では⑨-⑫区境を走るが、この部分は調査地区境となるため調査は実施していない。

## 用水9

用水11から分水し、個別水田に水を回す小規模な枝用水である。⑫区の調査地区境に位置するため調査は実施していないが、⑫・⑬区では近接した場所と同じ走行方向をもつSD3006が検出されている。ただし、SD3006は規模も異なれば、⑬区のSD3006が検出された地点は地表面に全く痕跡を残さないため、この用水はSD3006からの継続ではなく、断絶をもって新たに構築されたと思われる。また、現用水が個別の水田へ引水するための用水である点からも近世以後の所産と見られる。なお、SD3006については中世低地遺構のところを参照されたい。

## 用水10 (第261図)

石川条里遺跡内で唯一平安時代～現代まで類似場所に継続して構築されていることが知られた溝である。その位置は古代の条里坪境に一致する。明治年間の公図では取水が塩崎用水なのか、聖川からの取水なのか判然としないが、塩崎用水以前では聖川系用水であったことは間違いない。この溝跡は⑬区の一部で平安時代と中世の溝遺構を調査し、あとは用水下の土層断面を記録した。この断面では平安時代洪水以前、洪水直後の溝、中世前半、近世の溝、現代の溝がそれぞれの土層に対応してやや位置をずらしながらも類似位置に構築されていることが確認された。このように平安時代から溝が継続的に確認された例は石川条里遺跡内では非常に珍しい。この場所に溝が継続的に構築された理由は、この場所が後背低地の西限の地形変換点にあたり、これより西側では微高地と谷状地形が入り組む地形となるためと思われる。ただし、同じ場所にあるとはいえ、その機能は時代ごとに異なるとみられる。詳細はSD3006の項を参照されたい。

## 用水11 (第261図)

用水10同様に古代条里と同一方向に南流する用水である。現景観での取水源は塩崎用水か聖川系か判然としない。調査域内では⑭区北壁にかかり、記録は土層断面図しかないが、上層が攪乱され子細不明である。しかし、中世に相当すると思われる層前後では溝跡が全く確認されないため、この用水は近世以後の所産の可能性が高い。なお、条里区画方向と一致するのは継続的な耕作地に用水が付加されたためと見られる。

#### 用水12

用水14から分岐して条里区画と同一方向で南に走る。この溝も調査区の土層断面図しか記録がないが、⑪-2区地区の西壁記録には該当しそうな溝跡は見られない。しかも、中世相当層と思われる土層上でも溝は確認されないため、近世以後の所産と思われる。

#### 用水13 (第261図)

用水14から分岐して⑪-2区あたりで南へ屈曲する用水である。調査記録は⑪-2区の南壁土層図記録しかないが、この部分は上層が攪乱されているため溝自体の存在が不明である。土層図のなかで、平安時代水田面におよぶ「攪乱」と記録されているものが該当する可能性もある。溝の存在自体が不明瞭でどこまで遡るか一切明らかでない。

#### 用水14

用水13同様に条里区画と同方向で南へ流れる用水であるが、その水源は詳細不明である。溝の位置する地点では平安時代洪水層の土層記録が取られておらず、一切、その構築年代については不明である。

#### 用水15 (第261図)

条里区画方向で南流する用水である。記録は⑬区南壁土層断面図があるが、該当する場所には川跡と記録されているのみで詳細は不明である。この川跡とされたものは深さ約1.4mで上層が攪乱で乱されるが、構築面は⑬区3層まであがることは確認でき、近世には存在したことは間違いない。また、土層断面図では⑬区8層とされた土層が溝底面に入り込むように図化されており、これが確実視できる場合は中世に遡る可能性も残される。しかし、他地区では中世・古代から用水が継続構築される場合では全く同じ位置に存在せず、若干位置がずれるのが一般的である。しかも、平安以後の堆積土が多い本地区内にあつては位置がずれる可能性のほうが高く、それが認められないので中世に遡るとするにはやや疑問が残る。ここでは中世に遡る可能性もあるが、近世から継続する用水とみておきたい。

#### 用水16 (第261図)

条里区画方位にほぼ一致して南流するが、かなり蛇行する。特に調査地区北側で大きく湾曲している。この用水は⑯区北壁土層図の記録しかないが、この土層図では本用水に相当する位置の上層に2本の溝が並列し、その下層に溝跡が記録されている。上層の並列する溝は⑯区の最上層にあたる攪乱直下の2層まで立ち上がり、ほぼ現用水に比定できると思われる。下層の溝は埋土の砂層が⑯区4a層上面に広がるため、この下層溝は少なくとも⑯区4a層上面まで遡る可能性が捉えられる。なお、この溝の南側では4a層下面に比較的厚い砂礫層があり、表層で本用水が蛇行するように走る理由は4a層が形成以前に洪水で砂礫層が堆積したため、4a層上面ではこの砂礫堆積部分を避けて用水を構築せざろうえなかったからと考えられる。なお、この4a層の年代は上層の3a層で内耳鍋が出土しているが、他地区との土層対比からは近世の可能性もある。

#### 用水17

用水18から分岐して個別水田に配水する用水である。工事用道路にあつたため未調査である。

#### 用水18

聖川の堤防に沿って流れる用水である。調査は一切実施しておらず、詳細は不明である。

以上から、現在みられる用水の多くが近世以後の所産であり、中世からの継続は少数、さらに平安時代に遡る例はわずかしかない。しかも、同じ場所に用水が構築されているとはいえ、発掘調査の結果では現景観では用水が全く存在しない場所に用水が検出されたり、時代ごとに機能が異なることが窺えた。また、時代ごとに地形の変化、取水源となる河川の流路変更も推測されることから、時代ごとに用水体系のあり方は変化しているとみたほうが良いと思われる。しかし、一部には平安時代から継続した場所で用水が構

築される例もないわけではない。こうした例は地形変換点に位置するものが多く、時代ごとに用水体系が変化するなかでも地形に規定されたがゆえに継続性が高いとみられる。なお、用水が継続的に構築される場合でも全く同じ位置に重複する例は少なく、位置がややずれるものが多い。これも堆積土の著しい環境のなかで生じたものと思われる。

また、石川条里遺跡内では館の所在する微高地を挟んだ西側・東側低地で用水の継続性が大きく異なることが知られた。例えば、西側低地では平安時代と中世の間に断絶がある一方で、中世に遡る可能性のある用水がいくつかある。それに対して、東側低地はごく一部に平安時代から継続するものがあるが、ほとんどが近世の所産でそれ以前の用水はあまり顕著でない。この東西低地の違いは用水ばかりでなく、地形・現景観にみる条里区画の残存の仕方・用水配置の仕方・用水取水水源にも共通してみられる。つまり、水田耕作の継続性や再開発のあり方などが投影されているともみられる。特に、条里景観でいえば、東側低地のほうが畦方向が揃い、水田区画のあり方も比較的類似していると見られる。それに対して西側低地では条里と一致しない方向の水田群が小グループをなして条里と一致する方向の水田群と併存し、条里方向と一致した水田区画も内部の水田区画のあり方は多様である。また、用水のあり方でも、微高地東側低地は聖川系用水であり、後背低地内ではアミダくじ状に屈曲して流れるものが多いが、微高地西側低地は条里区画とは一致しないで大きくカーブを描きながらも直線的に走るものが多い。この様相は地形環境と用水確保の状況の違いから生じたもので、東側低地が比較的継続性の高い耕作地であり、継続的な耕作地を優先したため用水が付加されてアミダくじ状となったとみられる。逆に微高地東側は水確保が不安定で小ブロックの水田群が点在する様相のなかで、直線的な用水が何らかの統一的な契機によって構築されたと思われる。

#### (4) 中世水田の小結

##### ア 検出された遺構と地形環境

##### A 地形・地質環境

中世の基本土層は微高地を挟む東側低地と西側低地ともに2枚の粘土層がある。この2枚の粘土層が微高地を挟んで対応することは直接確認できていないが、類似した傾向は窺える。すなわち、下層の粘土層は聖川沿いの部分で若干層厚を増すものの、微高地西側・東側低地ともにほぼ均等な層厚で平安砂層と類似した傾斜となっており、聖川沿いでは平安時代埋没水田面同様に聖川へ向かって傾斜している。ところが上層粘土層では場所ごとに堆積状況が異なっている。西側低地では西端の山際に厚く堆積して地表面が上昇し、それと同様に東側低地の㊸区以東では上層と下層粘土層の間に部分的な堆積土が入り込んで聖川沿いのほうが高くなる。そして、調査範囲の西端の山手と、東端の聖川添いの両端が高い地形に変化してくるのである。それぞれ上層粘土層段階に堆積環境の違いを生じた理由について、微高地西側低地では山手からの沢水取水の用水構築とこの用水を媒介とした堆積土の増加、あるいは山地の開発による流出土の増加によると思われる。また、微高地東側低地端では聖川の流路管理が進展して堆積土が限定的な範囲に集中したために洪水が多発するようになったのではないかと推測される。このように、下層粘土層の段階では遺跡内で大きな地形変化は見られないが、上層粘土層には人的な影響が加わって地形変化が生じてくるとみられる。さらに付け加えるならば、微高地東側低地では上層・下層粘土層との境で平安時代から類似位置に継続していたS D 3006が廃絶してしまい、用水体系の変化も知られる。この変化の年代は微高地西側低地では中世II面とした調査面が変換点に該当する時期とみられ、14世紀前後と推測された。微高地東側低地では詳細不明ながらS D 3006の廃絶時期に求めると14世紀後半～15世紀前半の間と推定される。東側低地・西側低地で推測される年代はずれをもっている可能性もあるが、ほぼ14世紀を前後する時期が大き

な変革期にあたるとみられる。

上記の堆積環境によって、堆積土の増加している微高地西側低地の山手と東側低地の聖川沿いでは遺存状態が不良ながらも水田関連遺構が遺存し、これ以外の場所では洪水性堆積物で覆われることもなく、わずかな土坑・溝が検出されたのみである。なお、聖川沿いの部分では調査期間の制約と上部が前年度調査排土による攪乱で乱されているため調査は実施していない。

## B 土坑

基本的に低地は水田として利用されていると推測されるが、水田に関係する遺構としてはやや異質に見える土坑がいくつか検出されている。これらの土坑は形態が様々ながら、埋土がブロック土で構成される共通点があり、比較的短期に使用されて埋め戻されるものと推測される。分布は微高地西側低地に偏在し、列状に群をなして一定の区画に基づいて構築されたと思われるものもある。性格については、水不足を補うために臨時に構築された井戸に類する施設か、全く水田以外の耕作に伴う施設の可能性を考えたが、いずれも確証が得られていない。前者ならば水田域であることは間違いないが、後者ならば水田域以外の利用もあったことになる。なお、水不足を補う臨時の井戸とするならば、その分布が用水灌水量の多寡を知る材料となり、土地所有のあり方を考える材料となる可能性もある。

## C 中世の水田域の区画

今回の調査では遺構遺存状況が不良で、断片的な様相しか知られなかった。しかし、溝・疑似畦畔、土坑分布などからいくつか水田区画に関する興味深い所見も得られている。

まず、一点目に微高地西側低地では部分的に古代の条里的区画とは異なる方位の区画水田跡が確認されている。その初現は中世Ⅱ面の14世紀に遡ると思われ、出現契機は山手の沢から取水する用水の構築に伴うと思われる。平安時代洪水直後の段階でも条里区画とは異なる方位のSD1033があるが、あくまでも一時的なもので継続性は持たない。それに対して、中世Ⅱ面の条里区画と異なる方向の区画は以後も継続される違いがある。このように中世では均一な土地区画が広域にみられる古代と異なり、同じ低地内であっても区画方位が異なる水田群が併存することになったと思われる。この古代と中世水田の相違は一定の土地区画を現出させることよりも、地形に合わせて水田を構築する指向性の違いとみられる。また、このような条里区画と異なる方位の水田が一定範囲で群をなすことは、ブロック単位が何らかの再開発や所有単位となっていたと思われる。このような様相は微高地西側低地のほうが顕著にみられ、遺跡内での水田耕作の継続性と再編成の在り方の違いによるものと思われる。

二点目は水田区画に数種類あることが知られた。特に微高地西側低地では同一方位の水田群がまとまるブロック群が併存し、この大きなブロックをまとめる区画が認められる。そのブロック群内部は疑似畦畔の存在からほぼ南北に細長い区画に細分されているとみられるが、東西方向の疑似畦畔はあまり顕著ではない。特に①-1区や②-1区では南北方向が地形傾斜方向に近く、東西の区画で細分されないと水田耕作は難しいとみられる点でやや奇異に思われる。これについては東西方向の畦は疑似畦畔として残存しなかったのではないかと考えられ、その理由は移動しやすい畦であった可能性も考えられる。この推測が許されるならば、疑似畦畔として残存する畦は継続性の高い畦＝土地所有の基本となる区画で、東西方向の畦は移動しやすい＝耕作の都合によってその都度構築される畦であったとも推測される。以上からみると水田ブロック群－南北方向に長い区画－東西方向の細分する畦区画の3種の区画が存在したとみられる。そして、このなかで水田ブロック群－南北方向に長い区画が何らかの土地所有の単位となり、東西方向の細分する畦区画が耕作状況によって場所・時期ごとに変化するものとみられる。さらに、中世Ⅰ面で検出された畦状遺構も疑似畦畔の可能性もある。これが疑似畦畔とすれば中世Ⅰ面では、区画自体が実質的な水田土地所有範囲を表現するものとなっていると思われ、14世紀～16世紀にいたるなかで水田所有のあり方が

変化している可能性が知られる。ただし、中世Ⅰ面が埋没水田であった場合にはこの推測は成り立たなくなる。

なお、微高地西側低地では同一調査面で複数種類の疑似畦畔が確認されているが、これは短期間に著しい堆積があったことや、畦の継続性が異なることが考えられる。これについて中世Ⅱ面の例を取り上げて少し検討しておく。中世Ⅱ面では検出面下層の粘土層が盛り上がる疑似畦畔とその上面に堆積した洪水砂層が残存した疑似畦畔が検出されている。基本土層との関係では盛り上がる疑似畦畔が先行するもので、洪水砂層が残存した疑似畦畔が後出するとみられる。しかし、①-2区では盛り上がる疑似畦畔S C 0017と、砂混土が入る足跡が带状に残存する疑似畦畔の可能性が高いものが検出されているが、両者の標高を比べるとS C 0017のほうが高い。したがって、時期差だけではなく、継続性の違いも反映されている可能性も残される。このなかで、S C 0017は走行方向の異なる水田ブロック群の境にあたる点が注意され、隣接した南北方向の区画が洪水砂層を残す区画となっている点で上記の区画畦の種類と疑似畦畔のあり方が異なる点で興味深い。なお、上記の区画の在り方については推測によるところが大きいいため、類例をまっけて再検討される必要がある。

#### D 溝跡

低地域で検出された溝跡は疑似畦畔の可能性のあるものを除くと非常に少ない。これは中世では厚い洪水性の堆積土で覆われないため、浅い溝は上層の耕作で削平されて残存していないとも考えられるが、平安時代の埋没水田でも用水が少ないことを考えれば実態として溝が少ないのかもしれない。疑似畦畔の可能性のある溝跡を除くと、検出された溝跡はほぼ用水に限られ、その水源は地形と現用水のあり方から千曲川から取水するものではなく、山手の沢や聖川からのものとみられる。これは近世の塩崎用水構築以前の状況とほぼ同様と思われ、近世の様相を参考にしてみると、聖川への依存の高さと水の供給が不安定であったことが推測できる。こうした状況を反映したためか、聖川系用水の一番西限とみられる用水が中世でも時期を追って西側の高台側へ移動して灌漑範囲を広くする努力が計られているようである。

特にこの様相が窺えるのがS D 3006である。S D 3006は古いS D 3006 Bと新しいS D 3006 Aに分離できるが、S D 3006 Bは平安時代の埋没水田の溝同様に微高地先端周辺で⑬区の南北の坪境を北から坪境で東西方向へL字状に折れ曲がっていたと推定される。それがある段階でS D 3006 Aは坪境より西側に延長されており、より西側の山手をまわる用水が開削されたと推測される。ところが、S D 3006 Aは14世紀末～15世紀前半には廃絶してしまう。その後は同じ場所に溝が復旧されることがなくこの場所では南北坪境に沿った用水のみになってしまう。このS D 3006の代わりとなる可能性のある用水を探ってみると館西側を走る用水6が新たに構築されたのではないかと推測される。この推測が許されるならば、年代をおって聖川取水用水がより山手をまわって西側の高台側へ迂回させ、灌漑範囲を拡大してゆく可能性が考えられる。なお、この高台への拡大した灌漑部分は、館のところで推測したように館の所在する字「柙下」地籍縁辺をめぐっており、この新たに灌漑範囲を広げた部分が館直営水田であった可能性もある。そうすると、このS D 3006廃絶の理由は館が関わる水田耕作地の再開発を契機としている可能性も出てくる。

また、微高地西側低地では平安時代の埋没水田では溝跡は全く検出されていないが、中世Ⅱ面から新たに現四ノ宮集落背後の沢水取水用水が出現している。この用水の出現契機は明らかでないが、出現時期が微高地東側低地でのS D 3006が変化する時期前後と類似した時期である点は注意される。

なお、S D 3006はさまざまな祭祀関連遺物を出土している。この溝に関わる祭祀行為としては2種認められ、一つは溝底面上に一定間隔で石の下に銅銭や金属器を埋納したもので、もう一つは埋土上層で検出された呪符木簡である。前者は溝自体への祭祀行為とみれるが、後者は隣接した微高地の館（年代的には堀を巡らせた館出現期前後かそれ以前？）で行なわれた祭祀か、あるいは何らかの耕作地境や用水自体に

関わる祭祀とも考えられる。

#### イ 水田域の時期的変遷

##### A 古代水田の様相

遺跡内では9世紀末に洪水砂で埋められた古代水田が検出された。その特徴は、もっとも広域に水田が検出され、しかも条里型地割である点にある。しかし、水田の区画は坪一半折（長地）？さらに細かな畦で細分され、水田域の広さのわりに用水の数は少ない。用水が少ない点からは水回しが効率的でなく、水源に遠い水田では水が十分確保できないことが想定されるが、現在とは異なった水が湧きやすい環境であったことや、自然堤防縁辺の長大な溝などによって千曲川からの取水が比較的安定していたのだろうか。なお、微高地東側低地ではいくつか用水が確認されているが、明らかに聖川系の用水が確認できる。

この平安時代の水田も洪水で一変するようである。例えば、洪水以後に自然堤防上の長大な溝は復旧されておらず、自然堤防背面の水田は放棄されている。また、微高地西側で検出されたS D 1033のように、新たに出現する用水もみられる。この様相からは洪水による千曲川の流路変化・自然堤防の上昇・拡大や、低地の水田面の上昇も起こったために根本的な水まわしの変更を余儀なくされたことが推測される。

遺跡内の洪水直後の遺構としては微高地西側境周辺のS D 1033、微高地東側低地の用水10下の溝跡、疑似畦畔の可能性もある大畦上部の溝状遺構がある。これらの溝跡から推測される洪水直後の様相は微高地西側低地と微高地東側低地で違いが認められる。微高地西側低地では条里の方位と一致しないS D 1033が新たに構築されるが、これは中世まで継承されずに廃絶してしまう。これに対して微高地東側低地では条里坪境の位置に溝が構築され、しかもいくつかはそのまま類似位置に別の溝が構築されて継承されるようである。つまり、微高地東側低地は耕作の継続性が高く、微高地西側低地はやや断絶した様相をもっている可能性もある。

##### B 中世水田域の変遷

水田域では検出された遺構は非常に少なく、しかも断片的である。また、遺構から出土した遺物も少なく詳細な遺構年代を決めかねるものが多い。こうした状況からは詳細な変遷をまとめることは不可能であると思われたので、いくつか大きな変化が見られたなかから概略の変遷を考えてみたい。

中世水田域の画期は土層堆積環境が変化するとみられる基本土層の2枚の粘土層の境に求められるが、中世の基本土層が粘土層である点は千曲川からの大きな洪水に見舞われることもなく、中世全般的に比較的安定した堆積環境とみられる。こうした環境のなかで粘土層が上下2枚に分層され、その上下で遺構・地形のあり方が変化している傾向が推測された。特に上層粘土層の堆積が人的な影響が大きい可能性も窺っているため、上下の粘土層の境が大きな変革期とみることはできないのではないかと考えられた。しかし、逆にいえば土層の境を検出面としているので、この堆積環境変化以外の時期の変化は調査では確認できていないことも注意しておく必要がある。以下に微高地西側・東側低地に分離して変遷の内容を検討してみる。

##### a 微高地西側低地

###### 中世II面以前（14世紀以前）

微高地西側低地の中世II面遺構はそのほとんどが本来は上層に帰属する疑似畦畔とみられ、中世II面以前の遺構は余り検出されていない。そのため、中世II面以前における水田の状況は詳細不明であるが、中世II面の遺構と平安時代の埋没水田との比較から憶測を交えると次のような様相と推測される。中世II面では条里区画方位に一致する畦とずれる2種の区画が確認できている。このなかで、条里からずれる方位の遺構は中世II面より遡るものは確認されず、山手から引水される用水も中世II面以下では検出されていない。しかし、一方には条里方向と一致した区画が中世II面に存在しているため、少なくとも条里区画

方位に一致した区画が中世II面以前に存在した可能性は考えられる。また、⑥区の東西大畦の断面からは同位置に洪水以後の大畦が疑似畦畔として確認できた（現用水下の調査参照）ので基本的には大畦は踏襲されていたようである。しかし、洪水直後と推測されるS D 1033はこの大畦を横断して構築されているので、中世水田は断絶なく、平安時代大畦を踏襲しているかは不明である。この大畦区画内部の水田区画のあり方は中世II面・平安時代埋没水田共に南北方向の畦の通りが良いため、中世II面以前の水田もほぼ同様であろうと推測される。一方で南北方向の畦の配置距離は中世のほうが狭いので、基本的には平安時代埋没水田の坪区画を踏襲し、その内部は南北方向に通る畦で細分されていたが、この内部の区画は古代とは異なると共にやや地形に合わせる側面が強くなっていたとみられる。また、ここでは中世II面以前の溝跡は検出されていない。以上から中世II面以前の水田の様相は全体的には平安時代の条里区画のあり方に近いとみられるが、坪内部の区画のあり方は明らかに平安時代の様相とは異なっていると思われる。

#### 中世II面（14世紀前後以後）

ここでの大きな変化は現四ノ宮背後の沢から取水する用水が出現し、その用水に一致する方向で条里区画とは異なる方向の水田区画が作られる点にある。そして地形も山手に厚い堆積が見られるようになり、西端の地表面上昇傾向が認められるようになる。この水田区画と用水はそのまま現地表面の水田区画や用水まで影響を与えており、地形変化もこれ以後より顕著にみられ、近世ではさらに水田区画自体にも影響を与えるようになる。この段階の区画のあり方はすでに述べているので省略するが、基本的に水田ブロック群—南北に細長い区画—東西の小規模な畦による小区画の3種の区画が存在したとみられる。また、用水については地表面の用水1とした場所にほぼS C 0017内の溝が一致することから、現地表面の用水2（S D 1017）や用水3（S D 1063）もこのころ存在した可能性もある。こうしてみると中世II面以後に山手からの沢水を引水した用水を基軸とした再編成があったと見られる。こうした再開発・再編成が実施された理由は、前代では水供給のあり方が不安定であったために、水の供給を安定化、あるいは計画的に供給させることが目的ではなかったかと思われる。

#### 中世I面（16世紀前半）

この段階は基本的に中世II面の状況をそのまま踏襲しており、大きな景観上の変化は見られないと思われる。しかし、先に水田区画のところでも述べたように検出された遺構が疑似畦畔とすれば、中世I面では中世II面ではあまり痕跡を残さない東西の畦も疑似畦畔としてみられることになり、実質的に畦区画自体が特定の水田所有範囲を示すようになった可能性がある。つまり、中世II面からI面の間に景観の大きな変化はないものの、土地所有のあり方が大きく変わっているともみられる。ただし、中世I面で検出された遺構が埋没水田自体であったとするとこの推測は成り立たない。詳細は類例をまって検討されるべきと思われる。

#### b 微高地東側低地

##### 中世II面（14世紀後半～15世紀初頭以前）

ここではS D 3006周辺の溝のみしかないので、これらの溝から様相を推測してみる。検出された溝跡のなかでもっとも古いと思われるのはS D 3006Bである。その構築時期については明らかにできていないが、出土銭からは11世紀を上限とし、下限は不明ながらS D 3006Aが廃絶するとみられる14世紀末～15世紀前半以前としかわからない。ただし、出土遺物からすると上限は12世紀後半代前後とも思われる。この溝跡のあり方は平安時代の埋没水田の溝配置と類似している。従って、基本的には古代の水田区画や用水体系は大きな変化を伴っていない可能性がある。やがて、この様相もS D 3006Aがより西側に延長されることになり、新たに西側よりに走る用水が構築された可能性が想定された。ここに一つ画期が認められるが、その年代は特定できていない。しかし、これも平安時代からの用水のあり方の延長であったと思われる。

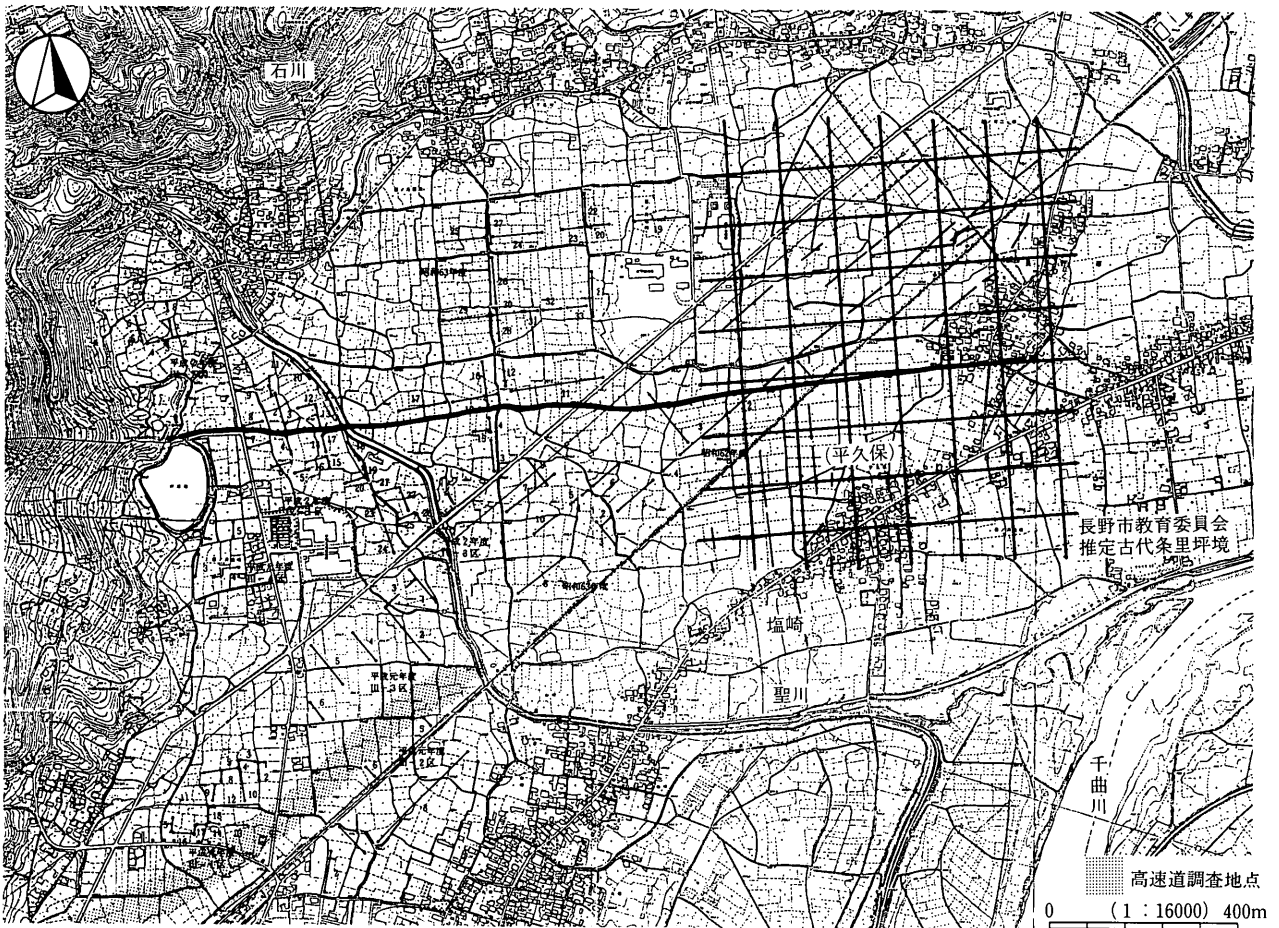


中世Ⅰ面（15世紀以後）

この段階では聖川沿いに厚い堆積土が見られるようになり、聖川沿いが高い地形に変化してくる。ここで検出された遺構はほとんどないが、もっとも重要な点はS D 3006が廃絶してしまうことである。ここに大きな画期を見出せるとともに、大きな用水体系の再編成が窺える。この用水体系の再編成に関しては用水廃絶時期が微高地館の存続時期に重なることや、館の範囲が字「柘下」の水田域を含む範囲の可能性から、S D 3006が廃絶と相対して山手際の西側を通り、微高地を貫く用水6が新たに構築されたのではないかとと思われる。さらに、これはS D 3006を基軸とする用水が従来灌漑できなかった後背低地西脇の高台側にあたる字「柘下」範囲を再開発・再編成するために、構築された可能性があるのではないかととも思われた。つまり、S D 3006の廃絶と現用水6の出現が相関関係にあり、その直接的な契機に館の出現が関連した可能性もある。

c 変遷のまとめ

以上では憶測した部分も含み、検証不十分なところもあるが、以下のとおりの傾向としてまとめられよう。14世紀以前までは基本的に条里型水田で、用水体系は古代以来踏襲されている。しかし14世紀前後ころから変化がみられてくる。一つは微高地西側の山手の沢水取水用水の構築と条里区画から外れる水田区画の出現であり、もう一つは微高地東側低地のS D 3006Aとそれにつらなると想定される用水の構築である。さらに微高地東側低地では微高地域の館を核として水田が再編成され、S D 3006の廃絶につながるであろう。この14世紀を前後する再編成の動きは基本的に用水の編成を基軸としているとみられ、地域全体に関わる水のより効率的な利用と水田域の再開発などの拡大化傾向をもつともみれるが、逆に流量が



第262図 地表面地割と調査で推定された古代条里（報告書<sup>(註2)</sup>に加筆）

潤沢でない可能性も考えれば、むしろ従来の安定した水田耕作が営まれていた場所以外の特定範囲への再開発に重点が置かれていたとも考えられる。この2つの解釈の可能性については詳細を明らかにできなかったが、聖川沿いの地表面上昇にみられる聖川沿いの整備のように地域全体に関わる整備も想定できるならば、2者択一的に解釈するのではなく、地域全体と個別的な再編成の2つの側面が館などの権力が媒介としていたことで成り立った様相とする解釈もありうるのではないかと思われる。これも個別遺構や地形変化の詳細な時期対比が不十分なので、同時、もしくは連動した変化と見られるかは今後の検討によりたい。

この14世紀を前後する段階以後に出現した土地区画、あるいは用水はこの時期以後そのまま近世へ踏襲されるようである。しかし、微高地西側低地では館廃絶以後、中世I面で見られたように畦区画の意味自体は大きく変化している可能性もある。

#### ウ 中世水田の特徴

上記では断片的な遺構の様相から推測される様相を推測を交えてみてきたが、力不足から十分な検討を加えることもできず、思い込みのほう勝ち過ぎているきらいもある。しかし、最後に周辺の様相のなかで、今回の調査結果について再度整理を行なっておきたい。

近年、中世の水田遺跡の調査例が増加し、中世においても条里的な区画が確認できることが明らかにされてきている。従来では地表面にみられる条里的な地割が古代にさかのぼるかどうかの議論のなかで中世水田は2次的に扱われてきている側面もあったと思われるが、積極的に中世水田のあり方としてみる検討もでてきている<sup>(註1)</sup>。石川条里遺跡内では現篠ノ井石川一ツ柳地区と塩崎地区の境には聖川を横断して東西に直線的に走る大きな区画の変換点となるラインが地表面に確認されている。すなわち、このラインを挟んで北側の一部では不規則な水田、南側が条里的な地割が比較的明瞭に看取されるのである。この周辺は長野市教育委員会によってトレンチ調査が実施され、青木和明氏によって若干検討も加えられている<sup>(註2)</sup>。市教委の調査結果からは先のラインを挟んで現地表面の地割が異なる地点それぞれの下層では埋没した統一的な条里地割が存在し、しかもライン南側の条里区画を残す塩崎地区では現地割と平安時代の埋没条里の大畦の位置がずれていることが確認されている(第262図)。青木氏はこれを現地表面にみられる条里地割と埋没平安水田の不連続として捉え、石川条里遺跡が中世においては四ノ宮、石川荘に二分される点との関連からも、埋没水田の復旧のされ方が別の経緯をたどったものであろうと推測した。

この所見より現地表面にみられる条里区画の施行年代は平安時代の洪水以後であることは間違いない。下限は条里区画が聖川周囲が洪水によって比較的広範囲に乱れるところがあるので、この乱れが今回の調査結果で聖川の流路管理が進展してくると推測された中世後半以前と想定されよう。また、先の青木氏の捉え方からすれば、平安末期の荘園成立前後とできるかもしれない。しかし、先にみた塩崎地区と石川・二ツ柳地区の境のラインの自然堤防と接触する「平久保」地籍あたりは戦国期に塩崎に新たに編入されたとされる点で問題がある。平久保が塩崎に編入された経過については武田氏の支配時代に諏訪大社の祭礼費用負担を各郷に割り振る際に、帰属が不明となっていた平久保を塩崎に編入したとされる。本来、四ノ宮荘に帰属していたとすれば、先のラインが荘園成立時に施行された蓋然性が高いが、武田氏によって新たに編成が組み替えられたとすれば、先の現地表面の条里地割を荘園成立時の所産とするには問題が残る。ここでは断定はできないが、いずれにしろ石川条里遺跡内の聖川以北の一部では中世前半段階までに条里的な区画による水田区画が再施行された可能性は高いのではないかと思われる。このことは貞和の四ノ宮北荘の目録で主に列挙された配分が「町」を基準としている点にも関連するのだろうか。

さて、このような中世での条里区画の再施行が想定される場合、今回の調査された部分はどうのように考えられるであろうか。今回の調査範囲では遺構の残存状況が悪いこともあり、区画の様相は窺いにくい

少なくとも微高地東側低地では平安時代の条里区割を中世においても踏襲していると見受けられている。そういった状況とすれば、聖川北部で中世前半以前の条里が方向・位置がずれる様相とは異なった背景によるともみられるが、基本的に条里的な地割が土地の面積単位として有効であったことは共通していよう。そのなかで、古代以来の条里区画を継続させた場所と、一括して再開発の際に新たに施行された場所との違いとして見られることができるのかもしれない。また、S D 3006が新たに構築されることを考えれば、古代以来の条里区画を踏襲しながらも新たに再編成された可能性もある。いずれにしろ、古代以来の踏襲にしろ、あらたな編成にしろ、中世前半段階に条里区画が基本であった可能性は高いと思われる。今回は坪の区画しか問題にできなかったが、坪内部の区画の仕方を含めて検討されるべき問題も多い。

上記から、中世前半では条里区画が中世において再編成、あるいはこの地域で位置付けしなおされた可能性が推測されるが、14世紀以後の中世後半からは別の変化が見られるようになる。それは発掘調査によって用水の構築を基軸として条里と異なる区画が出現し、同じ低地内でも区画方位や用水配置の異なる水田小ブロック群が併存する景観が生み出されたと思われる。また、そのあり方は微高地の西側・東側低地では大きな違いがあり、微高地東側低地では比較的条里区画の方向に一致する区画が踏襲されて用水は非常に少ない。それに対して微高地西側低地では用水の数も多く、しかも条里に一致しない区画も出現している。このことは現地割でも確認され、微高地西側低地では条里区画と一致しない区画の水田がいくつかのブロックにわかれて存在し、東側低地は条里方向と一致した方位の区画となっている。この景観を現出させた背景は明らかにできなかったが、地形と用水の確保の違いに関連して、安定的に連続耕作された微高地東側低地と耕作不安定で再開発される微高地西側低地の違いと思われる。さらに歴史的環境のところでみたように14世紀以後に四ノ宮荘の領有関係がかなり複雑化しており、前代から耕作している農民、支配者の領有関係や再開発・再編成が重層的で複数契機にわたったことも考えられるのかもしれない。

そのなかで、調査域中央部の微高地に館が構築され、先に推測したようにS D 3006の廃絶と用水6の構築による水田域の再編成がおこなわれたのではないかと思われる。また、この段階の用水のあり方は現地表面にみられるように各水田1枚ごとに用水と接続するのではなく、いくつかの水田群単位に設定されるようである。したがって、すべての水田に均等に配水するシステムではなく、限定的な範囲に灌漑する面もあったのではないかと思われる。また、このシステムであるがゆえに、用水支配が実質的な水田域の支配として有効に機能したと思われる。

なお、この様相は中核となる館の廃絶で大きな変化を迎えるともみられるが、詳細は明らかにできていない。条里区画の崩壊とも関連して、畦の区画土地自体が所有単位としての側面を強めてくる可能性がある。この点の詳細は今後の課題としたい。

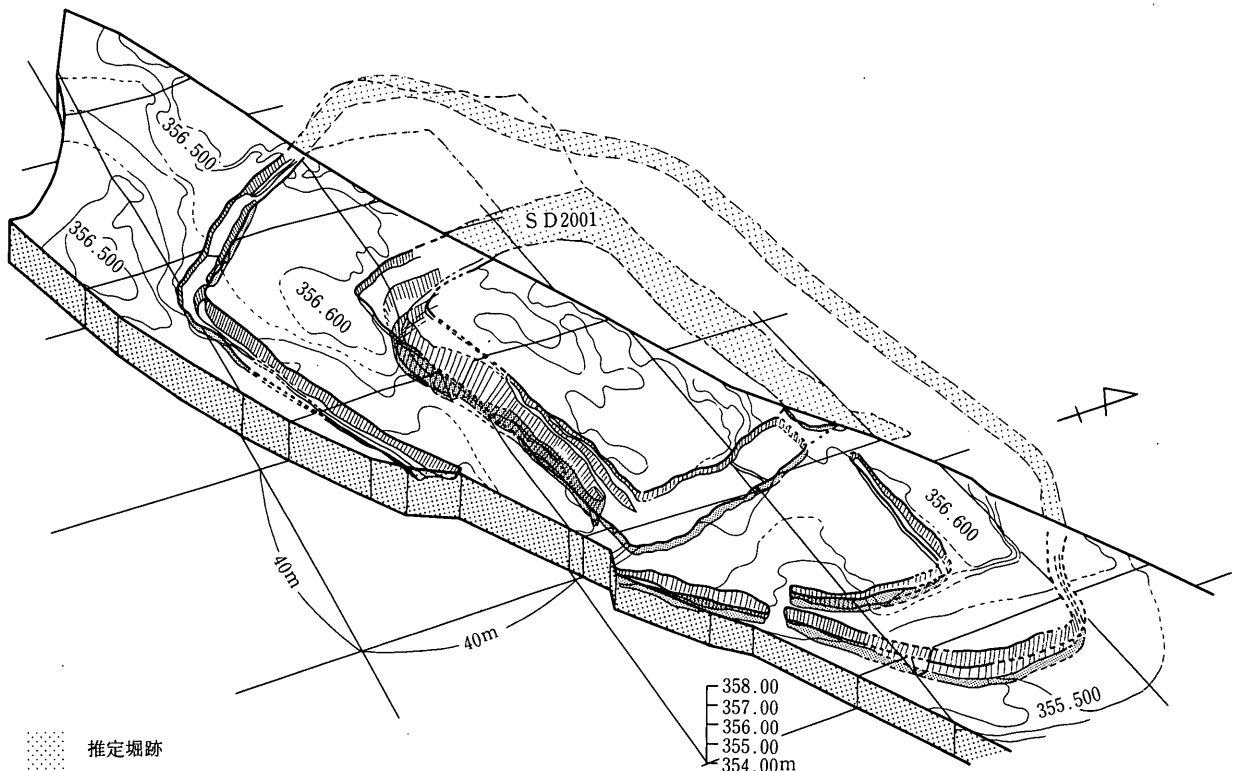
#### 註

註1 広瀬和雄1996「条里制」『考古学による日本歴史』10 雄山閣

註2 青木和明1989「III 2 (2) 地割の復元」『石川条里遺跡(4)』長野市教育委員会

## 3 微高地の遺構

微高地域は④・⑦-1区を西限、⑩-1・⑤-2区を東限とした範囲とみられる。ただし、平安時代ほどその範囲は明瞭ではなく、②-2・③区で検出された土坑と類似した土坑が⑦-1区でも検出されているので、平安時代よりもさらに微高地範囲は狭まっている可能性もある。この範囲では中世後半期の館跡とそれに続く時期の井戸状遺構が検出されたが、中世前半の遺構は不明瞭である。また、これらの遺構のなかには中世と断定するのに躊躇されたものもあるが、可能性のある遺構を含めて扱うことにした。以下には遺構の種類ごとに記述していくことにしたい。



第263図 館鳥瞰図

## (1) SK

中世の土坑（SK）には柱穴・井戸・墓・鉄滓廃棄坑などがあり、もっとも数が多いのは柱穴跡と井戸跡である。大部分は中世の所産と推定されるものの厳密な年代が断定できるものは少なく、形態的にも古代や近世の土坑と類似しているものも多い。ここでは厳密には中世とはいえないが、その可能性のあるものを含めて報告する。

## ア 井戸跡

井戸と思われるSKは約132基あり、そのほとんどが素掘りの井戸である。例外的に木枠をもつ井戸が1例、石積みの可能性のある井戸が1例ある。前者は井戸埋没の過程で入れられたもので当初からの所産ではない。また、後者は底面壁際に少数の礫が配置されるもので、明瞭な石積とはいえないものである。従っ

て、検出された井戸のほとんどが素掘り井戸と捉えて大過ない。基本的な形状は円筒形を呈しているが、浅いので天水を溜める井戸、あるいは井戸でない遺構も含まれる可能性がある。厳密な区分ができなかったため、形状の類似から井戸の可能性のあるものは一括して扱うことにした。また、出土遺物には必ずしも恵まれていなかったが、少量ながらも中世の遺物を出土した例があることや、分布が館推定範囲内に納まることから概略は中世の所産と判断した。しかし、類似形態の土坑は古代にみられ、混入の可能性もあるが、近世焼物を僅かに出土した例もあるので、一部には中世以外の所産も含まれる可能性がある。さらに、出土遺物はないものの、近世・古代と判断されないために消極的に中世の可能性があった井戸も含まれている。なお、遺跡の変遷のなかでは館存続以前のものがやや不明瞭であるが、館存続時期内、館廃絶以後の井戸は確実に存在する。

これらの井戸埋土は砂を多く含む共通点があり、検出段階で一見して古墳時代の遺構との識別が容易である。色調は低地寄りほどマンガン等の影響を受けるためか暗褐色を呈するものが多く、微高地の高台ほど灰褐色を呈する傾向がある。一部に内耳鍋の大型破片が認められる以外は出土焼物はないか、あっても破片である。それ以外では少数ながら曲物・漆器碗・箸などの木製品が出土している。また、微高地西側の⑦-2区では廃絶後の凹地に鉄滓が廃棄されている井戸や、ほぼ1体分の犬骨が検出された例もある。井戸廃絶に関わって埋土上部に集石をもつ井戸が多数確認されたが、これについては後述する。これらの井戸の調査方法は、検出後に上部を精査し、深いと判断された場合は安全確保のため重機で断ち割って断面調査のみ実施した。従って、深い井戸の場合では埋土中の遺物が十分に採取されておらず、底面の状態も子細に観察できていない点は注意されたい。また、深いと判断されたものの、諸事情から断ち割り調査が実施できなかった井戸跡や、浅い場合でも底面の認定に不安を残す井戸がある。

なお、水田域においても井戸状の土坑が多数検出されており、微高地の井戸のなかにも同様のものが含まれていると考えられるが、水田域の土坑はブロック状の埋土を特徴とし、短期に人為的に埋められるもので、微高地の井戸とは基本的な使用方法が違っていると想定される。

#### **SK1001** ⑤-1区 IIEI08 (第265図、PL48)

平面形は直径93~101cmの円形を呈し、壁は垂直、底面はほぼ水平で検出面からの深さは66cmを測る。SD1003に切られる。埋土は褐色土の単層で、上面に一括廃棄されたと考えられる焼礫と内耳鍋の破片の集積が認められ、埋土中ではモモの種子が数点と鉄滓2点が出土した。出土遺物から中世の所産で、形状から井戸に類する施設と思われる。

#### **SK1002** ⑤-1区 IIEA09

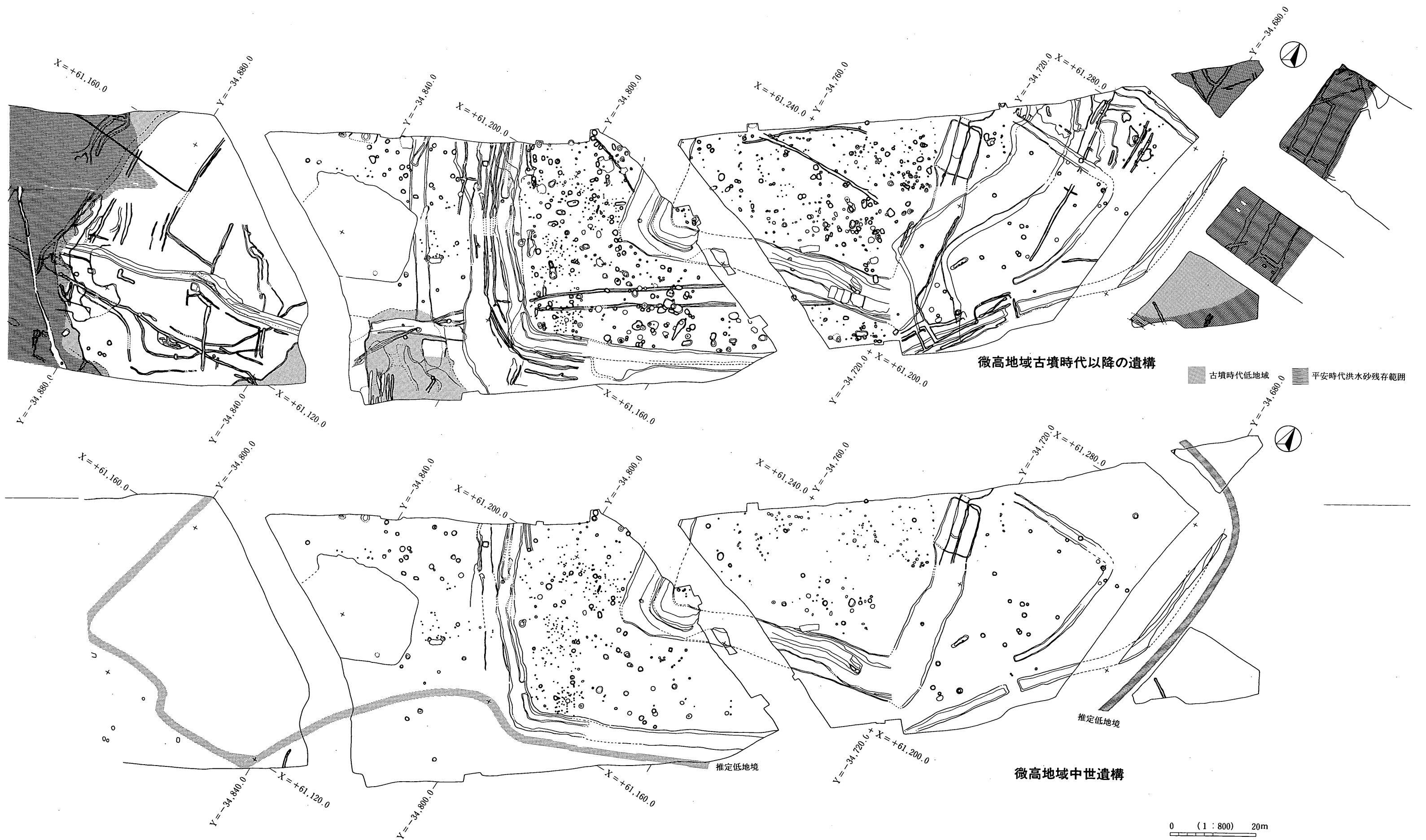
平面形は直径70~82cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直、底面は平坦で検出面から約50cmの深さを測る。埋土は灰白色シルトの単層で遺物は古墳時代の土師器小片と中世青磁1片が出土した。わずかながらの中世遺物の出土や、周囲の井戸との形態の類似から中世の井戸に類する施設と思われる。

#### **SK1003** ⑤-1区 IIEB10、EC10

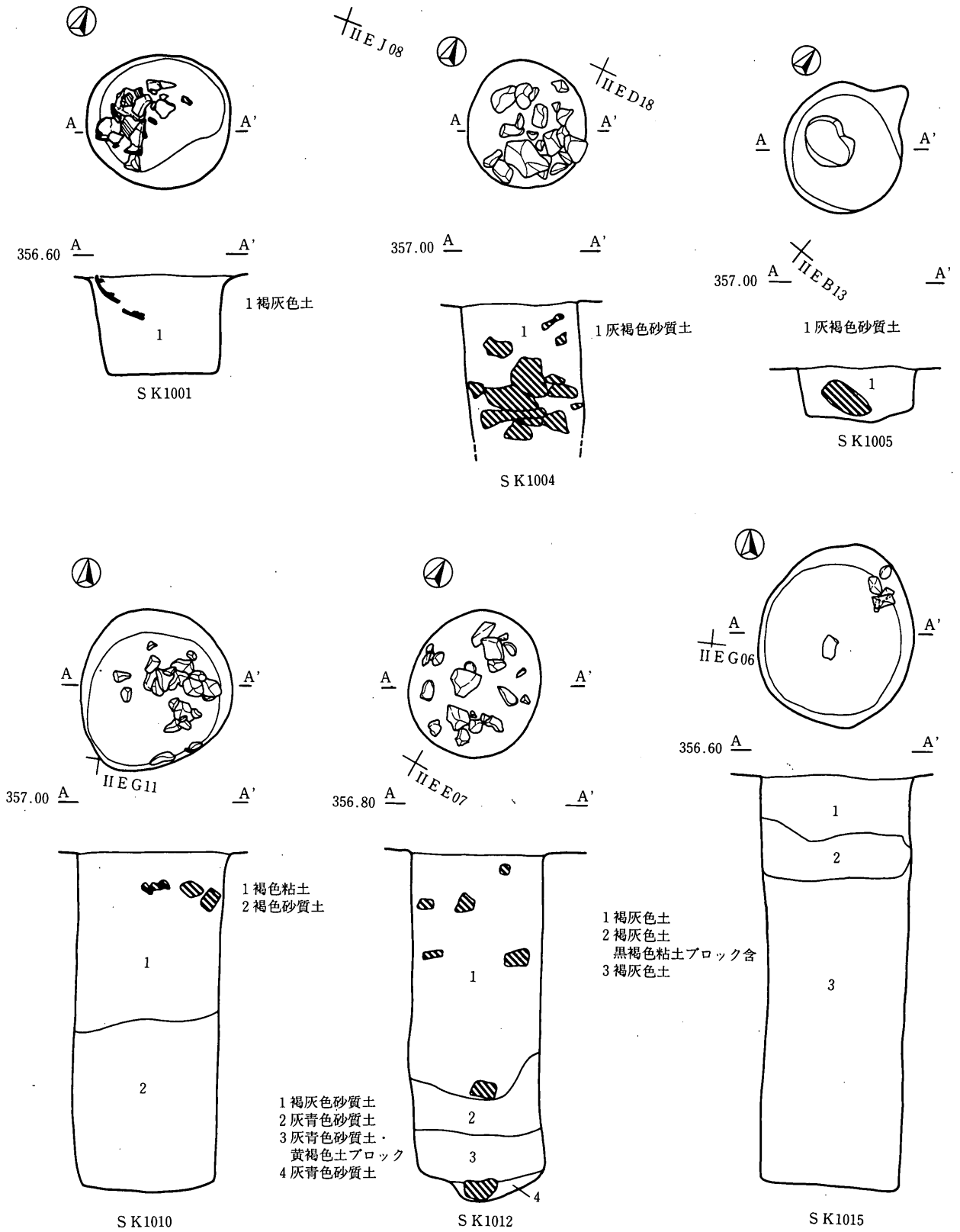
直径約120cmの円筒形の土坑で、深さは検出面から底面まで約50cm、壁はほぼ垂直に掘り込まれて底面は中央が若干窪む。埋土は全体に砂を含む土をベースとして下部に粘質土をはさみ、色調から数層に分層された。時期を特定できる遺物はないが、周囲の遺構との形状類似から、中世の井戸に類する施設と思われる。

#### **SK1004** ⑤-1区 IIEC10 (第265図、PL48)

直径86cmの円形の平面形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれる。検出面から約100cmまで記録があるが、底面標高の記録がないため深さは不明である。上部には多数の礫が密集して検出され、遺物は古墳時代の土師器片、古代の須恵器、灰釉陶器、中世の青花、古瀬戸天目茶碗、内耳鍋、カワラケが出土した。出土遺物



第264図 微高地域の古墳時代以降の遺構と中世の遺構全体図



0 (1:40) 1 m  
スクリーントーンは石断面

第265図 中世井戸 1

から中世末の16世紀後半以後の所産で、形状から井戸に類する施設と考えられる。

**S K 1005** ⑤-1区 IIEA12 (第265図)

直径80cmの円形の平面形で、深さ38cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は中央が若干窪む。埋土は砂を多く含む褐色土の単層で、中央下層に大きな自然石が1つ入っていた。遺物はない。周囲の中世井戸状遺構と形状や埋土が類似するが、やや浅すぎるので井戸とは断定できなかった。

**S K 1006** ⑤-1区 IIEC11・12

直径80cmの円形の平面形で、深さ50cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は砂を多く含む褐色土の単層でS K 1005と類似する。遺物は全く検出されなかったが、周囲の類似遺構と同様に中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 1007** ⑤-1区 IIEC11、ED11

平面形は114cmを測る不整円形で、深さは74cmを測る。壁はほぼ垂直、底面は平坦である。埋土は砂を多く含む灰褐色土で、出土遺物はない。周囲の類似遺構同様に中世の井戸に類する施設と考えられる。

**S K 1008** ⑤-1区 IIED12・13

直径92～104cmの円形の平面形で、壁は垂直で深さ62cmを測り、底面は平坦である。埋土は砂質の灰褐色土の単層で、出土遺物はない。周囲の類似遺構同様に中世以後の井戸に類する遺構と考えられる。

**S K 1009** ⑤-1区 IIED10

直径52cmの円形の平面形を呈し、壁は垂直で底面は東側がやや低い。検出面から底面までは26cmの深さを測る。埋土は砂質褐色土の単層である。遺物は土師器小片が少量得られたのみである。時期は埋土から中世と思われるが、平面形は周囲の井戸状遺構に類似するものの、浅すぎるため詳細不明である。

**S K 1010** ⑤-1区 IIEF10、EG10 (第265図)

平面形は直径104～112cmの円形で、壁はほぼ垂直で検出面から底面の深さ234cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は上層の褐色粘土層と下層の褐色砂質土に分層され、上層上部には同一レベルで礫が多数集中して検出された。切り合いも出土遺物もないが、埋土から中世の所産で、形状から素掘りの井戸と思われる。

**S K 1011** ⑤-1区 IIEH11、EI11

平面形は直径73～90cmの円形で、壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。検出面から底面は深さ42cmを測る。埋土は暗褐色のブロックを多く含む灰白色シルトで、廃棄の際に人為的に埋められている。出土遺物は古墳時代の土師器、古代の須恵器片、中世の古瀬戸平碗がある。出土遺物から中世と考えられ、形状からは井戸に類する施設と考えられる。

**S K 1012** ⑤-1区 IIED06、EE06 (第265図、PL48)

平面形は直径90～100cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面は中央東よりが一段窪む。検出面から底面の深さ約220cmを測る。埋土は上部に厚い褐灰色の砂質土、下部には還元したやや粘性の強い灰青色砂質土、黄褐色土ブロックを含む灰青砂質土があり、底面の窪みに粘性の強い灰青色砂質土が入る。上部の褐灰色土中ではややレベル差をもちながらも礫の集中が検出され、廃棄に伴って投げ込まれたと考えられる。古墳時代の土師器、中世のカワラケ、在地産須恵質すり鉢、青磁碗が出土している。出土遺物から中世と考えられる素掘りの井戸である。

**S K 1014** ⑤-1区 IIDS08・09

平面形は長軸110cm、短軸90cmの楕円形を呈し、壁はやや斜めで、検出面から底面の深さ50cmを測る。底面は平坦である。埋土は灰褐色の砂質土の単層で、弥生土器片、古墳時代土師器、中世のカワラケや古瀬戸平碗片が出土した。埋土と出土遺物から中世と考えられ、形状から井戸に類する施設と考えられる。



**S K 1015** ⑤-1区 IIDG05・06 (第265図)

平面形は直径107～124cmの円形で、壁は垂直、底面は平坦な円筒状となる。検出面から底面の深さ283cmを測る。埋土は上部に褐灰色土層、その下に黒色粘土ブロックを含む褐灰色土層があり、下部には厚く粘性を帯びる褐灰色土層が堆積する。また、検出面近くでは少数の小礫の集中があり、黒色粘土ブロック混りの褐灰色土層でモモ、クルミ種子がまとまって出土している。褐灰色土の堆積の後、種子類が入れられた後に人為的に埋められている可能性が考えられる。古墳時代の土師器片、中世の内耳鍋・カワラケが出土し、中世の素掘り井戸と考えられる。

**S K 1016** ⑤-1区 IIEF06

直径82～85cmの円形の平面形で、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは87cmを測る。埋土は褐灰色土層の単層である。遺物は上部で鉄滓が2点検出された他には、古墳時代土師器片、中世のカワラケ、在地産須恵質すり鉢が出土している。中世の素掘りの井戸と考えられる。

**S K 1017** ⑤-1区 IIDQ09・10 (第266図、PL48)

⑤-1区の調査区北壁にかかって検出され、東側上部は排水を兼ねるトレンチで掘りこわした。本井戸跡がS K 1036を切っている。調査域内で確認される平面形は160～200cm以上の円形を呈し、壁は斜めで底面が平坦な深さ80cmのすり鉢状の断面形を呈する。埋土は上部の褐灰色土と下部の粘土質の灰白色シルトに分層され、下層に焼礫主体の礫集中が検出された。遺物は弥生、古墳時代の土器片の他、古代の須恵器杯片、中世の在地産須恵質すり鉢片、曲物板、漆器椀などが出土している。出土遺物から中世の所産と思われる、規模から井戸に類する施設とも思われる。他の井戸とは形状がやや異なる。

**S K 1020** ⑤-1区 IIEJ09・10 (第266図、PL48)

埋土中位に木枠をもつ井戸である。S D 1003に切られる。平面形は直径108～118cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直で検出面から底面の深さ186cmを測り、底面は平坦である。埋土は下部に厚い褐灰色の粘質土が堆積し、その上に斜めになった木組の井戸枠と平石が入れられていた。木組の内部には粘性の強い褐灰色土、炭層、褐灰色層が順に堆積しており、最上部の褐灰色土中に焼礫を含む礫集中が認められた。本来は素掘りの井戸として構築されたが、一定の埋没が進んだところで木組をいれて補強し、さらに井戸の使用終了前後に炭層が入り、最終的に礫を入れて廃棄されたと考えられる。下層から種子や植物遺体、木枠内の下層で人歯などが出土している。形状や埋土から中世の井戸と思われる。

**S K 1024** ⑤-1区 IIEO01・02

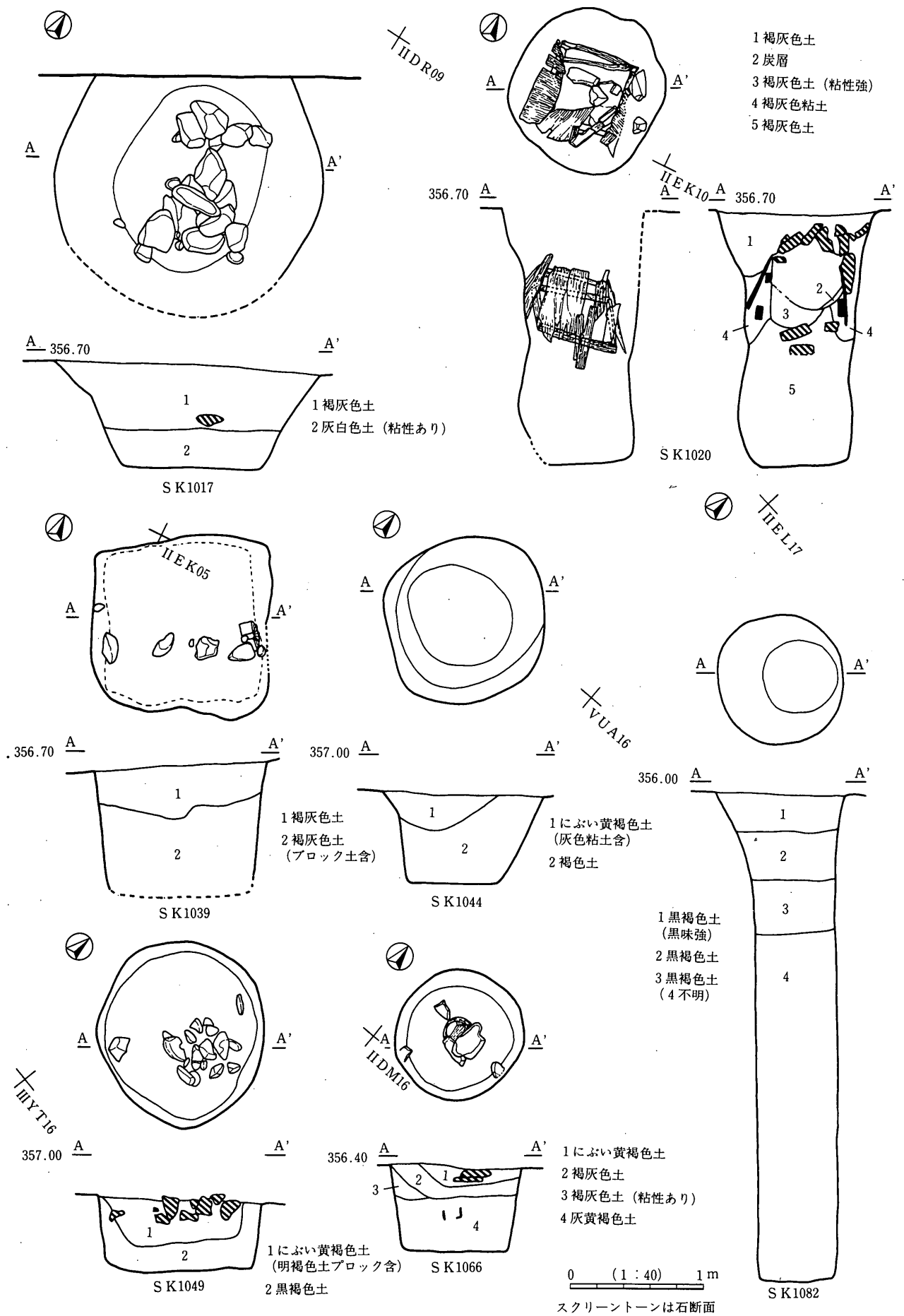
平面形は直径88～92cmの円形で、壁は垂直、検出面から底面の深さ28cmを測る。底面は平坦である。古墳時代のS K 1025を切る。埋土は暗褐色土の単層で灰褐色土ブロックを含み、全体に炭粒や焼土粒が散在する。遺物は古墳時代の土器を少量出土したのみである。形状から中世の可能性を考えたが、埋土が周囲の類似遺構とやや異なり、やや問題が残る。井戸に類する施設とみられるが、やや浅すぎる。

**S K 1026** ⑤-1区 IIES07

平面形は直径108～115cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で、検出面からの深さ114cmを測る。埋土は褐灰色粘土の単層で上部のほうやや砂質が強い。遺物は出土していないが、形状と埋土の類似から中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 1029** ⑤-1区 IIEH08、EI08

平面形は直径106cmの円形を呈する。壁は垂直、深さは80cmで底面は平坦である。埋土は中位の砂層を挟み、上・下に灰色砂を含む粘土層の3層に分層したが、全体的に粘土ブロックが散在して人為的な埋土と捉えられ、中層の砂層もそうしたブロックの一つであるとも思われる。下部には炭化物の付着した礫が含まれていた。出土遺物はモモ核のみがある。形状から中世の井戸に類する施設と思われる。



第266図 中世井戸 2

**S K1030** ⑤-1区 IIEO03、EP03

平面形は直径60cm～80cmのやや楕円ぎみの円形で、壁は垂直、底面は平坦で全体的に円筒状となる。検出面からの深さ約40cmと浅いが、上部は現代の攪乱で削平されているので本来はもっと深いとみられる。S D1009を本跡が切る。埋土は炭化物を含む灰色粘土層の単層で底面近くで礫4つが集中していた。遺物はないが、S D1009を切ることから中世以後の所産で、性格は井戸に類する施設と考えられる。

**S K1038** ⑤-1区 IIEA11、EB11

平面形は直径60cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦な円筒形の土坑である。検出面から底面の深さは70cmを測る。埋土はやや粘性のある灰色土の単層である。遺物は古墳時代の土器片、中世の内耳鍋片が出土している。出土遺物から中世の所産で、形状から井戸に類する遺構と考えられる。

**S K1039** ⑤-1区 IIEJ05、EK04・05 (第266図)

S D1016上面で検出して精査したが、S D1016精査時に重複位置で石臼が出土したことから底面を掘り残していたことが判明して追加調査した。平面形は1辺130～132cmの方形で、壁は垂直である。底面は確定できていないが、石臼出土標高がほぼ底面にあたると推測され、検出面からの深さは約90cmを測る。本井戸跡がS D1016・1011を切る。下部に灰黄褐色土ブロックを多量に含む人為的埋土と思われる褐灰色土が厚く堆積し、上部に褐灰色土が入る。なお、底面近くにあたると思われる石臼周囲には類似レベルで礫が散在していた。遺物は古墳時代土器片、中世の内耳鍋片、石臼が出土している。遺物から中世の所産と考えられ、その性格は井戸に類する施設と考えられる。平面形が方形で、本遺跡内の井戸跡のなかでは特異な存在である。

**S K1040** ⑤-1区 IIEO07・08

この土坑番号は当初S D1008底面の細い溝を土坑と誤認した部分に付けられていたが、後に近接して検出された本土坑跡へ振り直した。古墳時代大溝S D1016埋土中でその存在が判明し、形状および埋土から中世の井戸と判断した。平面形は直径80cmの円形を呈し、深さは記録がなく詳細不明である。埋土は砂質の灰褐色土の単層で、出土遺物はない。本土坑跡の位置はS D1008内に当たるが、S D1008調査時には存在は確認されていなかった。そのため、S D1008に切られる可能性が高いが、一方では見逃した可能性も否定しきれない。

**S K1044** ⑤-1区 IIIYT15・16 (第266図)

⑤-1区北東部の調査壁にかかって検出され、後に周囲を拡張して精査した。平面形は直径126～132cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれて底面は平坦である。深さは検出面から底面まで68cmを測る。本跡がS D2002を切る。埋土は下部に厚い褐色土、上層にふい黄褐色土がレンズ状に堆積する。遺物は弥生土器・古墳時代土器片と内耳鍋片が出土した。中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K1045** ⑤-1区 IIEP04

上部が現代の攪乱で削平されている。平面は直径44～48cmの円形を呈し、壁は垂直、底面はやや中央がくぼむものの、平坦で全体的な形状は円筒形となる。検出面から底面までの深さ38cmを測る。位置的にS D1009・1013・1014と重複する可能性はあるが、攪乱で削平されており、切り合いは不明である。埋土は粘土ブロック少量含む褐灰色土の単層で出土遺物はない。浅すぎるが、埋土は周囲の中世井戸と類似する。

**S K1047** ⑤-1区 IIET03

平面は直径73cmの円形で、壁はほぼ垂直、底面は平坦である。検出面からの深さ94cmを測るが、上面を少し深めに掘削しているため、本来はもっと深いと思われる。埋土は底部脇の粘性の強い褐灰色土層とその上部に厚い灰黄褐色土層に分層された。出土遺物はない。埋土や形状から中世以後の井戸に類する施設と考えられる。

**S K 1049** ⑤-1区 IIIYS15、YT15 (第266図)

⑤-1区北端の止水用矢板にかかって検出した。平面形は直径130~140cmの円形を呈し、壁は垂直、底面が平坦な円筒形の土坑である。検出面からの深さは54cmを測る。埋土は上部のレンズ状に入る明黄褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土層と下部の明黄褐色土ブロックをわずかに含む黒褐色砂質土層に分層された。上層には多数の礫が混在し、人為的な埋め戻しの際に入れられた可能性が認められた。礫集中内より石臼、内耳鍋が出土した他、弥生土器・古墳時代土器片が出土している。出土遺物より中世の井戸に類する施設と考えられる。

**S K 1065** ⑤-1区 IIDT09・10

⑤-1区の見逃し遺構確認のための下層ダメ押し面で検出。平面形は直径72cm前後の円形で、壁は垂直、底面は平坦である。検出面からの深さは104cmを測る。埋土は上から灰黄褐色土、黒褐色土ブロックを含む灰黄褐色土、同ブロックをわずかに含む灰黄褐色土に分層された。最下層の堆積後に人為的に埋められ、さらにその凹地に灰黄褐色土が堆積したと推定される。下層からは礫が2点検出された。遺物はない。埋土と形状より中世の井戸と思われる。

**S K 1066** ⑤-1区 IIDM15・16 (第266図、PL48)

⑤-1区の見逃し遺構確認のためのダメ押しで検出された。平面形は直径92cmを測る円形で、壁は垂直、底面は平坦な円筒形を呈する。検出面から底面の深さは64cmを測るが、本来の検出面より下がっているの、本来はもっと深いと思われる。埋土は上部に礫を若干含むにぶい黄褐色土層、褐灰色粘質土層、にぶい黄褐色粘質土層、中位以下が灰黄褐色土層に分層された。上部礫は近似レベルで集中するので人為的に投げ込まれたと考えられる。遺物は下層中に正位で出土した曲物と土器小片がある。埋土と形状、曲物の出土より中世の井戸に類する施設と考えられる。

**S K 1082** ⑦-2区 IIEL17 (第266図)

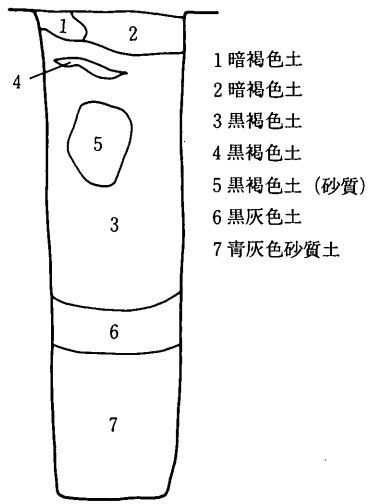
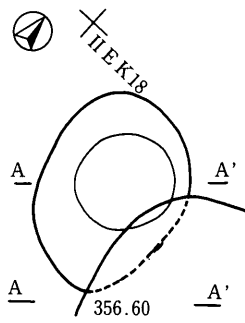
上部1mまで精査し、最後に重機で断ち割って底面レベルと断面写真撮影のみ行なった。平面形は直径94~100cmの円形で、壁は上部がやや開くもののほぼ垂直で、底面は平坦である。検出面から底面の深さ362cmを測る。埋土は上部1mまでしか観察できなかったが、色調のやや異なる黒褐色土の3層に分層された。出土遺物は古墳時代の土器片がわずかに出土したのみである。本跡は形状から素掘りの井戸と考えられ、近接遺構との形態や埋土の比較から中世の所産と推定される。

**S K 1083** ⑦-2区 IIEK18 (第267図)

上部1mまで精査し、最後に重機で断ち割って断面の観察と遺物採取を行なった。上部東側を現代の攪乱で破壊されている。S T 1001とは直接切りあわないが、位置的に同時存在はありえない。平面形は直径94cmを測る円形で、壁はほぼ垂直、底面は平坦で検出面からは深さ257cmを測る。埋土は上部の暗褐色土層、中位の大部分が黒褐色土層、中位下の黒灰色のしまりの悪いシルト層、下部の青灰色砂質土層に大別される。遺物は上部の暗褐色土、中位の黒褐色土の上部から少量の鉄滓が検出された他、木製品がある。近接する井戸跡との形状や埋土の類似、出土した木製品などから中世の素掘り井戸と思われる。

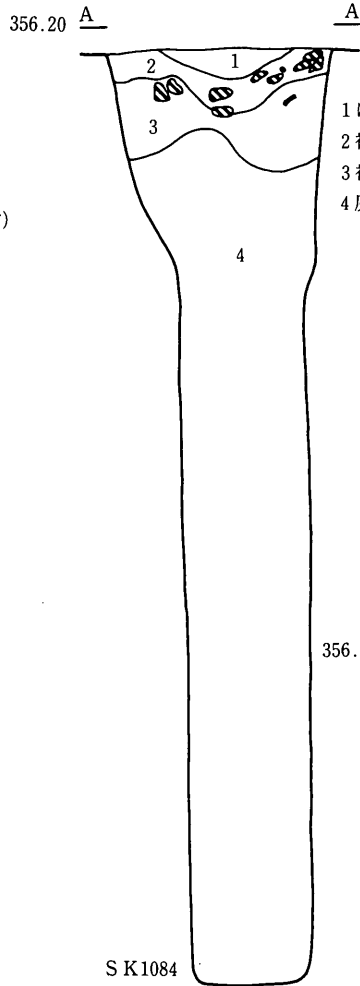
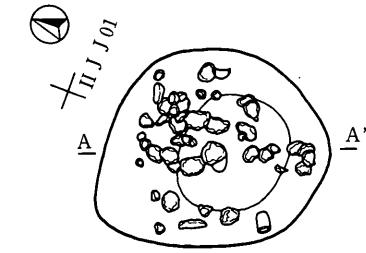
**S K 1084** ⑦-2区 IIJI01、JJ01 (第267図、PL49)

上部1mを精査して最後に重機で半割したが、その作業中に埋土が崩落し、底面レベルのみしか記録が取れなかった。平面形は直径104~120cmの円形で、壁は上部がやや斜めでほぼ垂直に掘り込まれる。底面は平坦で、検出面からの深さは488cmを測る。埋土は上部のみ観察でき、上から炭粒・小鉄滓粒をわずかに含む灰黄褐色土層、炭粒・小鉄滓粒を大量に含む褐灰色土層、大量の拳大鉄滓を含む褐灰色土層、褐灰色砂質土層に分層された。遺物は上部3層までに大量の鉄滓と羽口、4層以下で箸や漆器碗などの木製品が出土した。土器は古墳、古代の土器と中世の青磁・在地産須恵質すり鉢・珠洲・すり鉢片がある。中世の



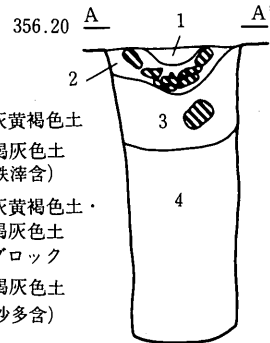
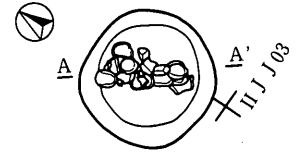
- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黒褐色土 (砂質)
- 6 黒灰色土
- 7 青灰色砂質土

SK1083



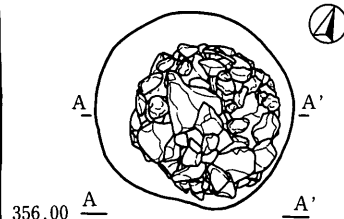
- 1 にぶい黄橙色
- 2 褐灰色土 (鉄滓含)
- 3 褐灰色土 (鉄滓含)
- 4 灰色粘土 (砂多含)

SK1084



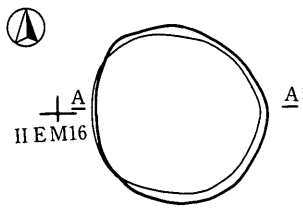
- 1 灰黄褐色土
- 2 褐灰色土 (鉄滓含)
- 3 灰黄褐色土・褐灰色土 (鉄滓含) ブロック
- 4 褐灰色土 (砂多含)

SK1085

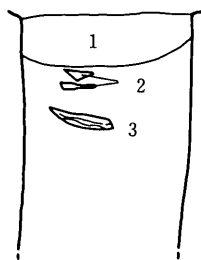


356.00

HJJH03

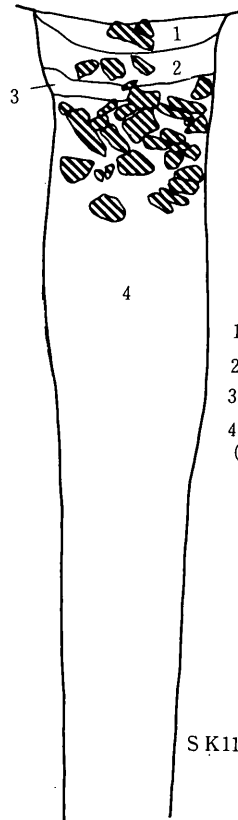


356.50



SK1088

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 (ブロック土)
- 3 黒色土



- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒色土
- 4 灰褐色土 (上部砂質・下部粘性強)

SK1144

0 (1:40) 1 m  
スクリーントーンは石断面

第267図 中世井戸3

素掘り井戸として構築・使用されたが、廃絶後の窪みに鍛冶関連遺物が廃棄されたと考えられる。

**SK1085** ⑦-2区 IIJI02、JJ02 (第267図、PL49)

上部80cm位まで精査し、重機で半割して断面の記録を取った。平面形は直径70cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは174cmを測る。埋土は上から灰黄褐色土層、大量の鉄滓を含む褐灰色土層、黄褐色土と褐灰色ブロック混成層、褐灰色砂質土層に分層された。2層目から大量に鉄滓が出土した。中世の素掘り井戸であったが、人為的に埋められて廃絶した後に、窪みへ鍛冶関連遺物が廃棄されたと考えられる。

**SK1087** ⑦-2区 IIJN01

平面形は直径約64cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれる。上面から50cmまでしか精査しておらず、底面は未確認である。埋土は黄褐色土ブロックを多く含む褐灰色土で、ブロック土を顕著に含む点では低地域で検出された土坑に類似している。微高地域で検出された井戸とは別の可能性もある。

**SK1088** ⑦-2区 IIEM14・15 (第267図、PL49)

平面形は直径90~94cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面から深さ106cm以上であるが、底面標高の記録がなく不明である。埋土は上層の黒褐色土層、下層の黒色土層に分層され、下層上部には黒褐色土が縞状に含まれる。遺物は内耳鍋と下層から出土した犬骨、板などの木製品がある。犬の骨は比較的まとまって出土したが、1体分全部はない。出土遺物と形態から中世の素掘り井戸と考えられるが、井戸廃絶に際して犬が埋葬あるいは骨が集中的に廃棄されたとみられる。

**SK1144** ⑦-2区 IIJF02・03 (第267図、PL50)

⑦-2区の西部SG1001下面で検出した。上部約1mを精査し、残りは重機で半割したが、検出面から4m以下は多量の湧水にみまわれて調査不能となった。平面形は直径106cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直で検出面から約4mまで確認した。埋土は上部1mまで観察し、上部には粗砂を含む黒褐色土層があり、それ以下は粘土混じりの黒褐色土層、炭を多量に含む黒色土層、礫を大量に含む褐灰色土層に分層された。この内、1・2層にも礫が少量入るが、4層上部に鉄滓と礫が隙間なく詰め込まれており、4層が井戸廃棄時の土層と考えられる。4層の堆積以後は炭の廃棄、2層の堆積があり、上部層は近代の池の影響を受けた土層と考えられる。遺物は礫集中の間から出土した鉄滓、羽口、他に古墳時代の土器などがある。鉄滓は比較的大形のみが認められるので、SK1084・1085のように鍛冶関連遺物が直接廃棄されたというより、周囲にあった鉄滓を礫と同様に扱って入れたものと思われる。従って、直接鉄滓廃棄が見られるSK1084・1085・1086に後出する中世井戸とみられる。

**SK1145** ⑦-2区 IIJR10、JS10

⑦-2区の南西部低地付近に位置する。低地部の古墳面調査の際に検出したが、上層で見逃したものと思われる。SD1057を切る。直径90cmの円形の平面形を呈し、壁は垂直に掘り込まれる。底面は平坦で検出面から底面の深さ約60cmを測り、全体的に円筒形を呈する。埋土は黒褐色を基調として、上層の砂を含む層、その下の黒味の強い同質土層、白色の粘土を含む土層、黒褐色粘土層に分層された。出土遺物はない。形状から井戸に類する施設と思われるが、低地に立地する点では他の井戸状遺構と異なる。

**SK1146** ⑦-2区 IIJN06

⑦-2区の南西部の低地際に位置する。低地部の古墳時代面調査の際に検出したが、上層の見逃しと思われる。SD1059を切り、上面はSD1019に切られる。直径120cmのやや楕円形に近い円形を呈し、全体の形はやや上部が開く筒形となる。底面は平坦で検出面から底面の深さは約132cmを測る。埋土は大きく上層の黒褐色土、中位上部のブロック土を含む土層、それ以下は砂を多く含む土を基調として色調の違いから数枚に分層できた。出土遺物はない。形状から井戸に類する施設と思われる。

**S K 1147** ⑦-2区 IIJM07

S K 1146に近接して位置する。検出状況はS K 1146に同じである。直径100cmの円形の平面形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は水平で全体的に筒形となる。検出面から底面の深さは116cmを測る。埋土は砂を含む黒褐色の土質を基調として、色調の違いから数枚の土層に分層された。出土遺物はない。形状から井戸に類する施設と推測される。

**S K 2001** ⑤-1区 IVAA02・03 (第268図、PL50)

平面形は直径96～104cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面から底面の深さは155cmを測る。埋土は粘性の強い灰褐色砂質土の単層で埋土中位に礫の集中が見られた。遺物は古墳・平安時代の土器片が少量出土したのみである。素掘り井戸で、詳細な時期は断定できないものの、埋土と形状の類似から中世の可能性がある。

**S K 2002** ⑤-1区 IVAC01

平面形は直径120～130cmの円形で、壁は垂直、底面は平坦な円筒形の土坑である。検出面から底面の深さは94cmを測る。埋土は炭粒を含む灰褐色砂質土の単層で、中位に拳大の礫集中が検出された。遺物は弥生・古墳・平安時代の土器片と鉄滓1点がある。鉄滓は中世の所産の可能性が高く、中世の井戸に類する施設と考えられる。

**S K 2007** ⑤-1区 IVAB02

平面形は直径74～84cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは64cmを測る。埋土は上部に若干の炭粒を含む粘性の強い土、中位以下は灰色を基調とする砂質土が堆積し、下位は酸化鉄・マンガン集積で分層された。遺物は古墳時代の土器片があるが、混入と思われる。埋土と形状から中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2008** ⑤-1区 VUC15 (第268図、PL50)

平面形は直径120～123cmの円形を呈し、壁はやや斜めで、底面は平坦である。検出面からの深さ126cmを測る。埋土は上部のしまりのある褐灰色土層、しまりのない褐灰色土層に分層された。遺物は白磁と内耳鍋片が出土した。出土遺物と埋土、遺構の形状から中世の素掘り井戸と判断される。

**S K 2009** ⑤-1区 IVAD01

平面形は直径62～64cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で深さは50cmを測る。埋土は青灰褐色砂質土の単層で上部に礫集中がみられた。遺物は古墳時代の土器片と中世のカワラケが出土している。埋土・遺物・形状から中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2011** ⑤-1区 VUA17

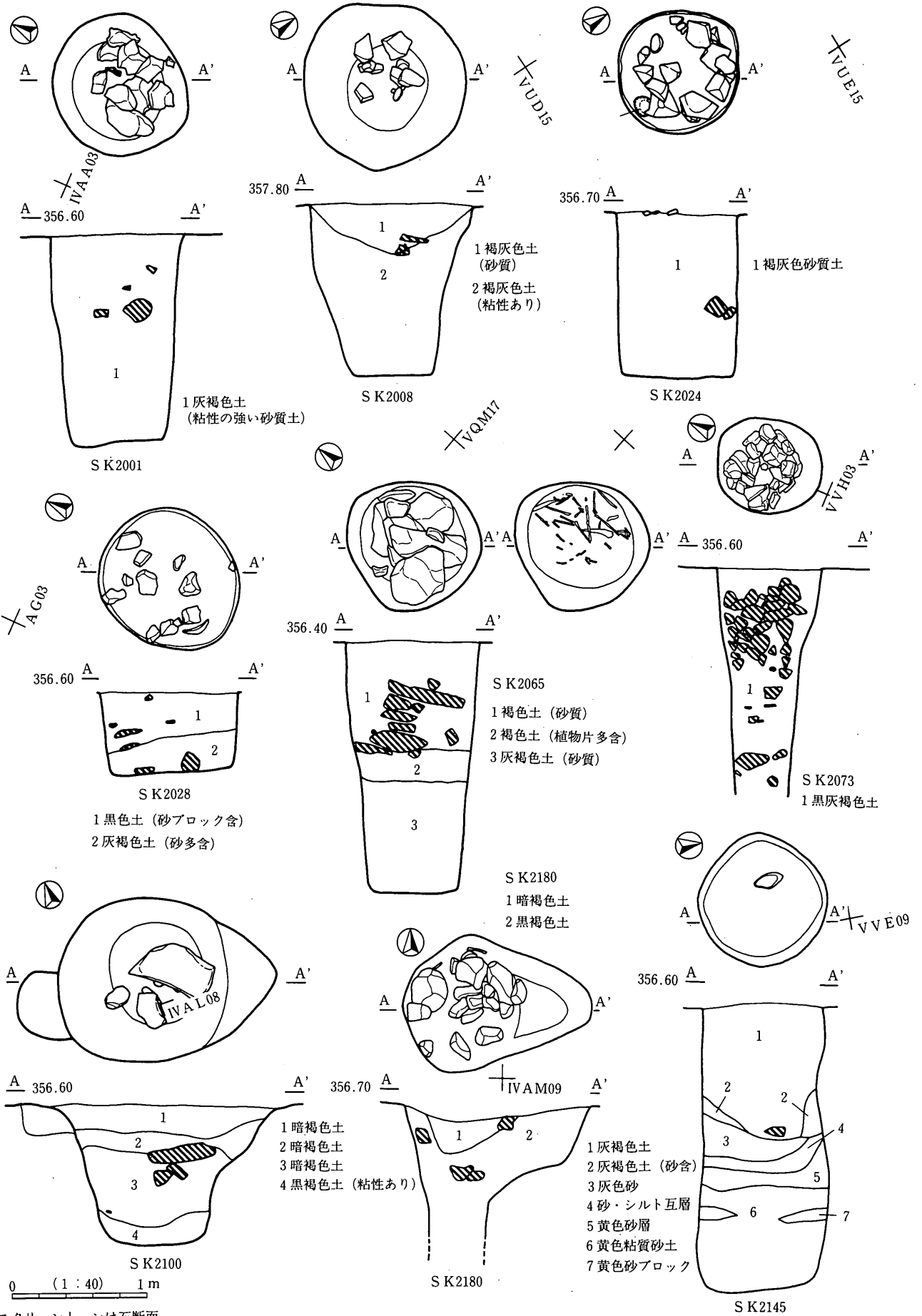
平面形は直径70cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面から深さ80cmを測る。埋土は褐灰色土を基調として下層は粘性が強い。遺物はないが、埋土や形状から中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2012** ⑤-1区 IVAF02・03

平面形は直径94cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さ58cmを測る。埋土は砂ブロックを含む灰褐色土の単層で人為的に埋められたと考えられる。この砂ブロックの起源は不明である。遺物は古墳・古代の土器と中世の内耳鍋、カワラケが出土している。出土遺物から中世の所産と考えられ、形状から井戸に類する施設と思われる。

**S K 2021** ⑤-1区 IVAC01・02

平面形は直径56cmの円形を呈し、壁は垂直で、底面が平坦な円筒形の土坑である。検出面からの深さは80cmを測る。埋土は黒色粘土のブロックを含む灰色砂質土の単層で、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は古墳・古代の黒色土器A杯Aと灰釉陶器碗の小片が出土している。遺物からは古代の所産の可能性



第268図 中世井戸4



もあるが、周囲に中世の類似形態の土坑が分布する点と埋土から中世と判断した。井戸に類する施設と思われる。

**S K 2022** ⑤-1区 VUD18・19

平面形は直径98cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。検出面からの深さは110cmを測り、全体の形は円筒形となる。本土坑が古墳時代のS K 2047を切る。埋土は上部の黒褐色粘性土層、中位の薄い砂層、下部の灰褐色の砂を含む土層の3層に分層された。上層の下部には礫が集中しており、合わせて木や焼土塊も検出された。出土遺物は古墳時代の土師器、平安時代の土師器碗、近世のすり鉢、砥石がある。近世のすり鉢の出土から近世の所産とも考えたが、形状や埋土は周囲の中世の井戸に類する施設と同様であることや、他の土坑では近世焼物が顕著でないため、すり鉢は混入と考えた。

**S K 2024** ⑤-1区 VUD15 (第268図)

平面形は直径90cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦な円筒形の土坑である。深さは検出面から120cmを測る。埋土は暗褐色砂質土の単層で、上部と底面近くに礫の集中が検出された。遺物は古墳時代の土器片、中世内耳鍋片、底面近くで曲物が出土した。中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2028** ⑤-1区 IVAG03 (第268図)

平面形は直径104cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦な円筒形の土坑である。検出面からの深さは60cmを測る。埋土は上部の砂ブロックを含む粘性の強い黒色土層、下部の灰褐色砂質土層に分層され、上層ではこぶし大の礫が多く混入している。遺物はない。形状から中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2029** ⑤-1区 IVAG01

平面形は直径76～78cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦な円筒形の土坑である。検出面からの深さは100cmを測る。埋土は灰青色砂質土層を基調として、底面近くに薄い炭層を1枚はさむ。遺物は古墳時代土器・古代の須恵器杯・中世の内耳鍋片が出土した。中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2036** ⑤-2区 VRI09・10

平面形は直径80～86cmの円形を呈し、壁は垂直である。底面は平坦で、検出面からの深さ38cmを測る。浅い円筒形の土坑である。埋土は褐色の砂質土層である。遺物は中世のカワラケと古墳時代の土器少量が得られた。遺物と遺構の形状から中世以後の井戸に類する施設と思われるが、やや浅すぎる点で断定には躊躇される。S K 2037とは関連する可能性がある。

**S K 2037** ⑤-2区 VRJ08・09

平面形は直径100～110cmを測る円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは70cmを測る。浅い円筒形の土坑である。本土坑跡がS D 2007を切る。埋土は底面上の黒褐色ブロックをわずかに含む灰黄褐色土、中位の灰黄褐色粘質土、上部の灰黄褐色砂質土の3つに分層された。出土遺物は小破片の古墳時代土器と中世の内耳鍋がある。遺物から中世の所産で、形状からは井戸と思われる。また、S K 2036とは形状が類似し、位置的にも近接するので関連すると思われる。

**S K 2038** ⑤-2区 VRN03

平面形は直径130cm前後の円形を呈し、壁はやや斜めに掘り込まれる。底面は平坦で検出面からの深さは60cmを測る。本土坑跡がS Q 2016を切る。埋土はやや粘性のある灰褐色土の単層である。遺物は古墳時代の土器片と中世の内耳が出土している。遺物と遺構形状から中世の井戸に類する施設と考えられる。周囲では同様の遺構が点在しており、それらと関連すると思われる。

**S K 2040** ⑤-1区 IVAB06

平面形は直径93～100cmの円形を呈し、壁は垂直ながら一部オーバーハングしている。底面は平坦で、検出面からの深さは63cmを測る。埋土は褐黄灰色砂質土に白色シルト・暗褐色・褐灰色土がブロック状に

混入し、人為的埋め土と考えられるもので、底面には礫が2点検出された。遺物は少なく、古墳時代の土器と中世の内耳片がある。遺物から中世の所産と考えられ、性格は井戸に類する施設と考えられる。

**S K 2041** ⑤-1区 IVAA07

⑤-1と⑦-2調査地区境に位置し、半分ずつ別年度に調査したものである。平面形は直径76～84cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは71cmを測る。本土坑跡が古墳時代のS K 2039を切る。埋土は褐灰色土の単層で、中位から五輪塔の火輪部が出土した。他には古墳時代土器と中世の内耳鍋の小片がある。中世の井戸に類する施設と考えられる。

**S K 2055** ⑤-2区 VUL09・10

平面形は直径103～113cmの円形で、壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦で検出面から264cmを測る。埋土はオリーブ褐色土で、下部ほど還元状態の青灰色が強い。遺物は古墳時代の土器がわずかに採取されたのみであるが、埋土と形状から中世の素掘り井戸と考えられる。

**S K 2062** ⑤-2区 VRD11・RE11

平面形は直径80cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは54cmを測る。本土坑跡がS D 1016を切っている。埋土は褐色砂質土の単層で、遺物は古墳時代の土器片が少量ある。埋土と遺構の形状から中世以後の井戸に類する施設と思われ、同様な遺構が周囲にもある。

**S K 2065** ⑤-2区 VQL17 (第267図、PL50)

平面形は直径100cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直、底面は平坦である。底面の深さは検出面から184cmを測る。埋土は上部の褐色砂質土層、中位の植物遺体を多く含む層、下部の青褐灰色砂質土層の3層に分けられた。なお、上層下部では礫が集中的に検出された。埋土の状況から使用中に下層が堆積し、植物遺体が混入するようにはしばらく開口していたが、最終的に人為的に埋められたと考えられる。遺物は古墳時代と古代の土器が少量出土したが、形状と埋土から中世の素掘り井戸と考えられる。

**S K 2069** ⑤-2区 VQL17

平面形は直径100～104cmの円形を呈し、壁は垂直、底面が平坦な円筒形の土坑である。検出面からの深さは96cmを測る。埋土は黒褐色粘質土の単層である。遺物は古墳時代土器片が少量得られているのみである。埋土は他の中世遺構と異なるが、形状からは中世以後の所産の可能性があり、性格は井戸に類する施設と思われる。

**S K 2073** ⑤-2区 VVG02、VH02 (第268図、PL51)

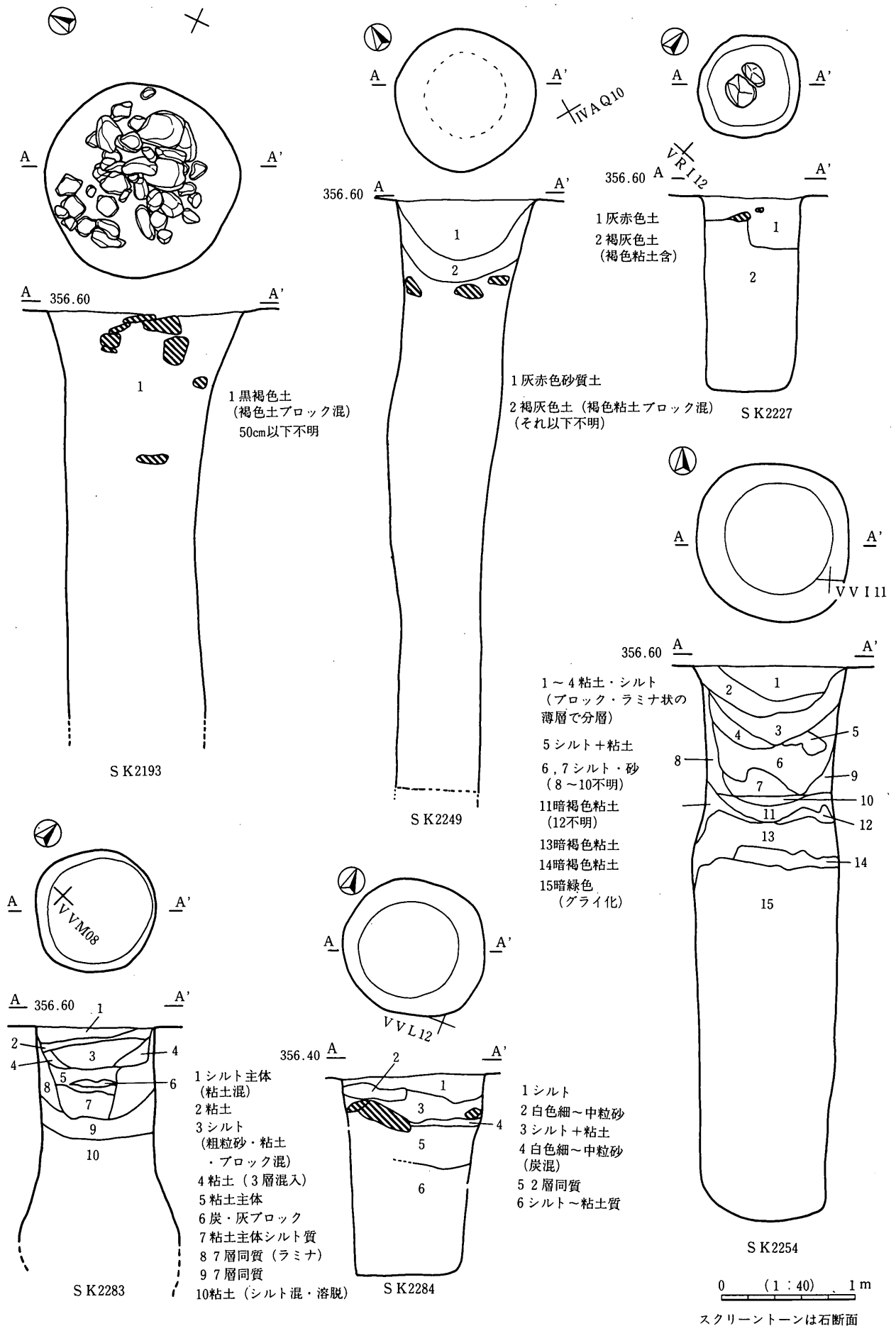
平面形は直径70～72cmの円形を呈し、壁はやや垂直である。検出面から深さ160cm以上は調査できなかったため底面の深さは不明である。埋土は下部ほど砂質が強い黒灰褐色土で、上部に人為的に投げ込まれたと考えられる礫集中が認められた。遺物は古墳・古代の土器が採取されたが、形状・埋土から中世の素掘り井戸と考えられる。

**S K 2100** ⑧-1区 IVAK07・08 (第268図)

平面形は直径120cmの円形東部に突出部をもつ楕円形を呈し、長軸162cmである。壁はやや斜めに掘り込まれ、底面は平坦で検出面からの深さは102cmを測る。本土坑跡がS K 2211を切る。埋土は上部の暗褐色シルト、上層より褐色味の強い中位の暗褐色土、底面近くの暗褐色粘土の3層に分層された。中位の暗褐色土層上部で平石を中心とした小規模な礫集中が認められた。遺物は古墳・古代・中世の土器が出土している。出土遺物から中世の井戸に類する施設と考えられる。

**S K 2145** ⑤-2区 VVD09・VE09 (第268図)

平面形は直径96～98cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面から底面の深さは216cmを測る。本跡がS K 2148を切る。埋土は上部に厚い灰褐色土、その下の壁際に若干の砂を含む灰褐色土、中位



第269図 中世井戸5

の灰色砂・砂とシルトの互層・黄色砂、下部に部分的な黄色砂ブロックを含む灰色粘質砂に分層された。遺物は古墳時代土器片と古代の須恵器壺片が採取された。中世遺物が検出されていないが、遺構の形状と埋土から中世の素掘り井戸と考えられる。

**S K 2180** ⑧-1区 IVAL08、AM08 (第268図)

平面形は長軸140cm、短軸100cmの楕円形を呈し、直径88~100cmの円筒状の落ち込み東側にテラスが付属する形状となる。上部70cmほど精査し、下面の調査は実施しなかった。埋土は上部のレンズ状に入る粘性の強い暗褐色土層、下部のしまりの弱い暗褐色土層に分層され、下層上部に礫集中が検出された。遺物は古墳時代土器、古代の須恵器甕・中世のカワラケ片が出土した。形状や出土遺物から中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2181** ⑧-1区 IVAI09、AJ09

平面形は直径110~130cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面から底面の深さは184cmを測る。調査は上面50cmまで手掘りで精査し、以下は重機で半割した。埋土は上部に黒褐色土層と黒味の強い黒褐色土層、中位以下の粘性の弱い暗褐色土層に分層され、暗褐色土上面で礫集中が検出された。遺物は古墳時代と古代の土器片が検出された。中世の遺物は検出されなかったが、埋土と形状から中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2193** ⑧-1区 IVAK12・13 (第269図、PL51)

平面形は直径140cmの円形を呈し、壁は上端がやや広がり、中位以下は垂直である。調査は上部50cmを手掘りで精査し、その後、重機で半割した。しかし、崩落の危険のため中断し、検出面から295cmまでの深さを確認した。埋土は所々に褐色土を含む黒褐色土1層を確認し、上部で礫集中を検出した。出土遺物は古墳・古代・中世の土器が出土した。形状と埋土から中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2200** ⑧-1区 IVAR08

平面形は直径120cmの円形を呈し、壁はやや斜めで底面は平坦である。検出面からの深さは80cmを測る。本跡がS K 2112、2187を切る。埋土は底面近くの壁際に凝灰岩の風化したと思われるにぶい黄褐色砂層と上部のしまりのない暗褐色土に分層された。なお、遺構中央の上・下層境部で風化凝灰岩の集中が検出された。古墳時代・古代の土器と中世の内耳鍋片が出土している。出土遺物と形状から中世の井戸に類する施設と推定される。

**S K 2227** ⑤-2区 VRH11、RI11 (第269図)

平面形は直径76~80cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面から底面の深さは142cmを測る。埋土は上部の灰褐色土層、中位以下の褐色粘土の混じる褐灰色土層に分層され、上層下部で比較的大きめの礫2点が検出されている。出土遺物はない。形状と埋土から中世の素掘り井戸と考えられる。

**S K 2249** ⑧-1区 IVAP09 (第269図、PL51)

平面形は直径104cmを測る円形を呈し、壁は垂直である。上面100cmまで手掘りで精査し、残りは重機で半割したが、検出面から430cmまでの深さで断念した。埋土は上部の暗褐色土・やや褐色味の強い暗褐色土、それ以下の粘性の強い暗褐色土、底面近くの粗砂に分層された。粘性の強い暗褐色土層上部で礫集中が確認され、合わせて植物遺体が検出された。古墳時代・古代の土器のほか、中世の内耳鍋、常滑甕、青磁碗が出土した。遺物と形状から中世の素掘り井戸と考えられる。

**S K 2252** ⑧-2区 VVG08

平面形は直径86cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面からの深さは85cmを測る。本跡がS K 2353を切る。埋土は上部の褐色砂質土層、中位の粘土とシルトを含む褐色砂質土層、底面近くのシルトブロックを含む粘土が溶脱した層に分層された。遺物は古墳時代土器が少量得られたのみである。中

世の遺物は採取されなかったが、形状と埋土から中世の井戸に類する施設と推定される。

**S K 2254** ⑧-2区 VVH10・11 (第269図、PL51)

平面形は直径120cmの円形を呈し、壁は全体的に垂直であるが、部分的にオーバーハングする。底面は平坦ながらやや窪み、検出面からの深さは390cmを測る。上面80cmを手掘りで精査し、残りは重機で半割した。埋土は上部の人為的な埋め土と考えられるブロック土を含む土、中位上部の礫を含む暗褐色土、その下に暗褐色の粘土、中位以下は暗緑色のシルト質の粘土に分層された。遺物は古墳時代土器片、古代の須恵器杯、灰釉陶器瓶があり、最下層からは曲物も出土している。中世の焼物は出土していないが、形状と埋土から中世の素掘り井戸と捉えた。

**S K 2283** ⑧-2区 VVL07・08 (第269図)

平面形は直径90cmの円形を呈し、壁は垂直である。底面は平坦で検出面からの深さ100cmを測る。上面から90cmを手掘りで精査し、残りを重機で半割したが、まもなく底面が検出された。埋土は上部で細かく分層され、最上部にシルト質土・粘土層、その下に粗砂と粘土ブロックの含み方によって分層される数枚の土層がある。中位上部には灰・炭のブロック層をはさんで粘質土層中位は粘性の強い土で占められ、下部の底面近くは溶脱された土層がある。古墳・古代土器片と中世のカワラケ、古瀬戸平碗、小皿が出土している。中世の井戸に類する施設と考えられる。

**S K 2284** ⑧-1区 VVK11、VL11 (第269図)

平面形は直径100～104cmの円形を呈し、壁は垂直である。底面は平坦で、検出面からの深さは150cmを測る。上面80cm程を手掘りで精査し、残りを重機で半割して底面を確認した。埋土は中位以上は白色(灰褐色?)細～中粒砂で占められ、含有物の違いで細分された。この内、中位上部にある炭を含む白色細～中粒砂の上面からは礫が数個検出された。その下部はシルト質粘土で占められる。弥生土器、古墳時代土器片が少量出土し、中世遺物は検出されていないが、形状と埋土から中世以後の井戸に類する施設と推定される。

**S K 2289** ⑧-1区 VVM08

平面形は直径100cmの円形を呈し、壁は垂直である。上面80cm程を手掘りで精査したが、それ以下は調査していない。埋土は粘土を含む細粒砂を基調として上部は粗砂粒の含まれかたで分層された。出土遺物は古墳時代土器片と中世の青磁碗がある。中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2305** ⑤-2区 VVF10・11 (第270図、PL51)

平面形は直径92～105cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直である。上部70cmを手掘りで精査し、中位以下を縄文面で追加調査したが、1面の検出面から170cmの深さまでしか確認できなかった。本井戸跡がS K 2357を切る。埋土は上部に礫を含むシルト質粘土、その下に礫を含まない同層、さらに礫と細粒砂ブロックを含む層に分層され、上部と中位で礫集中が確認された。遺物は縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代の土器と中世の内耳鍋、古瀬戸天目茶碗、漆碗が出土した。内耳鍋は大型破片で形態からほぼ館時代の所産と思われる。中世の素掘り井戸と捉えられる。

**S K 2316** ⑧-1区 IVAQ11・12 (第270図、PL51)

平面形は直径100cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直である。底面は平坦で検出面からの深さは240cmを測る。第1検出面で上部80cmまで手掘りで精査し、以下は重機で半割した。本土坑跡がS K 2415を切っている。埋土の上部が黒褐色・やや暗い黒褐色土・やや粘性のある黒褐色土、中位以下は黒褐色粘土質土に分層され、上部に礫集中がある。その下で曲物が出土した。遺物は古墳・古代の土器と中世の内耳鍋片が出土した。中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2319** ⑧-1区 IVAF05、AG05

平面形は長軸100cm、短軸85cmの楕円形を呈する。確認できたところでは壁はやや斜めである。上面約80cm以下は調査しておらず、底面は確認していない。埋土は暗褐色土である。遺物は古墳時代の土師器片、古代の須恵器壺、白磁片が出土した。中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2321** ⑧-1区 IVAE05・06

平面形は長軸114cm、短軸85cmの楕円形を呈し、壁は確認された範囲ではほぼ垂直である。上部30cmほど調査し、それ以下は未調査である。埋土は褐灰色土ブロックを含む灰褐色土であり、人為的に埋められている可能性がある。上面では小規模ながら礫集中が確認された。遺物は古墳・古代の土器と中世の常滑甕が出土している。中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2329** ⑧-1区 IVAI05・06

平面形は直径112～118cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。検出面からの深さは84cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で、埋土上部で数個の礫が出土した。出土遺物は古墳・古代土器と中世の内耳鍋小片がある。中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2349** ⑧-2区 VVI09・10

調査は上部精査後に縄文面で底面を確認するつもりであったが、底面は縄文面まで達しておらず結果的に底面は確認できなかった。平面形は直径72～80cmの円形を呈する。出土遺物は古墳時代の土器片が少量採取されたのみであるが、形状から中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2350** ⑧-2区 VVK09

本跡は縄文面で検出したが、埋土から中世の井戸と判断され、調査時第1面のS K 2349の下部であろうとされた。しかし、整理段階で位置を重ねてみると、本跡はS K 2349とは別地点にあたることが判明し、第1検出面で現代の攪乱とされた場所にほぼ一致することが判明した。整理では上面に攪乱が載っていたために見逃された井戸跡か、攪乱自体か判断に迷ったが、縄文面の調査では攪乱と判断されていない所見と縄文面に達する深さを勘案して、中世井戸の可能性があると考えた。そして、整理段階でS K 2350とした。縄文面で確認された平面形は長軸180cm、短軸140cmの楕円形で底面には多数の礫が投げ込まれていた。底面から第1検出面からの深さを復元すると273cm前後となる。埋土は不明で、出土遺物はない。

**S K 2359** ⑧-2区 VVG12

平面形は直径82cmの円形を呈し、壁は底面の規模が上面より大きいので中位でオーバーハングしていると推定される。底面は平坦で、検出面からの深さは254cmを測る。上部60cmを第1面で調査し、底面を縄文面で追加調査したので中位の様相は不明である。埋土は上部のみ観察し、上から粘土混じりのシルト、溶脱ブロック混じり土、粘土混じりシルト、粘土に分層された。なお、底面近くで平石1点が検出されている。古墳・古代土器片と中世の内耳鍋が出土した。中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2383** ⑧-2区 VVD13

平面形は直径103cmの円形を呈し、壁は若干やや斜めに掘り込まれ、底面は平坦である。検出面からの深さは50cmを測る。埋土はシルトが主体である。古墳時代と古代の土器が出土し、中世の遺物はみられなかったが、埋土から中世以後の所産と推定される。浅すぎる点で井戸とするには躊躇される。

**S K 2391** ⑧-2区 VVC13

平面形は直径72cmの円形を呈し、壁は垂直である。第1検出面で上部60cmのみ調査したが、それ以下は未調査である。埋土は上部から細粒砂層、シルト層、粘土層に分層された。遺物は古代の土器と中世の内耳・カワラケ、木片が出土している。中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2415** ⑧-1区 IVAR12

直径100cmの円形の平面形で、ほぼ垂直に掘り込まれる。本跡はS K 2316に切られる。検出面からの深さ



は1.4mまで確認したが、底面までは達していない。埋土は3層に分層され、上層に黒褐色の砂混り土、中に上層より黒味を増してやや粘性が強い土、下層に黒色のやや粘土の強い土がある。出土遺物はない。SK2316に切られることや形状から中世の素掘りの井戸と思われる。

**SK2418** ⑧-1区 IVAE04・05

平面形は直径100~103cmの円形を呈し、壁は垂直である。上部50cmほど第1面で調査し、以下は未調査である。埋土は灰黄褐色土ブロックを含む黒褐色土の単層である。出土遺物はない。形状と埋土より中世の素掘り井戸と推定される。

**SK2427** ⑧-1区 IVAO04、AP04 (第270図、PL52)

上部が長辺約100cm、短辺約80cmの方形の平面形で、下部には直径68cmの円形の土層の異なる筒状の落ち込みが確認された。壁は垂直で、検出面から約210cmまで確認した。それ以下は深過ぎるため、調査を断念した。埋土は上部180cm程まで黒褐色土が堆積し、その下部中央部の黒色粘質土、壁周囲の黒褐色粘質土層に分層された。古墳・古代土器片と中世の内耳鍋、白磁が出土した。中世の井戸であるが、内部には曲物などが入れられていた可能性がある。

**SK2431** ⑧-1区 IVAN08

平面形は直径108~110cmの円形を呈し、壁は垂直である。第1面の見逃し遺構を確認する第2面で検出し、上部から約2mまで精査したが、深すぎてそれ以下は断念した。埋土は上部170cmまで黒褐色土、その下にやや粘性の強い黒褐色土に分層した。検出面から180cm程のところで土坑内いっばいに広がる平石が検出された。古墳・古代の土器片が採取されたが、形状と埋土から中世の素掘り井戸と推定される。

**SK2433** ⑧-1区 IVAN11

平面形は直径108cmの円形を呈し、壁は垂直である。上部100cmほどを調査したのみで底面は未確認である。埋土は上から暗褐色細粒砂層、黒褐色土層に分層された。わずかな古墳時代土器片と内耳鍋片が出土した。中世の素掘り井戸と推定される。

**SK2434** ⑧-1区 IVAO13、AP13

平面形は直径90~98cmの円形を呈し、壁は垂直である。上部60cmのみ調査した。埋土はやや粘性のある暗褐色土が確認された。わずかな古墳時代土器片と古代の黒色土器A杯片が出土した。中世遺物は出土していないが、埋土と形状から中世の素掘り井戸と推定される。

**SK2438** ⑧-1区 IVAQ13

平面形は直径112~124cmの円形を呈し、壁は若干斜めながらほぼ垂直である。上部80cmのみ調査し、それ以下は未確認である。埋土は粘性の弱い土である。遺物はわずかな古墳時代土器片と中世の内耳鍋片がある。形状から中世の素掘り井戸と推定される。

**SK2443** ⑧-1区 IVBA10、BB10

第1面見落とし遺構確認のための第2面で検出され、第1面の見落としと見られる。平面形は直径114~120cmの円形を呈し、壁は斜めに掘り込まれ、底面は平坦な逆台形の断面形を呈する。検出面から深さ88cmを測る。埋土は上部の暗褐色土と下部の褐灰色土に分層された。遺物はわずかな古墳時代土器片と中世のカワラケがある。中世の井戸に類する施設と推定される。

**SK2450** ⑧-1区 IVBE07・08

検出は上記SK2443に同じである。平面形は直径85cmの円形を呈し、壁はややオーバーハングし、底面は中央がやや窪む。検出面からの深さは45cmであるが、1枚下層で検出しているため本来はもっと深いとみられる。埋土は暗褐色土の単層である。わずかな古墳時代土器、古代の須恵器甕、中世の内耳鍋が出土した。形状から中世の井戸に類する施設であると推定される。



**S K 2476** ⑧-1区 IVAT09

第2面で検出したが、第1面の見落としと思われる。平面形は直径80~90cmの円形を呈し、壁は垂直である。上部50cmまで調査したが底面まで達していない。埋土は粘質の弱い暗褐色土で上部に礫集中を検出した。出土遺物はないが、形状から中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2479** ⑧-1区 IVAQ13、AR13

第2面で検出したが、上面の見落としと思われる。平面形は直径80~88cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面からの深さは52cmを測る。本土坑跡がS K 2440の一部を切っている。埋土は上から細粒砂を含む暗褐色土層、粘質の暗褐色土層に分層された。出土遺物はないが、埋土から中世の井戸に類する施設と推定される。

**S K 2489** ⑧-1区 IVAJ07・08

第2面で検出したが、上面検出面の見落としと思われる。平面形は直径110cmの円形を呈し、壁はやや斜めで底面は平坦である。検出面からの深さは70cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層で、礫が1点検出された以外、出土遺物はない。埋土と形状から中世の井戸に類する施設と推定される。

**S K 2621** ⑤-2区 VUP12、UQ12

平面形は直径80cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面からの深さは110cmを測る。埋土は上部の灰茶褐色シルト層と中位以下の灰白色シルト層に分層された。出土遺物はない。形状と埋土から中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2624** ⑩-1区 VWG11・12

平面形は直径138~150cmの円形を呈し、壁は垂直である。底面は検出面から78cmを測るが、深さ58cmで一旦平坦面がつくりだされ、さらに中央が直径約80cmの円形に落ち込む。本跡がS D 1016を切る。埋土は黒褐色粘土質土の単層で上部に礫集中が検出された。遺物は古墳時代・古代の土器片と中世の内耳鍋片がある。中世の所産と推定され、形状は井戸に類する施設と思われるが、やや浅すぎる点で問題がある。

**S K 2626** ⑩-1区 VWC10

平面形は直径約110~120cmの円形を呈し、壁は垂直に落ち込む。上部60cmの深さまで調査し、底面は未確認である。本跡がS D 1016を切る。埋土は粘性のある暗褐色土である。出土遺物は古墳時代の土器が若干ある。形状から中世の素掘り井戸と推定されるが、やや浅すぎる点で問題がある。

**S K 2627** ⑩-1区 VWE13

平面形は直径72~74cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面からの深さは34cmを測る。本跡がS D 1016を切る。埋土は上部から暗褐色粘質土層、炭化物を若干含む黒褐色土層、褐灰色粘土層に分層された。遺物は僅かな古墳時代土器片がある。形状と埋土から中世の井戸に類する施設と思われたが、やや浅い点で問題が残る。

**S K 2628** ⑩-1区 VWE13・14

平面形は長軸164cm、短軸110cmの楕円形を呈し、壁は垂直である。上部70cmの深さまで調査し、底面は未確認である。本跡がS D 1016を切る。埋土は暗褐色粘質土の単層で埋土上部に近接した高さに礫が3点検出された。遺物は古墳時代土器と中世の内耳鍋片がある。中世の井戸に類する施設と推定されるが、やや浅い点で問題が残る。

**S K 2629** ⑩-1区 VWD12・13

平面形は直径94~104cmの円形を呈し、壁は垂直である。検出面から80cmの深さまで調査したが、底面は未確認である。本跡がS D 1016を切る。埋土は確認した範囲で上から炭化物を比較的多く含む暗褐色土層、強粘性の黒褐色土層の2つに分層された。古墳時代・古代の土器、中世のカワラケが出土した。遺物と形

状、埋土から中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2630** ⑩-1区 VRH19

平面形は直径100cmの円形を呈し、壁は垂直で底面は平坦である。検出面からの深さは150cmを測る。埋土は中位以上の暗褐色土層、下部の灰色の砂質粘土層に分層された。出土遺物はない。中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2631** ⑩-1区 VRI20 (第270図)

平面形は直径110cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは218cmを測る。埋土は上部から粘性の強い暗褐色土層、灰色砂質粘土層の2つに分層された。この内、下層の底面近くで礫の集中が検出されている。遺物は古墳時代・古代の土器と中世の内耳、カワラケ片が出土している。中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2632** ⑩-1区 VWI01・02

平面形は80～84cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは270cmを測る。埋土は上部の強粘性の暗褐色土層、下部の灰色砂質土層に分層された。出土遺物はない。形状と埋土から中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2635** ⑩-1区 VRF19、RG19 (第270図、PL52)

平面形は直径76～80cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面から深さ193cmを測る。埋土は上部の弱粘性暗褐色土層・しまりのない暗褐色土層、中位のしまりの良い茶灰色粘性土層、下部の灰色砂質粘土層に分層された。しまりのない暗褐色土層上部で巨礫と若干の小礫集中が検出された。遺物は僅かな古墳時代土器と中世の内耳鍋片が採取された。中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2636** ⑩-1区 VRO11・12 (第270図)

平面形は直径66～72cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは122cmを測る。本跡がSD2007を切る。埋土は上部の弱粘性暗褐色土層、中位以下の灰色砂質粘土層に分層された。なお、上層下部と下層底面近くの2か所で礫集中が検出され、礫の投棄は廃棄後に2回にわたって行なわれている可能性がある。出土遺物は僅かな古墳時代の土器片がある。中世遺物は採取されていないが、周辺の中世井戸と形状や埋土が類似する点から中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2639** ⑩-1区 VRN10・11

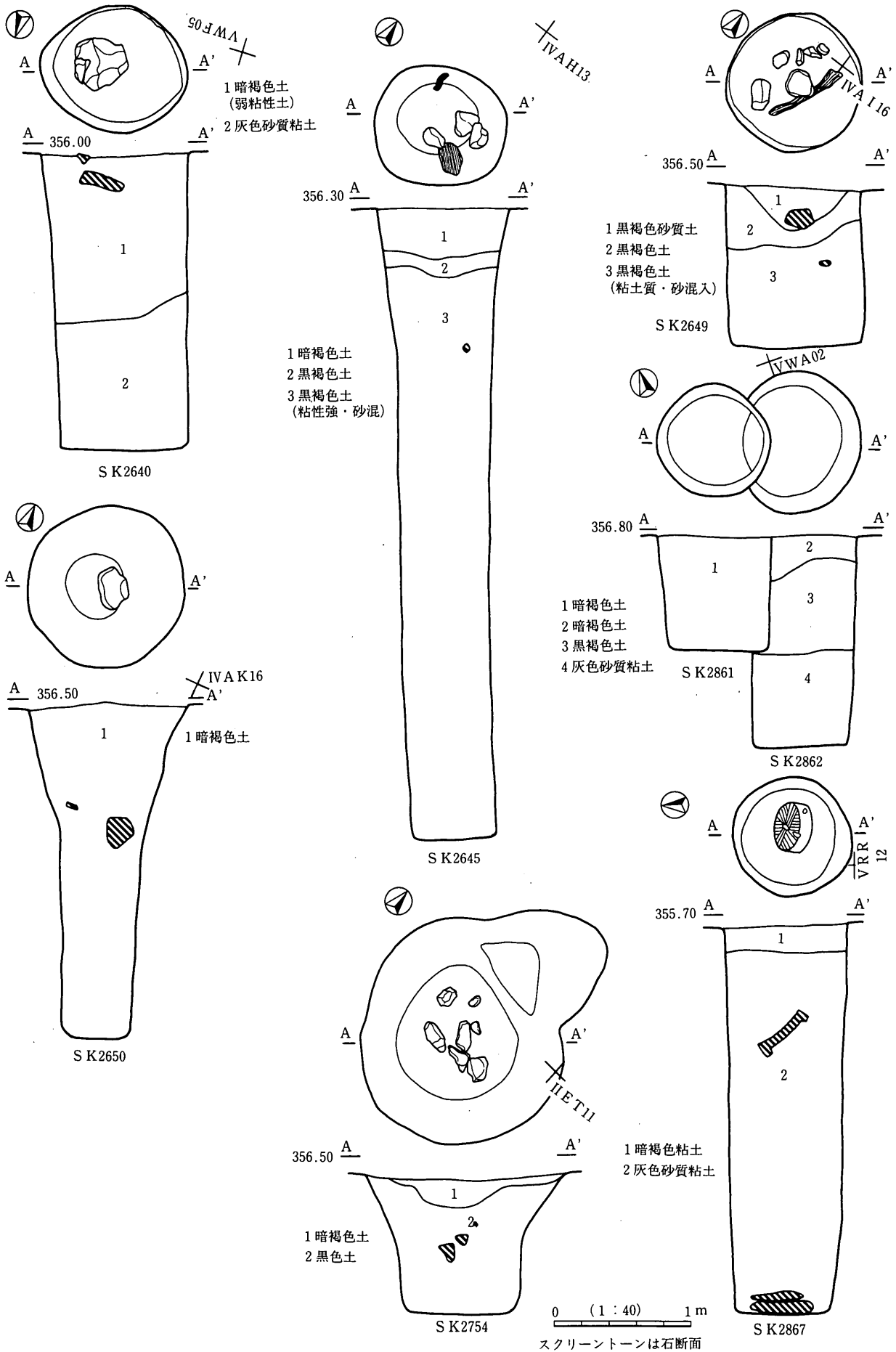
平面形は直径112cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直である。底面は深さ60cmのところ一旦平坦面をつくり、さらに長軸72cm、短軸62cmの楕円形の落ち込みが北西部にある。最深部で検出面から72cmを測る。本跡がSD2007を切る。埋土は灰黄褐色土の単層である。遺物は若干の古墳時代土器片と中世の内耳鍋片が出土した。中世の所産と思われるが、周囲に散在する中世井戸の埋土とは若干色調が異なる。形状からは井戸に類する施設と思われる。

**S K 2640** ⑩-1区 VWF04 (第271図)

平面形は長軸110cm、短軸94cmの楕円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは210cmを測る。埋土は中位以上の弱粘性暗褐色土層と下部の灰色砂質土層に分層され、上層の上部に大きな平石と小礫1つが検出された。遺物は若干の古墳時代土器片と中世のカワラケがある。中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2641** ⑦-2区 IVAE16

平面形は直径80～85cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からは深さ108cmを測る。埋土は上部の粘土ブロックを含む暗褐色土層と中位以下の黒褐色砂質土層に分層された。遺物は僅かな古墳時代土器が出土したのみである。中世遺物は検出されていないが、形状と埋土から中世の素掘り井戸と推定され



第271図 中世井戸 7

る。

**S K 2642** ⑦-2区 IVAG16

平面形は長軸110cm、短軸94cmの不整楕円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面から深さ580cmを測る。上部80cmまでを第1面で調査し、以下は重機で半割して底面の深さのみ確認した。切りあう遺構はないが隣接するS T 2005・2006とは同時存在の可能性は低い。埋土は上部のみしか確認できていないが、上から暗褐色砂質土層と黒褐色粘質土層に分層された。下部は砂質土であることしか確認できなかった。遺物は古墳時代土器と中世の須恵質すり鉢、近世の陶器片が出土した。近世の陶器片は小破片で混入とも考えられる。形状と埋土からは中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2644** ⑦-2区 IVAH13・14

平面形は長軸102cm、短軸80cmの円に近い楕円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦である。検出面からの深さは94cmを測るが、下層の埋土が地山土と類似しているため掘り過ぎている可能性がある。埋土は上部の砂を含む暗褐色土層と下部の黒褐色粘質土層に分層され、下部が地山に類似する黒褐色粘質土である。出土遺物はない。形状は井戸に類する施設と見られるが、浅すぎる問題を残す。

**S K 2645** ⑦-2区 IVAG13、AH13 (第271図)

平面形は直径86～96cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面から深さは約450cmを測る。上部90cmまで手掘りで精査し、以下は重機で半割したが、深さ400cmほどで激しい湧水があり底面の子細な観察はできなかった。本跡がS D 2014を切る。埋土は上部のみ記録し、上から暗褐色シルト層、やや粘性の強い黒褐色土層、粘性の強い黒褐色土層に分層された。なお、上から3番目の土層上面からは数個の礫集中と曲物、重機半割の際に底面近くで曲物が検出された。出土土器はない。埋土や形状、出土木製品から中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2646** ⑦-2区 IVAF10

平面形は直径94cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは108cmを測る。埋土は黒色シルトの単層である。遺物は古墳時代の土器片が僅かに出土したのみである。形状と埋土から中世以後の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2649** ⑦-2区 IVAH15・16 (第271図)

平面形は約100cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面から深さ116cmを測る。直接切りあいはないが、位置的に重複するS T 2005・2006との同時存在は考えにくい。埋土は上部の黒褐色砂質土層と黒褐色土層、中位以下の砂を若干含む粘質土層に分層され、最上層の下部から礫集中、下層から木製品が検出された。土器は僅かな古墳時代土器と中世の内耳鍋片、木製品がある。中世の所産と推定され、形状から井戸に類する施設と推定される。

**S K 2650** ⑦-2区 IVAJ15・16 (第271図)

平面形は直径120cmの円形を呈し、壁は上部で斜めに広がり、中位以下は垂直である。底面は平坦で検出面からの深さ246cmを測る。直接切りあいはないが、位置的に重複するS T 2005・2006との同時存在は考えにくい。埋土は暗褐色土の単層で下部のほうが若干粘性が強い。埋土中位で礫が1点検出されている。遺物は古墳時代の土器片と中世のカワラケが検出された。中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2741** ⑦-2区 IVAB12

平面形は直径72～80cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは293cmを測る。上部80cmを手掘りで精査し、以下は重機で半割した。埋土は上部のみ観察したが、黒褐色砂質土層と上層より粘性の強い黒褐色土層に分層された。中位以下は子細な観察はできなかったが、砂質の強い土であった。出土遺物はない。形状と埋土から中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2754** ⑦-2区 IIES10・11 (第271図)

平面形は直径160cmの円形に約60cmのテラス状突出部が付いた形態である。円形部分の壁は上部が斜めに広がり、中位以下で垂直である。底面は平坦で検出面からの深さは約100cmを測る。埋土は上部のレンズ状に入る暗褐色土層、その下の主体を占める黒褐色土層に分層され、黒褐色土の中位から礫が散在して検出された。わずかな古墳時代土器片が得られているのみで中世遺物の出土はないが、形状と埋土から中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2829** ⑦-2区 IVAE09、AF09

平面形は直径68～72cmの円形を呈し、壁はやや斜め、底面は平坦で検出面からの深さは70cmを測る。S K 2786が本跡を切る。埋土は上層の黒褐色土層と下層の粘性の強い黒褐色土層に分層された。出土遺物はない。形状から中世以後の井戸に類する施設と推定する。

**S K 2861** ⑩-1区 VWI02 (第271図)

平面形は直径80cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは84cmを測る。本跡がS K 2862を切る。埋土はしまりのない暗褐色粘質土の単層である。出土遺物はない。形状から中世の井戸に類する施設と推定される。

**S K 2862** ⑩-1区 VWI02、WJ02 (第271図)

西側をS K 2861に切られるが、平面形は直径102cmを測る円形を呈すると思われる。壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは153cmを測る。埋土は上部のS K 2861埋土と同様のしまりの弱い暗褐色粘質土層、中位上部の黒褐色粘質土層、下部の灰色砂質粘土層に分層された。遺物はない。形状から中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2864** ⑩-1区 VWD10 (PL52)

平面形は直径80cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直で底面までの深さは検出面から約46cmを測る。埋土は褐色灰色土の単層で、本跡中央部の中位から上面にかけて礫が集中的に検出された。中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2866** ⑩-1区 VRP11、RQ11

平面形は直径78cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは102cmを測る。埋土は上部の黒褐色強粘性土層と下部の灰色砂質粘土層に分層された。出土遺物は中世のカワラケ1点が採取されたのみである。形状や埋土、出土遺物から中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2867** ⑩-1区 VRQ11、RR11 (第271図、PL52)

平面形は直径約90cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは302cmを測る。上部1mを手掘りで精査し、以下は重機で半割した。埋土は最上部の黒褐色強粘土層と上部以下の灰色砂質粘土層に分層され、灰色砂質粘土層の中位やや上部で石臼、底面直上で平石2つが重なるように検出された。出土遺物は石臼以外ない。形状や埋土、石臼の出土から中世の素掘り井戸と推定される。

**S K 2872** ⑩-1区 VRM10

平面形は一辺74cmの隅丸方形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さ92cmを測る。埋土は黒褐色の粘性土の単層である。僅かな古墳時代の土器片が出土したのみである。平面形が他の類似遺構と異なるが、断面の形状や埋土から中世の井戸に類する施設と思われる。

**S K 2873** ⑩-1区 VRN12、ROI2

平面形は直径74cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは290cmを測る。上部100cmを手掘りで精査し、以下を重機で半割して追加調査した。本跡がS D 2007を切る。埋土は灰色砂質粘土の単層である。出土遺物はない。形状と埋土の類似から中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2875** ⑩-1区 VRL18、RM18

平面形は直径90cmほどの円形を呈し、壁はほぼ垂直である。上部80cmを手掘りで調査し、それ以下は重機で半割したが、下面は崩落で調査不能となったため、底面は未確認である。埋土上部で大きな平石と木が検出された。出土遺物はない。形状と埋土の状況から中世の素掘り井戸と思われる。

**S K 2876** ⑩-1区 VRH18・19

平面形は直径80～88cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは157cmを測る。上面50cmを手掘りで精査し、以下を重機で半割した。埋土は上部の褐色砂質粘土層、下半の灰色の強粘土層に分層された。出土遺物はない。埋土は周囲の中世井戸とは若干異なるが、形状から中世の素掘り井戸と推定した。

**S K 2877** ⑩-1区 VWI04

平面形は直径90cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは108cmを測る。埋土は上部のやや青灰色の粘質土層、下部の灰青色粘質土層に分層された。出土遺物は若干の古墳時代土器と中世のカワラケが出土した。埋土は周囲の中世井戸とは異なるが、形状と出土遺物から中世の素掘り井戸と推定した。

**S K 2880** ⑩-1区 VRC17、RD17

第1検出面で見逃し、S D 1016調査中に存在が判明した。残存部は深さ10cmであるが、本来は1m前後の深さと推定される。本跡がS D 1016を切る。平面形は88～94cmの不整円形を呈し、底面は平坦である。埋土は灰色粘土の単層である。遺物はない。形状から中世以後の井戸に類する施設と推定される。

**S K 2881** ⑩-1区 VVS07

第1検出面で見逃してS D 1016調査中に存在が判明した。深さ28cmのみ残存したが、第1検出面からは約110cmの深さになると推定される。平面形は直径62cmの不整円形を呈し、底面は深さ16cmのテラスを作り、北西部がさらに直径30cmの円形に落ち込む。本跡がS D 1016を切る。埋土は灰色の強粘性土の単層である。出土遺物はないが、形状とS D 1016を切る点から中世の井戸に類する施設と推定される。

イ そのほかの土坑

上記の井戸関連以外の土坑を一括する。性格を特定できたものには墓跡（S K 2015・2616）と鉄滓廃棄坑（S K 1086）があり、それ以外は不明である。また、S K 1013は形状の類似する土坑が近世にみられ、近世の所産である可能性もあるが、出土遺物から中世として扱った。以下に番号順に述べる。

**S K 1013** ⑤-1区 IIEF12・13（第272図）

平面形は長軸110cm、短軸75cmの北東－南西方向に長軸をとる長方形である。S D 1007上面で検出された。埋土は黒褐色の砂質土に多数の礫が充填されていた。遺物は礫に混在して鉄滓、青磁碗片、内耳片、古代の須恵器片、古墳時代土師器片が出土した。小礫を多数含む浅い土坑は近世の所産に多く、本土坑も類似しているので近世の可能性もあるが、出土遺物から中世と捉えた。性格は不明である。

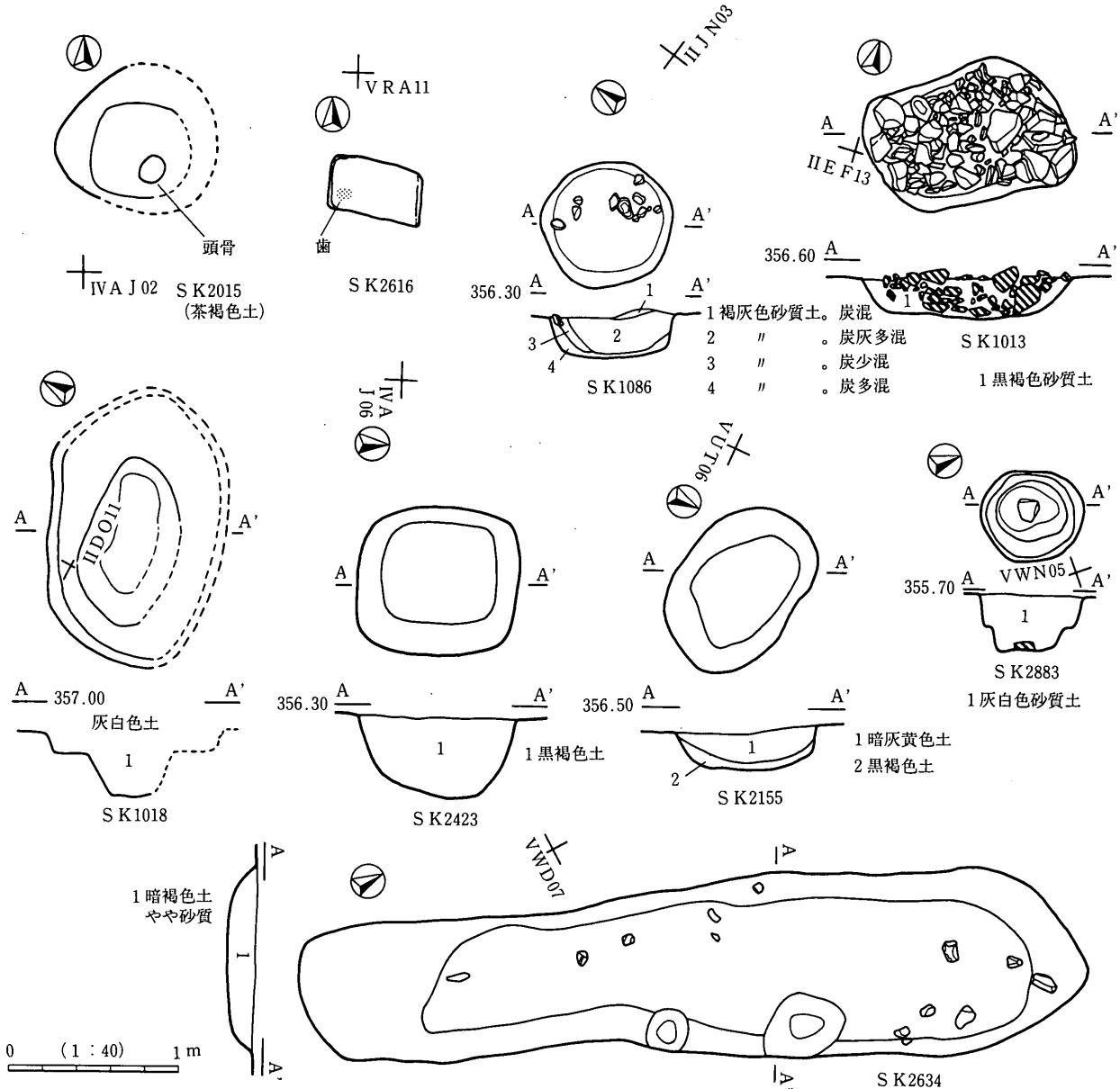
**S K 1018** ⑤-1区 IIDN10・11（第272図）

⑤-1区の西部、調査区北壁にかかって検出され、南半分は調査時のトレンチで削平した。平面形は北東－南西方向に長い楕円形を呈すると思われる、残存部で約160cm、短軸は約100cmを測る。壁は斜めで検出面から深さ40cmを測り、底面が一段くぼんだ断面形である。埋土は灰白色シルトの単層である。遺物は弥生・古墳時代の土器小片がある。埋土から中世以後の遺構と思われるが、性格は不明である。

**S K 1086** ⑦-2区 IIJM02・03（第272図、PL49）

平面形は直径72～77cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直、底面は平坦で検出面から22cmを測る。埋土は褐灰色土を基調として炭・灰などの含まれ方により4層に分層され、2～3層にかけて鉄滓が比較的多く出土

した。埋土に多量の鍛冶関連遺物を含む点を特徴とし、鉄滓の廃棄が認められる点ではS K1084・1085と類似する。しかし、後の遺物のところで述べるように本土坑へは鍛錬鍛冶で排出された遺物が廃棄されたことが知られた。



第272図 中世の井戸以外の土坑

**S K 2015** ⑤-1区 IVAI01、AJ01 (第272図、PL52)

⑤-1地区のSD2001南壁際に入れられたトレンチ精査中に人頭骨が検出され、周囲を検討して土坑を認定した。東半分と南側はトレンチで破壊し、全体の約1/3が残存する。規模は不明だが、ほぼ円形か楕円形の平面形と推定される。SD2001を切る。埋土は茶褐色の砂質土の単層で内部に人頭骨1体分と脇に小礫1点を検出した。中世の埋葬施設と思われる。

**S K 2155** ⑤-2区 VUT05 (第272図)

平面形は長軸104cm、短軸71cmの楕円形を呈し、壁は斜めで底面は平坦である。検出面からの深さは20cmを測る。本跡がSK2156を切る。埋土は上部の暗灰黄色土、底面近くの黒褐色粘質土に分層された。遺物はない。埋土から中世の所産と推定されるが、性格は不明である。

**S K 2423** ⑧-1区 IVAJ05・06 (第272図)

平面形は長辺94cm、短辺88cmの隅丸方形を呈し、壁は斜めで底面はやや南に傾斜している。検出面からの深さは45cmを測る。埋土は黒褐色土層を主体とし、部分的に粘性の強い土が入る。古代の須恵器甕と杯、中世のカワラケが出土している。中世の所産と推定され、形状もやや異質ではある。性格は不明である。

**S K 2616** ⑤-2区 VQT11・RA11 (第272図、PL52)

平面形は長辺56cm、短辺32cmの長方形を呈し、掘り方ぎりぎりの木棺を納めた墓である。調査時には長方形に板材を巡らせた内部に歯が検出されたことにより、ウレタンで固めて取り上げ、整理段階で解体したが、歯のみしか検出されなかった。埋土は暗褐色土の単層である。中世の埋葬施設と推定される。

**S K 2634** ⑩-1区 VWD06 (第272図)

平面形は長さ462cm、幅110cmの長楕円形を呈し、検出面から深さ16cmを測る浅い溝状の遺構である。底面はほぼ平坦であるが、東壁際にピット状の落ち込みが2か所認められた。埋土は暗褐色砂質土の単層である。出土遺物は中世の内耳鍋と白磁碗がある。中世の所産と推定されるが、性格は不明である。

**S K 2883** ⑩-1区 VWM04・05 (第272図)

平面形は直径52~60cmの円形を呈す。壁は深さ20cmにほぼ垂直に掘り込まれ、一旦平坦面を作るが、さらに中央が径40cmの円形に落ち込む。検出面から最深部までは32cmを測り、底面直上には小さな平石が1点検出された。埋土は白色の砂質に近い土が入る。出土遺物はない。平面の形状からは井戸に類する施設とも見られるが、浅すぎるため柱穴の可能性もある。

## (2) 柱穴跡

調査面積に比して検出された柱穴跡はあまり多くない。しかも調査中に積極的に掘立柱建物跡や柵列跡を認定する作業を行っていないため、柱穴跡の認定について必ずしも十分な検証を経ていない。従って、整理段階で柱穴跡の分布から掘立柱建物跡や柵列跡を認定したものの、部分的に柱が欠落したり、柱の通りが悪く、柱間寸法も一定していないなど建物認定に問題を残すものが多い。そこで、報告にあたり遺跡内の中世とその可能性がある柱穴跡を概観した上で、建物跡や柵列跡の認定方法にも触れておくことにした。なお、検出された柱穴跡数が少ない理由は、本来的に建物や柵列が少なかった可能性もあるが、耕作や明治時代以後の地形改変による削平、あるいは調査での見逃しもかなりあると見られる。特に、⑤-1区などでは本来の検出面より1枚下の土層で見逃し遺構を確認するダメ押し検出で柱穴跡が多数みつかり、上面での見逃しがかなりあることが知られた。以下に中世の柱穴跡の概略と建物跡・柵列の認定方法について触れる。

微高地域では出土遺物や井戸などの存在から居住地利用の可能性は古墳時代前期末、古代、中世の3時期が想定される。従って、柱穴もほぼこの3時期のいずれかの時期の可能性が高いと推測される。しかし、



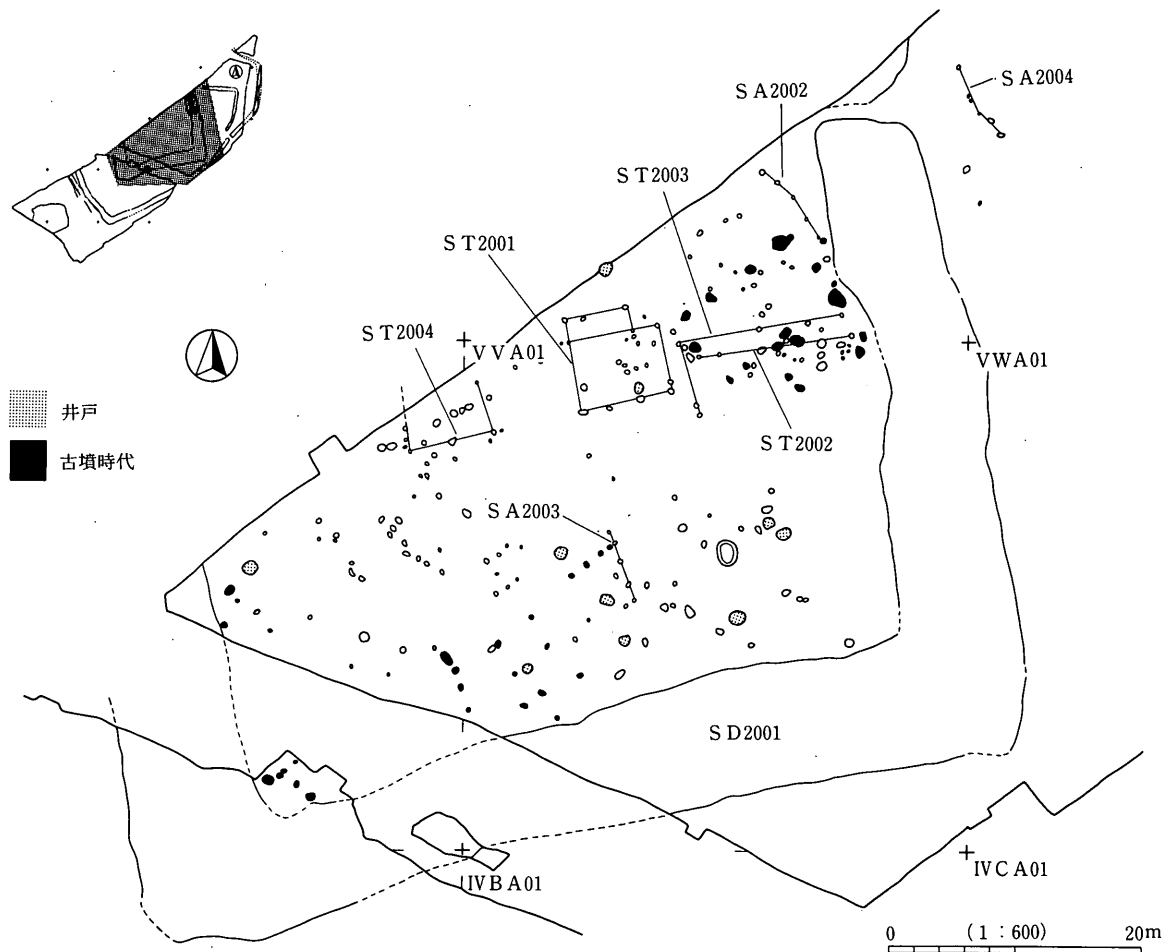
微高地域では古墳時代～近世の遺構検出面が同一で、埋土記載方法や観察観点が統一的でないため、基本土層と埋土の関係から一定の時代的傾向を見出すことは難しい。さらに、経験的には小型柱穴跡は中世、大型の柱穴跡は古墳時代とみられるが、柱穴一杯に高坏が入っていたS K 2389ように小型柱穴跡にも古墳時代と考えるものが含まれる。このように、柱穴跡は出土遺物も少ないため、形状や出土遺物から年代を判断することも難しいと思われた。

しかし、改めて柱穴跡の分布をみると数箇所に集中し、そのなかで共通した特徴をもつ柱穴跡が近接して位置するものが看取された。このような類似した特徴をもつ柱穴跡は相互に関連する可能性があるとして仮定し、その配置から軸方向を割り出して各時代に特徴的な区画溝を基準とした方位との比較によって時期を推測してみた。方位からみた時期判断の基準は古墳時代前期末ではS D 1016のN-30°-40°-Wもしくはその直交方向、古代の条里施工後なら条里方向のN-2°-5°-Wかその直交方向と考えた。ただし、中世館では館外堀と内堀では走行方向が異なるため様相は複雑である。中心屋敷地内ならS D 2001と一致するN-10°-W前後、S D 2001とS D 1008中間域やS D 1008西外側ならS D 1016に沿ったS D 1008と一致したN-30°-60°-W前後か、S D 2001に一致した方向のいずれかと推測した。このなかで条里に一致するものは古代以後の所産と推定されるが、古代の条里区画以前や、平安時代洪水以後～堀を巡らせた中世館出現時期の間の所産は、基準とする区画の溝などが見られないため抽出が難しく、結果的に抽出できていない。このなかで、中世の時期判断基準は館堀に求めたものの、館の堀自体が場所によって走行方向が異なるため、堀の区画によってS D 1008西外側、S D 2001西辺～S D 1008西辺中間域、S D 2001区画内、S D 2001東辺～S D 2007間域、S D 2007～S D 1008東辺間域に分けて検討することにした。

#### ア S D 2001区画内 (A)

館の中心部にあたる。第273図は古墳時代から中世にいたる柱穴跡と中世の井戸を抽出したものである。この図では古墳時代と断定できるものは黒く塗り潰している。中世井戸跡は南東部に集中する傾向がみられ、柱穴分布では館中央部・西側に比較的少なく、外縁部側の北・東側に多い傾向が見られる。中心屋敷内が計画的に区分されていたとみられる。ここで検出された柱穴跡で古代のS D 2019を切るS K 2158・2462・2463や古墳時代S Kを切るS K 2334・2304・2592は中世の可能性が高い。S K 2268・2159はS D 2022を切っているが、S D 2022は時期が明らかでないので時期は不明である。これらの中世と思われる柱穴跡の埋土は明灰色土、褐色土、黄灰色と一定していないが、ほぼ灰色を基調とする傾向がある。

また、内部に石が入られている柱穴跡がいくつか特徴的に認められた。S K 2096・2600・2604・2174・2605・2592・2609・2087・2338・2310などが該当するが、それぞれ近接した場所に位置するものもあり、相互に関連して建物跡や柵列跡などを構成する可能性がある。このなかでS K 2096・2600を直線的に結ぶラインと直交・平行する方向に配列する柱穴が看取され、建物跡(S T 2001)を認定した。また、隣接するS K 2604・2174・2605は建て替えなどで類似位置に構築された柱穴跡とみられ、その東側の類似したS K 2592・2087・2609も相互に関連して建物跡を構成すると推測された。ただし、東側にあるS K 2592・2087・2609は散在的で、単純にS K 2604・2174・2605と結ぶことができない。また、建物跡とするには検出された柱穴が少なすぎて問題も残るが、ここでは隣接するS T 2001の棟方向と類似方向から建物跡2棟(S T 2002・2003)がほぼ重複する位置にあると推測した。なお、石の入るS K 2609・2592はどのような関係になるのか明らかにできなかったが、S K 2609はS T 2003に関連する可能性がある。これらの建物跡の軸方向をみると、S T 2001がN-78°-E、S T 2002・2003がN-82°-Eとなり、S D 2001と直交方向に近いので中世の可能性が高い。なお、これ以外にS K 2279・2234・2567にも石が入られていたが、周囲の柱穴跡と建物は組めなかった。ただし、S K 2234・2567は周囲の柱穴跡の配列のしかたからみると古墳時代の可能性もある。なお、埋土では黄灰色、灰褐色、にぶい黄褐色でS D 2019を切る柱穴跡埋土と類似



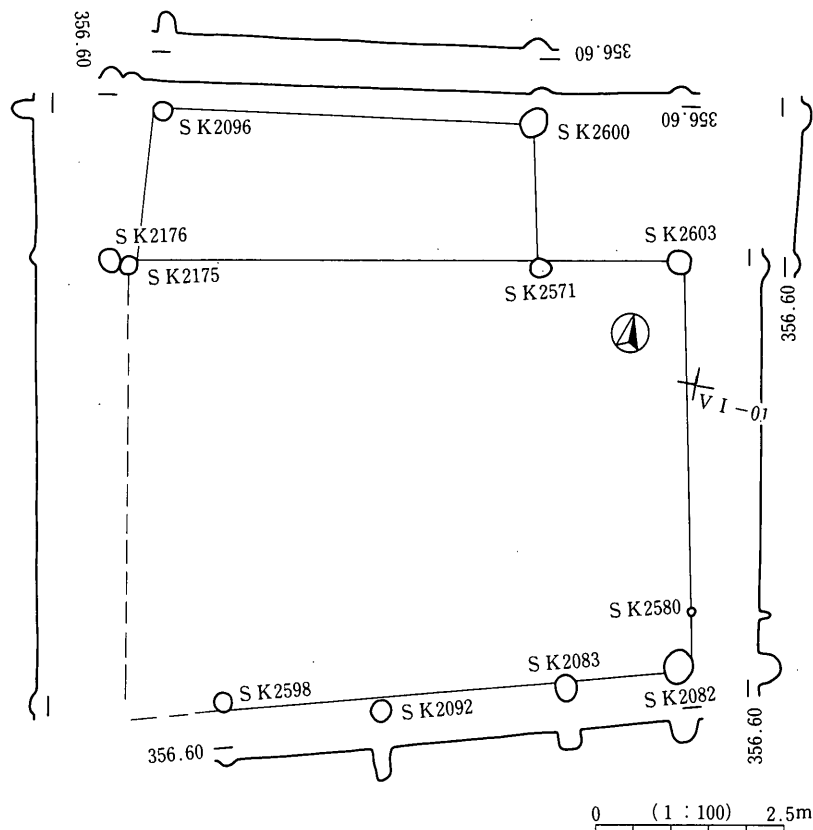
第273図 SD2001区画範囲内柱穴分布

するが、SK2452のみが暗灰褐色・黒褐色である。

次に、SK2459・2462・2149・2225・2221の配列から建物跡（ST2004）を認定した。SK2462がSD2019を切ることや、棟方向がN-80°-E方向でSD2001の走行方向に近いことから中世の所産と思われる。また、N-32°-W方向のSK2267・2269・2270・2271・2972・2583の柵列（SA2002）は、走行方向がSD2011走行方向と一致しないが、位置的にSD2001を意識して構築されていると見られ、中世と推測した。さらに、SK2599・2976・2396・2356・(2352)は配列からもN-20°-W方向の柵列跡になると思われた。その走行方向は、SD2001走行方向とはやや異なるが、古墳時代よりも中世に近いと判断して中世柵列跡（SA2003）とした。これ以外のSD1016と類似した方位に配列する柱穴は古墳時代と推測し、N-67°-E方向のSK2163・2265・2137・2131・2223・2224・2222は柵列跡になると推測されるものの、古墳時代とも中世・古代とも異なる方位であるため中世の館時代の所産ではないと考えた。以上の中世と思われる建物跡・柵列跡は館中心屋敷の東寄りと、その北側に多く認められる。以下にST2001~2004、SA2002・2003を取り上げる。

**ST2001** ⑤-2区 VQE20~VI02 (第274図)

中心屋敷地の北東部に位置する。石が入るSK2096・2600を結ぶラインを基軸とし、この方向に配置するSK2176・2175・2598・2092・2083・2082・2603・2571を含めて建物跡と認定した。しかし、断片的な



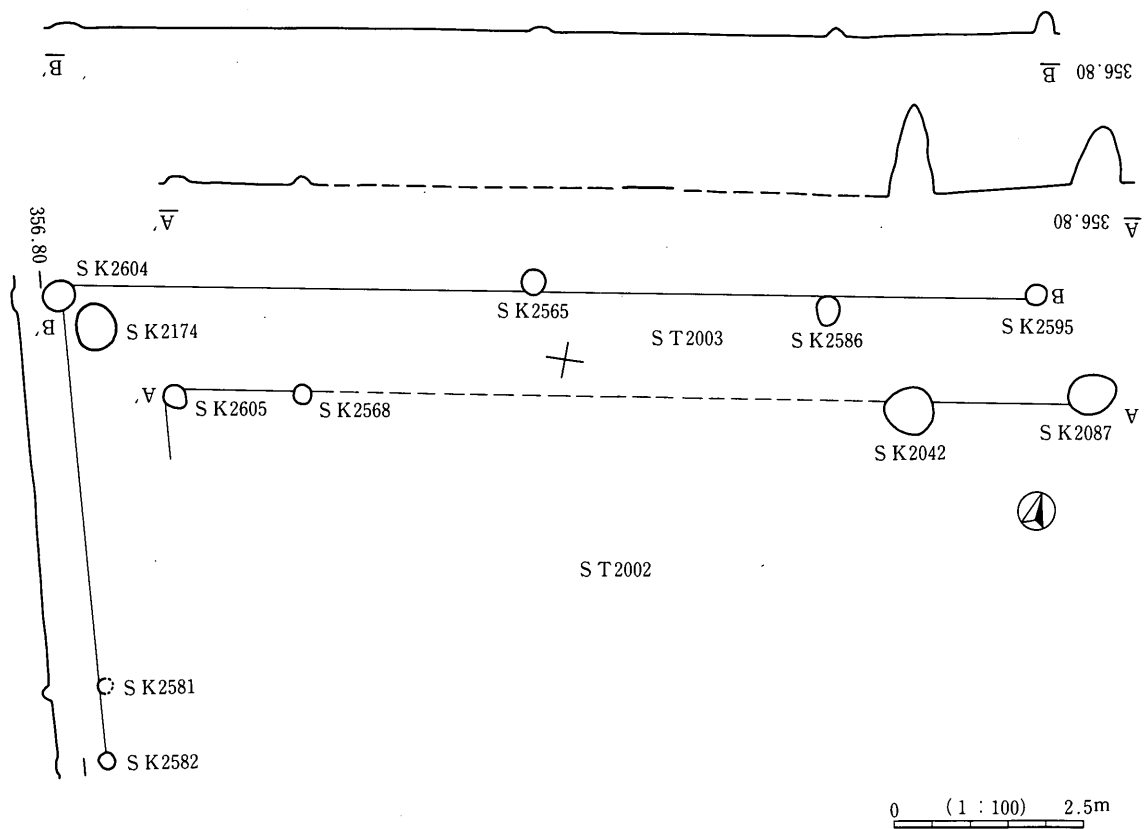
第274図 ST2001

柱穴跡から推測したもので、南側桁方向の柱穴列と北側がかならずしも一致していない問題もあり、建物の認定に不安が残る。正確な規模等は不明であるが、確認できるところでは、棟方向がN-78°-E、梁行が1間約5.5m、桁行が3間約7.2m以上の長方形の平面形で、北側へSK2096・2600部分を結ぶ部分が突出した平面形とみられる。柱間寸法は梁方向の柱間寸法が長すぎるため、本来は中間にもう1間入る可能性があり、2間とすると約2.8m弱、桁方向が約1.6~2.5mである。柱穴は直径22~44cmの円形の平面形で、深さは6~42cmと幅があるが10cm内外がもっとも多い。埋土は暗褐色土を主体とし、出土遺物はSK2082・2083・2092で古墳時代の土師器小片が得られたのみである。建物の性格は明らかでない。

#### ST2002 ⑤-2区 VVJ01~QP20 (第275図)

中心屋敷地の東部に位置する。柱穴内に石をもつSK2604・2174・2605、やや離れて同様に石をもつSK2042・2087が相互に関連するものと推定し、隣接するST2001の棟方向と同方向で並列する柱穴跡を拾いだして建物跡を認定した。ここでは2棟前後の建物が重複するとみられ、南側をST2002、北側をST2003とした。しかし、いずれも欠落する柱穴が多く、しかも南側の桁方向の柱穴跡が検出されていないなど建物認定に問題が残る。

具体的に建物跡と認定したのは直線的に配列するSK2605・2042・2087のみである。このライン上にSK2567も一致するが、古墳時代建物の柱穴の可能性があるので除外した。欠落する柱穴跡が多いが、走行方向はST2003と類似することからほぼ同様の建物になる可能性がある。規模や構造の詳細は不明であるが、建物の棟方向はN-82°-Eで、長さは12.5m以上と推測される。柱間寸法はSK2042とSK2087の間で約2.5mであり、これで桁行の長さを割ると5間とみられる。柱穴はSK2605で直径38cm、SK2042・2087



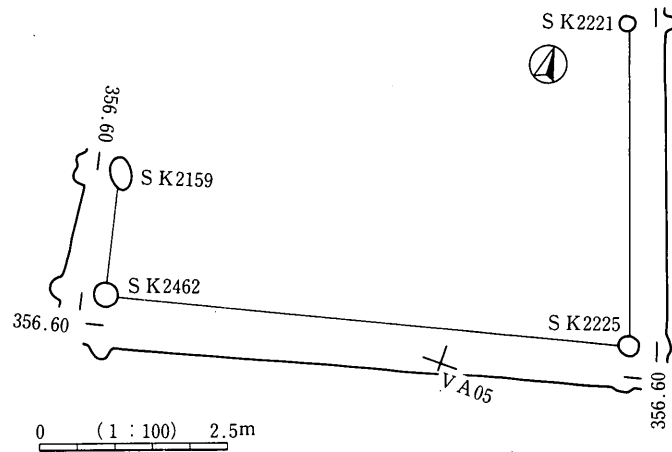
第275図 S T 2002・2003

が直径約60cm前後の円形の平面形で、深さは検出面から10～60cmとかなり差がある。埋土は黄灰色土でS K 2605・2087には礫が入れられていた。出土遺物はS K 2605・2042で古墳時代土師器小片が得られたのみである。建物跡の認定に問題を残し、構造や規模も不明であるが、規模の大きな建物と思われる。

**S T 2003** ⑤-2区 V V J 03～Q P 19 (第275図)

S T 2002の北側にややずれて位置し、ほぼ同じ建物の建て替えと思われた。石を入れたS K 2604・2174を基軸としてS T 2001と同方向で直線的に配列するS K 2565・2586・2595、さらに直交する方向のS K 2581・2582を含めて本建物跡を認定した。しかし、これもS T 2002同様に想定される位置に柱穴が検出されていないなど建物認定に不安がある。

棟方向はN-80°-Eで梁行は1間?で約6.0m、桁行は約12.8mと思われる。梁方向は中間にもう1本入って2間と推定され、桁方向は確実なところで3間、柱穴寸法からみると4～5間とみられる。建物構造は詳細不明であるが、S K 2604が本建物に関連するとすれば、内部にも柱をもつ構造と思われる。柱間寸法はS K 2565-2586間が約4.0m、S K 2586-2595間が約3.0mと広く、一定していない。梁方向は中間に1本入るとすれば3.0m前後とみられる。柱穴は直径20～42cmの円形の平面形で、S K 2581・2582を除くと40cm前後が多い。深さは検出面から3～28cmを計るが、10cm内外が多く28cm前後の深さはS K 2174・2595のみである。埋土は記録ミスで不明なものが多いが、記録があるところでは黄灰色を呈する。このなかでS K 2604・2174には礫が入れられていた。出土遺物はS K 2565・2586・2595・2581で古墳時代の土師器小片が得られている。本建物跡は認定自体に不安も残すが、規模の大きな建物と推測され、S T 2002と本建物跡は前後関係は不明ながら、類似建物が建てかえられたものと思われる。



第276図 ST2004

**ST2004** ⑤-2区 VUR01~VA02 (第276図)

SD2001区画内の北側に位置する。本建物跡は整理段階でSK2159・2462・2149・2225・2221からなる建物と推定したが、調査区境付近に位置するため建物の一部は調査区外にかかると思われる。SK2159がSD2022を切り、SK2462は古代のSD2019を切っている。周囲にもSD2019を切る同様のSK2158・2463があり、これらも中世の所産と思われるものの、本建物跡との関係は明らかにしえなかった。建物跡の規模・構造の詳細は不明であるが、棟方向はN-80°-E方向で、梁行の長さは最低4.2m、桁行の長さは6.6mである。柱穴の配置位置からSK2149を含めてみたが、他の柱穴とは形状が異なっており、これをもって桁行2間とするには不安がある。桁行の柱間寸法は不明である。また、梁方向はSK2159-2462間が約1.6mと狭すぎるため、同一の建物内の柱穴跡とするには問題がある。なお、内部には関連するとみられる柱穴跡も認められないので側柱建物であると推測される。柱穴は直径20~44cm前後の円形で、SK2149のみは長軸約65cm、短軸約54cmでやや大きい。深さは8~25cmであるが、20cm前後のものが多い。埋土は記録ミスで不明なものが多いが、確認できるところでは明灰色土である。出土遺物はSK2221で古墳時代土師器小片が得られたのみである。

**SA2002** ⑤-2区 VQL14~QO17

中心屋敷地の北東部にあり、整理段階でN-32°-W方向に並列するSK2267・2269・2270・2271・2972・2583を柵列跡と認定したものである。この走行方向は古墳時代に近いが、位置的にSD2001を意識していると見受けられるため中世の所産と考えた。その位置はSD2001北東部の土橋推定場所から南にかけて位置し、緩やかなカーブを描きながら約8.4m続く。柱間寸法は1.7~2.0mである。柱穴は直径約12~18cmと小さな円形を呈し、深さも10cm弱と浅い。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。

**SA2003** ⑤-2区 VVF08~VG11

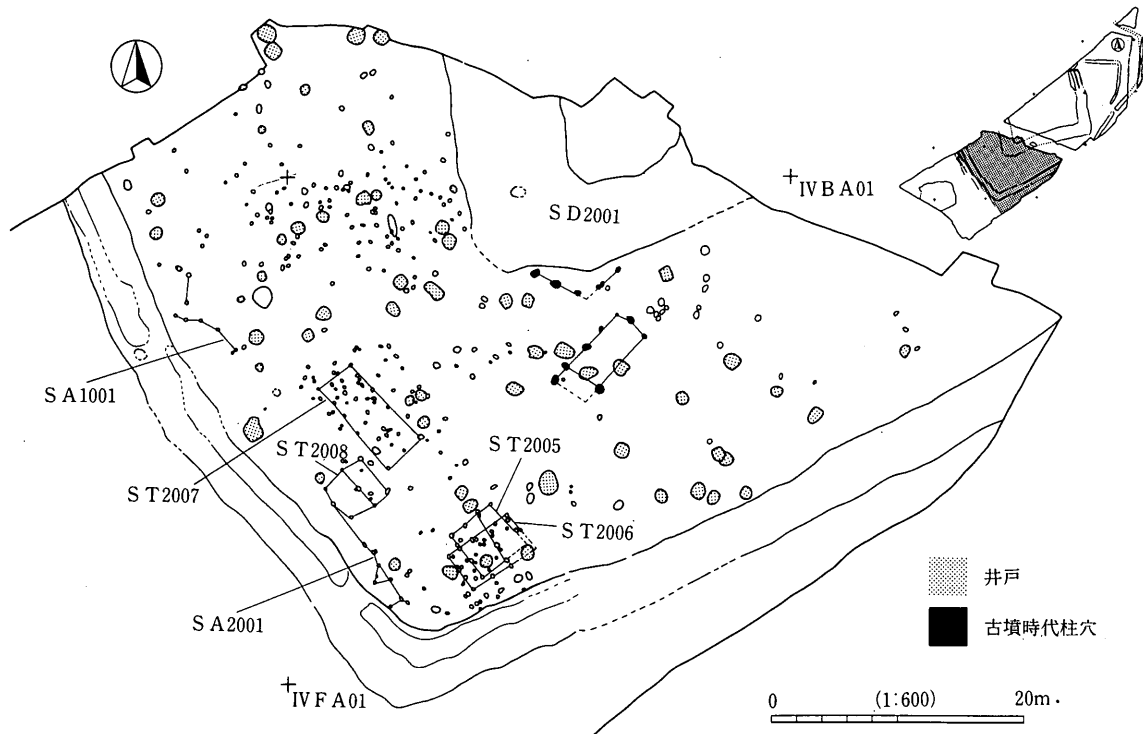
中心屋敷地の中央東よりに位置する。整理段階でN-20°-W方向に並列するSK2599・2976・2396・2356・2352を本柵列跡と認定した。この走行方向は厳密には古墳時代・中世とも一致しないが、どちらかといえば中世に近いと見られるため、中世の所産と推測した。また、本柵列跡のSK2976がSK2394と切りあっているが、調査では切りあいの順序は記録されていない。柵列跡の長さは5.6mと短く、柱間寸法は1.5~2.0mである。柱穴は直径32~44cmで、深さは検出面からSK2352で19cm、SK2976で8cmを測るが、それ以外の柱穴跡は記録がない。埋土も記録ミスで不明である。出土遺物はない。

イ SD2001西辺～SD1008西辺中間域（B1）（第277図）

外堀区画内の中心屋敷地西側にあたる。この範囲内では多数の柱穴跡が検出されているが、SD2001南辺側ではあまりみられず、SD1008の西辺側に3か所に密集する部分が認められるので特定の場所に類似した建物が継続的に構築されているとみられる。また、各柱穴群の中間に帯状に柱穴が検出されない空白部分がみられるが、SD2001南辺とその延長先のSD1008底面の溝の切れる部分をつなぐラインと、SD1008南西隅の底面溝が切れるラインに一致するのでこの空白部分は館内の道と推測される。個々の柱穴跡の時期は確定できなかったが、館内の道と推測される部分で分割された空間毎に分布することから、ほとんどの柱穴跡は中世の所産と推測される。以下に柱穴跡の密集する箇所を取り上げる。

SD1008南西隅の柱穴集中部分は狭い範囲に、SD1008にほとんど接するように分布する。この分布のあり方からほぼN-55°-E前後の方向の建物が複数回構築されているとみられる。整理段階では柱配置からSK2651・2652・2602・2655・2656・2666・2674・2677・2670・2777・2778からなる建物跡（ST2005）と、SK2774・2775・2668・2767・2768・2659・(2660)・2658・2657・2671・2669・2673・2682・2679・2678からなる建物跡（ST2006）を認定した。しかし、必ずしも柱間寸法が等間隔でなく、しかも他の建物跡よりも短い問題は残される。

⑦-2区を中心とするSD1008区画南西部の柱穴群内ではSD1008東岸に沿って並列する柱穴列と、その東に密集して分布して建物跡と見られる柱穴群がある。SD1008縁辺に沿って配列する柱穴は、通路と推測されるSD1008の底面溝が土橋状に切れる周辺に分布し、柵列跡（SA2001）と認定した。しかし、同じ方向に配列する柱穴跡の一部は東側の建物跡に含まれる可能性がある。この東側に柱穴跡が密集する部分はN-45°-W方向の建物跡が重複して構築されているとみられるが、整理段階ではSK2732・2819・2804・2820・2720・2713・2800・2791・2792・2701から推測した掘立柱建物跡（ST2007）が1棟認定で



第277図 SD1008区画範囲内西・南部柱穴分布

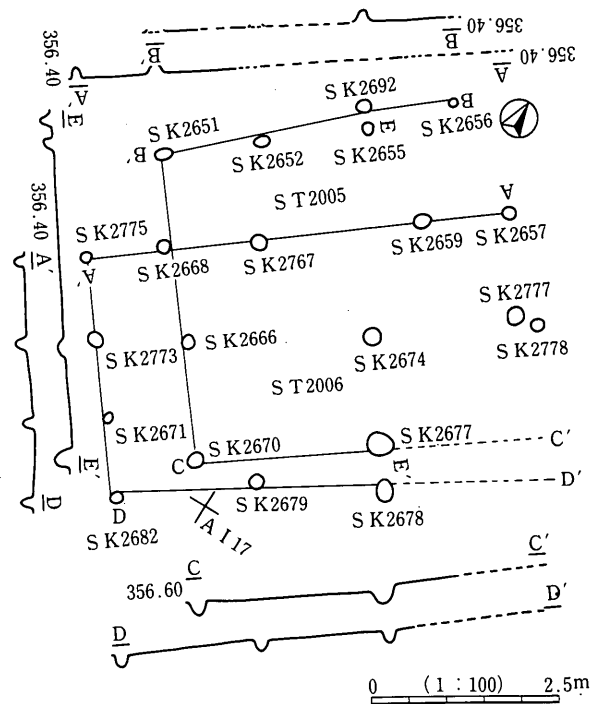
きたのみである。また、この堀立柱建物跡の南西にあるSK2760では柱材の残骸の木片が出土し、同様のものがSD1008縁辺でSA2001延長上に位置するSK2738でも見られた。そこで、ここではSK2735・2738・2739・2796・2795・2760・2763・2764を建物跡(ST2008)とし、SK2739・2738・2735・2734・2717・2766・2696・(2731・2715・2700)をSA2001として扱うことにした。なお、東に隣接した㊸-1区では柱穴跡があまり検出されていないが、散在的ながら分布し、建物跡が存在した可能性はある。

最後にSD2001南西コーナー西側に分布する柱穴群であるが、この部分はやや広範囲に分布する。建物跡として組めたものはないが、南北方位に近い方向をとるものと、N-40°-W方向、N-60°-E方向など様々な方位のものが含まれるように見える。おそらく、中世館時代の所産ばかりでなく、古墳時代や館時代以外の中世の建物跡が重複する可能性もある。柱穴跡の規模は直径18~30cm前後で、深さは検出面から16~30cm前後が中心である。埋土は色調から灰白色系と暗褐色・茶褐色系の2者が認められ、前者はSD2001南西コーナーに近い部分に多く、後者はその北側から西側にかけて分布する。この様相から、両者が時期差をもつ可能性も考えられるが、配置から異なる埋土の柱穴が組み合って同一の建物跡を構成する可能性があるものもあり、単純に時期差と断定できなかった。また、柱材・柱の腐食した残骸と思われる木材が検出された柱穴としてSK1154・1160・2942・2924がある。

上記以外で、この範囲内ではいくつか散在的に分布する柱穴跡がある。そのほとんどが単独であったり、建物として組める可能性が少なく、時期も詳細不明である。このなかでSD1008西縁辺にそって配列するSK1175・1166・1167・1168・1169・1177・1176・1172は柵列(SA1006)と認定した。その配置位置から中世の所産でSA2001に対応するとみられる。また、ST2006東側にあるSK2497・2486・2488には柱材の残骸と見られる木材片が出土している。これらを一連の堀立柱建物とするとN-80°-E方向の建物とみられる。ただし、SK2494はSK2428・2247・2495と組み合わさるようにもみえ、建物として確定できず、しかも時期が特定できなかったのでここでは除外した。

**ST2005 ㊸-2区 IVAH16~AI13 (第278図)**

SD1008区画の南西隅にあり、整理段階でSK2651・2652・2692・2655・2656・2666・2674・2677・2670・2777・2778をもって本建物跡と認定した。しかし、柱間寸法が短すぎることや、想定される位置に柱穴址が検出されていないところもあり、建物認定には不安がある。また、位置的に中世と思われるSK2649・2650との同時存在は考えられない。確認できる規模は棟方向がN-55°-Eで、梁行2間で約4.0m、桁行3間以上で長さは4.0mを越えるとみられる。なお、西側にも関連するとみられる柱穴跡があり、西側にもう1間のびる可能性がある。建物跡の構造は不明であるが、内部にも柱が配される総柱建物の可能性がある。柱間寸法は梁方向で約2.5m・1.5m、桁方向で約2.0~2.5mで北側のみ1.4m前後と間隔が狭い。柱穴は直径10~20cm前後、深さ5~20cmと一定していない。埋土は黒灰



第278図 ST2005・2006

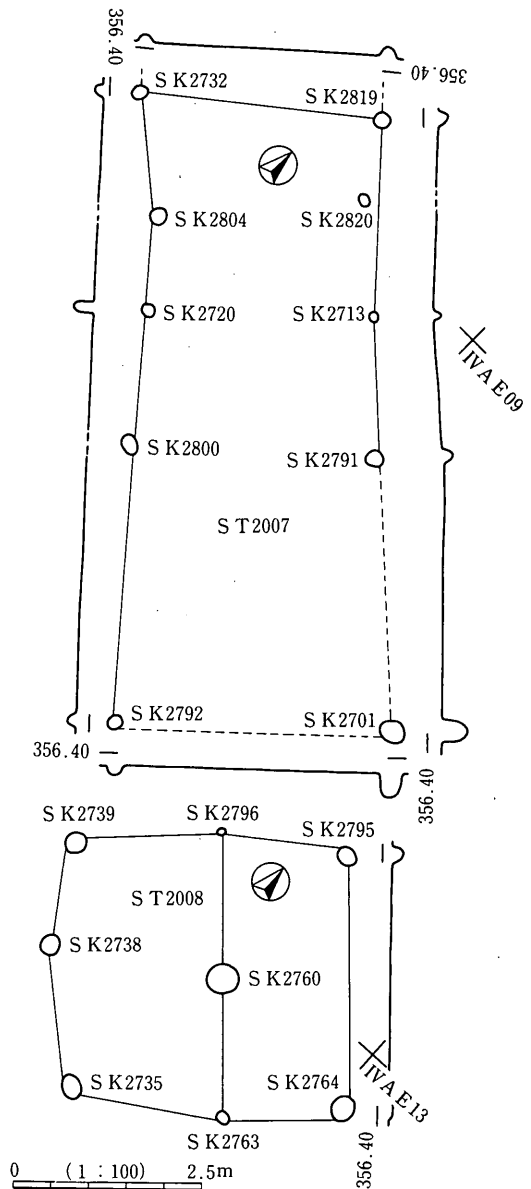
色土である。出土遺物はない。S D1008に沿って位置し、隣接したS T2007とは館内の通路を隔ていることから中世の所産と推定したが、S D1008に近接しすぎるために館時代の所産と断定するには不安がある。本建物跡はほぼ同位置にあるS T2006と建物構造が類似するので、類似した建物が建て替えられていると思われる。その性格は詳細不明であるが、規模的にはS T2007に近いと思われる。

**S T2006** ⑦-2区 IVAH06~AI14 (第278図)

S T2005にほぼ重複するように位置し、整理段階でS K2774・2775・2668・2767・2768・2659・2660・2658・2657・2671・2669・2673・2682・2679・2678をもって本建物跡と認定した。なお、S K2743もその可能性があるが、対応する柱穴がないため本建物跡には含めなかった。直接切り合わないが、位置的にはS K2642・2649・2650との同時存在はありえない。本建物跡もS K2005同様に建物認定に不安を残し、規模や構造の詳細は不明である。確認できる範囲では棟方向がN-55°-Eで、梁行2間約3.2m、桁行3間以上で長さは5.5mを越えるものと見られる。柱配置はS T2005と類似するが、北西隅や北辺側では2基ずつ柱穴が並列しており、改築や補助柱の追加とも思われるが、子細は不明である。柱間寸法は梁行方向で2.0mと1.0mを測り、北側が広い。桁行では1.0m~2.0mとかなり幅がある。柱穴は直径約20cm前後で深さは14~16cmと浅いものが多い。埋土は黒灰色と赤茶色土2種ある。出土遺物はない。本建物跡はS T2005と建て替えの関係にあると思われるが、梁行の長さが一回り小さい。

**S T2007** ⑦-2区 IVAE12~AC08 (第279図)

S D1008区画の南西部にあり、S T2005・2006とは柱穴のまばらな通路と推測される帯状空地を隔てて北西に位置する。この周辺は多数の柱穴が検出されており、類似した建物が建て替えを繰り返したと推測される。このなかで整理段階でS K2732・2819・2804・2820・2720・2713・2800・2791・2792・2701からなる建物跡1棟のみを認定した。しかし、東辺にあたる位置の柱穴が欠落し、建物の認定に不安もある。また、規模や柱配置も不明な部分を残す。建物跡のS K2800が古墳時代のS K2831を、S K2792が同じくS K2748を切っている。棟方向はN-42°-WでほぼS D1008と平行し、梁行は1間約3.2m、桁行は5間で約8.2mの規模である。建物跡の構造は側柱のみ確定し、内部の柱穴は不明であるが、関連するとみられる柱穴跡もあり、総柱もしくは部分的に内部に柱がみられる形態と思われる。柱間寸法は梁行で1間約3.2m、桁行が約1.2~2.0mと一定していない。柱穴跡は直径20cm内外の円形の平面形で、深さは検出面から14~24cmを測る。埋土は黒灰色・黒茶色土である。本建物跡は規模や構造に不確定部分を残すが、規模からみて居住の建物と見られる。時期はS D1008と平行することや、古墳時代の土坑を切っていることから中世の所産と判断した。



第279図 S T2007・2008

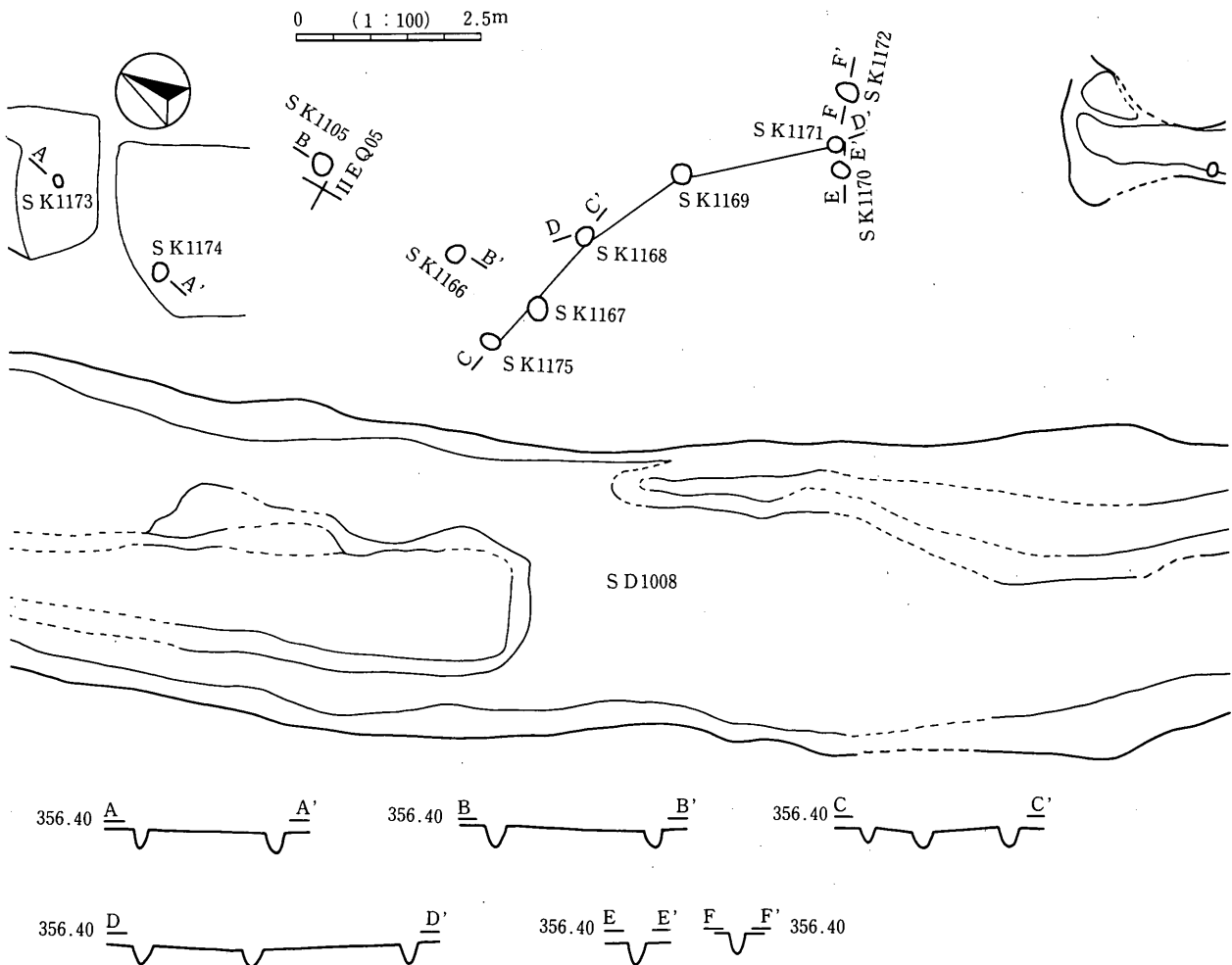


**S T 2008** ⑦-2区 IVAC12~AC14 (第279図)

S D 1008区画の南西部にあり、S T 2007の南東に隣接して位置する。建物の認定は整理段階で行ない、S K 2735・2738・2739・2796・2795・2760・2763・2764が該当する。このなかでS K 2735・2738・2739はS A 2001に帰属内する可能性もあるが、この周辺で木材が出土した柱穴はS K 2760とS K 2738の2基のみなので、両者が関連すると想定してS A 2001北側のS K 2735・2738・2739を本建物跡とした。また、梁・桁行とも2間と推定したが、東側柱列の延長先に位置する柱穴跡もあり、東側に延びる可能性も残される。なお、仮に東へのびていた建物とするとS T 2007とは時期差をもつことになる。棟方向は不明であるが、南北軸はS T 2007とほぼ同じである。規模は東西2間約3.7m、南北2間約3.7mである。建物の構造は東辺中央の柱穴が検出されていないが、総柱建物の可能性がある。柱間寸法は1.4~2.5mと一定せず、柱の通りも悪い。柱穴跡は直径10~40cmの円形の平面形で深さは16~38cmと一定していない。なお、S K 2760では板材片が出土し、S K 2738では木皮が出土した。本建物跡も構造や規模の認定に不確定な部分を残す。建物の性格は東側に延長される場合はS T 2007とは時期差をもつ居住の建物、上記どおりの規模であればS T 2007に付属した建物と見られる。いずれにしろ、位置的にはS T 2007と隣接しており、しかも棟方向は同じか直交すると推測されるので相互に関連した近似時期の建物跡とみられる。

**S A 1006** ⑤-1区 IIEP03~ET10 (第280図)

S D 1008西辺中央の底面溝の土橋状に切れる部分東岸にある。⑤-1区の第1面下層での見逃し遺構確認



第280図 S A 1006

作業で検出された柱穴跡 S K1175・1166・1167・1169・1170・1171・1172・2834をもって整理段階で柵列跡と認定した。S K2825が S D1018に切られ、S K1165・1173と S D1009・1015の関係は不明である。この柵列跡は館内の通路と S D1008が交差する付近に位置するが、厳密には S D1008土橋推定位置とはずれているので、本柵列跡の構造や柵列を構成する柱穴跡の認定には不安も残る。整理段階で推測した配置関係は、館内通路と S D1008が交差する部分付近に S K1165と S K1166が相対して配置され、それぞれ南と北へ続く柵列が配置されるとみられる。このなかで S K1170・1171・1172のように柱穴が近接している部分があり、そこから S K2825へ続くラインと、S K2834へ続くラインも想定されるので数度の作り換えの可能性もある。S D1008交差する部分以南は S K1166に隣接した S K1175から始まり、緩やかなカーブを描いて S D1008縁辺に沿って配置される。その長さは S K2834までは約8.0mを測る。その延長には S T2008と認定した柱穴跡があるが、S T2008のところで推測したように直接関連しないと判断した。また、S K2825を通るラインとすると11.5m以上と思われるが、その延長ラインは近世以後の S D1018が重複するため、上記で推測される規模よりも本来は長い可能性がある。北側は S K1165から S K1173と続き、確認できる長さは約3.5mであるが、その先は不明である。

#### S A2001 ⑤-1区 IVAD15～AE17 (第281図)

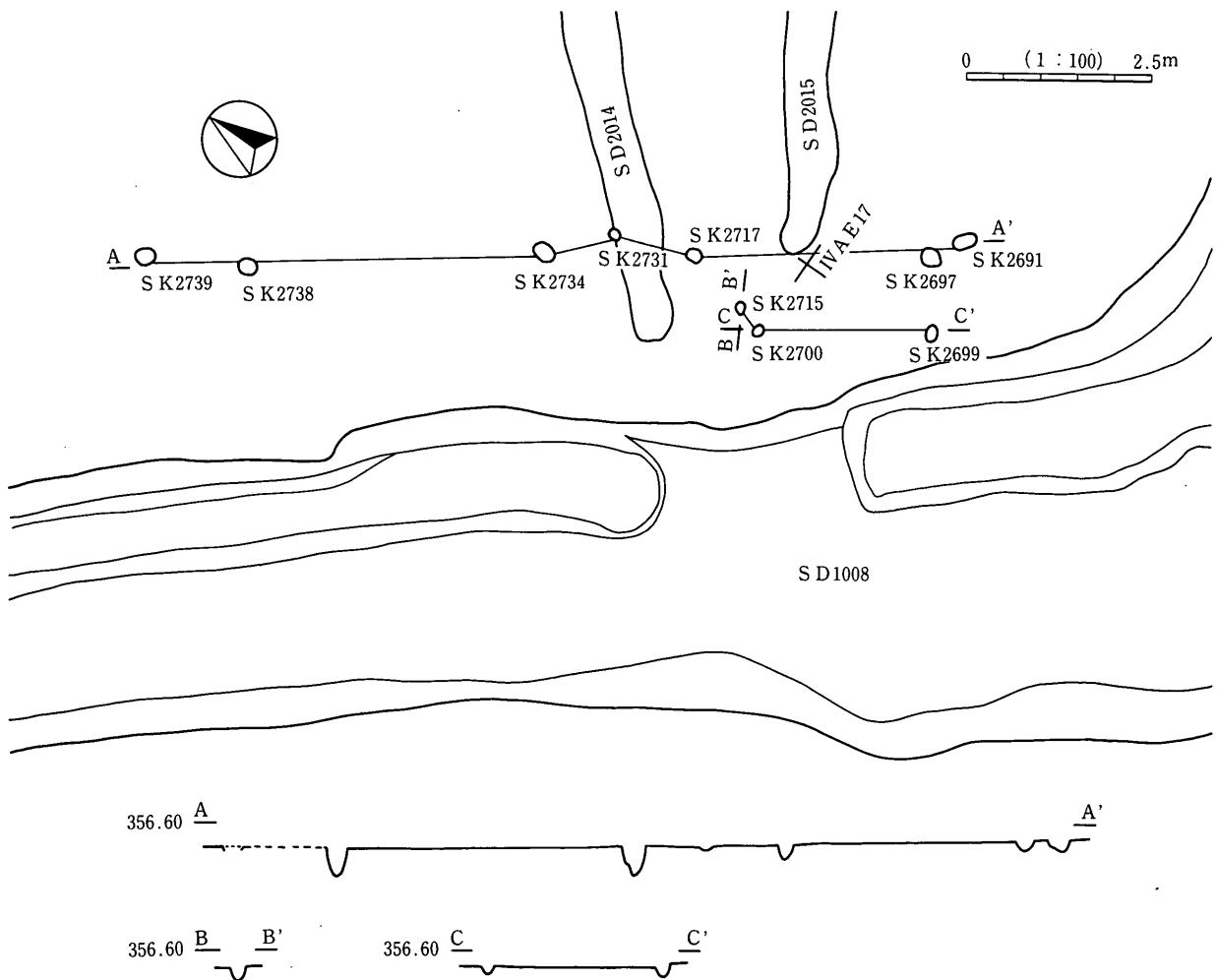
S D1008南西隅付近に位置する。整理段階で S D1008東岸に沿った S K2734・2731・2727・2717・2766・2697・2691を通るラインとして認定したが、付近に散在する S K2699・2700・2715なども関連する可能性がある。また、一番北側に位置する S K2734の延長先には等間隔に S K2735・2738・2739が並列するが、これらは先に述べたように S T2008に含めた。そのため、この柵列跡は S D1008と館内の通路が交差する付近に位置するもので、S D1008西辺に沿って S A1006より続くものではないと思われた。通路と柵列跡の交差部分の構造は明らかにできなかったが、ここも数度の作り換えがあったと推測される。規模は S K2734から S K2691までは約6mを測る。出土遺物はないが、S D1008や通路想定部分との配置関係から中世の館時代の所産であると思われる。

#### ウ S D2001東辺～S D2007域 (B2)

この範囲で検出された柱穴跡は非常に少なく、S D2001の北東部で N-42°-W方向に並列する S K2633・2617・2618・2150とやや離れて北側に S K2451、南側に S K2623があるのみである。これらの柱穴跡周辺では S D2001、古墳時代の S D1016ともに類似した走行方向となっているため、柱穴配列方向からの時期認定は難しい。柱穴跡分布が S D2001北東部の土橋周辺に多いことや、S D1016の他辺では同様な岸際の柱列は検出されていないため、ここで検出された柱穴跡を S A2004と認定し、中世の所産と考えた。

#### S A2004 ⑤-2区 VQT10～RA15

S D2001推定土橋の東側に位置する。北端に S K2451があり、やや離れた南から S K2633・2617・2618・2150が N-42°-W方向に配列する。そして、南端の S K2150からやや離れて位置する S K2623は、本柵列に帰属する可能性もあるが、断定できなかった。規模は S K2451～2150まで約6.6m、S K2150から S K2623までは約5.6m離れている。個々の柱穴跡は S K2623が直径10cm、検出面から深さ8cmと小規模であるが、他は20～40cm前後の円形の平面形で S K2150のみが長軸58cm、短軸34cmの楕円形である。深さは検出面から14～41cmで S K2150以外は深さ30cm以上となる。埋土は赤褐色砂質土、黒褐色土、褐灰色土、灰黄褐色土と一定していない。この柵列跡は先に述べたように古墳時代・中世の判断に迷ったが、位置から中世の S D2001の推定土橋付近の防御の施設と見られ、本柵列の走行方向の延長先が S D1008の土橋付近にあたる点から中世の所産と推測した。なお、西側にある古墳時代の比較的大きな建物跡背後を区画した施設の可能性もあるが、S D1016の他辺では類似した柵列跡が検出されていないため、古墳時代の可能性は低いと判断した。出土遺物はない。



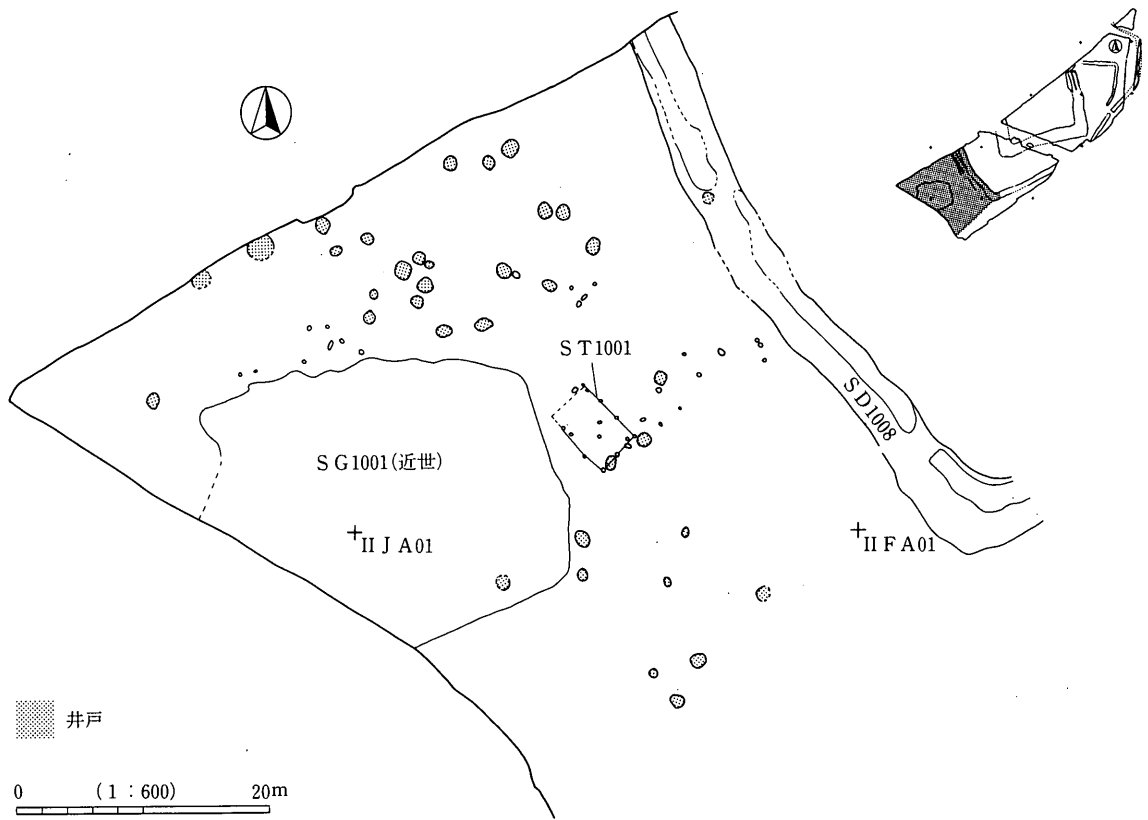
第281図 S A 2001

エ S D 2007～S D 1008東辺域 (B 3)

この範囲は外堀区画内の東端にあたる。ここでは古墳時代遺物集中S Q 2016の調査終了後に、その底面上でS K 2536～2560・2562・2563の27基の柱穴跡が検出された。分布は南北方向に並列するものが多く、しかも坪境に一致するS D 2006を西限とし、東側のS D 2009までの範囲に限定されて分布するように見え、配置からは建物跡・柵列跡の認定はできなかったが、一定の方向に配列している可能性はある。これらの柱穴のいくつかは古代の溝跡と重複するものがあり、特に平安時代の洪水砂を埋土にもつとみられるS D 2008・2009の検出時には重複する柱穴跡が検出されていないことから、これらの柱穴跡群は古代の所産と推定して中世からは除外した。しかし、微高地上では他に古代の建物跡が検出されていないことや、微高地端にある立地の特異性の問題、さらにS D 2008・2009ともに浅く、砂層の残存も不良なので上面で見逃している可能性も残る。ここでは検出状況と建物跡の分布が古代の溝＝土地区画に規定されている可能性を尊重して、古代で扱うことにした。

オ S D 1008区画外西部 (C) (第282図)

S D 1008の西外側にあたる。検出された柱穴跡は少ないが、大きく二つのグループに分かれる。一つは⑤-1区D地区を中心として8基前後の柱穴跡が分布するもので、南側は近世末～近代のS G 1001に切られており、本来はもう少し分布が広がる可能性がある。この分布からは建物跡か柵列跡なのか判然としない



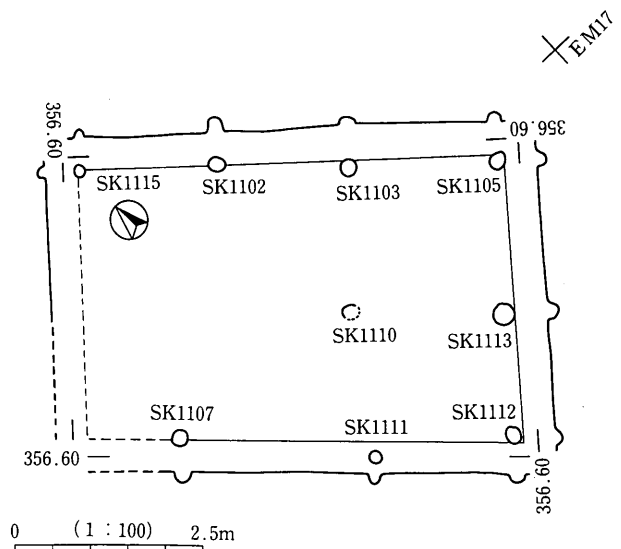
第282図 SD1008区画外柱穴分布

が、柱の密集の仕方からも長期にわたって継続的に構築されたものではないとみられる。

もう一つは⑦-2区のE地区を中心とする。ここでは整理時にST1001とした1棟前後の建物跡が認められ、その東側にいくつか柱穴が散在する。ここも長期にわたる継続的な居住とは認め難い。この2つのグループ以外にも散在的に柱穴跡が検出されているが、建物になるのか判然としない。これらの柱穴跡は形状や分布から類似時期の所産と推定され、一部に古墳時代SD1007を切る柱穴跡が見られることから、古墳時代以後とみられる。しかも周囲の遺構からして中世の可能性が高いと推測される。

**ST1001** ⑦-2区 IIEJ15~EK18 (第283図)

整理段階で認定した掘立柱建物跡である。SK1102・1103・1105・1107・1111・1112・1115が該当する。また、SK1110も配置から本建物に含まれる可能性がある。なお、周囲に散在する柱穴跡については柵列なのか建物なのか明らかにできなかった。ただし、建物跡としても同形態・規模の建て替えとはみられない。この建物跡はSD1008西外側の微高地南端近くに位置し、SD1007を切っている。また、直接切りあいは認められなかったが、井戸跡SK1083は建物と重複する位置に当たるため時期差があると考えられる。北西隅の柱は検出されていないが、



第283図 ST1001

規模は梁行1間約3.7m、桁行3間約5.7mで、構造は内部のSK1110が束柱か棟を支える柱かは判断できなかったが、少なくとも部分的ながら床をもつ構造である可能性は認められる。棟方向はN-45°-Wで、柱間寸法は梁行中間に1本入るとすれば2.0~2.5m、桁行は1.7~2.2m前後と認められる。柱穴は直径20cm前後で検出面からの深さは20cm以下の浅いものがほとんどであるが、SK1110のみ36cmと深い。埋土は黒褐色土を基調とし、SK1112のみ柱痕が認められている。出土遺物はない。本建物跡は近くに鉄滓を出土した井戸跡がいくつかあり、それらとの関連も注目される。

### (3) 溝跡

中世の溝には古墳時代SD1016跡の窪地に構築されたSD1010~1012、館の堀であるSD1008・2001・2007、子細な時期は不明ながら中世と思われるSD1009・1052がある。SD1009・1052以外の溝は複数調査地区に渡って分割調査され、初年度調査では溝の連続関係が明らかでなかったために同一の溝に別番号が付けられたものがある。これらの溝番号は整理段階でできるだけ統一した。子細は各溝の項で述べる。

#### SD1009 ⑤-1区 ILEN01~EO02 (第284図)

微高地1面目で検出した。SK1027・1028・1030に切られる。北端は調査区外へ延び、調査区内ではSD1008にほぼ平行して走り、南端は攪乱で切られる。本溝跡南端延長先にはSD1013・1014・1018があるが、形状・埋土が全く異なることや、この攪乱部分で一旦地形が落ち込むことから、本溝跡とは直接関連がないとみられる。調査区内では長さ5.6mを確認し、幅は90cmと一定している。断面形は逆台形で検出面からの深さは20cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色のシルトの単層で、遺物は古墳時代土師器片、古代の須恵器杯Bなどがある。本溝跡の時期は詳細不明であるが、SK1030に切れ、走行方向がSD1008と類似することから中世の所産の可能性が高いと思われる。性格は区画の溝と思われる。

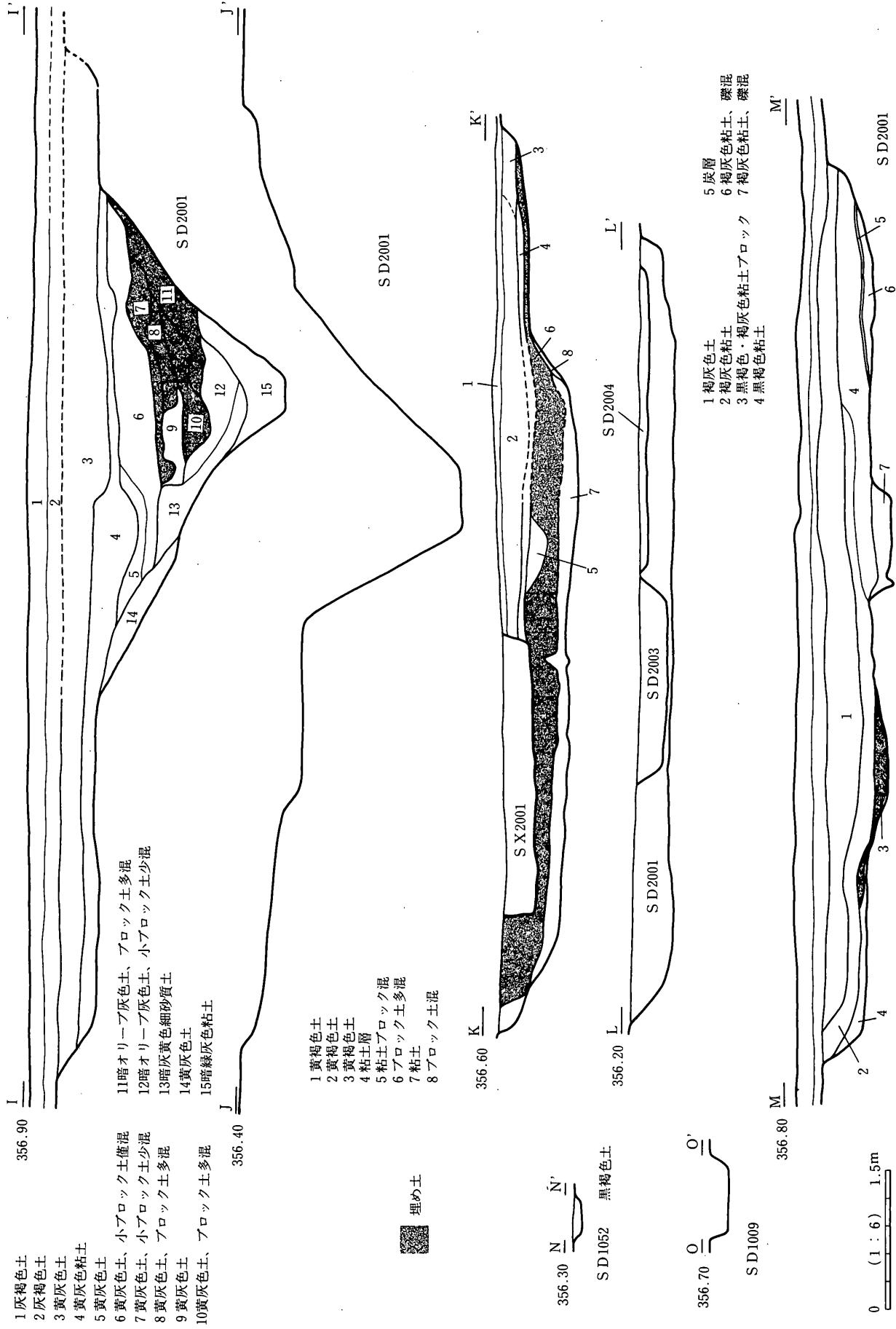
#### SD1010・1011・1012 ⑦-2・⑤-1区 IIEJ02~IVFD02 (第284図)

古墳時代大溝SD1016の上層で検出された溝跡群で、ここでは一括して扱う。これらの溝跡はSD1016埋土上層の水田域平安時代耕作土に対応すると思われる暗褐色粘土上層で検出したが、SD1010・1011は調査区壁の土層観察や出土遺物からみて、さらに上層に立ち上がる可能性がある。また、出土遺物の対比からSD1012も同様と思われる。⑤-1区調査では砂質埋土のSD1011が最初に検出され、続いて試掘溝を入れたところでSD1011を切るSD1010の存在が判明した。さらに調査を進める中でSD1010南西に広がる部分が検出され、SD1012とした。なお、⑤-1区では各溝で出土した遺物はそれぞれ2時期に分離できるため、遺物取り上げ時に混乱して取り上げている可能性がある。しかし、本来の溝に戻すことはできなかったので調査時に取り上げた番号で報告することにした。2年目調査の⑦区ではSD1002にほぼ重なるSD1010とSD1011が検出されたが、SD1012の延長先は確認できなかった。なお、これらの溝は地形変換点にあたる⑦-2区SD1008コーナー以南では近世水田の削平を受けて不明となる。

SD1010はSD1011を切り、SD1002に切られる。SD1012との関係は調査ミスで直接確認していない。幅は1.3m、長さは⑦区の途中でSD1002に切られて不明瞭となる部分までの34.6mを確認した。走行方向はN-34°-WでSD1011と同方向である。断面形はU字状で検出面から深さ17cm前後を測るが、SD1012が始まる付近で一旦浅く立ち上がり、再び南側から始まる。出土遺物はSD1011の所産であるものが混じっているが、東濃産の山茶碗と龍泉窯系画花文青磁碗、カワラケなどが出土している。

SD1011はSD1001・1002・1008・1010・SK1039に切られる。幅約3m、深さ10cmで、立ち上がりは緩やかで、SD1010は本溝跡の西辺をほぼ同方向で走る。非常に浅く、溝というよりもSD1016埋没後に残った凹地地形の可能性もある。埋土は北部ほど砂を多く含む褐色土の単層で、砂は平安時代の洪水砂の混じり込みと思われる。(助)長野県埋蔵文化財センター年報5(1988)ではこの砂を含む埋土から本溝跡





第285図 中世溝跡セクション

には流水があったとしたが、ここで訂正しておく。遺物はS D1010やS D1012と混乱しているが、カワラケや白磁IV類碗の底部が出土している。

S D1012はS D1010が一旦浅くなる付近から西側に広がり、⑦区では延長先が確認できなかった。S D1010との関係は確認していない。本溝跡は非常に浅いためS D1011同様に凹地地形の可能性はある。出土遺物は白磁IV類の碗、古瀬戸平碗、在地産の須恵質のすり鉢がある。

以上のなかでS D1011が最も古い中世前半の所産で、S D1011に沿うようにS D1010が構築され、さらに出土遺物からみてS D1012とした凹地が派生したと推測される。いずれの溝も走行方向がS D1016に一致し、出土遺物からはS D1011とS D1012には時間的な隔りがあると見られるが、S D1016跡の凹地に規定された一連の溝と推定される。また、S D1011が走行方向の異なるS D1008に切られることから、これらの溝跡はS D1008に先行する可能性が高い。このことからS D1008の上限は、これらの溝出土遺物との対比から14世紀後半以後と推測した。

**S D1008 (S D2049)** ⑤-1・⑦-2・⑧-1・⑩-1・市道下・⑤-3区 IIEQ01～IVFE01～BK06、VWD14～ND20～MN14 (第284図 PL47)

館の外堀にあたり、⑤-1区から⑤-3区までの6地区に分割調査された。溝番号は初年度調査の⑧-1区でS D2023としたが、⑦区の調査で⑤-1区から⑧-1区まで連続することが確認され、さらに⑤-1区の底面検出のS K1040はS D1008の一部と判断されたので、これらはすべてS D1008に統一した。なお、S K1040は隣接した別S Kに再度振り直した。また、2年目調査の⑤-3区S D2049もS D1008の一部と考えられるので一括して扱う。各地区の1面目で検出し、本溝跡がS D1016・1011、⑦区S K2751を切り、S D1001・2029・2031・2033とS A2005に切られる。走行方向から交差するとみられる⑤-2区S D2013とは直接切りあいは確認していないが、S D2013が後出する可能性がある。また、本溝跡と重複する位置にあるS K1040はS D1016調査中に存在が判明した。上面では確認できていなかったため、本溝跡がS K1040を切るとみられるが、見逃した可能性もある。

調査で確認できた長さは総延長約230mで、⑤-1区でやや屈曲しながら⑦区へN-35°-Wの方向に続き、⑦-2区で直角に折れてN-65°-Eの方向で⑧-1区南部を貫いて一旦調査区外へ出る。そして、⑩-1区南西部から再び調査地区に現われ、⑩-1区内で土橋を形成しながら、微高地縁辺付近に沿ってカーブを描いて市道下調査部分まで連続する。その先は子細不明であるが、2年次調査の⑤-3区の北西壁に断面の一部がかかったS D2049も規模や埋土の類似からS D1008と考えられ、市道下で直角に西へ折れると予想される。なお、この先は長野市教育委員会によって隣接地に入れられたトレンチに於いて対応すると見られる溝跡が確認されている。(長野市教育委員会1992『石川条里遺跡(6)』)それによると、現用水近接地を西に延び、途中で南へ折れて⑤-1区へ接続すると推測され、ほぼ館を全周すると見られる。この長野市教育委員会調査地点の位置は後述する館の構造のところに掲載した。また、明治年間の公図では⑤-1・⑦-2・⑧-1区までの位置は細長い水田として痕跡が認められ、⑩区以东は痕跡を拾うことはできないが、ほぼ同じ位置が土地区画の境となっている。この溝跡の構築された場所は⑤-1～⑧-1区間でS D1016埋没後の凹地縁辺、⑩区以东は地形変換点付近に位置しており、全体的に地形に合わせて構築されていると見受けられる。しかし、⑤-1区の北端で緩く「く」の字に屈曲する部分はS D1016の窪地から離れてS D2001と平行すると見られる点や、⑤-1～⑧-1区間の配置場所は中心屋敷地の約半分の長さの距離を置いてS D2001と平行する点から、緩やかながら館の一定の面積を意識した平面プランの大枠のなかで、具体的な設定は地形の変換点に選択されたとみられる。また、全体的に西辺は直線・直角に構築されているが、⑩区の東部では緩やかなカーブを描いている形態差がみられる。

溝の深さは各調査地区で検出面からほぼ80cm前後を測るが、地形的に低い部分は必然的に溝底面の標高



も低くなっており、調査地区内では⑩-1区がもっとも低い。⑤-1～⑧-1区では幅約4～5m、深さ40cmの逆台形の溝底部に深さ40cmの細い溝が付設された断面形であるが、⑩区以東は幅約2～3mで深さ80cmの逆台形の断面形となる。西辺周辺の溝断面の形状については初年度調査の⑤-1・⑧-1区では館内側が深い逆台形の断面形と思われていたが、2年目調査の⑦区では底面に細い溝を付設する形態であることが判明した。そこで⑤-1・⑧-1区の調査区壁土層図でS D1008断面形を再確認したところ、⑦区とほぼ同様の形態になることが知られ、⑤-1区S D1016調査中に検出された細い溝やS D1008底面検出の旧S K1040がこのS D1008底に付設された細い溝であると推測した。しかも、この溝を断片的な記録から復元してみると、⑤-1区中央部付近と⑦-2区屈曲部付近の2か所で土橋状に切れ、⑤-1区ではこの土橋を挟んで、北側はS D1008西側（外側）、南は東側（内側）にずれて構築されていると推測された。なお、⑤-1区と⑦-2区の土橋状に切れる部分は、帯状に柱穴跡分布が希薄な通路と推定される部分の延長に一致している。

埋土は高台に位置する⑤-1～⑧-1区では底面の細い溝部分や上部の浅い部分底部に褐灰色粘土、その上部は砂を含む褐灰色土、褐灰色粘土、褐灰色土と分層されたが、もっとも低い⑩区では暗褐色粘性土の単層である。S D2007でも同様の状況が確認され、流水はなかったとみられるが、最も低い⑩区にS D1008内の水が集中滞水しやすい状況であったと推定される。なお、埋土中に礫が散在的に検出され、特に東辺の市道下では比較的多数の礫が投げ込まれていた。遺物は古墳時代～古代の土器片と中世焼物・石製品・羽口・鉄滓などがある。中世焼物では内耳鍋がもっとも多く、続いてカワラケ、少量ながら瓦質・土師質火鉢、土師質釜、在地産須恵質・瓦質・土師質すり鉢、常滑甕、古瀬戸平碗・天目茶碗・皿・瓶子、山茶碗、白磁皿、青磁碗などが出土している。また、市道下調査部分では大窯製品や伊万里、瀬戸美濃連房製品、土管など近世以後の遺物が混じる。これはS D1008跡が近世に一部用水として利用されていたためと思われる。遺物出土量は⑦-2区と⑩区市道下が多く、⑩区市道下では内耳鍋も大型破片が多い。なお、⑧-1区は上部を重機で掘削したため、実際に得られた遺物量は少なく、西辺での出土量の多さは居住域と近接しているからとみられる。しかし、市道下は隣接部分に居住遺構がないのに出土遺物量が多い理由は明らかにしえなかった。完形率の低さも考えると、本溝の遺物は居住している間に直接廃棄されたものとするよりは、2次的に入った可能性もある。また、⑦-2区では概略上層から3分割して遺物を取り上げたが、底面の溝内から出土した遺物は非常に少なく、むしろ上層のほうが多い傾向がある。

以上のように本溝跡は館外縁部を巡る外堀であるが、調査区範囲内では地点により形態が異なる様相がみられた。大きくは館西側が底面に細い溝を付設した断面形で直線・直角に曲がり、東側で断面が逆台形で平面は緩やかにカーブする形態となる。さらに西辺内では底面の細い溝が外側と内側に付設される部分の違いがみられる。このように同じ堀でありながら場所ごとに形態差が見られる様相は、内堀や館全体の遺構配置にも同様の傾向が認められる。想定される理由は機能的な意味と構築時期差が考えられるが、この2つの可能性に関して検討してみたが、結論を下すまでには至らなかった。

まず、時期差を考えた場合、S D1008の土橋周辺が形態の変換点となっており、しかも早目に廃絶すると思われるS D2007がこの付近で立ち上がる点が注目される。すなわち、本来はS D2007とS D1008土橋西側を結ぶラインが外堀であったが、後にS D2007を廃絶して東側のS D1008とした場所に改修されたとも想像される。このことは西辺内の形態差にも関連させて考えることも可能である。すなわち、西辺もこの改修がおよび、上部の逆台形の広い溝部分と底面の細い溝部分が構築時期をもっているため、底面の細い溝の配置場所がずれる現象が生じたと考えられるのである。この点ではS D1008の改修の可能性はS D2007とS D1008の接続の仕方と、S D1008西辺内での土層・遺物が問題となる。西辺に関して土層図からみると、⑤-1・⑦-2区土層断面図では底面の細い溝部分と上部の逆台形溝跡との間が分層され、底面の細い溝が先行、もしくは同時とみられる。それに対して、⑧-1区では細い底面の溝上部の上層が落ち込む

ように凶化されており、底面の細い溝部分が後に掘り込まれたように見え、時期差の判断はできなかった。また、⑦-2区では層位ごとに遺物を取り上げているが、底面の細い溝部分では内耳鍋が見られないため、先行する可能性もあるものの、遺物総量が少なすぎて断定は躊躇される。結論としては、西辺の上部と下部が時期差をもつかどうかは結論が下せなかった。また、SD1008とSD2007との関係についても、SD1008土橋西側の立ち上がり位置がSD2007とはスムーズに連続しない点で問題が残る。以上のようにSD1008の改修については、断片的な様相からはその可能性も想定できるが、調査結果からは断定できなかった。

なお、形態差を機能的な面から考えた場合には、内堀SD2001は明らかに西・南への防御意識が高いことから、館の正面－裏手意識が本溝跡の東西の形態差にも投影されたと推測される。しかし具体的な機能差となるとSD1008西辺は深さからすると東側より防御性が弱いようにみえて、SD2001のような防御の強化としてはみられない。別の解釈として、SD1008では雨水や湧水が最も低い東辺側に集中するため、水の処理のために東側が深く構築されたと考えられる。これは埋土からは⑩区が粘土の単層となる点でその可能性もあるが、断定はできなかった。

**SD2001** ⑤-1・⑧-1・⑧-2・⑩-1・⑤-2・県道下区 VUJ09～IVAI04～VWB16～VQR08 (第284・285図、PL47)

館の中心屋敷を巡る堀で、明治年間作成の公図でも微高地内の水田としてその痕跡を拾うことができる。SD2001上層で検出された⑧-2区SX2001、⑤-2区SD2003・2004はこの近世以後の水田耕作に関わる遺構の可能性はある。しかし、後世に水田として改変を受けた状況はあまり注意せずに調査したため、遺物の混入や溝の変遷・形態が十分把握しきれていない。溝の調査は複数地区にわたる分割調査となり、検出はそれぞれ第1面である。精査は⑤-2・⑩-1区と⑤-1区上層は手掘りで掘り下げたが、⑤-1・⑧区のV字状に深くなる部分については重機で掘削したため、遺物の採取も十分に行っていない。なお、⑤-2区SD2017・2021とした部分は本溝跡の一部と判明したので整理では統一した。SK2015・2410・2412・2608・2863・2865、SD1016・2002・2015・2019を切り、SD2003・2004・2029、SX2002に切られる。また、SK2881はSD2001底面で検出されたが、切り合いは不明である。

本溝跡は西・東辺はN-10°-W、南辺はN-75°-Eとほぼ東西南北方向に一致して「コ」の字状に検出され、調査区北側のSD2001痕跡と思われる水田を考えあわせると、ほぼ1辺約50mの方形区画を形づくるものと思われる。断面形は全域で上端幅約10m、深さ約40～70cmの台形に掘り込みがみられ、南・西辺はその底面から幅4m、深さ約1.6～1.8mのV字状に掘削されている。このV字状の掘り込みは⑧-2区の南東隅近くで井戸状の落ち込みを付属させて立ち上がり、そこから以東の東辺は極端に浅くなる。なお、この南・西辺のV字状の落ち込みは⑤-2区と⑤-1区間・⑧-1区内でずれを生じており、数カ所に分割して構築・改修されたと考えられる。

土橋はSD2001東辺北東部に想定されたが、これ以外の土橋は確認できていない。東辺北部土橋は上部にSD2003があるが、下の溝が途切れ、しかも幅が狭くなっている。この場所は館内の位置関係からみてもSD1008土橋からSD2007区画部分内側を通してほぼ直線的につながって通りは良い。しかし、この部分は鬼門とされる北東方向に当たるため、正面入口とするには躊躇される。むしろ、SD2001が西・南辺が深くV字状になっていることや、中心屋敷内の空閑地が西側にあると推定されることから西側未調査部分に正面入り口があった可能性が高いと思える。なお、明治年間の公図で中心屋敷地部分への道は南辺中央に描かれ、この道のライン沿いではSD2001底でSK2462とSK状の落ち込みが検出されているが、これらの土坑はSD2001に対して直線的に配置しておらず、橋脚の可能性は低いので、この道は近世に自然堤防側から入るためにつくられた道と思われる。

埋土は場所ごとの溝形態の違いを反映して若干様相が異なるが、溝底面上の溶脱した粘土層と最上層の粘土層・黄灰色や褐色土層がほぼ共通して見られる。西・南辺ではこの土層に加え、底面の粘土層上に砂質土、中位にブロック土を含む埋土が含まれる。このことから、使用中は滞水状態もみられるが、廃絶以後に埋め戻され、若干の堆積土がみられた後に上部は水田として再利用されていく過程が窺える。なお、埋土と捉えられるブロック土の堆積は内側から外側へ傾斜しているため、土壘を破壊して埋め戻している可能性がある。また、溝断面形は西・南辺の上部や東辺にみられる幅広く浅い部分と、南・西辺下部にみられるV字状の落ち込み部分に分けられるが、これが構築時期差によるものかは明らかにできなかった。なお、西・南辺での上部の広い逆台形部分と下部のV字型部分の形態差が構築時期差になる可能性も想定されるが、堆積状況からみると、V字型の部分が浅く逆台形になる上部よりも同時かそれ以前の所産である。更に、上部は⑤-1区では館廃絶後の水田化に際して拡張された可能性もあるが、⑧-2区では埋め土が上部の浅い部分まで入り込んでいるので館使用時には存在していたと考えられる。また、⑤-1区溝断面からは掘り直しの可能性も捉えられたが、他では確認されておらず、子細不明である。

出土遺物は弥生時代から古代の土器、中世・近世・近代の焼物がある。中世の焼物には内耳鍋、カワラケ、瓦質火鉢、在地産須恵質すり鉢、常滑甕、古瀬戸平碗・鉢・小皿・四耳壺、渥美壺、白磁碗、青磁碗、青白磁瓶子があり、近世以後では磁器の湯飲み、徳利、土管、瀬戸美濃連房灰釉碗などがある。⑤-1区上層と⑤-2・⑩区以外はあまり丁寧に遺物採取していないので、場所ごとの遺物出土傾向は不明である。

本溝は中心の屋敷を区画し、防御的な性格を合わせ持つ堀と思われる。南・西辺方面は溝を深くV字状に構築して防御施設としての性格が強調されているが、東辺は浅く、地点によって形状に大きな違いが認められる。この違いは外縁部をめぐるS D1008でも認められ、館全体を貫く計画性によって生じていたと推察される。さらに、S D2001の西・南辺が防御強化されていた理由は正面が西（南）にあり、防御と視覚的効化も狙ったと考えられる。なお、このS D2001廃絶後の水田に転用された段階の状況は詳細を明らかにできなかった。

#### S D2007 ⑤-2・⑩-1区 VQT08~RO10~WJ05 (第284図、PL47)

本溝跡は微高地東部のやや低地よりに位置し、S D2001北東部付近から始まって東方向に走り、⑤-2区と⑩-1区境付近で直角に南に折れて⑩-1区S D1008土橋部分まで延びる。明治時代の公図ではその痕跡を確認することはできない。東西方向に走る⑤-1区と直角に折れて南へ走る⑩-1区とに分割して調査したが、屈曲部分が両調査区境にあたったため、それぞれの地区で走行方向の異なる別の溝として遺構番号（⑩-1区はS D2028）がつけられた。しかし、溝端部が両地区境で接している点や形状・時期が同じと思われたことから後に調査区境で「L」字状に折れる同一溝と判断して統一した。また、西端は調査時には調査区外へ延びると考えられたが、西端が非常に浅く、埋土が他の部分と異なることや、S D2001東辺北東部の土橋推定場所に近接しすぎていることから、S D2001北東部の土橋状の切れ目部分付近で立ち上がるものを誤認して掘り過ぎていると思われる。それぞれの調査地区の1面目で検出した。古墳時代のS D1016、S Q2016、古代のS D2006を切り、S K2036・2037・2636・2639・2873に切られている。

西端を掘りすぎている可能性があり、規模は確実なところではS D2001北東部付近からN-85°-Wの方向で約23m、⑤-2・⑩-1区境で南に屈曲してN-8°-Eの方向に先端付近がやや緩やかなカーブを描きながら約33mを測る。先端は⑩-1区のS D1008土橋付近で立ち上がる。この南端部付近で緩やかにカーブする部分以外は、外側を巡るS D1008東辺とほぼ平行すると思われる。幅は⑤-2区の東部で最大2.7mを測るが、ほぼ2m前後で一定している。断面形は逆台形を呈し、底面は東へむかって緩やかに傾斜し西部では検出面からの深さ30cm、南部で70cmを測る。

埋土は西部の浅い部分で上層の暗灰黄褐色・下層の暗灰色粘土層に分層され、S D1016と重複する部分

ではSD1016埋土のブロックが多く含まれている。南部では暗褐色粘性土の単層である。このことから南の低い部分では滞水しやすい状況があり、北の浅い部分ほど下部の粘質土の堆積が薄く、上層に別の堆積土が載る傾向が窺える。また、SD1016重複部分ではブロック土が含まれる点から人為的に埋められている可能性があるが、他の地区では確認されないため溝全体が埋められたのか判然としない。出土遺物は弥生時代～古代の土器と中世の焼物があり、中世の焼物には内耳鍋、カワラケ、土師質すり鉢、古瀬戸鉢がある。中世の遺物は散在的に破片で出土している。

本溝跡は館東側のSD2001北東部の土橋状に切れる部分からSD1008土橋付近にかけて位置する堀であるが、具体的な機能や性格は不明である。位置的にSD1008土橋とSD2001土橋をつなぐことから館東側の入り口付近の防御施設、あるいは東側のSD2001を補う防御施設、SD2001土橋が北東部にあるための宗教的な意味の施設とも思われる。また、配置位置は他辺のSD2001とSD1008の距離にほぼ等しいので、何らかの区画の意味があったと推定される。しかし、本溝跡が井戸跡に切られることや、出土遺物からもSD1008・2001よりも早くに廃絶していた可能性があり、本溝跡の配置位置やSD1008の西・南辺では時期差をもつ可能性も残されていることを考えあわせると、SD1008西辺と本溝跡が対応していた段階があつて、後に南辺東側～東辺が改修された可能性もある。この点についてはSD1008のところで述べたように本溝跡南端がSD1008の土橋とはスムーズに対応していないので、断定までには至らなかった。

#### SD1052 ⑦-1区 II OC05～OD08 (第284図)

微高地西側の見逃し遺構確認の2面目で検出したが、この部分は低地境にあたって1面目の上層近世水田土層が残存したため、1面目では見逃したと思われる。また、調査区壁の土層観察から本溝の東側は後の水田耕作によって削平されていることが知られた。本溝はほぼ南北方向に走る浅い溝で、東半分が後の耕作によって削平されている。調査区内では約4.6mを検出した。幅は約60cmで、深さは検出面から約10cmを測り、断面形は浅い逆台形を呈する。埋土は暗褐色のシルトである。出土遺物は古墳時代土師器片、珠洲の可能性のある甕が1点出土したのみである。時期は上面がSD1030・1031の構築面にあたる水田土層に覆われることから中世から幕末以前の所産と考えられ、ここでは埋土および、珠洲の出土から中世の可能性があると捉えた。

#### (4) 遺構小結

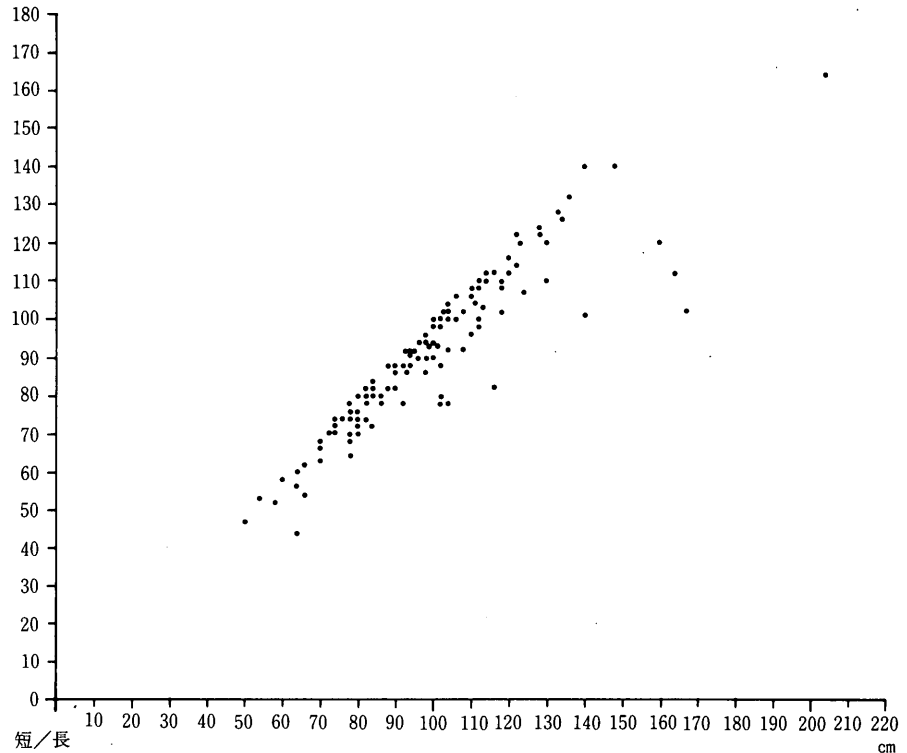
##### ア 井戸跡

中世の井戸と考えた遺構は全部で132基あり、ほとんどが素掘井戸である。ただし、このなかには井戸に類する形態ながら浅すぎるものや、帰属時期の判断に迷ったものも含まれるが、中世の井戸の可能性があると考えた土坑の傾向についてまとめてみる。

##### A 形態

円筒形(124基)・すり鉢状(5基)・平面方形の箱形(3基)の3種が認められ、なかでも円筒形のもの圧倒的な数を占める。平面規模では直径50cm～2m前後までであるが、もっとも多いのは直径70cm～1.2m前後のものである。井戸跡の認定は形態を基準としており、掘削された深さによって一定の基準を設けたわけではない。そのため深さにかなりばらつきが見られ、井戸ではない遺構も含まれる可能性もあるが、深さ1mに満たない浅い井戸でも曲物出土しており、基本的には井戸・井戸に類する施設であることは妥当であろうと考えた。そして、深さにばらつきが見られるのは地下水を汲み上げる井戸と天水を溜める井戸の2者が存在するためと考えた。この想定に基づき、地下水を汲み上げる井戸では地下水位との関係で底面標高に一定の関係が現われ、天水を溜めるとすれば掘削される深さに一定の関係が表われると仮定して、井戸底面標高と掘削深度の2種のグラフを作成してみた(第288図)。井戸底面標高では355.70～355.

80m前後にピークを持つ355.00m以上のIグループ、354.80mにピークをもつ354.50~354.90mのIIグループ、353.60~354.40mのIIIグループ、353.30m以下のIVグループに分離されるようである。ただし、底面標高が低いものほど数値がばらつく傾向がある。次に検出面からの掘削深度をみると①0~1.3m、②1.4~2.0m、③2.2~3.0m、④3.8~4.8m、⑤5.7mの5グループがあり、①が圧倒的に多い。この掘削



第286図 中世井戸規模グラフ

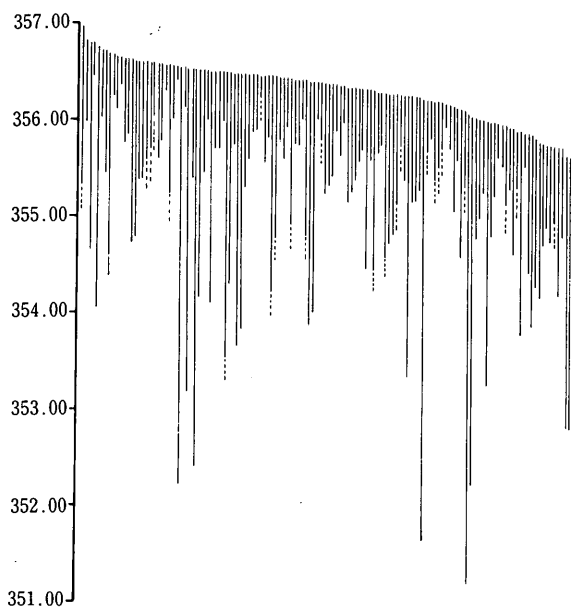
深度グラフでは掘削深度の深いグループで④と⑤が比較的明瞭に分離される以外は全体的に底面標高グラフと類似した傾向を示す。この両者のグラフでは各グループに所属する個々の井戸跡が必ずしも正の相関を示さないが、それは低地に近いほど掘削深度が浅くとも底面標高は低くなるからである。

この天水井戸と地下水井戸は、S K1020のように本来は深く構築されながらも、埋没して浅くなっても再使用される例があることや、低地境では識別が難しいことから、両者の厳密な区分はできないものもある。敢えて先のグラフで基準を設定するとすれば、深度分布グラフで底面標高355.00m前後、掘削深度では1.3mぐらいがその境となる可能性がある。なお、この深さの異なるグループは平面分布においても異なった傾向が窺えている。

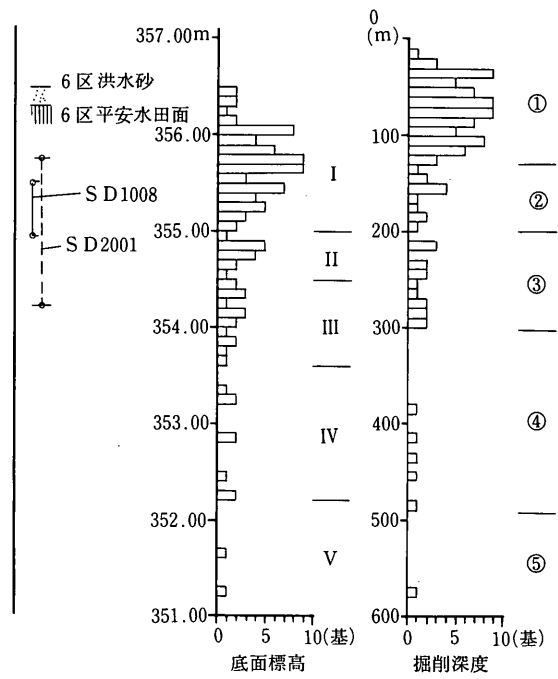
## B 分布

全体の井戸の分布は⑤-1・⑦-2区東の西境にある現用水（用水6）からS D2007あたりまでの範囲に納まり、S D2007以东では井戸が少なくなる。この範囲は館推定範囲と重なり、調査地区内の字「柗下」地籍範囲にも一致している。ただし、厳密に言えば⑦-2区の低地よりの井戸は「柗下」地籍からやや外れる。また、館堀との関係ではS D1008に切られる可能性があるS K1040、S D2001では前後関係が不明なS K2881の各1基があり、S D2007のみ5基の井戸に切られる。それ以外は基本的に館内・外堀と切りあう井戸は少ないので大概の井戸は館堀を避けていると考えられる。従って、多くは館の存続時期～館の廃絶以後の地割が継承された段階の所産と予想される。なお、字「柗下」西境を流れる現用水以西の低地境付近にはいくつか類似遺構があるが、これらは明瞭なブロック土を埋土にもち、短期に使用されて埋められる性格と思われる点からは微高地で検出された井戸とは異なり、低地域で検出された土坑群に類する性格と捉えられる。

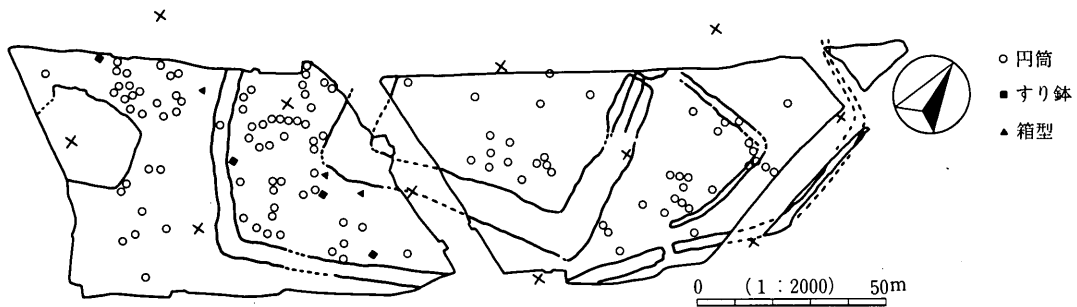
この館推定範囲内での井戸分布は圧倒的に西側に偏在しており、さらに単独と密集した群を形成する井戸の2者がある。なお、井戸同士が重複する例は⑧-1区S K2415・2316、⑩-1区S K2861・2862の2例のみで、井戸の数の多さに比して井戸同士の切りあいは少ない。



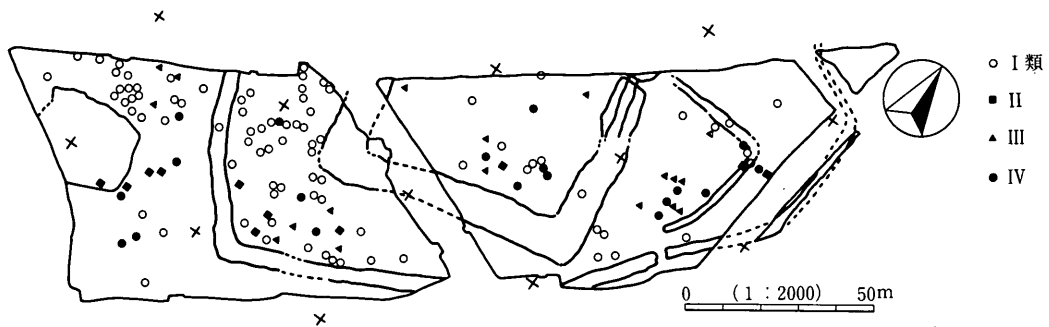
第287図 検出面標高別井戸深度グラフ



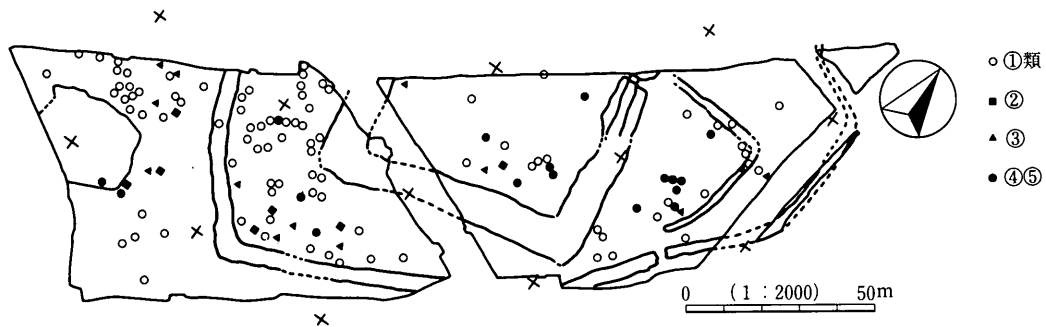
第288図 井戸深度グラフ



第289図 形態別井戸分布



第290図 底面標高別井戸分布グラフ



第291図 掘削深度別井戸分布グラフ

次に形態別の分布(第289図)をみると円筒形のものほぼ全域で認められるが、箱形・すり鉢型は基本的には館の西側に多く、しかも距離を置きながらも東西方向の一定範囲に分布する特徴がある。その分布は円筒形井戸とは異なり、円筒形井戸とは別の契機・時期の所産によるものと思われる。しかし、箱形井戸は個別にみると深度にかなり差があり、むしろ円筒形のあり方に近いとも思われる。

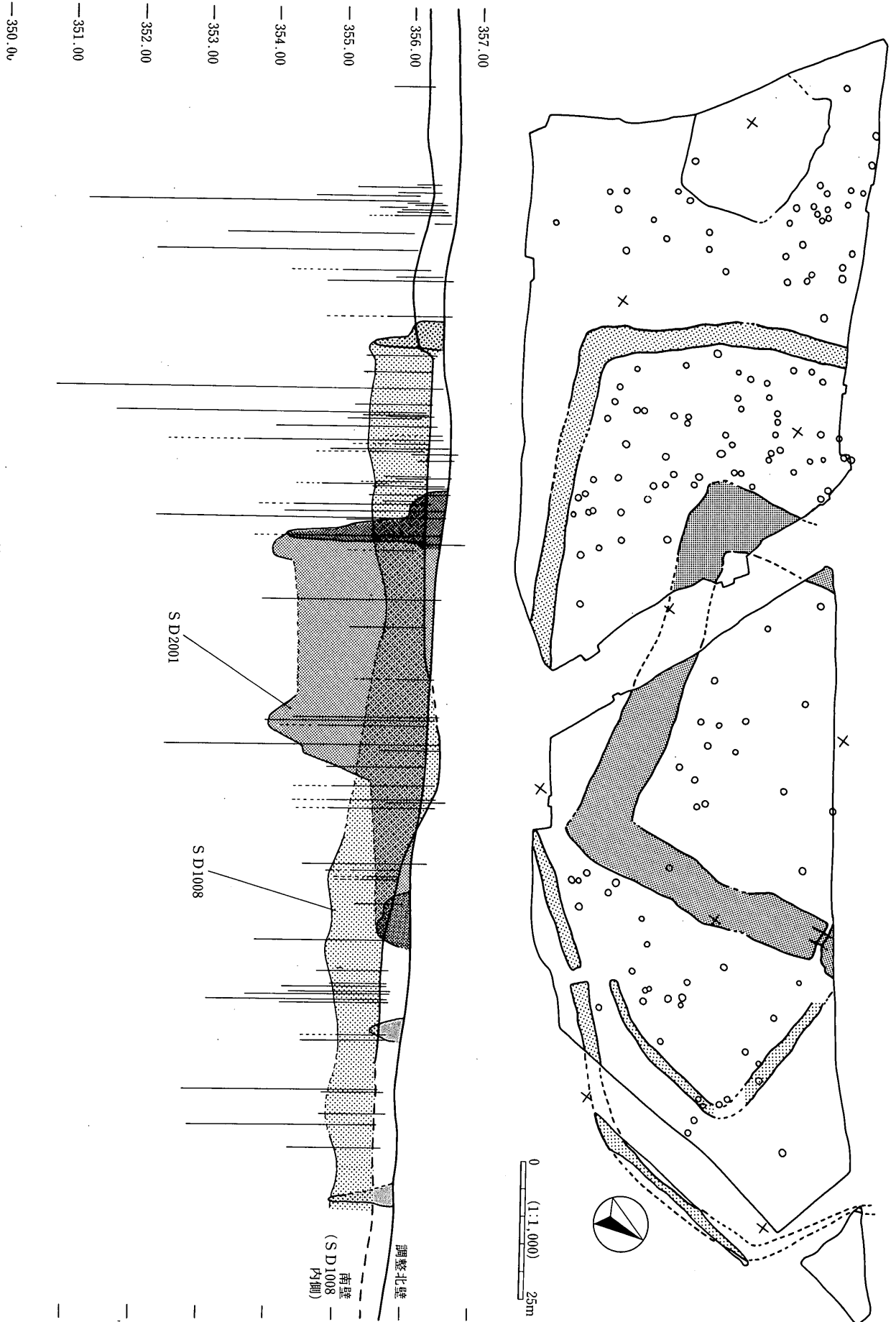
底面標高別に分布(第290図)をみると、II～IVグループは単独で存在するものもあるが、数基が近接して群を形成する場合がある。このことからII～IVグループは深度グラフ上では別グループとしたが、分布の上では類似性があり、ほぼ同じグループとして先の地下水井戸と天水井戸の識別に一定の妥当性は見出せよう。II～IVグループの井戸で群をなすのは⑤-1区SD1008西側・⑦-2区の低地境付近・SD1008屈曲付近から⑧-1区にかかる範囲・⑩-1区SD2007屈曲付近・SD2007先端付近・館中心屋敷南東部にあり、単独で存在するものは中心屋敷の北部、⑤-1区SD1008とSD2001の中間に認められる。これに対して底面標高が355.00m以上のIグループの井戸分布は圧倒的に微高地西側に偏在し、館中心部から東側は少ないが、この東部のなかでも館中心部からその南にかけては散漫であるものの、⑩-1区を中心とした東端側では群を構成するものがある。先にみた井戸全体の分布が西側に偏在する様相も実はこのIグループの多さを反映したものとみれよう。しかし、浅すぎて井戸とは認めがたいものもあり、さきにみたIグループの分布に多様なあり方が見られることは、井戸以外の土坑や本グループ内でも複数時期の所産が含まれる可能性も考えられる。なお、井戸の掘削深度別グループで分布をみると、低地寄りでは掘削深度が浅くとも底面標高が低くなる傾向を反映して、⑦-1区の低地寄りと⑩-1区のSD2007屈曲付近のグループの群構成が違ってくる。特に、⑦-2区の低地寄りでは底面標高別の分布では同一と見られた井戸群内で、さらに細分される2種の群からなるとみられる。それ以外は底面標高別分布と大きな違いはない。

井戸深度別分布から注目される点が3点ある。一つは全体的に底面標高Iグループ、あるいは掘削深度①グループは微高地の標高の高い西側に分布する傾向はあるが、一方で微高地の高台でも深い井戸が認められ、一概に井戸の深さが地形と相関関係にあるとはいえない。このことから井戸の深さ=天水・地下水井戸の別が単純に地形に規定されたものではないことが窺える。二つ目には井戸深度別に群を形成する傾向があることから、各群は同じ背景のもとで継続的に構築されている可能性が窺える。このことは井戸同士の切りあいの少なさと関連するとみられる。三つ目は底面標高のIとII～IVグループでは群分布で重複する場合もあるが、全く分布域がずれる場合がある。これは上記二項と関連するが、基本的に井戸の深さ別に構築者、あるいは構築時期が異なる可能性があると思われる。ただし、SK1020のように本来は深く構築され、埋没して浅くなくても使用される場合があることを考えれば、上記のことは傾向として把握されるものとしておく。

### C 埋土・内部施設・廃絶の様相

井戸埋土はほぼ共通して砂を多く含む土質であり、検出時には古墳時代遺構との識別が容易であった。色調は微高地高台では褐灰色、低地寄りでは暗褐色を呈する傾向があり、また、深い井戸では下層にいくに従って還元状態の青灰色を帯びる。この砂質埋土は井戸深度に関係なく一様に見られ、基本土層としては残存していないが、平安時代の洪水砂の影響を受けた土層に由来するとみられる。

埋土にブロック土が混在して、廃絶時に埋め戻されたと推測される例はSK1001・1012・1015・1029・1039・1044・1065・1066・1085・1146・2011・2012・2021・2040・2193・2200・2227・2249・2252・2254・2283・2284・2289・2321・2359・2423・2641・2741などがある。また、上層で集石が検出された例もほぼ同様に捉えられると思われるので、実際に埋め戻されるもののほうが多いと思われる。このことから、井戸の埋没プロセスは使用期間中ではあまり掘り直しされることなく井戸の埋没が進行し、一定程度まで埋まると最終的に人為的に埋め戻されると推測される。そして、最上層は若干の凹地として残存す

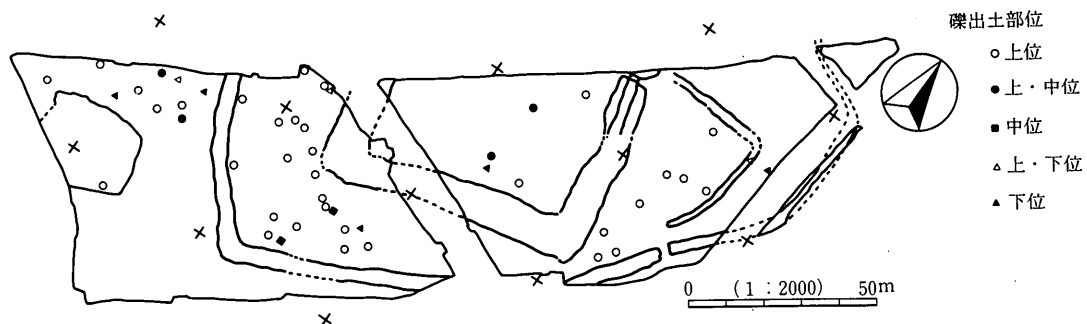


第292図 中世井戸分布と深度



る場合もあって、そこへ鉄滓などが廃棄される場合もあったとみられる。なお、上記のブロック土が確認されたなかで、やや特異な例として砂ブロックが混在したS K2012、底面上に風化凝灰岩が多量に含まれていたS K2200、埋土中層でシルトと砂の互層が確認されたS K2145がある。また、植物遺体が比較的集中して層を成して検出された例としてS K2065・2193・2632、埋土中位で砂層が確認されたS K2022、底面近くに薄い炭層が確認されたS K2029などがある。S K2022の場合はブロック土として入った可能性もある。

井戸埋土中で集石が検出された例も多い。上層で検出された例はS K1001・1004・1010・1012・1017・1020・1030・1049・1066・1144・2001・2002・2008・2009・2022・2024・2028・2065・2073・2100・2180・2193・2249・2284・2305・2316・2321・2329・2476・2624・2635・2636・2640・2645・2649・2754がある。この内、S K1012・2073では埋土中位からも散在的に出土し、S K2305では埋土下層にも集石が検出されている。また、S K2024では壁際に石積み状の構造がある。中位で集石の検出された例はS K1020・2431・2650があるが、S K1020は井戸枠の入れ直しにともなって少数の平石が入れられ、S K2431は大きな平石1つが井戸の幅一杯、S K2650は少数の大きめの礫が若干入っている。底面のみで石が検出されている例はS K1005・1039・2359・2636・2867があり、S K1005は浅いS Kなので本来的に底面出土と捉えられるか問題がある。S K2359・2867は比較的大きめの石を1～2個入れ、S K2636が集石、S K1039は底面に散在的とする。なお、近世土坑でも集石が検出された例があるが、近世のものはいずれも浅くこぶし大の礫が入れられる傾向がある。



第293図 礫を出土した井戸分布

これらの集石のあり方は大きな礫少数出土・礫散在的出土・集中出土の3者があり、前2者は埋土中・底面、後者では上層で検出される傾向がある。S K数では埋土上層の集石検出例が圧倒的に多い。また、底面および埋土中に礫が入れられるものは当然ながら比較的深いものに多く、埋土中に少数の石を入れる例はS K1020の場合と類似して埋設途中の改修によるものだろうか。深度別井戸と集石の関係をみると、全体的に深いものに集石が検出される場合が多く、なかでも大きめの石が集中的に検出される例は深い井戸に多い。しかし、深い井戸でも石が検出されていない場合や、浅い井戸で集石が検出される例もあり、厳密な井戸深度と集石の相関関係は認めにくい。分布の上では西側に集石をもつ井戸が比較的多いが、これは井戸の分布数に対応したものであり、地点ごとの集石の有無の違いを反映したものではない。また、単独・群を構成するなかでも集石との相関関係は見出し難い。

これらの様相では底面上にある礫は井戸使用開始時、埋土中位にある礫は井戸使用時か廃絶直後、上層にある礫は井戸廃棄時の所産とに分けられよう。もっとも多いのが井戸廃棄時の所産となるが、集石の有無が井戸の形態や場所・深度とは相関関係が認められないことから、礫の有無は個別の井戸使用状況に起

因する可能性が高い。従って、上層での集石検出例もすべて祭祀行為に関わるとみるよりも井戸廃絶後の埋土沈下防止、あるいは石を片付けたことによると捉えたほうが妥当と思われる。このように推測した場合、群を構成する井戸のなかで集石をもつ井戸の位置が問題になるが、これについては明らかにできなかった。ただ、⑦-2区の低地境にある鉄滓が廃棄された井戸群では鉄滓の出土状況から、鍛冶が行なわれた段階を基準としてみると井戸群内で礫をもつ井戸は後出するとみられる例がある。また、単独で存在する井戸である中心屋敷地北側のS K 2066・2073も礫で埋められていることは興味深い。

内部施設としてはS K 1020で木杵、S K 2427で何らかの円筒形容器状の痕跡が確認され、S K 2024では壁際に石が積み重なった状態が一部に確認されている。S K 1020の木杵は本遺跡唯一の例であるが、非常に脆弱な作りで高さもあまりない。しかも、埋土中層で確認され、本来は素掘り井戸であったが、その埋没中に木杵が入れられたと思われるものである。この例から素掘り井戸は使用中から埋没が進行するが、溜まった土の除去はあまり行なわれないと推測される。なお、この井戸からは人間の歯が1点出土しており、何らかの習俗に関わるものとして捉えられる。S K 2327は平面形が方形を呈する井戸であるが、底面近くで円形の土質の異なる部分が確認された。これは井戸底部に曲物などが入れられていたものと推定される。S K 2024は浅く、しかも石積みも全周しないので積極的に石積み井戸とは判断されない。

#### D 出土遺物

井戸からは中世の陶磁器、曲物・蓋・箸・漆器椀などの木製品、石臼・石鉢などの石製品、鉄滓、モモ核や枝などの植物遺体、犬の骨や人間の歯などが出土している。しかし、1基あたりの出土遺物量は非常に少なく、遺物が全く出土しない場合も多い。以下に遺物の種類別に出土状況の傾向をみておくことにしたい。なお、深い井戸では調査上の安全面から埋土中層以下は重機で掘削して深さのみ記録する調査方法をとっており、基本的に遺物を丁寧に採取しているわけではない。したがって、深い井戸の遺物はこの調査法に規定されたごく一部のものであると考えなくてはならない。

まず、犬の骨・人間の歯であるが、各1例ずつしか認められておらず、出土頻度からも極めて稀な例である。犬の骨は井戸廃絶時に井戸の凹地を利用して廃棄したと考えられるが、人間の歯は何らかの習俗に関連していた可能性がある。石臼・石鉢は井戸上層や埋土中の集石に混在して出土する例が多く、破損品などを他の礫同様に扱って井戸に入れられたと考えられる。このことは鉄滓も同様で、S K 1144などはその例として挙げられる。S K 1084・1085では最上層に鉄滓・鍛造剥片などの鍛冶関連遺物が層を成しており、井戸埋没後の凹地を利用しての鉄滓廃棄と考えられる。これ以外の少量の鉄滓のみが出土した場合は混入の可能性はある。

陶磁器類は61基の井戸から出土しているが、中世焼物を100g以上を出土した井戸は僅か26基でほとんどが小破片に過ぎない。この出土遺物の少なさが井戸の子細な年代決定を困難にしている理由である。そのなかで800g以上を出土した例はS K 1001・1004・2305・2391・2624の5例があるが、いずれも内耳鍋が主でS K 2391のみカワラケも多く出土した。ただし、S K 1004については整理期間中にS K 1001出土品と混乱したので純粋にS K 1004出土とは断言できない。出土した層位は井戸の上層が多く、井戸廃絶に伴って廃棄された土器であると考えられる。なお、略完形の内耳鍋を出土したなかで口縁外反タイプと認められたのはS K 2305のみである。それ以外は口縁部が直立する後出するとみられる形態なので、内耳の廃棄が行なわれるのは15世紀後半以後に多い傾向と認められる。つまり、基本的に井戸へ土器が廃棄されることは少ないが、出土内耳鍋の年代的な検討からは館廃絶後の時期に井戸の利用状況とも関連して内耳鍋の廃棄がやや多い傾向が認められるようである。

木製品でもっとも多いのは曲物で、続いて漆器椀、あとは少数の鍋蓋、箸などが出土している。この内、曲物は埋土中でも下層、あるいは井戸の底で出土する例が多く、いずれも大型品ではないので、水を汲む

ために利用されていたものが使用中に落ちた可能性が高い。また、後に述べるA①類とした浅い井戸跡でも曲物が出土している点から、A①類が井戸であるとする根拠とした。これ以外に枝類やモモ核が出土している。モモ核を出土した井戸はS K1014・1015・1020・1029・1038・1084・2001・2450・2635・2649・2650があり、なかでもS K1015・1084では多数のモモ核が出土している。モモ核の出土が複数井戸で認められることから井戸廃棄に伴ってモモ核を入れる行為があった可能性がある。同様の事例は古墳時代遺構でも認められる。枝類の出土はいくつかの井戸で散在的に認められたが、層を成している例としてS K2632・2065・2193がある。

上記より、井戸使用中の遺物と推測されるのは曲物のみで、その他の遺物はほとんどが井戸廃絶時か以後の所産、あるいは混入と思われる。このなかで、井戸上層で遺物が集中して出土した例は少なく、井戸廃絶後の凹地がゴミ捨て場と利用される例も普遍的なものとはできないだろう。

#### E 年代

分布からみると大概の井戸は館の存続時期かそれ以後の所産であろうと予測できた。しかし、その一方で井戸からの出土遺物は非常に少なく、しかも廃絶時以後の所産や混入と思われる遺物が多いと推測されるので、子細な井戸の年代を決定することは難しいと思われた。しかし、井戸は検出数からいっても遺跡の変遷を考える上で重要な材料となると予想されるため、一定の傾向が窺えた井戸の深さと分布状況を材料として、やや強引ながら井戸の年代を推測してみる。

まず、分布状況からすり鉢形井戸と円筒形井戸では構築契機や時期が異なることが推測された。平面形が方形の箱形は分布はすり鉢形井戸に近いが、深さは円形井戸と類似するとみられ、一定の傾向としての把握はむづかしい。また、円筒形井戸では井戸の深さグループ別に分布が異なっていることも窺えた。この円筒形井戸の群をなすあり方は、同じ背景に基づいて継続的に構築されたことに生起すると推測される。このことから、井戸の形態、深度別のグループはそれぞれ類似した時期に作られているという仮説を立てることができる。次にこの仮説に基づき、井戸の分類別に年代の推定できる材料を集めて年代を検討してみよう。

井戸は形態から3種、深さからは数グループに分離できた。井戸の深さに関しては、よりグルーピングが明瞭に表われた掘削深度を基準にすると、この2種の観点の組み合わせによる分類は以下ようになる。ここでは、分布でみたように深度別の②～⑤はほぼ同一として見れる可能性もあるが、一応分離している。

A 円筒形—①深度0～1.3m (S K1001～1003・1004?・1005～1009・1011・1014・1016・1024・1026・1029・1030・1038・1044・1045・1047・1049・1065・1066・1145・1146・1147・2002・2007・2008・2009・2011・2012・2021・2022・2024・2028・2029・2036・2037・2038・2040・2041・2055・2062・2069・2252・2329・2349?・2383・2450・2479・2489・2621・2624・2627・2636・2639・2641・2644・2646・2649・2829・2836・2864・2877・2880・2881)

②深度1.4～2.0m (S K1020・1085・2001・2065・2181・2227・2284・2630・2635・2640・2862・2866・2876)

③深度2.2～3.0m (S K1010・1012・1015・1083・2145・2316・2350・2359・2631・2632・2650・2741・2867・2873)

④深度3.8～4.8m (S K1082・1084・2254・2645)

⑤深度5.7m 以上 (S K2642)

(Aの分類不明—S K1040・1087・2180・2391・2418・2433・2434・2438・2476・2626・2628・2629・2875)

(②以上と思われるもの S K1088・2073・2283・2289・2305・2319・2321・2415・2431)

(③以上と思われるもの S K2193) (④以上と思われるもの S K1144・2249)

Bすり鉢形—①深度0~1.3m (S K1017・2100・2200・2443・2754)

C箱形 —①深度0~1.3m (S K1039・2872)

③深度2.2~3.0m (S K2427)

次に各分類別に年代の推定できる材料をあつめてみる。

#### a 出土陶磁器

中世井戸のなかで古代以前の遺物しか出土しない例や、近世陶磁器小片が出土した例も僅かにあるが、もっとも多いのは中世の焼物である。古代の遺物はもちろんだが、近世陶磁器については古墳時代遺構で出土した例もあるので混入の可能性が高い。中世焼物を出土した井戸は61基あり、このなかで井戸への直接廃棄が窺えた例は S K1001・1004・2305・2391・2624のわずか5基である。S K2305のみが口縁部が外反する形態の内耳鍋を出土し、それ以外はより後出する直立口縁で内面にナデ痕を顕著に残す形態である。井戸分類では S K1001・2624がA①類にあたるが、他は底面までの深さは未確認である。なお、S K2305は下面の縄文面まで達しており、深さ1.70m以上と推測されるのでA②~A⑤類に該当し、S K2391は深さ60cmまで確認されていないが、下の縄文面では達していないので検出面よりも1.6mの深さを越えることがないと考えられ、A①・②の可能性が高い。S K1004は底面の深さ110cmまでしか記録されていないため底面の深さは不明である。このことからすると出土内耳鍋の形態と井戸分類に相関関係が認められる可能性が高く、A①は内耳鍋の直立口縁のもの、A②~⑤は内耳鍋が外反する口縁部のもが見られる傾向が考えられる。また、口縁部が直立し、内面にユビナデ痕を顕著に残す形態や内湾口縁部形態の内耳鍋が出土した井戸は S K1026・1049・2007・2041・2433・2649がある。S K2433は上面1mまでしか調査されおらず、深さは子細不明であるが、それ以外はすべてA①類に該当し、上記の傾向を支持するものである。また、すり鉢状のB類では遺物が少ないが、内耳鍋を出土する例は少なく、珠洲壺・すり鉢を出土することからほぼ14世紀以前の所産の可能性が高いのではないかとと思われる。箱形については内耳鍋を出土しており、内耳鍋が普及する15世紀以後の所産であることは間違いない。

以上よりはA②~⑤類・B類の井戸は比較的古い傾向を示すと思われる。個々の井戸に厳密な年代比定することは難しいが、一定の傾向のなかで年代を与えるとすれば、B類が14世紀以前、A②~A⑤類が15世紀前半前後、A①が15世紀後半以後を含む範囲としてみれる。

#### b 鉄滓出土

本遺跡内では外堀 S D1008外側を中心として中世に鍛冶が行なわれたと推測されている。この周囲で鉄滓を出土した井戸跡が多数あるが、鉄滓出土のあり方は多数の大小の鉄滓が集中的に廃棄されたものと少量の椀形滓が出土した2種がある。前者は鍛冶滓の直接廃棄、後者が2次的な混入と考え、鍛冶が集中的・短期に行なわれたことを前提とすると前者は鍛冶が行なわれた時期かそれ以前、後者が鍛冶が行なわれた時かそれ以後と推定される。前者の出土状況は S K1084・1085、後者が S K1001・1004・1011・1016・1039・1082・1088・1144・2009・2065・2629・2632・2650である。井戸の形態でみるとA①に所属するのは S K1001・1011・1013・1016・2009である。A②~④に所属するものでは S K1082・1084・1085・1088・1144・2065・2632・2650、底部まで確認できていないものには S K1004・2629、C①の S K1039がある。分布ではA②~④の S K1082・1084・1085・1088・1144は近接して位置する群と認められ、S K2065・2632は⑤-2・⑩-1区と鍛冶が行なわれた館西側とはかなり離れているので、館西側の鍛冶とは別に捉えたほうが良いだろう。以上より、館西側に分布する井戸では鍛冶が行なわれた時期と同時かそれ以前のものにA①は含まれず、A②~④のものがある。一方で鍛冶を行なったと同時かそれ以後の可能性があ

るものにA②～④、A①・C①がみられる。従って、絶対視はできないがA①のほうが後出する傾向がここでも見られる。そのなかで離れて存在するSK2065・2632は鍛冶の行なわれた場所よりも離れている点で出土鉄滓は別の契機の所産と思われるが、その時間的な位置は不明である。

### c 遺構間の切り合い

中世の遺構間の切り合いであるが、井戸同士の切り合いは⑧-1区SK2415・2316、⑩-1区SK2861・2862の2例のみがある。堀との関係ではSD1008がSK1040、SD2001がSK2881と切り合いになっているが、SK1040の場合は切られる可能性もあるが判然とせず、SK2881は不明である。SD2007はSK2036・2037・2636・2639・2873の5基に切られる。井戸同士の切り合いではSK2316がSK2415を切るもので、SK2316はA③、SK2415は底面まで完掘されていないが、A②～A⑤類であることは間違いない。SK2861はSK2862を切るが、SK2861はA①類、SK2862はA②類ながら、深さは1.5mとやや微妙なところである。SD2007を切るSKではSK2036・2037・2636・2639がA①類、SK2873がA③類にあたる。SD2007は1点のみながら、口縁部の外反する内耳鍋が出土しているのでA①類がそれより後出する傾向がみられる。しかし、SD2007を切る井戸にはA③類も含まれるので厳密にはこの段階にも深い井戸が存在したと認めざろうえないが、SD2007とSD1008・2001との時期差の問題もあるため仔細は不明である。

以上の出土遺物・鉄滓の出土・切り合いからみた各分類の井戸の時間差をまとめると、全般的にA①類はA②～⑤類よりも後出する傾向がある。これも、⑩-1区SK2873のようにA③類ながら後出するとみられる井戸跡もあるので、厳密に区分されるものではないかもしれないが、SK2873の場合は分類上はA③類ながら、群構成のなかではA①類を主体としたなかに混在する。しかも、SD2007の廃絶の時期については、他の館堀SD1008・2001よりも早いと推測されるものの、館存続時期内である可能性も残されており、その扱いはやや微妙にならざろうえない。従って、個々の井戸に年代を与えることは難しいが、概略の傾向としてみることは許されよう。

以上からA①類は比較の後出する傾向があり、SK1004もここに含めうるならばA①類は出土内耳鍋からも15世紀後半でも末～16世紀の所産と思われる。A②～⑤類はやや古い14世紀後半～15世紀中頃、B類は内耳鍋が含まれず珠洲すり鉢などが出土することからは14世紀以前、C類は子細な年代を決めかねるがC①類がA①類と近似した年代、C③類はむしろA②～⑤類に近い年代ではないかと推測される。したがって、C類は基本的に時期差によるものではなく、構造上の違いによると思われる。上記の推測は概略の傾向として見られるもので、個別遺構に関しては絶対視できるものでもない。特にA①井戸の分布は一定の傾向で捉え切れない多様なあり方を示すため、井戸以外の機能の土坑が含まれるか、複数時期の所産が含まれる可能性も残される。また、この年代の推定は井戸の深さを基準とした本遺跡での土地利用のなかで想定される傾向であって、先の分類が井戸型式として認められるわけではない点は断わっておきたい。従って、ただちに他遺跡で応用できる性格のものではないと考えるが、すり鉢・円筒形については型式と認めうる余地もある。これは今後の課題としたい。

### F 遺跡内での位置

以上の検討を踏まえ、遺跡内での井戸の位置について検討してみよう。遺跡内では実に多数の井戸跡が検出された。通常の集落遺跡と比べてもその数はかなりのものと思われる。なぜ、このように多数の井戸が構築されたかは大きな疑問として残るが、先の年代の推定に基づいて、遺跡内での変遷を考えてみることにしたい。

もっとも古い井戸はすり鉢状のB類で館出現以前の14世紀代以前の可能性が高い。このグループの井戸分布は館西側に限定され、ほぼ東西方向のライン上に一定間隔で直線的に配置されているように見える。このような配置をとる理由は定かでないが、古代の条里区画の坪を南北に2分するラインに極めて近く、

次の館時代の館内通路に近接した場所でもあり、道や土地区画に沿って構築されているとも考えられる。これらの井戸の性格は天水を溜める井戸と推測されるが、耕作・居住のいずれに伴うものかは明らかにできなかつた。

次の館時代では深い井戸であるA②～⑤類の群、C③類の多くがこの時期の所産と思われる。これらの深い井戸は地下水を汲み上げる井戸として機能的な類似性がみられ、この類似性から同様の背景の元に出現した近似時期の所産であろうと推測した。このことを前提として、このグループに所属する井戸SK2305では館時代に該当するとみられる外反口縁部の内耳鍋の略完形品が出土したことで、館中心部ではこのグループの井戸が南東部に集中しており館内の計画性に基づいて構築されている可能性から、このグループが館時代の所産であろうと推測した。しかし、すべてが館時代の所産とするには疑問が残るものもある。例えば、⑩-1区のSD2007屈曲付近にある井戸群ではA③類のSK2873がA①類と混在しながらも群を構成するように見え、しかもSD2007を切っている。また、中心屋敷地内西側にあるSK2055は館に土塁が存在したとすると土塁と重複してしまう位置にあたり、SK2642・2649・2650も館外堀内にある建物跡と重複する場所にあたってしまう。これらの井戸に関しては館時代の所産であるかは不安もあるが、これらを除く深い井戸は群を構成するものが多く、その分布はSD1008西側に2～3か所、SD1008区画内西南部、中心屋敷地南東部、SD2007先端近くに集中が認められる。このなかで中心屋敷地内部では南東部に井戸が集中しているが、これは居住に関わり特定場所に継続的に設置されたものであろう。また、柱穴群・建物跡の分布と比較すると⑩-1区SD2007周辺は柱穴がほとんど存在せず、⑦-2区SD1008区画内西側・西南部などでは混在する様相となる。井戸群の時期認定や井戸の使用法の違いについて十分検討できなかったため断定的なことはいえないが、建物や柱穴群と対応する可能性があるものと、井戸のみが存在する2種みられる可能性もある。これは個別建物跡に付属する井戸と館全体のなかで位置付けられる井戸の2者ということになるだろうか。館内の井戸のあり方を県内の他遺跡例と比較してみると、外堀の区画部分内はよく分からないが、中心屋敷地内では単独の場合と井戸が集中する箇所が認められるものがあり、こうした傾向は本遺跡と類似する。ただし、本遺跡では他遺跡例と比べてもかなり井戸数が多い。立地環境により埋没しやすいために、井戸の使用期間が短いことに起因するのだろうか。また、中野市の牛出館<sup>(註1)</sup>の例では井戸上部に集石をもつ場合とそうでない場合が認められ、ここでも類似した傾向はみられる。

次の段階の井戸はA①類を主体とするとみられる。これは類似形態の井戸は類似時期の所産であると推測したことを前提とし、A①類井戸では口縁部が直立して内面に顕著なナデ痕を残す内耳鍋の略完形品を出土したものが複数認められるが、館堀内ではこの内耳鍋が少数しか含まれない点からも館廃絶後の段階の可能性があると考えた。しかし、その分布は館範囲内でも西側に偏在し、しかも東側や南側では単独に存在するものと群を構成する2種がみられる。この多様な分布の仕方からA①類が概略では類似時期の所産と捉えられながらも、厳密には井戸以外の土坑や複数時期の所産が含まれる可能性も残されている。特に散在的に検出されている場合ではこの時期の所産とするには疑問も残る。このように、一定の傾向としては館廃絶以後のものが多いと考えられながらも、個別にみると疑問も残るものもあるため断定的なことはいえないが、性格は天水をためる井戸が多い可能性が考えられよう。その場合、降水量や地下水位の変化など季節的な変動を受けやすいと推測される。比較的地下水位が高いか、あるいは降水量もある程度望める季節の利用とすれば、春～秋の利用とも思われる。さらに群を成すことは耕作に伴う可能性も考えられよう。だが、A①類では内耳鍋の廃棄が目立つ理由や、微高地西側の高台に偏在する理由についてはあきらかにできなかつた。

註1 中野市教育委員会1995『牛出城跡遺跡』

### イ 建物跡・柵列跡・柱穴跡

上記では柱穴跡を建物跡や柵列跡として括り、その主軸と各時代の溝との比較や分布から中世の柱穴跡を認定した。中世では時期推定の根拠とする主軸方向を館の堀に求めたため、結果的に抽出できた建物跡や柵列跡は館時代かそれ以後の所産ということになる。建物跡や柵列跡の認定に不安も残しているが、ここでは断片的な様相をまとめておくことにしたい。

#### A 柱穴跡の分布

本遺跡で確認された柱穴跡はあまり多くはないが、井戸跡の数や出土遺物量からみると館では一定の恒常的な居住が営まれたと推測される。そこで、本来は多数の建物跡が存在したが、調査の見逃しや遺構の遺存状況が不良なために検出された柱穴数が少ないと考えた。しかし、確実に把握できた建物跡は少なく、建物跡と認定した遺構も不安を残している。また、建物跡を認定した前提となる館での居住はあくまでも状況証拠からの類推で、堀をもつ他の遺跡のイメージを敷衍化していることも否めない。実際のところ、本遺跡ではどのくらいの数の建物が存在したのかは充分にあきらかにできたとはいいがたく、また、遺構の重複状況からもすべての建物跡が館存続時期内の所産とする確証もない。この点で、今回の調査結果は問題を残したが、ここで整理作業で指定したは掘立柱建物跡や柵列跡が館の存続時期内に存在したと仮定して話を進めることにしたい。

まず、全体の分布からみると、柱穴は明らかに館西側に多く偏在している。それは調査精度や遺存状況に左右された可能性もあるが、館時代の所産と考えられる比較的深い井戸跡の一部は柱穴跡の分布と一致しているとみられる点や館外堀・内堀のあり方から西（南）辺が正面と推測されることなどから、やはり館内の構造に規定されている可能性がある。また、堀で区画された空間ごとに掘立柱建物跡の作られ方が異なっている様相も窺っている。すなわち、館外堀 S D 1008 の西側外部では建物跡が非常に少なく、長期にわたる建て替えがないと推測されたのに対し、外堀内の西側では類似規模の建物跡や柵列跡が同所で繰り返し建て替えされているようである。また、S D 2001 に囲まれた中心の屋敷内では子細不明ながら、類似場所に継続する建物跡とそうでない建物跡が存在し、多種の建物が計画的に配置されるようである。なお、内部の配置については後ほど触れることにしたい。

#### B 建物跡の種類

個別の建物・柵列跡は断片的な柱配置から整理段階で認定したものであるため、検証不十分で建物跡の認定自体にも不安を残す。また、建物跡を拾いきれていない可能性も残る。したがって、一般的な中世集落の分析方法である建物跡の構造と規模、組み合わせから階層性をよみとり、その構成のあり方から遺跡居住者の性格を読み取る手法は本遺跡の場合では難しい側面がある。ここでは断定的なことは述べられないが、先の建物認定を前提としてみれば、以下のような傾向が窺える。

本遺跡で検出された建物跡は柱の通りが悪く、柱間寸法が一定していない。これは県内の中世遺跡でも通有である。また、建物の主軸方向が東西南北と一致していないものが多く、基本的には堀の配置と内部の空間の分割のされ方に規定されているとみられる。このようなあり方は本遺跡に限らず、いくつかの遺跡でもみられる。詳細な検討はしていないが、条里遺構の存否に関わらず古代～中世前期では東西南北に合わせる建物・竪穴住居跡が多く、中世後半になってずれる方位となる建物跡が増加する傾向があるように思われる。もちろん、中世後半の遺跡すべてがこの傾向で把握されるわけではないが、館跡とされる遺跡で東西南北方位に一致する建物跡と異なる方位の二者が検出されている例がある点は興味深い。例えば、大町市清水氏館跡<sup>(註1)</sup>では東西南北に近い方位の建物・溝跡と、それとは大きくずれる堀・建物跡の2種の軸方向の遺構が検出されており、切りあいからも前者のほうが古いとみられる。また、飯山市長者清水遺跡<sup>(註2)</sup>では古代の竪穴住居跡は東西南北に一致した方向なのに対し、中世では厳密には東西南北方向で

はないがそれに近い方向の建物跡と、大きくずれる方向の堀・建物の2者が存在する。ただし、この遺跡では両者の前後関係は不明である。いづれにしろ、清水氏館例などのように東西南北に一致した建物配置から、堀の構築と共に内部の建物配置方向が堀の方向に規定される変化は堀との関係から予想されよう。十分な検討はしていないが、清水氏館例を重視すると、中世後半のある段階で東西南北の方位にこだわらずに堀を巡らせるようになり、それに規定された建物配置への変化とみられる可能性があり、本遺跡も同様の傾向のなかで捉えうると思われる。これは堀の配置が地形との関連で決定される防御的な理由や、建物方位に対する宗教的な意味が薄れるためであろうか。

次に建物跡の種類を規模と構造から比較してみることにしたい。今回の整理作業で認定した建物は8棟ある。詳細は不明ながら、いずれも平面形は梁間1～2間で桁方向が長い平面形とみられる。県内の中世前期の建物では、総柱で梁方向も2間を越えるものもあるが、中世後半期では梁間2間の細長い建物が通有に見られるようになることが知られる。この点では本遺跡で検出された建物跡は中世後半に通有の建物と同じであり、これまでの知見と大きく矛盾するものではない。ただし、比較的規模の大きな建物となるS T 2002・2003については構造や規模は不明で問題が残る。

もっとも大きな建物は中心屋敷地内にあるS T 2002・2003と思われる。建物認定に問題を残すが、梁方向は約6.6m、桁方向は12.5～12.6mで、次はS T 2001の2(3?)間約5.5m×3間7.2m、S T 2007の1間約3.2m×5?間約8.2mである。S T 2005・2006もこれに準ずる可能性がある。その次がS T 2004で柱間は不明ながら約4.2m×約6.6m、S T 1001で2間?約3.7m×3間約5.7mである。一番小型のものがS T 2008で2間約3.7m×3.7mである。以上の規模を比較すると、長さにはばらつきが見られる。やはり建物認定の不安定さが反映された可能性があるが、大きくはS T 2001・2002の大型建物、S T 2008の小型建物、それ以外の中型建物に区分できよう。ちなみに柱間寸法を比較してみると非常にばらつきが大きい。たしかに中世の建物は柱のとおりが悪い上に、柱間寸法が一定していないものが多い傾向は知られているが、そのなかでも2.0m前後のものが多い傾向は知られる。ところが、本遺跡では比較的類似した長さとなるとされる梁行方向でさえ、ばらつきが大きい。これは建物自体が一定のものさしを基準として構築されたものではなく、概略の設計に基づいて入手可能な材を使って建てたためなのか、建物認定上の問題があるためかはわからない。

建物の構造は詳細を明らかにできていないが、内部に柱をもつ可能性があるのはS T 1001・2005・2006・2007・2008で、S T 2001やS T 2003もその可能性は残される。したがって、S T 2004を除くとほとんどの建物が部分的にしろ、内部に柱をもつ構造と見られる。これが単純に総柱建物となるか、部分的に床をもつ束柱となるかは判然としないが、後者の可能性は十分考えられる。なお、S T 2001は突出部をもつ可能性があり、他の建物とはやや異なった形態となる。

以上のように建物規模・構造の分析にも建物認定に不安が残る問題も多いが、敢えてまとめると、建物の規模では概略3種あり、内部に柱をもつ類似構造の中型建物跡がもっとも多く、大・小型建物は少ない構成とみられる。これを配置場所と合わせてみると、数も少なく特殊とみられる大型建物跡は中心屋敷に所在することから中心的な建物、もしくは中心的な建物群を構成する一部とみられ、小型建物は居住を伴わない付随的な建物の可能性がある。そして、もっとも数の多い中規模の建物は、館内部に居住した複数の人間の居住建物である可能性も推測される。そのなかで、中規模の建物のS T 2001・2004がやや構造を異にすることから、特定の機能を持った建物の可能性も残される。

#### C 館内の建物配置

これまでみてきたように館内の建物は堀によって分割された場所ごとに種類やあり方が異なる。内堀S D 2001区画内部の中心的な屋敷地では建物配置の詳細は明らかにできなかったが、井戸跡は南東、建物跡



は北側および東側に集中し、館西側および中央部では中世と断定できる建物跡はあまりみられない。さらに内部には複数種類の建物がみられることから、この部分にさまざまな機能を負った建物跡が計画的に配置されていた可能性が窺える。なかでもS T 2002・2003の存在するあたりがもっとも中心的な建物が存在したのではないかと推測される。このことは飲茶に関わる瓦質風炉・火鉢がS D 2001東辺で多出することからも支持されると思われる。外堀S D 1008で区画された内部では西側を中心に建物・柵列跡が偏在し、東側ではほとんどみられない傾向がある。この外堀区画内の西側では、建物跡が館内通路と推定される柱穴の散漫な帯状空間で分割された3か所に建物が分かれていた可能性があり、ここでは認定できた建物跡はごく一部であるが、それぞれの場所で中型建物が継続的に維持されていたと思われる。さらに、この部分では通路と推定される部分とS D 1008西辺の交差付近を中心に柵列で防御されていたとみられる。この入り口周辺を柵で防御もしくは区画する形態はS D 2001北東部もみられ、館内に共通したあり方とも思われる。最後に外堀外側をみると建物跡も少なく、恒常的に維持されていないようである。

以上からは中心の屋敷に複数の機能の異なる建物が計画的に配置され、その外側の外堀区画内の西側に館内の通路で分割された小屋敷地のような空間があり、それぞれ類似した規模の建物が配置されていたとみられる。そして、その外堀S D 1008の西外側にあたる部分ではあまり建物が継続的に構築された場所ではないと推測される。

#### 註

- 1 大町市教育委員会1991『長畑遺跡・清水氏居館跡』
- 2 飯山市教育委員会1985『長者清水・水の沢遺跡』

#### ウ 溝跡

検出された溝跡は少ないため、ここでは時期的な変遷と、そのなかでも特徴的な館堀を取り上げてまとめておく。

##### A 溝跡の変遷

検出された溝跡の時期をみると、中世前半にさかのぼる可能性があるのはS D 1011であり、続いて類似場所にS D 1010・1012が構築される。これらの溝群は基本的にS D 1016の凹地に位置しているが、同じS D 1016でも東辺では中世において溝が構築されない異なった様相もみられる。次の段階に館堀であるS D 1008・2001・2007が構築されるようになったと推測される。これらの溝のなかでS D 1008は東西で形態が異なり、S D 2007も他の溝より廃絶時期が早いと推測されたため、本来はS D 1008西辺とS D 2007が対応した段階があって、後にS D 1008とした部分に改修された可能性も推定された。しかし、調査では確実なところは断定できなかった。なお、S D 1052・1009の時期の詳細は不明である。以下に時期ごとに少し詳しくみてみよう。

最古とみられるS D 1011の初現は詳細不明であるが、平安時代後半～12・13世紀の遺物が含まれるのでこの時期に遡るとみられ、下限はS D 1010・1012に切られることから14世紀前半までと考えられる。このS D 1011は浅く小規模な溝で、その位置は古墳時代大溝であるS D 1016が凹地として後代まで残存した部分にあたる。その性格は不明であるが、形状からも屋敷地を区画する堀、あるいは用水とは認められず、S D 1016の凹地跡に規定されたものであることは間違いないだろう。そして、このあり方はS D 1010・1012に継承されており、これらの溝も同様の性格と推測されよう。このように中世前半～館出現期までの区画施設としての溝は認められていない点でも、館以前の様相が非常に不明瞭となっている。ところが、館の堀が構築されるようになって、様相が一変する。すなわち、この段階で館として防御の堀が微高地域に広域に計画的に構築されるようになり、溝自体の形態にもそれが反映されるようになる。なお、この館廃絶

以後に特定できる溝跡はみつかっていない。次には館の堀を取り上げて少し検討を加える。

## B 館の堀

館は中心屋敷をめぐるS D2001、その外側をめぐるS D1008の2本の堀で大きく囲まれており、館東側のS D1008区画内側に部分的なS D2007が配置される。これらの溝は配置と形状の違いから大きく2種類の基本的な原理によっていることが知られる。

その一つがS D2001とS D1008による同心円構造である。この2本の溝を比較すると中心屋敷地を取り巻くS D2001が上幅10m、外堀となるS D1008が上幅約4mで、前者のほうが大きく、明らかに中心屋敷地のほうが防御性が高い。しかし、この2重の堀は形態の違いのみならず、設定方法には違いもみられる。例えば、S D2001が比較的東西南北の方位にあわせて設定されているのに対して、S D1008は一定の範囲の区画が意識されているものの、方位はあまり意識されずに地形に合わせて全体形が不整形となっている。また、S D2001の区画する範囲は中心の屋敷と思われるが、S D1008の区画する範囲内では遺構の分布しない部分も含まれる。従って、堀は基本的に同心円状に配されるがその配置場所や区画する空間の意味は別の機能があったと推測される。なお、S D2007は外堀S D1008区画範囲のなかに位置する堀であるが、その配置場所がきわめて特殊である。これは、他の堀よりも廃絶が早いと見られたが、S D1008の改修の可能性と合わせて捉えられるか、あるいは館内で何らかの特殊な機能的な意味があったのかが考えられるが、詳細は不明である。

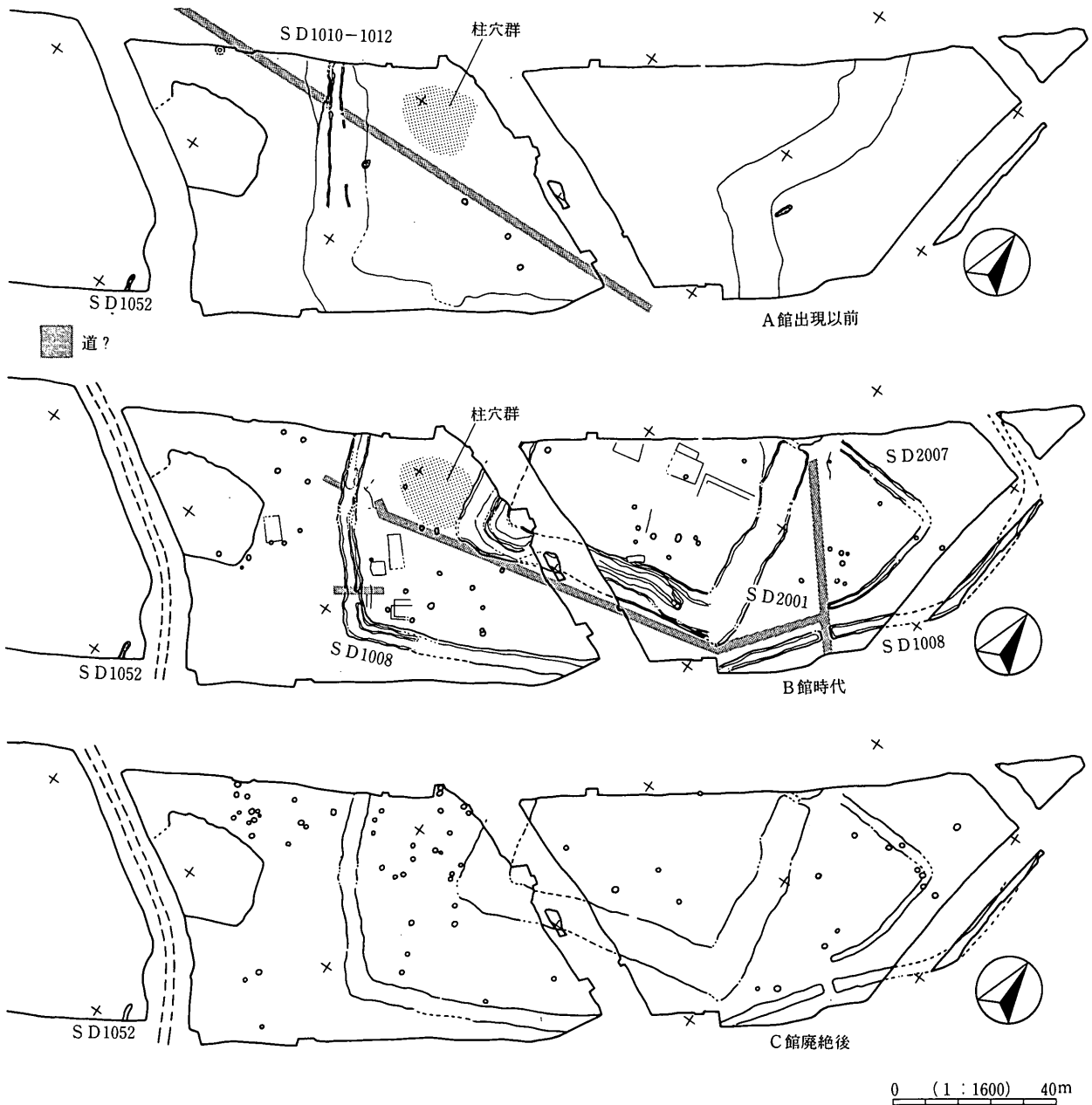
もう一つの構造は館の西側と東側における溝形態の違いにみられるもので、館正面・裏といった構造が反映されているとみられる。例えば、S D2001では西・南辺が深さ約2.5mのV字状に作られているのに対し、東辺は深さ1m前後で箱堀となっている。また、S D1008では西側が比較的直線的に構築され、底面にさらに細い溝が構築された階段状になっているが、東側では地形にそって大きくカーブし、断面形も逆台形である。このように同一の溝であっても、館の西側と東側では形態が大きく異なっていることは、柱穴跡や井戸跡の分布にも同様に認められ、館全体を貫く傾向としてみられる。このなかでS D2001のあり方は明らかに西・南への防御意識が強いことを示していると思われ、こちら側が正面で東側は裏手にあたるのではないかと思われる。このことはS D1008脇の柵列が西辺でしか見られない点とも関係すると思われる。なお、S D1008の東西での形態差はさらに構築・改築の時期差も含まれている可能性が残されているが、これについては調査では断定するには至らなかった。

## エ 微高地中世遺構の変遷 (第294図)

上記の各種遺構の分析から、微高地域の遺構の変遷の概略をまとめるが、個別遺構で詳細な時期を確定できなかったり、遺構認定にも問題が残るものがある。従って、詳細な変遷の様子を提示することはできないため、比較的明瞭に認められた館の遺構を基準として、その前後で3時期に区分して遺構の変遷をまとめることにした。しかし、先に述べたように遺構の認定・時期の推定に問題を残すものがあるため、ここでまとめる変遷も推測案の一つでしかないことは断っておきたい。なお、館に関しては別に取り上げて後述する。

### A 館出現以前

当該期の所産と推定した遺構はS K1017・2100・2200・2443・2754のB類井戸跡、S D1011・1010・1012、S K2634などがある。遺構数は少なく、しかも微高地西側に偏在している。建物跡はS D1008区画内西側のS D2001西辺西部周辺の柱穴群内に含まれている可能性があるが、具体的な建物跡の規模や数は不明瞭で、周囲を区画するような溝跡は検出されていない。これらの遺構からすると居住遺構は貧弱に見えるが、遺物は古瀬戸瓶子や渥美壺などの特殊品を初めとして、龍泉窯系画花文碗・蓮弁文碗・青磁鉢・



第294図 微高地中世遺構の変遷

口禿白磁皿・山茶碗・山茶碗系の捏鉢など一定量出土しており、一般的な居住遺跡とは言いがたい面がある。特殊品の出土からは館以前の遺構が館に先行する遺構の可能性もあるが、調査結果からは遺構が不明瞭なこともあり、その様相をあきらかにできなかった。しかし、この段階では堀や溝の区画が見られず、微高地は西側に遺構が偏在する様相からは次の館との間が断絶しているようにも思われる。なお、微高地上で検出された溝跡は古墳時代S D 1016西辺の凹地跡に立地し、東辺では溝跡が検出されなかったものの、S K 2634がほぼ平行している。このことからS D 1016は中世前半段階においても凹地として残存していたことが知られる。また、B類井戸の分布はほぼ東西方向に直線的に点在し、そのラインは次の館の内部通路の位置ときわめて近似している。このことから、先の井戸分布が何らかの道や区画にそっていた可能性が想定される。そして、この道や区画は次の館時代でもそのまま取り込まれていったと考えられる。なお、当該期の年代はS D 1010~1012とS D 1008出土遺物の対比から14世紀前半以前と推測される。

## B 館時代

前代とは大きくかわり、微高地の広域にわたって堀が巡らされる館が出現してくる段階である。年代的には14世紀後半～15世紀後半も早い時期と思われる。遺構は館堀であるS D1008・2001・2007、建物跡S T1001・2001～2008、S A1001・2001～2004のほかA②～⑤類の井戸の大半や鍛冶関連遺構S K1086なども当該期の所産とみられる。詳細は後述する。

## C 館廃絶以後

詳細は明らかにできなかったが、当該期の所産と捉えられる可能性がある遺構は多数のA①類井戸跡があり、溝跡は不明瞭である。遺構の分布は再び微高地西側を中心に分布するようになるとみられる。当該期の年代は館廃絶後の15世紀後半以後と思われる。出土遺物では青花碗・大窯製品など16世紀代の陶磁器が少量と内耳鍋を中心とする在地産土器がある。この15世紀後半から16世紀前半と特定できる陶磁器が少なく、しかも水田域で出土した量のほうが多い様相は館の廃絶年代の推定のひとつの根拠とした。遺構はA①類井戸跡を中心とし、陶磁器類が少ない点に館廃絶後の何らかの土地利用が表現されているとみられ、居住遺跡として利用された痕跡はあまりないと思われるものの、詳細は明らかにできなかった。A①類井戸跡は小結のところで述べたように浅い井戸群であり、天水や湧き出た水を利用する施設であるにしろ、季節的な制約を受ける可能性が高く、群をなして分布する様相からも耕作に関連する遺構ではないかと思われた。しかし、一方で内耳鍋の大型破片が廃棄されている例もあり、単純に耕作関連の遺構と断定することはためられる。ここでは周囲の遺跡で類似した遺構がどのような分布を示すかによって再検討すべきと考え、結論は後考に待つことにしたい。なお、館の堀跡は廃棄後に埋め戻されていることが確認されたが、埋め戻しが当該期に行われたものかは不明である。

## 4 中世の遺物

### (1) 焼物

調査では微高地1121点、水田域304点の中世焼物が得られ、総計は1425点である。居住域となる微高地出土焼物が全体の約79%を占めるが、水田域でも意外と多くの焼物が出土している。以下に種別の概要を述べ、次に水田域と微高地の個別遺構・土層の出土遺物について説明を加える。なお、後に述べるように同一遺構内で出土した同個体と思われる焼物を一括して1点と数えている。遺構間の接合作業が不十分なので推定個体数でも、破片数の実数でもない点は注意されたい。

#### ア 焼物の概要

##### A 在地産土器

還元炎焼成の須恵質及び瓦質土器、酸化炎焼成の土器がある(土師質と仮称する)。器種は須恵質・瓦質土器にすり鉢・内耳鍋、酸化炎焼成土器には内耳鍋・すり鉢・火鉢・土釜などの大型品とカワラケ・香炉などの小型品がある。なお、酸化炎焼成土器は胎土の上から比較的砂を多く含む大型品と精製された胎土が多い小型品に分けられる。ここでは以上のように分類・呼称するが、仮の呼称方法であることを断っておきたい。

##### a 須恵質土器

この焼物は須恵質の焼成ゆえに従来では珠洲と混同されていたが、鋤柄俊夫氏によって初めて注目<sup>(註1)</sup>されてから県下で散見されるようになっている。分布は善光寺平南部を中心に東信・中信・諏訪地方にも及ぶ。本遺跡で確認できる器種はすり鉢にほぼ限定されるが、ほかに他遺跡例では火鉢状の器種が加わる可能性がある。産地については単一産地か各地に複数存在するか判然としないが、この焼物が珠洲すり鉢の模倣品とみられるため珠洲流通圏縁辺に位置し、しかもその流通量の少ない場所と推測されている<sup>(註2)</sup>。

分布状況からすると長野市周辺に生産地の一つがあると思われる。胎土は多量の細砂と少量の粗い砂粒を含む。底部は離れ砂が付着、外面は縦ハケの後にナデ、口縁部から内面は丁寧な器面調整の後に回転台ナデが施されている。回転台の上に離れ砂をまいて、その上に粘土の円盤を置き、粘土紐輪積みによって成形したと思われる。なお、卸目は10本前後、直線的でやや粗く短く施されるものが多いが、わずかに珠洲同様に隙間なく密に施すものも知られる。焼成は全体的に軟質が多いが、かなり硬質のものもある。また、一部は非常に焼成不良で瓦質土器や酸化炎焼成土器と識別に迷うものもある。口縁部の形態はやや厚手の方形で外傾するもの、あるいは丸いものが主体となり、かなり軟質なもののみ口縁内側端部が突出する例がある。この口縁部の形態は珠洲と類似しており、年代推定の一つの根拠になる可能性がある。この焼物は既に指摘されたように、珠洲を模倣して県内で生産された焼物と考えられるが、成形・調整方法には大きな違いが認められ、直接的な影響を受けていないと思われる。なお、年代については後ほど検討を加えることにしたいが、鋤柄氏が指摘するようにほぼ14世紀を前後すると思われる。水田域ではS D 3006、④・⑫区などから計4点、微高地からはS D 1008、S K 1012・1084・2628、S D 1010・1012・1022・1016、S Q 2016、などを中心に26点ほど、計30点出土している。すり鉢では最も数が多く、珠洲が次に続く。

#### b 瓦質土器

表面が黒灰色・灰色を呈し、還元炎焼成ながら上記の須恵質すり鉢と比べると明らかに軟質である。ただし、両者の識別が難しい個体もある。現時点では本遺跡と隣接した更埴市域と長野市南部に出土が限定されており、出土数の少なさからも生産された時期は非常に短いと思われる。確認される器種はすり鉢と内耳鍋の2者のみである。この瓦質土器は年代的・焼成状態から須恵質すり鉢から内耳鍋を中心とする酸化炎焼成土器生産へ移行する中間に位置していると考えられ、その生産の転換期の様相を探る上で重要な土器となることは間違いない。ただし、今回の調査のなかでも形態、焼成状態の比較からは善光寺平南部での地域的な変化の様相として、須恵質→瓦質→土師質への概略の時間的な変化は類推されるが、内面に密に卸目を入れるすり鉢が須恵質・土師質では確認されるのに、瓦質土器では確認できない問題点がある。また、土師質の酸化炎焼成土器は内耳鍋を中心に大量生産・産地の拡大現象が知られており、生産構造の変化を伴うと見られるため、単純な同一産地内での焼成技術の変化として見られるかどうかは断定できなかった。なお、県内では瓦質土器として搬入品の火鉢類と佐久地方で香炉などの一部の器種が知られているが、系譜的には繋がらないものである。特に佐久地方の瓦質土器は本遺跡の土器よりも時期的に後出し、しかも器種も煮沸・調理具など認められない。群馬県地方からの搬入の可能性はある。

#### 瓦質すり鉢

全体的に黒灰色を呈し、還元炎焼成と思われるが、焼成が不安定で須恵質のすり鉢や土師質のすり鉢と識別しにくいものが含まれる。成形方法は基本的に須恵質すり鉢と同じである。口縁部の形態は更埴市大境遺跡例<sup>(註3)</sup>や本遺跡例の端面をやや幅広ぎみに水平にとるものしか知られていない。この口縁部形態は珠洲製品と類似しており、珠洲すり鉢と比較して在地産須恵質すり鉢に後出すると考えられる。ただし、須恵質すり鉢では内面に卸目を密に施すものが知られるが、瓦質すり鉢では確認できていない。そのため、須恵質土器から瓦質土器へ変化する可能性があるものの、技術的な影響を受けながらも須恵質土器生産から派生した別の焼物である可能性も捨て切れない。年代は珠洲すり鉢との口縁部の比較から、14世紀後半～15世紀前半に位置づくと思われる。石川条里遺跡では微高地のS K 1044、S D 1008・2001で4点出土しており、水田域では出土していない。

#### 瓦質内耳鍋

瓦質内耳鍋はすり鉢同様に内外面は黒灰色を呈し、器壁断面の中央が青灰色になっている。全体の形が窺えるものはなく断片的な資料しかないが、すり鉢と比較して器壁が薄く均一で、却目も観察されず、器

の傾斜がかなり急となるため内耳鍋であろうと推定した。なお、底部破片から丸底になると思われるが、体部内面の立ちあがりには土師質内耳鍋ほど明瞭ではない。丸底の内耳は原形となる鉄鍋に極めて近い存在で、その出現期とごく一部の16世紀代に丸底の土師質内耳鍋が存在することが推測されているが、本例は瓦質すり鉢との焼成の類似からほぼ内耳鍋出現期とされる時期の所産と思われる。また、このことから善光寺平南部では内耳生産の出現にこの瓦質土器が関連していた可能性も推測できる。ただし、先に述べたように須恵質すり鉢からの系統的な発展であるとするには問題がある。石川条里遺跡ではS K1088・2401、S D1008、古墳時代S D1016に混入したと思われる5点出土している。

### c 土師質一大型品

酸化炎焼成には大型品と小型品があり、胎土の違いが認められる。小型品の代表となるカワラケは中世を通じて見られる一方で、大型品は中世後半期を中心に出現し、しかも須恵質・瓦質土器との関連も注目される違いがあるが、両者の生産のあり方はあまり明らかになっていない。また、大型品はほぼ共通した胎土と認められるものの、子細にみると内耳鍋は比較的細な砂を多く含むものの、それ以外の器種では粗い粒子が目立つものなど胎土の質観が異なるものもある。これらの土器の位置については検討の余地があるが、ここでは酸化炎焼成土器を大きく小型品と大型品に分離して扱い、大型品では特別断わらない限り内耳鍋は器種名でよび、それ以外は一括して土師質と仮称しておく。この大型品には内耳鍋と少量のすり鉢、わずかな火鉢と釜がある。

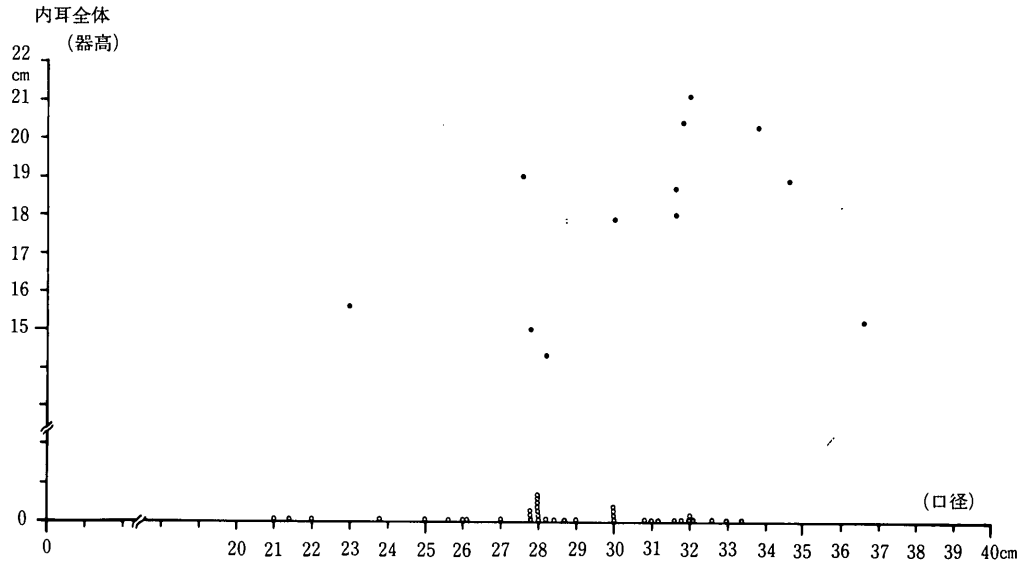
#### 内耳鍋

もっとも出土量が多い。微高地626点、水田域125点の計751点出土したが、この数は微高地中世焼物の約56%、水田域の約41%に該当する。もちろん、製品自体が大型で1個体から生じる破片数も多くなると思われるので上記の数は個体数に近いとはいえないが、煮沸の土器であることからきわめて消費量が多い焼物であることは間違いないと思われる。

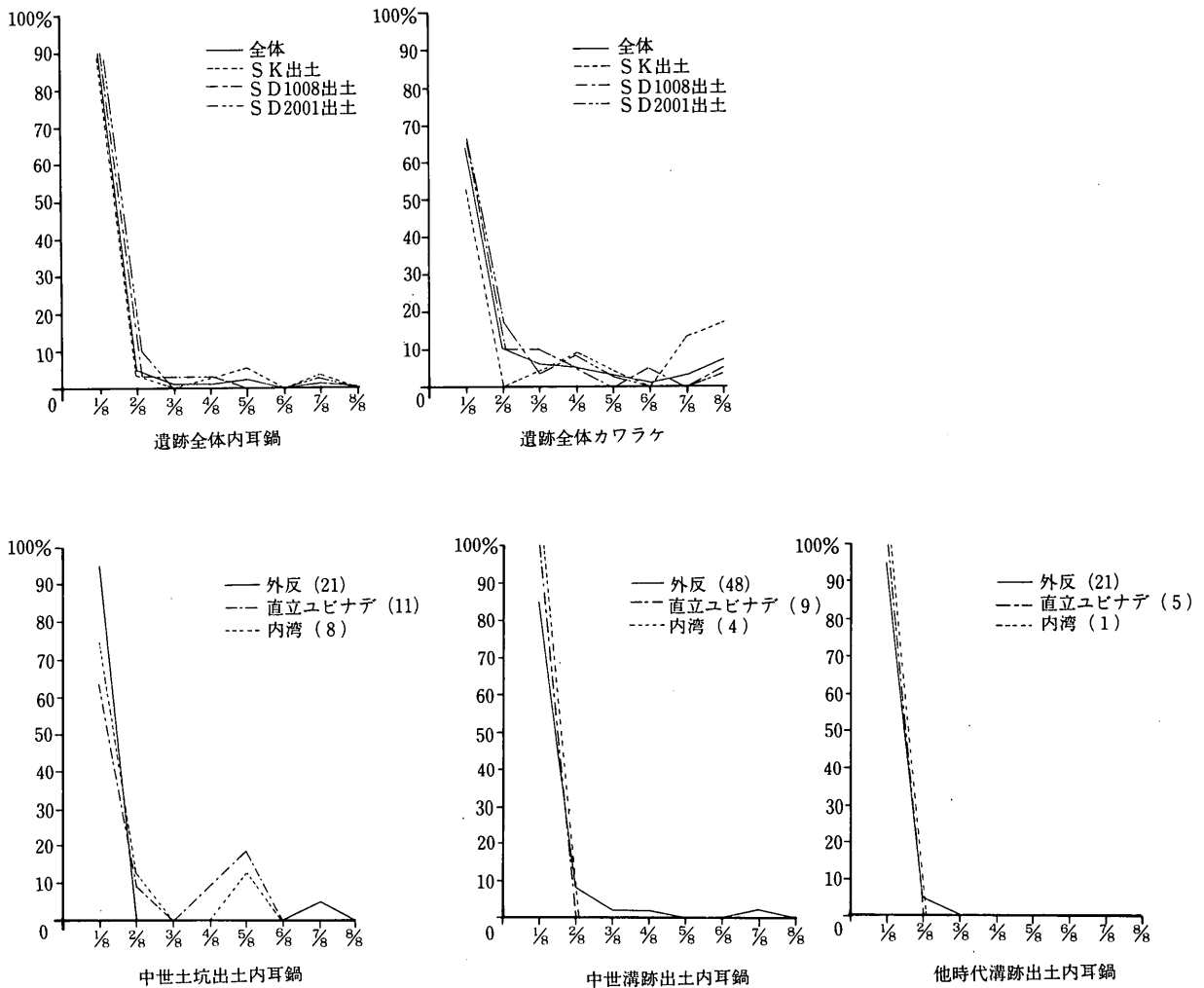
形態は平底筒形胴体に口縁内側2か所に耳が付く。胎土は大量の細かな砂を含む特徴があり、小片であってもそれと識別することができる。底部は砂が付着した砂底で、胴部外面は縦ハケ調整後にナデ、内面はヨコハケの後にナデが施され、更に口縁部から内面を回転台ナデして仕上げている。これは須恵質・瓦質すり鉢に共通する成形方法であり、類似した技術系統のなかで捉えられる可能性がある。大きさはあまり均一とはいえないが、直径30cm前後のものと同振りなものがある。口縁部形態は多様で、従来の分類でもこの点が注目されている。全体の形がわからなくても口縁部の破片さえあれば分類できる利点があるので、本報告でも口縁部形態に着目した。ただ、これまでの研究では形態を重視する小林氏の分類<sup>(註4)</sup>と、調整を重視する野村氏の分類<sup>(註5)</sup>があり、必ずしも両者の分類が一致していない。ここでは両者の検討を加味して、外反する口縁、直立して内面にヨコナデ痕を顕著に残す口縁、内湾ぎみでヨコナデ痕があまり顕著でない口縁に大別しておく。

なお、内耳鍋の各破片を8分割した同心円のチャートに当てて計測した遺存度を、遺存度別に破片数で集計したグラフ(第296図)で見ると、1/8遺存が突出して2/8遺存と大きな落差を生じ、それ以上は5/8と7/8遺存がやや高いものの全体的には少量であり変化なく推移する。このグラフからは内耳鍋が小片出土が多いことが知られ、基本的に破損するまで使用されたか、出土遺構へ直接廃棄されたものが少なかったのではないかと推測される。そのなかで4/8以上遺存するものが8点のみあり、これらのみが直接的な廃棄を示すと思われ、微高地のS K1001・1004・2305・2391・2624、S D1008・2001が該当する。

なお、地点別の出土数量では微高地はS D2001が159点、S D1008が74点、S D2007が5点となり、S Kでは10点前後出土したものは1001-10点・1004-9点・1015-7点・2249-10点・2624-13点・2639-12点である。この内、S D2001とS D1008のカワラケと内耳鍋出土数の比率はほぼ類似し、S D2007のみが内



第295図 内耳鍋法量分布グラフ



第296図 内耳鍋・カワラケ口縁部遺存度比率グラフ

耳鍋よりカワラケのほうが多い。また、水田域では②-2区が突出した数を誇るが、これは遺存度が低いものしかないので混入したものであろう。

#### 土師質すり鉢

土師質すり鉢は水田域・微高地から出土しているが極めて少ない。胎土は内耳鍋に類似するが、内耳ではほぼ均質な砂が多いのに対してやや粗い砂も目立つ。底部は出土していないので底部調整はわからないものの、胴部以上の破片からみて基本的に須恵質・瓦質すり鉢と同じ成形方法によることが推測され、酸化炎焼成で明褐色を呈する。口縁部の形態はやや方形ぎみのものと外側端部が三角になるものがあるが、端面は基本的に水平である。内面の卸目は微高地域では粗いものしか知られていないが、水田域②-2区出土のものは隙間なく密に施されるものがあり、基本的には珠洲の模倣として位置づく可能性がある。珠洲との形態的な比較より15世紀前半と推測される。水田域②-2区の近世面から4点、微高地ではS K2628、S D1008・2001・2007、検出面から7点の合計11点出土している。ただし、瓦質すり鉢との識別が難しいものも多いため、認定に不安もある。

#### 土師質釜

釜は1点のみ微高地S D1008から出土した。この器種は県内ではほとんど知られていなかったものだが、本遺跡での出土量からみても極めて生産量の少ない器種と推測される。形態は肩の張る球胴に直立する短い口縁部をもち、肩部には横方向の把手が付けられ、その上部に小孔が穿たれる。底部の形状は不明である。胎土は砂を多く含み、明褐色を呈する。胴下半にハケ調整の後に雑なナデが施されているが、上部および内面は丁寧なナデが施されている。なお、外面下半には煤が付着している。年代については子細不明であるが、S D1008の上層から1点のみ出土しており、15世紀代と思われる。

#### 土師質火鉢

微高地域のS D1008より2点、古墳時代S D1016に混入して1点出土している。このほかS K2058、S D2001からはその可能性のあるものが各1点づつあるが、やや疑問も残るもので中世火鉢と断定はできない。S D1008出土例は底部に方形の足が付く浅鉢型と、子細不明な球胴型の破片である。胎土は粗い砂を多く含み、内耳鍋とはやや質感が異なる。酸化炎焼成で明褐色を呈する。底部は砂底で胴部内面はヨコハケ後ナデ、外面はナデが施される。年代は在地産土師質土器の出現以後の15世紀代で、土師質すり鉢と近似した15世紀前半の可能性があると思われる。S D1016出土のものは質観が極めて類似していたため古墳時代土師器と誤認していたものであるが、無頸球胴の器体の胴部に窓が開けられていることから中世の風炉と認定した。色調は外面は黒灰色、内面は灰褐色で、比較的荒い粒子を含むものの内耳ほど細砂は目立たない胎土である。整形は内面がヨコナデ、外面はへう磨きされ、口縁部と胴部に開けられた窓はへうで削られている。スタンプ文はない。このS D1016出土のものについては上記の火鉢とは調整がやや異なるが、搬入品の風炉を模倣した在地産土器と思われる。この在地の土器火鉢については県内では飯田市の開善寺境内遺跡<sup>(註6)</sup>や長野市栗田館<sup>(註7)</sup>、小滝遺跡<sup>(註8)</sup>など少数しか知られていない。今後、瓦質土器との関係の整理が必要である。

#### d 酸化炎焼成—小型品

カワラケと香炉があり、精製された胎土を使用して、焼成は軟質である。これらと上記の大型品の生産関係については明らかになっていない。

#### 香炉

微高地S D2001から1点のみ出土している。この土器香炉は中南信ではあまり出土例がなく、東北信濃に散見されるものである。この分布からすると古瀬戸の補完品として位置づく可能性がある。本遺跡出土例は灰白褐色の砂粒をわずかに含む胎土で、平底で体部は内湾し、底部には回転糸切り痕が認められる。



県内の土器香炉では足を付けるものが知られているが、本例は底部がごくわずかしか残存せず子細は不明である。類例品は長野市栗田館にある<sup>(註9)</sup>。年代は子細不明であるが、館存続時期の14後～15世紀に納まると思われる。

#### カワラケ

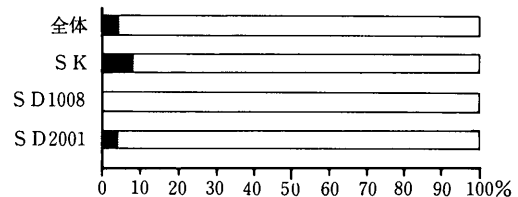
カワラケは微高地で302点、水田域で117点の計419点が得られた。この数は微高地域では中世焼物の約27%、水田域の約38%にあたる。出土地点別にみると微高地では館堀S D 2001-90点、S D 1008-42点、S D 2007-18点、S D 1010～1012で2点、中世の土坑では43点となり、やはり中心屋敷をめぐる堀出土数が突出する。ただし、後述するようにS D 2001は破片数は多いものの、口縁部が4/8以上遺存するものは6点-0.08%に過ぎず、S D 1008の15点-約37%、S D 2007の8点-約44%と比べると遺存度は低い。中世の土坑ではS K 2391でほぼ完形の土器が7個体出土しているほか、いくつか完形に近いものが散見されるが、基本的には小片が多い。また、煤が付着するものはわずか15点しか確認できないので、基本的にカワラケは食器として使用されたことが窺える。さらに内耳鍋よりも遺存度が比較的高いものも多く、遺存度の高さはカワラケが小型品で内耳鍋ほど細片に破損しにくいとも考えられるが、従来指摘されるように再使用されない一過性の食器の性格を反映しているとも考えられる。しかし、上記にみたように直接廃棄されたと推測されるのは僅かしかない。

なお、水田域出土カワラケの大部分が②-2区水田出土であり、それ以外の水田出土はわずか26点である。その②-2区出土カワラケは非常に遺存度が低いものが多いことから内耳鍋同様に混入の可能性がある。

胎土は基本的に非常に緻密なものが多いが、一部の黄緑褐色や灰褐色のものにやや粗い粒子の砂がわずかに含まれる傾向があり、灰白色を呈するものは非常に精選された胎土のものが多い傾向がある。色調は一部に還元炎のような暗灰色のものがあるが、多くは明褐色や黄緑褐色、灰白色、灰褐色を呈して基本的には酸化炎焼成の土器と認められる。焼成はあまり堅緻ではなく、触れるたびに粉状になるものが多い。焼成方法は不明であるが、内壁中央が暗灰色を呈するものも認められるため、露天ではなく、小規模ながらも窯状の構造をもつ施設で生産された可能性も推定される。

形態は幾種類か認められ、胎土からも複数生産地・複数時期の所産が含まれる可能性が考えられる。灰褐色精製胎土のものに比較的均一な器厚で底径が大きめで内湾ぎみに立ち上がるものがあり、灰褐色～褐色や黄緑褐色のやや粗い砂を含む胎土のものに底径が小さく斜めに直線的に体部が立ち上がり、全体的に厚手の作りのものが認められる。この厚手のカワラケは形態的には細分できる。さらに灰白色や白色を呈し、究めて精選された胎土のものに口縁部の外反するものがあり、明褐色で精選あるいは細砂を多く含む胎土に外反か比較的シャープに直線的に立ち上がる口縁形態がある。また、例は少ないが灰褐色で粗い砂を少し含む胎土の厚手のつくりで内湾口縁のカワラケもある。

以上の各形態には産地・年代・使用方法の違いなどが表現されていると思われるが、本遺跡の調査のなかではあまり良好な一括資料には恵まれなかった。そのなかでも厚手カワラケはS D 2007で主体的となり、S K 2391は明褐色カワラケで占められることから、この両者はそれぞれある時期に主体となったカワラケと考えられ、伴う内耳鍋の形態から考えれば前者が後者よりも古いと考えられる。この点は後ほど周辺の資料と対比して考えてみたい。



第297図 カワラケ煤付着比率グラフ

## B 瓦質火鉢

瓦質火鉢は搬入品と考えられるもので、本報告では「在地」とことわらない限りは搬入品の瓦質火鉢を指す。浅鉢型と風炉の2種あり、いずれも精製された胎土で灰白色・青灰色・灰褐色を呈して細かな砂粒を含む。外面はへら磨きの上、巴文・雷文・波文などのスタンプ文で装飾されている。出土地点は微高地の館堀にほぼ限定され、内堀S D 2001で風炉と浅鉢型火鉢5点、外堀S D 1008でS D 2001と同一個体と思われる風炉1点と浅鉢型1点が出土している。個体数とすれば浅鉢型2～3個体、風炉1～2個体は確実にある。このなかで風炉は館南東部に集中して出土しており、館中心部での限定された使用・廃棄が推定される。この火鉢類は県内では北東信の館出土例が多く、中南信でもいくつか城館遺跡や寺跡といった特定の遺跡で出土する傾向が認められており、遺跡の性格を考える上で鍵となる遺物と考えられる。なお、分布からは北陸方面からの搬入が考えられるが、詳細はこれからの検討によりたい。

C 山茶碗<sup>(註10)</sup>

東海産無釉の灰釉系陶器で、俗称ながら山茶碗の呼称を用いた。器種は碗と捏鉢の2種が知られる。碗は12世紀と13世紀後半～14世紀前半の所産と思われるものが僅かに見られるのみである。捏鉢は出土数が非常に僅かで、同じ機能をもつ珠洲や在地のすり鉢が圧倒する本遺跡周辺の地域的な陶磁器流通のあり方を反映している。

## 山茶碗

全部で7点出土した。微高地ではS D 1010-2点、S D 1008-1点、S Q 2004-1点、S Q 2016-1点、検出面1点、水田域1点である。いずれも小破片で全体の形状が窺いにくい。胎土は比較的緻密で灰白色・暗灰白色を呈する東海北部産と思われ、S D 1008、S Q 2004、検出面出土例は東濃産と思われる。口縁部破片は2点しかなく、S Q 2004のものは器壁が薄く端部が肥厚するもので明和2号窯式と比定される。S Q 2016のものは口縁部が同様に肥厚し、胎土にわずかに砂を含み暗灰白色を呈する。産地は不明であるがほぼ近似した時期に比定できると思われる。S D 1010出土のものはやや口径が大きく、体部が湾曲して外反する口縁へ続く体部破片と、外底に回転糸切り痕を残して低い三角高台を付けモミ痕が残る底部破片がある。内底面にはユビオサエが見られない。S D 1008出土のものは小片で子細不明である。検出面出土例は底部破片で高台にはモミ痕が顕著に残るが、小片で詳細不明である。また、水田域では⑬区S D 3007-Bから緩やかなS字状の体部破片が出土している。これらの碗は出土量が少なく、食器としては主体にならないが、わずかながらも搬入されている点は注意される。なお、皿は出土していない。

## 捏鉢

微高地では中世遺構からの出土が少なく、古墳時代S Q 2002・2016に混在した例と検出面各1点、水田域ではS D 3006-Bで口縁部1点の計4点がある。いずれも小片である。口縁部が確認できるものは端部が肥厚し、13世紀の所産と思われる。出土量は非常に少ないが、山茶碗同様に少量ながら搬入されている点は注意されよう。

D 常滑一壺・甕<sup>(註11)</sup>

微高地11点、水田域7点の計18点が得られたが、いずれも小片で壺・甕の識別しにくいものが多い。口縁部の破片は微高地と水田域で各1点出土し、いずれもT字型の口縁で14世紀の所産と思われる。遺跡内では常滑に限らず珠洲でも壺・甕類といった貯蔵具が少ない。貯蔵具は陶器以外のものに依存する傾向が推測される。なお、本遺跡周辺の14世紀代では常滑が搬入されていることが知られ、この地域では山茶碗や捏鉢同様に僅かながらも南からの搬入もあったことが確認できる。ただし、すり鉢は珠洲や珠洲を模倣した在地産すり鉢で主体的に占められる点からは、常滑は貯蔵具に限定され、あくまでも客体として位置付けられよう。

E 渥美一壺<sup>(註12)</sup>

微高地S D 2001から壺小破片が1点出土している。砂を多く含む胎土で灰色を呈し、内外面ナデ調整される。外面には蓮弁と思われる沈線が描かれており、この破片は肩部であることがわかる。渥美壺は善光寺平でもあまり出土が知られておらず、貴重な1例である。

F 珠洲<sup>(註13)</sup>

珠洲産の陶器には壺・甕・すり鉢があるが、壺と甕は出土数が少なく、微高地では特にこの傾向が強い。また、年代的には珠洲Ⅲ期～Ⅳ期<sup>(註13)</sup>を主体とし、それ前後と確定できた出土品は少ない。

## すり鉢

微高地ではS D 1008・S D 2001、S K 1016・1017・1084・2624、古墳時代遺構のS Q 2016、S D 1016、及び検出面から計10点、水田域では④区・⑥区S D 0017、検出面から3点の都合13点が得られた。いずれも部分的な小片で、口縁部破片は5点・胴部破片3点・胴部～底部破片5点である。すべてロクロ調整で底部が遺存するものは静止糸切りが観察される。焼成は比較的堅緻で暗青灰色を呈するが、⑥区S D 1017出土のものがやや不良で灰色を呈する。また、S D 1016出土例は卸目を持たないもので、S K 1016出土例は卸目が比較的密に施されている。それ以外はほぼ直線的に一定間隔で卸目が施されるようである。口縁部形態は方形で外傾するものがほとんどでS D 2001出土例のみ方形口縁ながら端部を水平にとる。S D 1016出土の卸目が無いものは13世紀、S K 1016出土例が14世紀末頃と推定される。それ以外は珠洲Ⅲ～Ⅳの13世紀後半～14世紀の所産と推定され、量的にはⅢ～Ⅳ期前半が多い感があり、長野市南部以南で珠洲Ⅴ期には出土数が減少する傾向と一致している。

## 壺

水田域で3点、微高地で4点の合計7点出土したが、口縁部破片はなく、すべて胴部・底部破片である。水田域では矢羽根タタキ壺胴部破片が⑥区微高地、ロクロ整形で外面に縦方向に垂下するクシ目文をもつものが②-2区近世面、平行タタキ壺片が④区から出土している。微高地ではS K 2423から上部に平行タタキ下半がロクロナデされる体部下半の破片、S D 1016からは砂底の底部破片、S D 2001からはヨコ方向の平行タタキが縦位に連続する胴部破片が出土している。他に小片がS D 1008、土製円盤に加工されたタタキ壺破片が検出面で出土している。

## 甕

非常に少なく、古代の須恵器甕との識別に迷ったものがある。古代の須恵器のタタキ目は基本的に右上がりになる点と胎土の違いを珠洲甕識別の指標とした。水田域では②-2区近世面、⑫区近世面、⑬区溝跡から斜めの平行タタキが施される胴部破片が各1点、合計3点出土している。微高地ではS D 1052・S D 2001で各1点、検出面で2点の合計4点出土したが、S D 1052出土例は古代の所産か判断に迷ったものである。S D 1052例は胎土が古代の須恵器甕とは異質な感があり、左上がりの平行タタキが施されるため、珠洲の可能性が高いと考えた。しかし、積極的に底部が砂底とは認定しにくく、体部の立ち上がりも弱いなどの不安もある。検出面出土の破片は左上がりの平行タタキが施される。この珠洲甕はいずれも胴部～底部破片で、別個体と思われる。出土量からも珠洲の甕の搬入量は少ないと見られるが、常滑が主体的に担う状況も確認できないため、この地域では少なくとも14世紀後半以後は陶器の甕が減少する可能性として捉えられる。

G 古瀬戸<sup>(註14)</sup>

碗・皿・鉢・瓶類があるが、調査面積に比してその出土量は意外と少ない。出土地点もほとんどが微高地である。天目茶碗・平碗類、皿類は中期様式の後半～後期様式2段階前後が主体で、3段階はわずかで4段階は確認できない。また、中期様式でも古い段階か、前期様式と思われるものは微高地S D 1008出土

の瓶子と水田域の②-2区で出土した古瀬戸深皿がある。

#### 天目茶碗

微高地で16点出土し、SD2001-6点、SD1008-3点、SK-3点、あとは近世の溝や検出面からの出土4点で、館中心屋敷をめぐる堀からの出土が多い傾向が窺える。完形品はないが、全体の形が窺えるものは2点、口縁部破片7点、底部破片2点で、残りは体部破片である。なお、⑩区市道下SD1008出土の天目茶碗は小天目である。口縁部破片には丸味を帯びる胴部から外湾して先端が鋭く尖るもの(SD2001・1008)、同様の形態ながらやや口縁先端が厚く外湾が弱いもの(SD2001・1008)、口縁部が体部から直立ぎみに立ち上がり屈曲が弱く端部が丸いもの(SD2001・SK2305)などがある。底部破片には削り込みの浅い輪高台(SD2001・SD1008)と内反り高台(SD1008・2018)の2者があり、後者は錆釉が施される。これらの天目茶碗は古瀬戸後期様式のI期～III期に入るもので、ほぼ14世紀後半～15世紀前半までの所産と思われる。

#### 平碗

微高地からは14点出土し、SD2001-4点、SD1008-2点、SD1011～1012-2点、SD2007-1点、SK3点で残りは古墳時代遺構への混入など2点である。この平碗は天目茶碗と同様に微高地でしか出土していないが、天目茶碗よりは散在的に出土している。全体の形が窺えるものはなく、口縁部破片は8点、底部破片2点、残りは体部破片である。このうち高台脇まで残存するSD2001・1008出土例や底部破片2点はいずれも高台が削り出しである。口縁部の形態は、体部から直線的に伸びて先端がすどく尖るもの(SD2001)や先端の尖りが弱く外反気味にくびれるもの(SD1008)などがある。体部破片はいずれも弱く丸みを帯びる器形である。これらの灰釉からほぼ天目茶碗と類似した年代が与えられると思われるが、15世紀前半代が主体となると思われる。

#### 小皿

小皿類は非常に少なく、SD1008-2点、SD1003・SD2001で各1点の合計4点出土した。この内、SD1008の1点は整理中に紛失してしまった。SD2001出土品は底部が浅く高台が削り出され、口縁部のみ灰釉が施される。SD1008出土品は平底で口縁部のみ鉄釉が施され、15世紀前葉～中葉の所産である。SD1003出土品は底部破片ながら、縁釉小皿と思われる。子細は不明である。

#### 鉢

微高地のSD2001で2点、水田域の②-2区近世面で1点出土している。いずれも灰釉が施されるが、SD2001は折縁の深皿になると思われる。②-2区近世面出土のものは灰釉単味で13世紀代の折縁深皿底部破片と思われるが、底部中央のみの破片で詳細は不明である。

#### 卸皿

微高地の古墳時代SD1016に混入して出土した口縁部小片1点のみである。口縁部端部は外側に引き出され、内面がやや突出する。15世紀前半頃のものであろうか。比較的中世遺跡ではよくみられる器種ではあるが、本遺跡では非常に出土量が少ない。

#### 瓶類

微高地のSD1008で瓶子1点、SD2001で四耳壺の高台と思われるもの1点、SK2254とSK2283から同一個体の可能性がある花瓶口縁部2点が出土した。SD1008出土の瓶子は紐輪積成形で内面に指圧痕と雑なナデ痕が残される締腰の瓶子である。外面は回転ナデされ、薄い灰釉が施されるが、焼成時に流れた灰釉でハケ塗りかどうかは明らかでない。13世紀後半の所産と思われる。同一個体と思われるものが⑦-2区SD1016から出土している。SD2001の四耳壺はやや厚い灰釉が施され、高台部だけの破片である。小片ながら釉調から14世紀の所産と思われる。SK2254の花瓶はロクロナデされて厚い灰釉が漬掛けされる。

H 大窯製品<sup>(註15)</sup>

大窯製品は微高地と水田域で出土しているが、量的には水田域のほうが多い。器種には天目茶碗と皿類があり、すり鉢類は一切出土していない。丸皿の一部は口縁部を欠損して年代は不明であるが、大半は16世紀後半の所産と思われ、16世紀前半のものは少ない。

## 天目茶碗

水田域の⑥・②-2区近世面で各1点出土している。器高の低い天目茶碗で口縁部が大きく屈曲する。体部下半を除いて鉄釉が施され、口縁部が茶褐色、体部が黒茶褐色に発色する。いずれも16世紀後半の所産と思われる。

## 皿類

水田域では②-2区近世面から6点・同中世I面水田から1点・⑫区で出土地点不明1点の合計8点がある。微高地は近世のS D 2037・1008・検出面で各1点ずつで計3点ある。この内、微高地S D 1008出土品は近世陶磁器と一緒に出土しており、S D 1008跡が近世に用水として利用された際に混入した可能性が高い。皿の種類は丸皿・稜皿・ヒダ皿・内ハゲ皿・折縁丸ノミ皿がある。丸皿は②-2区近世面2点、同中世I面1点、微高地検出面1点、S D 2037から1点出土した。口縁部まで遺存するのは②-2区近世面出土のみで、内湾ぎみに立ち上がる。S D 2037は鉄釉、その他は灰釉が全面に施される。稜皿は②-2区近世水田から1点出土し、全面鉄釉が施される。ヒダ皿も1点あり、同様に鉄釉が施される。内ハゲ皿は⑫区と②-2区近世面で各1点出土した。口縁部から外底まで灰釉が施され、内底面は釉がふき取られている。なお、⑫区出土品は遺存状態が良好で口縁から底部まで残存する。折縁丸ノミ皿は②-2区近世水田面、微高地S D 1008などから出土した。外側へ折れる口縁部をもち、体部内面が丸ノミ状に削られる。今回の調査で得られた皿類は16世紀後半を中心とし、16世紀前半と特定できたものはない。遺跡周辺では更埴市屋代城・小坂西・地の目・一丁田遺跡、長野市松原遺跡などでは16世紀前半の大窯皿が出土しており、16世紀前半の皿類が見られないのは地域性によるものではなく、遺跡内の土地利用状況の特徴によると考えられる。

## I 輸入陶磁器

## 白磁

微高地16点、水田域4点の計20点出土している。器種は碗がほとんどで、皿は4点ほどである。なお、これ以外に四耳壺の可能性ある胴部破片1点、産地不明のやや雑な白磁碗?破片が微高地検出面から1点出土している。もっとも多いのが白磁碗IV・V類である。玉縁口縁で低く厚い高台のIV類は微高地S D 1011・1012・2001、水田域②-1区S D 0003で4点、口縁端部が短く折れて細く長い高台のV類は微高地S K 2319、S D 2001の2点である。体部破片で詳細不明な白磁は微高地の古墳時代S K 2208・2400・2427・2634各1点、S D 2001で3点、検出面1点、水田域では②-2区近世面、⑫区中世水田で各1点出土した。これ以外は微高地S D 2001(S D 2004)から13世紀後～14世紀前の口はげ皿底部破片が1点、内湾ぎみの口縁となる15世紀の小皿底部破片と思われるものがS D 1008から1点、S X 2001より内面に沈線もつ白磁皿1点、水田域⑬区2層から内湾ぎみに立ち上がる白磁皿1点が出土している。石川条里遺跡で出土した白磁は平安末期の所産が主体で、それ以後の白磁は非常に少ない。そのなかでも平安末期の白磁碗は水田域からも出土し、大量に搬入されていたことが知られる。

## 青磁

微高地では約33点、水田域では17点の計50点が出土した。器種は鉢2点と碗48点であるが、いずれも破片である。種類は同安窯系、龍泉窯系無文・画花・蓮弁・玉縁・雷文・細線蓮弁文碗があるが、細線蓮弁文青磁碗は水田域のほうが多い。同安窯系青磁碗は微高地S D 1008で胴部破片が1点、その底部の可能性のあるものがS D 2001で1点の計2点出土している。前者のものは外面に縦位のクシ目文、内面には弧状

の短いクシ目文が施され、薄い淡緑色の釉が掛けられる。龍泉窯系無文碗は微高地S D1016、水田域⑥区、⑫区中世I面で計3点出土した。龍泉窯系画花文碗は微高地ではS K1012、S D1008・1010・2001、検出面の5点、水田域ではS D3006Bから2点の合計7点出土した。この内、S D1010出土品のみ花をあしらひ、他は飛雲文を配する。なお、S D1010出土品は底部周囲を打ち欠いており、土製円盤として再利用されている可能性がある。龍泉窯系蓮弁文碗は外面に蓮弁を削り出すもので、微高地ではS K1013・1084・2100・2289各1点、S D1008で2点、S D2001で3点、S D2013で1点、検出面5点の計15点がある。水田域では④区1点、⑥区表採1点、②-2区近世面1点の3点があり、遺跡全体では18点ある。この青磁碗は石川条里遺跡内でもっとも大量に出土した輸入陶磁器である。口縁玉縁の青磁碗は微高地のS K2249・2289出土の2点のみで、いずれも口縁部のみの破片である。雷文碗は可能性のあるものを含めて2点ある。微高地の近世S D2036で小片ながら外面に沈線をもち、その可能性がある破片が1点、水田域②-2区中世I面で口縁部近くの雷文が残存する破片が1点である。細線蓮弁文碗は②-2区中世I面で3点、⑬区で2点出土した。この内、⑬区出土品はへらで幅広の蓮弁を施すもので、それ以外は狭い棒状工具で蓮弁が施される。これ以外に微高地のS K1002・1004、S D2001、検出面、水田域の②-2区近世面、⑬区、⑭区近世面で各1点ずつ出土しているものは、小片のため子細不明である。また、水田域②-1区中世II面出土品は龍泉窯系青磁碗と思われるが、仔細不明であり、S D1008出土の体部下半に幅広の沈線蓮弁が見られる破片が1点ある。

青磁鉢は微高地S D2001より口縁部破片1点、検出面より底部破片1点である。前者は外反した口縁部端部が上方へ屈曲する中型の鉢と思われる。後者は前者と類似した時期の所産と思われる。

時期別にみると12世紀後半は同安窯系・龍泉窯系画花文碗9点、13世紀～14世紀前半までの龍泉窯系蓮弁文碗・無文碗が21点、15世紀前半の玉縁・雷文青磁が4点、15世紀後半のへら削りの細線蓮弁文碗が1点、15末～16世紀前半の細線蓮弁文碗が4点、不明8点となり、青磁碗は圧倒的に中世前半の所産が多い。ただし、15世紀後半以後では水田域のほうが出土量が多くなる。

#### 青白磁

青白磁は合子と思われる破片2点と瓶子2点がある。合子と思われるものは⑥区1層と①-1区表採品があり、いずれも小片であるため認定に不安を残す。成形は型づくりで外面に蓮弁を浮き出させ、内面にはユビ圧痕が残される。壺型合子の可能性がある。表面が荒れて釉の光沢はない。瓶子は微高地S D2001と検出面から出土している。いずれも小破片で、前者はへら削りの上にクシ目文が施され、後者は「い」の字状にクシ目文が配される。

#### 青花

青花と思われるものは微高地S K1004、水田域②-2区近世面から出土した合計2点がある。これ以外にも青花の可能性のある破片がいくつかあるが、小破片で判然としない。S K1004出土品は軟質の焼成で釉も発色が悪く白濁している。16世紀後半の所産である。②-2区近世面のものは外反する皿口縁部破片と思われるが、小片のため子細不明である。

#### 天目茶碗

中国産天目茶碗と推測されるものが微高地S D2001と水田域②-2区近世面から1点ずつ出土している。胎土は暗灰色で堅緻、全体的に薄い作りである。両者ともに口縁部破片で全面に鉄釉が施されている。S D2001出土例は内側に「く」の字に折れ、端部が短く外反するもので、②-2区水田出土品は丸みを帯びる体部から口縁が緩く湾曲しながら外反する。

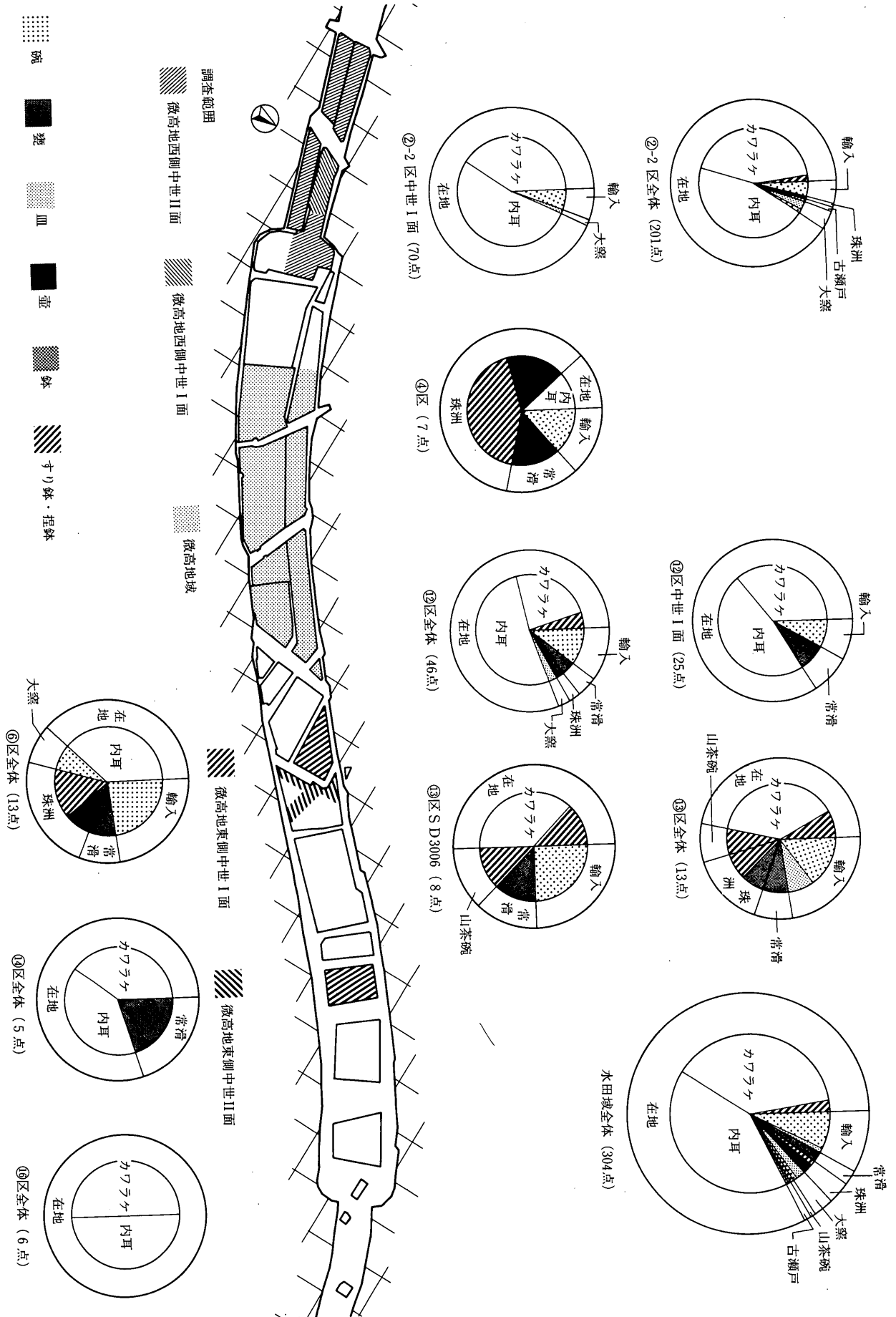
## 註

- 1 鋤柄俊夫1985「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38-4
- 2 註1や野村一寿1990「第3章6節 中世土器・陶磁器」『中央自動車長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4松本市内その1 総論編』長野県教育委員会・働長野県埋蔵文化財センターで指摘されている。
- 3 更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会1988『城ノ内遺跡II 大境遺跡III』
- 4 小林秀夫「第IV章 第4節 中世以降の遺物」『第V章 第4節 中世の遺物』『長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5』1982 長野県教育委員会
- 5 註2の野村氏の論稿に同じ。
- 6 飯田市教育委員会1974『開善寺境内遺跡』
- 7 長野市教育委員会1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
- 8 働長野県埋蔵文化財センター1989『長野県埋蔵文化財センター年報6』
- 9 註7に同じ
- 10 田口昭二1983「美濃窯における白瓷と山茶碗」『美濃陶磁資料館報II』を参照した。
- 11 中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館の年代を参考とした。
- 12 檜崎彰一1978「初期中世陶における三筋文の系譜 第1部 三筋文系陶器とその編年」『名古屋大学文学部研究論集』24 を参照した。
- 13 吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館、浜木さおり1993「第3章 3 大島窯出土遺物の分析」『珠洲大島窯』富山大学人文学部考古学研究室 石川県考古学研究会を参照した。
- 14 藤沢良祐1982「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号  
藤沢良祐1991「瀬戸古窯址群III-古瀬戸前期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』X  
藤沢良祐1995「瀬戸古窯址群III-古瀬戸前期様式の編年」『研究紀要』3輯 働瀬戸市埋蔵文化財センターを参照した。
- 15 藤沢良祐1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』V を参照した。
- 16 横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入陶磁器について-型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4 上田秀夫1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」・小野正敏「14~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究NO. 2』を参照した。

## イ 水田域の焼物(第298図)

水田域では全部で304点の中世焼物が得られた。地区別に出土量をみると、②-2区が201点、⑫区が46点と突出した出土量を誇り、続いて⑥区13点、それ以外は1地区当たり10点以下となる。この地区別の出土量の違いは調査方法に左右された側面があるが、出土量の多い②-2区は山手の緩斜面からの用水が存在し、⑫区は微高地に近接した場所であることを考えると居住域からの混入の可能性も高いと思われる。また、古代のように水田域で土器が使用された状況は確認できていない。

次に層別の焼物出土状況をみる。微高地西側低地では比較的広範囲に調査した中世II面では②-1区で龍泉窯系の青磁碗1点、①-1区でカワラケ1点のみで非常に少ない。それより上層から掘り込まれるSD0003からは白磁IV類碗1点出土しているのみであるが、中世I面は大量の内耳鍋とカワラケ、あとは大窯丸皿と細線蓮弁文青磁碗、口縁部に雷文帯をもつ青磁碗などが出土している。微高地東側低地では中世水田面調査が実施されたところは少ないが、微高地東側低地中世I面とした⑫区4層から内耳鍋片、カワラケ、常滑、白磁IV・V類が出土した。その下の5層では珠洲甕、この5層上面に掘り込み面が確認できるSD3006・3007からは在地産須恵質すり鉢、龍泉窯系画花文碗・常滑・カワラケ、山茶碗系捏鉢などが出土している。以上の層位別の出土焼物の様相から微高地西側低地中世I面の年代は16世紀前半前後、中世II面は内耳鍋が認められないので13・14世紀と思われる。ただし、この調査面で出土した銅銭は14世紀初頭のものがあるのでは14世紀を中心とする可能性が高い。微高地東側低地では⑫区SD3006Aが在地産須恵質すり鉢を5層下限とすると14世紀後半~15世紀初頭、4層の上限はそれ以後と推測される。ただし、4



第298図 水田域出土中世焼物組成グラフ



層の下限は不明である。この様相からすると微高地をはさんだ東西低地でそれぞれ分布する2枚の粘土層の変換がほぼ14世紀代であることが知られる。ただし、堆積環境からみると微高地西側低地山際では中世II面以上での堆積土増加が著しいのに対し、微高地東側低地の聖川沿いを除くとあまり堆積土が顕著でない違いがある。そのため微高地東西低地のいずれの粘土層も純粋な洪水性堆積土ではなく、連続耕作されるなかで生成されたと推定されることを考えあわせると、上記の堆積環境の違いは包含される土器に微妙な年代差を生じている可能性もある。また、時期ごとの出土量の違いについては中世前半が少なく、中世後半のほうが多い傾向が認められるが、これは中世後半期では在地産土器の大量に使用される様相を反映したもので、水田域のみではなく、集落遺跡にも共通する傾向である。以下に水田域出土遺物について説明を加える。

#### A 微高地西側低地出土焼物

##### a 中世面・遺構出土焼物

中世II面(第323図) 出土量は非常に少ない。②-1区で図示した龍泉窯系青磁碗1点、①-1区でカワラケ1点があるのみで、他は平安時代の土師器・須恵器片のみである。

中世I面(第323図) ②-2区では内耳鍋37点、カワラケ28点、雷文青磁碗1点、細線蓮弁文青磁碗3点、大窯丸皿底部1点と、他に古代・古墳時代の土師器や須恵器が出土した。内耳鍋はすべて1/8遺存で、その内5点が口縁部破片である。口縁部形態は外反するもの3点、直立して内面にナデ痕を残すもの1点、耳部1点である。カワラケは口縁部破片9点、体部破片7点、体部～底部5点、底部7点である。この内、体部～底部遺存4点と底部1点が2/8遺存であるが、他はすべて1/8遺存である。胎土はいずれも精製されたもので、明褐色20点、灰白・青白色・暗灰色精製胎土4点、灰褐色1点、褐色の胎土1点である。青磁はいずれも体部破片1/8遺存で、雷文青磁碗は口縁部近くの破片、細線蓮弁文青磁碗は棒状の工具で細かく縦方向に蓮弁が表現されるものである。大窯丸皿は体部1/8遺存で全面に灰釉が施される。口縁部が欠損するため子細な時期は不明である。図示したのはカワラケ1～6、大窯丸皿7、内耳鍋8～10である。これらの遺物は②-2区のごく限られた部分の出土であるが、比較的多くの遺物が得られている。ただし、遺存度は低く、水田面で使用されたとするよりも周囲の山手の緩斜面の居住域からの混入の可能性が高い。出土中世焼物の年代は15～16世紀の所産にほぼ限定されるが、なかでも新しい時期の大窯皿がこの水田面の年代を示すと思われる。

中世II面以上の遺構(第323図) 中世焼物を出土した遺構はS D 0003(旧0008)のみである。図示した白磁IV類底部が出土しているが、このS D 0008は中世II面よりも上層に掘り込み面をもつことと、中世II面で龍泉窯系青磁碗が出土していることを考え合わせれば混入品と考えられる。

##### b 他時代遺構・土層混入焼物、表採その他

②-2区近世面(第324図) 近世陶磁器に混在して中世焼物がかなり出土している。内耳鍋50点、カワラケ63点、土師質すり鉢4点、珠洲壺1点、古瀬戸深皿1点、大窯丸皿2点・ヒダ皿1点・折縁丸ノミ皿1点・稜皿1点・天目茶碗1点、龍泉窯系青磁碗2点、青花1点、輸入天目茶碗1点、白磁碗1点である。下層にあたる中世I面よりも古い年代の遺物が含まれるので、山手の緩斜面の居住域から用水を媒介として運ばれたものか、あるいは混入したのと考えられる。また、中世I面では見られなかった大窯のヒダ皿・折縁丸ノミ皿・稜皿があることから、中世I面の下限は16世紀後半よりも下らないと思われる。

内耳鍋はすべて1/8以下の破片で口縁部8点、体部27点、底部15点ある。口縁部の形態は直立して内面にナデ痕跡を顕著に残すものが5点、直立で内湾ぎみのものが1点、耳部2点である。カワラケは口縁部16点、体部22点、体部～底部7点、底部15点、口縁部～底部3点である。遺存度は体部2/8破片1点、体部～底部2/8破片4点、底部2/8破片3点・3/8破片2点、口縁部～底部2/8破片1点で、それ以外はすべて1/8遺存

である。このカワラケは胎土から明褐色胎土が29点、灰白色精製胎土が24点、灰褐色胎土が9点、厚手の黄緑褐色胎土が1点ある。土師質すり鉢はいずれも体部1/8破片であるが、内面の卸目には密に施すものと一定の間隔を空けて施すものの2者があり、内面の卸目が密なものを図示した。珠洲壺は胴部1/8破片で、ロクロナデ調整されるもので、外面に縦に垂下する櫛目文が施される。古瀬戸深皿底部1/8破片で上面に灰釉単味の釉が施されている。輸入陶磁器では体部小片で子細不明の龍泉窯系青磁碗と龍泉窯系蓮弁文碗口縁部1/8破片1点、IV・V類碗破片と思われる体部1/8破片1点と青花皿と思われる口縁部1/8破片1点、輸入天目茶碗と思われる非常に薄手のつくりの破片1点ある。大窯製品では丸皿・ヒダ皿・折縁丸ノミ皿・稜皿・天目茶碗がある。丸皿体部破片1点のみが2/8破片で、他はすべて1/8以下の破片である。このうち丸皿と折縁丸ノミ皿は灰釉、それ以外は鉄釉が施されている。このなかで大窯皿の一部のみ図示した。

S D1017 (第324図) ⑥区の近世溝跡で珠洲すり鉢1点、内耳鍋胴部小片1点が出土している。すり鉢は胴部～底部破片1/8遺存のもので焼成は不良、やや大きめのもので内面は磨り減っている。外底面には静止糸切り痕がある。

表採その他 (第324図) ①-1区では表採の青白磁合子体部2/8破片1点、内耳鍋胴部破片1点、④区では内耳鍋耳部1点、在地産須恵質すり鉢体部1/8破片2点、珠洲すり鉢体部1/8破片1点、珠洲甕体部1/8破片1点、T字型の常滑甕口縁部1/8破片1点、龍泉窯系蓮弁青磁碗体部1/8破片1点がある。⑥区は微高地域で青白磁の合子と思われる胴部1/8破片1点、常滑甕胴部1/8破片1点、矢羽タタキの珠洲壺胴部1/8破片1点があり、その他には内耳鍋小片4点、珠洲すり鉢口縁部1点、龍泉窯系無文青磁碗口縁部1/8破片1点、同蓮弁文碗体部1/8破片1点、大窯天目茶碗口縁部～体部1/8破片1点がある。大窯天目茶碗はS D1061検出時に出土したもので、層位的には現耕作土下にあたる。

#### B 微高地東側低地出土焼物

##### a 中世面・遺構出土焼物

中世I面 (⑫区4層) (第324図) ⑫区のみ遺物採取し、内耳鍋7点、カワラケ3点、常滑1点、白磁碗1点、龍泉窯系無文碗1点が得られた。すべて1/8以下の破片である。図示したのは内耳鍋のみである。なお、内耳鍋は口縁部が3点あるが、2点は耳部の破片で唯一口縁部形態が判明するのが図示したものである。形態は直立ぎみにやや内湾ぎみのものである。他は胴部破片3点・底部破片1点である。カワラケは底部2点と体部1点がある。図示していないが明褐色精製胎土のもので磨滅している。常滑・白磁碗はいずれも体部破片で子細不明である。

中世II面 (⑫・⑬区4層下遺構と5層) 4層下面に掘りこみをもつS D3006・3007・3015から出土した遺物と5層出土遺物がある。

S D3006 (第324図) この溝は上下S D3006-A・Bに分離される。下層にあたるS D3006-Bからは龍泉窯系画花文青磁碗2点、カワラケ3点、山茶碗系の捏鉢1点が出土した。ほとんどが1/8以下の破片で図示していない。なお、山茶碗系の捏鉢は口縁部が肥厚するもので、カワラケは灰褐色・明褐色で細かい砂を含むが比較的精製された胎土で内湾ぎみに立ち上がるものである。いずれもロクロ調整される。他には古墳時代・古代の土師器や須恵器、弥生土器が出土している。上層のS D3006-Aに該当するとみられる⑫区S D3006からは在地産の須恵質すり鉢1点、⑬区からは常滑甕胴部小片1点、カワラケ1点が出土した。在地産すり鉢は内面に密に卸目が施される。カワラケは内面に煤が付着する。

S D3007 ここも上下2層に分離される。下層にあたるS D3007-Bより常滑の甕胴部小破片が1、緩やかなS字状を描く口縁部の山茶碗小片1点が出土している。いずれも図示していない。その他は古代以前の土器である。

S D3015 カワラケ1点が出土している。明褐色の小片で子細不明である。

S D不明 ⑫・⑬区境周辺の南北に走る溝跡群内から出土したと思われる遺物で、珠洲甕胴部破片1点、カワラケ1点がある。この溝跡群は平安時代から現代に至るまでの溝が連続しており、珠洲は帰属する溝跡は不明であるが、カワラケは5層上面の溝跡より出土している。

5層出土焼物 珠洲の甕胴部破片が1点出土している。小片ながら外面には平行タタキがある。

b 他時代遺構・土層混入焼物、表採その他

⑫区近世面出土遺物 内耳鍋7点、カワラケ5点、龍泉窯系青磁碗・常滑・珠洲甕各1点が出土したが、すべて1/8以下の破片である。内耳鍋は底部破片2点、胴部3点で、カワラケは口縁部1点、胴部2点、底部1点である。その他の陶磁器類は小片で子細な時期は不明である。

⑬区2層 中世の白磁碗と思われるものが1点ある。

⑭区3～5層 内耳鍋の口縁部破片1点がある。

⑮区2層 内耳鍋底部1/8破片1点が出土している。

⑯区3層上面 この調査面で杭列を検出した際に出土した遺物で、内耳鍋口縁部1点、常滑甕胴部1点、カワラケ体部・底部各1点が出土した。いずれも1/8以下の破片である。杭列自体は検出層位から近世の所産と思われ、遺物は直接結びつくものではない。

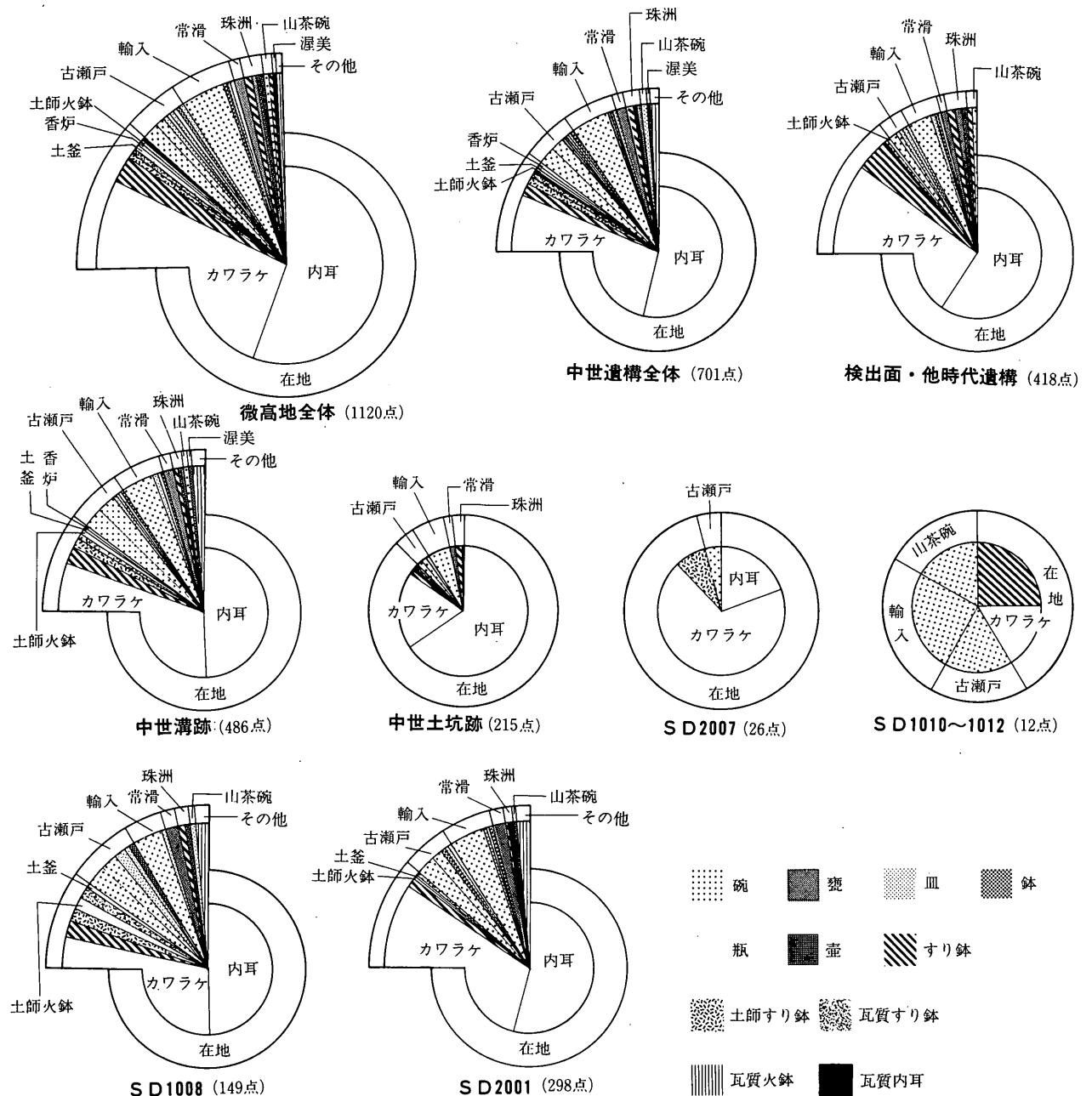
平安砂層混入焼物 平安時代の洪水砂層に混在した中世焼物である。⑨区ではカワラケ小片1点、⑫区内耳鍋3点、カワラケ1点、⑭区カワラケ小片1点がある。いずれも1/8以下の破片である。

表採その他 ⑨区では内耳鍋小片2点、⑫区では大窯内ハゲ皿2/8破片1点、龍泉窯系青磁碗底部2/8破片1点、細線蓮弁文碗口縁部・体部1/8破片各1点、カワラケ1/8口縁部破片1点、内耳鍋1/8破片7点、在産須恵質すり鉢口縁部1/8破片1点がある。いずれも図示していないが、細線蓮弁文碗はへらで削る幅広のもの1点と棒状工具で施文するものが1点ある。⑪区ではカワラケ小片1点、⑮区は内耳鍋小片1点、⑯区ではカワラケ3点、内耳鍋3点が出土している。

ウ 微高地出土の中世焼物 (第299図)

調査で得られた微高地の中世焼物は総数1121点である。内訳は中世遺構出土702点(S K216点, S D486点(S D1008-149点・S D1010-1012-12点・S D2001-298点・S D2007-26点・S D1052-1点))、他時代遺構混入196点(古墳遺構混入121点(S K32点・S D46点(内1点はS D1008と同個体))・S Q43点)・近世遺構混入76点(S D47点・S X29点))、検出面・出土地点不明223点である。このなかで中世溝跡出土が最も多数を占めて微高地域出土総数の約41%に該当し、特にS D1008・2001は突出した量を誇る。以下に遺構ごとに出土焼物を述べることにする。

なお、出土数量に関して「点」と表現しているのは各遺構ごとに接合作業を行なった後に同一個体と思われるものをまとめたものである。遺構間接合や遺跡全体での同一固体の検討が不十分なので、遺跡全体での推定個体数ではない点は注意されたい。参考に接合後の破片数も「片」として併記するようにしたが、特別断わらずに「点」としか表現していない場合は点数=破片数である。この計測方法は小片が多い陶磁器を計測にできるだけ加えて、遺構ごとに破片数を数えるよりも実数に近い数値が得られるように考えたものであるが、他遺跡と直接比較しにくく、しかも主観に頼る上に多量出土の在産土器ほど同一個体の認定が難しくなることや、遺構間接合が不十分なので遺跡全体での数量的な比較資料としては問題も残される。一定の傾向を知る上では大きな影響はないと思われるが、妥当性に問題もあるため、参考に接合後の破片数もできるだけ併記するようにした。また、土器の残り具合を遺存度と表現したが、これは、同心円を8分割したチャートに各破片をあてて、8分割の円のなかでどのくらい遺存するのかを切り上げ法で示したものである。この計測は出土遺物数量の算出を目的としたものではないので、あまり大きな分割数



第299図 微高地域出土中世焼物組成グラフ

は採用しなかった。また、接合しない同一個体と思われる破片の遺存度を計測する場合、口縁・底部は残存部、胴部破片は最大に残存する部分で計測している。

A 中世土坑出土遺物

中世の土坑には井戸・柱穴・墓・鉄滓廃棄土坑・性格不明土坑などがあるが、中世焼物を出土したのは61基と約半数であり、しかも小破片出土が多く、土坑への直接的な廃棄が想定されるのは内耳鍋やカワラケなど極少数に過ぎない。従って、S K出土品は間接的な混入が多いと考えられる。

S K 1001 (第325図、P L 36) 内耳鍋10点 (15片)、カワラケ2点が出土した。図示した1~2は5/8遺存で、それ以外はすべて1/8以下の遺存である。1の内耳鍋は口縁部が短く立ち、胴部内面の調整が雑でハケ痕が残る。2の内耳は直立した口縁部内面にナゲ痕を顕著に残す。カワラケは灰褐色精製粘土で小破片なので図示していない。内耳鍋は遺存度が高く、本土坑へ廃棄されたことが推測される。

S K1002 青磁碗小片1点が出土したが、整理段階で紛失した。

S K1004 (第325図、P L29・30・35・36) 天目茶碗体部破片1点、青花碗底部破片1点、青磁碗体部破片1点、内耳鍋9点(17片)がある。図示したのは内耳鍋と青花碗である。1～3はやや外傾ぎみの口縁部内面に顕著なユビナデ痕を残す内耳鍋で、2はやや小型である。5は内耳鍋底部である。6は青花で焼成不良の粗雑な碗である。内耳鍋の1・2が5/8、3～5とそれ以外が1/8以下の遺存である。遺存度の高い内耳鍋は直接土坑へ廃棄されたものとも思われるが、合わせて出土した青花が16世紀後半の所産であり、従来指摘される内耳鍋の年代観とずれをもつ。

S K1011 図示できなかったが古瀬戸灰釉平碗体部1/8以下の破片が1点ある。

S K1012 (第325図、P L29) 内耳鍋の胴部1/8以下遺存が4点、カワラケが2点(4片)、在地須恵質すり鉢口縁部1/8以下の遺存が1点、龍泉窯系画花文碗体部2/8遺存が1点出土した。図示したカワラケは灰褐色精製胎土のもので1/8遺存破片である。

S K1013 (第325図、P L29) 図示した1の龍泉窯系蓮弁文青磁碗胴部2/8破片と2の内耳鍋胴部1/8破片各1点がある。内耳鍋は口縁部が外反すると思われる。いずれも遺存度が低く、混入と思われる。

S K1014 カワラケ底部2/8遺存と古瀬戸平碗口縁部1/8遺存が各1点出土したが、図示していない。

S K1015 (第325図) カワラケ底部2/8破片1点、内耳鍋1/8以下の破片7点(11片)が出土した。図示したのはカワラケと内耳鍋口縁部で、これ以外の内耳鍋は胴部破片である。比較的多くの内耳鍋が出土しているが、口縁部形態は2の外反、3・4の直立ぎみの口縁内面にナデ痕を残すものなどバリエーションがあり、遺存度の低さからも本土坑へ廃棄されたものではないと思われる。

S K1016 (第325図、P L32) 珠洲すり鉢胴部1/8破片1点とカワラケ口縁部・底部各1/8破片2点、整理段階で紛失した内耳鍋小片1点がある。図示したのは1のカワラケと2の珠洲すり鉢である。2は密に卸目が施される。

S K1017 (第325図) 図示した珠洲すり鉢口縁部1/8以下の破片1点が出土した。

S K1038 (第325図) 内耳鍋4点(9片)が出土した。すべて1/8以下の遺存で、口縁部は図示したものを含めて2片あり両者とも外反口縁部である。

S K1039 (第325図) 図示した1/8以下の内耳鍋底部破片1点のみである。

S K1044 (第325図、P L33) 瓦質すり鉢と思われる口縁部1/8以下の破片1点のみである。口縁部の端面が水平に取られるもので器形の傾斜からすり鉢と判断した。

S K1049 (第325図) 内耳鍋5点が出土した。すべて1/8以下の遺存で口縁部は図示した2点がある。口縁部形態は直立内湾ぎみに立ち上がるものでナデ痕が若干見られる。

S K1084 (第325図、P L29・32・33) 珠洲・在地須恵質すり鉢、龍泉窯系蓮弁文青磁碗各1点がある。

1の珠洲すり鉢と思われる破片と2の在地産須恵質すり鉢を図示した。すべて1/8以下の破片である。

S K1088 (第325図) 図示した瓦質内耳鍋底部2/8遺存1点が出土した。内外面黒灰色を呈する。

S K2009 (第325図) 図示したカワラケ口縁部1/8以下破片1点がある。灰褐色精製胎土である。

S K2012 (第325図) 内耳鍋胴部1/8以下破片4点とカワラケ3点出土した。カワラケは図示した底部3/8破片の他は底部・体部1/8以下の破片各1点がある。いずれも明褐色の精製された胎土のものである。

S K2024 内耳鍋胴部1/8以下の破片が2点ある。図示していない。

S K2029 図示しないが、内耳鍋胴部・カワラケ体部破片1/8以下の破片が各1点ある。カワラケは灰褐色の精製された胎土のものである。

S K2036 図示しないが、カワラケ底部1/8以下の破片1点がある。厚手の作りである。

S K2037 カワラケ口縁部・底部1/8以下の破片各1点と内耳鍋口縁部1/8以下の破片1点がある。カワラ

ケは明褐色と厚手のもので、内耳鍋は外反口縁部破片である。

S K 2038 (第325図) 内耳鍋1/8以下破片2点がある。図示した口縁部破片の他は胴部破片である。

S K 2040 内耳鍋1/8鍋以下の破片2点がある。1点は耳部で1点は胴部破片である。

S K 2041 (第325図) 内耳1/8以下の破片8点(9片)あり、口縁部破片2点、胴部破片5点、底部破片1点である。口縁部破片を図示した。内耳鍋の出土破片数は多いが、それぞれ別個体と思われる。

S K 2100 (第326図) 明褐色で精製された胎土のカワラケ2点と龍泉窯系蓮弁文青磁碗体部1/8破片1点がある。1は口縁~底部4/8の破片のカワラケと、2は内耳鍋で、図示しなかったカワラケもう1点は底部2/8の破片である。

S K 2180 (第326図) カワラケ口縁部1/8破片2点、体部1/8破片1点の計3点、内耳鍋口縁部1/8破片1点がある。図示したのは灰褐色精製胎土のカワラケで、他は同様の胎土と厚手のカワラケである。

S K 2193 (第326図) 内耳鍋の口縁部破片3点、底部破片1点、胴部破片3点の合計7点(9片)あるが、すべて1/8破片である。この内、口縁部破片を図示した。破片数は多いが、別個体と思われるため混入の可能性はある。

S K 2200 内耳鍋胴部1/8破片4点、カワラケ口縁・底部1/8破片各1点の計2点がある。カワラケは厚手の作りのものと灰褐色精胎の2種あり、前者は口縁部に煤が付着する。

S K 2249 (第326図、P L 29・31) 内耳鍋1/8遺存10点、常滑甕胴部1/8破片1点、玉縁の青磁碗口縁部1/8破片1点がある。内耳鍋は外反する口縁部が1点、残りは胴部破片である。出土破片数は多いがそれぞれ別個体で、混入の可能性はある。青磁碗を図示した。

S K 2254 (第326図、P L 31) 図示したやや厚手のカワラケ底部1/8破片1点と古瀬戸花瓶口縁部2/8破片がある。古瀬戸花瓶は同一固体と思われるものがS K 2283から出土している。

S K 2283 (第326図、P L 30) 厚手のカワラケ体部1/8破片1点、古瀬戸平碗口縁部1/8破片1点、天目茶碗の体部1/8破片1点、S K 2254と同一固体と思われる古瀬戸花瓶口縁1/8破片1点がある。図示したのは1のカワラケと2の古瀬戸平碗である。

S K 2289 (第326図、P L 29) 図示した1の龍泉窯系蓮弁文青磁碗、2の玉縁口縁青磁碗各口縁部1/8破片がある。

S K 2305 (第326図、P L 30・35) 内耳鍋4点、古瀬戸天目茶碗口縁部1/8破片1点が出土した。1の天目茶碗と2の内耳鍋を図示した。2の内耳鍋は口縁部7/8遺存で、31片の破片が接合したものである。遺存度の高さから本土坑へ廃棄されたものと思われる。他には外反する口縁1/8以下の破片がある。

S K 2316 図示していないが内耳鍋胴部1/8破片が1点出土した。

S K 2319 (第326図、P L 29) 図示した白磁碗V類底部6/8破片1点が出土したのみである。

S K 2321 (第326図、P L 31) 同一個体と思われる常滑甕の口縁部・体部1/8破片2片がある。この内、口縁部破片のみ図示した。

S K 2329 図示していないが内耳鍋1/8以下の破片4点出土した。この内、3点が外反口縁部であるが、それぞれ別個体と思われる。他は胴部破片である。

S K 2359 図示していないが内耳鍋胴部1/8破片1点、カワラケ2点で灰褐色胎土の口縁部と明褐色胎土の体部1/8破片が各1点出土した。

S K 2391 (第326図、P L 36・28) 内耳鍋4/8破片1点、カワラケ7点すべて図示した。内耳鍋は直立した口縁部内面にナデ痕を顕著に残すものである。カワラケは大4点、小3点で、すべて灰褐色精製胎土で極めて焼成や胎土が類似する。遺存度は小カワラケが1点4/8破片である以外は、ほぼ7/8以上である。本土坑からは遺存度が高く類似した形態のカワラケが出土しており、一括性が高い資料と思われる。

- S K2400 (P L29) 白磁Ⅳ・Ⅴ類と思われる体部1/8破片1点が出土した。図示はしていない。
- S K2423 (第326図、P L32) 灰白色精製胎土の小型カワラケ口縁部1/8破片1点、珠洲壺胴部下半1/8破片1点がある。図示したのは珠洲壺で上部に平行タタキ、下半にロクロナデ痕が残る。
- S K2427 内耳鍋1/8破片4点、茶褐色の精製胎土のカワラケ口縁部1/8破片1点、白磁Ⅳ・Ⅴ類と思われる体部1/8破片1点が出土した。いずれも図示していない。内耳鍋は口縁部が1片あるが、小片で形態等は不明である。他は胴部破片である。
- S K2433 (第326図) 内耳鍋1/8破片3点があり、口縁部2点を図示した。1が直立ぎみに立ち上がり、内面にナデ痕跡を顕著に残すもので、2は外反する口縁である。他は胴部破片である。
- S K2438 内耳鍋1/8破片2点(3片)がある。図示したものは外反口縁部のものである。これは同一個体と思われる破片が2片ある。
- S K2443 (第326図) 図示した明褐色精製胎土の小型カワラケ底部8/8破片が1点ある。
- S K2450 (第326図) 内耳鍋1/8破片が2点(3片)があり、2片が同一個体と思われる外反する口縁のものを図示した。他は底部破片である。
- S K2624 (第327図、P L35) 内耳鍋13点(21片)が出土した。図示した1は4/8遺存する直立する口縁部で、2～3は直立する口縁部内面にナデ痕を顕著に残すもので1/8遺存である。4も同様であるが、器体が斜めになりやや異形となる。内面のナデ痕からもこの傾斜はほぼ間違いないと思われる。他は胴部の1/8破片である。本土坑からは多くの内耳鍋が出土し、その一部は土坑への廃棄の可能性もあるが、それぞれ別個体と思われる破片も多い。
- S K2628 (第327図、P L33) 内耳鍋1/8破片3点、在地産土師質すり鉢口縁部1/8以下の破片1点が出土した。図示したのは内耳鍋の口縁部近くの破片で、他の内耳鍋は胴部・底部破片である。
- S K2629 カワラケ1/8底部破片1点ある。小片で詳細不明である。
- S K2631 内耳鍋1/8破片1点(2片)、小型のカワラケ底部2/8破片1点が出土した。カワラケは明褐色精製胎土である。
- S K2634 (第327図) 内耳鍋1/8破片1点、白磁Ⅳ・Ⅴ類体部1/8破片1点が出土した。内耳鍋は図示したもので直立した口縁内面にナデ痕を顕著に残す。
- S K2635 (第327図) 内耳鍋2点あり、図示した外反口縁1/8破片と小片がある。
- S K2639 (第327図) 内耳鍋1/8破片12点(13片)が出土した。図示したのは口縁部4点と同一個体2片の胴部～低部破片である。1は口縁部が内湾ぎみになり、2は外反する。3・4は直立した口縁部だが、内面にあまりナデ痕が顕著でない。出土破片数は多いが別個体と思われるものが多く、口縁部の形態にもバリエーションがある。5は底部破片である。
- S K2640 (第327図) 図示した青灰白色精胎のカワラケ底部3/8遺存1点がある。
- S K2642 (第327図、P L32) 図示した珠洲すり鉢体部1/8破片1点がある。
- S K2649 内耳鍋1/8破片2点が出土し、1の口縁部破片を図示した。直立ぎみに立ち上がり、内面に顕著なナデ痕を残す。
- S K2650 (第327図、P L28) 図示した小型のカワラケ1点がある。厚手のつくりで口縁部5/8遺存、底部完存である。
- S K2866 (第327図) 図示したカワラケ3/8破片1点がある。厚手のつくりの小型のカワラケである。
- S K2877 (第327図、P L28) 図示した小型のカワラケ1点がある。厚手のつくりで完存する。

## B 中世溝跡出土焼物

中世の溝は8本があり、内7本から計475点が出土した。内訳はS D1008-149点・S D1010-1012-13

点・SD2001-298点・SD2007-26点、SD1052-1点であり、館の内堀SD2001・1008出土が大半を占める。ただし、SD1008・2001から出土した土器の大部分が内耳鍋とカワラケである。以下に図の掲載順にSD1010~1012を先に述べ、後はSD1008以下は遺構番号順に述べる。

SD1010 (第327図、PL29・31) 山茶碗2点で体部1/8破片1点、同底部2/8破片1点、龍泉窯系画花文青磁碗底部6/8破片1点、在地産軟質須恵質すり鉢1/8破片1点が出土している。このうち、すり鉢はSD1012出土品と接合している。図示したのは1の山茶碗と2の青磁碗である。1の山茶碗は三角の低い高台がつき、その先端にはモミ圧痕が見られる。外底は回転糸切り痕が残り、内底面にはヨコナデ痕が見られない。もう1点の山茶碗は図示しなかったが、緩やかに外反する口縁へ続く体部破片である。両者とも精製胎土である。

SD1011 (第327図、PL29) カワラケ底部3/8破片1点、白磁IV類碗底部2/8破片1点があり、いずれも図示した。カワラケは体部がやや内湾するもので、比較的薄く均一にできている。

SD1011~1012 遺物取り上げの際に混乱した遺物である。厚手カワラケ底部1/8破片1点・古瀬戸平碗口縁部1/8破片2点が出土した。カワラケの形態や平碗の出土からは14世紀後半の様相とも思われる。

SD1012 (第327図、PL29・33) 在地須恵質すり鉢口縁部・体部1/8破片各1点・底部2/8破片1点の合計3点、白磁碗IV類底部5/8破片1点が得られている。図示したのは1の白磁碗と2の在地産須恵質すり鉢である。すり鉢は焼成が不良である。

SD1008 (第328・329・330図、PL28~36) 中世の館外堀であるが、明治年間までは水田、⑩区市道下では近世に用水として利用され、いくつか古墳時代SKやSDを切っている。近世陶磁器や古墳時代土師器の混入も認められる。出土した中世焼物は149点あるが、内耳鍋74点(108片)・カワラケ42点でほとんどがこの2種の焼物で占められる。各調査地区では遺物採取方法や面積が異なるため、遺物の出土数は単純に比較できないが、⑦区と⑩区市道下で多くの遺物が採取され、⑤-1・⑧-1・⑩区はそれに比べて少ない。また、⑦区では上から3つに区分して概略の層ごとに遺物を採取したが、上層に多く、中層・底面の浅い溝内は少量である傾向が知られた。なお、中層以下では内耳鍋は認められない一方で、カワラケ・在地産須恵質のすり鉢、瓦質すり鉢、同安窯系青磁碗がみられ、上層とは時期差をもつ可能性もある。なお、掲載した図で⑦区の層別の取り上げを示すと、中層(4・11・27)・下層(5・30)でそれ以外は上層である。以下に溝出土の焼物を種別に述べる。

カワラケは42点あり、1~21の21点を図示した。法量は1~10の小型と11~21の大型の2種を基本とするが、グラフ上ではその差があまり明瞭でない。これは時期を追って法量に変化するなかで、複数時期にわたるカワラケを含むためと思われる。概略で識別できるものでは大型18点、小型13点でやや大型が多い。胎土の種類は褐色~黄緑褐色を呈する厚手のもの(2・5・6・10・11・13~18・20)が21点、明褐色精製胎土のもの(1・3・7)が6点、明褐色でやや砂が目立つもの(4・12・21)が4点、灰白色や青灰白色精製胎土のもの(8・9)が5点、灰褐色の胎土のもの(19)が1点で、他は詳細不明である。破片の残りぐあいでは底部のほうが残りがよい。口縁部では1/8遺存は14点、2/8遺存2点、3/8遺存2点、4/8遺存以上は4点ある。底部でみると1/8遺存は10点、2/8遺存5点、3/8遺存6点、4/8遺存以上は15点となり、明かに底部のほうが遺存度が高い。

古瀬戸は8点ある。この内、整理中に紛失した小皿1点と、平碗・天目茶碗の体部1/8破片各1点以外はすべて図示した。22は鉄釉が掛けられる縁釉小皿で、口縁部1/8の破片である。23は平碗で口縁部1/8破片である。24・25は天目茶碗で24は底部は完存し、口縁部2/8遺存する。25は完存する内反高台破片で、錆釉がかけられる。26は瓶子の下半部で底部はほぼ7/8遺存、体部は4/8遺存である。⑦区を中心に出土し、同一個体と思われるものが⑤-1区内とSD1016から出ている。山茶碗は体部1/8・底部2/8破片各1点づつ、



常滑甕は体部1/8破片が全部で2点、また、珠洲すり鉢は体部1/8破片1点、珠洲壺の小片1点は図示していない。

輸入磁器は同安窯系青磁碗体部1/8破片1点、龍泉窯系画花文青磁碗体部1/8破片1点、龍泉窯系蓮弁青磁碗口縁部1/8破片1点・体部1/8破片1点、へらの沈線で幅広い連弁を形づくる青磁碗体部1/8破片1点、白磁皿体部1/8破片1点がある。この内、27の同安窯系青磁碗、28の龍泉窯系蓮弁青磁碗、29のへら沈線の蓮弁文碗を図示した。

在地産須恵質すり鉢は3点出土したが、32の1点のみ図示した。それ以外は体部破片である。瓦質すり鉢は図示した2点あり、30は口縁部2/8遺存、31は1/8遺存である。この他、土師質すり鉢口縁部1/8遺存2点があるが図示していない。

内耳鍋は74点(108片)あり、33~50の18点を図示した。口縁部破片は30点あり、図示した34の2/8破片、40の3/8破片、44の4/8破片以外はすべて1/8以下である。形態は直立して内面にナデ痕を残す36・39・47以外はすべて外反する。残りは胴部・底部の1/8以下の破片である。瓦質内耳鍋の可能性のある口縁部・体部1/8以下の破片2点があるが図示していない。

51は土師質釜で1点のみの出土である。口縁部~体部2/8が遺存する。52・53は土師質火鉢でこれも図示したのみである。52は方形の足が付くもので底部1/8遺存、53は火鉢とは断定できないがその可能性のあるもので体部1/8遺存である。瓦質火鉢は図示した2点出土している。54は⑤-1区出土の1/8遺存の浅鉢型火鉢で、55は⑩-2区出土の口縁部2/8遺存の風炉である。54はS D 2001出土のものに類似する。なお、混入と思われる大窯皿1点は他時代遺構混入のところに掲載している。

S D 2001(第330・331・332図、P L 28~34・36) 中世焼物298点(336片)が出土し、1遺構としては最多の出土数を誇る。さらに本溝上部は手掘りを実施したものの、深さ2.5mに及ぶ南・西辺の下部については重機で掘削したため、実際の数はこれを上回るものと思われる。この出土数の多さは本溝の規模の大きさばかりでなく、館中心屋敷をめぐる堀である本溝跡の性格にもよるとと思われる。なお、ここでは⑤-2区調査部分で分けられたS D 2003・2004・2017からの遺物も併せて扱う。同一の溝を誤認したものか、別の溝なのか判断できなかったため、この部分のみは各溝ごとに記述する。

S D 2003はS D 2001東辺北部の上層にあたり、内耳鍋15点(17片)、カワラケ9点、古瀬戸1点、瓦質火鉢1点、龍泉窯系青磁鉢1点が出土した。カワラケは全体的に遺存度は低く、図の1が口縁部2/8破片、図示しなかった底部の6/8破片以外はすべて1/8しか残存していない。種類は図示した1のような厚手2点、明褐色精製1片、他は図の2のような灰白色~青灰色の精製胎土である。煤が付着するのは図の1と小片がもう1点ある。3は古瀬戸天目茶碗で1/8破片、4は青磁鉢口縁部で1/8以下の破片である。図示していないが、瓦質火鉢も同様である。内耳鍋はすべて1/8の破片で、5・6を図示した。口縁部は6とそれ以外に1点あるが、いずれも外反する口縁である。

S D 2004はS D 2003の東隣に隣接し、S D 2001上層にあたる。内耳鍋3点、カワラケ2点、古瀬戸鉢口縁部1点、口はげ白磁皿1点、珠洲甕と思われる破片1点が出土した。内耳鍋はいずれも1/8以下の破片で図示していない。口縁部破片は1点あり、外反する形態である。カワラケはいずれも明褐色を呈するもので、7は口縁部4/8、8は2/8破片である。10の古瀬戸鉢は折縁になるもので厚い灰釉が施される。1/8破片である。9は口はげ白磁皿で底部1/8破片である。珠洲甕は胴部小片である。

S D 2017はS D 2001の東辺北部にあり、S D 2003・2004とした部分の下層にあたる。内耳鍋1点、カワラケ3点、土師質すり鉢1点、珠洲壺1点が出土している。内耳鍋は胴部1/8破片で図示していない。カワラケはすべて図示した。11~13は厚手のもので、11には煤が付着する。11が底部5/8で口縁部1/8の破片、12が1/8破片、13が5/8破片である。14の土師質すり鉢は胴部2/8破片1点で褐色を呈する。珠洲の壺は平行

タタキが縦列に並列する破片で図示していない。

上記S D 2003・2004・2017以外は一括して記述する。カワラケは76点出土し、29点を図示した。遺存度は全体的に低いものが多く、口縁部の遺存からみれば1/8-18点、2/8-4点、3/8-1点、4/8-2点、それ以上は8/8 2点で、残りが口縁部欠損である。底部破片でみると1/8-19点、2/8-17点、3/8-4点、4/8-1点、それ以上は8/8-4点、残りが底部欠損である。法量は図示した43の特大、31~42の大型、15~30の小型の3種認められ、大きさが類推できる破片数は特大1、大型26、小型18点で大型のものがやや多く、特大は極端に少ない。胎土の種類は明褐色体胎土のもの23点(図の31・35・40・41)、それに類似する灰褐色精製胎土24点(図の15~17・19・24・26・29・33・34・39)、灰白色の精製胎土のもの9点(図の20・22・23・28・36・38・42)、黄緑・黄橙色の粗い砂を少量含む胎土で厚手のつくりのもの12点(図の18・21・25・27・32・37・43)、灰褐色の胎土に類似するが暗灰褐色~暗褐色を呈するもの4点(図の30)がある。なお煤が付着するのは図示した30の1点がある。

古瀬戸は天目茶碗5点・平碗4点・鉢1点・小皿1点・四耳壺1点が出土した。平碗は口縁部小片を除く3点(44~46)を図示したが、45は底部完存、残りは1/8の破片である。底部破片と高台の一部まで遺存する45・46はいずれも削り出し高台である。天目茶碗は体部破片を除く4点(47~50)を図示した。このなかで47・48が2/8の破片で、それ以外は1/8以下の破片である。遺跡内で得られた天目茶碗はこのS D 2001から出土したものがもっとも多く、中心屋敷周辺を中心に使用された可能性がある。51は縁釉皿で高台を削り出し、口縁部に厚い灰釉を施す完存品である。52も本遺跡唯一の四耳壺の高台と思われるもので灰釉が施される。

輸入陶磁器は13点あり、図示した54以外はいずれも1/8の破片である。白磁はIV類1点、54のV類1点、体部破片で子細不明のものが3点の計5点ある。青磁は55の同安窯系青磁碗と思われる底部8/8破片遺存のもの1点、龍泉窯系蓮弁文碗体部1/8破片3点、同画花文碗1/8破片1点、56の龍泉窯系青磁碗底部8/8遺存1点の合計6点がある。この他、図の53の輸入天目茶碗と思われる非常に薄手のものが1点、青白磁の梅瓶の体部破片1点がある。

57は在地産土師質の香炉で口縁部3/8遺存が1点のみある。常滑甕は4点あるが、いずれも胴部1/8破片で図示していない。珠洲は61に図示したすり鉢が1点ある。焼成は良好ながら小片であり、在地須恵質すり鉢の可能性もある。在地産のすり鉢は須恵質のもの2点あり、いずれも図示した。58は口縁部1/8破片、60も体部下半1/8破片である。土師質のすり鉢は口縁部1/8遺存1点があるが図示していない。瓦質すり鉢は図示した59の1点のみで、口縁部1/8破片である。他に図示していないが土師質の火鉢と思われる小破片が1点ある。

内耳鍋は140点(176片)出土し、23点を図示した。口縁部破片は38点あり、遺存度では7/8が1点、2/8が4点、残り33点が1/8以下の破片である。また、胴部・底部破片では2/8遺存が2片あるのみで、それ以外は1/8遺存である。この数値からは溝へ直接廃棄された可能性があるのは7/8遺存の1点で、他は混入の可能性が高いとみられる。口縁部形態では直立してナデ痕を顕著に残すもの7点(66・69・84?)で、外反するものが25点(62~65・67・68・70~74・78~83)、内湾ぎみのもの?3点(75~77)、耳部のみが2点である。明らかに外反形態のものが主体であることが知られる。

瓦質火鉢は4点(9片)出土した。図示したのは浅鉢型の86・87、風炉の88・89である。これらはすべて⑩区のS D 2001東辺南で出土したものである。86・87はいずれも1/8破片で、88は胴部1/8破片、89は胴下部から底部の2/8破片である。なお、86はS D 1008出土のものに類似する。

渥美の壺破片と思われるものが図示した1点(90)ある。外面に蓮弁と思われる沈線を配した体部1/8の破片である。

以上のように多種・多量の焼物が出土したが、カワラケや内耳鍋にはバリエーションがあり、長期にわたる遺物が含まれる可能性がある。しかし、調査では一括して取り上げているので層位的な問題は明らかにできなかった。

S D 2007 (第332図、P L 28・30・33) 館東部のS D 2001東側に位置するL字状の堀である。調査区の境となった屈曲部分以外はすべて手掘で遺物採取につとめた。カワラケ18点、古瀬戸平碗1点、内耳5点、在土師質すり鉢2点が得られた。また、古瀬戸平碗とカワラケの一部以外はすべて遺存状況が悪く1/8以下の破片である。カワラケは体部破片1/8破片3点あり、残りは口縁部もしくは口縁部～底部、底部の破片である。口縁部の遺存度でみると1/8遺存3点、2/8遺存2点、5/8遺存2点、7/8遺存1点、8/8遺存1点ある。底部破片でみると1/8遺存1点、3/8遺存2点、5/8遺存2点、8/8遺存4点で、他の中世溝出土品に比べて遺存度の高いものが多い。法量は大小2種がある。カワラケの種類は11の明褐色胎土以外はすべて厚手のカワラケで占められている。なお、2・7・12は煤が付着する。古瀬戸平碗は大型のもので図示した13の1点がある。体部2/8の破片で厚めの灰釉が施される。土師質すり鉢は14・15の図示したものがある。いずれも口縁部1/8の破片である。内耳鍋は⑩-1区の屈曲部より南でしか出土していない。すべて1/8以下の破片で、口縁部は図示した16の外反する口縁部と、直立して内面にナデ痕を顕著に残すものがある。

本遺構では形態の類似するカワラケがまとまって出土しており、S D 1008やS D 2001のように形態の多様性は認められない。また、内耳鍋が少ない点も特徴的である。このなかで数量的に少なく異質な存在となる明褐色のカワラケと内耳鍋は⑩-1区でしか認められていない。内耳鍋の口縁部形態には2種ある。この点で一括性は認め難いとも思われるが、遺存度の低さからも内耳鍋は混入とみるべきであろうか。なお、出土遺物もS D 1008・2001より古い様相を示すので、本溝はこれらの溝より廃絶時期が早いと思われる。S D 1052 (第327図、P L 33) ⑦-1区の現用水西側のやや離れた地点に位置する。珠洲の甕と思われる底部2/8破片が1つある。古代の須恵器甕の可能性もあるが、古代の須恵器と胎土が異なった灰青白色であり、外面には左上がりの平行タタキが認められることから珠洲と推定した。

### C 他時代遺構混入焼物

明らかに中世以外と思われる遺構から混入して出土した中世焼物を一括して扱う。この項では古墳時代の遺構と近世の遺構から出土したものがある。古墳時代の遺構から出土した焼物は自然的な営力、あるいは柱穴等の小規模な遺構の切りあい見逃しによるものと思われる。

S K 1037 (古墳時代) (第332図) 図示した内耳口縁部1/8破片1点がある。

S K 2039 (古墳時代) (第332図) 内耳鍋口縁部1/8破片1点、灰褐色精製胎土のカワラケ体部1/8破片1点が出土した。これらの遺物は本土坑を切るS K 2041の所産である可能性もある。

S K 2057 (古墳時代) 厚手カワラケ底部1/8破片1点がある。

S K 2058 (古墳時代) 図示した口縁部1/8破片の土師質鉢がある。ロクロナデされ、胎土や色調は古代の甕に類似しており、古代の所産かもしれない。

S K 2063 (古墳時代) (第332図、P L 28) 内耳鍋胴部1/8破片1点と図示した厚手のカワラケ口縁部～底部3/8破片1点、他に灰褐色カワラケ底部1/8破片1点がある。前者の内面には煤が付着する。

S K 2112 (古墳時代) 図示しなかったが、内耳鍋胴部1/8破片1点が出土している。

S K 2172 (古墳時代) (第332図) 図示した厚手小型カワラケ2/8破片1点がある。

S K 2182 (古墳時代) (第332図) 古墳時代の土坑と思われるが、中世その他の土器混入も多い。図示した内耳鍋底部1/8破片1点がある。

S K 2183 (古墳時代) (第332図) 図示した内耳鍋口縁部1/8破片1点片がある。

S K 2184 (古墳時代) 図示していないが、内耳胴部1/8破片1点が出土した。

- S K2187 (古墳時代) 図示していないが、内耳胴部1/8破片2点、明褐色精製胎土のカワラケ底部1/8破片1点が出土した。
- S K2197 (古墳時代) (第332図) カワラケ底部1/8破片1点がある。
- S K2201 (古墳時代) 内耳鍋胴部1/8破片1点が出土した。図示していない。
- S K2208 (古墳時代) 内耳鍋胴部1/8破片2点、白磁碗体部1/8破片1点がある。図示していない。
- S K2325 (古墳時代) 図示していないが内耳鍋胴部1/8破片が1点出土した。
- S K2401 (古墳時代) 内耳鍋胴部1/8破片が1点、瓦質内耳胴部1/8破片が1点、灰褐色精製胎土の大型カワラケ底部1/8破片が1点出土した。いずれも図示していない。
- S K2828 (古墳時代) (第333図) 図示した内耳鍋胴部1/8破片1点の他に耳部破片1点が出土した。
- S K2874 (古墳時代) (第333図) 図示した内耳鍋を初めとして胴部1/8破片が5点出土した。
- S D1001 (近世) 本溝跡は中世のS D1008・1011を切るため、出土焼物はこれらの溝跡からの混入と思われる。内耳鍋口縁部2点・胴部6点、カワラケ口縁部2点、在地産須恵質すり鉢1点がある。いずれも1/8以下の破片である。内耳鍋の口縁部破片は直立し、内面にナデ痕を顕著に残すものと耳片である。いずれも図示していない。
- S D1002 (近世) (P L33) 内耳鍋胴部1/8以下の破片1点、在地産須恵質すり鉢胴部1/8破片3点があるが、いずれも図示していない。
- S D1003 (近世) (第333図、P L31) 古瀬戸小皿底部2/8破片1点と内耳鍋小片が出土している。小皿を図示した。
- S D1022 (近世) (第333図、P L33) 微高地西側に位置する近世末期の溝跡である。内耳鍋胴部1/8破片1点、在地産須恵質すり鉢胴部1/8破片1点が採取された。在地産須恵質すり鉢を図示した。
- S D1025 (近世) (第333図) 微高地西側の現用水脇にある流路状の溝である。図示したカワラケ口縁部～底部3/8破片1点がある。
- S D1032 (近世) (第333図) 図示した灰褐色精製胎土カワラケ底部2/8破片1点ある。
- S D1061 (近世) 図示しないが、内耳鍋胴部1/8遺存1片がある。
- S D2013 (近世) 内耳鍋胴部1/8破片8点と龍泉窯系蓮弁青磁碗体部1/8破片1点がある。
- S D2018 (近世) (第333図、P L30) 図示した古瀬戸天目茶碗底部6/8破片1点がある。
- S D2029 (近世) (第333図) S D1008・SD2001を切る近世の溝跡で、内耳鍋胴部1/8破片5点と図示した厚手のカワラケ底部1/8破片1点がある。
- S D2034 (近世) カワラケ小片1点がある。
- S D2035 (近世) 明褐色精製胎土のカワラケ底部1/8破片1点がある。図示していない。
- S D2036 (近世) (第333図、P L29・33) 内耳鍋胴部1/8破片2点、在地産須恵質すり鉢口縁部1/8破片1点、口縁部に雷文を施す青磁碗と思われる体部1/8破片1点がある。すり鉢のみ図示した。
- S D2037 (近世) (第333図、P L36) 内耳胴部1/8破片1点と図示した大窯鉄釉丸皿底部2/8破片1点がある。
- S D2038 (近世) 内耳鍋胴部1/8破片1点がある。図示していない。
- S D1007 (古墳時代) 内耳鍋口縁部1/8破片1点がある。図示していないが外反口縁である。
- S D1016 (古墳時代) (第333・334図) 古墳時代の大溝であるが、中世遺物は切りあうS D1008・2001や土坑の掘り間違いや、中世に凹地として残存していた際の混入によると思われる。龍泉窯系無文青磁碗1点、古瀬戸平碗1点・瓶子1点(S D1008出土の瓶子と同一個体)・卸皿1点、珠洲すり鉢1点・壺1点、在地産須恵質すり鉢4点・瓦質火鉢1点、瓦質内耳1点、内耳鍋18点、カワラケ15点がある。

カワラケは小片が多く、口縁部2/8破片1点で残りは1/8以下である。ただし、底部は完存1点、4/8遺存1点、3/8遺存1点、2/8遺存5点、1/8遺存1点と若干遺存度が高い。一部を掲載したが、灰褐色～黄緑褐色の砂を少し混じる厚手のもの(1・6・8)、白～灰白色精製の胎土のもの(2)、それ以外は灰褐色のものである。古瀬戸平碗は図示した10の1点のみで、高台を削り出した底部が完存する。瓶子は胴部1/8破片1点があるが、S D1008出土のものと同個体である。卸皿は図示した12の1点のみで口縁部1/8破片である。珠洲は21の砂底となる底部3/8破片の壺1点、17の底部2/8破片のすり鉢1点がある。17の外底は静止糸切りを残し、内面には卸目がないが、使用によって磨り減って平滑になっている。輸入青磁では11の龍泉窯系無文青磁碗の体部1/8破片1点がある。在地産須恵質すり鉢はすべて図示した。この内、14は非常に軟質で形態的にも異質な存在である。2次焼成を受けた古墳時代土師器の可能性もあるが、口縁部に浅い片口状の造作がみられることから中世の所産と考えた。13は須恵質であるが焼成不良で一部褐色を呈する。13・14共に口縁部1/8破片である。15・16は底部破片で外底は砂底となり、それぞれ底部2/8・3/8破片である。内耳鍋はすべて1/8以下の破片で口縁部は4点ある。その内、19のみ図示した。これ以外の口縁部破片もすべて外反口する口縁部である。18は瓦質内耳で胴部1/8の破片である。器形の傾斜から瓦質すり鉢の可能性もある。20は瓦質火鉢で口縁部から胴部1/8の破片である。

S X2001 (近世) (第333図、P L29) S D2001埋没後に構築された近世の耕作関連遺構であり、出土中世焼物もS D2001からの混入と思われる。内耳鍋が23点(53片)、カワラケが5点、白磁皿が1点ある。内耳鍋は図示した4が口縁部～胴部3/8、9が口縁部～胴部2/8底部1/8で、これ以外はすべて1/8以下の小片である。口縁部は8点あり、その多くは外反するものであるが、10のような内湾するものが2点ある。底部の遺存するものは3点である。4～11を図示したが、4は耳部付近が穿孔される。カワラケは口縁部3/8破片1点、体部1/8破片1点、底部3/8破片1点・2/8破片2点である。図示したのは2点で2は青灰色精製胎土、1は明褐色精製胎土である。ほかには厚手のカワラケ2点と明褐色精製胎土が1点ある。3の白磁皿は底部3/8の破片である。内底面脇に沈線がある。

S Q2002 (古墳時代) 古墳時代の遺物集中と捉えた遺構であり、地面を掘り込む遺構ではないので混入の可能性はある。図示していないが東海産の捏鉢体部1/8以下の破片1点がある。内面は使用によって摩滅している。

S Q2004 (古墳時代) (第334図、P L31・33) 炭層を伴う古墳土師器集中であるが、中世焼物の混入は多い。内耳鍋口縁部1/8以下3点・胴部1/8以下8点・底部1/8以下3点、カワラケ口縁部・体部・底部1/8以下の破片7点・底部2/8破片2点、天目茶碗体部1/8破片1点、山茶碗口縁部1/8破片1点、土師質すり鉢胴部1/8破片1点がある。図示したのは1の山茶碗、2の土師質すり鉢、3の内耳鍋である。内耳鍋口縁部形態では直立して内面にナデ痕を顕著に残すものがある。

S Q2007 (古墳時代) 内耳鍋の胴部1/8以下の小片が1点ある。

S Q2016 (古墳時代) (第334図) 内耳鍋は口縁部1/8破片5点・同胴部1点の計6点、カワラケ口縁部・体部・底部1/8の破片が各1点ずつの計3点、在地須恵質すり鉢口縁部1/8破片1点・胴部～底部1/8破片1点の計2点、山茶碗口縁部1/8破片1点、常滑甕の胴部1/8破片1点、古瀬戸平碗口縁部1/8破片1点がある。この内、在地須恵質すり鉢1点を図示した。内耳鍋で確認できる口縁部の形態はいずれも外反するものである。カワラケは厚手のもので、須恵質すり鉢は非常に軟質である。

D 検出面・出土地点不明焼物 (第334・335図、P L28～33・36)

遺構検出時の出土、及び出土地点不明の焼物である。カワラケ59点(60片)、輸入陶磁器13点、在地産須恵質すり鉢4点、山茶碗1点、捏鉢2点、古瀬戸天目茶碗2点、大窯皿1点、常滑甕2点、珠洲すり鉢3点、珠洲甕? 2点、内耳135点(136片)で計224点がある。大型破片も含まれ、本来は遺構に帰属するもの

もかなりあると思われるが、遺構出土品との接合作業は十分に行っていない。

カワラケは大小2法量(小は1~12、大は13~20)ある。胎土では白色・灰白色精胎のもの(1~3・7・8)15点、灰褐色精胎のもの(4・9・11・12)11点、灰褐色や黄緑褐色を呈する厚手のもの(13~15)7点、明褐色のもの(16~20)19点があり、その他は小片で子細不明である。遺存度では口縁部1/8-14点、2/8-2点、3/8-1点、5/8-1点、8/8-1点で他は口縁部の遺存しないものである。底部でみると1/8-21点、2/8-5点、5/8-1点、8/8-4点で他は底部以外の遺存である。

古瀬戸は天目茶碗1/8破片2点があり、21の口縁部破片を図示したが、それ以外に胴部破片がある。大窯製品は図示した23のみで底部1/8遺存で全面に灰釉が施される。22は山茶碗体部で1/8破片である。東海産の捏鉢は図示した38の口縁部破片と他に体部破片がある。いずれも1/8以下の破片で、胎土は砂を多く含み暗灰色を呈する。

輸入陶磁器は青磁・白磁・青白磁がある。青磁は24に図示した龍泉窯系画花文青磁碗が1点、25~27の龍泉窯系蓮弁文青磁碗3点と図示していないが他に2点の計5点、28の龍泉窯系青磁鉢が1点ある。ほとんどが1/8遺存のものである。白磁は図示していないがIV・V類碗の体部破片1/8破片1点と、図示した29のやや雑な釉が掛けられた産地不明の口縁部1/8破片1点がある。また、31は白磁の瓶類の胴部1/8破片と思われるが、近世の可能性もある。青白磁は30の梅瓶肩部1/8破片1点がある。

すり鉢類は33~35が在地産須恵質、32・36・37が珠洲産である。在地産すり鉢はいずれも1/8破片の須恵質のもので図示以外に底部1/8破片1点がある。珠洲すり鉢はすべて図示した。32は口縁部1/8破片、36は底部1/8破片、37は底部2/8破片で36・37は外底面に静止糸切りが残る。38は山茶碗系の捏鉢で口縁部1/8以下の破片である。常滑は小片2点、および珠洲の甕破片と思われる小片2点があるが、図示していない。この他に珠洲のタタキ壺を加工した土製円盤があるが土製品のところに掲載した。

内耳鍋はもっとも破片数が多いが、いずれも1/8以下の破片である。口縁部破片は24点あり、図示したのは外反する口縁部が39~41・44~46・48・50、直立した口縁部で内面にナデを顕著に残すものが43・49、内湾する口縁部が42、耳部のみが47である。他は耳部付近と子細不明のものである。

## (2) 石製品

微高地では石臼、石鉢、凹石、砥石、硯、五輪塔火輪部など、実に多様な石製品が出土した。これらの石製品は種別に石質が異なっており、石臼・石鉢の一部・五輪塔は安山岩、凹石や石鉢類が黒色多孔質の安山岩、硯が頁岩、砥石が凝灰岩と一部に頁岩製がある。

### ア 石臼 (第336・337図、P L 38・40)

茶臼3点(上臼1点、下臼2点)、粉挽臼は12点(上臼6点、下臼5点、不明1点)の計15点出土した。遺構別出土状況では土坑7基から9点、S D 1008が3点、S D 2001が3点である。石質は近在でも入手可能な安山岩で占められるが、茶臼を中心にやや軟質で質観が異なるものがある。年代は出土遺構から館存続時期~館廃絶以後の所産とみられ、15世紀代を中心に16世紀まで含む年代幅のなかで捉えられよう。館内での出土状況をみると内堀S D 2001及び中心屋敷内は4点、外堀S D 1008及び外堀区画内9点、外堀S D 1008西外部2点となる。中心屋敷内は出土は意外と少なく、むしろS D 1008とS D 2001中間域での出土が多い。これは館廃絶以後の所産が含まれるとみられるため、単純に館存続時期内での使用状況を示すとはみられない。また、茶臼はS K 2624やS K 1039などの外堀周辺と外堀外部で出土している。天目茶碗・風炉などの他の茶具類が内堀内の中心屋敷地を中心に出土している点とやや異なった出土分布となっている。以下に図示したものを中心に説明を加える。

1~3が茶臼である。1が上臼、2・3が下臼、1・2が硬質の安山岩製で3のみがやや軟質で磨滅し

ている。すり目は2・3が8分割で、2は1区画10～13条、3が1区画8条前後施される。また、1は細かいタガネ痕が外面に残る。

粉挽臼は上臼4・8・9・10・13・14、下臼5～7・11・12を図示したが、他に小片で子細不明なものが1点ある。厚さは上臼で8～12cmで、下臼は9～12cmほどである。すり目はほぼ6分割と思われるが、9のみは5分割される。また、1区画あたりの磨目数が5条前後が7・10・11、8条前後が8(?)・12、10～13条前後が4・5・13・14で、9は7～14条である。なお、5は磨目を再刻している。この分割と磨目数を他遺跡出土例と比較すると、14～15世紀前半の長野市栗田館では7分割、1区画あたり7条前後、更埴市松ヶ崎・荒井遺跡出土のものは区画数は不明ながら1区画あたりが7～8条前後が施される。本遺跡とくらべて全般的に1区画あたりの条数が少ない傾向があるが、単純に時期的な様相なのかは判然としない。なお、いずれも使い込まれており、完形は9のみで他は欠損品である。石臼廃棄の際に破壊する行為を推定する説がある。本遺跡でも破損品が多い傾向はあるが、9のような略完形のものもあるため積極的には支持されない。

#### イ 搗臼 (第337図、P L40)

⑩-1区S D2001から一点出土した。図の15は直径約27cm、高さ約17cmで、側面がソロ盤玉型となる。上面には直径約16cm、深さ約9cmの円筒形の孔が作りだされ、底面は内反する。外面には上部・下部に左上～右下方向、中位にはヨコ方向のタガネ痕が顕著に残る。形態から搗臼と考えたが、内面には帯状にススが付着する。石質は安山岩である。

#### ウ 石鉢類 (第337図、P L39)

ここでは内面を抉り込んだ石製容器を一括したが、サイズや形態が異なるため本来は用途別に数種類に分離できると思われる。石質は2のみが安山岩で他は黒色の多孔質安山岩である。

2はすり鉢と思われる。石製すり鉢は中世後半の東信・北信の遺跡で多く出土しており、その分布は南信ほど出土数が少なく、古瀬戸・大窯産のすり鉢出土分布と反比例するとみられる。おそらく、東・北信では珠洲や在地産焼物すり鉢の消滅以後に焼物すり鉢の補完品として出現すると思われる。本遺跡では1例のみであるが、これは在地産すり鉢から石製すり鉢への移行期にあたるためと思われる。

1・3～6は用途不明の容器で、大型の1・3・4と小型の5・6に分けられる。いずれも軽い多孔質安山岩製で、加工はタガネではなくノミ状、あるいは刀子状の刃器類によって削るように加工される。大型品にはすり鉢状の1・4と搗臼状の3がある。いずれも破片出土で口縁部が不整形なため、復元径で図化したのがやや問題が残る。なお、佐久市の大井城などでは搗臼は多孔質安山岩で作られているので21は搗臼としても良いのかもしれない。小型品は18と19があるが、18は平底で19は丸底に近い。なお19内底面には幅広の工具の刺突痕が残る。

これらの石鉢類は⑩区S D1008とS D2001中間域にあるS K2624・2636から2点、S D1008から3点出土しており、館中心部での出土はない。また、S Kでは石臼と共に出土し、石鉢のみの出土例はない。これらの石鉢の年代は子細不明であるが、S K2624では伴出焼物から15後半前後、S D1008は(14後半～?) 15世紀と推定される。なお、⑩区市道下S D1008出土のものはこの部分に近世陶磁器も混在することから後代の混入の可能性もある。

#### エ 凹石 (第338図、P L40)

縄文時代の凹石同様の形態で、丸い小さめの石の上下に浅い窪みをつけたものである。全部で11点出土し、すべて図示した。多孔質安山岩製でその多くが河川礫を利用したものであるが、24～26は周囲を削っている。24は石鉢の可能性もある。窪み内面はいずれも、加工痕を残さず平滑になっている。窪みは上面のみのものは24・30・31で、それ以外は上下2面にわたる。後者の場合ではどちらか1面のほうが浅くな

るものが多いが、なかには下面の窪みまで突き抜けているものがある。これらの凹石は他の中世遺跡でもよく知られており、集落遺跡ばかりでなく、墓址でも出土することがある。その用途は不明であるが、孔内を研磨する行為があると思われる。

出土遺構はSK2点、SD8点、出土地点不明1点である。このなかでSD出土のものはSD2001出土5点、SD1008出土1点、SD1008外の近世溝出土2点となり、内堀SD2001出土が多いものの、館中心部内での出土はない。SK出土の場合ではSK2634が⑩-1区SD2001とSD1008中間域、SK1144がSD1008西辺外となる。これらの凹石の年代は館存続時期からそれ以後の所産と考えられる。

オ 灯明具 (第338図、PL40)

1点のみ灯明具と思われるものが出土した。黒色の多孔質安山岩製で、楕円形の転石の上面を平滑にしあげて、細い溝を一端に付属させた浅い皿状の窪みを形づくる。この窪み周辺には煤が付着する。底面は斜めに削られる。SK1017より出土し、館内ではSD1008西外にあたる。時期の詳細は不明である。

カ 五輪塔 (第338図、PL40)

安山岩製の火輪部のみ1点ある。全体の1/4ほどを欠損するが、1辺約28cmの方形の平面形で厚さは約10cmを測る。周囲には細かなタガネ痕を残し、上面には風空輪を差し込むほぞ穴は見られない。この五輪塔は⑤-1区SK2041で出土し、ここは館内の内堀SD2001と外堀SD1008の中間にあたる。しかし、出土した井戸は浅いもので館消滅以後の所産と推定されるものである。また、館内で墓と思われるものは2例しかないが、1例は頭蓋骨のみの出土、もう1例はやや離れた館東部で箱に入れられており、やや特殊な墓と捉えられるものである。従って、この五輪塔が館内に設置されていた可能性もないわけではないが、館廃絶後の所産の可能性が高く、遺跡外から運び込まれたとも思われる。

キ 硯 (第338図、PL39)

4点あり、すべて図示した。いずれも頁岩製である。形態は1が円形、2～4が長方形と思われる。出土遺構は1がSD1008、2がSK2628、3がSD2001、4がSK2284で外堀SD1008外部での出土はないが、全体的に散在して出土している。いずれも破損後の廃棄と考えられるため年代は子細不明であるが、ほぼ館存続時期内の所産と思われる。

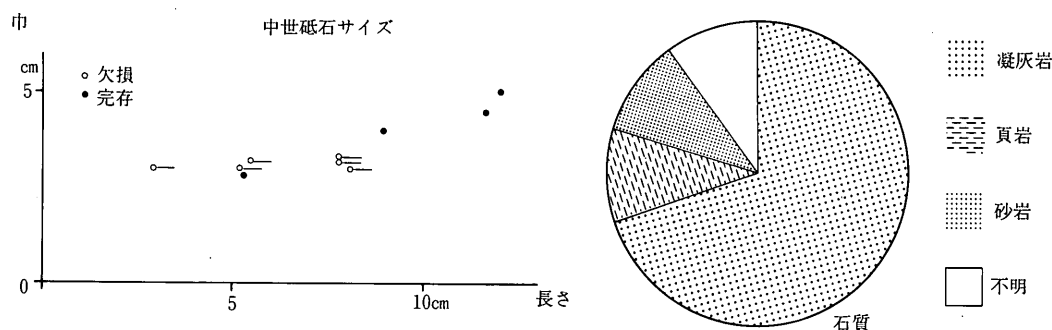
ク 砥石 (第330・339・340図、PL39)

砥石は中世遺構から全部で8点出土し、検出面出土で中世の可能性のあるものが1点ある。これらの砥石自体では直接年代を推測することは難しく、古代や古墳時代のものが含まれる可能性もある。ただし、凝灰岩製のなかで質の悪いものは中世遺構のみ、きめ細かな緑色凝灰岩製のものは古墳時代遺構から比較的多く出土する傾向があるので、前者はほぼ中世の所産とみて間違いはない。また、形態の上でも中世遺構出土のものは小型で長方形のものが多い傾向も窺える。これらの砥石はすべて図示した。欠損するものが多いが、長さは5cm、9cm、12cm前後のものがあり、幅は3cm前後がもっとも多く、最大でも5cm前後までに納まる。石質は質の悪い凝灰岩製がもっとも多く、頁岩製1点と不明1点がある。なお、検出面出土の上面に小孔が途中まで入れられたものは、サイズからも中世と考えた。また、検出面出土の6や3もその可能性がある。この内、3は中世館城遺跡でよく見られる槍先などを研ぐカツオブシ型の砥石に類似している。しかし、側面には古墳時代遺構出土の砥石に多く見られる加工痕を残し、中世と断定するには躊躇される。この他に、砥石ではないと思われるが、金属器によると思われる削り痕を有する軽石が2点ほどSD2001で出土した。類似品は古墳時代の遺構出土品にもあり、古墳時代の可能性もある。

ケ その他 (第337図、PL40)

用途不明の石製品として23がある。黒色の多孔質安山岩製で平面形はほぼ円形と推測され、断面形は側面がほぼ垂直で上面と下面が窪む。そして、上下面には幅広のノミ状工具によって削られた加工痕が顕著





第300図 中世砥石サイズと石質グラフ

に残る。形態は石鉢と凹石の間のような形であるが、規模は復元径約24cm前後になるものと思われ、やや大きめである。

### (3) 製鉄関連遺物

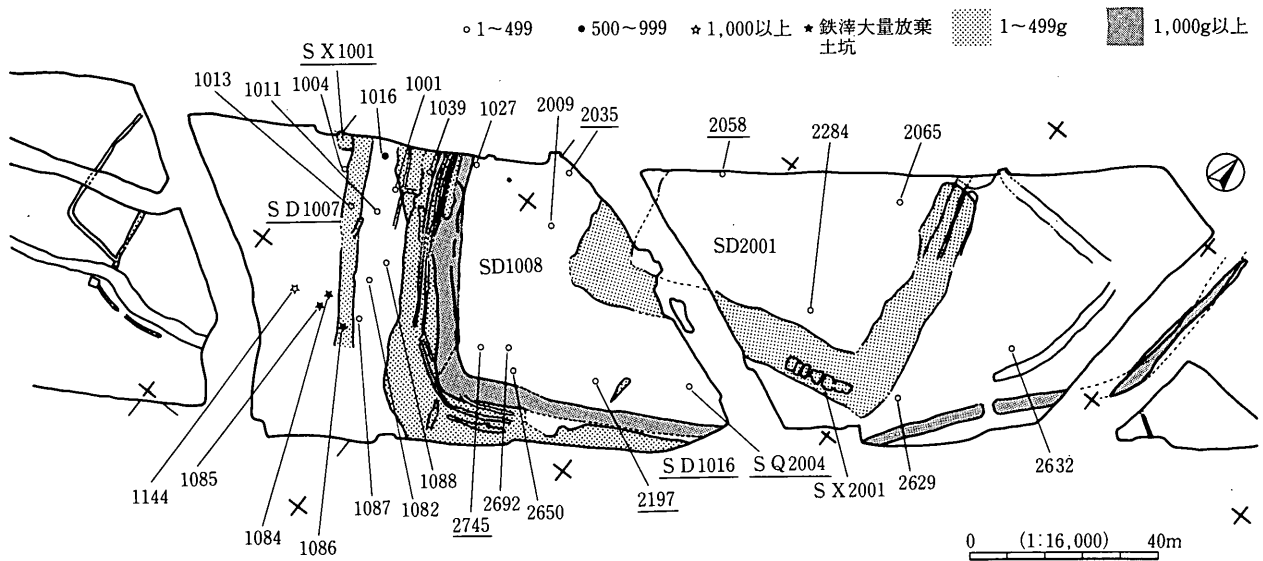
製鉄関連遺物として羽口と鉄滓、鍛造剥片・粒状滓などの鍛冶の際に排出された微細遺物がある。出土地点は⑤-1～⑦-2区のSD1008外側に集中する。微細遺物は鉄滓が比較的集中して検出された⑦-2区の一部の土坑から、土壌サンプルを採取して整理段階で選別したもので、必ずしも厳密な均一方法で採取されたものではない。

#### ア 羽口 (第341・342図、P L37)

本遺跡内では古墳時代と中世の2時期の羽口が出土しているが、古墳時代のものは多様な形態がある一方で、中世の羽口は直径が一定した器壁が厚い円筒形となるため古墳時代のものとは識別しやすい。遺跡内では19点出土し、そのなかで15点を図示した。これらの羽口はいずれも欠損し、最大に遺存するもので長さ10cmを測る。直径は約8cm前後、内径約3cm前後でほぼ一定している。胎土はスサと粗砂・小石を混入した明褐色のもので、凝灰岩小片?が混じるものもある。成形方法は外面にタテ方向のしわが観察されるものがあり、器壁の厚さが均一である点からも棒状の芯に粘土を巻き付け、転がして成形した後にナデ調整していると思われる。出土遺構はSK1084-4点、SK1144-2点、SK2012-1点、SD1008-4点、SD1001-1点、SD1012-1点、SD1013-1点、SD1007-1点、検出面・不明-4点である。このなかで近世のSD1001、古墳時代のSD1007出土品は混入と思われる。SK1084周辺での出土が多く、鉄滓の廃棄状況とほぼ類似した出土傾向を示すが、鉄滓が廃棄されていたSK1085・1086では羽口は検出されていない。

#### イ 鉄滓 (第301・302・343図、P L41)

出土鉄滓はすべて椀型滓で、流動滓は検出されていない。このことから主に精練後の工程が行なわれていたと推測できる。なお、本遺跡では古墳時代と中世に鍛冶関連遺物の出土が認められるが、椀型鉄滓のほとんどが中世～近世遺構で出土しており、概略中世の所産とみられる。出土した椀型滓の基本的な形態は平面形が不整形な楕円形、断面形は底面が丸い椀型を呈する。その上面には一方向に寄った窪みとガラス化した部分があり、その部分を中心に波状の模様が観察できる。このガラス化した部分に羽口先端部が融着した状態のものも確認され、この窪みが羽口の送風によって形成されてたとみられる。また、上面に数多くの炭が付着するものがある。それに対して底部は丸く、表面は粗い髭状となる。この椀型滓は1回の行為によって生成されたかは判然としないが、いくつか椀型滓が積み重なったような形態のものがあり、継続的な行為によると推定されるものもある。遺存状況は良好なものがあるが、その多くは破損して



第301図 鉄滓出土遺構分布（アンダーラインのある遺構は古墳時代の遺構）

いる。なお、あまり欠損が認められない鉄滓でサイズを比較すると長さ7.2~16.4cm前後、幅は6.0~14.9cm、厚さは2.8~10cm前後のものが多く、平均的な数値は長さ11.6cm、幅10.2cm、厚さ5.3cm、重量683gである。なかには長さ19.5cm、幅16.8cm、厚さ11.5cmで重量3350gの大きなものもある。

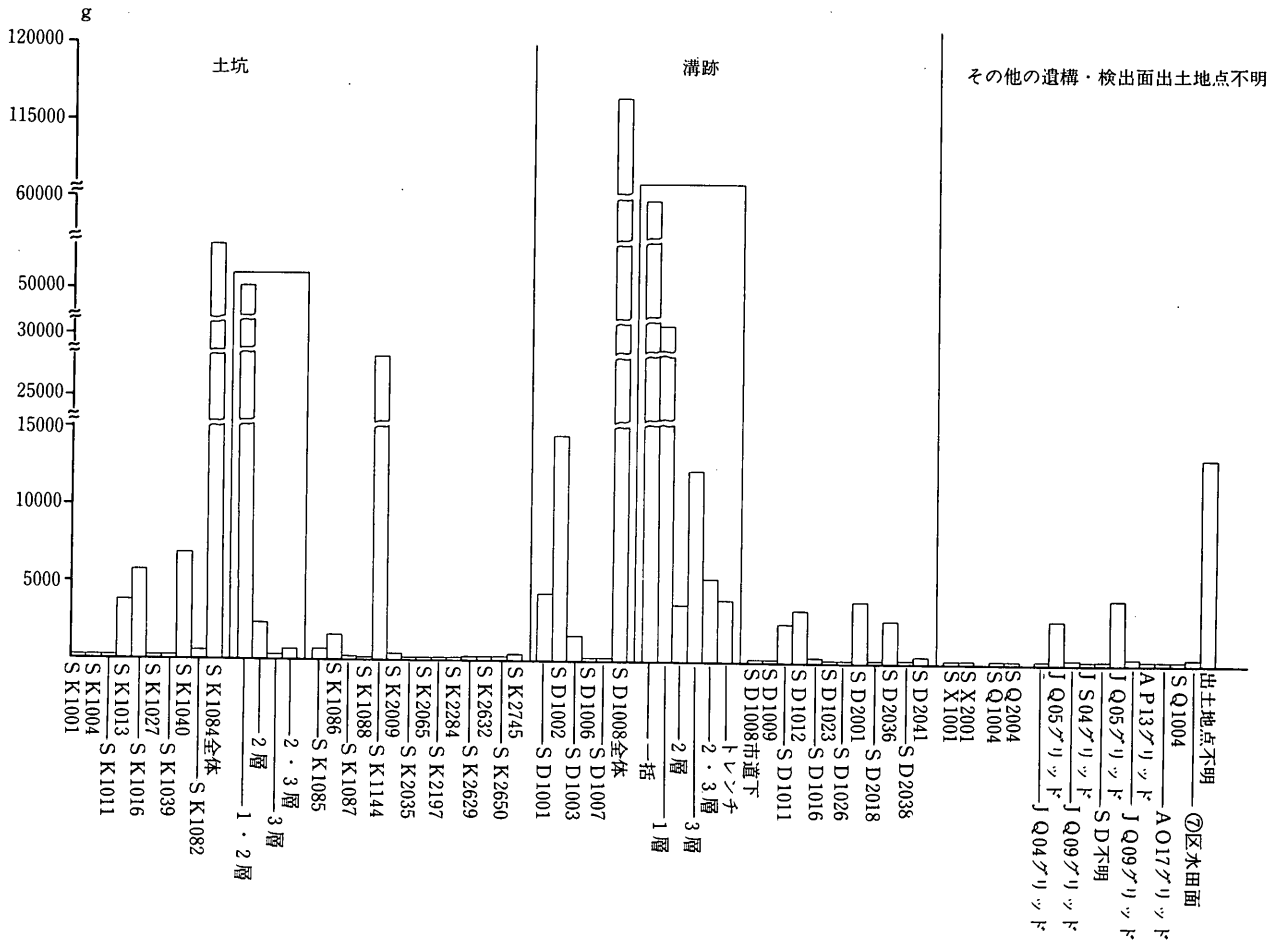
この鉄滓の遺構別出土重量分布は第 図に掲載した。鉄滓出土遺構は館内の西側の外堀 S D 1008 西辺周辺の遺構に集中する傾向があり、特に S D 1008 外側の低地境付近に位置する S K 1084・1144 などの井戸址では突出した量の鉄滓が得られた。なかでも S K 1084 とその周辺の井戸・土坑では鉄滓が層を成しているものもある。これらの遺構周辺で精練・鍛錬鍛冶作業が行なわれて、直接廃棄されたと思われる。

ウ 鉄塊系遺物（第343図、P L 41）

鉄塊系遺物は13点ほどある。形態やサイズは多様で、鉄滓や未製品と誤認したものも含めてしまっている可能性がある。形状は直径2cm前後の小玉状がもっとも多く、長さ4cm前後、幅2cm前後の楕円形の平面形のもの少量ある。また、鉄塊系遺物との認定に迷ったが、金属探知機ではかなり反応が高い5cm前後の大きめのものがある。上記のような形態やサイズの多様なことから誤認している可能性もあるが、精練工程から鍛錬鍛冶工程へのさまざまな過程で生成されたものや、原料として搬入されたものなどが含まれる可能性もある。これらの鉄塊系遺物の化学分析は実施していないため、その工程との関係などを明らかにできなかった。重量は別表を参照されたい。これらの鉄塊系遺物の出土遺構は鍛冶関連遺物の直接廃棄がみられる遺構以外で出土したものが多い。

エ 微細遺物—鍛造剥片・粒状滓・砂鉄（第26~29表）

今回の調査のなかで鉄滓が廃棄されたと捉えられた S K 1084・1085・1086 と、近接した場所ながら鉄滓の廃棄されていない井戸 S K 1088 の上層埋土をサンプリングし、整理段階で洗浄—選別を行なってみた。まず、一定のサンプル資料のなかから100g前後、あるいはそれ以下の量しかない場合はあるだけの量を洗浄して土分を除去し、残りを乾燥させた。そして、磁石に付くものと付かないものを選別し、磁石に付かないものはさらに鉄滓破片と砂・石に分離した。磁石に付着するものは市販のふるいで7.0mm、4.0mm、2.0mm、1.0mmに区分し、そのなかで肉眼によって板状の鍛造剥片、球状の粒状滓、不明、砂鉄に分類した。



第302図 遺構別鉄滓出土重量グラフ

ただし、サンプリングや洗浄の下手際によって、大きめの鍛造剥片や粒状滓は破損している可能性もあり、この点は統計上にも影響を与えている可能性がある。また、細かなものほど種別の分類が不十分な可能性もある。次に、鍛造剥片と粒状鉄滓に関してはサイズ別に任意に30個を取りだして重量を計測し、数の多いものは1個あたりの重量を割り出して総数を推測した。こうした結果を種別重量一覧としたのが第26表で、サイズ別の鍛造剥片・粒状滓の1個あたりの重量-推定個数 ( ) で表示) と数えられた実数を表にしたのが第27表である。なお、サイズ別の表で少し付け加えておくと、数量推定は各サンプルから算定された1個あたりの重量の平均値で総重量を割って算出しているが、実際には同じサイズでも個別サンプルごとに算出された1個あたりの重量には幅がある。これは同じサイズとしてふるいで選別されたなかでも比較的大きめのものが多いと1個あたりの平均重量が大きくなっていることが影響している。上記の方法によって集計されたデータは微細な鍛冶関連遺物の識別に不慣れなせいもあって、必ずしも厳密なデータとはなっていないが、遺構ごとに一定の傾向を反映していることが知られた。

まず、全体の組成をみて気付く点は鍛造剥片・粒状滓が一定量見られるのが S K 1084・1086の2基である。そして S K 1085では非常に少なく、S K 1088にいたっては粒状滓も確認されない。従って、鉄滓の廃棄が見られない S K 1088ではやはり微細な鍛冶関連遺物の廃棄も確認できず、S K 1085は鍛冶関連の微細遺物を伴わない椀型滓を中心とした廃棄、S K 1084・1086のみが微細な鍛冶関連遺物も含む鉄滓の廃棄が行われたと推測される。また、微細な鍛冶関連遺物を出土した S K 1084と S K 1086を比べると鍛造剥片および粒状滓の主体となるサイズが異なることが知られる。特に S K 1084では鍛造剥片は1.99~1.00mmの

第26表 遺構別微細遺物サンプル内訳 (重量g)

	遺構	サンプル重量	洗浄後	砂	鉄滓破片	磁石付着計	鍛造剥片	粒状滓	砂鉄	不明他
1	S K1085 1層	100.0g	2.887g	1.582g	0.680g	0.625g	0.131g	0.005g	0.396g	0.093g
2	S K1086 1層	27.07g	7.331g	0.370g	0.000g	6.961g	1.821g	0.266g	4.581g	0.293g
3	S K1086 2層	50.00g	20.635g	0.663g	0.000g	19.972g	6.493g	0.433g	11.360g	2.076g
4	S K1086 2層	100.00g	43.164g	1.901g	1.536g	39.727g	19.456g	1.071g	19.200g	3.852g
5	S K1088	100.00g	4.894g	3.921g	0.047g	0.926g	0.071g	0.000g	0.773g	0.082g
6	S K1084 2層	640.00g	0.000g	0.000g	189.546g	542.615g	51.912g	8.810g	258.638g	223.255g

第27表 各サンプルの鍛造剥片・粒状滓のサイズ別重量 (g) と推定個数 (個=切り上げ)

	遺構	種別	6.9~4.0mm	3.9~2.0mm	1.9~1.0mm	0.9mm以下
1	S K1085	鍛造剥片	—	0.078g — 3個	0.046g — 10個	0.007g — 4個
		粒状滓	—	—	0.003g — 1個	0.002g — 1個
2	S K1086 1層	鍛造剥片	—	—	0.403g — 81個	1.418g — 709個
		粒状滓	—	—	0.030g — 5個	0.236g — 118個
3	S K1086 2層	鍛造剥片	—	0.076g — 3個	1.640g — 328個	4.777g — 2389個
		粒状滓	—	—	0.065g — 10個	0.368g — 184個
4	S K1086 2層	鍛造剥片	—	1.481g — 42個	5.492g — 1099個	12.483g — 6242個
		粒状滓	—	0.104g — 3個	0.200g — 29個	0.767g — 384個
5	S K1088	鍛造剥片	—	0.049g — 2個	0.006g — 2個	0.016g — 8個
		粒状滓	—	—	—	—
6	S K1084 2層	鍛造剥片	0.645g — 5個	4.094g — 125個	27.919g — 5584個	19.434g — 9717個
		粒状滓	—	4.221g — 90個	4.074g — 582個	0.515g — 258個

第28表 鍛剥片の厚さ平均

	遺構	6.9~4.0mm	3.9~2.0mm	1.9~1.0mm	0.9mm以下
4	S K1086	—	0.43mm	0.20mm	0.13mm
6	S K1084	0.74mm	0.41mm	0.20mm	0.12mm

第29表 鍛剥片・粒状滓の平均重量

	6.9~4.0mm	3.9~2.0mm	1.9~1.0mm	0.9mm以下
鍛造剥片	0.129g	0.033g	0.007g	0.002g
粒状滓	—	0.047g	0.007g	0.002g

第30表 鉄塊系遺物一覧 ( ) 内は破損品の残存長

図版番号	出土遺構	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	探知機反応	備考
-1	S D1002	5.2	4.2	2.7	72.21g	H	楕円形。鉄塊系遺物?
-2	出土地点不明	4.0	3.2	2.5	42.09g	L	球状。鉄塊系遺物?
-3	S D1001	(2.2)	2.3	(2.1)	12.20g	なし	球状欠損。鉄塊系遺物
-4	S D1002	(2.4)	2.6	1.6	10.03g	H	球状欠損。鉄塊系遺物
-5	S D1002	2.8	2.5	(1.9)	12.88g	なし	球状欠損。鉄塊系遺物
-6	S Q2004	(2.2)	(1.5)	(1.0)	2.38g	なし	球状? 欠損。鉄塊系遺物
-7	S Q2004	1.9	1.9	1.9	5.78g	なし	球状欠損。鉄塊系遺物
-8	S D1008	3.1	3.2	1.9	26.01g	H	球状。鉄塊系遺物
-9	S D1008	2.6	1.7	1.9	14.63g	H	球状。鉄塊系遺物
-10	S D1008 1層	4.0	3.5	3.0	35.88g	H	楕円形。鉄塊系遺物?
-11	S D1008 1層	4.3	2.7	1.8	23.31g	H	楕円形やや扁平。鉄塊系遺物?
-12	出土地点不明	4.0	3.2	1.9	39.13g	M	楕円形やや扁平。鉄塊系遺物?
-13	出土地点不明	3.6	(2.3)	1.1	10.97g	H	板状扁平。未製品?
-14	S D1008	2.8	2.8	0.6	6.73g	なし	方形扁平。未製品?
-15	S D1084	(2.2)	1.2	0.3	3.689g	H	製品?

ものが最も多いが、他にも大型の鍛造剥片が含まれる。そして粒状率は3.99～2.00mmが主体となる。一方でS K1086では1.99～1.00の鍛造剥片・粒状率が主体となっている。つまり、S K1086のほうが小型のものが多く傾向が知られる。先学の見解では精練鍛冶から鍛錬鍛冶へ工程が進むにしたがって、鍛造剥片は小型で薄くなり、粒状率も小型化する傾向が指摘されている。これからするとS K1084でも小型の鍛造剥片が多いものの、精練工程か精練工程・鍛錬工程、S K1086が鍛錬鍛冶工程を中心とすると考えられる。この違いは遺構の形態と関連しており、S K1086が浅い土坑状を呈するのに対し、S K1084は廃絶した井戸跡の凹地に製鉄関連遺物が廃棄されている。つまり、S K1086は鍛錬鍛冶を行なうために設置された遺構で、S K1084は井戸跡の凹地を利用して精練鍛冶を廃棄したものと思われる。

以上から推測できることは本遺跡では中世に精練から鍛錬鍛冶の工程があったことと、この両工程がほぼ同じ場所で行なわれているが、工程ごとに行なう契機、あるいは空間が区別されていたらしいことである。また、この精練—鍛冶工程が本遺跡で行なわれたと推測されたことは、近年、中世において銑鉄・鉄塊系遺物が全国的に広域流通して各地域ごとに製錬工程は行なわれていないとされる点と矛盾しない<sup>(註1)</sup>。しかし、本遺跡では鍛冶で生産された器物の種類や、その生産の期間、あるいは館に付属する工人なのか、臨時に雇われたのかは明らかにできなかった。なお、消極的ではあるが、S K1084・1086では酸化炎焼成の内耳鍋は出土しておらず、年代的には館時代の初期段階の可能性があるので、館に恒常的に所属する鍛冶ではなく、館造営のためなどに際して臨時に設けられた可能性も考えられるのではないかと思われる。

註1 佐々木稔他1996『季刊 考古学』57 雄山閣

#### オ 未製品その他 (第340図、P L41)

未製品の可能性があるものが2点ほどある。図の14は1辺2.5cm前後の方形に近い平面形、13は楕円形の平面形でいずれも板状である。前者には水平方向に亀裂が入り、部分的に薄い板状に剥落している。この形状から未製品と推測した。出土地点は中世外堀S D1008内で1点、出土地点不明となったものが1点ある。この他に製品の一部とも思われる図の15が1点ある。形状は刀子柄の破片状の長方形の板状となるものである。周囲には錆が部厚く付着している。製品の一部である可能性もあるが、S K1084から出土しており、本来の形状が不明なためここに掲載した。

#### (4) 土製品

ここでは羽口以外の土製品を扱う。該当するものは土錘と土製円盤であるが、何れも少量しかない。

##### ア 土錘 (第340図、P L37)

中世遺構で5点のみ出土した。出土遺構から中世と捉えたが、他時代の混入の可能性もある。形状は紡錘形が1・2・5、円筒形が3・4である。1・2は遺構の時期に不安があり、3・4は古墳時代のものに類似する。

##### イ 土製円盤 (第339図、P L37)

5点あり、全部図示した。⑦-2区の近世S D2037から出土した以外はすべて検出面出土である。何れも土器破片周囲を打ち欠いたり、研磨して加工したもので、使用土器は珠洲壺1点で残りは内耳鍋片である。サイズは2.5～3.5cmの範囲である。製作年代は使用される土器から推測すると、珠洲壺は詳細不明であるが、内耳鍋片を使用するものはほぼ中世後半期以後と知られる。近世の可能性もあるが、近世陶磁器を使用した円盤が認められなかったため、ほぼ上記の年代の所産と推定される。なお、青磁碗や古瀬戸碗類の底部破片で、周囲が円形に打ちかかれたと思われるものもあるが、これらも類似品と捉えられるのかもし

れない。この中世の土製円盤は全国的に出土が知られ、年代も縄文～近代までが確認されている。その性格については諸説あり、一律ではないとされるが、中世の場合では小型品はおはじき・おてだまなどの遊具説、大型品は「印地」・「印地打」と呼ばれる呪術・信仰関係の石合戦で使われる飛礫（つぶて）説、冥銭説などがある<sup>(註1)</sup>。本遺跡の場合では、具体的にその性格を明らかにすることはできなかった。

註

- 1 川吉謙二1996「土製円盤小考」『紀要第1号』のじぎく文化財保護研究財団  
 志田原重人1990「中世のあそび」『草土千軒144』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所  
 小田原昭嗣1985「草戸千軒町遺跡出土の円盤状土製品」『草土千軒142』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

5 成果と課題

(1) 館跡について

本遺跡の館跡については調査前では全く予想もしていなかった。そのため、必ずしも十分な調査ができたとはいえないところもある。しかし、館周辺を含めて比較的広範囲に調査することができ、さまざまな情報をもたらしてくれた。そこで、不十分ながら調査成果と残された課題についてまとめておきたい。

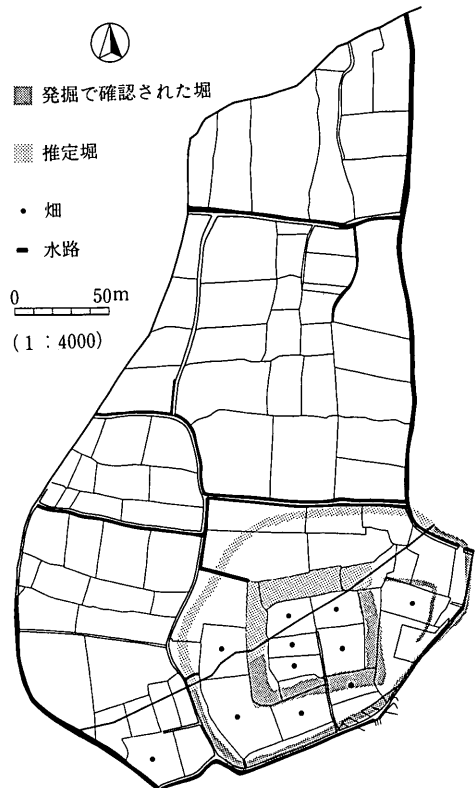
ア 石川条里遺跡の館跡様相

A 館の存続時期

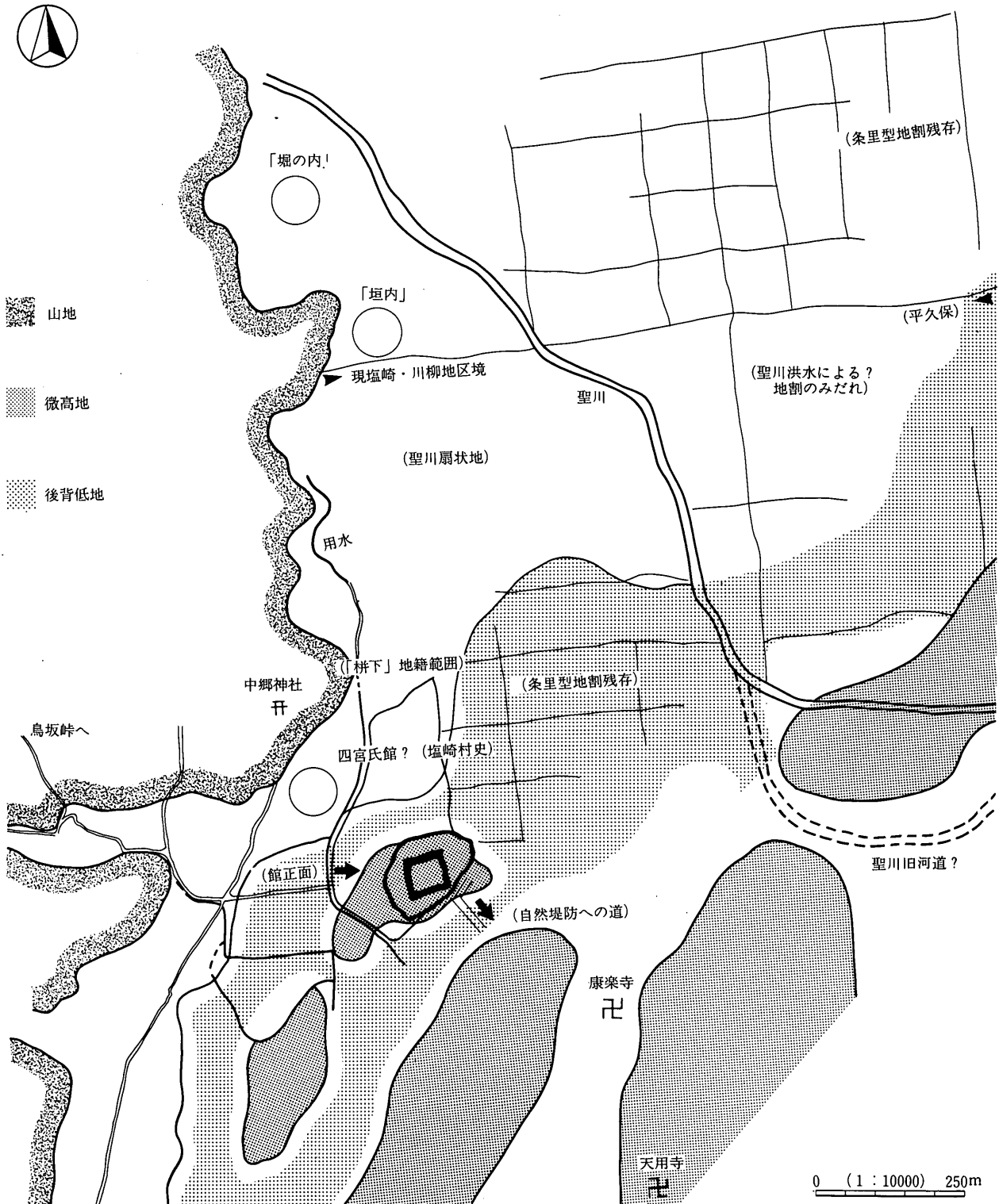
微高地域で堀を巡らせた館が出現してくるのは14世紀後半（末か？）と思われる。この年代の推定根拠は外堀SD1008に切られるSD1011、同方向に重複して関連するとみられるSD1010・1012の出土遺物を上限と捉えたものである。ただし、カワラケの年代に不安を残しており、また陶磁器も伝世・混入する可能性もあることから若干の幅をもって捉えるべきと思われる。なお、先述したように中世前半に居住遺構が存在した可能性もあるが、館との関係については不明である。次に館の廃絶時期であるが、これについては以下のように考えた。遺跡全体の出土焼物の年代をみると、15世紀後半代～16世紀前半は陶磁器類はほとんど見られず、内耳鍋を中心とする土器のみがある。しかも、15世紀後半以後と推測されるB類内耳鍋・16世紀後半の青花を出土した遺構は浅いA①類井戸跡を中心とし、B類内耳鍋は館堀のSD1008・2001ではあまり出土量は多くない。また、15世紀後半以後の陶磁器が水田域での出土量のほうが多いことを考え合わせ、館の廃絶時期は15世紀後半も早い段階であろうと推測した。

B 館の立地

館は低地内の小微高地に立地する。この場所は全時代を通して一般的な居住の場所としてあまり選択されておらず、何らかの規制があったか、不適地であったと推測される。館がこのような立地を選択した理由は十分明らかにできなかったが、いくつか発掘調査結果から推測されることがある。一つは水田域との関連が強いと推測される点である。例えば、立地場所を考えると館の場所は石川条里遺跡南西部の低地



第303図 「柙下」地籍図



第304図 中世の石川条里遺跡周辺図

と微高地が入り組む地形と東の広大な後背低地の地形変換点であると共に、聖川系用水の西限にもあたり、水田域の用水体系のなかでは重要な位置を占めるとみられる。この点では水田域S D 3006が館出現時期前後に消滅することは象徴的であろう。もう一つは、館の出現時期の歴史的な背景によると思われるものである。先にみたように館出現時期は周囲の歴史的環境のなかで北条氏—四ノ宮氏の荘園支配が崩れ、跡を継いだ諏訪円忠に加え、国人村上氏と守護小笠原氏の影響が延びて荘園の支配が複雑化してくる段階にあ

たる。もちろん、館出現時期の年代推測に不安も残るが、戦乱が多くなった時代的背景の元に出現したとみられよう。また、中世前半で居住遺構が存在した可能性があるとはいえ、堀をめぐらせた屋敷地の出現は唐突にみえる。従って、館構築者は前代からこの地で居住していた者ではなく、新たに移ってきた外来者ではなかったかと想像もできる。そのために集落から分離していたのではないかと思われる。もちろん、これには考古学的な確証はない。

### C 館の範囲

本館は大きく内堀S D2001、外堀S D1008の2重の堀で区画される。そして、S D1008の外側にも柱穴跡や井戸跡が分布し、これらの遺構は現用水を境として西側の⑦-1区以西では検出されていない。このことから外堀の区画とは別に現用水（用水6）を境とする井戸・柱穴跡分布域西限も館関連の何らかの範囲を示す可能性もある。従って、館は内堀で囲まれた中心屋敷-外堀で囲まれた範囲-現用水を西限とする堀区画外部居住域?の3つの空間が同心円状に配置され、堀で区画されるのはその一部に過ぎないことになる。また、遺構分布の西・南西限界に一致する現用水（用水6）およびS D1008の南辺が、館の所在する現字地「楸下」の範囲に一致しており、字「楸下」全体が館に関連した範囲とみられる可能性もある。つまり、本遺跡の館は堀区画・遺構の分布などに示される質的に異なる空間が重層的に重なって構成されており、館に関連する範囲には水田も含まれる可能性も考えられる。この場合、どのレベルが「館」として捉えることが妥当なのかというよりも、質の異なる範囲概念が同心円を基本として重層的に組みあわせて館を構成していること自体に歴史的な意味があると思われる。従って、本遺跡の場合では直営?の耕作地を含む範囲、居住遺構が検出された範囲、外堀で囲まれた範囲、内堀で囲まれた範囲がそれぞれ「館」の多様な面を反映した空間として考えるべきではないかと思われた。

### D 館設計の計画性と条里の関係

館内は堀によっていくつかの空間に分割されている。それぞれの配置距離をみるとS D2001区画範囲は堀内側で東西約55m（堀外側では75m）、南北約40m（堀外側で約60m）で堀内側の距離は約 $\frac{1}{2}$ 町にあたりとみられる。S D1008が区画する範囲は全体が不整形となっているが、S D2001区画の中軸線の方向で測るとS D1008堀内側では東西約155m、北側は長野市教育委員会で検出された溝を対応させると南北約110m前後と推定される。さらに外堀S D1008西辺と遺構の分布する西限界となる現用水までが約55mである。ちなみにS D2001で区画された中心屋敷の中軸線はS D1008区画範囲の西によっており、S D2001とS D1008・2007の距離をみるとS D2001西辺内側からS D1008西辺内側までは約36m（S D2001外側からは26m）、S D2001東辺内側からS D2007屈曲部内側までは約38m（S D2001外側からは約28m）、S D2001からS D1008東辺までは約60m（S D2001外側からは約50m）である。また南北方向ではS D2001南辺内側からS D1008南辺内側まで約30m（外側からは約20m）、S D2001北辺内側から長野市教育委員会調査地点で検出されたS D1008の延長先と思われる部分までは約40m（外側からは約30m）とほぼ類似している。

以上の距離関係をみると外堀S D1008の区画範囲は東西約1.5町、現用水までの距離とすると約2町となり、南北が約1町である。つまり、S D1008の囲む範囲は不整形であるが、ほぼ $1 \times 2$ 町を基準とした範囲であることが知られる。また、中心屋敷地の北・西・南辺側にはS D2001外側からの距離約20m~30m（ $\frac{1}{4}$ 町?）にS D1008が位置し、東辺は類似した距離にS D2007が設定されている。館内部も「1町」の $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{4}$ 距離に堀が設定されていたとみられる。しかし、その設定距離はあまり厳密なものではなく、外堀自体が地形に合わせて不整形となるようにきわめて大雑把である。また、館範囲は古代の条里区画の坪境に一致していない。しかし、この館の基本設計が前代からの地割りを無視した独自のものかについては、前代からの地割との関連がみられそうな部分もある。例えば、中心屋敷の東西中軸線は東西坪境、S D2007の南北方向に走る部分は古代条里の南北坪境の位置に近似し、しかもS D2007先端は東西坪境との交点付



近で立ち上がっている。また、館西側のB型井戸跡の分布から推測される地割・道跡がSD2001南側に推測される通路に近似しており、館にそのまま取り込まれているとみられる。このように前代からの地割のなかで堀の位置が決定されている可能性は、前代からの耕作が継続し、全くの未開地に出現した館跡ではない本遺跡の特性によるものと思われる。また、外堀SD1008の設定位置が古代の条里区画に一致しない点では、条里区画を踏襲した東側低地水田域に面しながらも、館の構築時には異なった区画となっていたことによるものであろう。

#### E 館内部の構造

調査範囲の館内のようすを整理してみる。ここではSD2001区画内部(A)、SD1008区画内側(B)、SD1008区画外側(C)に大別し、Bの範囲内ではさらにSD1008区画内西・南部(B1)、SD2001東辺～SD2007間(B2)、SD2007外側～SD1008東辺間(B3)に区分する。

#### SD2001区画内部(A)

SD2001に囲まれた館中心部である。SD2001は1辺50m前後の方形屋敷地を形づくるが、西・南辺と東辺では形態が異なり、西・南辺が深くV字状に構築され、防衛的な性格が強調される。また、調査で土橋はSD2001北東部に1か所認められたが、ここはSD1008南東部の土橋から直線的につながる道が存在した可能性もあるものの、東辺は西・南辺よりもかなり浅く、正面ではないと思われる。また、このSD2001で区画された内部の遺構配置に一定の規則性がみられる。すなわち、西側および、南東部は遺構分布が希薄であり、他の館などで認められるような広場のような空間になると思われ、この空き地に面して北・東側に建物、東側に井戸群が配置されていたと見られる。また、認定に問題を残すが、比較的規模の大きなST2002・2003が中心的な建物跡、もしくは類する建物跡とすれば、広場に面して館東部に中心建物が存在していた可能性も出てくる。なお、個々の建物の機能は明らかにできなかったが、一般的に館内部の建物の種類・配置には一定の型や機能的な意味があるとの指摘もある<sup>(註1)</sup>。本遺跡では建物跡認定自体に不安があるため、十分な検討を加えることはできないが、周辺の類似遺跡との比較のなかで若干推測してみたい。

北信周辺では近年、館の調査例が増加してきているが、ここでは2例ほど挙げて比較してみる。まず、近似時期と思われる飯山市長者清水遺跡<sup>(註2)</sup>では1辺50m前後の範囲を堀で区画された屋敷地があり、内部の中央南よりに規模の大きな建物跡、その東・西側に空き地がある。この規模の大きな建物跡が中心的な建物とみられ、規模は梁行2間(6.5m)×桁行7間(約17.5m)で、空き地に桁方向を見せて位置する。そして、北側隣には直交する方向で建物跡が数棟並列しているようである。次に時代は下って戦国時代の例となる高梨氏館<sup>(註3)</sup>では、中心屋敷地は周囲を堀と土塁で囲まれ、土塁内側で東西約86m、南北最大約78mの長方形となる。入り口は西辺に2か所、東辺1か所等、南辺に1か所ある。これらの入り口はすべて同時存在するものではないが、西側が正面で東側が裏手にあたると思われる。内部には西側に空き地があり、東半分に建物跡が集中し、庭跡も検出されている。東側で検出された建物は礎石建物を中心とし、空き地に対しては1棟が桁方向を見せて建ち、その背後に規模の大きな建物が梁方向を見せて並列している。そして、この建物群の北部に倉庫の可能性もある堀立柱建物が直交する方向で並列し、中心建物群南には庭園跡が存在する。なお、北西部や西辺の土塁脇には時期不明であるが、空き地に対して桁方向を見せる建物が数棟みられるようである。上記の例は館規模・存続時期が異なるため単純な比較はできないが、空き地をもつ点は共通する。入り口は長者清水遺跡例では不明ながら、高梨館例では空地へ繋がる西口が正面で、建物跡が密集する部分背後から繋がる東口が裏手とみられる。また、建物跡は両遺跡ともに計画的に配置されているが、長者清水遺跡では中心的な建物1棟と規模の小さな建物数棟複数、高梨氏館では中心的な建物跡が複数からなり、しかもその背後には倉庫・庭が付設されている。つまり、長者清水遺跡で

は母屋と付属屋という中世の集落遺跡でも見られる建物群構成であるが、高梨氏館ではより機能的に分割された様相とみられる。また、中心部の建物跡は前者では空地に対して桁を見せるが、後者では広場に面して桁を見せる建物があり、その背後に梁側を見せる建物が並列する違いがある。なお、この高梨氏館の建物跡については小野正敏氏によって分析されている<sup>(註4)</sup>ので、少し紹介しておこう。小野氏は朝倉氏館の空間を日常生活を営むケと公的行事を行なうハレの空間に分割し、さらにハレの空間は身分秩序を肯定する表(端)の空間と、それを否定する奥の空間から構成されると捉えた。そして、表(端)は広場を付属させた「主殿」、奥は庭を付随させた「会所」が中心的な機能を担うとする。高梨氏館の場合は朝倉氏館と類似しており、「主殿」にあたる建物跡が不明瞭ながら、その奥に広場側に妻側を見せ、庭を付属させた建物跡が「会所」であろうとした。この小野氏の見解に従えば、高梨氏館と長者屋敷の違いは、公的な活動内容への関わり方や都市型屋敷地の指向性の違いとみられる。

上記の遺跡と本遺跡の様相を比較すると中心の建物数が少ない点からは長者清水遺跡のあり方に近いと思われる。しかし、本遺跡のS T 2002・2003が中心の建物とすると広場に対して妻側を見せて、しかも東側にかなりよっている点は大きな差異と認められることになる。この問題はS T 2002・2003認定自体に不安があって、単純に本遺跡の特徴として強調はできない。なお、中心屋敷内への通路は高梨氏館跡例同様に複数存在した可能性は高い。

#### S D 1008区画内(B)

外堀S D 1008が区画する範囲である。中心屋敷の西・南辺側にあたるB 1で柱穴跡・井戸跡が多く検出され、東辺側にあたるB 2・3では井戸・柵列跡のみで掘立柱建物跡はあまりみられない。

#### S D 1008区画内部西・南部(B 1)

個別遺構の年代推定から井戸跡A②～⑤類と建物跡が館時代の所産とすれば、井戸跡・建物跡はS D 2001の西辺側と南辺の西部に偏在し、S D 2001南辺側の東部では井戸跡や中世と断定できる柱穴跡は分布していない。また、柱穴跡の分布からS D 2001南辺部分とS D 1008南西隅の2か所に通路が想定でき、これはB類井戸分布から知られた館以前から存在した地境・通路のまま取り込んだものと推測される。従って、この空間は単純に外堀で囲まれた均一の空間として存在しているのではなく、館全体のなかでは建物跡・井戸跡が集中する場所で、その内部は通路によっていくつかの空間に細分されていたことが知られる。しかも、それは前代からの地割等を踏襲するなかで成立しているようである。こうした細分された各空間ごとに柱穴群や建物跡がみられるものの、井戸跡は別のあり方を示す。大きく分けると建物跡に関連して数基ずつ認められる例と、建物跡と同時存在が認めがたいものや井戸跡のみが存在する場所があるのである。このように井戸跡と建物に対応していない様相は個別遺構の時期認定に不安もあるため断定的なことは言えないが、井戸群のみが分布する様相はB 2・3、Cの部分でも見られ、井戸群のみが館内各所に構築されるのは時期差によるか、特殊な機能をもっていたことによるとも思われる。この理由は遺構の年代比定と建物跡の認定に不安があるため詳細は明らかにできなかった。

#### S D 2001東辺～S D 2007間(B 2)

この空間にはS D 1008南東部にある土橋からS D 2001北東部の土橋を結ぶ道が存在したと見られ、他には井戸跡と柵列跡、墓跡が1基認められている。この空間はS D 1008土橋から連続する通路があり、この部分は基本的に居住域としての利用の可能性は低いと思われる。しかし、井戸群は確認されており、これらの井戸群の存在理由については明らかにできなかった。いずれにしろ、このような井戸群のみが存在するあり方は上記のB 1でも同様に見られ、館全体のなかで類似した傾向として捉えるべきなのかもしれない。なお、この空間はS D 2007によって東側を区切られるが、S D 2007の性格と構築・廃絶時期とS D 1008改修の可能性に関しては十分明らかにできていない。ただし、S D 1008の改修に伴って、S D 2007が廃絶

したとすれば、この空間も館全体の計画性のなかで利用方法が変化していると考えなくてはならなくなるだろう。

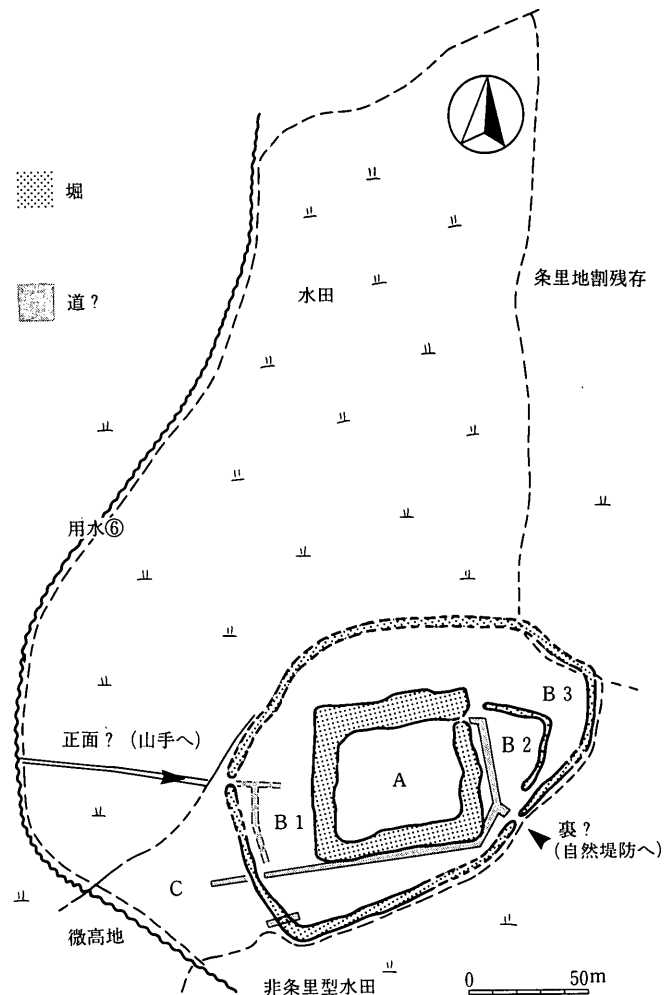
#### S D2007外側～S D1008東辺間 (B 3)

館の東端部の水田域に面した場所である。この場所では館廃絶後の所産と思われる井戸跡が僅かにあるA②～⑤類が館時代の所産と推定したが、これらの井戸跡の分布は大きく2つに分かれる。ひとつが低地際にあたる部分でS K1084のように多量の鉄滓が投棄されている井戸を含むグループである。もうひとつが上記井戸群より北側にあるもので、ここでは埋没途中でいれられた唯一の木杵をもつS K1020を含む井戸群がある。柱穴群も2か所に分かれて認められ、上記の井戸分布にほぼ対応している。しかし、柱穴跡の分布自体が非常に希薄で、S D1008区画内のように一定範囲内で密集して分布する様子はない。従って、この場所は居住域として利用された時もあったが、継続的な利用はなかったと考えられる。さらに、この部分では鍛冶を行っていたことが推測されたが、この鍛冶自体が恒常的なものではなく、臨時の造作の可能性もある。それは鍛冶関連遺物をまとめて出土した遺構で土師質内耳鍋が確認されていないことから、館の存続時期内でも比較的古い段階と思われる、館の改築か新築に伴うと考えられるかもしれない。

#### F 館の基本構造

館の範囲のところで述べたように、発掘調査によって館は内堀区画内中心屋敷(A)、外堀区画内(B 1～3)、外堀西側外部の居住域(C)を含む居住範囲(A～C)という構成が知られた。さらに遺構分布と地籍図の照合から、上記のA～Cの空間が(D)水田域を含む字「柘下」範囲内に包括される可能性もある。各空間の位置関係は基本的にはA～D順で前のアルファベットの空間を後のアルファベットの空間が包括する同心円的空間構成となっているとみられるが、実際には微高地域が字「柘下」の南端によっているため、A～Cの空間がDの空間の南によっている。また、各空間の質的な違いについてはAが中心の屋敷範囲、Bが館に関連する複数居住者の家宅と居住遺構の分布が稀な空間を含んで外堀で囲まれた範囲、Cが臨時の居住を含む可能性がある居住可能な範囲、Dが館が直接関わる耕作地範囲としてみるができる。このなかで、A・Bは防御機能をもつ堀で区画されるが、C・Dについては明瞭な区画施設の存在は見られない。

なお、Dの空間は状況証拠から館に関連した範囲であると考えたが、この推測が妥当ならば、これは館の立地場所の選択と館居住者の支配のあり方を考える材料となりうる。つまり、本遺跡の場合では「館」が単純な屋敷地範囲に限定されるものでは



第305図 「柘下」範囲と館模式図

なく、一定の水田域を含む範囲として構成され、隣接する後背低地の広域の水田域とは別に館が直接経営する水田をもつとも考えられる。これは、後背低地を中心とする前代から継続する水田域に対しての直接的な支配力が弱く、間接的な支配であったとも想像されるのではないかと思われる。また、聖川系用水が及ばない微高地西側低地では現地表面では条里と異なる方向の区画の水田が小グループをなして分布するが、これらの水田グループも館のような経営主体ではないにしろ、同様な限定された範囲を所有するあり方によって再編成・生成された水田群であった可能性もでてくる。もちろん、これは考古学的な根拠が弱く、憶測に過ぎないが、館の立地を考える上で鍵となる可能性がある。

また、A～Cの空間は微高地域にあたり、この空間のあり方はすでにみたように大きく2つの構造で構成される。一つが同心円状の空間構成であり、もう一つがオモテーウラの構造である。同心円構造の基本的なあり方は堀の配置によってつくられ、そしてオモテーウラの構造は館内の道・入り口の場所を基本として遺構配置と堀の形状に投影されているとみられる。次にこの2種の構造について少しみてみよう。

まず、同心円構造では堀の配置によって大きくA～Cの空間が形づくられるが、Aでは複数の建物が広場を含んで機能の異なる複数の建物跡が配置され、Bでは東側のB2・3の居住遺構が検出されない場所と、B1の類似した規模の掘立柱建物跡跡が近接地点で建て替えを繰り返していると思われる場所がある。そして、Cでは居住遺構が少なく散在的で、鍛冶も行なわれているが、臨時に使用される場合が想定されるのではないかと推測した。この様相をみると同心円状に堀で区画された空間はそれぞれ別の役割をもっていたことになる。そして、こうした空間構成に関して以下のような可能性が想定できる。

一つが階層的な住み分けである。中心的なAの空間にはもっとも多数の建物が推測され、そのなかには規模の大きなものが含まれる。建物規模が居住者の階層性を表現するとみれば、Aの空間がもっとも階層の高い館主人が居住し、その外側のBにはやや階層の下の者が少数居住していたと見られる。さらに外堀の外側Cではより階層が下の者か、臨時に使用された空間ともみれる。ただし、この推測には建物跡が館時代の所産であるとした場合での推測であり、また館内の変遷のなかで捉えられているものではない。

もう一つの解釈は機能的な差である。Aの空間では広場が存在するとみられ、この場は公的な役割をもっていた可能性がある。そして、Bの空間は館主人の配下の者が居住する空間や空閑地（畑か？）などの館に所属する私的な側面の空間であった可能性もある。ただし、空閑地を含む範囲をなぜ外堀で区画する必要があったのかは不明である。また、逆にSD1008の外側では井戸や臨時にしろ建物跡が存在するのにこの部分を区画しない理由も疑問が残る。これは次に述べるように家宅の意識に関係し、外堀が土地区画施設でもあった可能性によるのであろうか。

三つ目の解釈は土地区画施設としての堀との関連である。つまり、堀が単純に防御施設となるのではなく、基本的に土地区画施設であるという見方である。これは外堀のめぐる範囲が「町」を基本とし、特にAの空間がほぼ1町と見られるところから一定面積の占有を目的としたもので、内部に空閑地の範囲も含む点からも窺える。そうした場合、Aの範囲が実質的な家宅範囲、Bが屋敷地範囲を示すものとなろう。Cの部分は不明であるが、館主人の支配する土地ながら屋敷地の外ということになるのだろうか。なお、この問題は後述するように2重の堀がめぐる「回」字型と「口」型の館の違いの鍵になるだろう。

以上の解釈はいずれも、多様な可能性をみたものであり、考古学的な検証を十分経ていない。本来ならば、館の系統的な発展のなかで捉えられるべきと思われるが、これは十分な解明ができなかった。

次にオモテーウラの構造についてみてみよう。これは同じ堀内でも東西での形態の違い、あるいは遺構分布の偏在などから、館には正面と裏側があって、全体の造作が異なるだろうと推測したものである。このことを考える場合、正面入り口の存在が鍵を握るとみられる。調査で確認された外堀の入口は1か所である。それはSD1008南東部の土橋で、そこからSD2001東辺に添って北側へいった場所に中心屋敷に入

るSD2001の土橋が連続する。しかし、SD2001は西・南側が強固にできており、土橋の確認できた東部はあまり防御が強固にできているとはいえない。その一方で調査区内の西側では入口と思われる施設は確認できていない。そこで、明治時代の地籍図から探ってみると、館の所在する周辺では現四宮集落から字「楨下」へつながるとと思われる道が描かれており、ほぼ現県道と一致する。この県道は館を貫いて自然堤防側のJR篠ノ井線の稲荷山駅へ続くが、明治時代の公図では途中の「楨下」境までしか続いていない。しかし、逆に公図で水田域内で道が止まっている点は奇異に思われ、近世に構築された作業道としては考えにくい。このことから、これが本来の正面の館につながる道で、この延長に館正面の入り口があるのではと推測される。この推測が許されるならば、幹線道路は山手を走っていたとみられ、また、西側の山手とのつながりも強かったとみられるのかもしれない。なお、SD1008南東部の土橋については、裏口となるが、こちら側は自然堤防へ続く道になると思われる。以上より、調査では確定できなかったところもあるが、正面の位置は低地内微高地に立地する本館と山手の緩斜面地帯・自然堤防側の道との関係、あるいは集落との関係のあり方によって決定されていたことは想像されるであろう。

#### G 本遺跡の特徴

上記では本遺跡の堀を巡らせた屋敷地を「館」と呼称してきた。しかし、近年の発掘調査の進展によって堀の区画をもつ遺跡＝「館」という単純な図式は成り立たなくなってきた。従って、堀で区画された屋敷地を「館」と呼ぶにしても、この地域内で何らかの考古学的な位置付けの検討は必要であると思われる。これを考える場合、同時代の他の集落遺跡との比較のなかで検討する方法がもっとも有効であろうと思われるが、長野市周辺では堀を巡らせた屋敷地の調査例はいくつか知られているが、逆に集落遺跡と呼べるものについては不明瞭となっている。したがって、周辺の遺跡との比較のなかで考える資料が不足しているため、上記の方法では不都合がある。そこで、本遺跡の調査から推測される性格についてまとめて、次項で周辺の類似遺跡との比較のなかで本遺跡の性格を考えてみることにしたい。

まず、再度調査結果をまとめてみることから始める。出土した焼物にはすり鉢や煮沸具があり、遺構では井戸跡、建物跡が検出されたことから本館跡では日常的な居住が行なわれていたと推測される。さらに、儀礼的な食器とされるカワラケが一定量出土している点では一般的な集落遺跡とは異なった性格と捉えられる。なお、掘立柱建物数が少ない点で問題が残るが、これについては調査状況、あるいは遺構の残存状況に起因すると考え、本来は検出された数よりも多数の建物が存在したと推定した。また、この屋敷地は同心円的に堀を巡らせており、屋敷地とすると非常に大きく、また、中心屋敷を中核とした統一的な構造で貫かれている。しかし、この外堀の区画する内部には多数の井戸跡が検出されているが、掘立柱建物跡はあまり顕著ではない。しかも外堀の区画範囲が一定の距離を基準としているとみられるため、外堀が土地区画施設としての性格も持つと思われる。

また、考古学的な根拠は薄いが、本遺跡は前代からの継続耕作の可能性が高い後背低地の広域水田に隣接して立地し、その立地環境からも水田域とのつながりの強さも推測される。そして、館の所在する字「楨下」地籍に広がる直営の水田を別に周囲にもっていた可能性も窺えた。このことから耕作にあたる人間を直接支配するのではなく、館は水田域を間接的に支配する者であった姿も推測できる。そして、その支配方法は館出現を前後する段階で用水の配置が変化して、館が用水を中核として水田域の支配が進展していく可能性から知られたように用水を媒介とした方法であったと思われる。また、この水田域の用水体系の変化に前後する段階では山手の沢水から取水する用水が構築され、新たな水田区画の再編成が行なわれると共に、聖川沿いの部分が高くなっていくようである。このことは、土層の対比や年代推定根拠が弱く、断定するまでには至らないが、水田域の再編成や広域に及ぶ耕作地の環境整備として位置付けられるのかもしれない。ただし、これは「支配」という単純な表現で示される権力者の一方的なものと考えられるか、

集落との関係のなかで協調的に行なわれたことなのかは明らかでない。

以上からすると、本遺跡は水田域の支配に基盤を置いて、集落とは分離して用水などの支配や再編成を行なった者が構築した屋敷地で、屋敷規模の大きさからこの地域を代表する有力者ではなかったかと推測される。しかも、集落とは分離し、耕作地の支配を重視する姿勢や堀を巡らせた屋敷の出現が唐突である点からは集落内部から成長してきたものではない可能性が考えられる。この点で、館の出現時期前後で四ノ宮荘支配をめぐる支配関係が複雑化する時代的な背景と結びつけて見られるのかもしれない。また、集落との関係においては耕作地を媒介とした結びつき以上のことは分からないが、耕作地の環境整備—支配システムを媒介として徐々に地域支配を広げて変質していく様相は推測されるが、ある段階でこの館が廃絶してしまうことは大きな地域支配の質的な転換があったと見られよう。それは、単純な支配者の交替ではなく、すでに耕作地の直接的な支配から離れていく質的に異なる別の姿があったのかもしれない。この点で、集落との関係においても何らかの変化があったと推測されるが、詳細は今後の課題としたい。

註

- 1 小野正敏1994「戦国期の館・屋敷の空間構成とその意識」『信濃』46-3など
- 2 飯山市教育委員会1985『長者清水遺跡・水の沢遺跡』
- 3 中野市教育委員会1983『高梨氏館跡』
- 4 註1に同じ

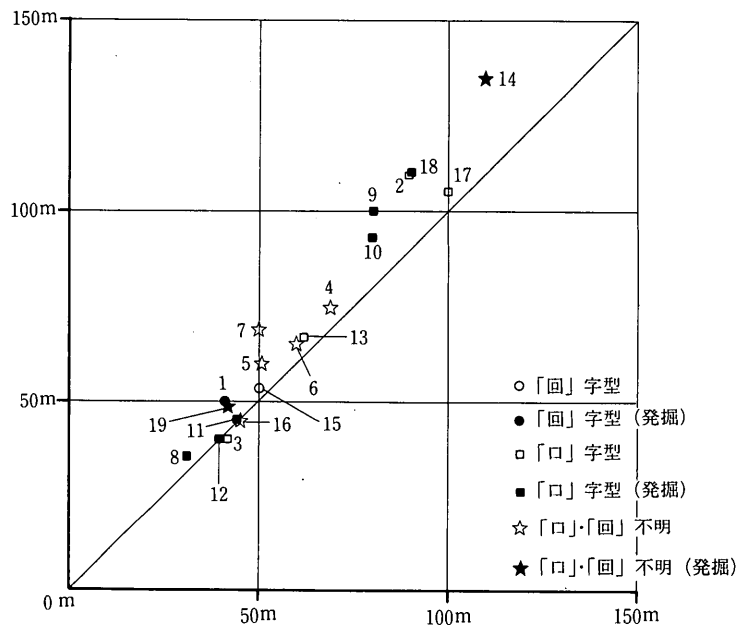
イ 周辺の館跡との比較

A 周辺域の館形態と規模

次には周辺の館の様相のなかで、本館の位置を考えてみることにしたい。近年では館の調査例が増加してきているが、報告書が未刊で子細な検討はできないものも多いので、ここでは地籍図といくつかの発掘例を中心に検討を進めることにする。しかし、地籍図では外堀の存在が不明瞭なものが多く、ここで行なう分類については不安が残されるので、ここでの検討はあくまでも推測の一つとして、今後さらに検討を加える必要があることは断わっておきたい。

長野市周辺の山城を除く城館跡といわれる遺跡は平地に立地するいわ

ゆる方形館と、盆地西南部山地内の小規模な平坦地に立地し、連続した堀を巡らすなど山城に近い形態のものがある。また、これ以外に堀を持たない「屋敷」地名や「じょう」(=「城」?)とよばれる)地名があるが、詳細は不明である。ここでは本遺跡と類似した形態となる、平地に立地した堀を方形に巡らせる屋敷地に絞って取り上げることにする。なお、堀を巡らせた屋敷地すべてが武士の屋敷である「館」である確証はないが、ここでは堀を巡らせた屋敷地を館跡として仮に呼称して扱う。



第306図 周辺の中世館中心屋敷規模グラフ

この平地に立地する館跡は堀の配置のしかたによって2種に分けられる。それは堀が一重のみの「ロ」型と堀が2重になる「回」字型である。さらに感覚的ではあるが、存在形態からは一重の堀の屋敷では類似した「ロ」型屋敷が一定の距離をおいて集合するものと、隣接密集して統一的な計画で作られているもの、単独で存在する3形態があり、後者の「回」字型はほぼ単独で立地するものが多いようにも思われる。なお、この分類のなかで「ロ」型とした遺跡では周囲を広く発掘された例があまりなく、本遺跡のように「回」字型館の外堀が必ずしも方形にめぐらない場合や、地表面で痕跡を拾いにくいものもあるため、「ロ」型とした館も外堀がないと断定するには不安が残るものがある。

次に地籍図や発掘例から中心屋敷地の規模を堀内側で計測してグラフに落としてみると、大きくは50m四方規模のものと100m四方のものに分けられることが知られる。ただし、50mの下に30m前後のものが見られ、これらはさらに細分される可能性もある。

以上の堀配置、屋敷地のあり方、規模によって以下のような分類ができるものと思われる。

- Aロ型 1 単独 a 中心屋敷30m前後  
                   b 中心屋敷100m前後  
                   c 中心屋敷50m前後  
           2 集合 a 中心屋敷100m+小規模なロ型屋敷地
- Bロ型 1 密集 a 屋敷30m前後で長方形あり。
- C回字型 1 単独 a 中心屋敷50m前後  
                   b 中心屋敷100m前後

上記の分類に若干説明を加えておこう。まず、A 1 a型であるが、確認できる例は少なく、集合する形態に含まれる可能性もある。例としては於下遺跡が挙げられよう。A 1 b型も例は少なく、発掘例から全体の様相が把握されたものはない。例としては生仁館・大当館が挙げられる。A 1 c型は長野市周辺では判然としない。例として飯山市大倉崎館を挙げられるが、類例が少なすぎて分類として成り立つか問題を残す。このようにみえてくると、「ロ」型が単独で存在するケースは稀であるともみられる。そのなかで、100m前後の規模をもつものが存在する可能性があることは注意される。

A 2 a型は認定が感覚的なので分類に不安がある。例として、更埴市城の内遺跡周辺、長野市大塚館周辺がこの例として挙げられるが、あまり多くはない。これらの例では100m前後のものを核として、その周辺に距離をおいて小規模なロ型屋敷地が複数散在するようにみえる。なお、栗田城跡は周囲の詳細な様相は明らかになっていないが、この類かC 1 b型に該当する可能性がある。

B 1 a型例も少ない。例として駒沢城を挙げられるが、報告書は未刊行なので詳細は今後委ねる。駒沢城は突出した規模の屋敷が存在せず、類似した規模の屋敷が隣接していた可能性がある。この他に類例として長野市太田古屋敷なども含まれる可能性がある。

C 1 a型は長野市周辺で知られる館の多くがこの形態とされる。本遺跡例を代表にいくつか知られる。C 1 b型は発掘例は少なく、分類として成り立つか問題がある。例として栗田城跡を挙げるが、栗田城跡はA 2 aに含まれる可能性もあり、詳細は保留しておきたい。

以上の分類は現時点での作業仮説に過ぎず、すでに述べたように分類が成り立つか不安なものも多い。特に館の外堀の有無は地籍図の上でも窺いにくく、さらに本遺跡でも外堀の配置場所が変化の著しい場所とみられたので、「ロ」型は今後の資料増加によって検証する必要があるだろう。さらに、上記に挙げた遺跡すべてが館跡とは認定できないものも含まれる可能性はあるが、ここでは先に示した形態が屋敷地形態として存在しうると仮定した上で話を進めることにする。

## B 周辺の館発掘例との比較

上記の分類した各形態の年代について発掘例から検討を加えてみる。

### 城ノ内遺跡（大境遺跡）<sup>(註1)</sup>

A 2 a タイプと思われる。中心屋敷地は100m規模で、その南側にやや離れて1辺50m規模の掘りを巡らせた屋敷地がいくつか調査されている。これらの屋敷から出土した遺物は本遺跡のA類の内耳鍋、古瀬戸平碗、縁釉小皿類がある。15世紀に限定できるのではないと思われる。

### 生仁遺跡<sup>(註2)</sup>

南北朝期直後の文献に表われる生仁城に比定されている。この館の周囲には他に館跡は知られておらず、1辺100mの程度で単独に存在するA 1 b型の館と思われる。ただし、発掘の結果では従来館と推定されていた高台とは異なった地点で堀が検出され、また、北側にも浅い溝が数本検出されているので、形態についてはさらに検討が必要である。出土遺物は13～15世紀?のものがある。

### 栗田城<sup>(註3)</sup>

館中心部と周囲を含めて3次にわたる調査が実施されているが、報告書が刊行されているのは1次調査の中心屋敷地部分のみである。この栗田城跡は非常に大量の陶磁器・カワラケが出土しており、13世紀から15世紀前半までのものがみられる。中心屋敷地が1辺が100mを越える大規模なもので、現在も大きな土塁の一部が残存している。中心屋敷地周囲の様相は不明瞭で、特に堀の外にも土塁状の遺構が知られるが、その位置づけは問題として残される。この土塁状遺構が館に関連した施設とすると館の形態はA 2 a型とみられるし、この土塁状遺構が後世の所産で関連しないものであれば、C 1 b型となろう。この点を含め2・3次の調査報告書の刊行をまって再検討したい。この館の存続時期については詳細は不明であるが、陶磁器の出土量は他の遺跡を圧倒する量がありながらも、内耳鍋は極端に少なく、館廃絶時期が15世紀前半の早い段階である可能性が考えられる。この年代を下限とすると他の館よりも廃絶時期が早いことになり、この点ではやや特異に思われる。さらに、遺構の上でも規模の大きさもさることながら、北信の館跡では珍しく多数の竪穴建物が重複して検出されている。このような様相をみると栗田城跡はほかの館跡とはやや異質な存在にも思われる。

### 長者清水遺跡<sup>(註4)</sup>

長野市域から離れた飯山市に所在する館であるが、良好な調査例なのでここで取り上げる。中心屋敷は1辺約50m四方で、外堀の存在は確認されていないが、外側にも掘立柱建物が散在的に検出されており、「回」字型に類する可能性がある。出土遺物は少ないがほぼ15世紀で消滅するようである。なお、この館では内耳鍋の出土が非常に少ないが、これはこの遺跡に限らず、飯山地方で認められる様相と思われる。むしろ新潟県に近い様相なのだろうか。

### 大倉崎館<sup>(註5)</sup>

この館は中心屋敷が50m程度と推定されるが、半分は千曲川で侵食されている可能性がある。この館はバイパス関連の工事に伴い調査されたが、連続する上野遺跡で時期不明の溝が検出されているが、これは外堀とは思わず、また、バイパス用地内では外堀が検出されていない点からはA 1 c型と思われる。出土遺物は輸入磁器を中心に数量が多い。時期はほぼ15世紀前半と思われる。なお、この館は中心屋敷内の中央にも堀があって2分される特異な形態となっている。

### 高梨館<sup>(註6)</sup>

有力国人の高梨氏の館である。この館については館周囲に城下町復元に関する考察もあるが、現時点の発掘調査は中心の屋敷地に限定されており、周囲の様相は不明である。中心屋敷は1辺100mを越える長方形を呈し、その年代はかなり幅をもって検討されているが、ほぼ15～16世紀と思われる。また、内耳鍋も



飯山同様に非常に少ないが、これは地域性によるものだろうか。この高梨氏館は規模からA1b類かC1b類と思われるが、館周囲は発掘調査されていないので詳細な様相は不明である。上記分類には該当しない別形態の可能性もある。ここでは参考に挙げておく。

#### 於下遺跡<sup>(註7)</sup>

詳細は報告書の刊行をまって検討したいが、ほぼ15世紀後半か16世紀の間で捉えられるようである。この館に隣接して於下館が知られるが、この館との関係は不明である。堀の方向がずれているため、別の契機に作られた可能性がある。ここではA1aタイプと捉えておくことにしたい。

#### 駒沢城<sup>(註8)</sup>

(助)長野県埋蔵文化財センターと長野市教育委員会による近接した3地区が調査されている。すべて報告書は未完ながらほぼ16世紀の所産である可能性がある。各調査地点ではそれぞれ堀が検出され、駒沢城は小規模な屋敷の集合した形態である可能性が高い。その形態は特異なもので、ここではB1aタイプとしておくことにしたい。

### C 各分類の消長関係とその関係

未報告資料も多く、詳細な検討を加えられないが、上記の例を比較してみると北信地域のいわゆる館とされる遺跡のほとんどは14世紀後半から15世紀にかけて出現したもので、特に中心屋敷規模が50mのほとんどがこの時期の所産とみられる。しかも、先に挙げた中心屋敷50mと100mの「口」型の集合や単独型、回字型など多様な形態が共存していた可能性が高い。ところが、16世紀(15世紀後半?)は中心屋敷規模が1辺100mを越える高梨氏館例と1辺30m前後の屋敷が単独・密集する駒沢城、あるいは単独で存在する於下遺跡などの30m規模の一回り小さな規模のもの両極端に分化してしまうようである。また、「口」型と思われる城の内遺跡周囲の館は内耳鍋はA類しか確認できないが、石川条里遺跡では僅かに「B類」が含まれる可能性もある。このことからすると「回」字型のほうが、若干存続時期が長い可能性もある。

上記の分類に挙げた例すべてが館と断定できるものではなく、臨時に構築されたものや館以外の所産もあろう。これについては今後、さらに詳細な検討が必要であろうと思われるが、これらが日常生活が営まれた屋敷地としてみれば、以下のように考えられよう。まず、中心屋敷地の規模がそこに住む人間の力の優劣を表現するとみれば、100・50・30m規模はそのまま階層性を表現すると見られる。また、単独で存在する場合は独立性が強く、規模の異なる屋敷が集合する場合は中心の規模の大きな屋敷地を中心に、緩やかな独立性をもちつつも何らかの関連をもった一団として存在したグループと考えられよう。また、密集する場合はきわめて規制力の強い集団として存在したものであると見られる。「回」字型の場合では石川条里遺跡でみられたように、外堀の区画範囲が建物跡が構築されない部分も含む土地区画として存在し、そのなかに中心屋敷地の主人に直接関連した者と思われる居住者がいたとみられる。外堀の区画が一つの家宅を表現するとみられるのかも知れない。

このようにみえてくると、上記の分類は居住者の階層性、集団のあり方、屋敷地のあり方などが表現されているとも考えられる。このなかで、最後に「口」型と「回」字型の違いの問題について触れておこう。両者の違いは外堀の有無と、外堀区画内に館主人と関連した下層居住者を含むか否かの差にあるとみられる。「回」字型の場合、外堀の機能は防御施設としての役割以外に、今回の調査からは外堀区画範囲が一定の面積の占有範囲を意識し、内部に建物のない空間も含むとみられることから土地区画施設としての性格も合わせ持つと思われた。この推測が許されるならば、「口」型は中心屋敷以外には防御施設としての性格を合わせもつ土地区画施設が存在しないことになり、基本的に土地の占有の仕方が異なっていることが推測される。次にこの2種のあり方が出現した背景であるが、ここでは断定的なことは述べられないが、解釈としては以下のように推測してみた。

まず、日常的な居住が行なわれたとすれば、15世紀頃までの「ロ」型では100m規模で単独で存在するものと、集合するタイプ以外は、類例が少なく分類の妥当性に問題を残している。そのため、「ロ」型と認められる場合は基本的に100m規模の屋敷が中核となっている可能性が高い。そう考えると、「回」字型の100m規模のものは分類に迷った栗田城跡以外では見られないことも関係があるとも見られる。つまり、15世紀までの「ロ」型と「回」字型の館は堀の配置の仕方の違いばかりでなく、集団で存在する場合と単独で存在する場合の違いでもあり、また、館居住者の階層の違いでもある可能性がある。例えば、「ロ」型は100m規模の屋敷を中核として下位の「ロ」型居住者を含めて一団として存在するケースがあったと考えられ、それに対して「回」字型はほぼ独立性のつよい中規模クラスの居住者であったとみられる。二つ目の解釈としては「ロ」型が一般的な居住のための屋敷地でない可能性である。これは想像に過ぎないが、陣城など臨時に使用される形態、もしくは寺などの別の施設などの違いである可能性もある。三つ目の解釈は立地環境と居住者の性格によると考えるものである。つまり、「回」字型は耕作地と錯綜する部分に立地するため、占地範囲を明示する必要があったと考えるものである。これらの解釈の可能性については、今後検証が必要であるが、堀を巡らせる屋敷地の形態差には屋敷の居住者の性格や占地上の環境による理由が反映されている可能性は多いにあると思われた。

#### ウ まとめと残された課題

上記の検討では断定的なことはいえず、また、重複する部分も多いが、本館の周辺遺跡との比較のなかでの位置について解釈の可能性を整理しておきたい。

#### A 石川条里遺跡内の館出現の歴史的背景

長野市周辺では多数の館推定地があって、これらの推定地すべてが館とは断定できないが、現時点では(14世紀後半?)~15世紀にかけて出現したものがほとんどであると推測できる。しかも多数を占めるものが中心屋敷の規模が50m四方前後のものであるようだ。ところが、15世紀後半ごろには逆に50m規模のものが消滅していき、それ以後は100m規模のものとは30m前後のものに分化してしまうようである。本遺跡の館はこの14世紀後半?から15世紀にかけて多出する50m規模の屋敷の一つであるとできる。14世紀後半?から15世紀前半にかけて多くの堀を巡らせた屋敷が出現した背景に関しては、調査のなかでは解答を見つけれなかったが、本遺跡周辺の歴史的環境からみると旧来の荘園にさまざまな支配が及んで土地所有が複雑化し、社会の不安定さを反映したのものとも思われる。

#### B 館形態からみた本館の位置

次に本館の存続時期の多様な形態の館の共存する理由と本館の形態の位置を考えてみたい。先に多様な形態が存在する理由は館居住者の階層、集団のあり方、占地や立地のあり方によると推測した。この様相を考える上で「御符礼之古書」とよばれる史料<sup>(註9)</sup>は参考となろう。この古文書は諏訪大社の祭礼費用を県下の武士が持ち回りで負担した記録で、祭礼費用を負担した地名と武士名が年次をおって記録されているが、このなかでは武士の記載のされ方には様々な形態がみられる。例えば、個人の武士名のみで書かれるものもあれば、誰かの代官と記載される武士、あるいは個人の武士と複数の代官が併記されるものなどがみられる。この古文書の信憑性の問題には筆者は検討を加えられないため問題もあるが、当時、多様な武士の存在形態があったことは推測され、それが館の形態にも反映されていたとすれば、館の形態差について一定の解釈を加えることができるのかもしれない。ちなみに出土遺物と古文書記録の年代にずれがみられるが、A2a型のみられる更埴市屋代地域では屋代氏+複数代官と記載されている点は興味深い。

上記のような古文書とは直接対比することはできないが、屋敷地がこのような武士の存在形態も表現されているとすれば、本遺跡のような「回」字型の屋敷地に居住した者は100m規模の屋敷地を占地する武士より下位の武士で、しかも独立性が強いとみられる。そして、屋敷地占地の基盤として耕作地との関連が

強く、外堀には一定の土地区画を現出させる目的と、その内部には館に関連する居住者を複数含む2つの機能があったと推測される。特に後者は、2重の同心円状の堀配置からも館内は中心屋敷居住者の支配力が強いとみられるが、武士の一団としての組織としては「口」型の集合型よりも小規模となる。こうしてみると、「回」字型の屋敷地に居住するものは従来の荘園へ食い込んで来る、あるいは成長してくる中規模クラスの武士であったとも見られるのではないだろうか。そして、地域支配の方法は耕作地を媒介としていた可能性もあろう。詳細は今後の検討課題としておきたい。

### C 本館の廃絶

本館の廃絶年代は長野市周辺の館とほぼ類似した年代である。したがって、15世紀後半にはこの地域全域を含む社会変化があったことは推定される。北信では16世紀に存在した可能性のある堀を巡らせる屋敷地の規模は高梨氏館のように100m規模のものか、50mを下回る2者しか確認できず、中間の50m規模のものがあまり見られない様相が知られる。この背景としては『御符礼之古書』でもこの段階前後でかなり武士の交代が激しく、それまでいた武士が変わって、異なる名前の武士が登場する場所も多い。このことからすれば、地域の動乱のなかで50m規模の屋敷地の居住者が欠落していき、地域の再編成が行なわれてくると見られる。そして、その支配の方法も人的なつながりを媒介したものに變化した可能性がある。しかし、一方でこの地域の問題として16世紀の館が非常に不明瞭な点が挙げられ、現時点で確認できるものは駒沢城・於下遺跡のような形態のみで、100mの館や根小屋とされる形態も不明瞭である。塩崎地区でも文献の上では塩崎氏が登場してくるが、この塩崎氏の屋敷地がいったいどこにあったのかは明らかでない。また、隣接した屋代氏も同様で、大きな問題となっている<sup>(註10)</sup>。ところが、県下各地の様相をみると中・南信では確実に当該期の堀を巡らせた屋敷地が存在するとみられ、北信でも高梨氏館は確実にこの時期の所産と捉えられよう。したがって、大規模な館が不明瞭な点は15世紀後半以後のこの地域の何らかの特性によるものだろうと推測できる。その様相については十分検討できなかったが、単純に地域統合の進むなかで突出した規模の屋敷に住む武士に統合されてくる様相とはみられないのかもしれない。むしろ、支配方法の變化や集落の再編成なども含めて検討してみる必要があると思われる。この点は今後の課題としたい。

以上、残された課題も多いが、今後も増加するであろう中世の館調査のなかでこれらの課題が生かされると共に、本館の位置づけや構造に関して再検討が行なわれることを願うものである。

### 註

- 1 更埴市教育委員会1988『城ノ内遺跡II 大境遺跡III』更埴市遺跡調査会、更埴市教育委員会1990『平成元年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書』、更埴市教育委員会1994『大境遺跡IV・V』、小島道裕1995「第四節 城下町調査」『屋代城跡範囲確認調査報告』更埴市教育委員会
- 2 更埴市教育委員会1989『生仁遺跡III』、小島道裕1995「第四節 城下町調査」『屋代城跡範囲確認調査報告』更埴市教育委員会
- 3 長野市教育委員会1991『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡』
- 4 飯山市教育委員会1985『長者清水・水の沢遺跡』
- 5 飯山市教育委員会1990『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告II 上野遺跡・大倉崎遺跡』、飯山市教育委員会1996『上野遺跡VIII・柳町遺跡』
- 6 中野市教育委員会1993『高梨氏館跡』
- 7 〔勤〕長野県埋蔵文化財センター1994『長野県埋蔵文化財センター年報11』
- 8 註14に同じ。
- 9 信濃史料刊行会1957『信濃史料』8・9巻
- 10 小島道裕1995「第四節 城下町調査」『屋代城跡範囲確認調査報告』1995 更埴市教育委員会

## (2) 中世在地産焼物の変遷

調査では多量の中世在地産土器が得られた。これらの土器は流通範囲の狭く地域性が強いと考えられるが、一方で広域流通品との関係や、広域内の地域性あるいは使用方法についての大枠も明らかにされつつある。しかし、県内では詳細な型式変遷は明らかにされていないところもあり、本遺跡の調査結果を中心に在地土器の変遷についてまとめてみる。

### ア 在地土器の出土傾向

在地産土器は出土量からも、その消費量は膨大なものとみられる。器種はすり鉢や香炉のように他焼物種の器種と重複するものもあるが、内耳鍋やカワラケのように特定器種しかみられないものもある。この在地産土器は低温焼成で破損しやすいかわりに低価格で入手しやすい土器と思われ、流通の発達した中世において広域流通品を補完する役割や、消耗品としての使用方法などがあったと想像される。例えば、遺跡出土の土器破片を8分割した同心円のチャートに当てて、どのくらい残存するかを遺存度として計測すると<sup>(註1)</sup>、カワラケがやや高く内耳は非常に低い傾向がある。これは両器種の器自体の大きさの違いによる破片の発生のかたに起因する可能性もあるが、すでに指摘されるようにカワラケは一過性の消耗品として廃棄され、内耳鍋は破損して使用不能になるまで使われる器ながら出土量の多さからも消費率が高い器であった性格を反映したと考えられる。また、内耳鍋の場合では逆にいえば、完形で出土する場合は何らかの特殊な使用状況が想定されると思われる。

このように消費量も多く、消耗品的な使用も想定できる在地産土器ではあるが、今回の調査のなかで直接的に廃棄された場所を特定できた遺構は少ない。内耳鍋を例にとると、大型破片・略完形で出土した遺構はS K1001・(1004)・2305・2391・2624、堀跡の一部にしかない。また、カワラケはS K2391に比較的まとまる以外は断片的である。したがって、消費率が高い器ながら、廃棄のされかたは遺構跡の凹地などに廃棄される例は少なく、別の場所に廃棄していたとが想定される。また、こうした様相によって遺構内出土遺物も一括性を認めることは難しく、在地土器を分類して個別の遺構での伴出陶磁器の年代から変化を捉える方法はあまり有効ではないと思われる。しかし、一方では切りあいや土層の上下関係によって時間的な差異が見られる遺構間では出土在地産土器の種類の組み合わせが異なる傾向もみられた。そこで、ここでは出土量の多い遺構や略完形・完形土器を出土したいくつかの遺構を取り上げ、在地産土器の組み合わせの変化を材料として在地産土器の変遷について推測してみることにした。

### イ 在地産土器の組み合わせの種類

#### A 在地土器の組み合わせの種類

在地土器を少量でも出土した遺構での在地産土器種類の組み合わせは以下のとおりである。なお、( )内は合わせて出土している伴出陶磁器であり、( )がないものは在地産土器のみである。また、明らかに中世以外の遺構と思われるものは除外した。

0：在地産土器なし－陶磁器のみ

S K1002 (青磁碗片)・1011 (古瀬戸平碗片)・1017 (珠洲すり鉢片)・2247 (玉縁青磁 碗片)・2289 (玉縁青磁碗片・龍泉窯系蓮弁文青磁碗片)・2319 (白磁碗V類片)・2321 (常滑片)・2400 (白磁碗IV・V類片)・2642 (珠洲すり鉢片)

S K2624で近世陶磁器片の混入があるが、それ以外は15世紀前半以前の所産の陶磁器である。しかし、出土数量は各1点で遺存度も低い。

A：カワラケのみ

S K1014 (古瀬戸平碗)・2036・2100・2254 (古瀬戸花瓶)・2283 (古瀬戸平碗片・花瓶・天目茶碗)・2423 (珠洲壺片)・2443・2629・2640・2866・2877・S D3006B (龍泉窯系画花文青磁碗・東海産こね鉢・

山茶碗?)

各土坑より出土したカワラケ数は1～2点で、遺存度も低い。カワラケ自体のバリエーションも多く、1時期の所産と特定できる遺構はほとんどない。しかし、SD3006のみは土層や切りあいの関係から他の在地産土器の組み合わせの遺構と時期差をもつと捉えられる。

B：内耳鍋のみ

SK1004(青花・天目茶碗・青磁碗)・1038・1039・1088(瓦質内耳)・2024・2038・2040・2041・2182・2193・2249(玉縁青磁碗・常滑片)・2305(古瀬戸天目)・2316・2325・2329・2433・2438・2450・2624・2635・2639・2649

ほとんどの遺構では内耳鍋は1～3点の小片出土であるが、SK1004-9点、SK2193-7点、SK2249-10点、SK2624-13点、SK2639-12点と出土破片数の多い遺構がある。また、SK1004では口縁部5/8破片が2点、SK2305が7/8破片1点、2624で4/8破片1点と比較的遺存度の高い遺構もあり、これらの遺構は内耳鍋が直接廃棄された可能性がある。

C：在地産すり鉢のみ

SK1044・1084(珠洲すり鉢?・龍泉窯系蓮弁文青磁碗)

両者ともに各1点の出土であり、SK1044は瓦質すり鉢、SK1084は須恵質のすり鉢である。類例が少なく、普遍的なものか疑問も残る。

D：カワラケ・在地産須恵質すり鉢の組み合わせ

SD3006A(常滑)、SD1010～1012(古瀬戸平碗)

この組み合わせがみられる遺構は溝跡2本のみであり、それぞれ出土点数は多くない。しかし、両者の溝とも切りあいや土層の上下関係から異なる在地産土器の組み合わせの遺構と時期差をもつ。

E：内耳鍋・在地産すり鉢の組み合わせ

SK2628

1例のみで、内耳鍋は3点、土師質すり鉢1点があるが、いずれも遺存度が低い。

F：カワラケ・内耳の組み合わせ

SK1001・1015・1016(珠洲すり鉢?)・2012・2029・2037・2180・2200・2359・2391・2427(白磁IV・V類)・2631・2634(白磁IV・V類)・微高地西側低地中世I面

内耳鍋1～4点、カワラケ1～3点で、遺存度の低いものしかない遺構が多い。そのなかでSK1001・1015では内耳鍋出土点数は多い。SK1001では内耳鍋10点・カワラケ2点が出土し、内耳鍋は口縁部5/8破片1点が含まれる。ただし、カワラケの遺存度は1/8と低いのでカワラケが内耳鍋に伴う可能性は低い。SK1015は内耳鍋7点、カワラケ1点で両者ともに遺存度1/8と低く、あまり良好な資料とはいえない。また、SK2391は内耳鍋は1点ながら4/8破片で、カワラケは完形・略完形や大型破片7点が含まれるので、比較的良好な資料と認められる。

G：カワラケ・内耳鍋・在地産すり鉢の組み合わせ

SK1012(龍泉窯系画花文碗)、SD1008(多種)、SD2001(多種)、SD2007(古瀬戸平碗)

SK1012は内耳鍋片4点、カワラケ2点、須恵質すり鉢1点あるが、いずれも1/8以下の破片である。館堀はすべてこの様相を示すが、SD2001・1008の2本では在地産土器にバリエーションが認められ、長期にわたる遺物が含まれる可能性もある。SD2007はカワラケの形態が比較的そろっており、しかも内耳鍋の出土点数が少ない特徴が見られ、SD1008・2001よりも存続時期が短い可能性をもっている。

B 在地土器組み合わせの変化

上記で確認された在地産土器の組み合わせ種類はすべてが確実に特定時期の所産とは考えられない。少

量の小破片しか出土していないために、混入の可能性が高いものが多いことや、多種多様の土器を大量に含む場合も形態的にバリエーションが多すぎて、長期にわたる遺物が含まれる可能性が考えられる遺構がある。さらに、良好な出土状況を示す遺構でも特定の器種を選択的に使用して廃棄された所産によるもので、時代性を反映していない可能性もある。なかでもCとEに挙げた例は少なすぎて妥当性はみとめ難い。また、複数種類の在産土器を出土したGも長期にわたる遺物を含んでいる可能性も残される。

このように混入、偶然性によって左右されている可能性も少なからず想定されるが、一方では出土在産土器の組み合わせを異にする遺構間で時間差が知られる資料として次のようなケースがある。(なお、以下には上記のA～Gの組み合わせの種類を「組み合わせA～G」と表現する。)

- ・水田域SD3006はSD3006B→SD3006Aに変遷し、上層は㊸区微高地東側低地中世I面となる4層で覆われる。SD3006Bは「組み合わせA」、次のSD3006Aは「組み合わせD」、中世I面は「組み合わせF」である。従って、組み合わせはA→B→Fの時間差が窺える。

- ・SD1010～1012は古墳時代SD1016埋没後の窪地跡に構築された溝で、館外堀SD1008に切られる。SD1010～1012から出土した遺物には年代幅があり、在産土器は1時期の所産とは見られないが、少なくとも内耳鍋を含まない「組み合わせD」の様相とみられる。SD1008は「組み合わせG」であるので、少なくともSD1010～1012のように内耳鍋の出現以前に在産すり鉢が組み合わさる段階があると確認できる。また、「組み合わせD」で確認される在産すり鉢は須恵器質のみであるのに対し、「組み合わせG」では瓦質すり鉢が含まれる点は注意される。

- ・水田域微高地西側低地中世I面は内耳鍋とカワラケからなる「組み合わせF」であるが、これより下面にあたる中世II面では内耳鍋の出土が見られない。ただし、中世II面では遺物量自体が少なく、在産土器の組み合わせが判然としないが、少なくとも内耳鍋が含まれる「組み合わせF」が内耳鍋を含まない組み合わせに後出する可能性がある。

上記からSD3006Bの「組み合わせA」→SD3006A・SD1010～1012の「組み合わせD」→SD1008・2007・2001の「組み合わせG」への変化が推測される。さらに、「組み合わせG」では瓦質すり鉢(土師質すり鉢)が加わってくる可能性があり、内耳鍋の瓦質→土師質への変化が想定されることから「組み合わせF」は「組み合わせG」に後出すると想定できる。この推測に基づいて最初の在産土器の組み合わせの各ケースを再度見直すと、カワラケは全段階を通して存在しうる可能性をもっているため、内耳鍋のみ・在産すり鉢、あるいは内耳鍋とすり鉢の組み合わせの出土状況は時代性をすべて反映したものではなく、混入か特定器種を選択的な使用と廃棄状態を示す場合が考えられる。従って、「組み合わせB」は組み合わせGかF、「組み合わせC」は組み合わせBかG、「組み合わせE」は組み合わせGか混入によるFに帰属することになる。以上の検討から、時期差の窺える資料と各段階での良好な資料とみられるSD3006B・A、㊸区4層、SD1010～1012、SD1008・2007・2001を主材料とし、「組み合わせG・F」の可能性のあるSK1004・2305・2624、「組み合わせF」のSK1001・2391などを取り上げて、各遺構でみられる在産土器の各分類種の出現状況を検討してみたい。

#### ウ 在産土器の分類と変化

##### A カワラケの分類

カワラケは胎土を厳密に識別することはできなかったが、肉眼観察からは胎土と形態から概略以下のような種類がみられる。なお、ここでの分類はあくまでも本遺跡での仮分類である。

A：明褐色精製胎土—砂粒を含むものもあるが、非常に精製された胎土のもので1種のみである。出土量も少なく全体の形態が知られたものはない。比較的薄手で底部～体部が比較的均等に作られ、底径は比較的大きく、体部の立ち上がり内湾ぎみに急傾斜する形態のものと思われる。(例 SD1011-1、SD

3006-1)

B：黄褐色・灰褐色胎土—比較的厚手に作られるもので胎土に赤茶色の風化酸化鉄粒が含まれる特徴がある。器壁中央が灰褐色となり、還元炎焼成のようにみえるものも多い。形態から数種類に分類される。

B1：全体の形は底部からほぼ直線的に斜めに立ち上がる。内底面の立ち上がり部分が明瞭に屈曲し、全体的に厚さは一定している。内底面の見込にはヨコナデが見られる。(例 SK2100)

B2：Bグループ内でもっとも厚く粗雑なつくりのため、小片でも識別できる。厚い底部から外面はやや内湾ぎみや斜めに直線的に立ち上がる。体部下半部が厚くつくられており、内面の立ち上がり境が不明瞭である。また、口縁部直下、内底面脇に比較的強いナデが施されるために底面中央が盛り上がるようになるものや、口縁部が丸く肥厚するものがある。内底面にはヨコナデが観察されるものがある。また、口縁部の先端が細くとがるものもある。形態的に細分できる可能性もあるが、ここでは一括する。出土数は微高地域でもっとも多い。(例 SD1008-2・5・6・10・11・13~18・20、SD2007-1~10・12、SD2001-1・11~13・18・21・25・27・32・37・43など)

B3：全体的に砂を多く含みやや厚手のつくりである。口縁部は内湾する。(例 SD1008-19)

C：明褐色・赤褐色系—胎土は精製されたものと、非常に細かい砂を多く含むものがあるが厳密に区別できない破片もあったので一括した。

C1：口縁部が外反する。(例 SD1008-4・12、SD2001-8)

C2：直線的に斜めに立ち上がる。内面立ち上がり部分には明瞭な屈曲が見られない。(例 SK2391-1~7、SD2001-7)

D：灰褐色系—色調は異なるが、精製された胎土で質感は上記C類と同じである。形態的にも類似したものが確認され、C類と同種の可能性もある。

D1：口縁部が外反する。(例 SD2001-33)

D2：直線的に斜めに立ち上がる。内面立ち上がり部分は明瞭な屈曲が見られない。(例 SD2001-34)

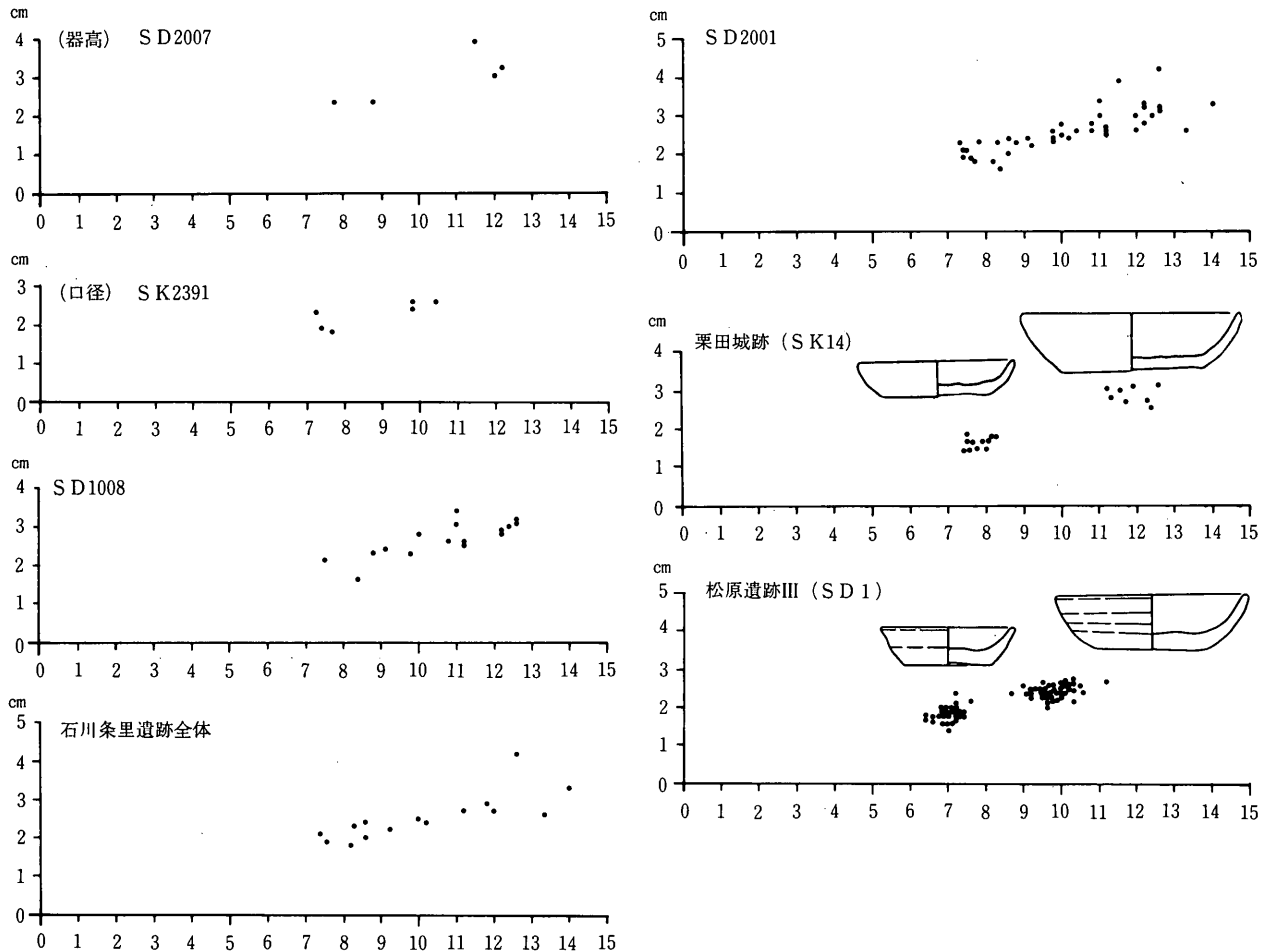
D3：内湾ぎみに立ち上がる(例 SD2001-16・17)

E：灰白色・白色系—胎土が非常に精選されたもので全体に軟質である。一目で他種と識別できる。全体的に精製で、器壁も薄く、口縁部が外反するものがある。(例 SD1008-8・9、SD2001-2・20・26・36・38・42、SX2001-2)

以上の分類ではB2類がさらに細分される可能性があり、C・D類の識別の妥当性の問題が残されたが、今回は十分な検討を加えられなかったので上記の分類は本遺跡の仮の分類として扱い、今後改めて検討される必要はあるものとしておく。なお、このカワラケは時期差によって法量に変化する様相も知られる。例として第Ⅱ図に周辺遺跡のカワラケ法量をグラフにしてみた。ここでは14世紀後半~15世紀前半の遺物を出土した栗田城跡<sup>(註2)</sup>出土のカワラケ、16世紀の遺物を出土した長野市教育委員会調査の松原遺跡<sup>(註3)</sup>のカワラケを比較すると、明らかに時代をおって小型化することが知られ、本遺跡のSK2319はその中間の様相を示している。

## B 内耳鍋の分類

内耳鍋に関しては、既に県内でいくつか分類案が提示されている。そのなかで、比較的まとまった小林秀夫氏<sup>(註4)</sup>と野村一寿氏の分類<sup>(註5)</sup>をみておこう。小林氏は形態と法量に着目して分類し、野村氏は形態と内面の口縁部のナデ痕の数で分類している。両氏の分類はそれぞれ観点が異なるため単純な比較はできないが、内耳鍋の基本的な変化は鉄鍋の模倣から出発し、手抜きによって形が崩れる方向としている点はほぼ共通した見解だろう。そのなかで野村氏は口縁部に施されるナデの調整回数が手抜きで減少する傾向と捉えて、分類の基準としている。しかし、野村氏がB II類としたものは氏も述べるように単純な出土状



第307図 カワラケの法量グラフ

態を示す遺構がなく、他の分類種のものに伴出する例もあるので、ナデの回数による分類は厳密に時間差を捉えられない可能性も残る。例えば、近年長野市教育委員会で調査された松原遺跡<sup>(註6)</sup>からは16世紀の大窯丸皿を伴って鉄鍋の形態に近い外反口縁で丸底の内耳が多量に出土している。同じ遺構内からは直立して内面にナデ痕を顕著に残す口縁部の内耳鍋も多くみられ、地域ごとに形態が異なることや、同地域内での同時存在する形態のバリエーションがある様相も判明してきており、現時点では16世紀代の内耳鍋分類は再検討される必要がでてきていると思われる。しかし、本遺跡でみられる形態は小林氏・野村氏の内耳鍋の分類のなかで理解されるものである。従って、ここでは両氏の見解を参考に大雑把な分類としておくことにしたい。

A：口縁部が外反するもの

基本的に鉄鍋に近い形態のものとされる。口縁部は比較的丁寧にナデ調整されたものから口縁内面に凹凸のあるナデ痕を残す崩れた形態までを含んだ。底部は平底である。土師質の焼成のものが知られるが、口縁部破片がないため詳細不明なもの、瓦質内耳鍋はこの類に含まれる可能性がある。また、瓦質内耳鍋では丸底が確認され、このA類は底面が丸底・平底の形態によって細分される可能性も残されるが、ここでは瓦質内耳の口縁部形態が不明なこともあり、細分は行なわなかった。遺跡内ではもっとも出土量が多い。(例 S K 2305-2、S K 2438-1、S K 2450-1、S K 2635-1、S D 1008-33~35・37・38・40~46・48、S D 2001-6・62~65・67・68・70~74・77~83、S D 2007-16など、瓦質内耳 S K 1088-1、S D 1016-18)

B：口縁部が直立し、口縁部内面にナデ痕を顕著に残すもの

口縁部が直立ぎみに立ち上がり、口縁部の内面に顕著なナデ痕が残される特徴がある。整形方法の簡略



化が重視されたために、調整痕を丁寧に消す作業が行なわれておらず、しかも鉄鍋の模倣から外れた形態とみられる。(例 SK1001-2、SK1004-1・2・3、SK1015-3・4、SK2391-8、SK2624-1~4、SK2649-1、SD1008-36・39・47、SD2001-66・69・84? など)

C：口縁部が直立・内湾し、内面のナデ痕が顕著でないもの。

破片数も少なく、分類の妥当性に不安も残る。口縁部の形態は直立ぎみに内湾するものや直立するもので、むしろ外反しない形態でナデ痕を顕著に残さないものとして表現したほうがよいのかもしれない。B類から新たに生じた形態、もしくはバリエーションの一つと思われるが、分類の妥当性を含めて詳細は保留しておく。(例 SK1001-1、SD2001-75~76、SX2001-10など)

#### C すり鉢の分類

近年注目されるようになった焼物で、概略の年代については鋤柄俊夫氏<sup>(註7)</sup>や浅野晴樹氏<sup>(註8)</sup>によって検討されている。今回の調査のなかでは須恵質、瓦質、土師質の3者が確認され、相対的に時間的に変化する傾向は認められるが、単一産地での焼成変化か、生産地の違いを伴うか、一部は重複して存在するかは不明である。これらの在地産すり鉢については口縁部の形態の類似と内面に卸目を入れる点から、珠洲のすり鉢の模倣として発生したことは間違いない。ただし、調整方法は珠洲とは明らかに異なり、内耳鍋に類似するため、直接的な技術移入ではないと考えられる。ここでは識別が簡便な口縁部の形態に着目して分類し、特徴的な体部破片は一括する。なお、口縁部などの形態を珠洲の編年と対比してみたが、珠洲自体一定の傾向で把握されるものの、多様な口縁部形態が共存する場合もあるのであくまでも目安として扱っている。

A：口縁部内面が突出して三角に近いもの。

本遺跡内で該当するものはないが、近年報告された地之目一丁田遺跡<sup>(註9)</sup>で出土しており、参考として分類に加えた。焼成は軟質で瓦質に近い。珠洲の編年と比較するとⅢ期末かⅣ期初頭に比定されるだろうか。なお、地之目一丁田遺跡では手づくねカワラケが伴出している。

B：口縁部が方形で外傾するもの。

本遺跡では須恵質のものがある。内面の卸目はやや粗く直線的に施される。口縁部が丸味を帯びるものもここへ含めた。珠洲の編年ではⅣ期前半に比定されるだろうか<sup>(註10)</sup>。(例 SD1012-2、SD1008-32、SD1016-13など)

C：口縁部が方形で水平となるもの。

土師質・瓦質のものがある。ただし土師質のものは生焼けの須恵器に近い感じであり、これは瓦質と表現したほうがよいのかも知れない。口縁部が水平となるため体部上部がやや屈曲する感じに立ち上がる。珠洲編年との対比ではⅣ期も未だだろうか。卸目は粗く直線的である。(例 SK1044-1 SD1008-31、SD2001-45・59・60、SD2007-14・15)

D：口縁部が水平だが、外側端部の引き出しが強く、口縁部外端部が鋭角になるもの

瓦質(土師質?)のものが知られる。珠洲編年との対比ではⅣ期末~Ⅴ期初頭の所産だろうか。卸目は粗く直線的に施される。(例 SD1008-30)

E：口縁部の形態は不明であるが、卸目を密に施したもの

須恵質のものが1点(例 SD3006A)と土師質のものが数点(例 微高地西側低地②-2区近世面)ある。卸目の施し方は珠洲の影響と見られ、ほぼ珠洲Ⅳ~Ⅴ期の所産と思われる。

これ以外に在地産土器として釜・火鉢・香炉があるが数少なく分類はできないので省略した。出土状況からは在地産土器の「組み合わせG」内で認められる。

エ 各在地産土器の組み合わせ内の各分類のあり方

種類別の分類を踏まえ、在地土器の組み合わせの変遷の様相を探りたい。

「A：カワラケのみ」

良好な資料に恵まれていないが、SD3006B関連の溝の出土遺物が該当する。カワラケはA類のみがある。出土量が非常に少ない。

「D：カワラケと在地産すり鉢」

これも良好な資料に恵まれていないが、SD3006AとSD1010～1012を取り上げると、SD3006AでカワラケはA類？・須恵質すり鉢E類がある。SD1010～1012ではカワラケA？・B2類・須恵質すり鉢B類がある。

「G：カワラケと在地産、内耳鍋」

館堀のSD1008・2001・2007がある。まとまった量の出土が見られるが、年代幅をもつ可能性があるため、単純な1時期の所産とすることはできない。SD1008では須恵質すり鉢のB類、瓦質・土師質すり鉢C・D類、カワラケはB～E類各種がある。内耳鍋はA類が多く、わずかにB類が含まれる。SD2001はすり鉢がC類、カワラケはB～E類があるが、他の遺構よりC・D類がやや多い。内耳鍋はほぼA類を主体としてB・C類が含まれる。これに対してSD2007はカワラケがB2類と僅かなC類があり、すり鉢は土師質のC類、内耳鍋はわずかA類が1点ある。

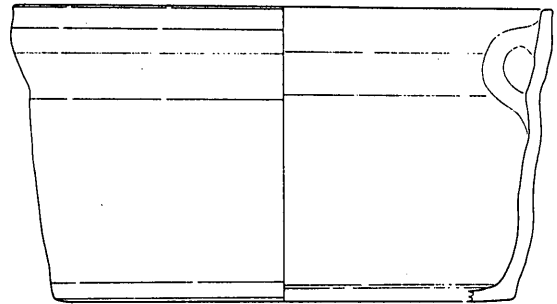
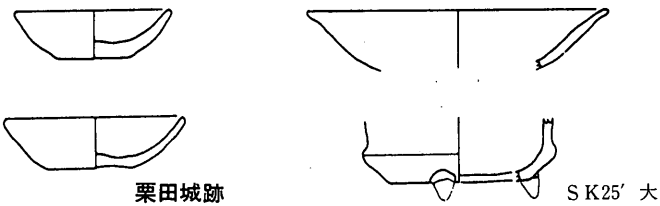
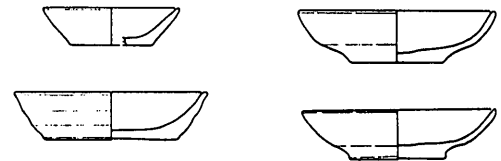
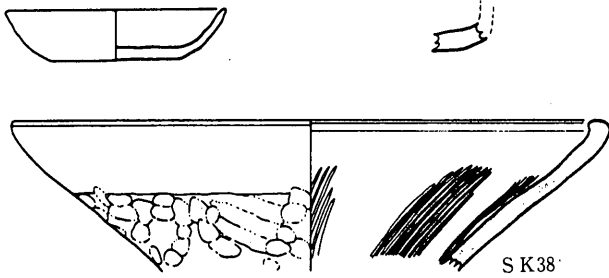
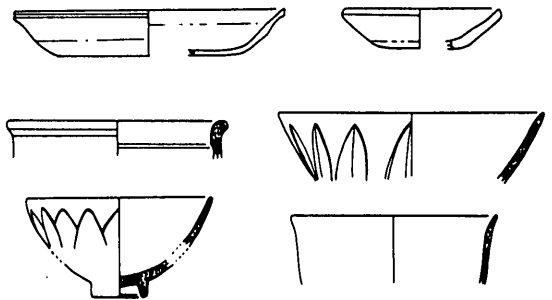
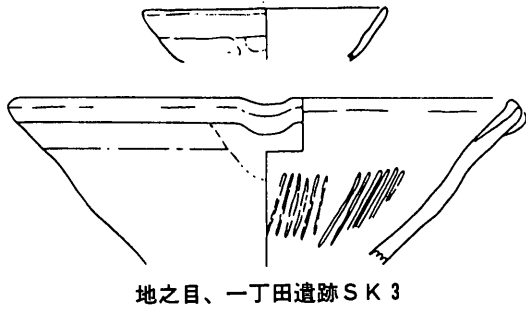
「F：カワラケと内耳鍋」

微高地西側低地中世I面、SK2319を取り上げる。中世I面ではわずかなB類破片とC・D・E類カワラケ、内耳鍋は小片で子細不明であるがA・B類がある。SK2319は内耳鍋B類でカワラケはC2類で占められる。

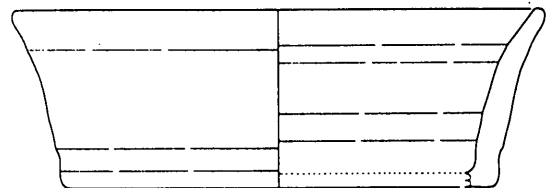
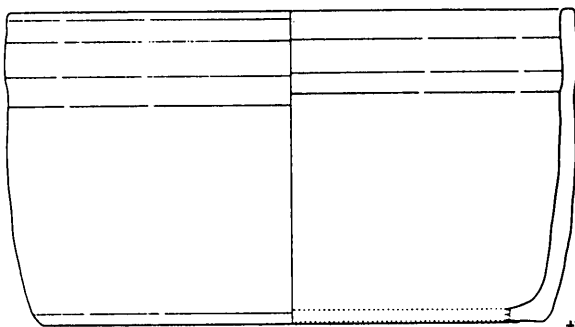
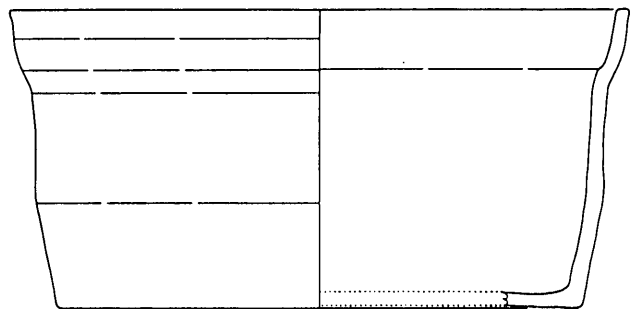
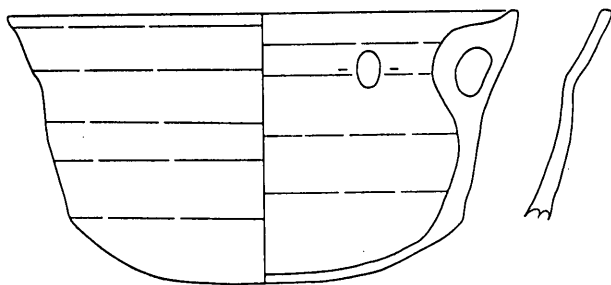
断片的な資料ながら、まとめてみると次のような様相が窺える。まず、カワラケであるが、B類はSD2007でB2類が主体的であることから、B2類が中心となる段階があったと思われる。さらに、SD2007では内耳鍋A類、SD1008やSD2001では後出するとされるB類も含まれることから、SD1008・2001で出土したカワラケC・D・E類はそれよりも後出すると想定される。つまり、A→(B1?)B2→(B2・B3?)C・D・E類への変化が想定される。このなかで、B類は時期変化によって作りが粗雑化するとすればB1→B2(→B3)への変化となろう。また、C・D・E類は明らかにB類とは胎土が異なり、形態の上でもC1・D1・E1の外反する形態はB類とは断絶がある。C2・D2・D3・E2類は位置付けが不明であるが、C1・D1・E1と共存する可能性がある。なお、E類はD類に近い存在と見られるが、その分類の妥当性については保留せざるうえなかった。

内耳鍋は明らかにA類の出土量が多く、B・C類は少ない。SD2007では内耳鍋はA類しかなく、カワラケはB2類でほぼ占められるため、両者は近似時期の所産と思われる。そして、SD1008・2001ではSD2007にみられないカワラケC・D・E類と内耳鍋B・C類があるが、SD2007を切るSK2639では内耳鍋B・C類があるため、B・C類はA類より後出するとみられる。この変化は従来指摘される通りである。ただし、典型的なB類の大型破片は微高地SKに多く、館堀内ではあまり顕著でない。そのためSD1008・2001・2007と内耳鍋B・C類が主体となるSKは時期差をもつ可能性として捉えた。なお、C類については分類の妥当性にも問題を残し、詳細は保留せざるう得なかったが、B類と同時存在する可能性が高い。

すり鉢は「組み合わせD」では須恵質すり鉢B・E類、「組み合わせG」で須恵質すり鉢B、瓦質・土師質すり鉢C・Dがみられる。したがって、B類からD類への変化と須恵質すり鉢から瓦質すり鉢・土師質すり鉢への相対的な変化が想定される。ただし、繰り返し述べるようにE類の位置については問題がある。このE類では「組み合わせD」であるSD3006Aから出土した須恵質のすり鉢は内面に卸目を密に入れるもので、珠洲編年との比較からはB・C類より後出する可能性もある。また、「組あわせG」では一切出土



石川糸里遺跡北野III区SD1



第308図 周辺遺跡出土の中世在地産土器（各報告書より転載）

しておらず、一方で微高地西側低地の近世面に混在して土師質のE類すり鉢が出土している。したがって、「組み合わせD」→「組み合わせG」への変化や、須恵質すり鉢から瓦質・土師質すり鉢へとの変化とした点とは明らかに矛盾を起こす。この解釈の可能性としてはS D3006Aが本来は「組み合わせG」段階の所産で、須恵質・瓦質すり鉢は同時に存在するか、珠洲IV 2期以降において卸目を密に施す16帯以上のものも少量ながら存在するとされる<sup>(註11)</sup>点を考えれば、在地産すり鉢は系統的に変化するのではなく、その都度、主流・非主流を問わず珠洲の多様なモデルを模倣しているためこのような差を生じていると考えられる。後者の考えを取ればS D3006Aは「組み合わせD」で「組み合わせG」に先行する点とは矛盾しない。

#### オ 周辺遺跡との比較 (第308図)

ここでは調査結果から推測された様相を周辺遺跡と比較するなかで補強してみることにはしたい。

#### A 「組み合わせA」の遺跡

本遺跡ではS D3006Aしか例がなく、周辺遺跡でも類似時期と思われる中世前半の良好な遺跡はあまり知られていない。ここでは該当する可能性のある三輪遺跡を取り上げる。

#### 三輪遺跡<sup>(註12)</sup>

中世の遺構は数基しか検出されていないが、8号土坑からは非ロクロカワラケ、龍泉窯系蓮弁青磁碗、口はげ白磁碗が出土し、ほぼ13世紀後半～14世紀前半の所産と考えられる。非ロクロ以外にも数点カワラケが報告されているが、詳細は不明である。

#### B 「組み合わせD」の遺跡

いくつか該当する可能性がある遺跡があるが、遺物を実見できなかったこともあり、ここでは地之目・一丁田遺跡例のみを取り上げる。ただし、地之目・一丁田遺跡例は石川条里遺跡で知られた年代よりも先行する可能性がある。また、これに後続する「組み合わせG」との中間様相を示す遺跡は取り上げられなかった。

#### 地之目・一丁田遺跡<sup>(註13)</sup>

S K03の井戸から非ロクロカワラケと端部が上方へ引き出されたやや瓦質に近いすり鉢A類が出土している。出土遺物が少なく断定はできないが、非ロクロカワラケを含む点では上記の三輪遺跡と近似した年代とみられる。そうすると、三輪遺跡例ではすり鉢が見られない矛盾があるが、これは流通量の違い、あるいは非ロクロカワラケが混入の可能性があるためだろうか。いずれにしろ、このA類は珠洲すり鉢との比較からも本遺跡の「組み合わせD」で見られるすり鉢Bに先行する可能性は高いとみられる。また、本遺跡のすり鉢B類を出土した遺構ではロクロ整形カワラケしか出土せず、この間にカワラケの大きな変化が窺えるものと思われる。

#### C 「組み合わせG」の遺跡

長野市栗田城跡がもっとも良好な資料となるが、他は断片的である。

#### 栗田城跡<sup>(註14)</sup>

館中心屋敷地とその周辺を含む地点の数度の調査によって大量の陶磁器を含む中世焼物が出土している。在地産土器は大量のカワラケと若干の須恵質すり鉢・やや軟質の土師質すり鉢が確認できたが、内耳鍋は非常にわずかで小片しかない。遺構の切りあいが激しく、単純な一括資料の抽出は難しいが、原氏も取り上げたS K14<sup>(註13)</sup>は類似した形態のものがそろっており比較的まとまった資料とみられる。S K14出土カワラケは法量が口径11～12cmで高さ3cm前後、口径8cm前後で高さ2cm弱の大小2者がある。形態的には底・体部も薄く均質に作られ、比較的底径が大きいため体部の立ち上がり之急で口縁は内湾ぎみになる。また、内底面にはヨコナデが認められる。伴出した陶磁器には珠洲IV期でも前半に位置する可能性がある外傾方形の口縁をもつすり鉢がある。また、遺跡全体では石川条里遺跡B 2類に対比されるカワラケが多

量に出土しているが、本遺跡のC・D・E類と同じものはない。ただし、C・E類に類似する精製胎土の大量の外反口縁カワラケがあるようである。すり鉢は口縁端部が丸いB類に類するものやC類の方形口縁ながら端面がやや水平ぎみのものが出土しているが、D類すり鉢は含まれていない。内耳鍋は非常に僅かで、全体の形がわかるものはないが、丸底・平底が確認できる。これらの土器を出土した遺構は切りあいが激しいため混入も多いが、遺跡全体の陶磁器が13～15世紀前半までのものが含まれることからほぼこの年代のなかで捉えられるものと思われる。したがって、石川条里遺跡との違いは館の性格の違いもあるだろうが、若干時期差をもつ点に起因する可能性がある。

#### D 「組み合わせF」の遺跡

この様相が知られる遺跡は近年増加してきている。

#### 石川条里遺跡 (7) <sup>(註15)</sup>

水田遺跡ではあるが、平安時代の洪水砂層上面で礎石建物や土坑、溝跡が検出されている。このなかで北野Ⅲ区SD1からは比較的多数のカワラケと内耳鍋が出土している。カワラケの形態は内湾ぎみに斜めに立ち上がるものと外反する2種が存在している。報告書では黄橙色系と淡い黄色系の2種の胎土に分類しているが、両形態に見られる。なお、外反する形態は本遺跡C1類、内湾ぎみに斜めにたちがる形態はB3類もしくは、C2・D3類に近いとみられる。内耳鍋は直立ぎみでB類に近いが、口縁部内面にあまり顕著なヨコナデ痕は見られない。また、北野Ⅳ区SD3では外反するものがあまり顕著でなく、むしろ内湾ぎみに斜めに立ち上がるものが出土している。ただし、内耳は北野Ⅲ区SD1とほぼ同じである。

#### 屋代城跡 <sup>(註16)</sup>

山城なので居住遺跡とは異なる様相が予想されるが、カワラケと内耳鍋が出土している。カワラケは外反するタイプ(C1・D1・E1カ)とやや内湾ぎみに立ち上がるタイプ(B3・C2?・D3?)がある。内耳鍋はB類に近いと思われるが、石川条里遺跡(7)と類似するものと、さらに口縁部内面のナデ痕があまり顕著でないものが含まれる。また、本遺跡で詳細不明としたC類内耳鍋がある。伴出陶磁器はあまり多くはなく、しかも在地産土器と伴出しているわけではないが、15世紀後半の古瀬戸卸皿、16世紀前半の大窯天目茶碗が出土している。全体的にカワラケや内耳鍋の形態は石川条里遺跡(7)に近い。

#### 松原遺跡Ⅲ <sup>(註16)</sup>

SD1・2とされた直交する溝から大量の内耳とカワラケが検出されている。内耳鍋は丸底と平底があり、少量ながら浅いホウロク型のものがある。口縁部が直立ぎみで内面にナデ痕を顕著に残す本遺跡B類や、直立ぎみでわずかに屈曲するが内面にナデ痕をあまり残さない石川条里遺跡(7)・屋代城跡でも確認される形態がある。また、石川条里遺跡でC類としたものに近い形態のものも含まれている。丸底の内耳鍋は従来の研究では14世紀末前後の出現期にみられるとされていたが、本例から16世紀段階にも存在する可能性が知られる。丸底内耳鍋の口縁部形態も外反するA類なので、16世紀に再び鉄鍋模倣に戻る動きもあったと考えられる。ただし、16世紀の外反形態の内耳鍋はこの遺跡と、佐久地方のいくつかの城館遺跡に可能性があるものが含まれる程度で、全体的に普遍化してみれるか不明である。カワラケは法量上で口径9～10cm前後と口径7cm前後の大小2種が認められるが、大量量は器高約2～3cm前後で小法量との器高差はあまりない。内湾ぎみのものと内湾ぎみながらわずかに外反する形態があり、前者は本遺跡微高地西側低地の中世I面で出土したD3類に近いと思われる。また、底部が比較的厚く、内面の体部立ち上がり際が強くクロナデされるため、内底面中央が盛り上がるようになる形態が多い特徴がある。大窯の端反り丸皿が伴出しているので16世紀前半以後の所産であるとみられる。

上記の周辺遺跡の検討でも「組み合わせA」「組み合わせD」については現時点では内容を充分明らかにしえず、しかも本遺跡を含めた「組み合わせA」と「組み合わせD」のありかたは相互に矛盾や食い違う内

容を示すため、時期差としてもその境が不鮮明である。しかし、大きくはA→Dへの変化は概略では支持されると思われる。また、本遺跡の「組み合わせG」は類似した様相の栗田城跡と時間差をもっていると思われるから、相互の器種の比較によって概略の年代が推測できる器種もあることが知られる。さらに「組み合わせF」との関係でみると「組み合わせG」には、本来「組み合わせF」に分離されるべきものも含まれている可能性も窺え、また「組み合わせF」自体も本遺跡では断片的な様相を示していることも推測できるものと思われる。

#### カ 在産土器の変遷と年代

##### A カワラケ

##### a カワラケの変化と年代の推定

カワラケは概略でA→(B1) B2→(B3) C・D・E類の変化が推測された。ただし、A類とB類、B類とC・D・E類との間には断絶する様相があってスムーズに追えない。A・B類の間の断絶は資料数の少なさに起因するものであるが、B類とC・D・E類の間はカワラケの産地、もしくは系譜が異なることが想定されよう。また、C・D・E類は胎土は異なるが、形態は類似することから胎土の異なるカワラケを使い分ける使用方法によるものか、複数の産地からの搬入が考えられる。以上の断片的な様相を整理すると、比較的丁寧な作りであるA類が存在し、やがて粗雑化したB類が現われる。B類の系譜はわからないが、かなり粗雑化している点からはA類から変化した可能性もある。そして、次に出現契機は明らかでないが外反する形態で精製品のC・D・E類が加わる段階がある。それ以後は外反形態と内湾ぎみに斜めに立ち上がる形態の両者が共存し、胎土の上からも複数のものが存在するようである。つまり、B類までは単系統と思われるが、何らかの契機で形態や胎土の異なるカワラケが共存する段階へと変化しているようにみられる。

なお、この新たに出現する外反形態の精製カワラケに先行して、類似した精選胎土を用いるカワラケが栗田城跡などで知られる。このカワラケは明褐色の非常に緻密な胎土で、器壁も均一で薄い。全体の作りが丁寧で、底部をへら削りして回転糸切り痕を消すものもみられる。形態的にはC1・D1・E1とは同一ではないが、粗雑なB類に混じって精選品が存在する点ではC1・D1・E1の出現と何らかの関連があるものとも思われる。この栗田城跡などでみられる精製カワラケは出土が少なく、あまり普遍的な存在ではない。しかも主体的なカワラケとは形態差があることや、精製された胎土で明かに識別できることからB類とは別の目的に供された可能性がある。また、法量も大きめのものを主体的に担い、一般的なサイズは余り見られない特徴もある。このカワラケは本遺跡では出土していないが、特殊な使用に限定されたもので、このような複数系統のカワラケが使い分けられる延長上にC・D・E類の出現契機があるとも思われる。今後注意しておく必要があろう。なお、栗田城跡では15世紀前半頃の所産と思われる。

次に各分類のカワラケ年代について触れておく。まず、A類であるが、このA類を含む「組み合わせA」は周辺遺跡との比較のなかで矛盾が見られるため、厳密な年代を保留せざるうえない。ここでは三輪遺跡の例から非クロカワラケが13世紀～14世紀前半のある段階まで存在する可能性があることから14世紀前半頃としておきたい。B1類は少数しか確認できないので詳細は不明であるが、形態的にはB2類に先行すると見られ、14世紀中頃であろうか。B2類はもっとも出土数が多く、SD2007では主体的な位置を占める。栗田城跡でも多量に出土しており、栗田城跡の出土陶磁器からも下限は15世紀前半頃と推測される。上限は不明であるが、SD2007で出土したすり鉢の形態が珠洲IV期の末前後と類似するとみられることから、このカワラケもその時期に遡る可能性がある。ただし、B2類自体も細分される可能性があるため、幅をもたせて上限は14世紀後半までの範囲を含めておいたほうが妥当であろうか。B3類は1点のみでその位置付けが難しいが、SD1008で出土していることからSD2007よりも後出する可能性がある。

C・D・E類は共通した形態が確認でき、ほぼ同じ時期に存在したカワラケである可能性がある。栗田城跡には見られないタイプで、一方の屋代城跡などで類似形態のものが見られることから15世紀も後半以後の年代が与えられる可能性がある。しかし、石川条里遺跡(7)や屋代城跡で出土した内湾するタイプは本遺跡ではC2、D2・3、E2類などと類似品しているとみられるが、同一タイプとは見られない可能性もあり、若干時期差も想定される。また、松原III遺跡ではこのタイプが認められないため、16世紀も下る時期までは含まないのかもしれない。

次には今回の調査結果と先学のカワラケの検討を比較してみることにしよう。

#### b 従来の研究との比較

長野県では中世在地土器に関しては断片的な研究があったが、1980年代前後の大規模調査による資料増加のなかで古代・中世の土器編年研究が着手されるようになる。そして中世の土器では小林秀夫氏のカワラケ編年の検討<sup>(註17)</sup>がおこなわれた。この段階では遺跡から出土したカワラケの年代的な位置をまず、明らかにしようとする編年研究が中心であった。

ところが1980年代後半からの全国的な研究の進展により、中世の生産や流通といった重要な観点が強調されてくる。そして、全国的に流通や生産の諸相が明らかになるにつれて、総合的な時代区分として把握しようとする方向へ進んだ。県内でもこのような動向をうけて古代の土器編年の再検討が進められた。こうしたなかで鋤柄俊夫氏による長野県全域の中世焼物流通や在地土器の整理<sup>(註18)</sup>、野村一寿氏による在地土器の編年と胎土分析からの産地と流通の様相を分析した考察<sup>(註19)</sup>が発表された。また、守屋昌文氏は磯並神社遺跡のカワラケから古代との連続や中世前半の非ロクロカワラケについて検討<sup>(註20)</sup>を加えている。こうした県内の研究状況に加え、近年では広域的に在地産土器を比較研究する検討が進められてきている。そうした例としては東日本全般の在地産土器の整理と枠組の検討を進めた浅野晴樹氏<sup>(註21)</sup>、関東・甲信越を対象として広域のなかでカワラケの位置付けを探った服部敬史氏などの論攻<sup>(註22)</sup>などが挙げられる。しかし、こうした広域的な研究によって長野県を含む在地土器の枠組みが明らかにされてくる一方で、逆に県内の土器の編年研究は低調となっている。そのため、在地土器の流通やあり方については演繹的に推定しえるが、個別の土器年代は詳細不明となる状況が生み出された。こうしたなかで近年、中島庄一氏による高梨氏館出土のカワラケの分析<sup>(註23)</sup>は在地土器の編年を考える上で数少ない検討となっている。このように、在地土器の大枠が明らかにされつつあるとはいえ、在地産土器の実態がその大枠に一致するかどうかは検討すべき問題であり、在地土器の編年が未確立なままでは遺構論や遺跡論の低調さにも影響すると思われる。そこで、ここでは上記に推測したカワラケの様相を従来の検討との比較を通して、その位置付けを探ってみることにしたい。

これまでに明らかにされているカワラケの概略の変遷は、12世紀末、あるいは13世紀初頭には京都系カワラケを模倣した非ロクロ(手づくね)カワラケが東日本各地に出現し、それ以後は各地で非ロクロカワラケの消滅とロクロカワラケへの移行、あるいは非ロクロカワラケが継続するなどの地域性がみられるようになる。長野県の場合では13世紀代に諏訪地方を中心に、南は飯田から北は長野市まで非ロクロカワラケが検出されるが、やがてはロクロカワラケへ移行することが概略の変遷として知られる。ただし、この非ロクロカワラケは諏訪地方を中心とし、その出現は13世紀初頭まで遡れるものの、それ以前の様相は明らかでない。また、消滅時期とロクロカワラケへの移行の様相についても必ずしも共通した理解が得られているわけでもない。これには県内での非ロクロカワラケの消滅とロクロカワラケへの移行年代、共存や非ロクロカワラケが存在しないなどのあり方の地域性の問題が絡んでいる。さらに、単一に京都系とできるのか、鎌倉との関係も未整理である。また、非ロクロカワラケを戦国期まで存続する北陸地域との関係などが整理できていない問題もある。しかし、ほぼ14世紀後半以後は北陸からの搬入を考えないとロクロ

カワラケで占められるようになることはほぼ間違いないと思われる。

本遺跡を含む14世紀以後のカワラケの変化は中島庄一氏<sup>(註24)</sup>や服部啓史氏<sup>(註25)</sup>が整理した論攻を参考すると、内湾から外反傾向へと推移する点ではほぼ一致している。なかでも服部氏の検討は興味深いので少し紹介しておく。服部氏はカワラケが政治的な誓約などの儀礼に使用される食器との観点にたつて、カワラケの形態差やその分布のあり方と領主制の構造の相違について検討された。それによると、鎌倉のカワラケを祖形とする内湾型は関東甲信地方に共通して見られるが、15世紀後半から内湾形態カワラケと断絶をもって外反皿形が出現し、関東では古利根川を境として外反皿形と碗形に2分されるようになるとした。この15世紀後半の両地域でのカワラケ形態の違いは領主制の構造の違いを反映するとし、外反皿形の分布圏は後北条氏・武田氏の戦国大名が成長してくる地域とした。

ここでカワラケの使用研究について補足しておく。藤原良章氏はカワラケが儀礼的な場面で使用される器であることを明かにし<sup>(註26)</sup>、以後は基本的にカワラケの性格は儀礼的な食器であるとする考えが主流となった。そして、東日本の在地土器を集約した浅野晴樹氏によって、13世紀と15世紀後半～16世紀の2時期に大量廃棄が見られることが示唆されている。<sup>(註27)</sup> 先の服部氏の検討もこの浅野氏の指摘を受けた形となっている。

#### c 本遺跡出土カワラケの位置

上記の検討を交えて今回の調査結果を再構成してみよう。まず、A類とした内湾形態のカワラケであるが、服部氏の指摘した鎌倉のカワラケを祖形とするカワラケに該当しよう。次にB類は中島・服部氏の研究と直接対比することはできないが、粗雑で厚い作りである点から、何らかの祖形をもとに新出したとするよりは前代からのカワラケの生産のなかで粗雑化したものと捉えたほうがよさそうである。そうした場合、祖形はA類に求められるのかもしれない。

次にC・D・E類は形態的な類似から同系列のカワラケと思われ、このグループの外反する口縁部形態のカワラケが服部氏の述べた外反皿形に該当する。E類は精選された胎土なので特殊な目的をもって出現したカワラケとみられ、C類はその普及版とも思われる。この形態は服部氏の指摘するように在地の系譜のなかで成立したカワラケではなく、前代とは断絶をもって出現することは間違いない。しかし、今回の調査のなかではこの形態のカワラケが胎土を異にしており、使用目的が限定される形で出現していると推測される点は注意しておきたい。つまり、同じカワラケであってもE類とB類は用途が本質的に異なる可能性が考えられる。そして、C類が出現した以後は外反形態の使用量が増加してくると見られるが、石川条里遺跡のみこと川・北野地点<sup>(註28)</sup>のように15世紀後半でも外反口縁で統一されず、内湾のものも存在することは、使用方法において分けられる意味があったとも思われる。この問題に関しては外反形態のカワラケの出現契機と祖形の解明が鍵を握ると思われる。現時点では詳細を明かにできないが、北陸において15世紀前後(後半)において、再び京都系模倣のカワラケが出現している点や、このカワラケを模倣したロクロ整形カワラケも出現している点は共通した事象と捉えられるのかも知れない。つまり、京都系カワラケの模倣形ながらロクロ整形で製作されたのがE類とも見られる。ただし、本県の場合では栗田城跡などで検出されている外反口縁の精製胎土カワラケがE類に先行するとすれば、年代的に問題が残る。この栗田城跡のカワラケとE類の関係、栗田城跡のカワラケの年代についてはもう少し検討が必要であろう。ここでは十分検討を加えることはできないが、今後注意しておく必要はあると思われる。

以上からみると、従来指摘される変化の方向性は大枠では妥当と思われる。ただし、外反口縁のカワラケが出現した以後、すべてが外反するカワラケにとって変わるものではないと思われる。また、外反口縁カワラケは精選された胎土で、作りも丁寧な比較的大きめの法量の皿を中心とする点からはやはり特殊な使用方法、あるいは使用が限定されるあり方が想定できるのかもしれない。なお、今回では15世紀後半以



後から16世紀のカワラケについては十分検討が加えられなかった。これも今後の課題である。

## B 内耳鍋

### a 内耳鍋の変遷と年代

先にみたようにA→B類への変化が推測された。C類は分類自体に問題を残し、その位置付けは保留したが、屋代城跡では類似品があり、本遺跡でもS K1001などではB類と近似時期の所産とも思われる。A類はS D2007のカワラケが栗田城跡で出土したタイプと類似することから15世紀の前半頃を含むと推測されるが、栗田城跡ではあまり内耳鍋が検出されていないことから15世紀の初頭より中頃に近い年代を主体とすると推測できる。また、瓦質すり鉢は珠洲すり鉢との比較から珠洲IV期末～珠洲V期の初頭と考えられるので、同質の焼成となる瓦質内耳は14世紀末前後から15世紀初頭と推測される。B類についてはS D2007で見られず、石川条里遺跡(7)や屋代城跡などで類似品があるので15世紀後半以後～16世紀初頭までの年代が与えられるであろう。ただし、S D1008やS D2001では少数であるため、主体となるのは15世紀後半でも遅い段階であろう。C類は分類の妥当性自体にも問題を残したが、松原III遺跡のようにバリエーションを生じてくるなかに位置付けられるのかもしれない。詳細は今後の課題とせざるうえなかった。

### b 従来の検討との比較

県内でいち早く内耳鍋の編年に着手されたのは小林秀夫氏<sup>(註29)</sup>である。小林氏は茅野市御社宮司遺跡出土の内耳鍋を安田氏の分類にそって鍋型=A類、浅鉢型=B類、ほうろく型=C類に分け、鍋型をさらにI～III型に分類した。さらに塩田城や大熊城などの出土品を加え、口縁部が外反から直立、内湾への変化一器高が深いものから浅いものへの変化を捉えてI～V期に編年した。すなわち、I期はA I類(「く」の字口縁)、II期はA II類(口縁の外反が弱く直立ぎみ)、III期が塩田城の資料を充て、口縁部が直立一内湾ぎみ、IV期がA III類(直立でロクロ成形痕を残す)、V期が牧ノ島城の出土品を例に挙げ、直立ぎみの胴部からやや口縁部で内側に入る形とし、年代はI～III期が15世紀、IV・Vが16世紀と捉えている。ここで注目されるのは内耳鍋の出現に関してA I類を鉄鍋の祖形に近いと捉えたことである。この小林氏の編年とほぼ同じ頃、塩田城出土品について川上元氏が分類を行なっている<sup>(註30)</sup>。その後、1990年代に入り野村一寿氏は松本平における内耳鍋を検討した<sup>(註31)</sup>。そして口縁部からI類-「く」の字外反、II類-口縁部に凹状の調整痕を残すもので凹状調整痕が1段をII A、2段をII B、3段をII C類、III類-クランク状に細分した。年代はI類-15世紀前半、II類を15世紀後半～16世紀前葉、III類を16世紀前葉以後と推定したが、塩尻市吉田向井遺跡出土の丸底を14世紀後半に入る可能性を指摘した。なお、小山岳夫氏は小林氏の年代観についてA I～III類は16世紀に同時存在する可能性を指摘している。<sup>(註32)</sup>

上記の小林・野村氏の検討が現時点の県内では比較的体系的にまとまったものとなっている。両氏は口縁部形態に着目しているが、内耳鍋が完形で出土することが稀であることを考えれば、口縁部破片さえあれば年代の推測がつく点でその着眼点は有効であろう。両氏は基本的に鉄鍋模倣として内耳鍋が成立し、鉄鍋の形態に近い「く」字口縁から直立化、さらに回転台ナデ痕を顕著に残し、更に再びクランク・直立内湾など回転台の調整痕を残さない変化と捉えている観点は共通しながらも、やや異なった分類となっている。特に「く」の字口縁から直立・ヨコナデ痕を顕著に残す段階への変化とそれ以後の捉え方にその違いが表われている。その違いは小林氏が形態、野村氏が整形を重視した分類の違いでもある。そのため小林氏のA II・III類と野村氏のII A、II B、II C類の対応関係はかならずしも一致しておらず、そのためそれぞれに年代観も違いも生じているようにも思われる。しかし、小林・野村氏の分類の違いは単純にどちらが間違っているとはいいい切れない側面をもつ。それは野村氏が内耳の胎土分析で明らかにしたように、基本的には内耳鍋の生産地は県下各地に存在し、しかも各地域内で生産地が増加していると推測されているからである。鉄鍋模倣が崩れていく変化は、大量生産一成型方法簡略化が優位とした形態変化と捉えら

れるので、生産地の多さからも地域毎に多少の違いを生じていく方向が予想される。ただ、野村氏のII類（口縁に調整痕を残す形態）の分類は調整痕の数を基準とした点は明瞭で分かりやすいが、II A類が量的に少ない上にII B類との関係もあまり明瞭でない問題があって、はたして口縁部内側につくナデ痕の数で分類するのが妥当であるかは問題が残る。また、小林氏がA III類としたものが、野村氏のII類に該当するとすれば年代観も若干異なっていることになる。

この口縁部内面にナデ痕を残す形態以後の分類に関しては、両者とも最終段階では出土量が減少し、調整痕が顕著でないと捉えている点は共通する。しかし、詳細な分類は異なる。この変化の要因については両氏ともにあまり言及していないが、野村氏は調整方法の簡略化として捉えているようである。もちろん、小林・野村氏が分類を行なった時点ではこの段階の内耳鍋が資料的に少なかったことがあるが、資料の蓄積がみられる現段階ではかなり地域性もあることや、同じ地域内であってもバリエーションがあることが判明してきているので改めて再検討すべき段階であると思われる。そうした意味では小山氏の指摘は再考に値する。

問題はあがるが以上の小林氏と野村氏の検討と本遺跡の分類や年代的な位置について比較してみることにはしたい。両氏は鉄鍋模倣から調整簡略化優位で形態変化していく流れはほぼ共通認識であるといえよう。しかし、内耳鍋の変化自体が模倣した祖形から外れて、調整簡略化優位で変化していく流れであったことは、逆に形態的な特長の変化がつかみづらく、しかも地域性をより顕著にする傾向を内在しているように思われる。つまり、基本的な資料として扱った内耳に共通した傾向は認められても、個別の土器について形態や調整方法で細かく分類すると、時間差ばかりでなく地域性・バリエーションが含まれて、直接対比が難しい様相がでてきてしまう。今後、県下各地での変遷が明らかにされるなかで、より内耳鍋の地域性やバリエーションの問題が論議されてくると思われるが、現段階では個別土器での形態分類にこだわるよりも内耳鍋のより共通した傾向のなかで把握しておくことのほうが良いようにも思われる。そこで、本報告では外反形態のA類と直立して内面にナデ痕を残すB類に仮に大別しておくことにした。この2者はほぼ県下に共通してみられるため、変化の境界線の細部に曖昧さを残すが、無難な分類であると思われる。いずれ、分類についても再検討される必要はある。

なお、本報告のA類が小林氏のA I類とA II類、野村氏のI類に該当し、B類は小林氏のA III類、野村氏のII類に該当しよう。A類の年代は小林・野村氏の見解と矛盾する様相はなく、15世紀前半を中心とするであろう。しかし、本遺跡の場合では瓦質内耳が野村氏の内耳鍋出現時期の推測年代とほぼ近似するとみられる。B類の年代については、S D1008・2001といた館堀内ではあまり量的に多くないため15世紀後半でも末に近い頃が中心と推定しておく。なお、B類の変化が整理できなかったのも、下限の年代は明らかでないが、周囲の遺跡の様相からすると16世紀も初頭は含まれると思われる。

最後に本報告でも位置付けを保留したC類とB類の変化の問題について触れておく。このC類は本遺跡では出土量はあまり多くない。今回は一定の形態を特定せずに、内面のナデ痕をあまり残さない特長を捉えて分類したものでかなり曖昧さを含む。本遺跡のS K1001ではB類と共に出土しているので、同時存在した可能性もあり、また、小林氏や野村氏が最終段階としたナデ痕を残さない特長にも近いように思える。現時点ではB類から生じたバリエーションか、後続する形態ではないかと予想できる。同時存在するとすれば、B類以後の変化は同じ地域内でもバリエーションがあると見なければならなくなる。このようにC類の位置の問題はB類以後の変化に関わる問題としてみるができるが、このB類以後の変化の様相を知る上で、近年明らかにされた長野市の松原遺跡3次調査地点<sup>(註33)</sup>は興味深い資料となる。この遺跡のS D1・2では大量の内耳鍋・カワラケが出土しているが、内耳鍋は外反口縁で丸底の内耳鍋が一定量含まれ、それ以外では内面に弱いナデ痕を残し直立する口縁部、あまり調整痕を残さない直立する口縁部など

がある。内面にあまり顕著なナデ痕を残さない特徴の内耳鍋が多いが、詳細にみると多様なバリエーションがあり、ホウロク状の浅い形態もみられる。これらの特徴や伴出した大窯丸皿からもB類よりも後出する様相とみられる。もちろん、SD1・2出土内耳鍋を1時期の所産と断定する根拠は弱い、カワラケではバリエーションがあまり見られないので、長期にわたるものではないと考えられる。したがって、比較的短い期間内で多様なバリエーションが生じていることになる。このようなバリエーションが生れる理由はB類、あるいは小林氏のAⅢ類、野村氏のⅡ類までは簡略化しながらも、調整方法に一定の規定があると見られるが、松原遺跡Ⅲの様相は、その規定が急速に崩れてしまう方向ではなかったかと思われる。そのために、調整方法が変化しやすく、様々なバリエーションを生じ、鉄鍋模倣へ戻るものも生じてくる結果となったとも思われる。このように考えるとC類も同様の背景で生み出されたもので、B類の後半段階から急速に崩れていく形態のバリエーションの一つとして考えられるのかもしれない。詳細は今後の課題としておきたい。

### C 在地産すり鉢

#### a 在地産すり鉢の変遷

すり鉢A類はその位置付けに問題を残したが、地之目一丁田遺跡の様相から少なくともすり鉢B類に先行する可能性は高い。したがって、在地産土器の組み合わせの変遷の推測との比較や珠洲すり鉢との比較からもA→B→C→Dの変遷が推測ができる。このなかで須恵質すり鉢A類はやや瓦質に近く、B類では須恵質、C・D類は瓦質・土師質すり鉢が見られるので、初期にはやや焼成の不良な瓦質すり鉢に近いものであったが、須恵質として安定し、やがて焼成温度の低い瓦質・土師質への変化がたどれよう。ただし、E類については土師質と須恵質の2者が存在し、前者は15世紀の前半と捉えられるが、後者はその年代を明らかにできなかった。しかし、後者は内耳鍋を伴出していないことから内耳鍋の見られる15世紀前半までは下らず、内面の卸目が密に施されるものが少量ながらも見られるとされる珠洲Ⅳ期後半の14世紀後半を上限とすることは間違いのないであろう。この問題は実年代の比定の問題に留まらず、須恵質すり鉢と瓦質・土師質すり鉢の生産系譜の問題に関わる。すなわち、須恵質→瓦質→土師質へと単系統で変化したのか、須恵質・瓦質・土師質が相対的に時間差を持ちながらも生産地の違いとして認められ、部分的に共存していた可能性があるかどうかである。ここでは結論を下すことが出来ず、今後の課題として残された。

E類を除く各分類の年代については伴出陶磁器や珠洲すり鉢との対比から推測される。A類は地之目一丁田遺跡例から13世紀末まで遡る可能性をもちつつも、ここでは14世紀の前半、B類がそれに後続する14世紀中頃、C類が14世紀末、D類はそれに前後する14世紀末か15世紀の前半と思われる。なお、土師質のE類すり鉢は15世紀前半と推測される。

#### b 従来の研究との比較

この須恵質すり鉢は今回の調査で多数の資料が得られ、流通圏は狭いながらも当地域にあっては一定の位置を占めることが解った。ここでは従来の検討について概略ながら触れておくことにしたい。

初めてこの須恵質のすり鉢が在地産であると指摘したのは鋤柄俊夫氏<sup>(註34)</sup>である。鋤柄氏は長野市四屋遺跡採取の須恵質すり鉢を例にとり、形態は「体部は口縁部にむかって厚さを減少させながら内湾ぎみに立ち上がり、口縁は断面が方形」で、調整は「体部外面上半部と底部際に横ナデ、下半部に縦位のヘラ削りが施され、底部外面は不調整で砂粒が粗く付着」、「胎土はやや粗く、色調は灰色および灰白色を呈し、焼成は軟質」と説明している。鋤柄氏はこの焼物が珠洲の影響下で成立した土器と捉え、年代は他の珠洲製品の流入状況から上限を珠洲Ⅲ期、下限を瀬戸産すり鉢の流入以前の14世紀を中心とすると推定した。そして、14世紀の信濃では中南信が東濃・常滑等の東海産すり鉢、東北信が珠洲の流通圏に2分される中間地帯で成立した土器であろうと位置付けた。その後、中央道長野線に関わる発掘でいくつか新たに資料が

追加され、これらを野村一寿氏がまとめた<sup>(註34)</sup>。野村氏は土師質と須恵質のすり鉢の2者が存在し、しかも卸目を入れるものと入れない片口鉢が存在する点に注目した。須恵質のすり鉢については14世紀に流入が始まり、新しくなるにつれてより軟質になり、15世紀に入って土師質に変化し、やがては瀬戸製品のすり鉢に圧倒されて衰退していくと推測した。産地に関しては胎土分析から須恵質が花崗岩地帯、土師質は不明としたが、土師質のものがより近い産地のものと推定した。その後、県内では検討があまり進展しなかったが、浅野晴樹氏が東日本の在産土器を整理するなかで、長野県の在産すり鉢について触れている<sup>(註36)</sup>。浅野氏は野村氏の卸目のある片口鉢と卸目のないすり鉢2者の指摘を受けて、在産すり鉢が単純に珠洲の影響を受けたものではなく、卸目を入れないものは東海の影響であろうとし、さらに複数産地の可能性を指摘した。また、出現の年代は他県例との比較をもとに13世紀末から14世紀初頭とし、東日本の珠洲や常滑製品の広域流通の発達したなかで、補完品として成立する在地土器と位置付け、鋤柄氏の見解をほぼ支持する形になっている。

在産すり鉢は珠洲すり鉢を模倣したものである点は今回の調査で得られた遺物の様相からも支持されるが、整形方法が珠洲と異なり、珠洲からの直接的な技術移入ではないことが推測される。このことは珠洲の技術拡散によって成立したものではないことは時期的な相違の点からも推測され、在産すり鉢の生産器種がすり鉢中心である点からは成立の背景が広域流通品の増加との関連で把握しようと思われる。ただし、県内では須恵質の焼成技術は古代に途絶えており、その系譜を在地内に求めることはできない。従って、現段階ではこの焼物がどのような技術系譜で成立したのかは全く不明である。これは今後検討されるべき大きな問題である。現時点では、焼成が須恵質なので一定の施設や技術移入は必要であったと思われる。全くの個人によって成立したものではなく、何らかの政治権力を媒介として成立したのではないかとと思われる。しかし、その流通品は雑器生産に主力を置くように商業的な目的をもっていったものと思われる。

この焼物の性格は珠洲の模倣である点からも珠洲のすり鉢の補完品であることは間違いない。しかも、珠洲すり鉢の流入量の増加と共に出現し、珠洲すり鉢の流入量減少とともに消滅してしまう点は興味深い。この在産すり鉢は消滅した以後は石鉢にとって代わられると思われるが、この在産すり鉢の消滅時期に前後して内耳鍋が出現している点も何らかに関連していよう。すなわち、内耳鍋の出現した段階以後は特定器種が焼物以外の材質も含めて特定製品に限定されて生産する傾向が強まっていくと思われる。そのため、すり鉢は石鉢に取ってかわられ、逆に内耳鍋が土器として選択されたために出現してくるのではないかとと思われる。なお、この様相の出現の背景にはそれ以前の広域流通品を支えていたネットワークが崩壊してしまったのか、それとも商業的な流通に限定されてきたために採算の取りにくい場所は減少傾向をたどるのか、あるいは逆に在地の生産力が増加したともみれるかの評価については不明である。

産地については、県北部の飯山市では珠洲が圧倒的で、在産すり鉢は中信で散在的、長野市周辺でもっとも分布が濃厚である点からは、長野市周辺の善光寺平南部に生産地が推測されよう。しかし、野村・浅野氏が指摘するように須恵質から土師質への変化のなかで産地が増加するという点については十分明らかにできなかった。しかし、須恵質すり鉢、瓦質・土師質すり鉢が単一生産地内の変化か、産地の拡散を伴っていたかの問題は、瓦質土器にはすり鉢と内耳鍋が見られるように、当地域でのすり鉢の消滅から内耳鍋出現の変換点を探る上でも鍵を握る重要な問題と思われる。本遺跡では須恵質すり鉢と瓦質・土師質すり鉢が相対的な時間差が知られながらも、E類の位置を明らかにできなかったため、大きな課題を残す結果となってしまっている。ただし、形態からみると、須恵質すり鉢と瓦質・土師質すり鉢は相互に形態が異なり、しかも珠洲すり鉢の変化とほぼ対応して見られるので、同一産地内の変化である可能性が高い感触はある。また、瓦質土器にすり鉢と内耳鍋が見られたことから、ほぼ瓦質すり鉢がそのまま内耳鍋の生産に移行した可能性は確認できた。今後は県下の他地域では同様の事例は確認されておらず、須恵質

と瓦質・土師質では、焼成施設の違いも考えられる問題、さらに土師質内耳は県下各地で生産され、しかもその量は多いことから、土師質の段階では従来指摘された産地の拡散の問題の解明と合わせて検討される必要がある。

この在地産すり鉢に関して、調査でも残された課題は多い。今後も注意すべき焼物であろう。

キ 在地産土器を中心とした焼物組成の諸段階の様相

上記で述べてきた在地産土器の組み合わせは個別に分類した在地産土器の変遷を推測するための目安として仮説として設定したもので、厳密な段階とはいえないものである。概略では一致するとも思われるが、各遺構間で出土土器の型式内容が矛盾したり、細分される可能性もみられた。そこで、ここでは上記の検討を踏まえて整理しなおし、在地産土器の消長関係によって改めて段階を設定すると共に、合わせて搬入陶磁器との関係をみとめることにしたい。

#### A 第I段階

在地産土器はカワラケのみと捉えた段階である。本遺跡のS D3006Bが該当するが、その内容は類似時期と思われる三輪遺跡、地之目・一丁田遺跡相互で食い違う内容を示すため、この在地産土器がカワラケのみで組成される様相の年代については問題が残された。三輪遺跡では伴出陶磁器から13世紀後半～14世紀前半の年代が与えられると思われるが、すり鉢は含まれず、カワラケは非ロクロカワラケで占められる。それに対して、地之目一丁田遺跡では非ロクロカワラケと在地産すり鉢が伴出し、本遺跡S D3006Bでは在地産すり鉢は伴わないがカワラケはロクロ調整されるものである。鍵を握るのは非ロクロカワラケからロクロカワラケへの移行の様相と年代、在地産すり鉢の出現年代である。ここでは結論を保留せざるうえなかったが、13世紀後半以前では在地産土器はカワラケのみであったとみることは許されよう。この13世紀後半以前の搬入陶磁器を拾いだしてみると、輸入青磁・白磁碗、山茶碗、山茶碗系こね鉢、珠洲すり鉢、渥美壺、(古瀬戸瓶子)などがある。碗は輸入磁器が一定量認められ、山茶碗は僅かである。調理具は山茶碗系のこね鉢と珠洲産があるが、量自体は多くない。貯蔵具は渥美壺と古瀬戸瓶子があるが、いずれも特殊品である。本遺跡出土のS D3006Bのカワラケがこの段階に入るかどうかは問題が残されたが、他遺跡でもあまりカワラケの出土量は多くないようである。

この段階の特徴は全体量が少ないなかで、特殊品が目立つ点にある。しかも雑器類が少ない点は、遺構の不明瞭さからも日常的な生活が営まれたのか判然としない問題もある。これは本遺跡の特徴かもしれない。時代的な特徴としては広域流通品が入っていながらも、その消費量はあまり多くなく、基本的に焼物種ごとに器種を異にする傾向がみられる。この消費量の少なさや広域流通品が焼物種ごとに器種を違える様相と共に、在地産土器はカワラケに限定されていたのではないだろうか。

#### B 第II段階

在地産すり鉢が加わってくる段階である。上限はI段階との境が不明瞭で問題を残すが、14世紀前半ではこの様相に入るとみられ、ほぼ14世紀後半まではこの様相が継続するとみられる。カワラケはA類からB1・2へと変化する可能性があるが、出土量自体は多くない。すり鉢はB類が主体と思われ、その末期には瓦質・土師質すり鉢へ移行するようである。本遺跡ではS D3006A・1010～1012がこの様相を示す遺構とみられる。しかし、それ以外に当該期と断定できる遺構は不明瞭で、この年代に帰属するとみられる陶磁器も後の時代の遺構内に混在して出土している。搬入陶磁器では碗・皿にI期と重複する可能性のものが含まれるが、前半は輸入磁器、後半期には古瀬戸が一定量みられる。また、珠洲産のすり鉢が一定量入り、量は少ないながらも常滑や珠洲の壺・甕類もある。産地別にみると食膳具や貯蔵具は古瀬戸・常滑といった東海方面と珠洲の北陸方面からの流入が知られるが、調理具のすり鉢は珠洲産しか認められず、在地産すり鉢も珠洲を模倣している点からも珠洲の影響・流通する圏内に所属していたと考えられる。

この段階は調理具や貯蔵具に一定量の搬入品が認められ、しかもその消費量は増大している。従って、この消費量の増大によって在地産土器が成立してくる背景があると思われる。しかし、本遺跡ではこの段階に特定できた居住遺構はなく、様相は不明瞭である。また、カワラケはB2類がこの段階の後半にかかる可能性も持っているが、断定までには至っていない。A類との断絶を考えれば、この段階でも後半以後であろうか。館はこの段階に出現していた可能性がある。

### C 第III段階

内耳鍋が登場してくる一方で、すり鉢は瓦質・土師質に変化し、やがて出土量が減少していく過渡期の様相である。年代は瓦質すり鉢の珠洲すり鉢との比較から14世紀末に始まり、15世紀の前半までの短い間と思われる。該当する代表的な遺構は館堀であるSD1008・2001・2007などがある。しかし、この時期の様相を示すとみられる栗田城跡の例を比較してみると、SD2007が類似した比較的単純な様相を示すとみられるが、SD1008・2001は次の段階の様相も含んでいるとみられる。いずれにしろ、この段階には館が出現していたことは間違いないものと思われる。

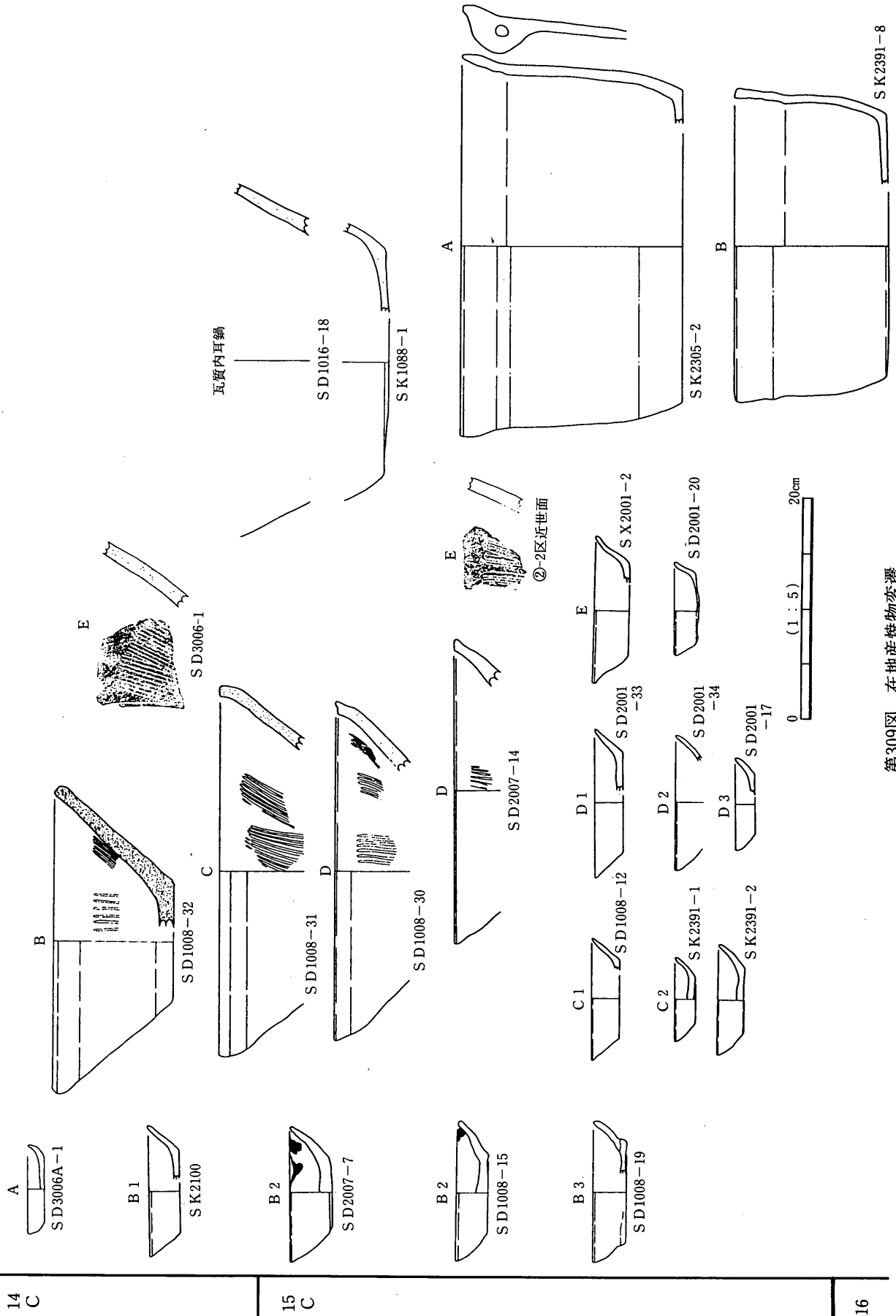
この段階でみられる在地産土器はすり鉢が瓦質・土師質C・D類、あるいは土師質のE類があり、カワラケはB2類が主体的な位置を占める。内耳鍋は瓦質の丸底が出現し、続いて平底のA類に主座を譲るとみられる。しかし、SD2007にみるように内耳鍋は当初出土量はあまり多くないが、しだいに増加していくようである。この時期の搬入陶磁器では碗・皿・鉢には古瀬戸が主体的で、僅かな輸入磁器が見られる。また、瓦質火鉢、珠洲すり鉢が僅かにみられる。全体としては古瀬戸の食膳具や瓦質火鉢を除く器種は減少傾向にあり、焼物の調理具と貯蔵具は不明瞭となってくる。このなかですり鉢に関しては石鉢に取って変わられるようである。その根拠としては搬入品のすり鉢が減少するのとほぼ一致して石鉢が出現する点、さらに古瀬戸のすり鉢が流入したとみられる中・南信では石鉢があまり顕著でないことが挙げられる。貯蔵具については不明瞭であるが、すり鉢同様に他の材質の容器に取って代わられたのであろうか。

上記の様相は一部の特殊品を除く搬入品の減少と、相対的な在地産土器の増加として見られる。しかし、その変化は珠洲産のすり鉢の減少と共に、在地産すり鉢も姿を消していくように、在地産土器の自体的な質的な変化を伴うとみられる。つまり、II段階の在地産すり鉢は紛れもなく、珠洲すり鉢を補完する役割をもっていたが、III段階では焼物に拘らず、多様な材質の容器がそれぞれ特定器種を担うようになると推測される。しかも、内耳鍋の出土量が増加していくように生産量を増大させていくようである。III段階以後では、在地のあらゆる製品が生産を拡大してくるなかで、土器の担う容器の取捨選択があったと考えられる。そして、内耳鍋が新たに出現し、すり鉢は石製品に取って代わられていくとみられる。また、本遺跡の特徴として瓦質火鉢とカワラケの多さが挙げられるが、それぞれ奢侈品と儀礼用の食器と位置付けられよう。

### D 第IV段階

この時期はIII期の転換期を経て、在地産土器はカワラケと内耳鍋にほぼ限定されるようになってくる。この段階の様相はSD1008・2001に混在している土器群と内耳鍋を出土したSK1001・1004・2624などにみられる。搬入陶磁器のあり方からすると館存続時期のSD1008・2001に混在する土器群と、館廃絶以後のSK1001・1004・2624に分離される可能性はある。SK2391は微妙であるが、前者のほうに近いだろう。館の存続時期は15世紀後半も早い段階と推測されるため、前者の様相は15世紀中頃～後半の早い段階、後者はそれ以後となろう。

前者の段階ではカワラケはB類に加えて新たにC～E類が現われる。その出現年代の仔細は明らかにできなかったが、SK2391からすれば15世紀も中頃以後であろうか。内耳鍋はA類からB類へ移行してくると思われる。搬入陶磁器としては輸入青磁が該当するとみられるが、あまり多くはない。後者の段階の微



第309図 在地産焼物変遷

高地ではほぼ内耳鍋に限定されるようである。カワラケはS K1001にも見られるが、遺存度が低く、混入の可能性が高い。搬入陶磁器はほとんど不明であるが、S K1004では16世紀後半の青花、水田では大窯製品が出土している。やはり、館の廃絶と共に儀礼用のカワラケは姿を消すことになったのだろうか。

註

- 1 小林謙一1986「第2節 2 瓦質・土師質土器」『郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会を参考にした。
- 2 長野市教育委員会1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
- 3 『松原遺跡Ⅲ』1993 長野市教育委員会
- 4 小林秀夫1982「第IV章 第4節 中世以降の遺物」『第V章 第4節 中世の遺物』『長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5』長野県教育委員会
- 5 野村一寿1990「第3章 6節 中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1 総論編』長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 6 註3に同じ
- 7 鋤柄俊夫1985「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38-4
- 8 浅野晴樹1991「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集
- 9 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター1994『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13 鳥林遺跡・小坂西遺跡・鶴萩七尋岩陰遺跡・赤沢城遺跡・塩崎城見山岩・地之目遺跡・一丁田遺跡』
- 10 吉岡康暢1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館、浜木さおり1993「第3章 3 大島窯出土遺物の分析」『珠洲大島窯』富山大学人文学部考古学研究室・石川県考古学研究会を参照した。
- 11 浜木さおり註10の文献
- 12 註2に同じ
- 13 註9に同じ
- 14 註2に同じ
- 15 長野市教育委員会1993『石川条里遺跡(7)』
- 16 更埴市教育委員会1995『屋代城跡範囲確認調査報告書』
- 17 註4に同じ
- 18 註7に同じ
- 19 註5に同じ
- 20 守屋昌文1987「第VI章 磯並遺跡のかわらけについて」『磯並遺跡』茅野市教育委員会
- 21 註8に同じ
- 22 服部敬史1996「東国における十五・十六正規の土師器皿様相」『八王子の歴史と文化』9号
- 23 中島庄一1993「第5章 第2節 出土遺物について」『高梨氏館』中野市教育委員会
- 24 註23に同じ
- 25 註22に同じ
- 26 藤原良章1988「中世の食器考—〈かわらけ〉ノート」『列島の文化史』5
- 27 註8に同じ
- 28 註15に同じ
- 29 註4に同じ
- 30 川上元1977『塩田城跡2次調査概報』上田市教育委員会
- 31 註5に同じ
- 32 小山岳夫1986「第IV章 第2節 2 内耳土器」『大井城跡』佐久市教育委員会
- 33 註3に同じ
- 34 註7に同じ
- 35 註5に同じ
- 36 註8に同じ



## 第7節 近世の遺構・遺物

### 1 調査の概要

#### (1) 調査の経過

石川条里遺跡内の微高地西側低地山手側や用水周辺及び、微高地東側低地では近世の洪水砂層が確認され、特に聖川沿いでは複数の洪水で埋没した水田面が存在する。しかし、調査期間との関連や2年次調査部分では前年度の排土の土圧で近世遺構面が傷められていたこともあり、調査を実施した地区は低地域では①-2・②-2区西端の一部と⑩-2・⑪区のみである。これに対して微高地部では近世遺構が古墳時代・中世の遺構と同一調査面で検出されたため、溝跡を中心に比較的多くの遺構が調査された。このように近世遺構は部分的にしか調査していないため、本報告では断片的な調査結果を羅列せざるをえなかった。ここでは堆積状況の違いから大きく低地と微高地に分離し、さらに低地は微高地西側と微高地東側以東に区分して扱うことにしたい。

#### (2) 基本土層と地形

近世には低地埋没による微高地と低地の比高差減少に加え、微高地西側低地山際と聖川沿いで中世後期以来の堆積土の増加がより顕著になり、調査地区の西・東端の地形が高くなる。こうして低地は⑩区前後がもっとも低くなり、それより西側は部分的に微高地を残しながらも西側から東側へ傾斜する地形、⑩区以東は聖川に向かって高くなる地形となる。さらに土質自体も全般的に山砂を含むシルト質、あるいは砂混じりの粘土質に変化している。こうした傾向に加え、用水を媒介とした堆積土が部分的に確認され、用水脇が畑地に変化する現象も見られる。微高地では上記のような環境変化のなかで中世と同様にあまり顕著な堆積土は認められず、低地と微高地の比高差はますます減少し、明治年間作製の公団でも畑地として部分的に微高地痕跡が判明するものの、その範囲は非常に狭い範囲となっている。また、この低地との比高差の減少によって、その東縁辺などでは洪水性堆積物が及ぶようになる。

このように遺跡内では広範囲に分布する近世洪水砂層もあるが、大概は場所ごとに土質が異なったり、層の広がり自体も狭いなど地点ごとに土層が異なる様相がみられる。しかも調査地点ごとに観察観点や分層のされ方が異なるため、近世の基本土層を統一的に把握することはできなかった。この複雑な堆積環境が生じた原因には人間の自然への働きかけのなかで生じた現象である側面も見逃せない。この点について2つばかり調査で看取された特徴を取り上げてみる。

まず、特徴的にみられる現象として用水周辺での部分的な堆積土の存在がある。これは中世にも認められていたが、より顕著な傾向として認められる。例えば、①-2・②-2区の西端用水周辺では堆積土の増加によって小規模な微高地が形成されるようになり、やがて用水脇が畑地に変化していることが知られた。同様に⑦区のS D1022とした現用水周辺、あるいは中世館の字「柗下」外側をめぐる用水6周辺が高くなる傾向も認められている。また、中小河川である聖川は流路管理の進展で流路がより限定されるようになって、そこへ堆積土が集中して天井川化が進み、洪水が頻繁に起こるようになったとみられる。このため中世後期以来、聖川沿いの部分で厚い堆積土層を形成するようになると思われる。これらの用水や中小河川周辺の堆積土増加は氾濫による場合もあるが、絶え間ない用水の補修と用水さらいによって発生したことも想像される。その背後には近世における用水体系の整備と安定的な用水確保の努力、さらに近世において水田が重要視されていたことも遠因として挙げられると思われる。

次の特徴として近世と推測される基本土層は他時代の土層にくらべ、より分層される枚数が多く、しかも限定的な範囲しか分布しない土層、あるいは近接した場所ながら土層の様相が異なることがある。これは用水を媒介とした部分的な堆積土は個別水田へ影響を与える範囲が狭いことや、水田域の拡大努力などによる新たな人為的な土層の形成などが頻繁に行なわれたためと考えられる。このような状況によって洪水砂層も水田ごとに残存状況が異なる様相も生じており、遺跡全体で基本土層を統一的に把握することを難しくしていると思われる。したがって、ここでは近世に関わる土層は調査地区ごとの呼称によることにした。

### (3) 周辺の歴史的環境

近世には遺跡周辺は塩崎村となる。その範囲はほぼ四ノ宮荘と重なるものの、塩崎村史によると現塩崎の平久保地区は天正六（1578）年の武田氏支配時代に諏訪祭礼負担郷として「塩崎之内へ久部」としてこの時に塩崎に編入されたとされる。この塩崎村は慶長五（1600）年の「太閤様御代御検地高頭、川中島四郡郷村目録」中では詳細は不明であるが、慶長七（1602）年森右近検地帳では更級郡中69ヶ村中に塩崎村二千八百十二石四斗五升四合として知られる。後の様子を塩崎村史を参考に年次をおってみると宝永三（1706）年では戸数は305軒・実高は2548石、寛保三（1743）年では307軒・2337石、宝暦七（1757）年では437軒・1821石、宝暦九（1759）年では570軒・1830石、文化九（1812）年は674軒・2549石と知られる。このなかで宝暦年間を底として石数が減少する理由は享保頃からの千曲川水災による荒地地の増加とされ、その一方で家数は増加の一途をたどったため、窮乏を生じて宝暦に騒動を生じている。このように塩崎村は近世を通じて千曲川に面しているが故に洪水に悩まされつづけたが、その一方で中小河川が非常に少ないため旱害にあいやすい土地でもあった。そのために近世を通じて千曲川堤防構築と用水・溜め池構築などの用水確保の努力も絶えず繰り返されてきたようである。ここで少し、本遺跡にも直接関わる用水の変遷についてまとめておく。

この塩崎地区の用水の変遷について、根本資料は不明ながら「塩崎用水沿革史草案」とそれを引用した塩崎村史でまとめられている。それによると近世初期では山から流下する中小河川と伝承の「牛池」があり、もっとも水量の多い聖川は4分の1が長谷塩崎、残り4分の3が石川二ツ柳分とされていたという。この聖川系用水の取水口が隣村の石川村にあったこともあり、水配分は塩崎側に圧倒的に少なく、元和三（1617）年の旱魃の際には水争いで塩崎の者が1人殺される事件も引き起こされている。また、塩崎村史でも承応三（1654）年に大旱魃で田方のほとんどが「不作田」となったことを紹介しており、近世初頭では水確保に苦しむ状況が知られる。なお、「塩崎用水沿革史草案」では慶長十九（1614）年には牛池が大雨のため崩壊し、また、慶長十一（1606）年には聖川の堤防が決壊したことを述べている。やがて、この環境を変えるべく、用水と溜め池の構築が始まる。まず、明暦二（1656）年に明暦用水とよばれる用水を構築し、延宝八（1680）年に猪平池、元禄8年（1695）に川越池を完成させる。明暦用水は隣の杭瀬下・新田村の地を借用して千曲川から取水し、稻荷山を通過して塩崎に引いたようである。しかし、享保八（1723）年、十三（1728）年の水害で千曲川河川敷の大変動と共にその取水口は形跡を失って、これ以後、石高は減少の一途をたどる。やがて千曲川の堤防を築く御国普請が寛政年間に始まり、この時に合わせて長谷組から新たな用水構築の願いも出されるようになった。この時の計画ではほぼ明暦用水を復興する計画であったが、村内の他地区では溜め池のほうがよい、あるいは干害の被害額より用水構築費用のほうがはるかに高額になるとする反対意見もあり、しかも用水が通る隣村の稻荷山の反対もあって一旦は頓挫する。しかし、再び用水の計画を練り直し、場所を手山より移して広範囲を灌漑する案として改めて願いを出した。この願いを数度繰り返して、文政五（1822）年にやっと用水構築着手にこぎ着けた。こうして完成



したのが塩崎用水で、現在は千曲川からの揚水による三面側溝の用水となり、かなり広範囲に安定的に水を配している。

以上のように近世の遺跡周辺は洪水・干害にあいやすい地であり、初期の水源は聖川・小規模な沢水に頼ることが主であったが、やがて溜め池の構築、そして千曲川からの取水用水の構築、塩崎用水の構築によって水確保の努力が進められたことが知られる。この変遷のなかで近世初期の様相は中世段階での様相を考える上でも参考になるものと思われる。

道について若干追記しておく。近世の道については塩崎村の絵図があるのでその様相は比較的分かりやすい。この塩崎地区には幹線道と村内部の作業道の2種ある。幹線道は隣接した篠ノ井地区で北国街道から分岐する善光寺街道があり、自然堤防上の塩崎の集落を抜けて更埴市稲荷山へ続く。その位置はほぼ現県道と重なるようで塩崎集落外れで直角に山手に折れ、長谷寺参道前で再び直角に折れて更埴市稲荷山宿へ続く。これ以外には山手をまわる長谷から石川へ続く道と、そこから分かれて西側山地を抜けて犀川筋へ通じる道がある。これに対して、作業道は水田域内を東西方向に走る細いものいくつか知られる。この幹線道と作業道のあり方を立地環境からみると幹線道は自然堤防や山手の緩斜面地帯の走行方向と一致し、ほぼ南北方向になる。それに対して、作業道は山地－水田－集落が並列する東西方向に設定されていたことが知られる。

なお、塩崎村境となる西側山中には尾根に添って浅い溝状の遺構が長距離に渡って存在していることが知られている。これは道跡が流水によって削られたものである可能性もあるが、この土地では「狐堀」とよばれ、近世に作られたものではないかという話も採取できた。

参考文献 塩崎村史刊行会 1971 『塩崎村史』

#### (4) 遺構の概略

調査で検出された近世遺構は水田跡・畑地跡・溝跡・杭列跡などがあり、居住遺構は皆無である。この内、洪水性の堆積物で覆われた遺構面調査は②-2区と⑫区で実施している。この両者は距離的に離れて、中間では対応する土層もないことから直接的な対比はできない。ただし、出土遺物からするといずれも19世紀前半と思われる。なお、塩崎地区を襲った19世紀前半の地震・大洪水の記録では文政七（1824）年洪水、弘化二（1845）年の水災と同四（1847）年の善光寺地震、安政二（1855）年の洪水などが知られる。このなかで安政2年の洪水は納米高にあまり変化がないために被害はあまり大きくないとされ、善光寺地震に伴う洪水は川中島を中心として塩崎までは及ばなかったようである。そうすると、近世面と捉えた遺構を覆う砂層は文政七年か弘化二年のいずれかの洪水に対比されよう。なお、弘化二年の洪水は遺跡に近い長谷で山抜けを伴ったとされる。

以上のように石川条里遺跡で検出された近世遺構はほとんどが耕作に関わる遺構であり、調査地区内の大部分が近世には耕地化したことが知られる。しかも、その特長は水田域の拡大と用水の整備にみるように水田がきわめて重視されており、この傾向は近代まで続くようである。そして、近代～現代の間に中央微高地でさえ水田化されてしまう。なお、この水田域拡大は微高地周辺での水田拡大の段階と幕末の塩崎用水構築による微高地上の水田化の2段階に大別される。

## 2 近世の遺構

低地域では①-2・②-2・⑪・⑫区で面的調査を実施したが、それ以外の地区では部分的に溝跡を調査したのみである。繰り返し述べるように近世遺構は上記調査地区のみしか調査できないものではなく、選択的な調査であったことを断わっておきたい。ここでは中世同様に微高地西・東側に大別し、洪水で埋没した遺構面とその他の遺構にわけて記述する。また、微高地では近世の遺構が古墳時代の遺構と同一面で検出されたため、比較的多数の遺構が検出されている。微高地では土坑・溝跡・その他の遺構にわけて記述する。

## (1) 微高地西側低地の遺構

微高地西側低地域では低地の埋没による微高地・低地の比高差減少に加え、中世後期以来の山手の堆積土増加による西側が高くなる地形がより顕著になる。こうした堆積状況に加えて部分的に分布する洪水土層があり、そのなかに①-2・②-2区西側で検出された近世遺構を覆う砂層がある。この砂層で覆われた面は近世面として調査を実施し、畑地と水田に関わる溝跡が検出されている。しかし、砂層自体が非常に薄く、隣接した水田域では耕作によって鋤き込まれて砂層自体が遺存しない。

ア ①-2・②-2区近世面 ①-2～②-2区 IRT05～WM03 (第311図)

①-2区と②-2区西端の現用水付近は一段高くなっており、この部分に薄い洪水砂で覆われた遺構面が確認された。その分布範囲は非常に限られており、SD0012よりも東では土層自体が確認されない。検出された遺構はSD0010・0011と溝状の不整形な落ち込みがある。この溝状の落ち込みは南北方向が1本、その西側に東西方向で複数並列している。後者は畝上部が削平されたために溝状にみえる畑の畝跡であると考えられる。このことから調査面は水田ではなく畑地であることが判明した。なお、SD0010・1011は性格不明であるが、耕作に関連した遺構と思われる。出土遺物は意外と多く、近世末の陶磁器片が多く得られた。なお、この部分は中世II面では水田であったことが確認できているが、それ以後は用水を媒介とした堆積土の増加によって用水周囲の地表面が上昇していると見られる。そしてある段階から畑地としての利用に変化したとみられる。明治時代の公図では②-2区は畑ではないが、その北側の用水脇が細長い畑として登録されている。

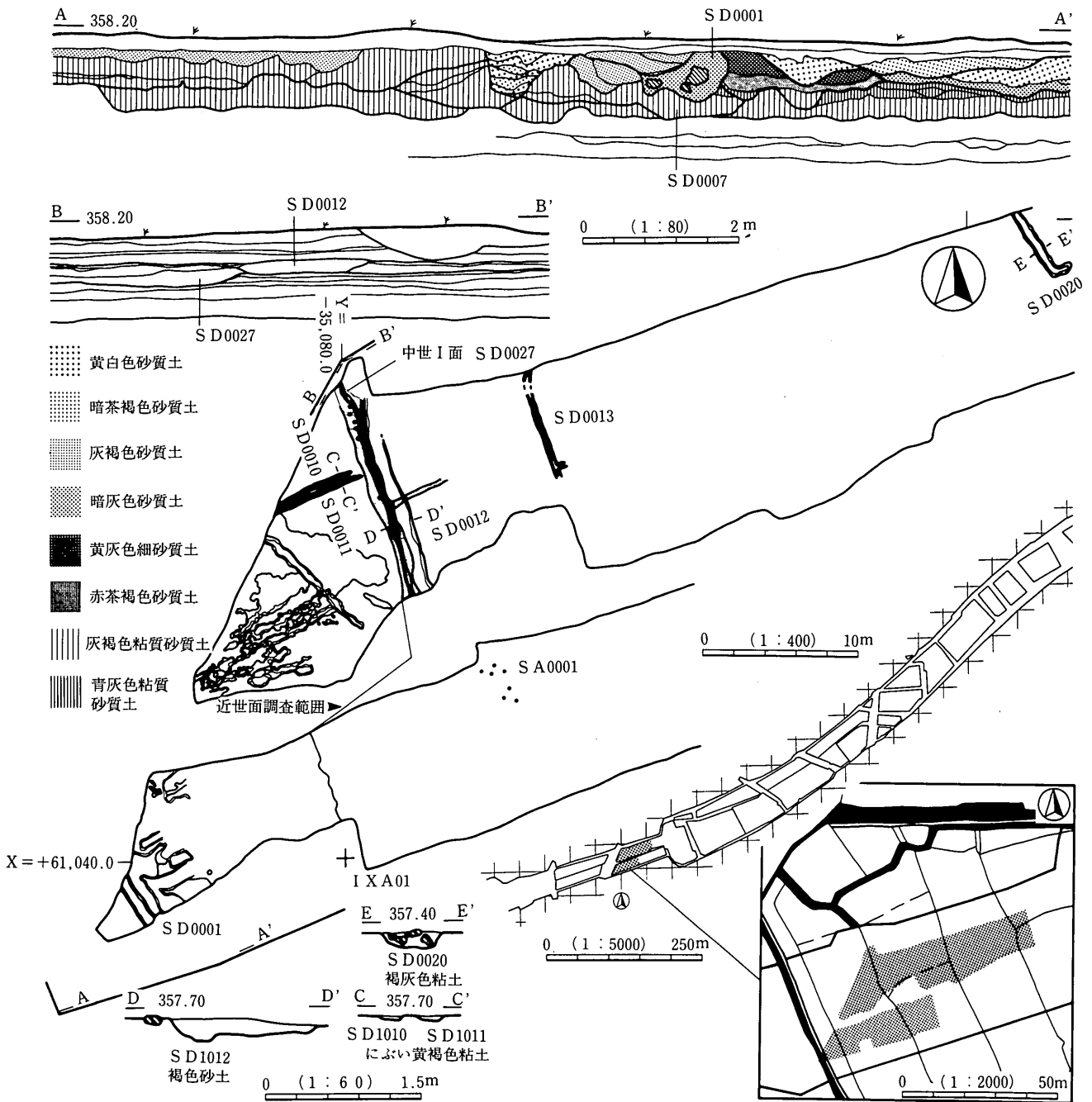
## イ 溝跡

SD0001 ①-2区 IWM02 (第311図、PL57)

本溝跡は①-2区西端でN-35°-Wの方向に走り、中世II面で確認された畦とほぼ同位置に同方位で重なる。しかし、溝周辺約7mの範囲には最低7～9本の溝が繰り返し構築されており、本溝もそのなかの1本に過ぎない。なお、この周辺の土層図も掲載したが、溝数や構築順序を確定できなかった。溝跡の幅は確認できたところで約50～70cmと余り大きくはないが、絶えず修築を繰り返すように重要な用水であったと見られ、水源は現用水から推測して四ノ宮集落背後の沢と思われる。埋土は灰褐色の砂質土で周辺の溝もほぼ類似したものである。なお、本溝跡の西側にはやや幅広い高まりが付属しており、道が隣接して構築されていると考えられる。

SD0012 ②-2 ISA05～SC12 (第311図、PL57)

②-2区西端の畑地跡と水田の境に位置する溝で、同畑跡層まで立ち上がる。明治年間の公図ではほぼ類似した位置に畦があり、その畦に併設された用水が調査区北端際まで描かれているが、本溝跡検出地点まで延長されていない。従って、現溝は明治時代の公図以前で、より南に延長されていたものと考えられる。また、下面の中世I面で疑似畦畔と思われるSD0028がほぼ重複した位置にあり、中世I面以来、地境として踏襲されていた場所であると考えられる。幅は約1.4m、断面形は浅い逆台形で検出面からの深さは22

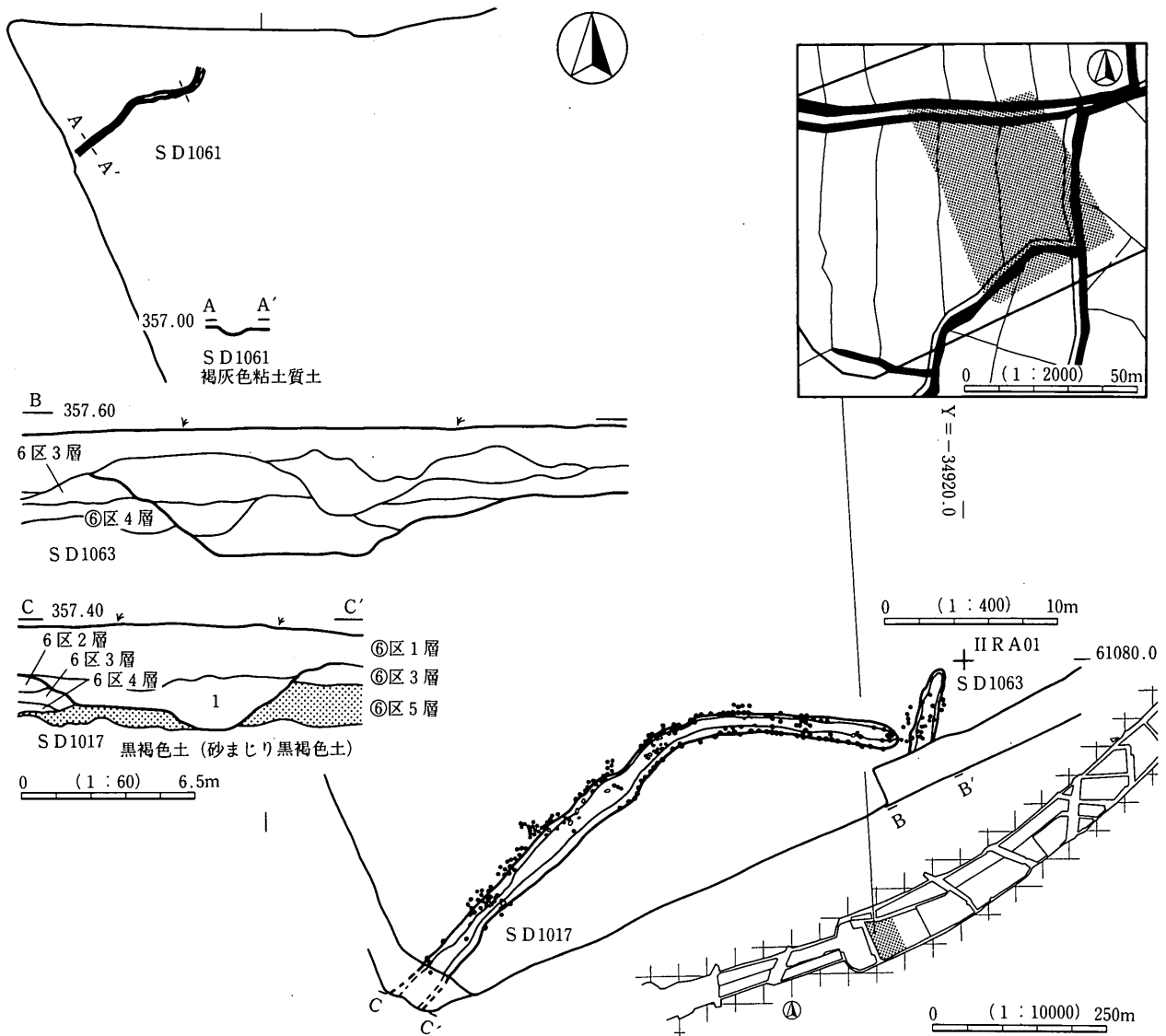


第311図 微高地西側低地近世遺構 (②-2、②-1近世面)

cmを測る。本溝の西側脇には杭列が付設されており、本溝の南延長先で検出された①-2区の杭列は本溝跡に帰属すると思われる。埋土は暗褐色の砂質土で出土遺物はない。本溝は用水と思われる。

**SD0013** ②-2区 I SF06~SG08 (第311図、PL57)

②-2区の2層で検出した。非常に浅い溝で走行方向はN-20°-W前後、②-2区内では先端近くで枝溝を派生させて消える。確認できた長さは約7m、幅は約0.3mである。断面形は浅いU字状を呈して検出面からの深さは3cmほどである。埋土は記録ミスで不明であるが、形態から疑似畦畔の可能性はある。出土遺物はない。



第312図 微高地西側低地近世遺構 (⑥区 S D1017、1061、1063)

**S D1017 ⑥区 IIQF09~QR03 (第312図)**

微高地縁辺をめぐる現用水 (用水2) 下に位置する。この現用水は四ノ宮集落背後の沢から取水して①-2区西端を貫いて南流し、大きく西へ迂回して⑥区に至るもので、①-2区検出の溝群上部の現用水の延長先にあたる。その先端は⑥区の東西方向大畦の位置から直下に折れて南に流れる S D1063 上部の現用水 (用水3) へ接続している。本溝は①-2区西端の用水と同一のものと考えられるが、①-2区溝跡群のように数度にわたる構築が確認されない違いもある。これは①-2区溝跡群の場所がきわめて堆積土が多い環境ながら、本溝跡周辺では安定的であった違いによると思われる。

溝の形態は微高地縁辺にそって緩やかなカーブを描き、幅は調査区壁土層図では上幅約2.7mを測り、断面形は逆台形となる。溝内底面や壁際に杭が多数打たれているが、緩やかにカーブして流れることや、片側が微高地となって高くなるため、このような護岸の杭が打たれたと思われる。埋土は暗褐色の砂混じり粘土の単層で複数にわたる掘り直しの状況は確認できていない。これは堆積土の少なさに加え、溝さらい

などの維持管理が比較的丁寧に行なわれていたことにもよると思われる。そのため、構築時期を明らかにすることはできなかった。なお、本報告では埋土から古代にさかのぼる可能性もあるので、古代でも扱っており、さらに現用水下の調査として中世でも扱っている。出土遺物は古代～近代までの遺物が含まれている。

#### S D0020 ②-2区 I TC01～TD02 (第311図、PL57)

②-2区の中世I面で検出したが、形態から近世以後の暗渠と思われる。走行方向はN-30°-Wで、位置的には中世I面で検出された疑似畦畔、もしくは畦とほぼ重複している。平面形は南端が短くL字状に折れて消え、調査区内では約5mを確認した。幅は約0.6m、深さ16cmである。断面形は逆台形で埋土には礫が多数入れられている。出土遺物はない。

#### S D1061 ⑥区 I KO06～KR03 (第312図)

⑥区の現耕作土直下の灰褐色土上面で検出された。溝跡は北東～南西に緩やかなS字を描いて走り、条里的地割や明治時代の公図にみえる地割とも異なった方向で走る。この変則的な走行方向の原因は、北側に④区から延びる小規模な埋没した低位微高地があり、それに規定されているのではないかと想定された。この溝は北側先端が現用水に切られて不明であり、また、西端は③区に延長されるが③区では調査されていない。埋土は褐灰色粘土質土である。出土遺物はないが、周囲の検出面で大窯の天目茶碗が出土した。検出土層から近世と推定される。

#### S D1063 ⑥区 II QS01～QS03 (第312図)

現用水(用水3)の下部に位置する溝跡で、部分的にしか調査していない。調査区壁にかかった溝跡の断面図からは複数の掘り直しと、埋土の一部に⑥区南端の微高地から延びる土層が入り込んでいることが確認された。この微高地から延びる土層の上層では近世末期の陶磁器が採取されているので、少なくとも近世後期以前には存在したとみられる。それ以前の状況については詳細不明であるが、本溝跡にS D1017が接続し、その上流にあたる①-2区の現用水は中世後半まで遡るとみられるので、本溝跡も中世に遡る可能性がある。用水と思われる。

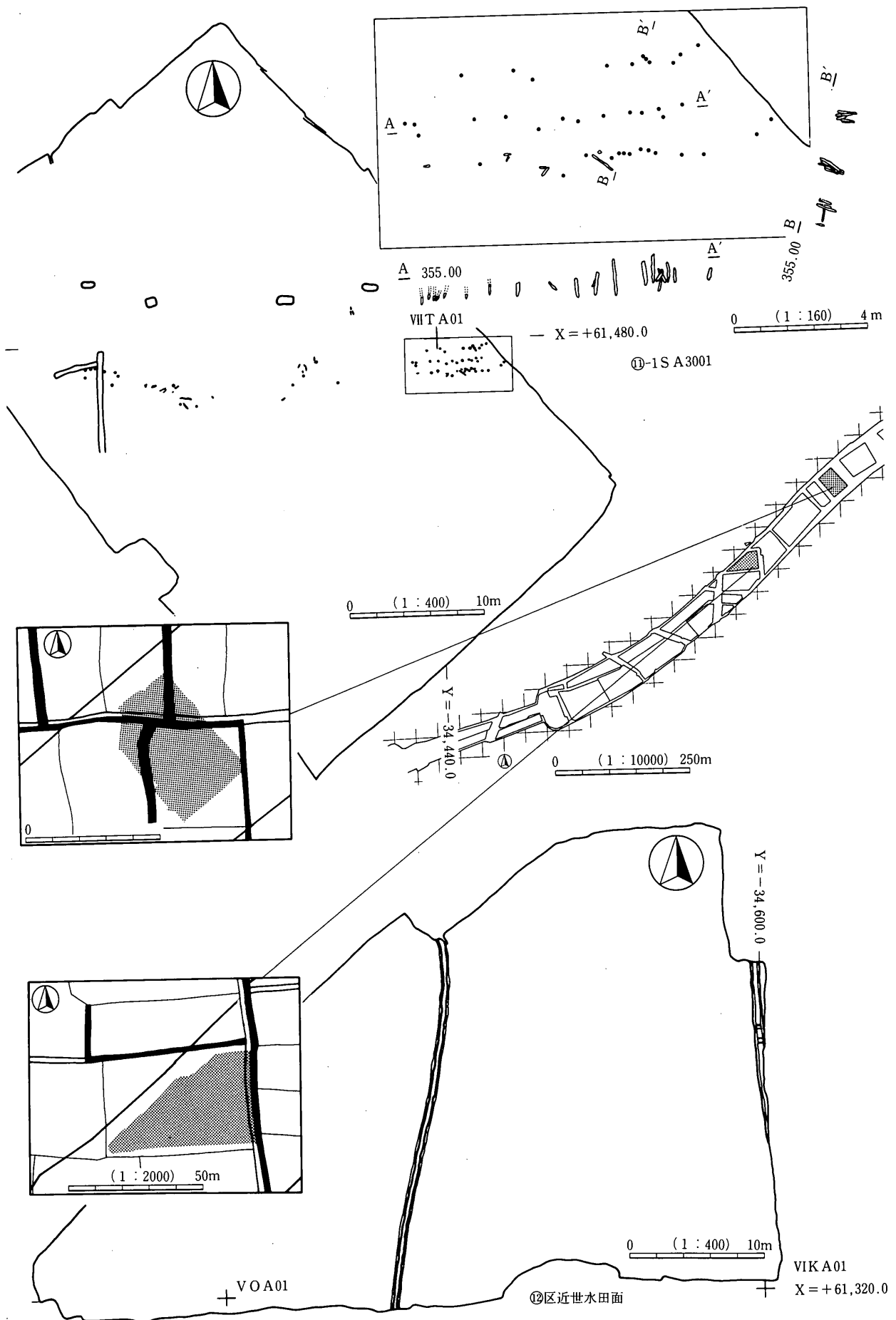
### (2) 微高地東側低地の遺構

微高地東側低地では微高地境から①区前後までは低地の埋没と水田土壌の上昇が見られるが、中世以後～近世の土層は非常に薄い。また、この部分では上部が攪乱されていることもあり、近世の土層を統一的に把握することができなかったが、微高地東側を中心に広範囲にひろがる洪水砂層が確認され、⑫区で水田面の調査を実施した。その一方で⑮区以東の聖川沿いでは厚い堆積土がみられ、洪水による埋没水田の存在も推測されたが、調査期間との関係や初年度調査の排土置場とされて上層の遺構が傷んでいたために調査は実施していない。このように微高地東側低地では限定的な範囲しか調査を実施しておらず、検出された遺構は非常に少ない。検出された遺構としては⑫区水田跡と⑪区の杭列、微高地周辺の⑨・⑩-2区で検出された溝数条があるに過ぎない。

#### ア 近世水田 ⑫区 VI・J (第313図、PL57)

この水田面は⑫区前後から以東に遺存する可能性があるが、調査を実施したのは⑫区のみである。調査は⑫区2層の細砂を除去して3層の褐灰色土層上面の水田面を露呈した。この水田を覆う砂層は微高地西側ではそれほど顕著な層としては認められず、ほぼ微高地東側の低地域を中心に分布する。この土層の西限は微高地の⑩区南端まで及ぶが、微高地側では薄くなる傾向があり⑫区西端では厚さ3cmほどである。検出された畦は幅40cm、高さ10cmの南北方向のもので、約25m間隔で2本が並列する。東西方向の畦が検出されていないため水田1枚の規模は不明であるが、中央の南北畦は27mの長さが確認されているので基





第313図 微高地東側低地近世遺構

本的に南北に長い長方形の水田と考えられる。この水田は、古代と比べると非常に大きな区画となっているが、明治年間の公図では検出された畦に一致する地境は記載されておらず、明治年間にはもっと大きな区画に変化した可能性がある。このような広い水田が構築された要因としては低地の埋没による平坦化や、個別水田と用水が接するようにする耕作上の都合によって編成されているとも考えられる。田面では足跡と思われる窪みが多数検出されており、その配置には規則性が認められる。中央の畦両脇に畦と平行する南北方向に足跡があり、そこから東西方向に約1m間隔で並列している。なお、西端ではこの足跡と思われる窪地は確認されていない。出土遺物は寛永通宝、キセル、陶磁器類がかなり多く出土している。ただし、上層のレンガやコンクリート基礎を含む攪乱が水田面までおよんでいたため、若干混入した遺物がある。

#### イ 杭列

##### S A 3001 ①-2区 VIIST02~TC02 (第313図)

①-2区の3層上面で検出された。調査ではこの調査面が中世の土層とされていたが、杭頭は2層まで達していることから近世の所産と考えた。杭の分布は①区の坪境付近にそって3か所に分かれており、それぞれに杭配置状況が若干異なる。東端では東西方向に幅約2m、南北約7mの範囲で3列並列する。中央部の杭列は数本の杭が散在的に検出されているのみで、西端では若干不規則にほぼ1列で散在的に検出されている。これらの杭はいずれも枝状の細い丸木杭である。杭列に伴うと判断される遺物はない。石川条里遺跡内では近世の杭列は基本的に用水に伴っているものが多く、この状況から類推するとS A 300は用水に付随する可能性が高い。

### (3) 微高地の遺構

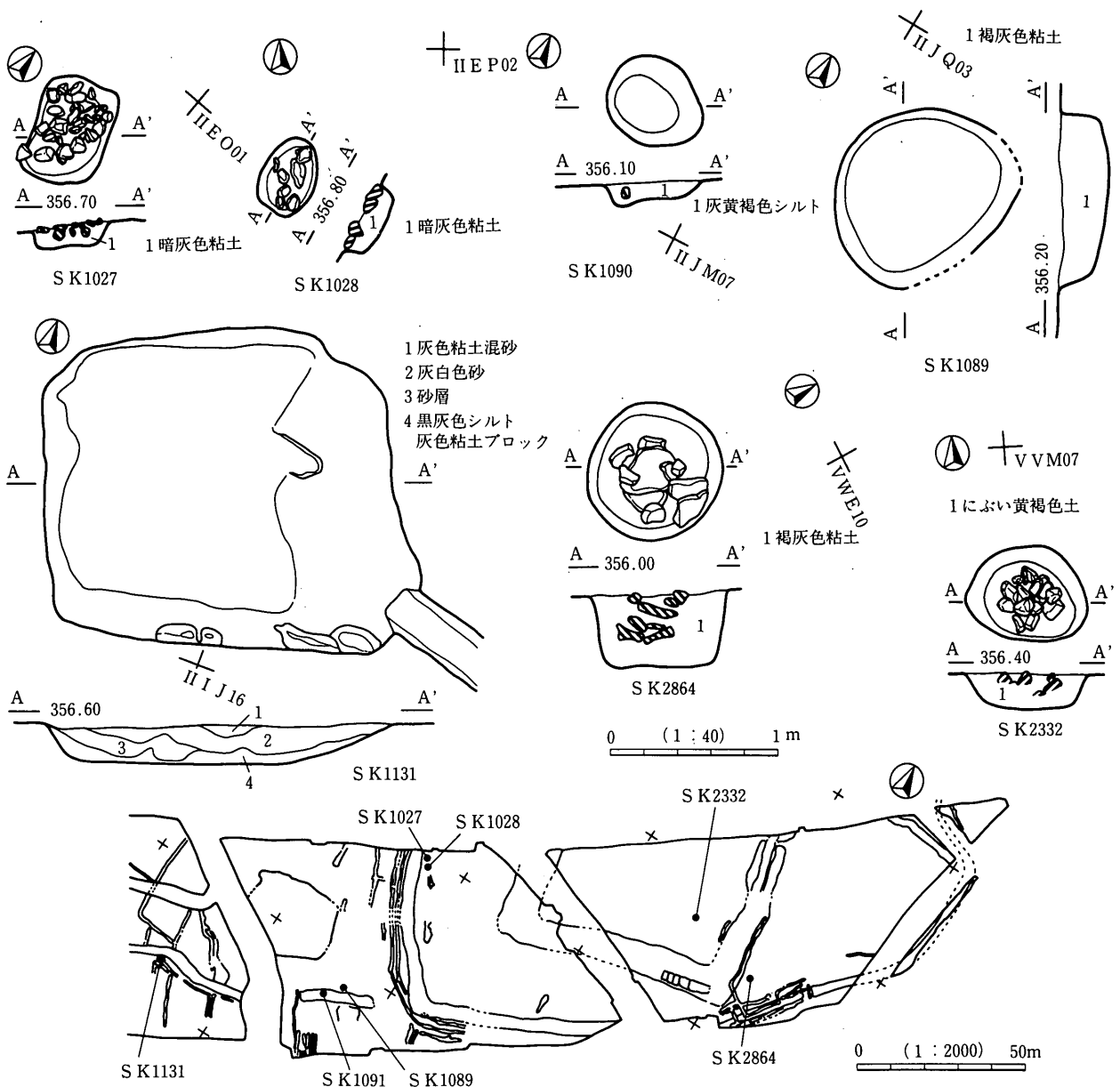
低地埋没進行と西側山地際が高くなる地形変化のなかで、微高地範囲は減少し、逆に水田域は微高地縁辺部を取り込んで拡大してくる。また、用水の編成に伴って微高地の水田化も進められてくるようである。このような変化のなかで微高地境では低地に続く土層もみられるが、基本土層を統一的に把握できなかったために詳細な層毎の調査は実施していない。また、近世の堆積土層のみられない微高地上では古墳時代・中世の遺構と同一調査面で溝跡や土坑が検出されている。検出された遺構には居住遺構は見られず、ほぼ耕作地関連の遺構と思われる。しかも水田関連のものともみられることから、塩崎用水の構築以後の所産が中心であると推測される。なお、中世館の堀跡は近世において水田や用水として利用されているようで、明治時代の公図でも堀跡がそのまま畑地帯内の細長い水田として確認できる。

#### ア 土坑

出土遺物から近世の所産と断定できたものはS K 1131の1基のみであり、その他は水田耕作土に類似する埋土から微高地内や周辺で水田が拡大してくる近世の所産と判断したものである。これらの土坑の特徴は水田耕作土に類似した灰色を帯びる粘土を埋土とし、比較的浅く、礫を多数含むものが多い。分布はS K 2332以外は現用水にほど近いところで散在的に見られる。これらの特徴から、近世土坑の多くは水田耕作の際に邪魔になる礫を水田境周辺に埋めたものであると思われる。なお、掘り込みが浅く、埋土に多数の礫をもつ点ではS K 1013も類似し、近世の可能性もあるが、出土遺物から中世に含めた。また、中世とした円形の浅い井戸状遺構や低地の土坑も近世に入る可能性も残されるが、近世陶磁器の大型破片やまとまった量の出土が見られないので概略中世と判断して中世のところで扱うことにした。

##### S K 1027 ⑤-1区 IVEN01 (第314図)

S D 1009上面で検出した。平面形は長軸66cm、短軸46cmのやや不整な長方形を呈し、深さは検出面から約10cm、断面形は逆台形である。埋土は暗灰色の粘土で小礫が上部に密集して検出された。出土遺物はな



第314図 近世土坑実測図

い。埋土が水田土壌に類似するので微高地域が水田化され始める近世末期の所産と考えた。性格は耕作に伴うものと思われる。

**S K1028** ⑤-1区 IIE002 (第314図)

S K1027に近接してS D1009を切っている。平面形は長軸44cm、短軸32cmの楕円形で、検出面からの深さ約20cmの箱形の断面形である。埋土や礫が多数検出された点は上記S K1027と同じである。従って、本土坑とS K1027は類似した契機の所産と思われる。性格は上記S K1027同様に耕作関連の遺構と思われる。

**S K1089** ⑦-2区 IIJQ03 (第314図)

⑦-2区の低地境で検出した。平面形は長軸110cm、短軸96cmを測る楕円形の浅い土坑である。S D1061を切る。埋土は褐灰色粘土の単層であり、周囲の中世S K埋土と土質が異なる。水田域が拡大した近世の所産と推定され、性格は不明であるが耕作に関連した遺構と思われる。

**S K 1090** ⑦-2区 IIJL06 (第314図)

⑦-2区南部の低地境で検出した。平面形は長軸約60cm、短軸約50cmの楕円形の浅い土坑である。切りあいはない。埋土は灰黄褐色粘土の単層で土質はS K 1089と類似する。出土遺物はないが、S K 1089同様の時期の所産と考えられる。性格は不明である。

**S K 1131** ⑦-1区 IIII15、IJ15 (第314図、PL56)

S D 1022が緩やかにカーブする南縁に近接して位置する。平面形は東西208cm、南北190cmの方形を呈して南東隅にS D 1026が接続する。断面形は検出面からの深さ約20cmで東側が傾斜の緩やかな逆台形を呈する。なお、南壁際では鋤先痕が認められた。埋土は上層に砂混じりの粘土、中位に砂層、下位に粘土混じりの砂層、粘土ブロック層がある。出土遺物は瀬戸美濃産陶器碗、瀬戸美濃産磁器皿・瓦などがある。本土坑は位置的にS D 1022からの取水施設と思われる。年代は出土遺物から19世紀と思われる。

**S K 2332** ⑧-2区 VVL07、VM07 (第314図)

平面形は長軸74cm、短軸55cmの楕円形を呈し、壁は緩やかに傾斜して底面に連続する。切りあいはない。埋土はにぶい黄褐色土で水田耕土に類似し、礫を多量に混入する。出土遺物は古墳時代の土器小片が採取されたのみである。近世の出土遺物はないが、埋土が水田耕土に類似することから微高地域に水田が拡大する近世の可能性はある。性格は不明であるが耕作関連遺構と思われる。

**S K 2864** ⑩-1区 VWD10 (第314図)

平面形は直径82cmの円形を呈し、壁は垂直、底面は平坦で検出面からの深さは44cmを測る。本跡がS D 1016を切る。埋土は白味を帯びる強粘性土の単層で埋土中央部上面で礫集中が検出された。出土遺物は古墳時代の土器片が僅かに得られたのみである。周囲の中世遺構とは埋土が異なるので、近世の可能性が高いと判断した。性格は不明である。

## イ 溝跡

微高地では多くの溝跡が検出された。その多くは微高地境や微高地西側を中心に分布し、水田関連の溝と見られる。年代的には近世後半～末期、あるいは近代のものが多いと思われる。なお、S D 1049は古代の可能性もある。

**S D 1001** ⑤-1～⑦-2区 IIEK02～IVAB20 (第315図、PL56)

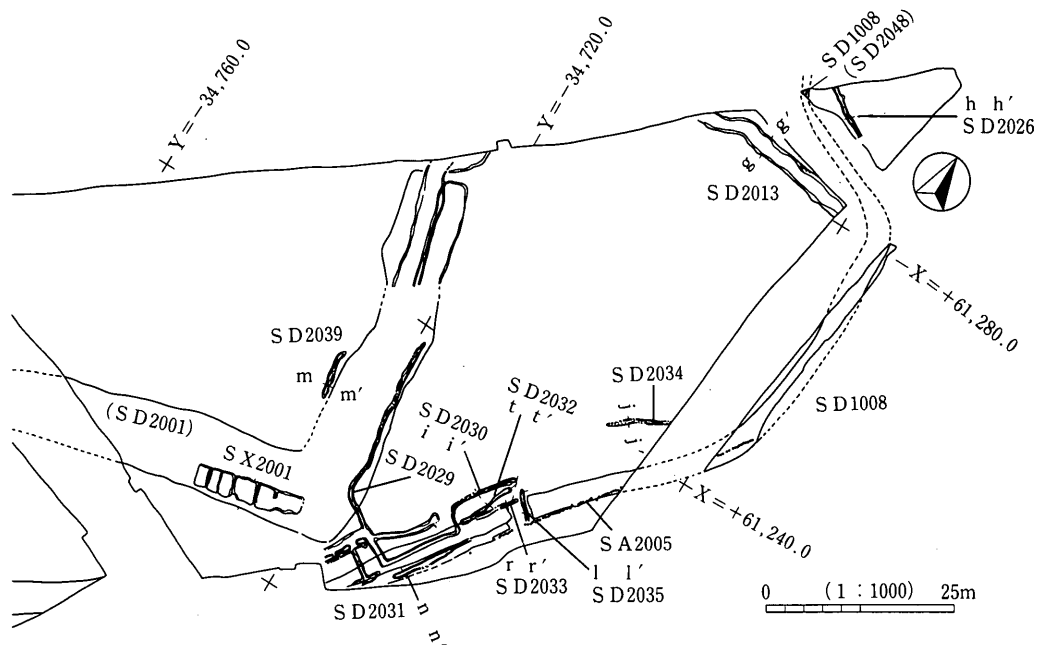
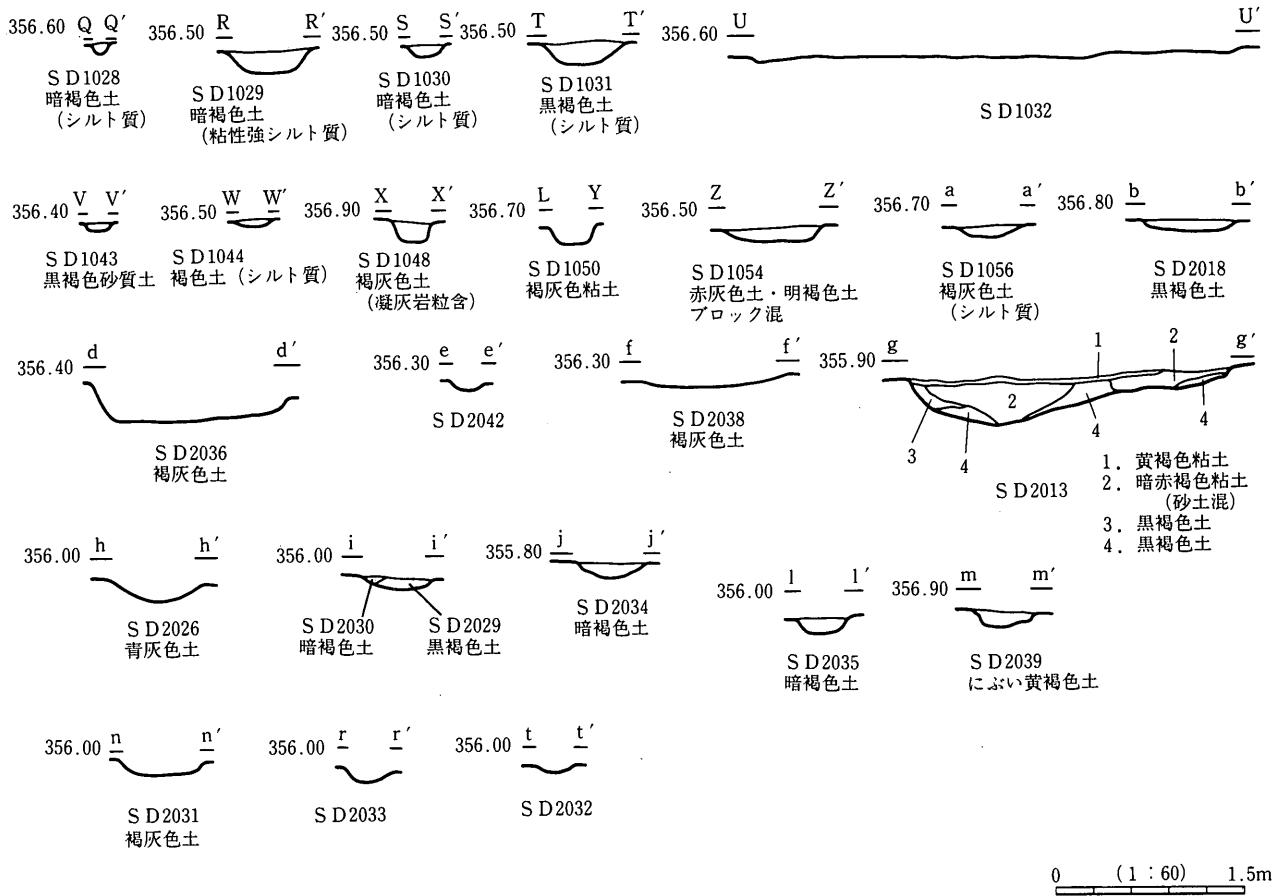
古墳時代大溝S D 1016跡の凹地に位置し、ほぼ中世のS D 1008西辺に平行して位置する。南延長先にはS D 2036があるが、一旦途切れることやS D 2036部分のみが現用水と重複することからここでは分離して扱う。溝の北端は調査区外へのび、⑤-1区北壁で現代の水田耕作土下まで立ち上がり確認できる。切りあいは本溝がS D 1008・1011・1016を切る。なお、⑤-1から⑦-2区まではS D 1002と平行するが、南辺で同様に平行するS D 2036・2037・2038は延長先の⑧-1区調査区壁でS D 2038→2037→2036の順で作られていることが知られた。S D 1001とS D 2036が対応する可能性があるので、本溝跡もS D 1002に後出する可能性が推測される。

本溝跡は調査区内では直線的に走り、先端付近で細い枝溝を派生させて緩やかに立ち上がり、長さは約43mを確認した。幅は約0.6m、断面形はU字状を呈して⑤-1区調査区壁土層図では深さ約40cmを測る。底面はあまり凹凸はないが、緩やかに南へ傾斜する。埋土は粘性の強い褐灰色土の単層で凝灰岩風化粒を少し含む。遺物は近世の肥前産染付碗や瀬戸美濃産陶器皿、すり鉢、瓦の他に混入と思われる古墳時代～中世焼物片がある。本溝跡は構築場所や形状から水田に伴う区画溝か用水と推定され、S D 1008を踏襲した土地区画のなかでS D 1002を微高地よりに移動させたものと思われる。

**S D 1002** ⑤-1～⑦-2区 IIEJ02～ES18 (第315図、PL56)

北端は調査区外へ延び、S D 1001西側に平行して南端は⑦区内で立ち上がる。⑦区で一旦途切れるもの





第316図 微高地域東部近世溝跡分布とセクション

の、S D1008南辺側へ続くS D2037は本溝跡と関連していた可能性もある。遺構の立ち上がりは⑤-1区調査区北壁の観察から現代の水田耕作土の1枚下の土層まで確認できた。本溝跡がS D1010・1011・1016を切る。また、面的調査では直接切りあいが確認されなかったが、⑧-1地区南壁土層図ではS D2038→S D2037→2036の順で構築されていることが窺えている。S D1001がS D2036、本溝とS D2037が関連するとみられるので本溝跡もS D1001に先行する可能性がある。溝は直線的に走り、約36mを確認した。幅は1m前後で断面形はU字状を呈し、⑤-1区北壁土層図では深さ約40cmを測る。埋土は全般的に粘性の強い褐灰色土であるが、⑤-1区北壁セクションでは上下2層に分層され、掘り直しの可能性が知られた。底面はあまり凹凸がないが、緩やかに南へ傾斜し、南端で多数の礫の集中が検出されている。遺物は近世の肥前系染付碗、瀬戸美濃碗の他に古墳時代～中世焼物片と鉄滓がある。本溝跡はS D1001に先行する水田に伴う区画溝か用水と思われる。

#### S D1003 ⑤-1区 IIEG04～EK12 (第315図)

調査区壁の土層観察から現代の耕作土直下まで立ち上がりが確認される。S D1016西岸上部に位置して、S K1020を切る。北端は⑤-1区調査区外へ延び、南端は⑦区方向へ続くが、⑦区内では検出されていない。S D1001・1002と同じ方向で直線的に走り、調査区内での長さ約18mである。途中で東西方向に枝溝が分岐し、その南に集石が検出されている。なお、途中で分岐する溝は調査でS D1004としたが、整理では同一の溝と考えてS D1003に統一した。幅は約70cm前後で断面形はU字状を呈し、⑤-1区壁土層図では深さ約32cmを測る。埋土は記録がなく不明である。遺物は近世の瀬戸美濃産陶器鉢と古墳時代～中世焼物片がある。本溝跡は微高地が水田化された段階の所産と推測される。その性格は形状から疑似畦畔か区画にかかわる遺構と思われる。

#### S D1005 ⑤-1区 IIEC05～ED09 (第315図)

1面目で検出し、本溝がS D1007を切る。北端は調査域外へ延び、南端は⑤-1区内で立ち上がる。ほぼ南北方向に走り、幅は最大1.7m、長さは約7.4mである。断面形はU字状で検出面から最深部で10cmを測る浅い溝である。埋土は褐灰色粘土の単層で出土遺物は古墳時代土器片、古代須恵器甕しかない。本溝跡は埋土から微高地上が水田化された近世の所産と思われる。なお、走行方向や位置関係からS D1006と関連すると思われる。

#### S D1006 ⑤-1区 IIEG13～EH14 (第315図)

1面目で検出した。本溝がS D1007を切る。北端は⑤-1区内で立ち上がり、南端は⑦区へ続いていくが未検出である。また、走行方向からS G1001に接すると思われるが両者の関係は不明である。長さ約4.0m、幅約1.2mの南北方向に走る溝で、断面形は緩やかな逆台形で検出面から深さ約10cm弱を測る。埋土は褐灰色の粘土層の単層である。遺物は古墳時代土器片が若干得られたのみである。この溝跡は埋土・走行方向・位置関係からS D1005と関連するとみられ、ほぼ一連の近世の水田関係の溝跡と思われる。

#### S D1013 ⑤-1区 IIEP03～EQ04 (第315図)

1面目で検出したが、周囲が攪乱で乱されて調査できた範囲は非常に狭い。S K1050を切り、S D1014に切られる。S D1014に先行して検出したが、調査途中でS D1014に切られることが判明した。また、本溝跡北側にあるS D1009は埋土の違いから別の溝とし、南側延長先にあるS D1018は埋土や位置は類似するが直接関係がつかめなかったのでこれも別の溝として扱うことにした。S D1014重複部分から分岐して南北方向に緩やかなカーブを描いて走り、東部に枝溝を発生させている。南端は緩やかに消え、調査では長さ約2.6m程を検出した。幅は約0.5m、断面形はU字状を呈して検出面から10cmほどの深さを測る。埋土は上下2層に分層され、上層に褐灰色粘土、下層に褐灰色細砂があり、流水があったと推定される。遺物は古墳時代や古代の土器がある。遺物は古代までしか含まれていないが、流水が想定されることや埋土上

層が隣接するSD1001～1003などと類似することから微高地が水田化した近世以後の所産で、用水と思われる。なお、SD1014は本溝を改修したものと思われる。

#### SD1014 ⑤-1区 IIEP03～EQ04 (第315図)

SD1013と重複するように位置し、SD1013調査中に本溝跡が判明した。SK1050、SD1013を切る。北端は攪乱で切られ、南端は緩やかに消える。幅約50cm、確認できた長さは約2.6mである。断面形は緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは8cmを測る。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物はない。本溝跡は位置からもSD1013を改修したものと思われる。また南の延長上に位置するSD1018とは何らかの関連も推定されるが、直接その関係はつかめていない。

#### SD1015 ⑤-1区 IVAE02・03 (第315図)

⑤-1区東部に位置する。調査記録では遺構番号が記されずに遺構名が不明となっていたが、整理段階の遺構番号の照合作業によってSD1015と認定した。南端は浅く立ち消え、全長約1.7mを測る。幅は30cm前後、検出面からの深さ7cm前後と非常に浅い。出土遺物は古墳時代土師器小片のみがある。埋土は不明である。溝の走行は中世のSD2001と一致しており、中世以後の所産と思われたことや、溝北端の始まる位置を真西に延長するとSD1013・1014の始まる位置と一致しており、この点からSD1013・1014と近似した時期の所産と考えた。

#### SD1018 ⑦-2区 IIES09～IVAA10 (第315図)

SD1008の東側岸付近に平行する溝である。溝北端部が⑦区調査区北壁にかかり、この壁の土層観察から現耕土下の灰色砂質土と、その下層の本溝上部で途切れる灰黄褐色粘土質土層下部まで立ち上がることが判明した。溝の北端は⑦-2区内で立ち上がり、南端は重機で削平してしまった。確認できた長さは約6.2mである。SA1001のSK2825を切る。本溝は一旦⑦区内で立ち上がるが、本溝の北側延長上に同方向で走るSD1013・1014が位置し、埋土の類似からも相互に関連すると思われる。幅は最大約2mで、南端では細く不整形となるが、これは底面の凹凸が著しい溝跡を底面近くで検出したためである。⑦区北壁土層図からは断面形がU字状で、深さは上端から約30cmを測る。埋土は下から順に黒褐色粘土層、砂混じりの黒褐色土ブロック土層、砂混じりの褐灰色土ブロック土層、褐灰色シルト層であり、使用時には流水がみられたものの、最終的に人為的に埋められていると思われる。遺物は古代須恵器杯が1点のみある。近世の微高地水田化に関連する遺構と考えられ、その性格は用水と思われる。なお、本溝跡より西側に分布する灰黄褐色粘土質土を耕作土とする段階では廃絶していたことが知られる。

#### SD1019 ⑦-2区 IIJI08～JS04 (第315図)

1面目で検出した。現用水付近の下部にあたり、SD1007・1059・1060・1061を切る。なお、SK1090・1146は本溝調査後に検出されたもので、SK1090は埋土から本溝に前後する時期とみられる。⑦-2区南部の低地と微高地の境で東北東－西南西方向に走る幅広く浅い溝である。幅は約3.3m、断面形は浅い逆台形を呈し、底面はやや凹凸があるものの高低差はあまりない。深さは検出面からもっとも深いところで10cmを測る。埋土は凝灰岩粒の砂を多く含む褐灰色シルトで、砂の含まれ方から砂の多い下層とやや少ない上層に分層された。遺物は古墳時代土師器小片、古代須恵器甕などがある。埋土および形状から、近世の微高地境の水田化が進行する段階の所産と考えられる。この溝上部付近には現代の用水(用水7)が位置し、本溝はそれに先行するものか、あるいはこの用水脇に作られた畦の痕跡と思われる。

#### SD1022 ⑦-1区 IIHM19～JB13 (第315図、PL56)

コンクリート製三面側溝の現用水(用水4)下部の溝である。この現用水は四ノ宮集落背後の沢から塩崎用水を立体交差して水田域に入り、③区北端から⑥区内は坪境に沿って走って、現用水(用水6)に接続するものである。調査前では1本の用水であったが、明治時代の公図では⑥区内で南へ折れ曲がる用水



3と本溝跡上部の用水4が分岐・並列し、微高地部分には用水4が延長されている形態であった。SD1023、1025・1049・1051を切る。用水6と接続する付近にあるSG1001とは何らかの関連もあると想定される。この溝跡は⑦-1区の微高地部分ではほぼ東西方向に蛇行して走り、約62m検出された。⑥区内ではほぼ平安時代埴境位置に一致するものの、⑦-1区微高地境部分から位置がずれて蛇行していたが、これは一定の水位を確保するための所産と思われる。また、流水が直接当たる蛇行部には護岸のための杭が密集して打たれている。幅は平均して2m前後であるが、⑦-1区中央で大きく蛇行する部分では約4mを測る。断面形はU字状で検出面からの深さは約60cmを測り、低地境では底面は平安時代の水田層まで達する。⑥・⑦区境の壁セクションの観察から、現代のコンクリート側溝に換えられるまでに大きく3回掘り直しが確認され、底面は徐々に上昇していることが窺える。埋土はいずれも細砂や粗砂を大量に含む土層で構成される。遺物は近世末期ころと思われる瀬戸美濃陶器碗・皿・鉢・土瓶、松代焼甕や古墳～中世焼物がある。

本溝跡は周囲に接続する溝を多数もつ幹線用水と思われる。周囲の溝跡との接続のしかたは北側では直接直交して接続し、南側では一旦平行する小規模な溝や土坑に取水してから間接的に各水田に配水する違いがある。本溝跡の年代は近世末期で、塩崎用水の構築年代と近い時期と推測される。このことから、用水3から取水していた山際の水田が塩崎用水取水に変化して相対的に水が余り、その水を利用しての水田域拡大が計られて本溝跡が構築されたと推測される。

#### SD1023・SD1024 ④・⑦-1区 IIH06～IJ13、DC18～IJ12 (第315図、PL56)

低地～微高地部にかけて位置し、相互に関連する溝と思われたので一括して扱う。検出面は④区では4層上部まで立ち上がり、⑦区では1面目とした調査面で検出した。畝状溝跡のSD1045を切る。SD1023は④区東端から⑦-1区の東側にかけて南北に走り、北端は④区内で不明となるが、南端はSD1022と接続する。確認できた長さは約26.2mである。幅約0.4m、断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。底面の高低差はあまりない。SD1024はSD1023の南端付近で西側へ直角に分岐する溝で約13.5m西へ走った後、さらに直角に折れて約34m南北に走る。幅0.4m、断面形は緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。④区内ではSD1024と平行する長さ約8.3m、幅約0.3mの短い溝が検出され、さらにSD1024から直角に西方向へ分岐する長さ約32.8m、幅20cmの細い溝が検出されている。埋土はSD1023がマンガンの浸透した黒褐色土の単層、SD1024は酸化鉄の浸透した褐色土の単層である。この両者の溝埋土の違いは浸透した金属の違いによるもので、質的には大差ない。調査ではSD1023・1024相互の切りあいは確認できていないが、おそらく同時存在した段階があったと思われる。出土遺物はSD1023から近世の瀬戸美濃産陶器碗、弥生時代土器片、古墳時代土器小片があり、SD1024は古墳時代土器小片が出土した。

出土遺物やSD1022との接続関係から本溝跡は近世以後の所産で、用水・水田区画の溝と思われる。なお、溝が立上がる④区4層上部の3層は山砂が多く含まれるが、溝埋土には山砂が顕著でないのでSD1022が運搬する堆積土が増加してくる以前に作られた可能性がある。また、SD1023とSD1024とは浸透した金属の違いが認められることから同時存在した時期がありながらも、その存続時期や性格が異なる可能性もある。このことは④区の調査区壁土層の観察からSD1023の区画は現代の畦へ継承されるが、SD1024上層にはさらにいくつかの水田土層が載ることからも推測される。従って、構築の時期は近似していたが、SD1024のほうが早くに消滅すると思われる。

#### SD1025 ⑦-1区 IIK06～IR13 (第315図)

微高地上の1面目で検出。SD1022に切られるように検出されたが、これはSD1022の改修によるもので、配置位置から同時存在とみられる。⑦-1区の微高地北東部に位置し、現用水(用水6)に平行している。北端は⑦-1区の北壁まで確認したが、延長先は④区内では確認されていない。また、この北延長先は

S D1023と交差すると推定されるが、切りあいや関連は明らかにできなかった。南端はS D1022と接続する。北西から南東にかけて緩やかな逆S字状に蛇行し、長さは約11.6mを測る。幅は北端が細く50cmであるが、南ほど幅広くなりS D1022接続部で約1.9mを測る。断面形は全般的に浅いU字状を呈して南へ傾斜し、深さは検出面から15cmを測る。底面は流水によると考えられる凹凸が著しい。埋土は記録ミスで不明である。遺物は弥生土器、古墳土師器小片、古代須恵器杯、中世カワラケなどがある。本溝跡は南端がS D1022と接続することから近世末以後の所産の可能性が高い。流水痕が認められ、蛇行が顕著なことから洪水等で氾濫した痕跡と思われる。

#### S D1026 ⑦-1区 IIIJ15～IM16 (第315図)

微高地上の1面目で検出。S D1027と接するが、他遺構との直接的な切りあいはない。S K1131とは同時存在で、本溝の延長に位置するS D1043は本溝跡の続きである可能性がある。S K1131南東隅から始まり、S D1022に平行して東西方向に走る。長さはS D1043とした部分を含めると約13mと推定される。幅30cm、断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。埋土はマンガンの浸透が著しい黒褐色シルトの単層である。遺物は天目茶碗と古墳時代土師器小片がある。天目茶碗は胎土がやや褐色を呈するもので産地等は子細不明である。本溝跡はS K1131との関連、および東端付近から始まるS D1030との関連を考えると近世末期のS D1022構築以後の所産で、S D1022から取水した水を水田へ流す用水と推定される。なお、S D1027に後出するとすれば、本溝はS D1022の掘り直しに合わせてS D1027から取水していたものを作り変えたとも考えられる。

#### S D1027 ⑦-1区 IIII16～IL16 (第315図)

微高地上の1面目で検出した。S D1028とは同時存在し、S D1026との関連は不明である。本溝は南北に走るS D1028の途中から始まり、S D1026と接するあたりまで検出したが、その先は不明である。「く」の字状に屈曲する東西方向の溝で、長さ約5.6mを検出した。幅は「く」の字状に折れる西側で約0.4m、東側が幅広く約1.0mを測る。断面形は緩やかな逆台形で、検出面からの深さは11cmを測る。東半分の底面は凹凸が著しい。埋土は部分的に砂を含み、マンガンの浸透で暗褐色にみえるシルトの単層である。遺物はない。本溝跡は水田へ取水するための溝と思われるが、S D1026との前後関係は把握できなかった。また、S D1029は本溝と接続していた可能性がある。

#### S D1028 ⑦-1区 IIII16～IJ17 (第315・316図)

微高地上の1面目で調査した。S D1027西端に接続してS D1022と直交方向に直線的に走り、S D1027とは同時存在と思われる。北側の立ち上がりは確認したが、南端は重機で削平してしまい、残存した3.7mほどを調査した。幅14cm、U字状の断面形で検出面からの深さは10cmを測る。埋土はマンガンの浸透で暗褐色に見えるシルトの単層である。遺物はない。時期はS D1027、1022との関連から近世末期以後と思われる。水田へ取水するための用水と思われる。

#### S D1029 ⑦-1区 IIIL16～NO03 (第315・316図)

微高地上の1面目で検出した。本溝の延長先にあたる⑦区調査区南壁の土層観察からS D1030・1031同様に現耕作土の1枚下の水田耕作土層まで立ち上がることが確認された。S D1034、1036、1037、1051を切り、S D1027とは位置的に関連していた可能性がある。北端はS D1027が切れるあたりで緩やかに立ち上がり、南北方向に直線的に走る。重機で南端は削平してしまいが、本溝の延長先が調査区南壁で確認され、本来は22m以上の長さがあると思われる。幅はもっとも幅広い所で約1mを測る。断面形は立ち上がりの緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。埋土はマンガンの浸透で暗褐色にみえる粘性の強いシルトの単層である。遺物はない。S D1030や1031と埋土が類似し、立ち上がる土層面が同じであることから、近世末期以後の所産と推定される。性格はS D1027か、S D1026から取水した水を南に

流す用水ではないかと思われる。

#### SD1030 ⑦-1区 IIR15~IT18 (第315・316図)

微高地上の1面目で検出。調査区壁土層の観察から現耕作土の1枚下の水田耕作土層まで立ち上がりが確認された。本溝跡はSD1036・1051を切り、SD1043とは接して同時存在と思われる。また、平行して検出されたSD1031は調査区壁土層の観察から本溝を切ることが判明した。北端はSD1043に接してはじまり、SD1031と平行して南東方向へ延びるが、南端は重機掘削の際に掘削してしまった。しかし、調査区の南壁に溝の延長先が確認され、本来は16m以上の長さと思われる。幅約40cmで断面形は緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。底面のレベルはあまり高低差がない。埋土は暗褐色シルトの単層である。遺物は古代の灰釉碗片のみがある。SD1026・1043に接して始まり、しかも現耕作土の1枚下の土層まで立ち上がりが確認される点、本溝と重複して平行に走るSD1031では近世末のすり鉢が出土している点から、本溝跡は近世末以後の所産と推定される。底面の高低差があまりないものの、SD1043との関連から水田の用水として構築されたもので、SD1031は本溝の作り替えであると推定される。

#### SD1031 ⑦-1区 IIS15~IT18 (第315・316図)

微高地1面目で検出。溝延長先が調査区南壁にかかり、その観察からは溝の立ち上がりが現耕作土1枚下の水田耕作土層下部まで確認できる。SD1036・1051を切り、SD1030を切る。北端はSD1043と1044をつなぐラインからはじまり、端部はSD1044方向へ少し突出する。SD1030と平行して南東方向へ延び、南端は重機掘削で掘削したが、調査区南壁に延長先が確認されたので、本来は16m以上の長さがあると思われる。幅40cmで断面形は緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。底面のレベルは北部がやや低いものの、あまり高低差がない。埋土はマンガンの浸透が顕著な暗褐色シルトの単層である。遺物は近在窯産すり鉢片があり、近世末期以後の所産と推測される。本溝跡はSD1030と同様にSD1022から取水した水をSD1026・1027-1043とSD1044をつなぐラインを経由して南に流す用水と思われる。SD1030の作り替えであると判断された。また、本溝北端の突出部はSD1044と接続する部分と思われる。

#### SD1032 ⑦-1区 IIMQ05~MT05 (第315・316図)

微高地境に位置し、1面目で検出。切り合いはない。幅約2.2mで東西に走り、東端部は南側にやや突出して幅1.8mと幅広である。断面形は浅い窪み状で深さ10cmを測る。西側は⑥区に続くと思われるが、⑦区の約8.2mのみ検出した。埋土は砂を含む褐灰色の単層で古墳時代土師器小片、古代の黒色土器A杯A、中世のカワラケが出土している。現耕作土直下から掘り込まれることから近世以後の所産と思われる。耕作に伴う何らかの痕跡か疑似畦畔ではないかと思われる。

#### SD1043 ⑦-1区 IIN16~IR15 (第315・316図)

微高地の1面目で検出した。SD1022南側に平行して走る細い溝で、西端はSD1026の延長上に位置しており、本来は接続していたと考えられる。東端はSD1030と接して緩やかに上がる。幅は20cm前後と一定しており、長さは8.7mを検出した。断面形は立ち上がりの緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは6cm前後である。底面は比較的平坦で緩やかに東へ傾斜する。埋土はマンガンの浸透で暗褐色にみえる砂質土の単層である。遺物はない。本溝跡はSD1022と平行していることや、近世末期以後と捉えられるSD1030と接する点からほぼ同時期と推定され、SD1022から取水した水をSD1026を仲介として流す用水と思われる。

#### SD1044 ⑦-1区 IIT15~JA14 (第315・316図)

1面目で検出。切り合いはない。SD1022と平行して東西に走り、西端はSD1031北端東側に突出した部分と接続し、東端は重機で削平して不明である。残存部分は3.4mであるが、東側延長先の現用水付近までとすると7m以上になるとと思われる。幅は遺存状況が良好な部分で約30cmを測る。断面形は立ち上がり

の緩やかなU字状を呈し、検出面からの深さは6cmと浅い。埋土は褐色土の単層である。遺物はない。本溝跡はSD1022から取水した水を水田へ配する枝用水と思われ、SD1031は本溝関連するものと思われる。時期はSD1022との関係から近世末以後と思われる。

#### SD1048 ⑦-1区 IIHP16~HR16 (第315・316図)

1面目で検出。隣接した⑥区境の壁土層に対比させると立ち上がりは現耕作土下まで及ぶ可能性がある。本溝跡がSD1049を切る。SD1022の北側に平行する東西方向の溝である。検出段階で東西端部はそれぞれ削平してしまい、調査区内では4.4m検出したのみである。幅は約30cmで、U字状の断面形で検出面からの深さは20cmを測る。埋土は褐灰色粘土の単層である。遺物はない。SD1022と平行して走る点からSD1050やSD1026・1043・1044と関連するとみられ、近世末期以後の用水に類する溝と推定される。

#### SD1049 ⑦-1区 IIHP11~HP17

1面目で検出。本溝跡はSD1048に切られる。⑦-1区の微高地境のSD1022北側に位置し南北方向に走る。SD1022まで検出したが、その南は重機で低めに掘削したため、SD1022の南対岸まで延長されるか不明である。北端は④区へ延びるが④区内では延長先が平安水田面畦に一致する。幅はほぼ一定し、36cm前後を測る。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。底面のレベルはわずかに北側が低い。埋土は風化凝灰岩粒を含む褐灰色土の単層である。遺物はない。本溝は微高地境の地形変換点に位置することから区画の溝と推定される。時期については南端が不明ながらSD1022と接続する可能性もあること、埋土に風化凝灰岩を含む点を基本土層と比較して近世末期以後の所産と考えた。また、本溝と東に平行して走るSD1023・1024とはほぼ7m間隔で配置していることも補助材料とした。しかし、一方で本溝の北延長先は④区平安時代水田面の畦が一致するため、古代の可能性も残される。この点に関しては溝検出面の高さを比べると本溝のほうが平安時代水田面とほぼ同等か若干高くなることや、水田面では本溝埋土のように凝灰岩粒が混じらないことを考え合わせて、近世の可能性が高いと考えた。

#### SD1050 ⑦-1区 IIHN20~HQ16 (第315・316図)

1面目で検出。現耕作土より1枚下の1層下部まで立ち上がり、本溝上部の褐灰色粘土層がSD1022の2回目の掘り直し溝跡に切られているので、本溝跡はSD1022の2回目の掘り直し以前の所産と捉えられる。SD1022の南側に平行して走り、東端は緩やかに立ち上がり、西端は⑥区へ連続する。確認した長さは約7.1mで、幅は42cm、断面形はU字状を呈し、調査区壁土層では深さ30cmを測る。埋土は南壁から底面にかけて粗砂ブロックを含む褐灰色土、その上部北側に粗砂を多く含む褐灰色土があり、上面が褐灰色粘土で埋められている。遺物はない。本溝はSD1022と平行しており、SD1022から取水した水を水田に流す枝用水と思われる。なお、上面は重機掘削で削平してしまっただが、調査区壁土層観察から、本溝の廃絶後にSD1022寄りに別の溝が再構築されていることが判明した。

#### SD1054 ⑦-1区 IIIA18~IC18 (第315・316図)

低地よりに位置する。検出は微高地2面目で行なったが、埋土の状況や位置関係からSD1022と関連すると見られるので、本来は1面目の遺構と思われる。切り合いはない。SD1022と平行して走り、西端はSD1022側へ屈曲してL字状を呈する。断面形は緩やかな逆台形を呈し、最深部は検出面より12cmの深さを測る。埋土は地山ブロックを含む灰色粘土であり、人為的に埋められている。本溝跡はSD1022から取水する施設で、近世末以後の所産と思われる。

#### SD1056 ⑦-1区 IIIF12~IF15 (第315・316図)

微高地上の2面目で検出したが、位置や埋土から1面目の遺構を見逃した可能性がある。SD1022北側にあり、北端はSD1023に接するあたりで始まり、北西-南東方向に走って南端はSD1022に切られる部分まで続く。確認された長さは約6.1mである。幅は80cm、断面形は立ち上がりの緩やかな浅いU字状を呈

する。深さはもっとも残存する北端で検出面から深さ10cmを測る。底面は平坦であり高低差がない。埋土は褐灰色土の単層である。遺物はない。南端がSD1022に切られるとみられたが、北端がSD1023に接する付近で始まることから、SD1022とは接続していた可能性があり、近世末期以後の所産と推定される。区画か排水に関わる水田関連の溝と思われる。

**SD1062** ⑦-2区 IEN13~EP15 (第315図)

1面目で検出。切り合いはない。SD1002に平行するように北西から南東方向に走り、溝の東側途中にコブ状の突出部がある。北端は⑤-1区へ連続するが、⑤-1区では見逃した。南端は緩やかに消え、全長約5.6mを検出した。断面形は逆台形を呈するが検出面からの深さは5cm前後と浅く、底面は比較的平坦である。埋土は記録ミスで不明である。本溝跡はSD1002と平行して走ることから近世以後の所産と推定される。性格は形状から水田耕作関連の溝であると推定される。

**SD1064~1071** ⑦-2区 IJL12~JP16 (第315図)

微高地西側を貫く現用水6の東脇に並列する溝跡群である。現耕作土の1枚下層から掘り込まれる。南端は調査区外へ延びるが、最大で長さ約8m、幅60cm前後の溝が並列しており、形状から畑跡の畝痕跡と思われる。調査区壁にかかった断面は上端から20~30cmの深さでU字状の断面形となる。埋土は褐灰色の砂を含む土で、炭化物を散在的に含む。出土遺物はない。本溝跡群は現用水6がもたらした堆積土によって用水脇の地表面上昇が起こり、その部分を畑跡にしたものと思われる。検出面からも近世の所産と思われる。

**SD1072** ⑦-2区 IJI08~JM16 (第315図)

現用水6の脇に並列するように位置する溝跡である。西端の立ち上がりは調査区外の現用水畦下へ入り込み、幅広く浅い溝跡である。検出時には色調の異なる土から溝跡と判断したが、現用水の畦に伴う疑似畦畔の可能性はある。出土遺物はない。

**SD2013** ⑤-2区 VMI19~MS20 (第316図)

微高地東端の低地境付近に位置する。検出面は平安時代水田耕作土相当層上面であるが、調査区壁土層の観察から平安時代洪水砂層より上面に構築面が確認された。本溝跡がSD2006、SQ2016、SK2551・2552を切り、交差が予想されるSD1008との関連は直接確認していない。SD1008はSD2049と連続すると思われることから本溝跡との同時存在はあり得ず、低地の埋没と水田域の拡大に伴って用水が微高地寄りに上がってくる傾向からすれば、本溝跡のほうが新しいと思われる。⑤-2区北東部からやや「く」の字状にカーブして入り、そのまま東方向に調査区を貫いて走る。幅は2.6mで断面は南岸側に深く、北岸側に浅く緩やかに立ち上がるU字状を呈する。埋土は底面上に部分的に褐灰色から灰褐色、隣接したSQ2016土が入り込む黒褐色粘土層があり、その上部に褐灰色砂土、暗赤褐色ブロックを含む砂が堆積する。最上部には褐灰色の粘土が混じる褐色粘土層がある。遺物はSQ2016から混入した大量の古墳時代土師器、須恵器甕・蓋・壺・杯、灰釉碗といった古代の焼物、内耳・青磁碗といった中世の焼物がある。埋土や底面の形状や走行方向から聖川系の用水と推定される。時期はSD1008との関係から館廃絶以後の所産で、低地の埋没によって微高地縁辺部が水田域に取り込まれてくる近世に属すると推定した。ただし、調査区壁土層観察から上層に数枚の水田耕作土層が確認されることから、その使用時期は近世でもあまり後半に下らない可能性がある。

**SD2018** ⑧-1区 IVAT09~AT11 (第315・316図、PL56)

微高地の1面目で検出。本溝跡がSK2476、SQ2010を切り、本溝跡の北側延長先に位置するSK2104は出土土器や主軸方向から古墳時代の遺構と思われたが、近世遺物も混入するので埋土の一部は本溝跡の所産と思われる。本溝跡は南に傾斜する南北方向の溝で、調査区内では南端は削平してしまい、調査区内

で5.7m確認した。幅は北側が1.8mと幅広く、南は0.5mと細い。断面形は立ち上がりの緩やかな逆台形を呈し、検出面からもっとも深いところで8cmを測る。埋土は黒褐色の砂を含むシルトの単層である。埋土には礫が多数検出され、北側では礫が散在するが南部は比較的まとまって直線的に並ぶ。出土遺物は近世の瀬戸美濃産陶器鉄釉碗のほかに弥生時代～中世の土器がある。出土遺物からも近世の所産と推測され、耕作地に関連した区画の溝と思われる。

#### SD2026 ⑤-3区 VMO13～MS15 (第316図)

微高地東脇の低地域の現耕作土1枚下で検出。切り合いはない。北西から南東方向へ直線的に走る溝で、北端は調査区外へ延びるが、南端は緩やかに立ち上がる。調査域内では長さ8mを検出した。幅50cmで断面形は緩やかなU字状を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。埋土は青灰色土の単層である。遺物は出土していないが、現耕作土下まで立ち上がり確認されたことから近代以後の所産で、水田耕作関係の溝か区画の溝と思われる。

#### SD2029 ⑩-1区 VWA02～WK06 (第316図、PL56)

微高地の1面目で検出され、SD1008・2001を切り、SD2030に切られる。⑩区SD2001南東屈曲部からSD1008土橋南部周辺に位置し、枝状に分岐する細い溝が複雑に接続する。大きくはSD2001東岸上部を南北に走る溝、SD1008上部や周辺を南西から北東に走ってSD1008土橋付近で大きくカーブする溝、さらに南西部で南北方向の短い溝で構成される。溝の接続関係が複雑で複数時期にわたる溝の集合である可能性もあるが、埋土の上から溝を分離することはできなかった。幅は20～50cmほどで、断面形は浅いU字状で検出面からの深さは10cm前後を測る。底面はあまり高低差がない。埋土はマンガンの浸透が著しい黒褐色土である。遺物は古墳時代～中世の土器などがあがる。本溝跡は中世館のSD1008、2001とほぼ重複して、それらの溝を切ることから近世の所産と推定され、そのあり方は館西側のSD1001や1002・1003などと類似する。したがって、館の区画を踏襲しながらも微高地縁辺の水田化が進められる段階の所産と考えられる。区画溝の可能性があがる。

#### SD2030 ⑩-1区 VWI09～WK06 (第316図、PL56)

1面目で検出し、SD1008・2001・2029を切る。本溝跡はSD2029がSD1008土橋周辺で「コ」の字状にカーブする部分にほぼ重複して位置する。長さは約5mで、幅は東先端が少し膨らむ部分で24cmを測るが、西側は10cm前後と細くなっている。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。埋土はマンガンの浸透が著しい暗褐色を呈する。遺物はない。本溝はSD2029の一部とほぼ重複することから、その掘り直しと捉えられ、近世の類似した性格の溝と推定される。

#### SD2031 ⑩-1区 VWG17～WK11 (第316図)

1面目で検出し、本溝がSD1008を切る。SD1008土橋南に位置し、SD1008南東岸にほぼ重複する。幅は60～70cm前後で東側が30cmと細くなる。埋土は記録ミスで不明であるが、形状や位置からSD2029・2030と同様と思われる。遺物は古墳時代土師器小片があがる。SD2029や2030と同じく、耕作地の区画を目的として近世以後に構築されたものと思われる。

#### SD2032 ⑩-1区 VWI10～WK07 (第316図)

1面目で検出した北東－南西方向に走る短い溝跡で、SD1008の土橋北側に位置して南端がSD1008を切っている。長さは7.6m、幅は南端と北端がやや広く、60cmを測る。断面形は緩やかなU字状を呈し、検出面からの深さ8cmを測る。埋土は記録ミスで不明であるが周囲のSD2029等と同質とみられる。遺物は古墳時代土師器小片があがる。本溝跡はSD1008を切る点からも近世以後の区画か耕作に伴う溝であると思われる。

#### SD2033 ⑩-1区 VWJ10～WL07 (第316図)

S D1008土橋付近でS D1008北岸を切って位置する。北端はS D2032・2030北端とほぼ類似した位置で立ち上がり、南端は調査ミスで不明である。長さは約6mを検出した。幅は22cmで断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は記録ミスで不明であるが、周囲の類似溝と同様と思われる。遺物はない。本溝跡はS D1008を切っている点や周囲にある類似した溝との関連から近世以後の所産で、耕地の区画の溝と思われる。

**S D2034** ⑩-1区 VRN20～RQ18 (第316図)

1面目で検出し、切り合いはない。⑩区北東部でS D1008から若干離れながらも平行して調査区外へのびる細長い溝である。幅は最大54cm、長さは8.3mを確認した。断面形は緩やかなU字状で、検出面からの深さは22cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土の単層である。遺物は弥生～中世の土器があるが、S D1029などと類似した形態なのでほぼ近似した時期の同様の溝と思われる。

**S D2035** ⑩-1区 VWL07～WM08 (第316図)

S D1008の土橋上に位置する。検出面は1面目で切り合いはない。長さ4.4mの短い溝で幅40cmである。断面形は立ち上がりの緩やかな逆台形を呈し、検出面からの深さは12cmを測る。埋土は暗褐色の粘性の弱い粘土層の単層である。遺物は古墳時代～中世の土器がある。本溝跡の北先端がS D2029・2030の東側先端付近で立ち上がることや溝の形状が類似することから、これらの溝と関連するとみられ、近世以後の区画溝と思われる。

**S D2036** ⑦-2区 IVFG01～AM19 (第315・316図)

古墳時代大溝S D1016跡地の凹地上にS D1008南辺に平行して位置する。溝跡は⑦-2区から⑧-1区にわたるとみられるが、調査は⑦区のみ行なった。しかし、⑧-1区調査区南壁土層図では延長先とみられる溝断面が記録されており、推測すると約54m以上の長さになると思われる。西先端は⑦区内にあって調査ミスで削平してしまったが、S D1008を切って屈曲部の埋土上面で立ち上がると予想される。溝の立ち上がりは現耕作土の下まで確認でき、本溝がS D1016・1008を切っている。また、延長先の⑧-1区南壁土層図からはS D2038→S D2037→S D2036の順で構築されていることが推測された。溝の幅は約30cm、検出面からの深さ10cm、立ち上がりの緩やかなU字状の断面形である。埋土は粘性の強い褐灰色土の単層で凝灰岩風化粒を少し含む。出土遺物は瀬戸美濃産磁器染付碗などがある。性格は水田に関わる区画か用水と思われる。年代は近世末期と思われる。

**S D2037** ⑦-2区 IIET19～VAM20 (第315図)

S D1008南西部の南側にS D2036と平行して位置する。調査は⑦区内のみ行なったが、溝の続き方からは⑧-1区調査区南壁土層図に記録されている溝と連続する可能性がある。本溝跡がS D1016を切り、⑧-1区調査区南壁の観察からはS D2038→S D2037→S D2036の構築順序と思われ、構築面はS D2036に関連する水田層の1枚下にある。また、配置関係からはS D1002と関連していた可能性が高い。溝の形状はS D2036の南にほぼ平行して直線的に走り、⑧-1区まで延長すると全長約59mである。幅は約40cm、検出面からの深さは16cm前後、断面形は緩やかなU字状を呈する。埋土は粘性の強い褐灰色土で、出土遺物は瀬戸美濃灰釉碗、志野碗、肥前産染付碗破片、大窯皿などがある。本溝跡はS D2036に先行する水田区画に関連する溝跡か用水と思われる。

**S D2038** ⑦-2区 VFG03～FM01 (第315・316図)

S D1016埋土上層で検出。⑦-2区南部のS D1008南辺の南側にS D2036・2037と平行して位置し、西端は類似した位置から始まる。東端は⑧-1区へ続くが、調査を実施していない。しかし、その延長先と思われる溝断面が⑧区南壁土層図に記録されており、本来は長さ38m以上と思われる。幅は最大1.2mを測り、⑦区内では一部にこぶ状の突出部がある。断面形はU字状を呈し、深さは⑦-2区東壁で立ち上がり上部か

ら40cmを測る。埋土は褐灰色土の単層である。遺物は弥生～古代の土器片がある。出土遺物は古代以前の所産であるが、位置的に隣接するSD2036・2037と関連し、近世以後の同様の性格の溝と思われる。また、⑧-1地区の調査区壁の土層観察からは本溝跡→SD2037→SD2038の順で構築されていると推測される。

#### SD2039 ⑩-1区 VVQ05～VQ08 (第316図)

1面目で検出。⑤-2区から延びるSD2019の延長とSD2001の交点付近から始まり、SD2001に一部接しながら南北に走る。⑩区では12m検出し、さらに⑧-2地区へ延びているが、⑧-2地区では見逃した可能性が高い。幅は40～60cmで断面形は緩やかなU字状を呈し、底面は凹凸が著しいが、検出面から深さ10cm強を測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。遺物は古墳時代～古代の土器がある。遺物から古代以後の所産であると推定され、埋土が砂質土なので平安の洪水時の所産の可能性もあるが、SD2001を意識して構築されているとみられるので、むしろSD2029と類似する溝と捉えて近世に含めた。

#### SD2040 ⑦-2区 IVFE03～FG05 (第315図)

1面目で検出し、SD1016を切る。⑦-2区の南壁土層写真ではSD2042と切りあいになるように見受けられるが、記録ミスで子細は不明である。本溝跡はSD1008が⑦-2区内で屈曲する南側から始まり、調査区外へ延びるまでの長さ6.5mを検出した。幅はもっとも残存状況が良好な部分で1.5m、断面形は幅広い逆台形を呈し、検出面からの深さは15cmほどである。なお、北先端付近では拳大を中心とする礫の集中が認められた。埋土は注記ミスで記録がない。形状や位置関係からSD1001・1002・2036～2038・2042と関連するとみられ、埋土や性格も同様の近世以後の溝と思われる。遺物はない。

#### SD2041 ⑩-2 VSF18～SH20

⑩-2区の4層褐色砂質土上面に立ち上がりが確認される。切り合いはない。⑩-2区の南部を北西～南東方向に調査区を貫き、調査区内部では壁土層にかかる部分を含めて11.5mを確認した。幅は55cm、深さ16cmを測り、断面形はU字状を呈する。埋土は上層の黒褐色粘土層である。遺物は古墳時代土師器片があるが、検出土層からは混入と思われる。基本土層との関係から少なくとも中世以後の所産と推定され、この溝の延長先はSD1008に重複するSA2005と直交するので、SD1008跡に重複する近世の用水と関連した溝の可能性があり、近世の所産と推測した。性格は水田耕作にともなう溝と推定される。

#### SD2042 ⑦-2 IVFG03～FG05 (第315・316図)

SD1016埋土上層で検出した。⑦-2区の南壁土層写真ではSD2040と切りあいになるように見受けられるが、記録ミスで不明である。SD2040と隣接して同方向に走って調査区外へ延びる。北端は緩やかに立ち上がるが、本来もう少し延長されていた可能性がある。調査区内では長さ約5mほど検出した。幅は30cmほどで断面形は緩やかなU字状を呈し、深さ3cmである。底面は緩やかに南方へ傾斜する。埋土は記録ミスで不明である。出土遺物はない。形状や位置からしてSD1001・1002・2036～2038・2040と関連した溝で、なかでもSD2040とは密接な関係をもつと思われる。近世以後の所産と思われる。

#### SD2048 ⑤-3区 VMN14・15 (第316図)

立ち上がりは現耕作土の一枚下の土層まで確認された。中世外堀SD1008と連続するとみられるSD2049を切って、南北に走る。幅は50cm、断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は川砂を多く含む単層で、用水と推定される。遺物はない。検出面から近世以後の所産と推定される。

#### ウ、その他の遺構

上記の遺構以外に柵列や大規模な溜め池状遺構、中世館堀内に構築された水田耕作関係と思われる遺構がある。これらの遺構を一括して述べる。

#### SA2005 ⑩-1区～市道下 VWL10～SC16 (第316図)

⑩区SD1008埋土上で検出された杭列である。⑩-1区のSD1008土橋南端付近から始まり、SD1008南



壁にそって市道下調査地点まで続く。長さは約37.6m以上に及ぶと思われる。検出当初はSD1008に関連する施設とも考えたが、土橋を横断することや市道下ではSD1008埋土中で検出されたことから本杭列跡がSD1008を切ると思われる。杭は直径4cm前後の丸木杭を20~40cmの間隔で1列に打っており、検出面からの深さはもっとも深いもので50cmを測る。石川条里遺跡内では、用水に伴って護岸のために杭列が打たれることが多いことから、本来は用水に伴うものであった可能性がある。これは市道下のSD1008では近世陶磁器が混在する点からも肯首される。

#### SA2006 ⑩-2区 VSF14~SK18

SA2001東側の微高地東脇の低地内で検出された杭列である。ほぼ2m前後の間隔で1列に杭が打たれており、全長は13.2mほどである。走行方向はSA2001と直交する方向で、SD2041とはほぼ平行する。このことから近世の所産と推測した。これも溝跡などに伴う杭列であろうか。

#### SG1001 ⑤-1~⑦-2区 IIDS12~JI12 (第315図)

微高地西側の⑤-1~⑦-2区にかけて検出された規模の大きな溜め池状の遺構である。その範囲は南北23m、東西26mの方形の平面形を呈し、現水田1枚にほぼ一致する。また、その位置はSD1022と字「くね下」地籍外縁部をめぐる用水が接する場所にあたる。調査では検出面で多くの近世末から近代の磁器が採取されたため、平面形を検出したのみで精査は実施していない。なお、⑦-2区では池状遺構下面で中世井戸SK1144を検出したが、⑤-1区では本遺構底面で中世井戸の有無を確認していない。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。掘り込みは現水田耕作土直下にあり、深さは1.3mである。埋土は山砂を含む荒い砂がラミナ状に堆積しており、掘り直しを伴っていない。このことから本遺構は恒常的に維持される溜め池というよりも臨時の施設と思われる。本遺構の性格については篠ノ井線開通に伴う工事による土取跡か、あるいは微高地西側を貫くSD1022の用水工事に伴うものかのいずれかが考えられる。出土遺物は近世末~近代の磁器が採取されている。

#### SX2001 ⑧-2区 VVM16~VT15 (第316図、PL56)

中世館内堀SD2001南辺東端の上層で検出された。この遺構は長軸約4m前後、短軸約1.6m前後、深さ30cm前後の長方形の土坑状施設が短軸方向に8基前後並列するものである。土坑状施設間に切りあいがないう点や、ほぼ同じ規格で統一的に構築されていることから、同時に構築された一つの施設であると捉えた。埋土は砂を主体に若干の粘土粒を混入する。出土遺物は近世の陶磁器が出土している。本遺構の性格は不明ながら、類似施設として長野市教育委員会による石川条里遺跡(4)<sup>(註1)</sup>で幅1m前後ごとに小規模な畦で細かく区切られた遺構が検出されている。これは水苗代の跡の可能性が指摘されているが、本遺構は規模は小さいものの、類似した施設の可能性がある。また、水苗代である場合には中世堀跡が近世には水田として利用されていた証拠となろう。

註1 長野市教育委員会 1989『石川条里遺跡(4)』

#### (4) 近世以後の水田の小結

今回の調査で検出された近世遺構は非常にわずかである。これは遺構の残存状況に起因するものではなく、選択的な調査の結果によるものである。例えば、近世末期の埋没水田は調査した範囲よりも広域に残存し、先に堆積環境のところでみたように調査域内の西側山手と聖川添いでは近世末期の埋没水田に加えて複数の水田調査が可能と思われた。このように必ずしも遺跡全体の様相を明らかにできてはいないが、看取された断片的な様相についてまとめておくことにしたい。なお、扱う範囲は近世から一部近代も扱う。

## ア 近世遺構全体の概況

近世の様相をみる前に中世水田のようすをまとめておく。中世水田の様相も断片的であるが、中世後半の段階で古代の条里のような統一的な水田編成ではなく、場所ごとに平安時代条里区画の継承のしかたや用水配置方法、水田区画のあり方が異なる景観が生みだされる。この様相は水田と用水の関係から、用水の構築を基軸として限定的な範囲での再編成や再開発が重層的に重なったものと推測された。その背景には、平安時代には洪水で旧来の配水システムが崩壊して、取水源を山手の沢水・中小河川に求めざるをえなくなり、そのために水の供給量が限定的でしかも不安定なものとなったと思われるが、中世段階では千曲川の流路の変更や堆積土のあり方などによる地形変化によって、この様相が促進されたこともあるのかもしれない。そして、より場所毎による耕作状況が異なるようになったことが基底にあるとみられる。さらに、中世四ノ宮荘は鎌倉時代以後では国人・守護小笠原氏の支配が延びてくるとともに、前代から継続して耕作・領有する者もいて複雑な土地所有関係となっていたことも関連すると思われる。また、古代の条里区画とは異なり、地形環境の実情にあった区画を指向することもあったろう。以上の様相は館の廃絶する15世紀後半も早い段階までの様相とみられ、その後は詳細不明であるが、大きな景観上の変化は認められない。また、一方では中世Ⅰ面において検出された遺構が疑似畦畔であるとすれば、畦による水田区画自体が土地所有の範囲を示すようになってくる可能性も窺えている。

次に調査で確認された近世とそれ以後の特徴をみてみよう。今回の調査遺構からは近世末期の様相を中心とせざるを得ないが、以下のような特徴がみいだせた。まず、検出された遺構は耕作地関連の遺構と見られ、遺跡内がほぼ全域耕地化されたと推測される。そのなかで、微高地部分が水田化されてくる様相がみられる。また、現景観の用水の多くが近世の所産と推定され、中世よりもはるかに多くの用水が確認される。さらに、水田1枚の面積が拡大化していることも知られた。なお、用水と水田のようすを現景観から参考にみると、微高地東側低地では個別水田が用水と接して水が配されるように、均質化している傾向が知られる。このことは水田1枚づつが実質的な所有単位になっており、恒常的に耕作されることも前提としていると思われる。また、水田区画が所有単位となることに加えて、低地の埋没で低地が平坦化してくるにより、水田1枚の面積が拡大するようになったと思われる。

以上の様相からすると、近世の水田は基本的には室町期に完成された景観を踏襲しながらも、畦で囲まれた水田1枚が所有の単位となり、しかも広域にわたる水田ができるだけ均一に恒常的に耕作されることを前提としていたとみられる。さらに、水田域の拡大と用水の整備に水田耕作を重視した基本姿勢をみる事ができる。以下に近世の微高地の水田化と用水体系の整備を取り上げてみる。

### イ 微高地域の水田化

微高地の水田化には二つの契機があったことはさきにみた。一つは微高地縁辺での水田域の拡大であり、もう一つは用水の構築による微高地上部の水田化である。

#### A 微高地縁辺の水田化

微高地縁辺の水田域拡大はS D 1001・1002・2036・2037・2038・2029～2034・2013などの様子から窺うことができる。ここでは特にS D 2036・2037・2038を取り上げてみたい。⑧-1区南壁では⑦区のS D 2036・2037・2038の延長先と思われる溝断面が確認された。この3本の溝は平面検出では切り合うとは認められなかったが、この⑧-1区南壁土層図をみると低地から微高地側寄りに順次移動してきた様子が知られた。したがって、微高地縁辺の水田域拡大は一気に進行するものではなく、段階をおって順次進行してくることが推測される。この様相が進展する年代は不明であるが、S D 2037とS D 2036の出土遺物から17世紀以後から19世紀代までの間としてみる事ができる。この微高地縁辺での水田化開始の契機には3つ考えられる。1点目が低地の埋没による水田域の地表面上昇による平坦化であり、2点目が用水の整備である。

3点目は館跡地の土地利用の変化である。館は15世紀後半の早い時期に廃絶し、それ以後は浅い井戸遺構が構築されつづけるとみられた。この浅い井戸状遺構は館廃絶以後と見られながらも、その分布範囲は館範囲と一致している。つまり、廃絶した後も一定の土地利用に影響を与えていたとみられる。この井戸状遺構の年代は詳細不明であるが、少なくとも15世紀後半から16世紀後半までの遺物が見られ、近世の遺物は小片で混入の可能性があるものを除くとほとんどみられない。したがって、館廃絶後維持された土地利用状況も17世紀で大きく変化したことが窺える。その内容については明らかにできなかったが、この土地利用状況の変化が微高地縁辺での水田化が進展する遠因として関連するようにも思われる。

#### B 用水による微高地上の水田化

この様相が具体的に知られるのは微高地西側⑦-1区の溝跡群である。この溝跡群のほとんどが何らかの形でSD1022と接続しており、SD1022の構築によって出現したものであることは間違いない。このSD1022は四ノ宮集落背後の沢から塩崎用水を立体交差して平地部に至る用水であり、本来は微高地先端で直角に折れていたものが、近世末期に途中から分水して直線的に微高地上まで延長されたものと推測された。その構築時期は近世末期で、塩崎用水構築時期にきわめて近似しているとみられる。このことから塩崎用水と関連して出現したと推測されるが、本用水は直接的に塩崎用水から取水していない。そこで推測されるのは本来はこの用水系から取水していた山手の水田が塩崎用水構築以後に直接塩崎用水から取水するようになり、相対的に余った水を利用して微高地の水田化が計られたとも思われる。つまり、微高地の水田化する技術はすでにあったが、それを可能とするには水の供給量が豊富にあることが必要であったと思われる。

このSD1022を基軸とする用水配置をみると、北側と南側では大きく様相が異なる。北側では直交する形で小用水が接続するが、南側はSD1022脇の土坑状の取水施設やSD1022に平行した細い溝に水を流し、そこから各水田に南北方向に水を配する。この違いは北側が排水主体、南側が取水主体よる違いと思われ、北側の水田の取水口は字「耕下」脇の用水から取水するものと思われる。なお、字「耕下」脇の用水は現在塩崎用水から取水しており、北側水田は塩崎用水の構築と連動して捉えられるので、微高地水田化は大きくみると塩崎用水の構築による水田の再編成とみられる。

以上の水田域拡大の様相をみると、水田域拡大の指向をもちつつも、古くは用水が十分確保できない限界があり、低地境の水田がわずかに拡大するのみであったが、幕末には塩崎用水が構築されたことで一気に微高地上も水田化するとまとめられる。やはり近世末期の塩崎用水の影響は非常に大きく、この構築によってかなり水田の安定的な耕作と耕地拡大が計られたことを知ることができる。

#### ウ 用水の発展

現景観の用水のところをみたように、現在みるような多くの用水は近世において出現し、中世以前に遡る用水は少ないことが知られた。そして、特に微高地東側低地の現景観においては個別水田が各用水と接続する形態となっており、こうしたシステムは個別水田の所有とその恒常的な耕作使用を前提としているようである。このような形態が何時成立したかは明らかでないが、⑦-1区のSD1022を基軸とする用水配置は個別水田へ水を配するシステムとしてみられるので、少なくとも近世末期までは遡り得る。また、⑦区の場合では塩崎用水の構築が間接的な契機となっているように、このシステムはある程度の豊富な水量が確保されていることが前提になっていると思われ、用水の設置のみならず、用水に面するように水田が配置される区画の再編成を伴うことも予想される。こうした側面からみると、⑦区の微高地の水田化に際して用水の増加、耕地の再編成が見られる時期として塩崎用水の構築前後に大きな画期を見いだせる。しかし、微高地東側と西側では用水の配置のされ方が異なる様相もみられ、この点では塩崎用水構築前後の画期を一律に当て嵌めることができるか疑問もないわけではない。このことは調査ではあまり明確

にすることはできなかった。今後の課題として残される。

以上の様相からみると、先に近世の特徴として挙げたものが実は近世末期に達成された様相となる。しかし、歴史的環境のところのみならず、溜池の構築や一時的にしろ千曲川取水の用水が構築されたことや、耕作地の減少と家の増加の矛盾の問題など、水田をめぐるさまざまな面期がほかにも存在する可能性がありながらも、基底には水田耕作の安定化と拡大指向が一貫してあったとみられる。これらの問題については調査結果からはあまり十分検討できなかった。これらの問題については今後、別の観点からの分析・検討される必要がある。

### 3 近世の焼物

石川条里遺跡では水田域・微高地合わせて413点の近世陶磁器が得られた。この数は近世遺跡としては決して多いとはいえないが、水田域内での面的調査実施された部分のごく限られた範囲であることを考えれば、本来はもっと多量の近世遺物が含まれていたものと思われる。ちなみに面的調査を実施した⑫区の出土点数／調査面積比(m<sup>2</sup>)は0.066である。調査面積からすれば、上記の出土点数を上まわる数が存在することは予想される。以下に出土した近世焼物の種類について述べることにしたい。

#### (1) 近世焼物の種類

近世焼物は小片が多いため詳細な識別が不能なものが多い。そのため以下に述べる種類についてもかならずしもうまく識別できているとはいえないが、出土焼物種の概略を述べる。

##### ア 瀬戸美濃産磁器

79点ある。年代的には19世紀以後の所産で、近代のものも含まれる。産地の識別は胎土の肉眼観察と形状等を勘案して行なったが、一部は肥前産磁器との識別に迷うものもあり、かならずしも厳密に区分はできていない。また、北信では幕末のごく限られた年代に染付を生産した在地窯があるが、これらの製品についても識別はできなかった。染付と白磁、青磁、上絵磁があり、さらに染付には線描、ダミと線描の併用の手描き、釘線描の後に呉須を施すもの、紙型摺、銅版転写などがある。器種は碗、皿、鉢、徳利の食膳具のみがある。出土地点別にみると②-2、⑫区近辺水田面とS G 1001で比較的まとまって得られている。なお、水田域近世面では手描きの線描染付や、混入の可能性もあるが銅版転写が含まれ、S G 1001ではほぼ白磁と手描き染付に限定される。碗は48点あり瀬戸美濃磁器内では60.8%、碗全体内では18.7%を占める。器形は腰の張る丸みを帯びるもの、体部が直線的に開くもの、腰の張る小碗、杯がある。腰の張る碗では線描・ダミと線描併用が19点-39.6%、体部が直線的な碗は紙型摺7点-14.6%、銅版転写が6点-12.5%がある。腰の張る小碗と思われるものに釘線描後に呉須が施されるもの2点-4.2%、上絵付磁器の小碗2点-4.2%、白磁型作りと思われる小杯1点-2.1%である。皿は17点あり瀬戸美濃産磁器の21.5%、皿全体内では36.2%を占める。内訳は手描き染付4点-23.5%、銅版転写2点-11.8%、白磁7点-41.2%、上絵付3点-17.6%、青磁? 1点-5.9%である。なお、白磁の皿は口縁部の外反するもので、型作りの可能性もある。また、手描染付の鳥型打皿が1点ある。鉢は小鉢と思われるもので1点のみ出土した。徳利は7点あり、いずれも体部小片である。施文の確認できるものでは銅版転写がある。

##### イ 瀬戸美濃産陶器

182点が得られ、出土近世焼物全体の約44.1%を占める。その内訳は碗が最も多く138点-75.5%、皿12点-6.6%、鉢6点-3.3%、瓶類10点-5.5%、土瓶4点-2.2%、蓋・花瓶・灯明具が各2点-各1.1%、仏飯具3点-1.6%、すり鉢・水滴、調理鉢など各1点-各0.5%がある。全般的に小型品が多く、特に食膳具の碗類が中心で、貯蔵具・調理具・煮沸具はあまり顕著でない傾向が知られる。年代別の遺物数量で

は17世紀前半が少量、17世紀後半～18世紀前半に特定できるものもわずか、あとは18世紀後半以後が圧倒的な出土量がある。そして、この傾向は19世紀代には磁器へ引き継がれる。なお、この瀬戸美濃産陶器の釉は灰釉・鉄釉・錆釉があるが、釉の種類はあまり細分せず灰釉・鉄釉・錆釉・長石釉に大別し、長石釉は一般化している「志野」の名称を用いることにした。

碗は灰釉碗・鉄釉碗・天目茶碗など総数138点得られた。この数は遺跡内で採取された碗の53.7%に該当する。このなかで、もっとも出土量が多いのが灰釉碗である。これは口径がやや大きめで腰の張る深い器形に、貫入の入る透明淡青緑色灰釉を厚く施すもので、83点と瀬戸美濃産碗の60.1%を占める。この碗は全面施釉後に高台端部の釉をふき取るものと体部下半まで施釉されるものがあり、わずかながら呉須で模様を描かれるものがある。これ以外の灰釉を施す碗には厚い灰釉に上絵付される碗、鉄釉が部分的に観察される碗、鉄・呉須で絵が描かれるもの各1点各0.7%、薄い灰釉が施される碗が3点2.2%、鉄絵が描かれ薄い灰釉が施される碗が3点2.2%、濃緑色の灰釉が施される碗が2点1.4%ほどある。灰釉以外では鉄釉碗あるいは鉄釉施釉後に灰釉を飛ばし掛けする碗23点16.7%、天目茶碗1点0.7%、鉄絵が施される志野碗・長石釉のみの志野碗が3点2.2%、腰錆碗と思われるもの1点0.7%、鎧手茶碗4点2.9%、染付を施し薄い透明釉を掛ける陶器碗が12点8.7%ある。なお、長石釉のみの碗と鉄釉碗の一部は天目茶碗の可能性があり、年代的にみると志野碗や灰釉飛ばしの鉄釉碗などが17世紀の所産と捉えうるが、それ以外はおおむね18世紀～19世紀前半の所産で17世紀代ものは少ない。また、遺存度は全体的に低い。

皿は少なく12点のみある。瀬戸美濃産陶器のなかでは8.7%、皿全体のなかでは25.5%が該当する。内訳は灰釉皿3点25.0%、志野丸皿6点50.0%、鉄釉輪はげ皿1点8.3%、志野菊皿2点16.7%である。志野丸皿は薄釉で小型化したものが多く、鉄絵が施されるものもあるが、内底面中央のみに小さく描かれるのみである。また、輪はげ皿は見込にスタンプ文は見られない。鉢も非常にわずかで6点しかない。内面灰釉－外面鉄釉が1点、灰釉に緑釉流し掛けされるもの1点で、残りは厚い灰釉が施されるものである。小型の瓶類と思われるものは10点あり、薄い灰釉、鉄釉、錆釉薬が施される。いずれも体部破片小片であるため詳細は不明である。

上記以外の器種は非常に少ない。花瓶は2点出土し、1点は長い頸部に小型の耳状の突起を付けて鉄釉を施す破片で、もう1点は整理段階で紛失した。土瓶は小片4点があり、錆釉が施される糸目土瓶と思われるものや薄い灰釉が施されるものがある。仏飯具3点出土しているが全体の形が窺えるものはない。透明度の高い灰釉が施される。蓋は2点、ルリ釉が施されるものと錆釉が施されるものがあり、いずれも土瓶の蓋と思われる。箱形水滴は1点のみ②区近世水田から出土した。型作りで底部破片である。これ以外では口縁部端部が内側に屈曲する鉄釉鉢1点、灯明皿2点、すり鉢破片と思われる小片1点がある。

#### ウ 肥前産磁器

59点あるが、その識別方法は瀬戸美濃産磁器に準ずる。器種は碗38点64.4%、皿10点16.9%、鉢？類1点1.7%、瓶類9点15.3%、蓋1点1.7%である。食器を中心とする点では瀬戸美濃産の陶磁器と同様である。この肥前産磁器は年代的にみると瀬戸美濃産よりも古い所産のものが多い。水田域の近世面とした調査面の年代は瀬戸美濃産陶器が大量に搬入されてくる段階にあたるのに対して、肥前産磁器が中心的に搬入された段階に帰属する遺構、あるいは調査面がないので、上記で示した遺物数量はあくまでも搬入された量の一部を表現しているに過ぎないと思われる。

碗は38点あり、肥前産磁器内では64.4%、碗全体内では14.8%を占める。この内、厚手の波佐見系と思われるものは6点15.8%、暗青灰色の雑な胎土の染付碗が6点15.8%、小杯が5点13.2%、いわゆるコンニャク判の施文碗2点5.3%、単線の網手文碗1点2.6%、残りは手描の染付体部破片で詳細不

明である。皿は小片が多いが、型打ち小皿1点-10%、内面輪剥ぎした皿2点-20%（内1点は波佐見系か?）、あとは小片である。鉢は上記碗と同様の暗青灰色雑な胎土のもので内底面が輪剥ぎされる。瓶類は一輪差と思われるもの3点、油壺類と思われるもの1点が含まれるが、残りは小破片で子細不明のものである。

#### エ 肥前産陶器

灰白色・黄白色の比較的きめ細かい胎土の陶器と、いわゆる唐津を一括した。その量は35点と肥前産磁器に比べて少ないが食器を中心に一定量認められている。前者のきめ細かい灰白色・黄白色胎土の陶器には黄灰色の釉を全面に掛けて高台端部の釉をふき取る深めの碗とルリ釉を施す輪剥ぎ皿がある。碗は22点、輪剥ぎ皿は3点出土している。なお、この碗は唐津を含めた肥前産陶器全体の62.9%、碗全体内では8.6%、皿は肥前産陶器全体の8.6%-皿内では6.4%を占める。唐津は皿・碗・鉢がある。皿は肥前産陶器全体の8.6%、皿全体の6.4%、碗は肥前産陶器全体の11.4%-碗全体の1.6%を占める。皿は底部破片で砂目積が見られるものがあり、鉄絵を施すものも1点ある。碗は4点あり、橙褐色胎土の碗2点、いわゆる刷毛目碗2点がある。鉢は刷毛目が施されるものが2点あり、内1点には銅緑釉が流し掛けされる。なお、肥前地方産のすり鉢は十分識別できておらず、在地産陶器と誤認している可能性もある。

#### オ 在地産陶器

幕末から近代にかけて県内の近在の窯で生産された陶器で、陶器、焼締の2者がある。全部で42点採取された。具体的な産地を明らかにできなかったが、陶器の大部分は松代焼かその枝窯となる長谷・篠ノ井五明窯、焼締陶器は上田の下郷焼きなどの可能性がある。なお、北信では高山村藤沢焼、須坂市須坂焼など磁器生産が行なわれた窯も知られているが、今回の報告では識別できていない。しかし、いずれの磁器生産を行なった窯も生産期間が短いとされるので、搬入されている可能性は低いと思われる。また、焼締陶器すり鉢のなかには九州産のものが含まれている可能性があるが、十分な識別はできていない。この焼物については今後の課題としなければならなかった。在地産陶器の器種には甕・鉢・すり鉢・片口・碗・土瓶・蓋・灯明皿などがあり、明らかに調理具や大型貯蔵具などの雑器類を中心としている。したがって、搬入陶磁器とは明らかに生産器種が異なることが窺えるが、在地産陶器の生産時期は18世紀末以後とされるため、在地産陶器が担う器種がそれ以前ではどのような製品で担われていたかは不明である。また、このような雑器は本来的には居住域での使用が一般的と推測されるため、耕作地を中心とする本遺跡で採取された点数以上に当時の流通量は多いことが予想される。

甕は19点で在地産陶器の45.2%を占める。焼締と思われるものもわずかにあるが、ほとんどが白色粒子を多く含む胎土で白濁した釉が施された松代焼系と思われるものである。鉢は1点のみあり、松代焼と思われる。この鉢は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が丸く納められ、形態からすると調理鉢類というより植木鉢に近い。片口は口縁部の小破片1点のみ②-2区近世水田から出土している。胎土は暗青灰色で、濃い緑色の灰釉が施される松代焼と思われるものである。碗は1点のみ濃緑色の灰釉が施されるものがあるが、体部破片なので碗と断定できるかは問題がある。すり鉢は13点あり、鉄釉が施されるもの8点と焼締5点がある。さらに鉄釉すり鉢は茶褐色の玉縁とやや方形に近い形態で暗黒緑色を呈するものの2者ある。いずれも内面に比較的密に卸目が施され、前者は胎土から松代焼きと思われる。また、焼締すり鉢は青灰色の緻密なもので、同じ焼締ながら甕とは胎土が異なっている。同一産地として認定しうるか疑問が残る。灯明具は非常に少ないが、錆釉・鉄釉が施されたものが3点採取されている。胎土から松代焼きと思われる。土瓶は2点ある。白色粒がやや目立つが緻密な灰白色の胎土と灰白色の緻密な胎土のものがある。産地は不明である。蓋も1点あるが土瓶の前者の胎土と類似する。この他には鉄釉が施された器種不明の破片がある。

## カ 在地産土器

ホウロク・火鉢・蓋類などの器種を中心として11点採取された。この組成からみると火を扱う器種が中心となっている。瓦質、土師質の2者があり、瓦質土器には火鉢と器種不明品、土師質にはホウロクと火鉢類や蓋がある。ホウロクは3点あり、短い体部の口縁部から体部下部に耳が付く形態である。火鉢類と思われるものは5点あり、1点は外面にミガキが施される瓦質土器と思われるもので、他は土師質である。全体の形が窺えるものはない。蓋は2点あるが、胎土は明らかに土器であるものの、内面には薄い鉛？釉が施されるものが1点ある。これらの蓋はおそらく火消壺などの蓋になると思われる。上記の他に器種不明の瓦質土器が1点得られている。小型の壺状となるもので外面にはスタンプで施文される。これは検出面出土品で形態からは中世の可能性もある。

## (2) 水田域出土の焼物

水田域では242点の近世焼物が採取されたが、大部分が⑫・⑫-2区のわずかな範囲の19世紀洪水埋没面の調査で得られた遺物である。従って、ここで扱う近世陶磁器は石川条里遺跡内のごく一部で採取されたもので、年代的にも19世紀の様相が主体的に現われている傾向があることは注意されたい。

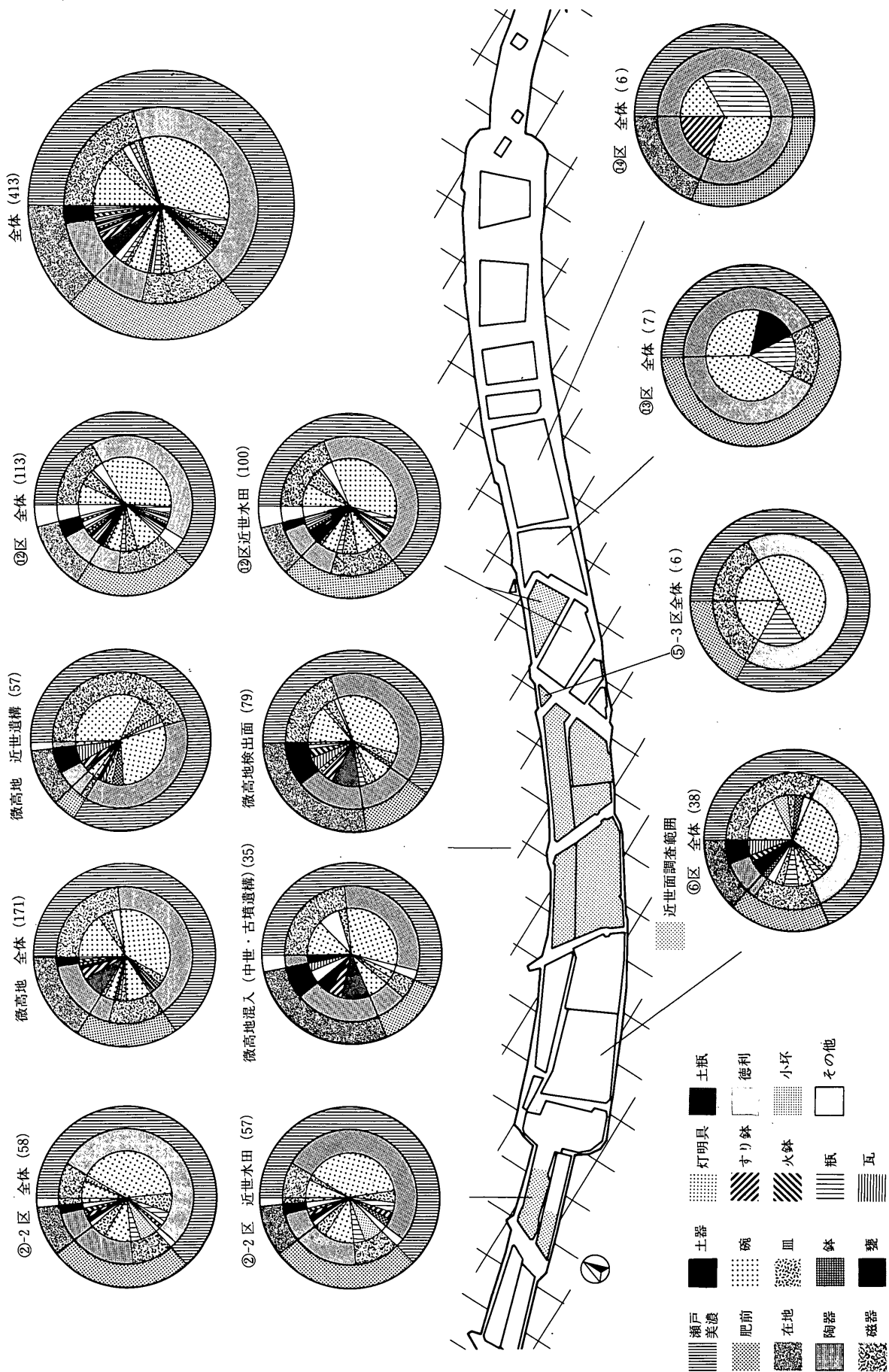
水田域で採取された遺物の焼物種別では瀬戸美濃産陶器110点-45.5%、瀬戸美濃産磁器38点-15.7%、肥前産磁器37点-15.3%、肥前産陶器26点-10.7%、在地産陶器19点-7.9%、在地産土器7点-2.9%、不明5点-2.1%であり、産地別では瀬戸美濃産が61.2%、肥前産が26.0%、在地産が10.8%となる。次に概略の用途別組成をみると食膳具が72.4% (碗57.9%、皿11.2%、鉢2.5%、徳利0.8%)、調理具が3.3%、煮沸具関係が2.9%、貯蔵具は小型の瓶類も含めると9.1%と圧倒的に食膳具の多さが窺える。なお、この用途別の器種と焼物種との関係をみると食膳具・小型瓶類は瀬戸美濃・肥前産が主体的に担い、他の大型貯蔵具・煮沸具・調理具は在地産で担われる傾向がある。ただし、これは先述のように19世紀の洪水直前での様相が主体的に現われたもので、18世紀前半段階ではむしろ肥前産の陶磁器が多いと思われる。以下に洪水で埋没した調査面と近世遺構を中心に出土焼物を記述する。

## ア 微高地西側低地出土焼物

## ①-2・②-2区近世面 (第324図)

全部で57片の遺物が採取された。遺存度の低い破片が多いことから基本的に混入と思われる。焼物種組成の内訳は瀬戸美濃産陶器29片-50.9%、瀬戸美濃産磁器6片-10.5%、肥前産磁器6片-10.5%、肥前産陶器9片-15.8%、在地産陶器3片-5.3%、在地産土器3片-5.3%である。産地別では瀬戸美濃産陶磁器が61.4%、次いで肥前産陶磁器が26.3%、在地産陶器・土器が10.6%である。器種別では碗61.4%、皿14%、鉢1.8%などの食膳具が79.0%を占め、小型瓶類が3.5%、煮沸具のホウロクが3.5%、片口・すり鉢などの調理具が7%、残りが仏飯具・火鉢・灯明皿である。年代幅があるため単純な比較はできないが、産地別では瀬戸美濃産が主体となり、少量の肥前産と僅かな在地産が加わる。このような瀬戸美濃産磁器を中心として在地産陶器が加わる組成は18世紀末~19世紀を中心とする特徴とみることができる。器種別にみると食膳具が中心となり、他は僅かである。焼物種との関係では食膳具と小型の瓶類が瀬戸美濃・肥前産で占められ、調理具・大型貯蔵具が在地産の陶器・土器で構成される。以下に産地別にみる。

瀬戸美濃産陶器は碗・皿・瓶類・すり鉢・鉢・仏飯具・灯明皿がある。碗は淡緑青色の灰釉が施される灰釉碗がもっとも多く、少量の茶褐色透明の鉄釉碗・茶褐色鉄釉碗やわずかな染付碗がある。図示したのは1の染付碗と2の灰釉碗である。皿は志野丸皿2点、鉄釉輪はげ皿1点、灰釉皿が1点ある。このうち、4の灰釉皿と5の志野丸皿を図示した。図示していないが、瓶類は非常に薄い器壁に透明の灰釉が施された体部破片灯明皿は茶褐色錆釉の小片、すり鉢は暗茶褐色の錆釉の小片、鉢・仏飯具は灰釉が施される



第317図 石川糸里遺跡内出土近世焼物組成グラフ（（ ）内は点数）



小片がある。瀬戸美濃産磁器では碗・皿がある。碗は呉須絵が施されるものと釘で線描された上に呉須絵を施すもの、銅版転写されたものがある。皿は型作りの鳥型皿と呉須絵が施される2者あるが、いずれも図示していない。肥前産の磁器は一輪ざしと思われるものと口縁部の外反する小杯が数点ある。肥前陶器は黄白色の灰釉が施される碗、唐津刷毛目碗、砂目積の唐津皿、ルリ釉輪はげ皿と思われるものがある。在地産陶器は松代焼と思われる緑青色の釉が施された鉢、濃緑色の灰釉が施された片口、茶褐色の鉄釉が施されたすり鉢がある。この内、すり鉢を図示した。在地産土器では図示したハウロクが2点と、図示しなかったが火鉢と思われる小片1点がある。

#### S D 1017 (第324図)

⑥区に所在する溝跡で27点の焼物と瓦1点がある。焼物種別では瀬戸美濃産陶器8点-29.6%、瀬戸美濃産磁器8点-29.6%、肥前産陶器-唐津1点3.7%、肥前産磁器7点-25.9%、在地陶器3点-11.1%である。産地別にみるとやはり瀬戸美濃産が59.2%と多く、続いて肥前産が29.6%となる。ただし、肥前産の焼物は①-2・②-2区近世面採取遺物同様に瀬戸美濃産の陶磁器よりも年代的に古いものが含まれている。器種別にみると碗59.3%、皿7.4%、鉢7.4%、蓋3.7%でやはり7割以上が食膳具で占められている。それ以外では瓶・徳利11.1%、甕11.1%である。

瀬戸美濃産陶器は灰釉碗・染付碗・鉄釉瓶類がある。図示したのは1~3が灰釉碗、4・5が染付陶器碗である。灰釉碗は5点あり、いずれも透明な淡青緑色の発色で貫入が顕著である。底部破片の2・3は全面施釉の後、高台端部の釉をふき取る。口縁部形態は図示した内湾ぎみに立ち上がるものと外反するものがある。染付陶器碗は図示した2点のみである。4は焼成不良で胎土は橙色である。5は青灰色の胎土で薄く透明な釉薬が施される。この他、瓶類体部破片があるが、図示していない。

瀬戸美濃産磁器は皿、小杯、徳利、鉢、碗がある。碗類は染付1点、小杯1点、上絵付1点があり、9の型作りでピンクに発色する釉が部分的に掛けられる小杯を図示した。皿は出土していない。他には型作りで外面に呉須で施文された鉢と思われるもの1点、徳利1点がある。12は呉須で縦線の施文が施される徳利である。肥前産磁器は碗・皿・蓋・瓶類がある。碗は4点あり、6~8の3点を図示した。6はコンニャク判の碗、7はいわゆる波佐見系碗で破損後の漆継による補修痕が観察される。8は体部に矢羽文が施される。これ以外は青灰色の荒い胎土の雑碗がある。皿は図示した10、蓋は図示した11のみである。なお、瓶類は小片で子細不明である。肥前産陶器は図示した唐津鉢のみである。赤茶褐色の胎土で内面に白色釉刷毛目の模様が観察される。在地産陶器は松代焼系と思われる甕2点があるが、13に図示した以外は胴部破片である。いずれも白色粒を多く含む赤紫色の胎土で白濁した釉を全面に掛け、青緑色の釉薬を流し掛けされる。

#### イ 微高地東側低地出土焼物

#### ⑫区近世水田 (第324図)

焼物100点、瓦4点、ガラス製オハジキ1点が得られた。焼物種組成では瀬戸美濃産磁器19片-19.0%、瀬戸美濃産陶器45点-45.0%、肥前系磁器15片-15.0%、肥前系陶器8片-8.0%、在地産陶器7片-7.0%、在地産土器4点-4.0%、残りが不明品である。産地別では64.0%を瀬戸美濃産が占め、肥前産が23.0%、在地産が26.0%である。②-2区近世面と比較すると瀬戸美濃産陶器を主体として瀬戸美濃産磁器と在地産陶器が組成に加わる点は類似するが、肥前産の磁器の比率がやや高い点異なる。これは⑫区近世水田面遺物には18世紀代のものが多いことから、古い遺物が②-2区より多く混在することに起因すると思われる。それは堆積の著しい②-2区と堆積土が比較的少ない⑫区の耕作状況の違いによると思われる。器種別では碗56.0%、皿14.0%、鉢3.0%、徳利1.0%で合計すると74.0%が食膳具で占められる。これに対して調理具は一切検出されておらず、煮沸具類として土瓶が3.0%、貯蔵具は甕・瓶類破片が7.0%である。これ

以外は僅かな灯明皿、水滴などがある。この調査面出土焼物はかなり年代幅をもった破片が含まれ、しかも調査面に及ぶ上層の攪乱による混入もある。そのため洪水直前の単純な様相を示すとは考え難いが、基本的には瀬戸美濃・肥前産陶磁器によって食膳具が担われ、貯蔵具や煮沸具を中心に在地産陶器が担う傾向は窺える。また、食膳具のなかで碗は瀬戸美濃産や肥前産の陶磁器の各種が見られるが、皿は瀬戸美濃産陶器があまり顕著でなく、むしろ磁器を中心に担われる傾向がある。

瀬戸美濃産陶器には碗、鉢、瓶類、土瓶、蓋、水滴などがあり、碗主体ながら多種の小型品を含む器種が見られる。ただし、小片が多いため図示したものはない。碗は透明淡緑青色灰釉が施される灰釉碗が23点、貫入の入らない薄い青灰色の釉を施す碗が3点、鎧手茶碗3点、外反口縁下部に鉄釉が施される碗1点、透明度の高い鉄釉碗1点、黒色の鉄釉碗1点、高台のみの破片1点、染付陶器碗2点がある。鉢は外面錆釉、内面灰釉を施すものと厚い灰釉を施す鉢がある。瓶類は薄い灰釉、鉄釉、錆釉施すものがあり、灰釉を施す瓶類は底部破片、他は体部の小片である。また、1点鉄釉を施す花瓶が出土している。土瓶は錆釉を施す口縁部破片が1点、蓋はルリ釉と錆釉糸目のものが各1点ある。他には水滴1点があるが、いずれも図示していない。瀬戸美濃産磁器は碗、皿、徳利がある。碗は8点あり、細い線描や線描・ダミで施文するもの5点、釘で線描した後に呉須で模様を付けるもの、紙型摺、銅版転写と思われるものが各1点ある。この内、図示した2は釘で線描したものである。皿は染付・上絵付・白磁含めて6点で、呉須の線描・ダミで施文されるもの2点と銅版転写1点、上絵付1点、白磁2点である。この内、図示した3は上絵付皿で、いたみが著しく本来の発色は不明である。徳利は小片ながら頸部破片1点がある。これ以外には胎土から瀬戸美濃産と思われるものの小片で子細不明である。肥前産磁器はすべて染付で、碗は波佐見系1点、コンニャク判施文1点、小杯1、暗青灰色の胎土の雑碗が1点の他4点がある。図示したのは1のコンニャク判施文のものである。皿は型打小皿、小皿、輪はぎの底部破片など5点がある。瓶類はタコ唐草文を施す体部破片と1輪ざしと思われるものが1点ある。次に肥前産陶器では黄白色の灰釉碗が6点、唐津鉢1点、ルリ釉輪はぎ皿1点がある。在地産陶器はすり鉢1点、灯明具1点、土瓶2点、蓋1点、甕と思われるもの1点、器種不明1点がある。この在地産陶器には橙色で白色粒を多く含む胎土の松代焼系と思われるものと、白色・黒色粒を多く含む産地不明の灰色胎土の2者がある。いずれも図示していない。在地産土器はホウロク・火鉢の破片と思われるものが2点、蓋2点がある。このうち蓋の1点には内面に薄い釉が掛けられる。これ以外に産地不明の陶器がある。薄い作りの陶器であるが、胎土は緻密で器種は碗と皿がある。上記以外では瓦とオハジキがあり、オハジキを図示した。

#### ウ その他の出土焼物 (第324図)

基本土層との関係で取り上げられた遺物のみ説明を加える。上記とここで取り上げた以外はほとんど出土地点不明・表面採取品である。1は微高地西側低地の3層上面で採取された瀬戸美濃産志野菊皿である。2は注記グリッドから⑥区のSD0022検出時に出土した遺物と思われ、⑥区I層下部にあたる。在地産の焼締すり鉢である。

### (3) 微高地出土の焼物

微高地では総数171点の近世焼物が採取された。内訳は近世遺構-57点、中世・古墳時代の遺構への混入-35点、検出面・出土地点不明-79点であり、大部分が近世遺構に帰属しない遺物である。これらの焼物種組成は瀬戸美濃産が113点で66.1% (陶器72点-42.1%、磁器41点-24.0%)、肥前産が31点で18.1% (陶器9点-5.3%、磁器22点-12.8%)、在地産27点-15.8% (陶器23点-13.5%、土器4点-2.3%)である。この組成では多数産地からの搬入というよりも比較的限定的な産地からの搬入によっており、特に瀬戸美濃産陶磁器が主体である点は水田域と同様である。ただし、検出面が同一の微高地の場合でも時代

別にみると18世紀後半段階以後の瀬戸美濃産陶磁器の多量搬入が統計上に強い影響を与えているとみられる。次に器種別にみると碗が118点-68.4%、皿が18点-10.5%、鉢類が3点-1.8%で、徳利や仏飯具も加えると8割をこえる量が食膳具で占められることになり、そのなかでも碗の多さは圧倒的である。それに対して、瓶類や甕類を合わせた貯蔵具では10点-8.2%、すり鉢などの調理具は7点-4.1%、土瓶などの煮沸具は1.8%と少ない。このことから微高地出土の器種は食膳具-なかでも碗が主体として出土していることが窺え、恒常的な居住生活の営まれなかった微高地の様相を反映しているものと思われる。なお、器種と焼物種の間係をみると瀬戸美濃・肥前陶磁器が食膳具を中心に担っており、調理具・貯蔵具類は在地産の焼物が中心となる組成と見られる。ただし、これも在地産陶器の多くが18世紀末以後生産が開始されたことを考えれば、それ以前ではほとんど食膳具で占められていたとみられる。

#### ア 近世遺構出土焼物 (第335図)

S K1131 S D1022からの取水施設で、ここからは少量の陶磁器が採取されている。瀬戸美濃産陶器碗、瀬戸美濃産磁器皿・瓦などが出土した。1が染付陶器碗、2が鉄絵の陶器碗、3が白磁皿、4が白磁小杯である。ほぼ19世紀前半～中頃のなかで捉えうると考える。

S D1001 瀬戸美濃産陶器皿・肥前産磁器碗・在地産?すり鉢・瓦などがある。図示したのは肥前産のいわゆる波佐見系の碗である。遺構の年代は瓦の出土からも19世紀前半と思われる。

S D1002 1の肥前産磁器碗と2の瀬戸美濃陶器碗がある。前者は暗青色の雑な胎土の碗で、後者は染付の陶器碗である。上記S D1001と類似時期ながらやや先行する様相と思われる。

S D1003 図示した瀬戸美濃産の陶器鉢のみがある。灰釉を全体に掛け、一部に銅緑釉を掛けている。17世紀末～18世紀の所産か。

S D1022 瀬戸美濃産の灰釉碗・志野丸皿・土瓶・鉄釉鉢、松代焼甕がある。1が志野丸皿、2が錆釉土瓶?、3が灰釉碗、4が松代焼甕である。S K1131と関連する溝であるが、年代的には瀬戸美濃産磁器が含まれず、S K1131よりも先行する様相をもつ。

S D1023 瀬戸美濃産の灰釉碗が出土している。

S D1025 瀬戸美濃産の磁器碗が2点ある。いずれも紙型摺で19世紀の所産である。

S D1031 在地産の焼締すり鉢が1点出土している。

S D2018 図示した瀬戸美濃産鉄釉碗がある。なお、S K2401は本溝の延長先に位置していることからS K2401出土の近世陶器は本溝に帰属する可能性がある。

S D2036 図示した瀬戸美濃産磁器碗がある、19世紀前半以後の所産と思われる。

S D2037 図示した志野碗がある。17世紀前半と思われる。

S X2001 中世S D2001内に構築された耕作関連遺構である。比較的多くの遺物が採取されている。図示したのは1が志野織部碗、2が肥前産陶器碗、3が肥前産染付碗で、他に瀬戸美濃産かと思われる磁器小碗、瀬戸美濃産灰釉碗、腰錆碗がある。瀬戸美濃産か迷った磁器小碗以外は18世紀かそれ以前の所産と思われる。

S G1001 ⑤-1～⑦-2区で検出された近代の池状遺構である。遺物は検出時に採取したものである。一部に肥前産磁器の可能性ある染付が含まれるが、概略は瀬戸美濃産磁器で染付と白磁がある。染付は1の紙型摺以外は手描である。白磁は3が小杯、8が皿、10が鉢か大皿である。9は肥前産の青灰色の雑な作りの大皿と思われる。

#### イ 他時代遺構混入焼物 (第335図)

掲載した図を中心に記述する。S K2022は中世井戸と思われ、在地産の鉄釉すり鉢が出土している。この土坑に近接して攪乱があるため、この攪乱からの混入であろうか。S K2104は形態と軸方向から古墳時

代の土坑と思われるが、瀬戸美濃産陶器の灰釉小碗破片が出土している。この土坑がS D2018の延長上にあることから、このS D2018の埋土の一部がこの土坑上に残存した部分からの出土である可能性がある。S K2642は⑦区に所在する中世井戸と考えたものである。近世の肥前産陶器碗が出土している。S K2748は⑦-2区に所在する古墳時代の土坑であるが、近世末の在地産陶器（松代焼）と思われる甕破片が出土している。S D1008は中世の館外堀であるが、多くの近世陶器が混在する。近世にこの堀跡が水田・用水として利用されたことに由来すると思われる。図示した遺物は1が肥前産磁器碗、2が瀬戸美濃産陶器灰釉碗、3が瀬戸美濃産の灰釉皿である。なお、図示しなかったが、古墳時代のS D1007・1016、S Q2016、中世館地堀のS D2001でも近世陶磁器小片が出土している。

#### ウ 検出面・出土地点不明焼物（第335図）

全部で85点あり、16点を図示した。1～4・6～10が瀬戸美濃産陶器、5・11・12が肥前産磁器、13が唐津、14～16が土器である。1・7・8が鉄釉を施した後に灰釉を飛ばし掛けした碗で、7・8は天目茶碗の可能性もある。3・4が染付陶器碗、9が鉄釉碗、10が志野碗、6が染付陶器碗と類似した透明釉が施された碗である。肥前産磁器碗は5が染付碗、11が青灰色の雑な胎土の碗、12は内底面を輪割ぎした皿である。肥前産陶器では13が唐津皿で内面に鉄絵が施される。在地産土器は瓦質の14と土師質の15・16がある。いずれも詳細な器種は不明であり、中世の可能性もある。

#### (4) 近世焼物小結

近世の遺構調査は部分的であるため、上記で述べた組成の特長は遺跡全般の様相を示すのではなく、あくまでもその断片的な様相でしかない。しかし、そうした中であっても出土地点は異なっても遺跡全体に共通する一定の傾向が窺えているので最後にまとめてみることにしたい。

遺跡内で出した焼物種組成をみると多産地から多種の焼物が搬入されるというよりも、一定量を限定的な産地から搬入している傾向が窺える。こうした傾向はすでに仲野泰裕氏が松本城出土陶磁器の組成分析から導き出されている<sup>(註1)</sup>が、本遺跡でも同様の傾向が確認される。したがって、この様相は県下にはほぼ共通すると見られ、これは陸路・あるいは河川交通中心の輸送手段のなかで輸送コスト・輸送経路と生産地の関係、入手方法などの条件によって規定された様相と思われる。しかし、この様相は全県ではほぼ共通しながらも子細にみると流通経路の違いによる地域性、使用する階層や遺跡種類の違いによる同地域内の都市部－農村部の組成の違いも見られる。本遺跡の組成の特徴も周辺遺跡や他地域の組成との比較において、初めてその位置を明らかにできるものと思われる。そこで、周辺遺跡の資料との比較を行なうなかで本遺跡の焼物組成の特徴を検討してみることにしたい。しかし、現状では比較材料が乏しく、本遺跡調査も限定的な範囲を中心とするのでここでは大雑把な素描しかできないことを予め断わっておきたい。

#### ア 周辺遺跡の様相

やや距離的に離れるが中信以北の近世焼物が一定量認められたいくつかの遺跡を取り上げて比較する。

#### 吉田川西遺跡<sup>(註2)</sup>

長野県の中央部付近の塩尻市に所在する。近世の農村でもやや階層の高い農民の屋敷地と思われ、整地を伴う遺構とそれ以前の大型土坑などの遺構が検出されている。ここでは大型土坑と遺構外を含めた全体の組成をみることにしたい。なお、点数の計測は掲載された実測図から数えた。

・大型土坑S X2022・2023・2024

総数52点で瀬戸美濃産陶器28点－53.8%、肥前産陶器2点－3.8%、肥前産磁器16点－30.8%、京焼系(肥前産?)1点－1.9%、土器4点－7.7%、産地不明陶器1点－1.9%がある。年代的には若干問題もあるがほぼ18世紀までの遺物が含まれる。器種は多種で、食膳具碗36.5%、皿23.1%、鉢13.5%、その他1.9%で

合計75%、調理具も捏鉢・すり鉢含めて13.5%、煮沸具1.9%、小型瓶類3.8%、灯明具5.8%である。全体として瀬戸美濃産の陶器が主体的ながら多様な器種が認められ、肥前産陶磁器は食膳具・小型瓶類、在地産土器は灯明具・煮沸具の限定された器種を担う傾向がある。なお、最も出土量が多い碗をみると瀬戸美濃産の灰釉碗が最も多く、次に肥前産磁器碗となる。ただし、波佐見系が1点しかなく、肥前産磁器は全体に上物が多いようにも思われる。このことは京焼系の碗についても同様に捉えうる可能性がある。

#### ・遺跡全体

総数278点で瀬戸美濃産陶器191点-68.7%、瀬戸美濃産磁器13点-4.7%、肥前産陶器4点-1.4%、肥前産磁器29点-10.4%、京焼系（肥前産？）1点-0.4%、在地産陶器14点-5.0%、在地産土器23点-8.3%、産地不明陶器3点-1.1%がある。年代的には17~19世紀のものが含まれるが、遺構外出土ながら17世紀の資料が比較的まとまる。器種別では食膳具66.2%（碗38.1%、皿20.9%、鉢は6.1%、その他1.1%）、調理具は14.4%（捏鉢・片口類6.5%、すり鉢7.9%）、貯蔵具0.4%、小型瓶類1.4%、煮沸具2.2%（土瓶1.1%・ホウロク1.1%）、憫グライ・水滴・蓋1.8%、灯明具7.2%、蓋2.2%、仏飯具1.8%、火鉢2.2%ある。碗に限定してみると瀬戸美濃産陶器71.7%、瀬戸美濃産磁器10.4%、肥前産陶器2.8%、肥前産磁器14.2%、不明0.9%である。産地組成では瀬戸美濃産磁器や在地産陶器類が加わるが、それ以外では上記と同様に特定産地に限定される傾向がここでも確認できる。そのなかにあって後述する肥前産磁器のあり方や食膳具の鉢類の存在に農村部ながらも上層農民の屋敷地である遺跡の特徴を見出せるかもしれない。

#### 松本城二の丸御殿跡<sup>(註3)</sup>

上記吉田川西遺跡とはほぼ同じ地域内にあるが、都市部の中心城郭の調査例である。この焼物種組成等についてはすでに仲野泰裕氏がまとめておられる<sup>(註4)</sup>ので参考にさせていただく。産地別組成は瀬戸美濃32.9%・瀬戸美濃系8.0%、伊万里（肥前磁器）20.7%、在地系20.7%、（在地）土師質陶器20.1%、京焼1.1%、京焼系・その他0.4%、唐津・萩系0.7%、備前0.7%、万古焼0.2%とされる。これらの陶磁器の年代はほぼ18世紀を中心としているが、18世紀初頭に二の丸御殿が焼失したことと関連して片付けが行なわれた可能性がある。組成上の特徴は瀬戸美濃産が多く、伊万里産・在地産・土師質陶器が続き、少量の京焼・京焼系、備前などが加わる。近接した地域である上記吉田川西遺跡と比べると、多量の土師質陶器、一定量の京焼、わずかながら備前や万古焼が加わる点が異なる。また、比率の上では伊万里がほぼ類似した数値を示すが、土師質陶器が占める割合が高いため、実際の伊万里の数は川西遺跡よりもうまわると思われる。なお、碗に関しては川西遺跡とはあきらかに種類が異なる。川西遺跡では瀬戸美濃産灰釉碗や一定の肥前産磁器の波佐見系・肥前産陶器が組成に加わるが、松本城ではこれらの碗が少なく、伊万里が圧倒的と思われる。

#### 中井遺跡<sup>(註5)</sup>

東信の東部町に所在する。遺構は僅かであるが、砂層から近世焼物が出土している。報告書に写真として掲載されたなかでみると16世紀~19世紀にいたる陶磁器58点の内、瀬戸美濃産陶器24点、瀬戸美濃産磁器21点、肥前産磁器14点、肥前産陶器3点、京焼系1点であり、これ以外に写真は掲載されていないが在地産陶器類がある。あまり詳細な数値組成については述べることはできないが、産地組成は上記中信地区の遺跡と類似していると見られる。ただし、食膳具碗に関してみると灰釉碗はあまり顕著でなく、むしろ鉄釉碗が多い。また、碗全体のなかで瀬戸美濃産磁器碗を除くと肥前産陶磁器碗の占める率が相対的に高い点があり、そのなかで波佐見系の碗がここでも見られる点は注意される。

#### 有尾遺跡<sup>(註6)</sup>

県北部、飯山市に所在する。掘立柱建物址や井戸址がある。17~18世紀の陶磁器があり、なかでも16世紀末~17世紀初頭の資料が比較的まとまっている。掲載されている図のみをみると瀬戸美濃産志野丸皿2

点・志野丸碗1点・天目茶碗（大窯）1点・小鉢類1点・すり鉢、唐津皿（胎土目－4点含む）6点、産地不明焼締陶器すり鉢6点、肥前系陶器碗2点、肥前産磁器碗5点、瓶類3?点がある。このなかで18世紀の所産となるのは肥前産磁器・陶器、瀬戸美濃産陶器すり鉢である。遺物を実見していないため、詳細は不明であるが、16世紀末～17世紀初頭では唐津の搬入量がやや多いが、瀬戸美濃産陶器も一定量搬入されている様相が知られる。その一方で18世紀ではやはり瀬戸美濃産も搬入されるが食膳具においては肥前産磁器・陶器碗が圧倒的する傾向が知られる。そのなかにあつて、波佐見系と肥前産陶器碗が見られる点は注意したい。

#### イ 本遺跡の組成の特徴

上記の例は仲野氏の指摘どおり多産地からの搬入でなく、比較的限定された産地から一定量搬入されることはほぼ共通し、この流通状況の大枠のなかで地域ごと、あるいは農村部と都市部－武家屋敷とは異なった様相を示している。まず、地域性の問題についてみると、食膳具に於ける瀬戸美濃産と肥前磁器・陶器（唐津）の関係に一定の傾向が示されている。すなわち、南ほど瀬戸美濃産陶器が多く、北部ほど肥前産陶磁器が増加する傾向が窺え、単純にみると肥前産陶磁器は日本海からの流入量が多いと知られる。ただし、今回は南信の様相を比較できなかつたので全県に普遍化できるかは不明である。また、北部ほど波佐見系の碗や青灰色の雑碗が見られる傾向がある一方で、中信ではより上物が多い傾向が認められるようである。つまり、搬入量の差もさることながら、搬入される質が異なる傾向も見られる。このことは次に述べる同じ地域内の農村部と都市部の武家屋敷でも同じ傾向がみられる。

次に同地域内での農村部と都市部－武家屋敷を川西遺跡・松本城を例にとって対比すると、武家屋敷内のほうが全体量はもちろん多いが、僅かながら多産地の陶器が出土する傾向があり、なかでも京焼・京焼系などが一定量ある点は注意される。さらに土師質陶器などの消費量は農村部よりも多い。また、碗に限定して18世紀の様相をみると、川西遺跡では灰釉碗が主体であるのに対し、松本城では肥前産陶器・瀬戸美濃産灰釉陶器はあまり顕著でなく伊万里が多い。しかも松本城では波佐見系碗は掲載された図のなかでは見当たらないので、武家屋敷では雑碗を除く肥前産磁器碗や京焼・京焼系の碗が中心に使用されたことが推測される。ただ、他の食膳具をみると瀬戸美濃産陶器と肥前産陶磁器が競合する器種もあるが、瀬戸美濃産のほうが器種自体は多い。したがって、瀬戸美濃産と肥前産陶磁器が単純に競合する図式ではなく、瀬戸美濃産陶器はより広い器種をカバーしながら、一部の食器で肥前産陶磁器との競合があつたとみられる。そして、そのなかで長野県では灰釉碗が肥前産磁器（肥前産陶器）に対応する形で搬入されていると思われる。次に以上の様相からみた本遺跡の状況をまとめてみる。

本遺跡は肥前産磁器の雑碗も一定量搬入されながら、基本的には瀬戸美濃産が主体となる地域的な様相が知られる。この点では中・東信のあり方に近い。また、灰釉碗を中心とし、肥前産磁器の雑碗や肥前産陶器が組成に加わる点や土師質陶器などが欠落する点、京焼が顕著でない点、肥前産磁器の上物があまり認められない点に農村部らしい組成をみることができるとは、ただし、この様相は18世紀以前のどこまで敷衍化できるかはわからない。次に器種の特徴をみると、調理具・貯蔵具・煮沸具などの器種がかなり低率であることが知られたが、これは居住域でない特性によるものだろう。ただし、本遺跡の特徴が他の耕地遺跡でも類似した傾向としてみられるのかは明らかでなく、若干は用水を媒介として居住域内から流れてきた破片なども含まれる可能性はある。

最後に陶磁器の搬入の時期的な変遷について述べておく。繰り返し述べるように遺跡内で採取された焼物は必ずしも均等な遺物採取方法によっていないため、採取された焼物については偏りがある。そのため、ここでは大雑把な変遷観しか述べられないことは予め断っておきたい。

まず、中世末期では②-2区中世I面を除くと、16世紀前半の遺物はあまり顕著でないが、16世紀後半の

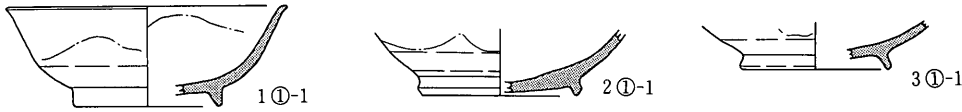
瀬戸美濃産大窯製品を中心として僅かながら増加し、僅かな青花と、その末期には唐津が組成に加わるようである。器種は皿を中心にして碗はあまり見られないなど偏りがある。また、16世紀後半から僅かながら出土焼物が増加することは流通量の増加などの時代的な様相か、あるいは本遺跡に関わった耕作者の階層、本遺跡周辺での土地利用状況の変化などを背景とすると考えられるが、明確な理由は明らかでない。この様相はそのまま17世紀前半へも継続する。17世紀前半では該当する陶磁器は少ないが、瀬戸美濃産の碗や皿類と唐津皿がある。碗は前代よりも増加するとはいえ、天目茶碗や志野碗などのみである。したがって、やはり前代同様に瀬戸美濃産の陶器を中心に、僅かな唐津が加わる組成ながら、碗は普遍的な使用を示すとは考えにくい。

17世紀も後半から18世紀前半の様相は断片的であり明確にはつかめなかった。しかし、肥前産の陶磁器類が碗や皿といった食膳具を中心に搬入されてくる様相は予想される。この段階での瀬戸美濃産の食膳具は僅かな皿類しか確認できていない。ところが18世紀後半からは瀬戸美濃産陶器の碗を中心として搬入量は増加し、それに対して肥前産陶磁器が不明瞭になってくる。ただし、波佐見系、青灰色胎土の雑な碗などはこの段階に一定量が入る可能性もある。この段階での焼物の器が増加する様相は江戸などの都市遺跡でも知られており、本遺跡もこのような傾向のなかで捉えられる可能性がある。本遺跡での消費量増加を支えたのは瀬戸美濃産陶器と考えられ、その増加のもつ意味は生産地や消費地ばかりでなく南からの陸路輸送の質的な変化を含めて考えていく必要があると思われる。そしてこの傾向は19世紀段階に発展的に継承され、最後には瀬戸美濃産磁器が食器中心に圧倒的な量を担うようになり、その一方で調理具や貯蔵具の雑器を在地産陶器が担う様相が生れてきたと見られる。ただし、注意される点は必ずしも18世紀後半からの陶器増加があらゆる器種で生じたのではなく、あくまでも食膳具主体であった点で、在地産の陶器は瀬戸美濃産陶磁器と競合しないように他器種を中心として参入してくる。この点についても今後の検討が必要と思われる。

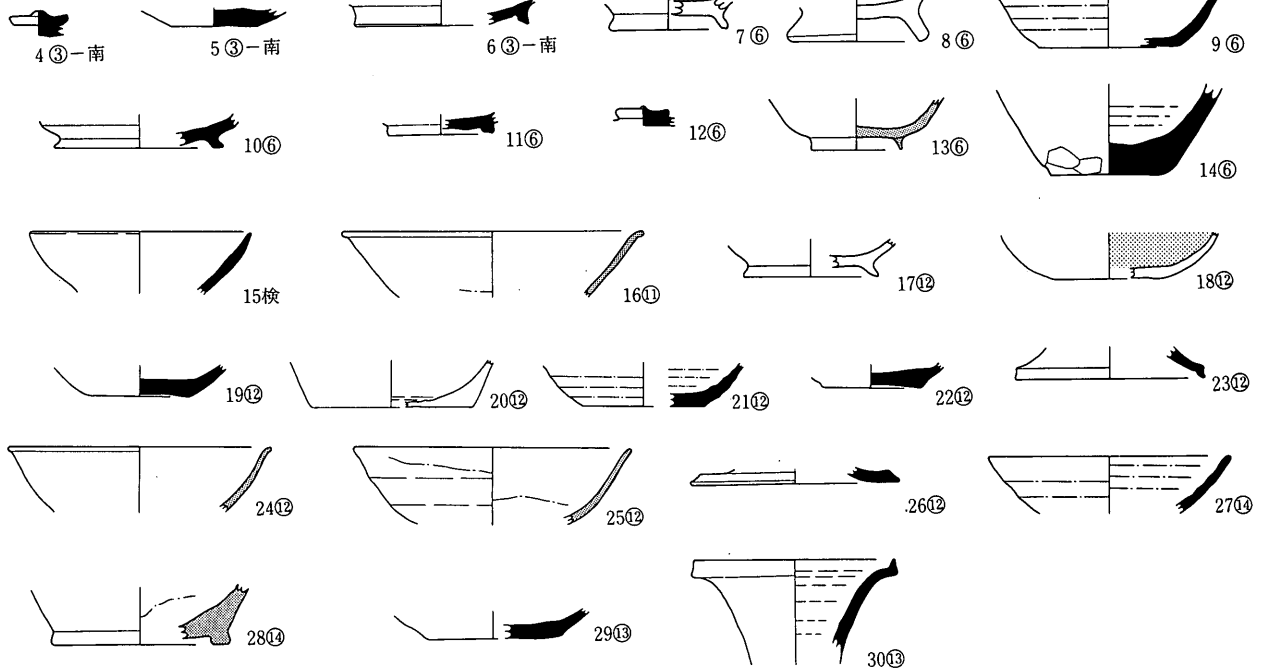
#### 註

- 1 仲野泰裕 1985 「長野県出土の近世陶磁—松本城二の丸御殿跡出土陶磁器資料を中心として」『愛知県陶磁資料館研究紀要4』
- 2 長野県教育委員会・跡長野県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 塩尻市内その2 吉田川西遺跡』
- 3 松本市教育委員会 1985 『松本城二の丸御殿跡』
- 4 註1に同じ。
- 5 東部町教育委員会 1993 『南田遺跡・掘込遺跡・松ノ木遺跡・中井遺跡』
- 6 飯山市教育委員会 1992 『有尾遺跡』

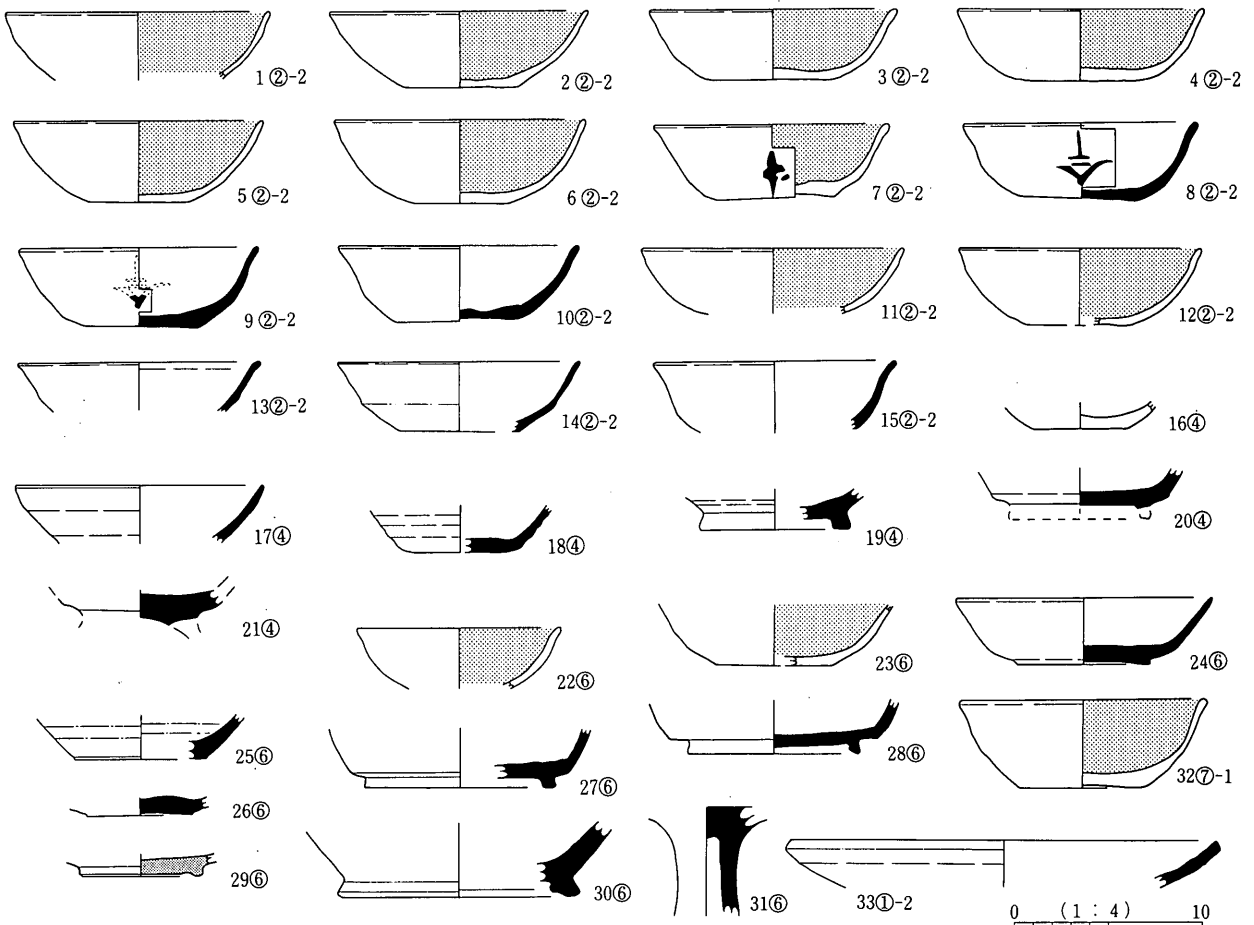
平安洪水砂層上部出土 (1~3)



平安洪水砂層～水田面出土 (4~30)

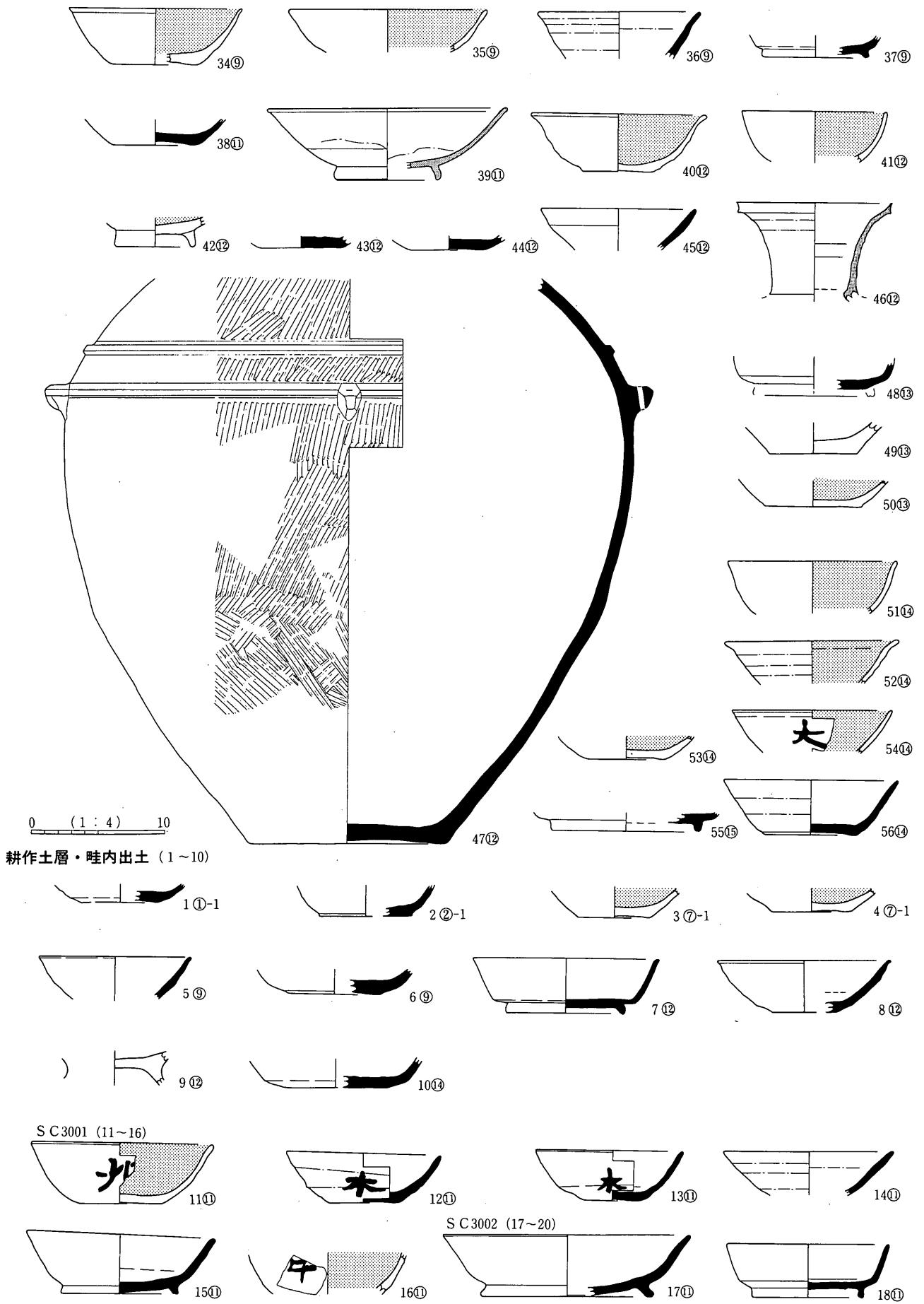


平安水田面出土 (1~56)

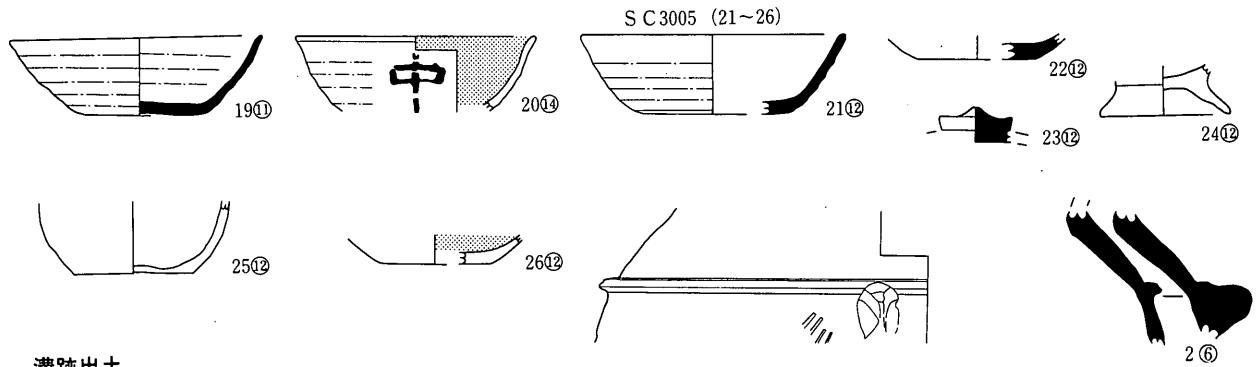


第318図 水田域出土古代焼物 1 (○内の数字は調査地区)



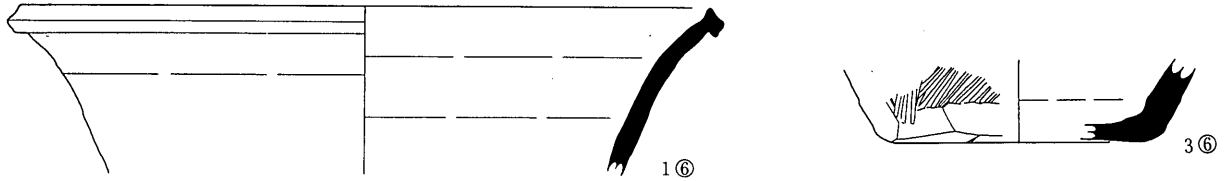


第319図 水田域出土古代焼物 2 (○内の数字は調査地区)

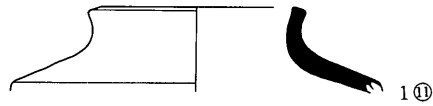


溝跡出土

S D1017 (1~3)



S D3001 (1)



S D3002 (1~3)

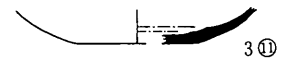


古代以外の溝跡出土

S D3003 (1)



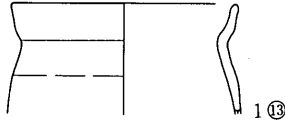
S D0022 (1~2)



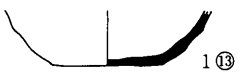
S D3006 (1~6)



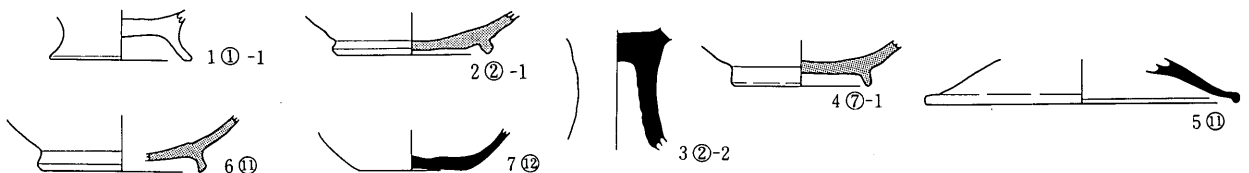
S D3009 (1)



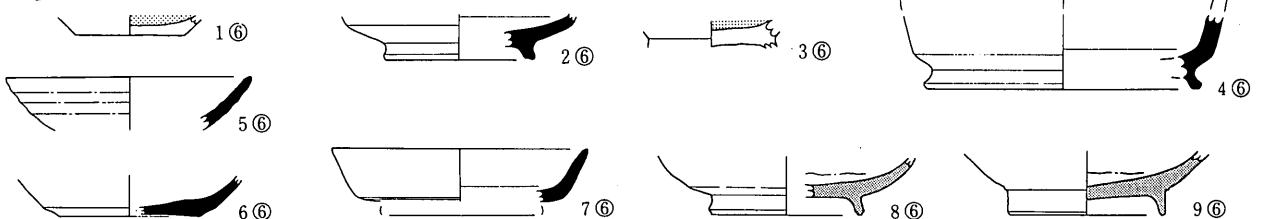
S D3015 (1~4)



検出面その他 (1~7)

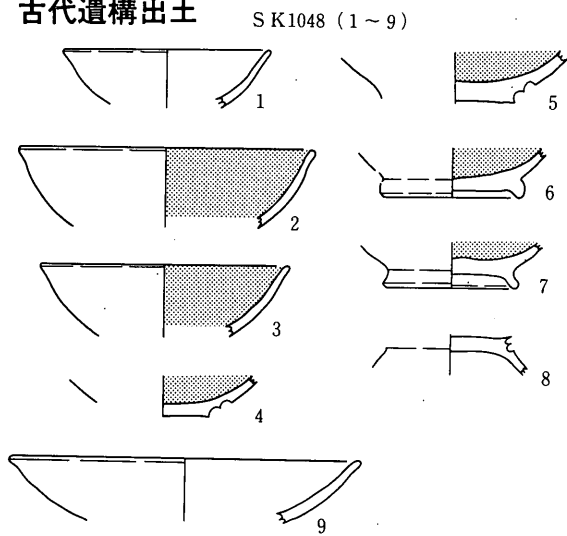


⑥区微高地 (1~9)

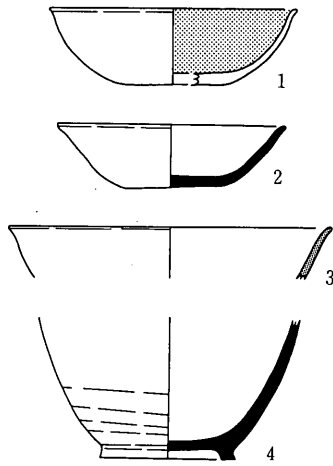


第320図 水田域出土古代焼物3 (○内の数字は調査地区)

古代遺構出土



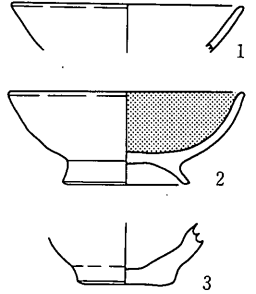
SK2064 (1~4)



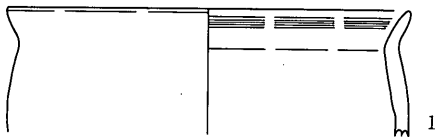
SK2070 (1)



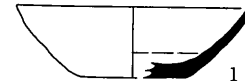
SK2072 (1~3)



SK2050 (1)



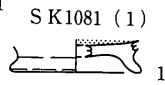
SD2019 (1)



SD2006 (1)



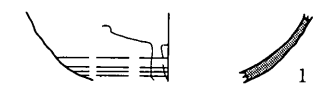
他時代遺構出土



SK2215 (1)



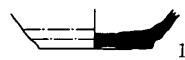
SK2496 (1)



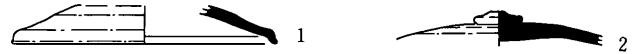
SK2022 (1)



SK2065 (1)



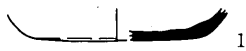
SK2119 (1~3)



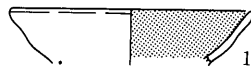
SK2073 (1)



SK2100 (1)



SK2185 (1)



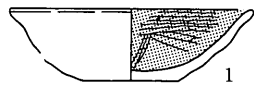
SK2187 (1)



SK2113 (1)



SK2188 (1~2)



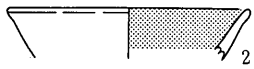
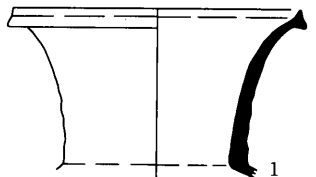
SK2197 (1~3)



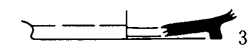
SK2213 (1~2)



SK2319 (1)



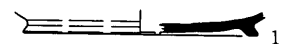
SK2193 (1)



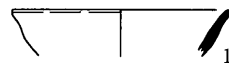
SK2316 (1)



SK2325 (1)



SK2328 (1)



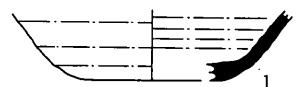
SK2329 (1)



SK2401 (1)



SK2404 (1)

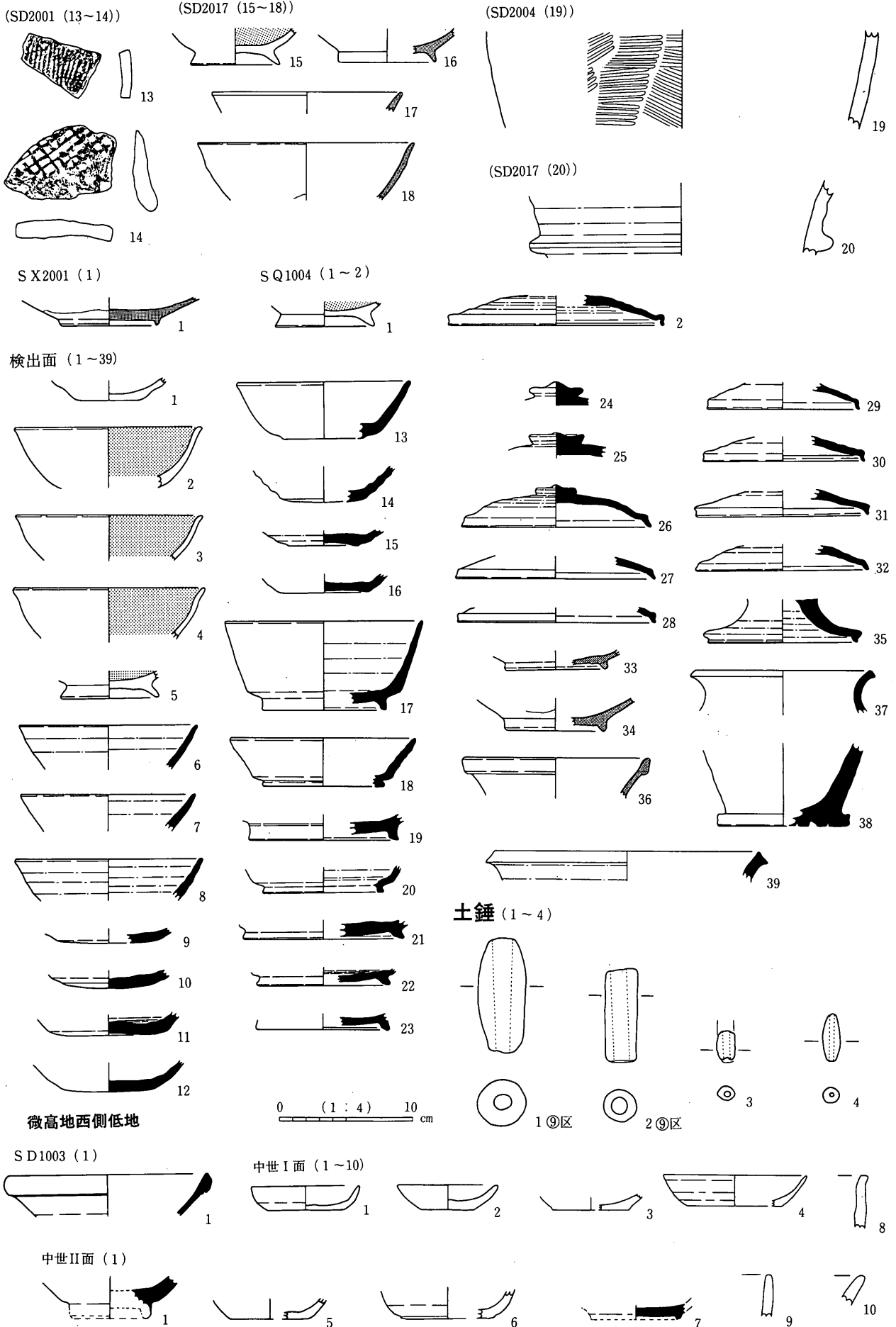


0 (1 : 4) 10cm

第321図 微高地出土古代焼物1 (古代遺構出土・他時代遺構出土)

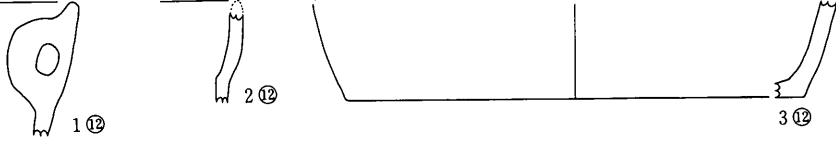


第4章 各時代の遺構と遺物



第323図 微高地出土古代焼物3 (他時代溝跡・検出面)、中世水田域出土中世焼物1

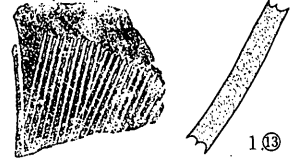
微高地東側低地  
中世I面 (1~3)



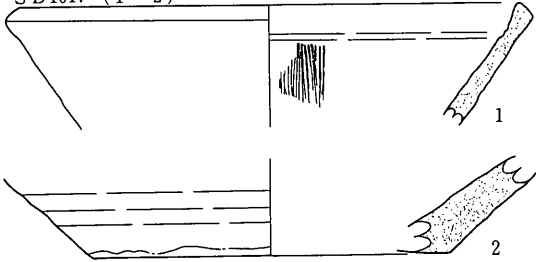
中世II面遺構

SD3006A (1)

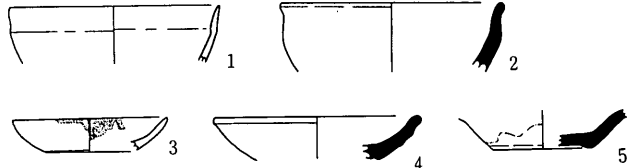
SD3006 (1)



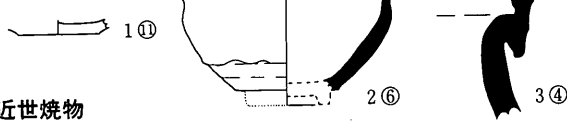
他時代遺構混入  
SD1017 (1~2)



②-2区近世面 (1~8)

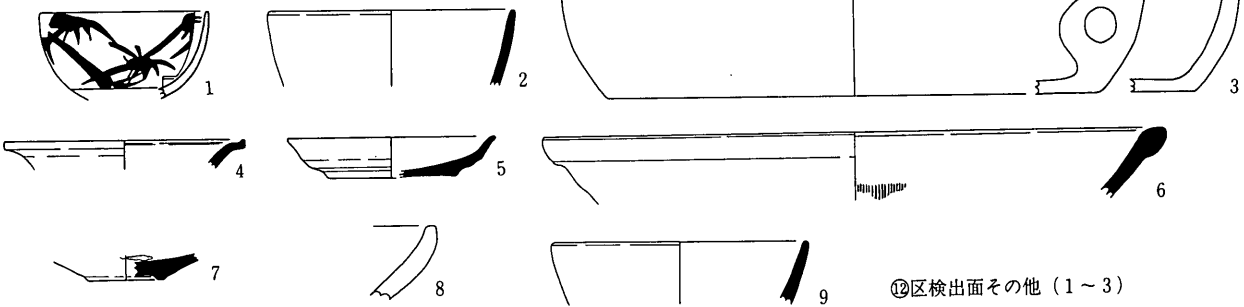


検出面他 (1~3)

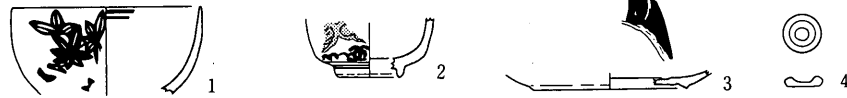


近世焼物

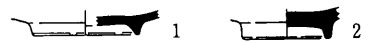
②-2区近世面 (1~9)



⑩区近世水田面 (1~4)

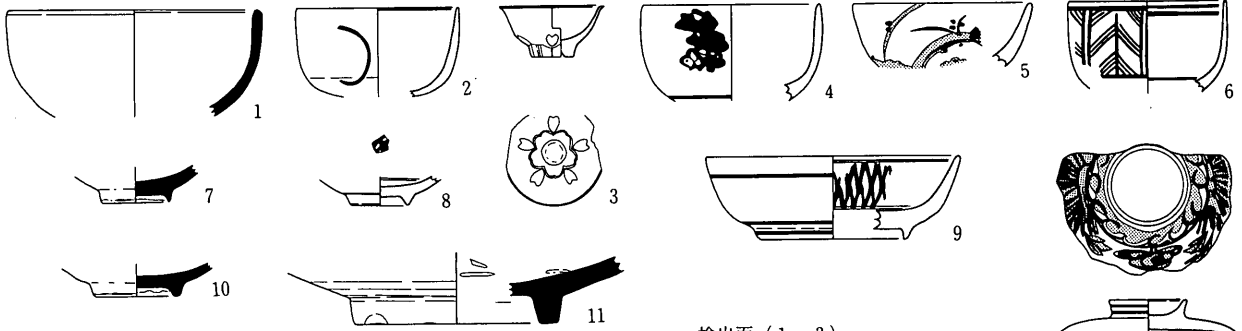


⑩区検出面その他 (1~3)



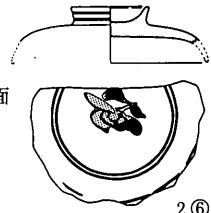
3⑩区平安砂層

SD1017 (1~13)



検出面 (1~3)

1⑩区3層上面

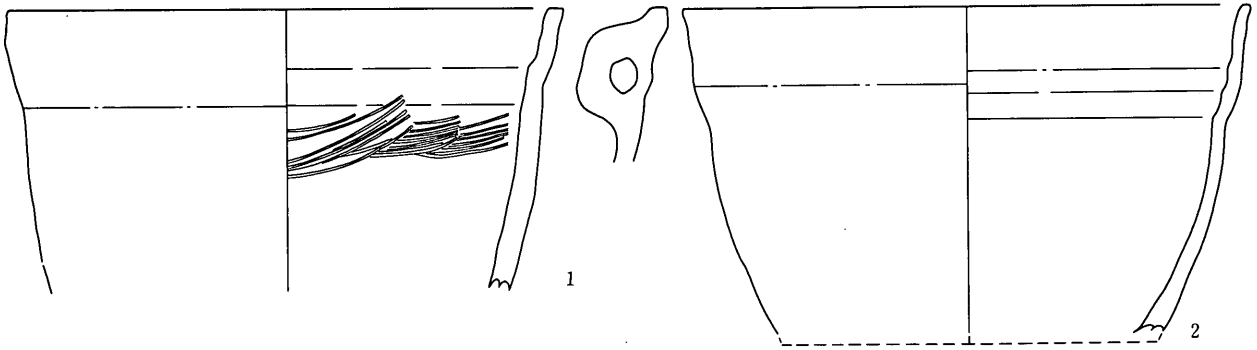


0 (1:4) 10

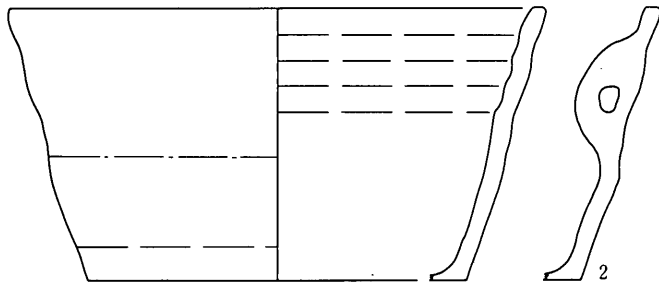
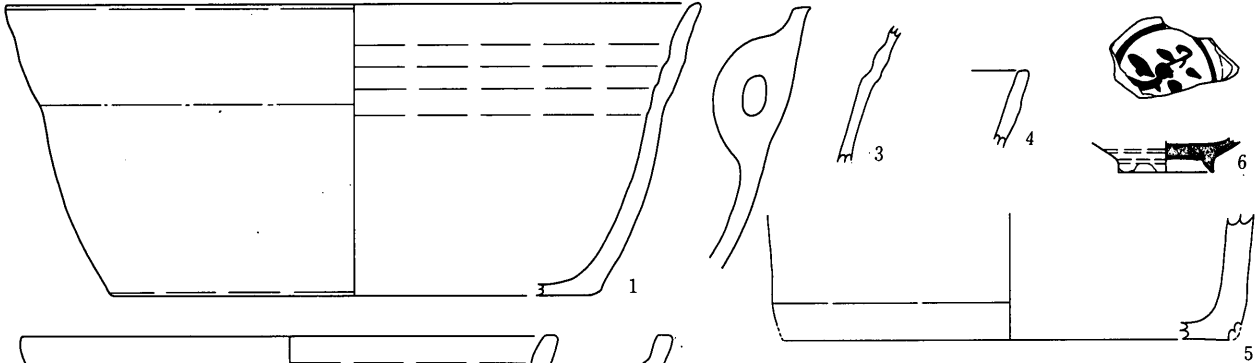
3⑥区1層下部

第324図 水田域出土中世焼物2 (近世焼物)

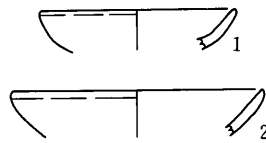
SK1001(1~2)



SK1004(1~6)



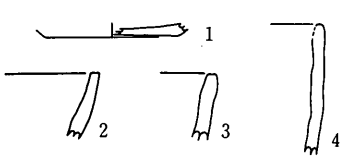
SK1012(1~2)



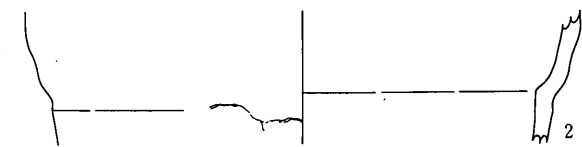
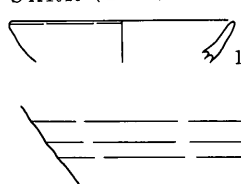
SK1013(1~2)



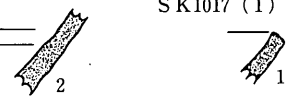
SK1015(1~4)



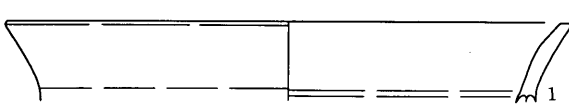
SK1016(1~2)



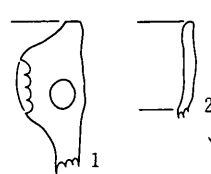
SK1017(1)



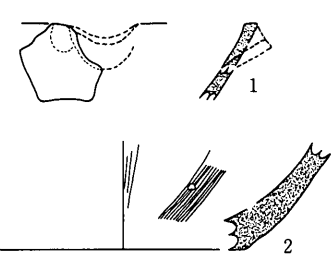
SK1038(1)



SK1049(1~2)



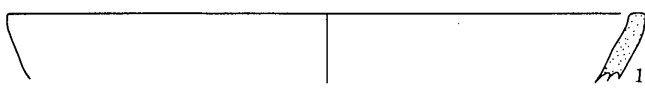
SK1084(1~2)



SK1039(1)



SK1044(1)



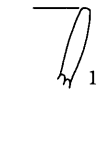
SK2009(1)



SK2038(1)



SK2039(1)



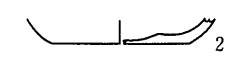
SK2041(1)



SK1088(1)

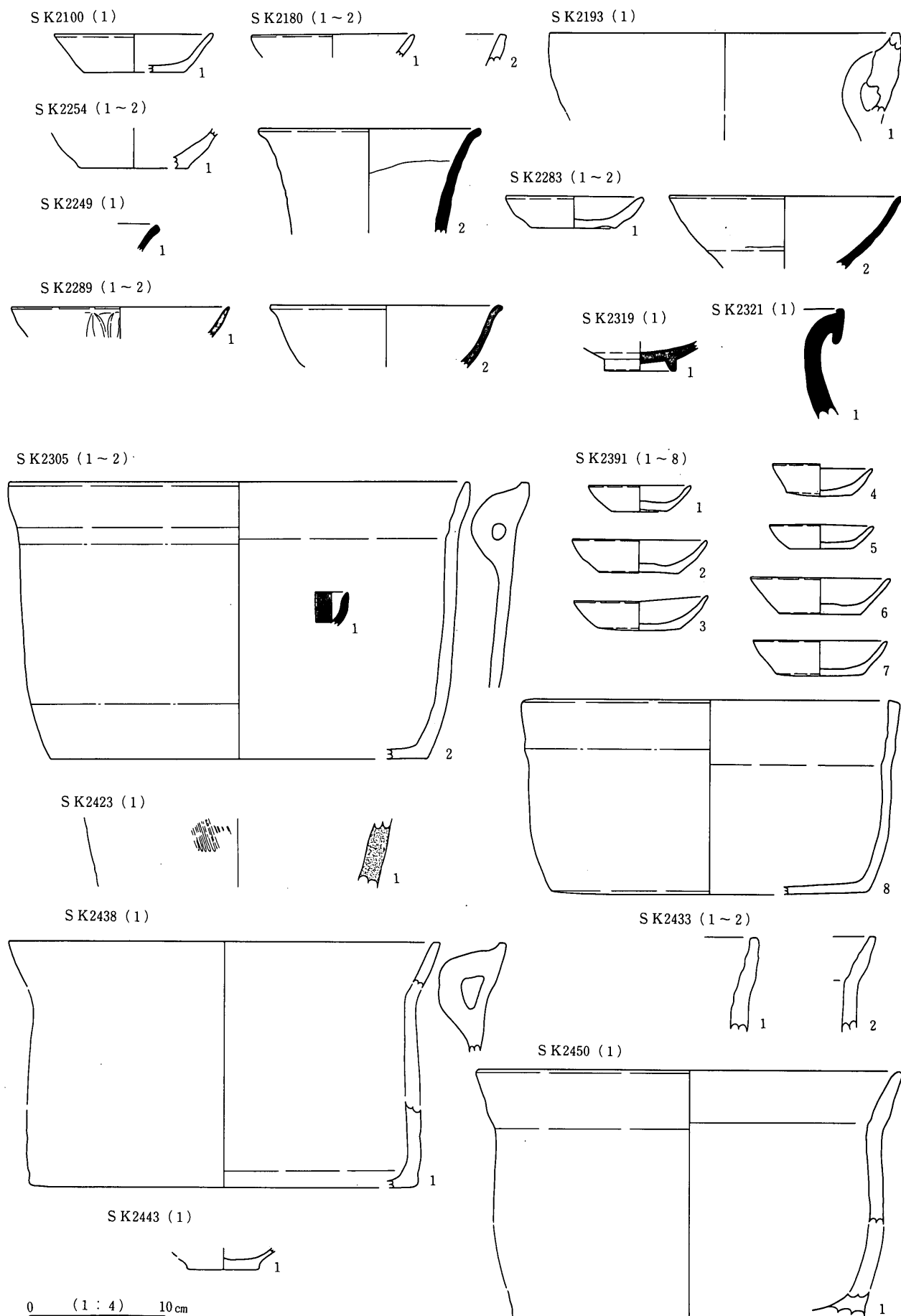


SK2012(1)



0 (1:4) 10cm

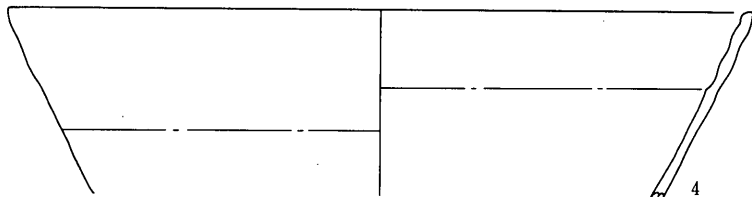
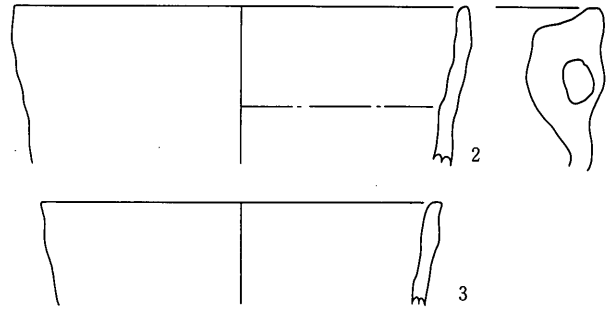
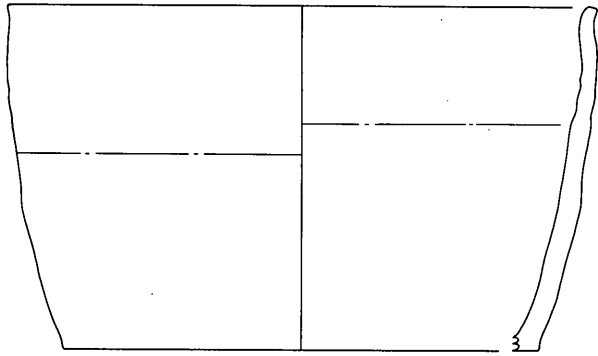
第325図 微高地域出土中世焼物1 (中世土坑跡出土)



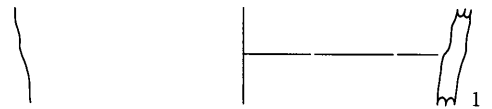
第326図 微高地域出土中世焼物2 (中世土坑跡出土)



SK2624 (1~4)

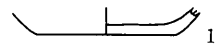


SK2628 (1)



SK2634 (1)

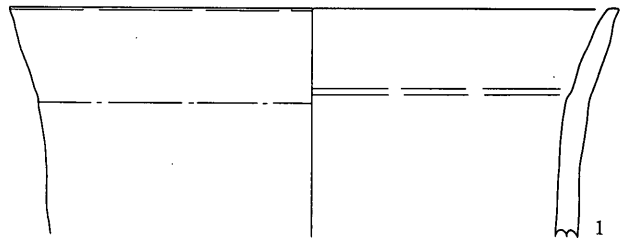
SK2640 (1)



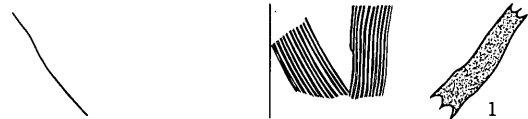
SK2639 (1~5)



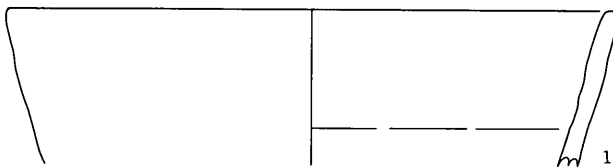
SK2635 (1)



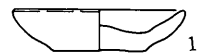
SK2642 (1)



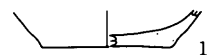
SK2649 (1)



SK2650 (1)



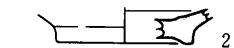
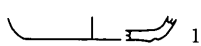
SK2866 (1)



SD1010 (1~2)



SD1011 (1~2)



SD1012 (1~2)



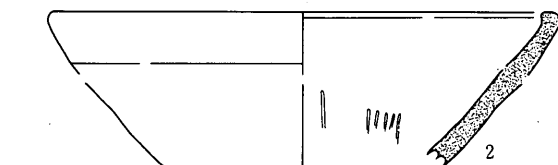
SD1011, 12 (1~2)



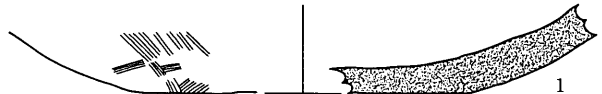
SK2877 (1~2)



0 (1:4) 10 cm

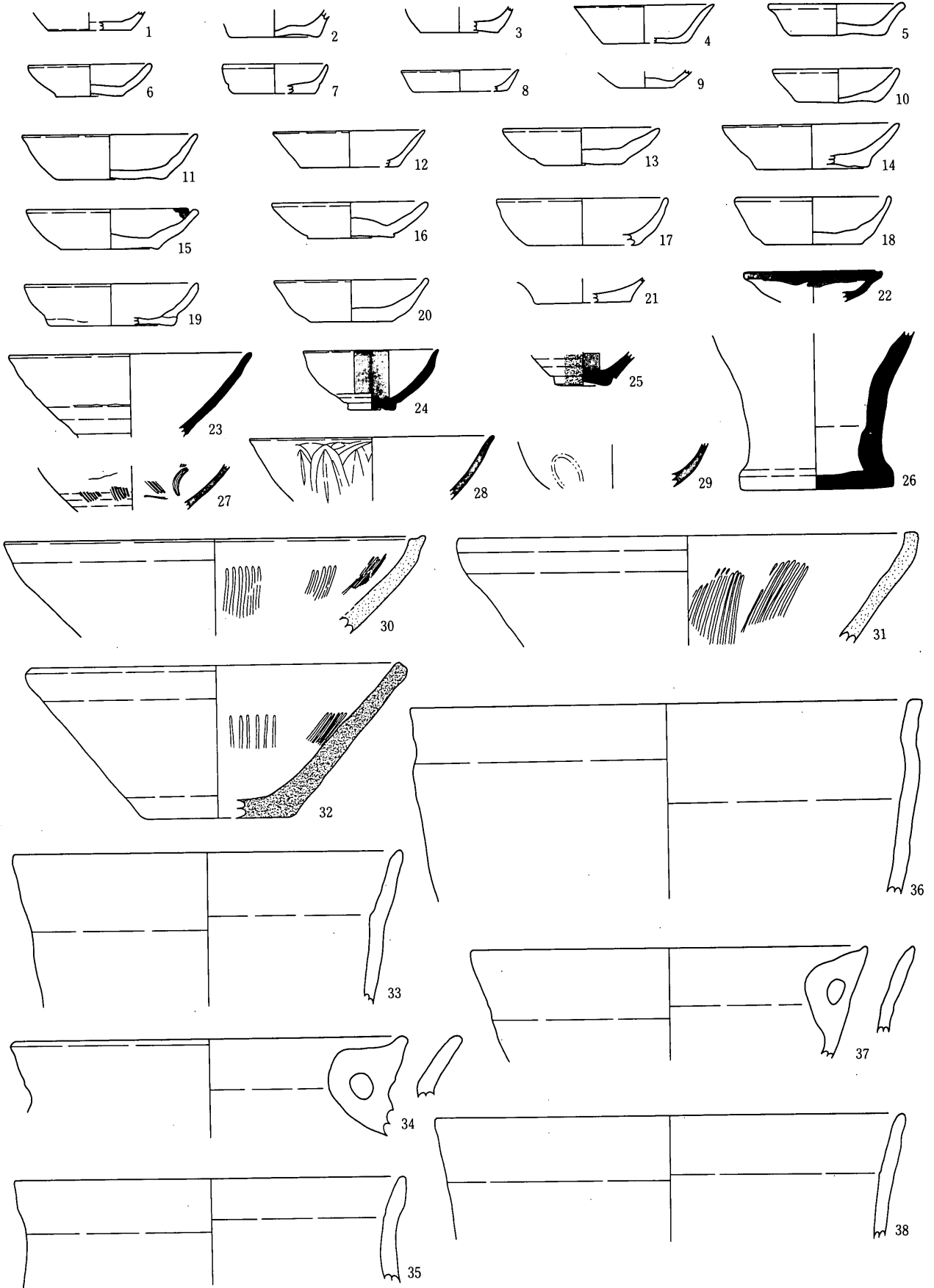


SD1052 (1)



第327図 微高地域出土中世焼物3 (中世土坑溝跡出土)

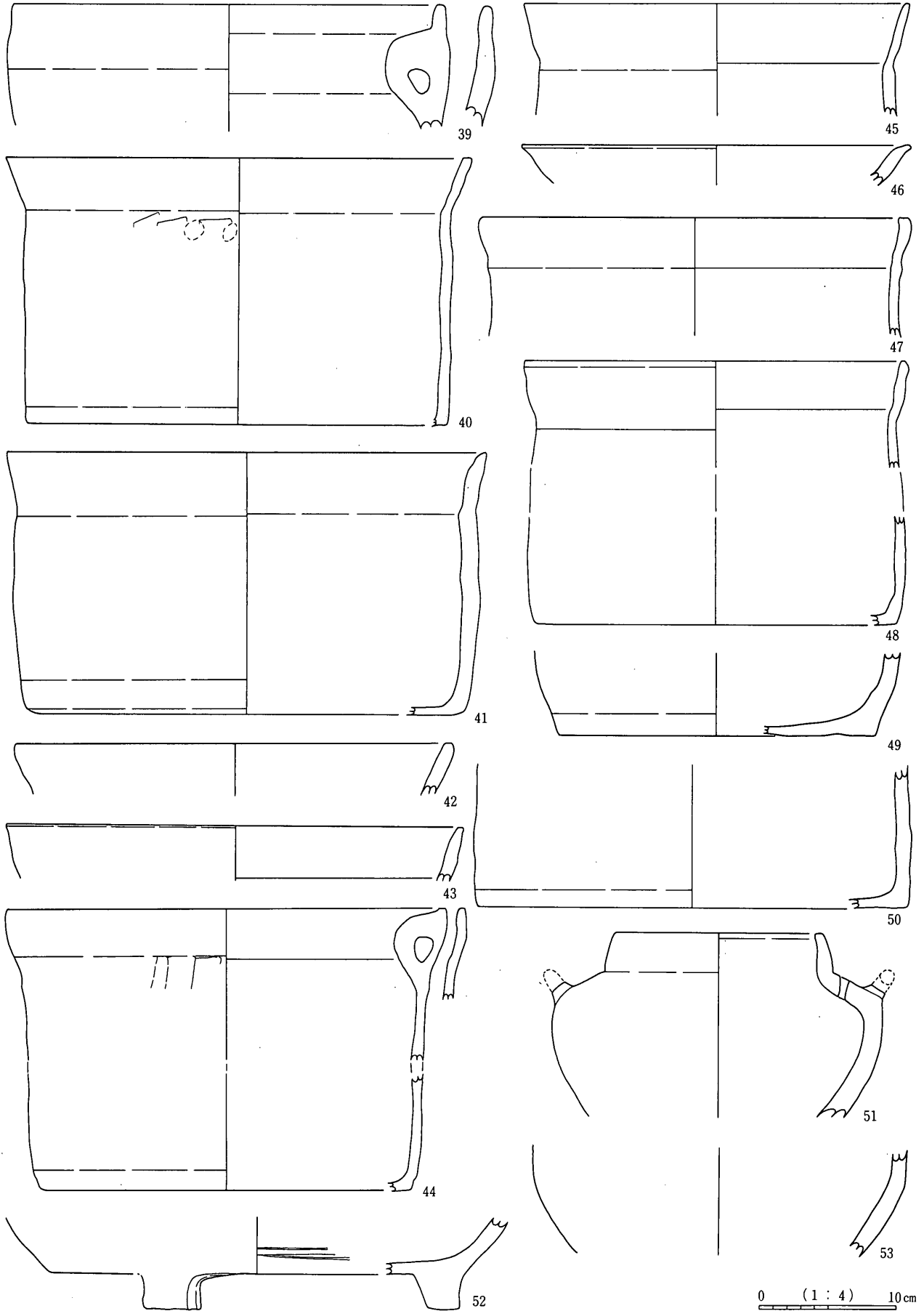
SD1008 (1~38)



0 (1:4) 10cm

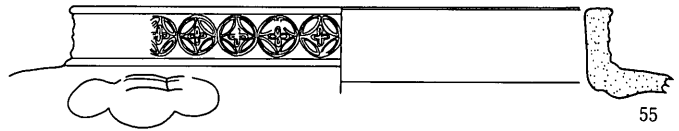
第328图 微高地域出土中世烧物4 (沟迹出土)

SD1008 (39-53)



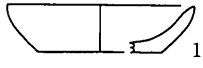
第329図 微高地域出土中世焼物5 (溝跡出土)

SD1008 (54~55)

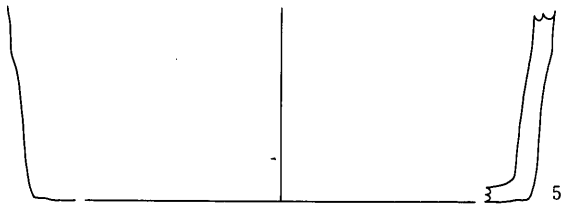
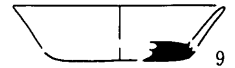
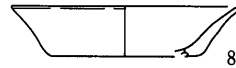
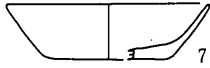


SD2001 (1~59)

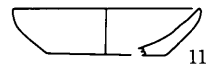
(SD2003) (1~6)



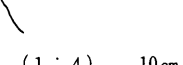
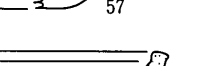
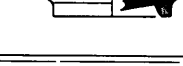
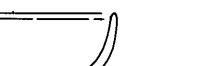
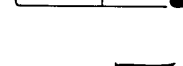
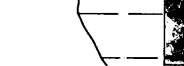
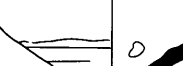
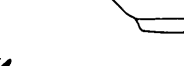
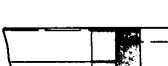
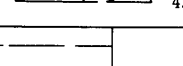
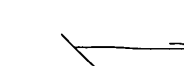
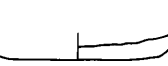
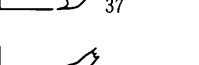
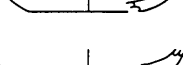
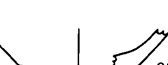
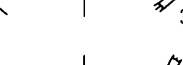
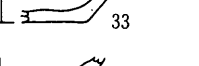
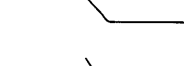
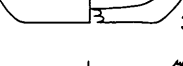
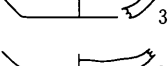
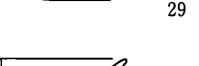
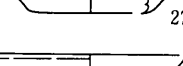
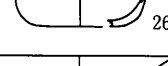
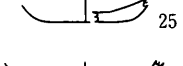
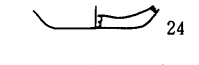
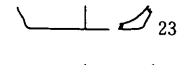
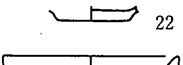
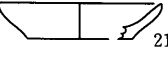
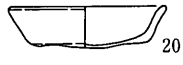
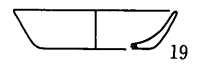
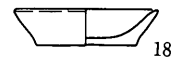
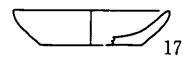
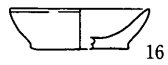
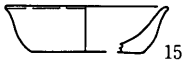
(SD2004) (7~10)



(SD2017) (11~14)



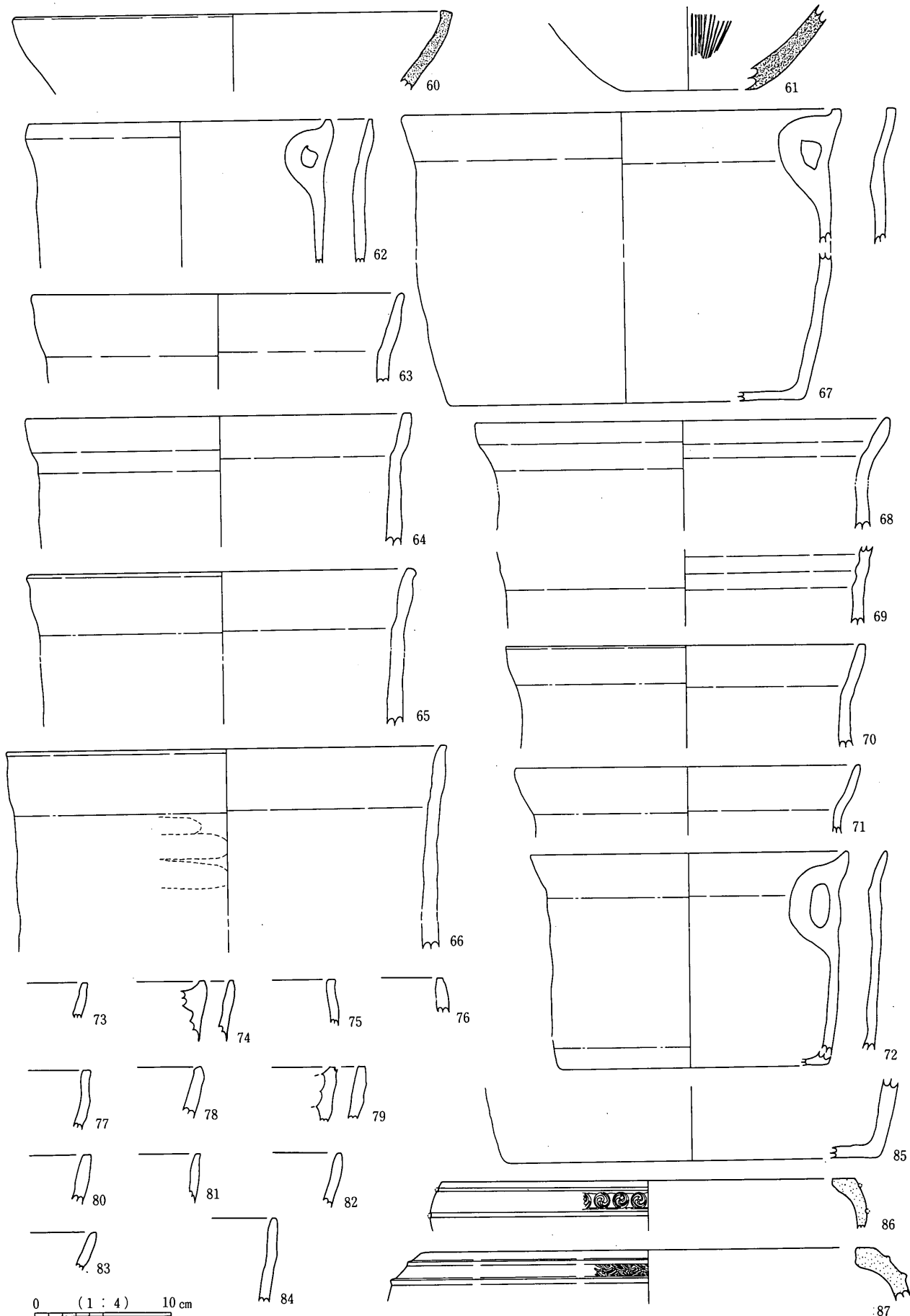
(SD2001) (15~59)



0 (1 : 4) 10 cm

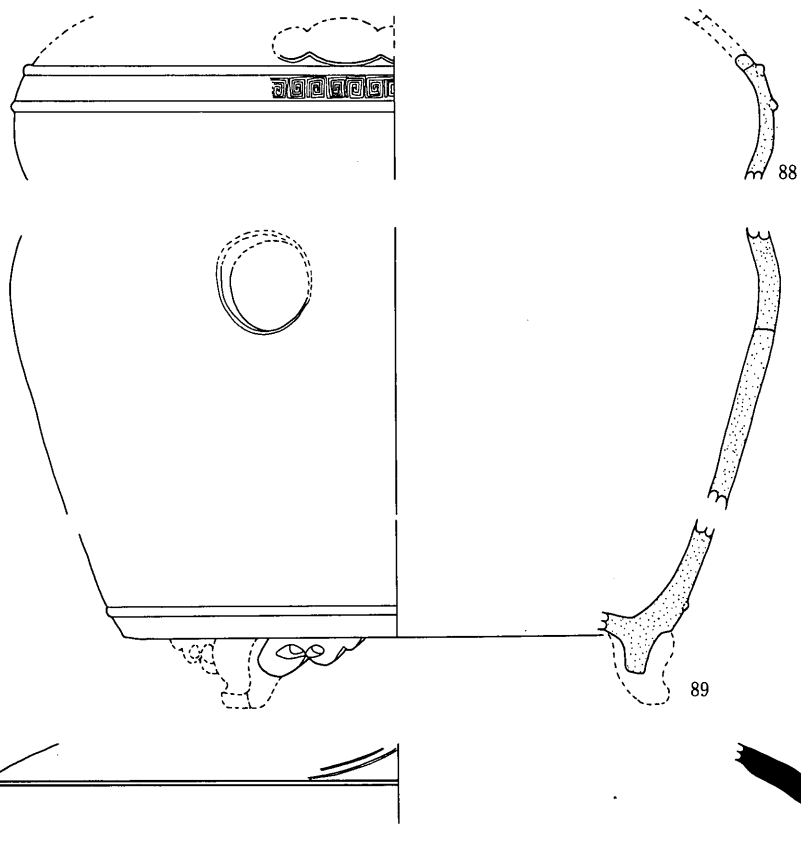
第330図 微高地域出土中世焼物6 (溝跡出土)

SD2001 (60-87)

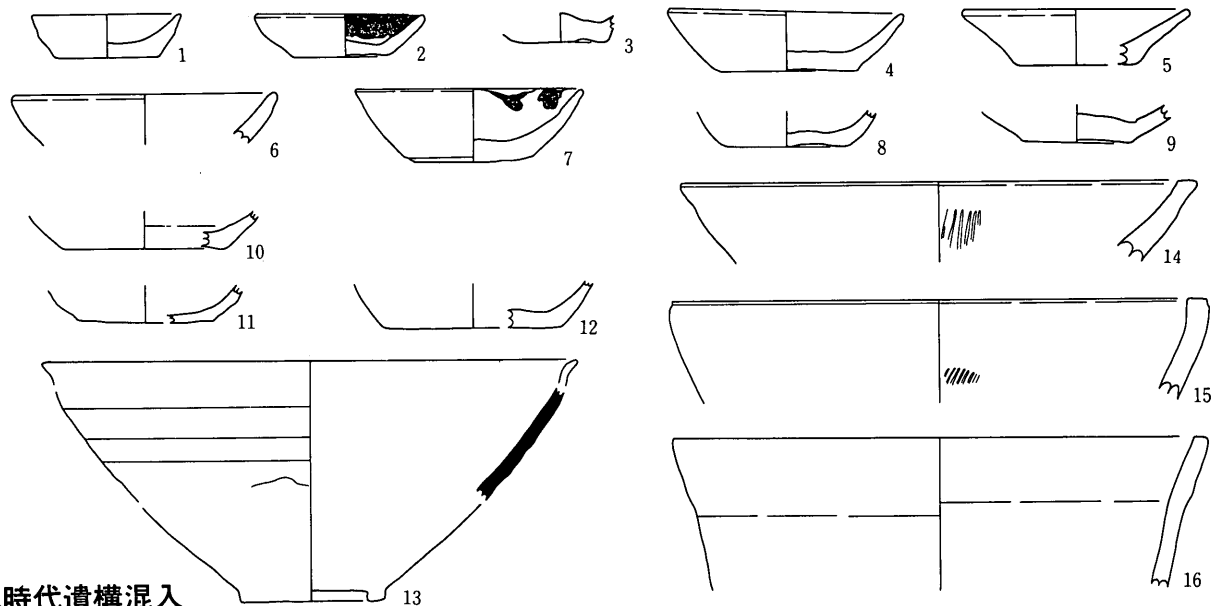


第331図 微高地域出土中世焼物7 (溝跡出土)

SD2001 (88~90)



SD2007 (1~16)

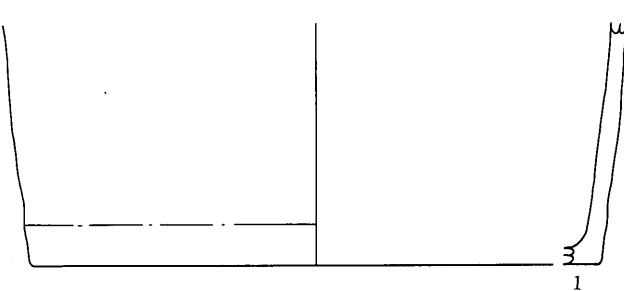


他時代遺構混入

SK1037 (1) SK2058 (1)



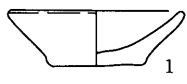
SK2182 (1)



SK2063 (1)



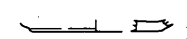
SK2172 (1)



SK2183 (1)

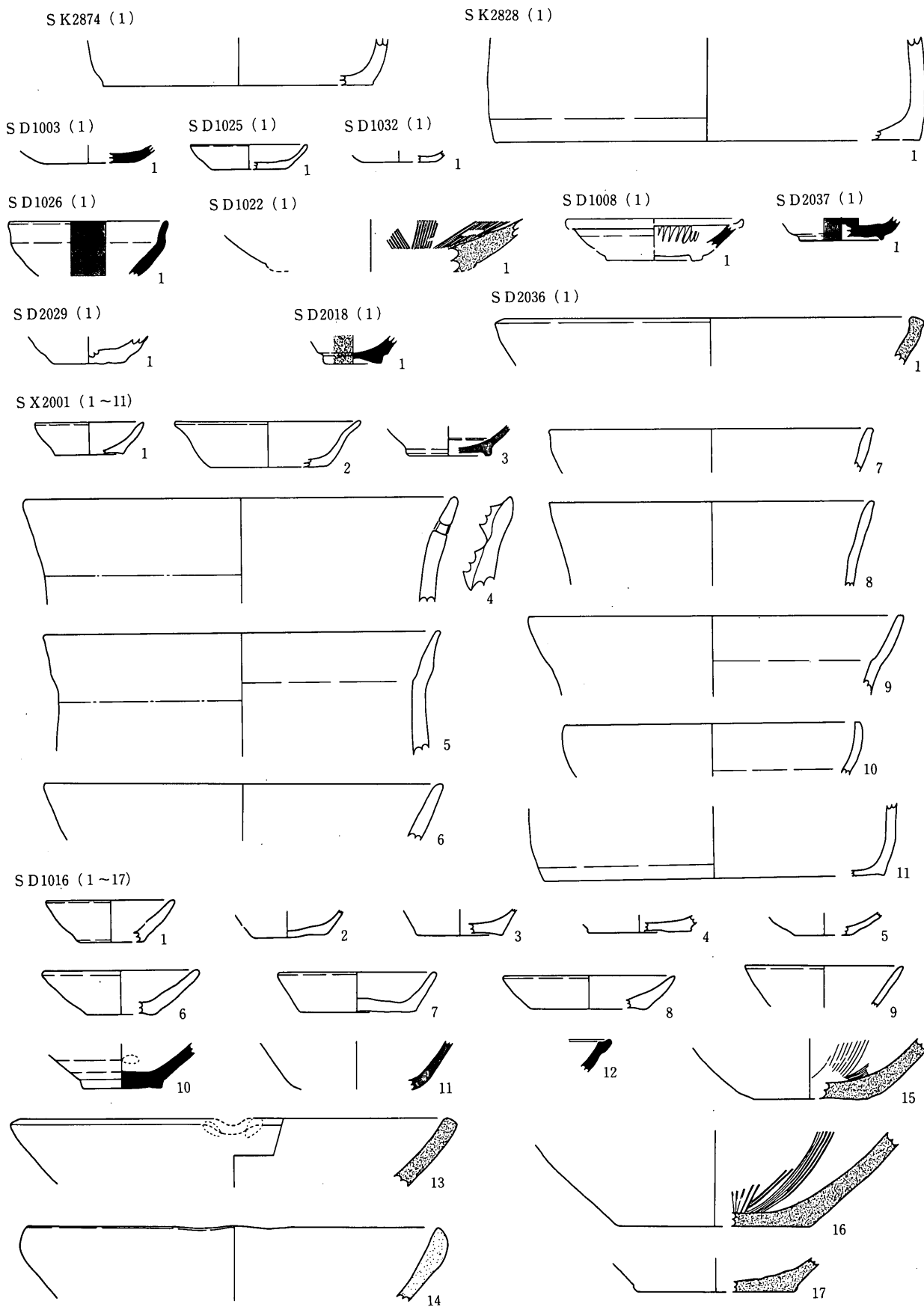


SK2197 (1)



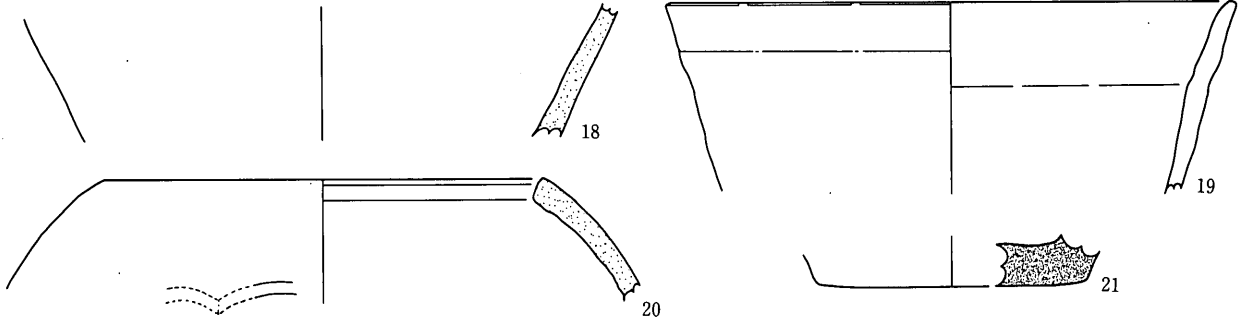
0 (1:4) 10cm

第332図 微高地域出土中世焼物8 (溝跡出土・他時代遺構混入)

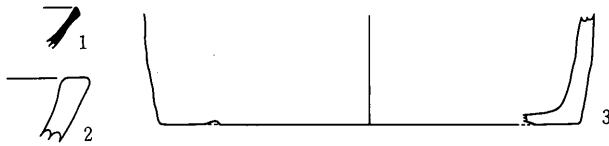


第333図 微高地域出土中世焼物9 (他時代遺構混入)

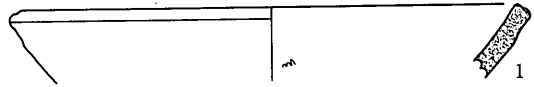
SD1016 (18~21)



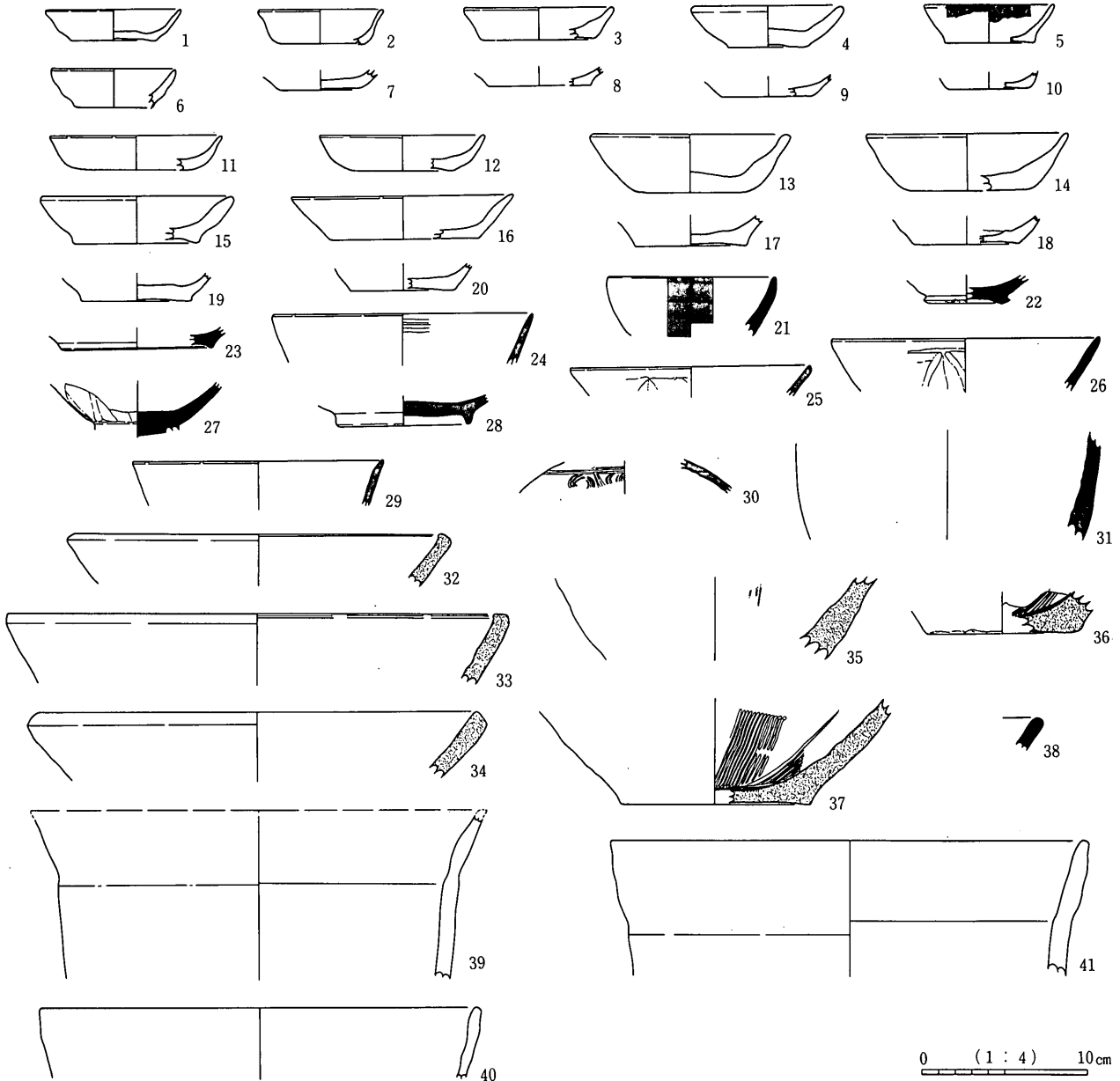
SQ2004 (1~3)



SQ2016 (1)



検出面 (1~41)

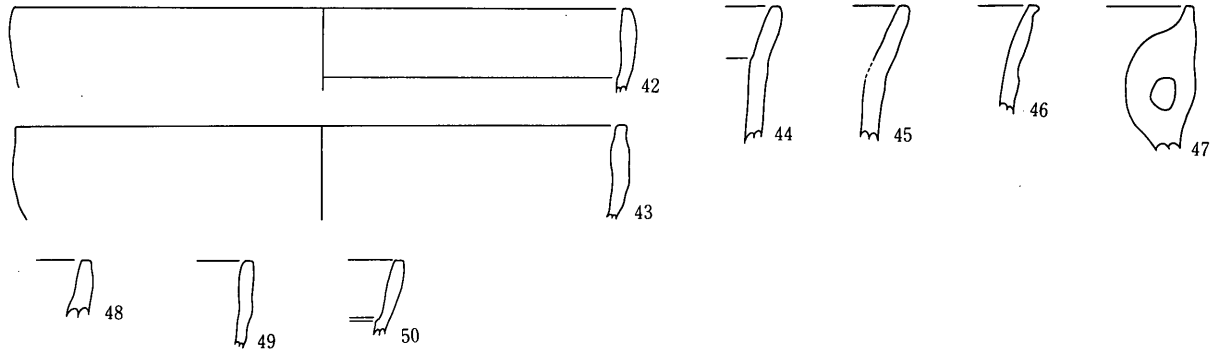


0 (1:4) 10cm

第334図 微高地域出土中世焼物10 (他時代遺構混入・検出面他)

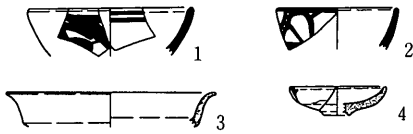


検出面 (42~50)

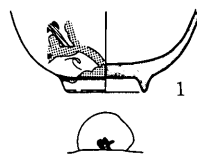


近世焼物

SK1131 (1~4)



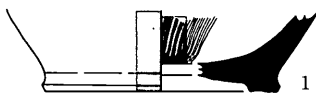
SD1001 (1)



SD1002 (1~2)



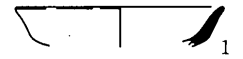
SK2022 (1)



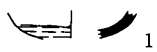
SD1033 (1)



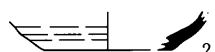
SD1022 (1)



SK2104 (1)



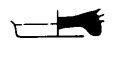
SK2642 (1~4)



SK2748 (1)



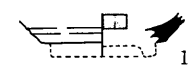
SD2018 (1)



SD2036 (1)



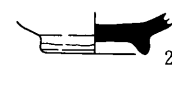
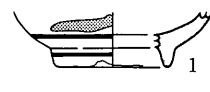
SD2037 (1)



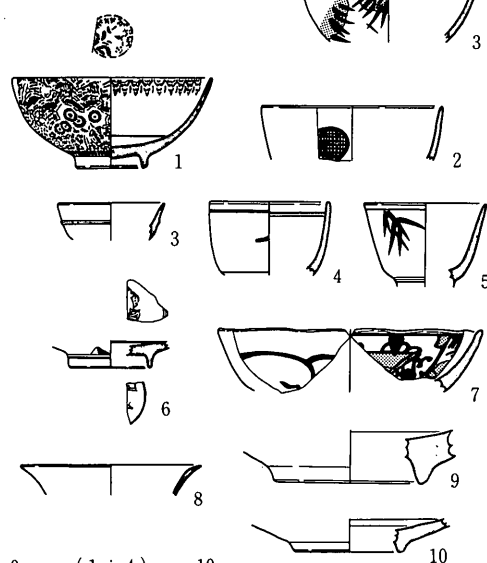
SX2001 (1~3)



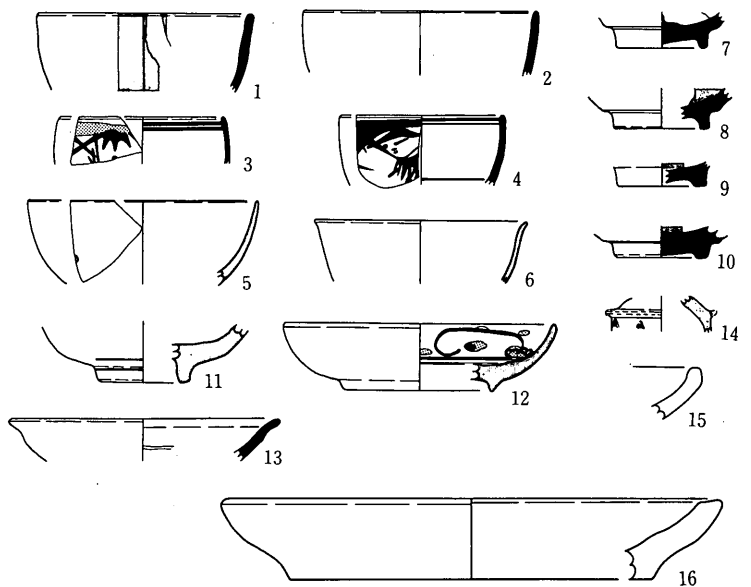
SD1008 (1~3)



SG1001 (1~10)



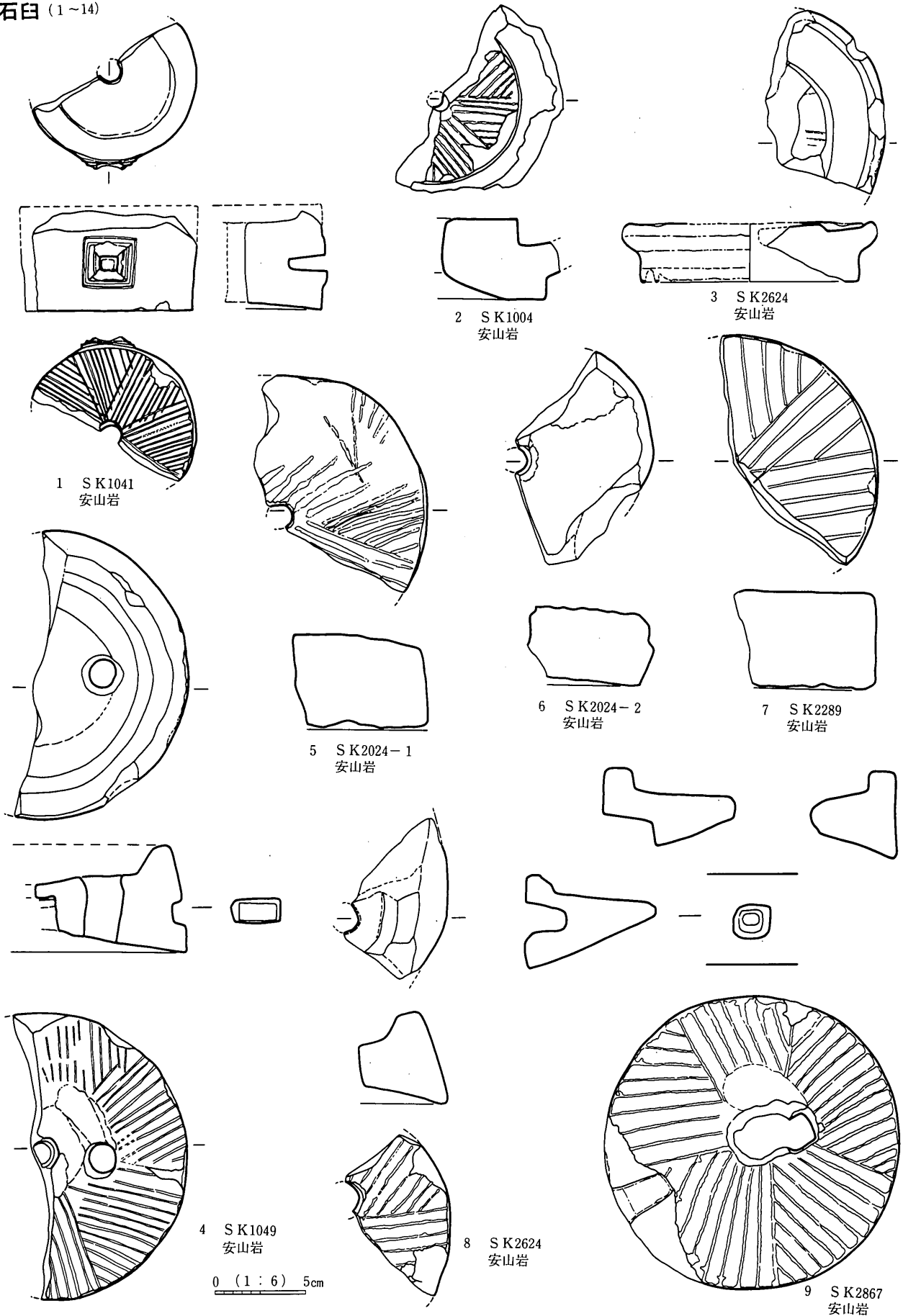
検出面 (1~16)



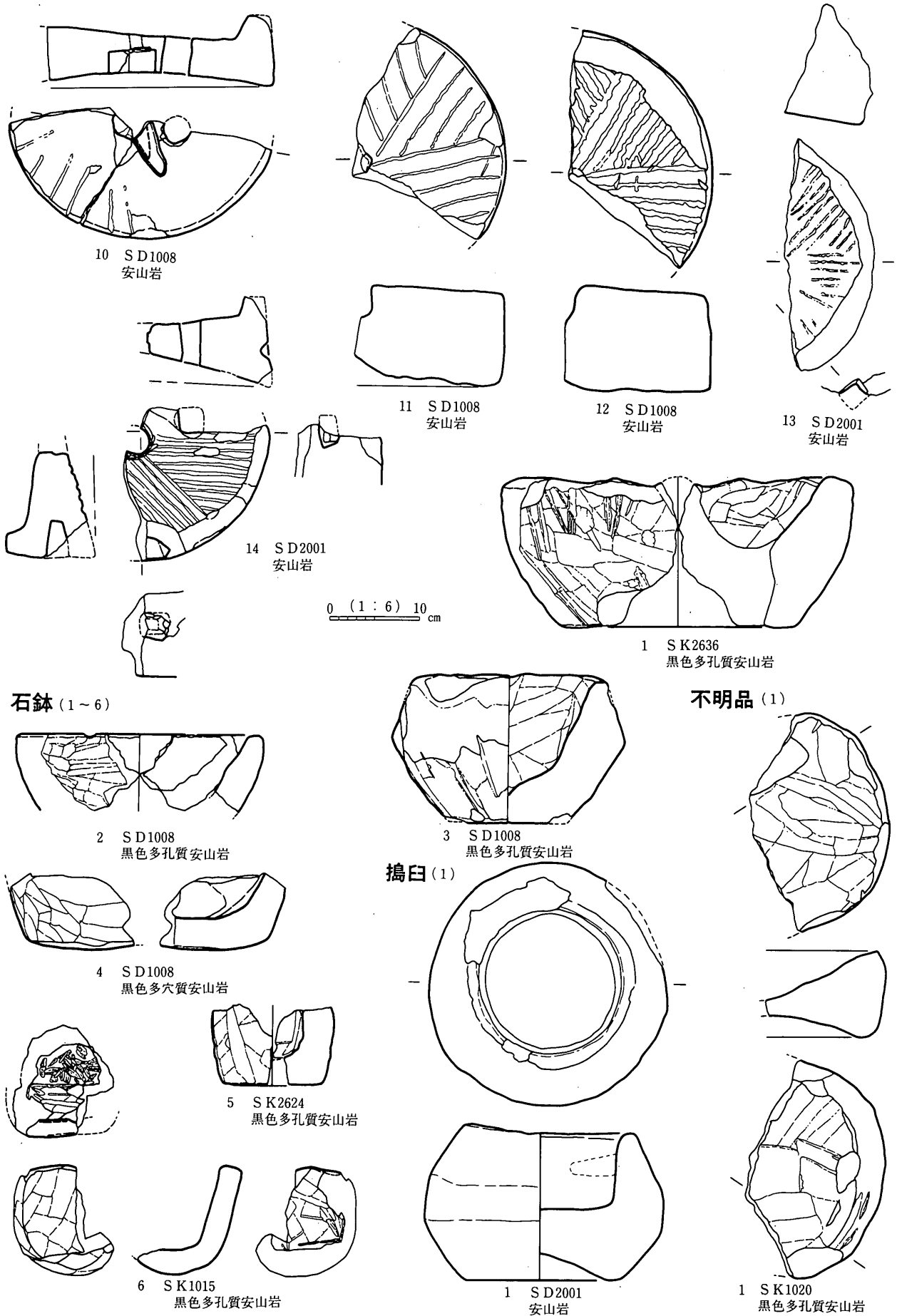
0 (1:4) 10cm

第335図 微高地域出土中世焼物11 (検出面他)・近世焼物

石臼 (1~14)

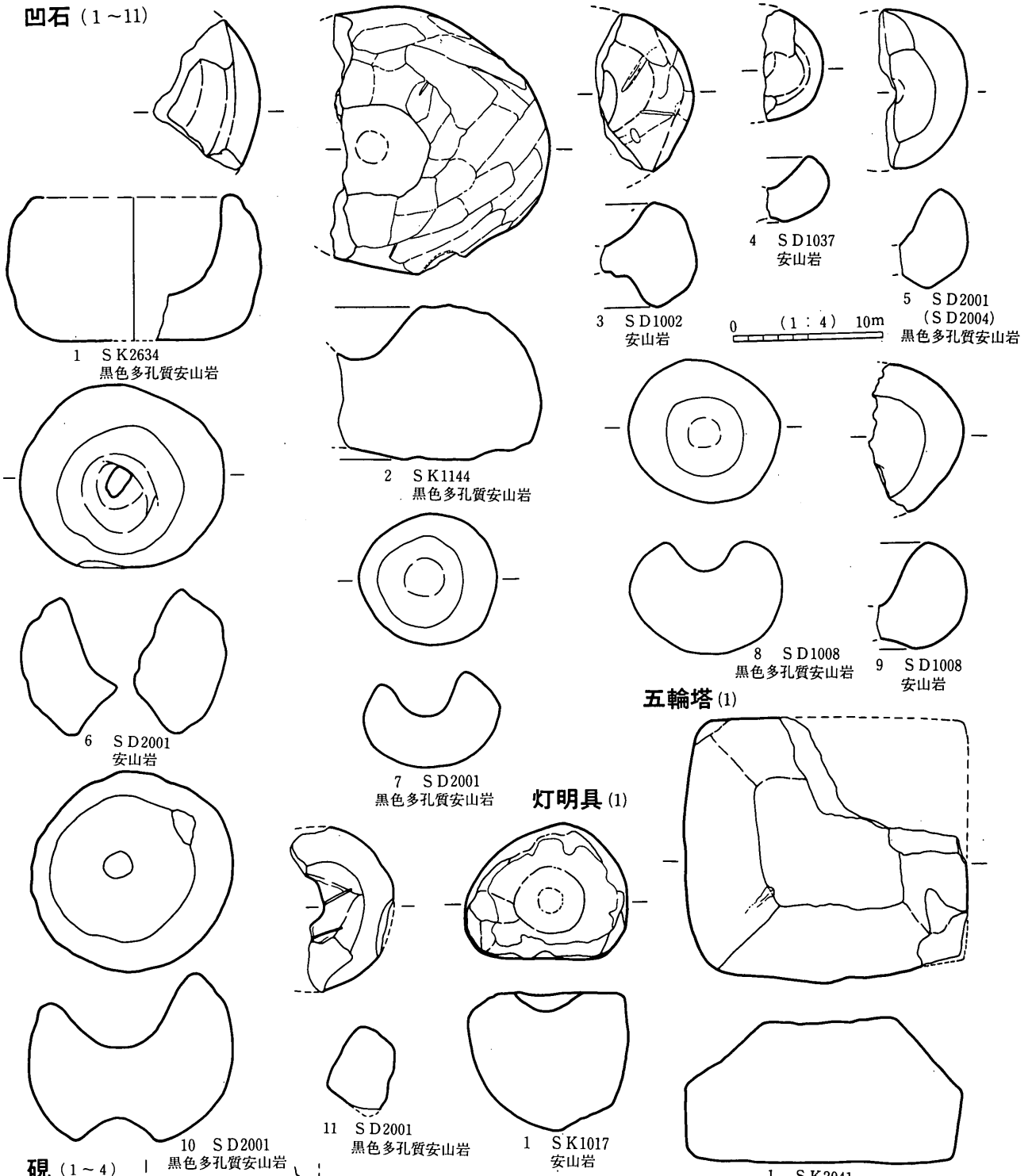


第336图 微高地域出土中世石製品 1 (石臼)

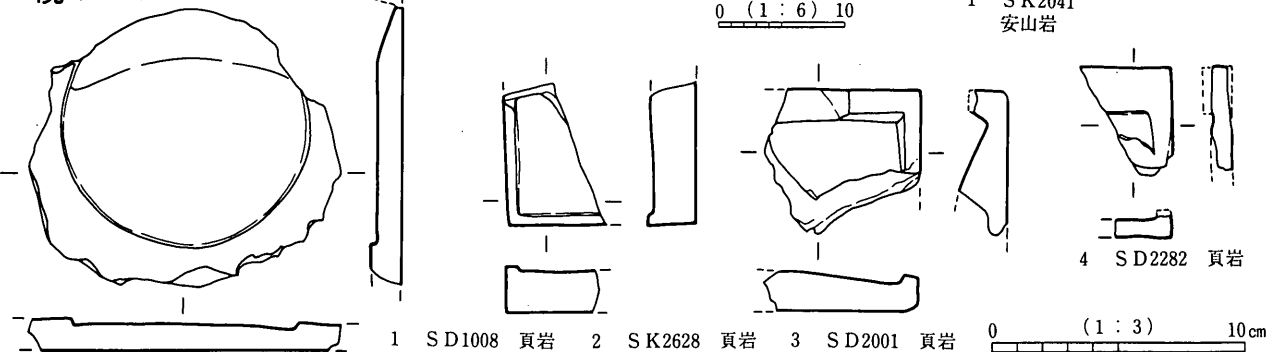


第337図 微高地域出土中世石製品2 (石臼・石鉢・搗臼他)

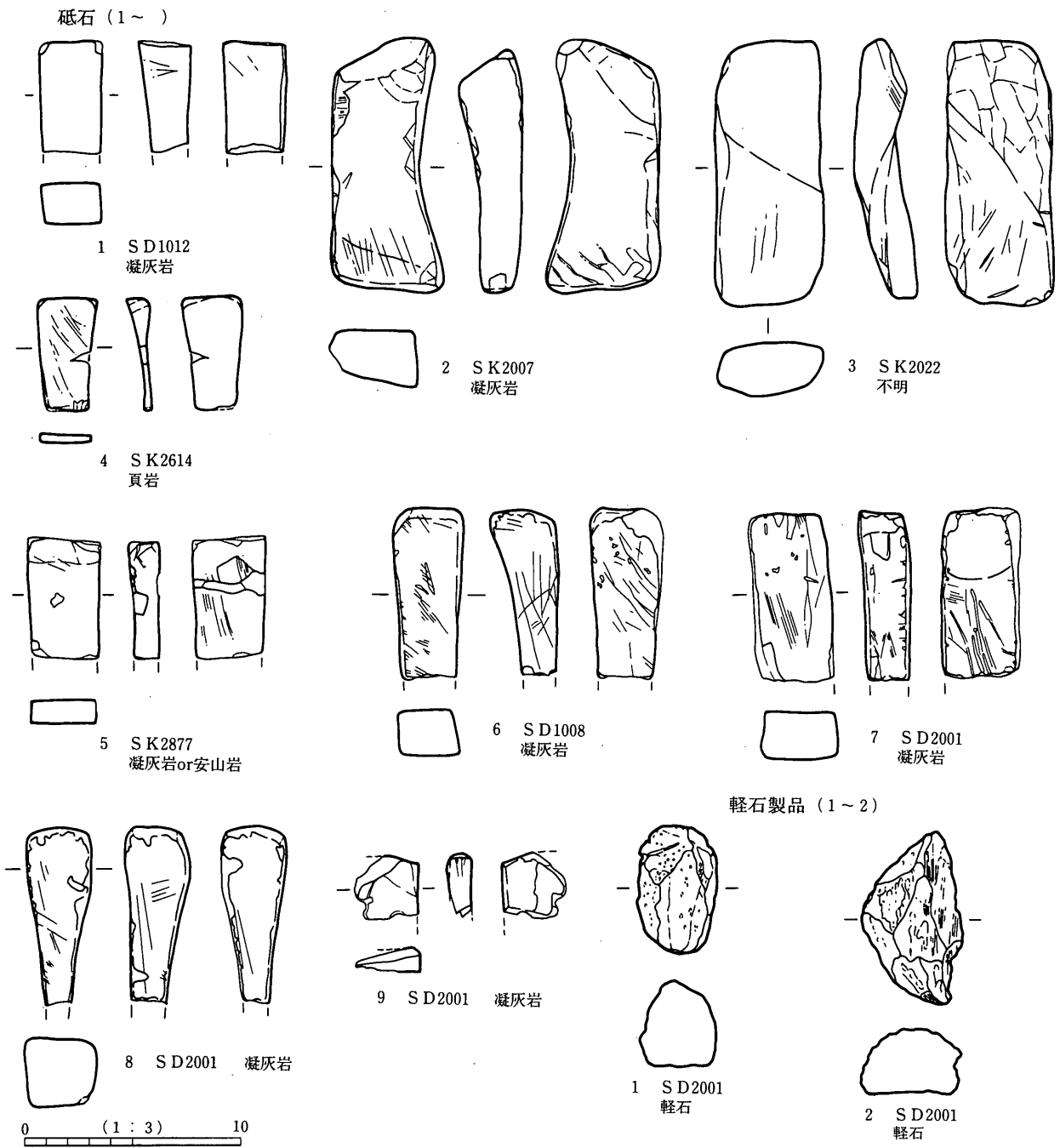
凹石 (1~11)



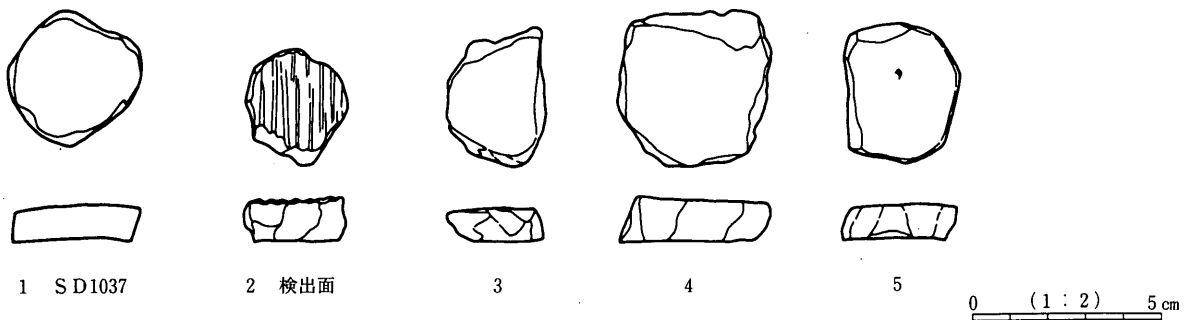
硯 (1~4)



第338図 微高地域出土中世石製品3 (凹石・灯明具・五輪塔・硯)

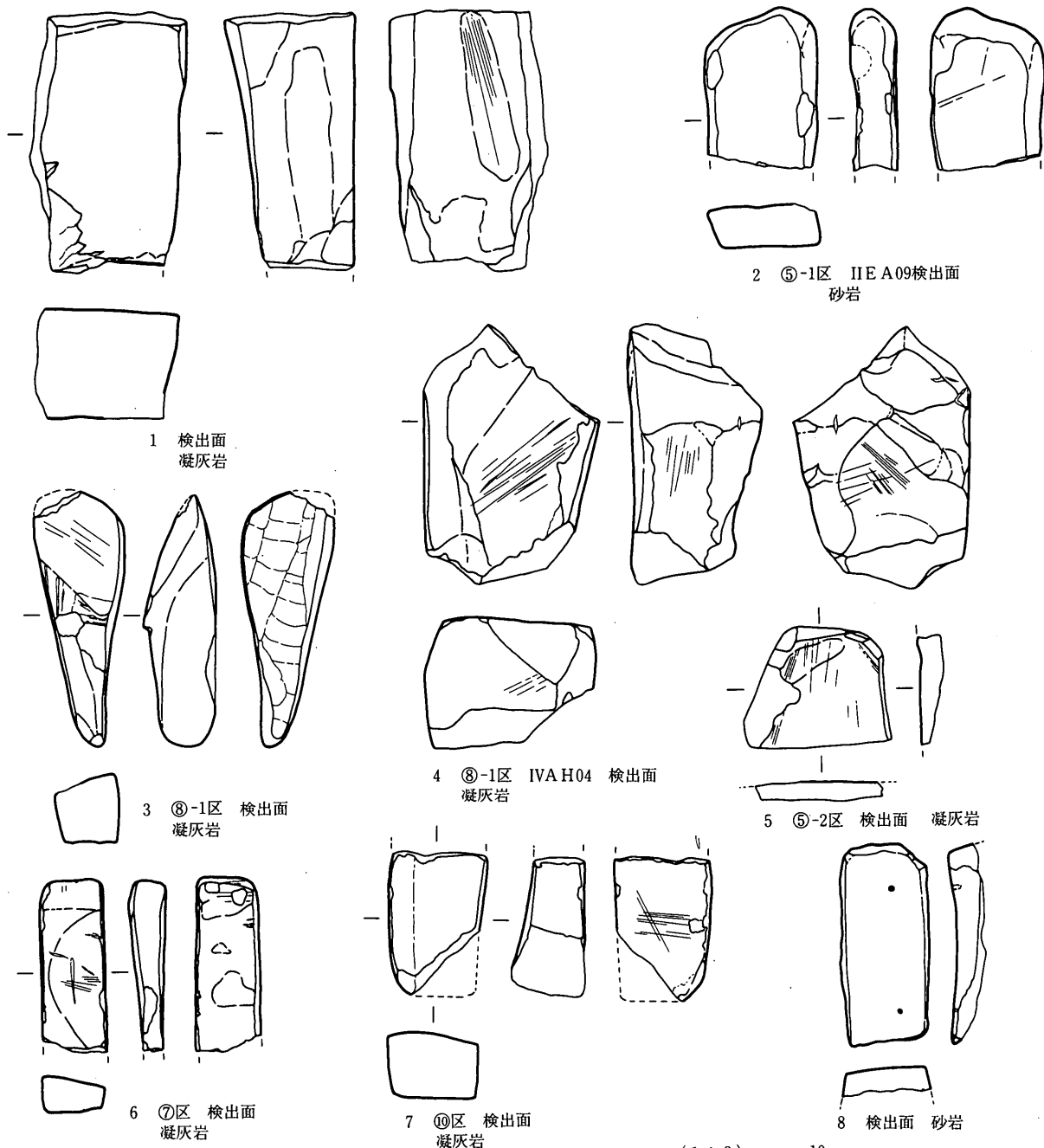


土製円盤 (1~5)



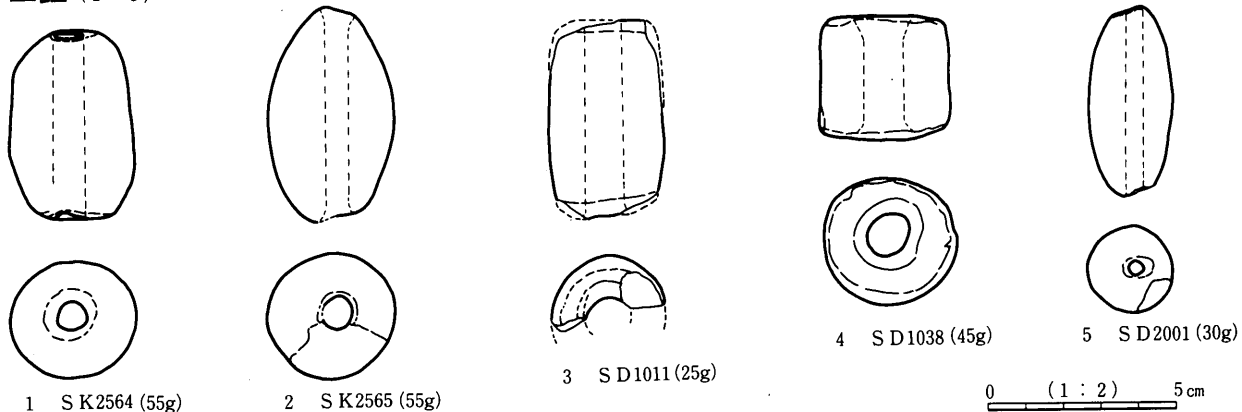
第339図 微高地域出土中世石製品4 (砥石)・土製品1 (土製円盤)

検出面出土砥石(1~8)



0 (1:3) 10cm

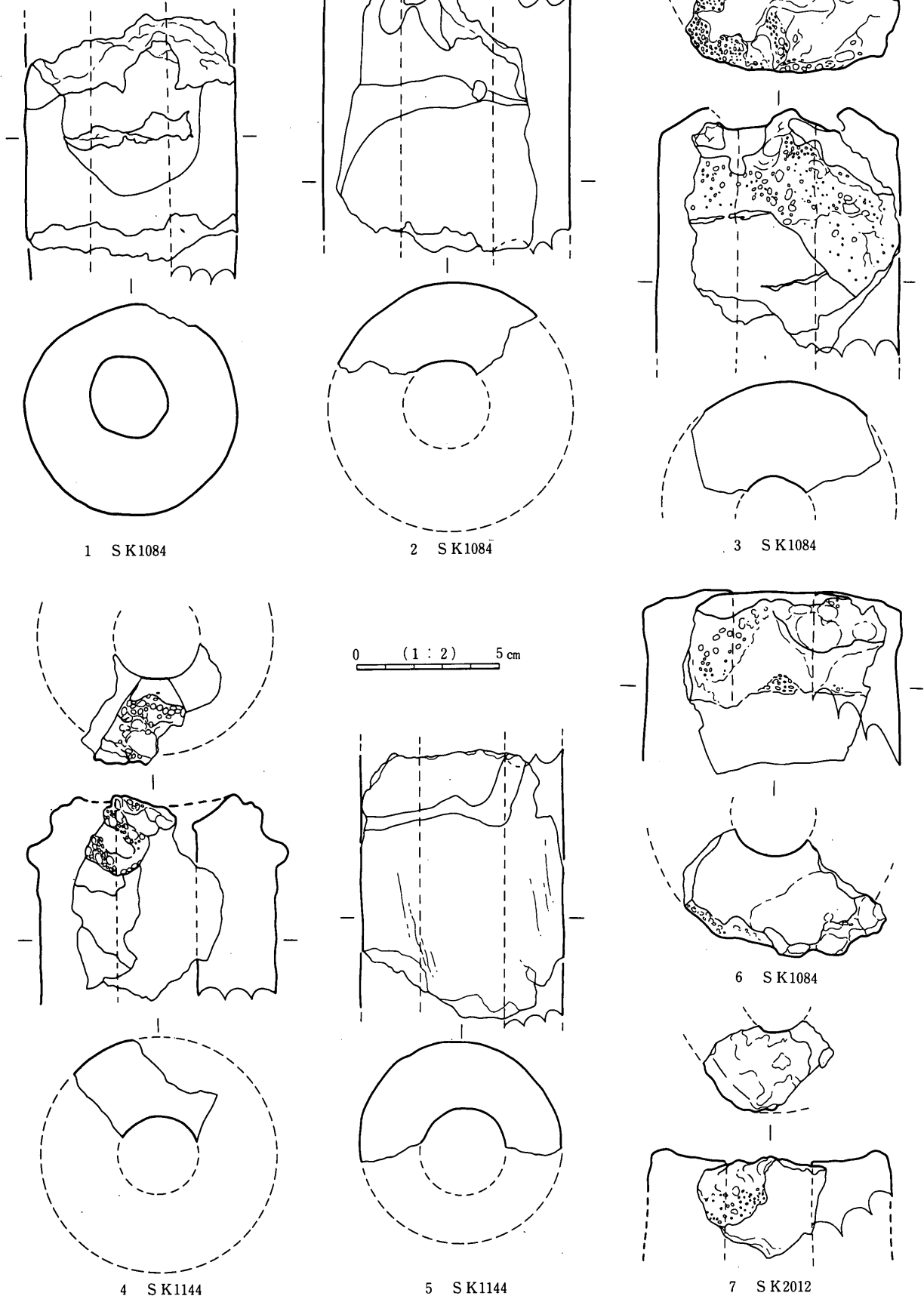
土錘(1~5)



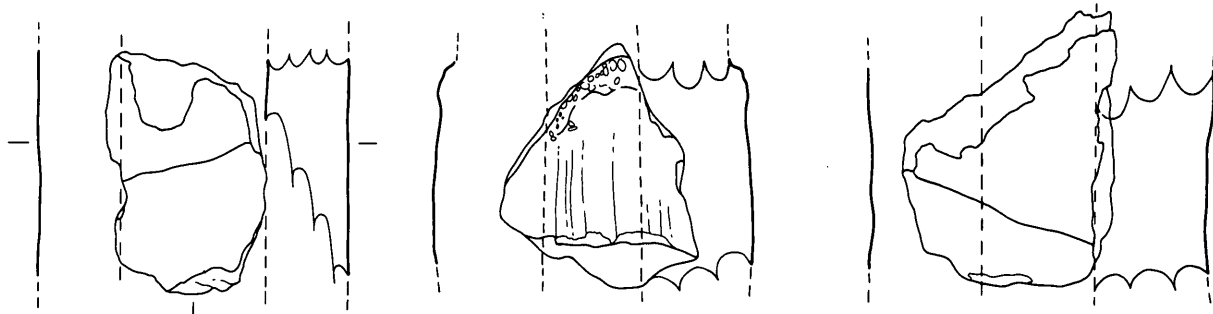
0 (1:2) 5cm

第340図 微高地域出土中世土製品2(土錘)、検出面出土砥石

羽口  
(1~15)



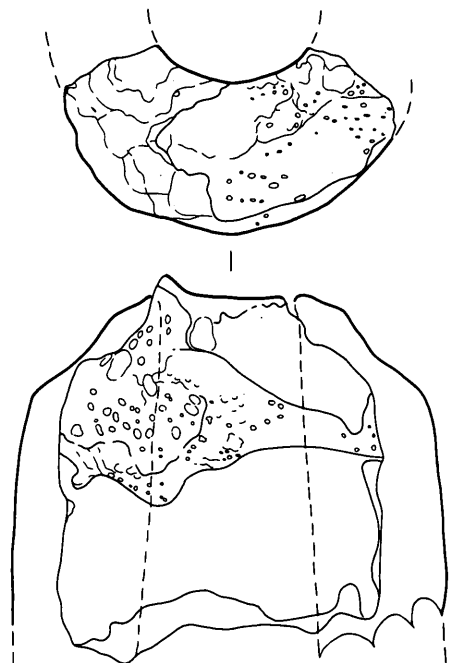
第341図 微高地域出土中世鍛冶関連遺物1 (羽口)



8 SD1001

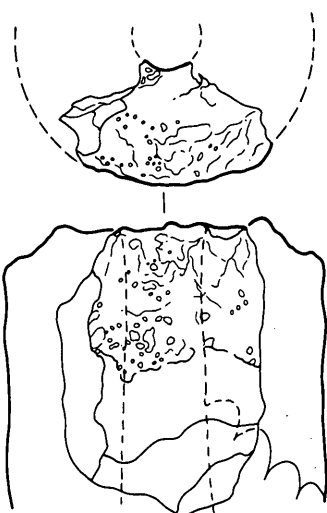
9 SD1007

10 SD1008



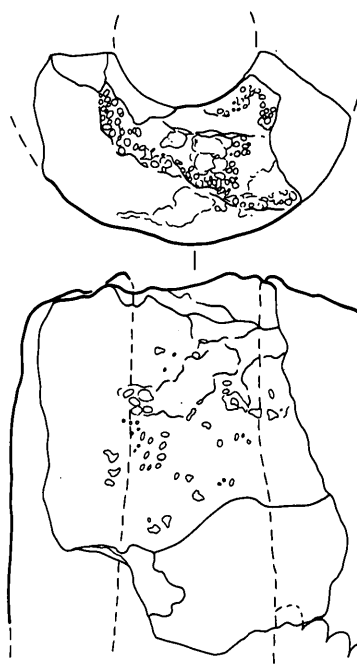
11 SD1008

12 SD1008



13 SD1008

14 SD1013



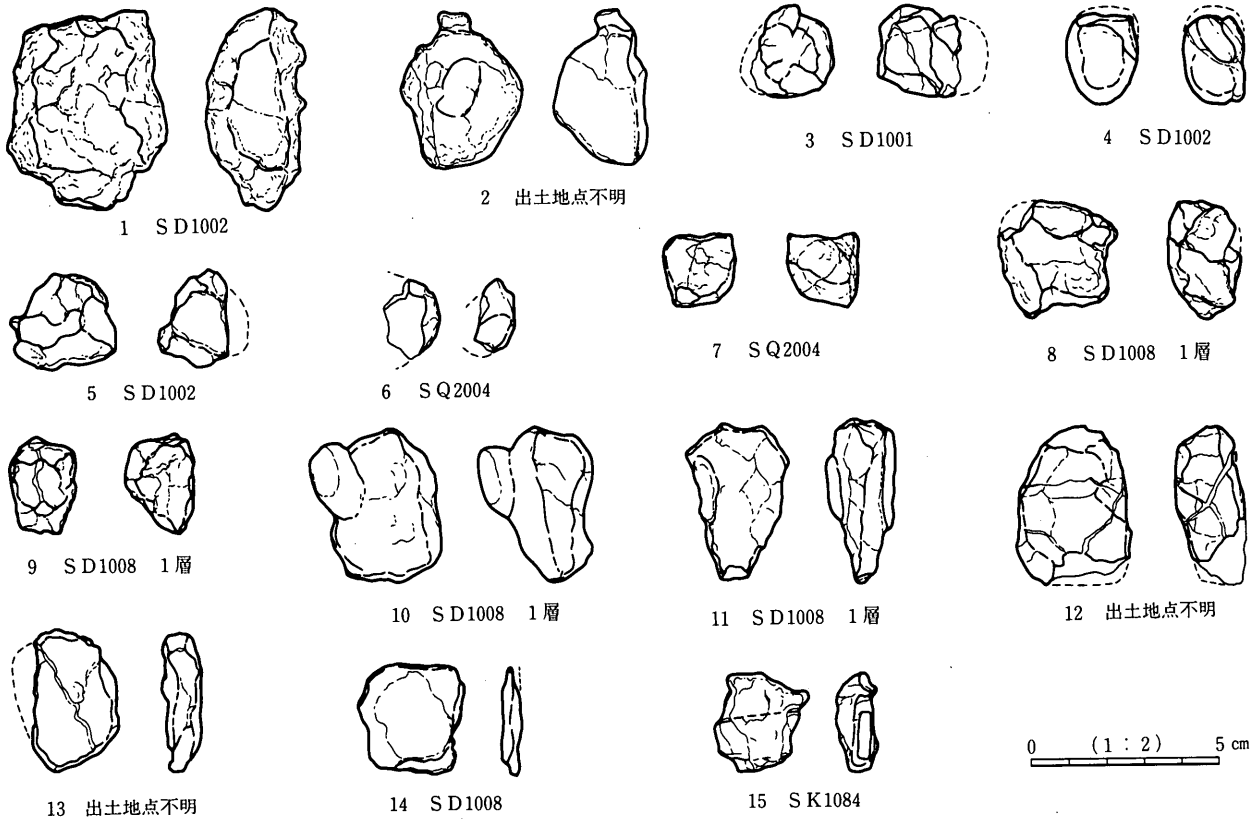
15 ⑤-1区 出土地点不明

0 (1:2) 5cm

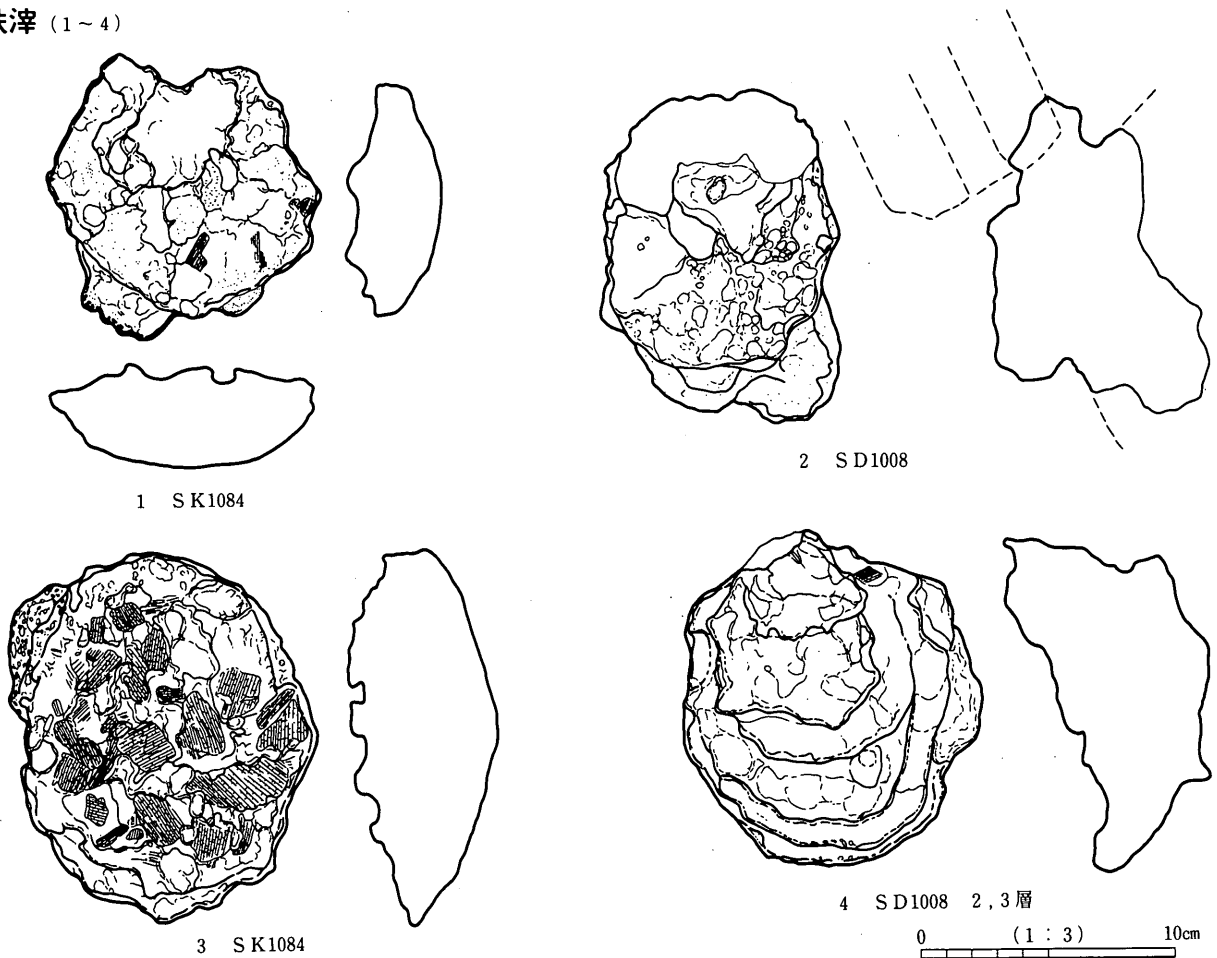
第342図 微高地域出土中世鍛冶関連遺物2 (羽口)



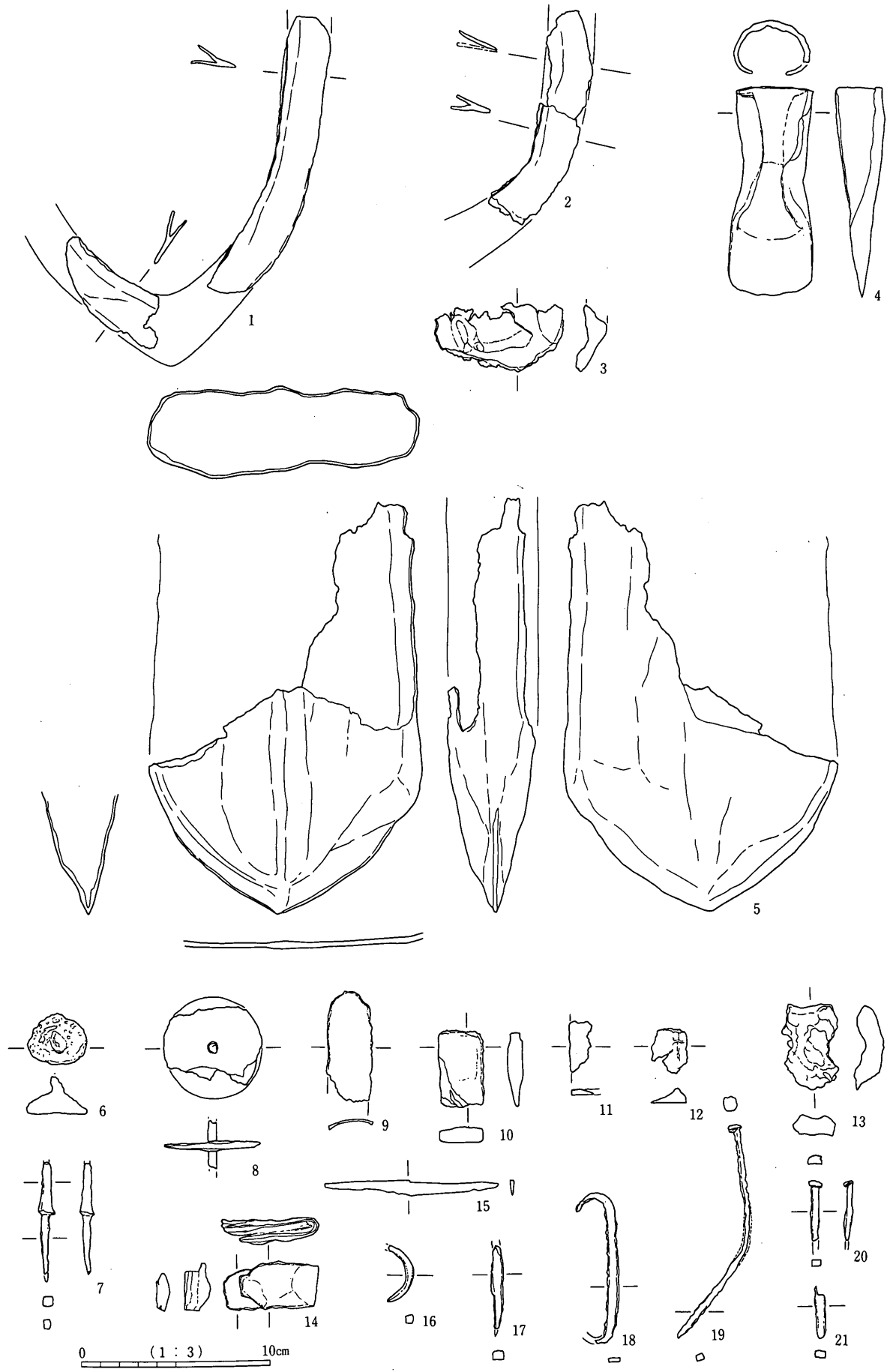
鉄塊系遺物・未製品 (1~15)



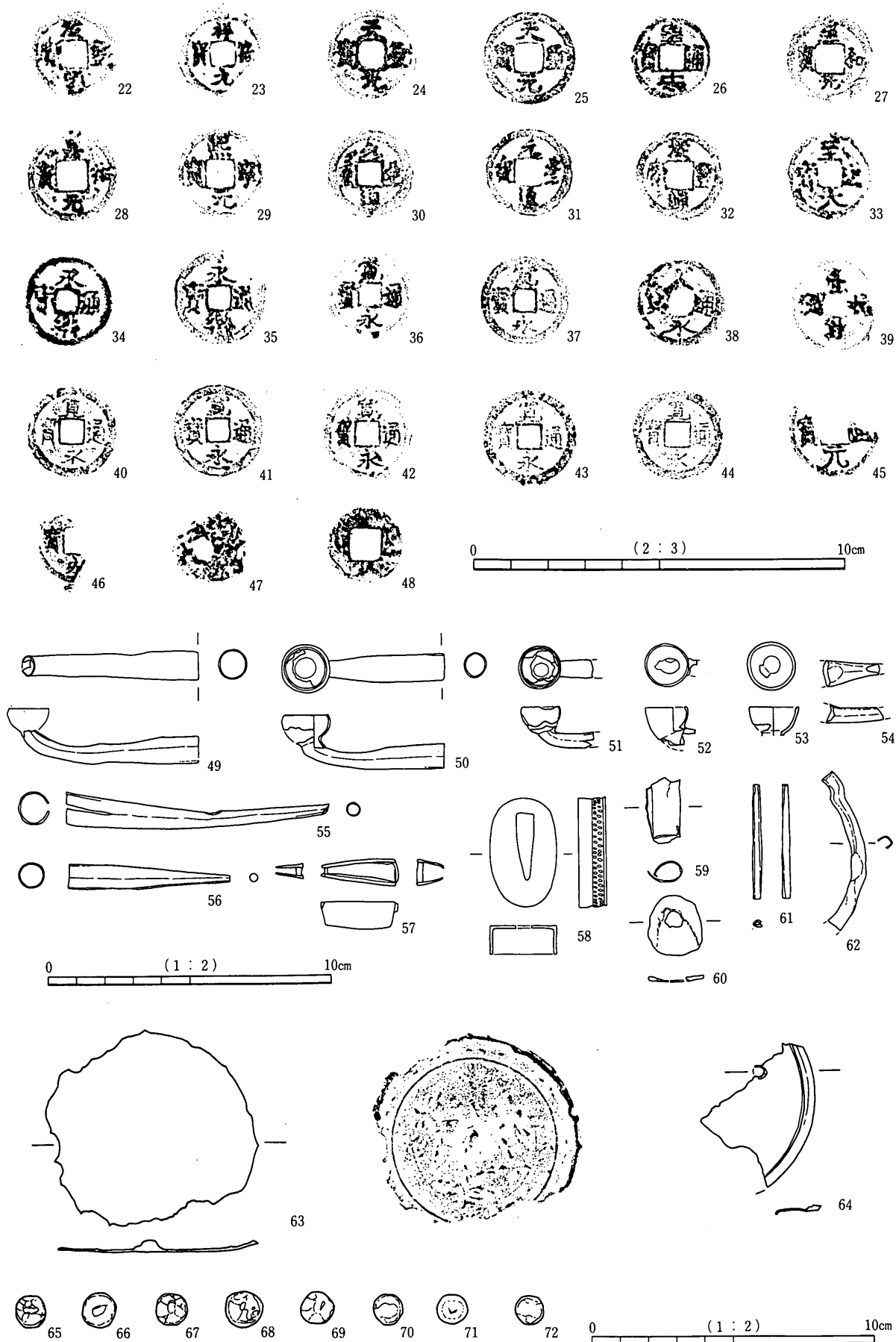
鉄滓 (1~4)



第343図 微高地域出土中世鍛冶関連遺物3 (鉄塊遺物・鉄滓)



第344図 平安時代～近世金属製品1 (鉄製品)



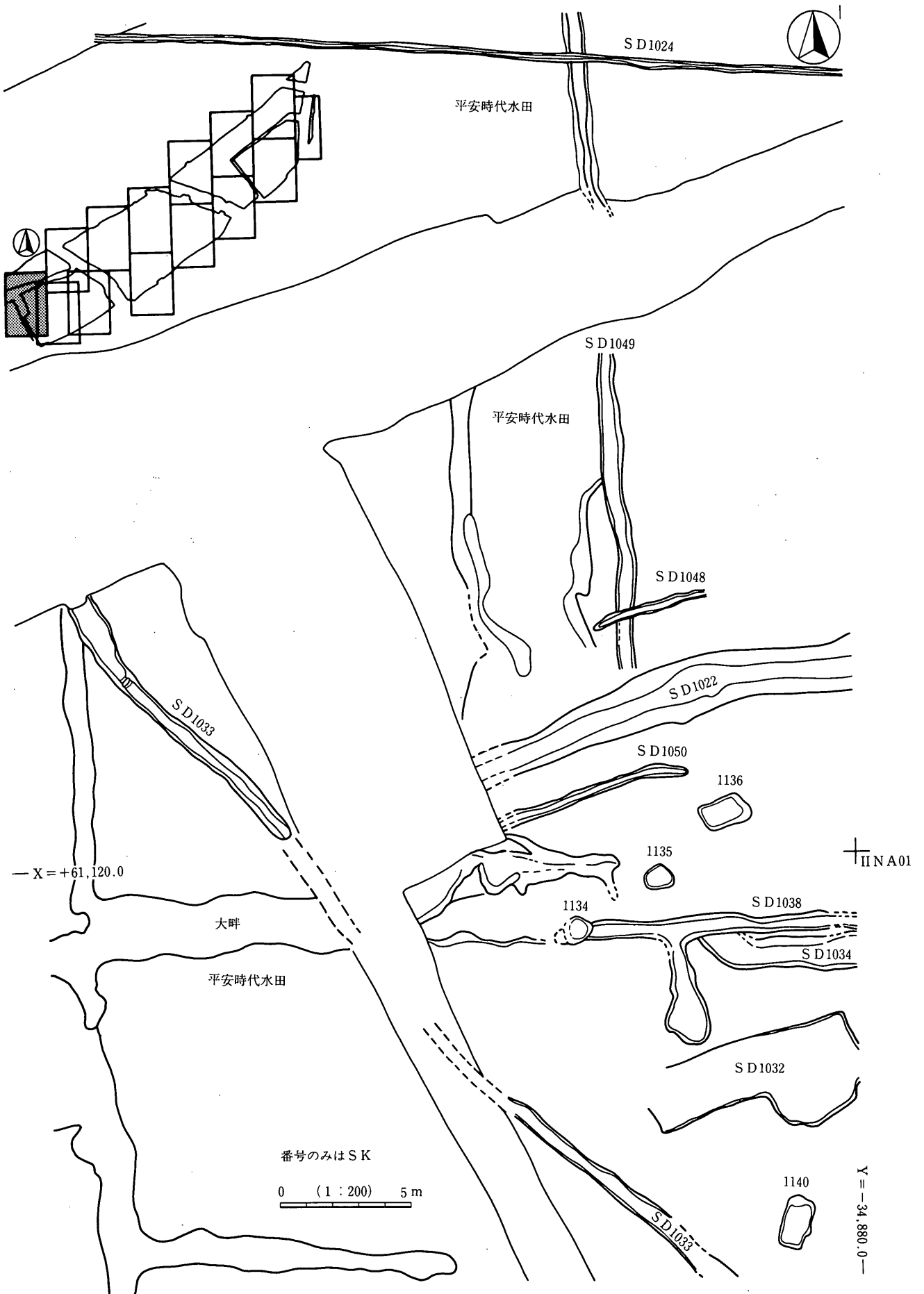
第345図 平安時代～近世金属製品2 (銭貨・青銅製品)

第30表 金属製品観察表

図版番号	製品名	出土遺構/地点	法 量			備 考
			残存長 (径)	幅 (厚)	重量	
1	鋤・鍬先	⑫区平安水田面		2.4cm		側縁部2破片からなる
2	鋤・鍬先	⑫区平安砂層内	11.7	2.4		側縁部
3	鋤・鍬先	⑫区平安砂層内	3.6	6.8		先端部
4	斧	⑧-1区遺構外	10.9	4.5		折り返し部一部欠損、袋状鉄斧
5	犁先	⑩-3区中世面	21.7	14.5		袋状犁先、内面に木質部付着
6	不明	⑩区S D1016	1.95	3.2		
7	鍬	地点不明	6.8	0.8		
8	紡錘車	⑧-1区S Q2002	2.5	5.1		
9	不明	⑤-2区S K2172	5.9	2.4		
10	不明	⑩-3区中世面	4.1	2.4		
11	不明	⑧-1区S D2001	2.7	1.2		
12	不明	⑤-1区S D2001	2.4	1.8		
13	不明	⑫区平安砂層内	4.6	3.0		
14	不明	⑩区検出面	2.6	5.0		
15	不明	⑪区中世面	0.8	9.2		
16	不明	②-2区近世水田面	3.9	0.4		
17	不明	⑧-2区平安検出面	4.4	0.6		
18	不明	⑬区S D3006	10.3	0.7		
19	不明	⑤-1区S K2022	12.6	0.7		
20	不明	⑦区S K2646	3.2	0.8		
21	不明	⑤-2区検出面	2.7	0.6		
22	咸平元寶	⑧-1区地点不明	2.2		2.06 g	初鑄年998年
23	祥符元寶	⑦区S D1008	2.5		1.95	初鑄年1008年
24	天聖元寶	⑩区S D2001	2.45		1.54	初鑄年1023年
25	天聖元寶	⑩区S D1007	2.5		3.46	初鑄年1023年
26	皇宋通寶	⑬区S D3006 I	2.2		2.82	初鑄年1039年
27	至和元寶	⑩-3区中世面	2.4		2.47	初鑄年1054年~1055年
28	嘉祐元寶	⑬区S D3006	2.45		2.48	初鑄年1056年
29	熙寧元寶	地点不明	2.38		2.11	初鑄年1068年
30	元豐通寶	⑦区検出面	2.35		1.49	初鑄年1078年
31	元豐通寶	⑬区S D3006 I	2.4		3.90	初鑄年1078年
32	元豐通寶	⑬区S D3006 I	2.4		3.13	初鑄年1078年
33	至大通寶	①-2区中世II面	2.4		4.12	初鑄年1310年
34	永樂通寶	⑧-1区地点不明	2.5		2.97	初鑄年1408年
35	永樂通寶	⑩-3区地点不明	2.5		3.61	初鑄年1408年
36	寛永通寶	①-1区表土	2.4		2.39	初鑄年1636年

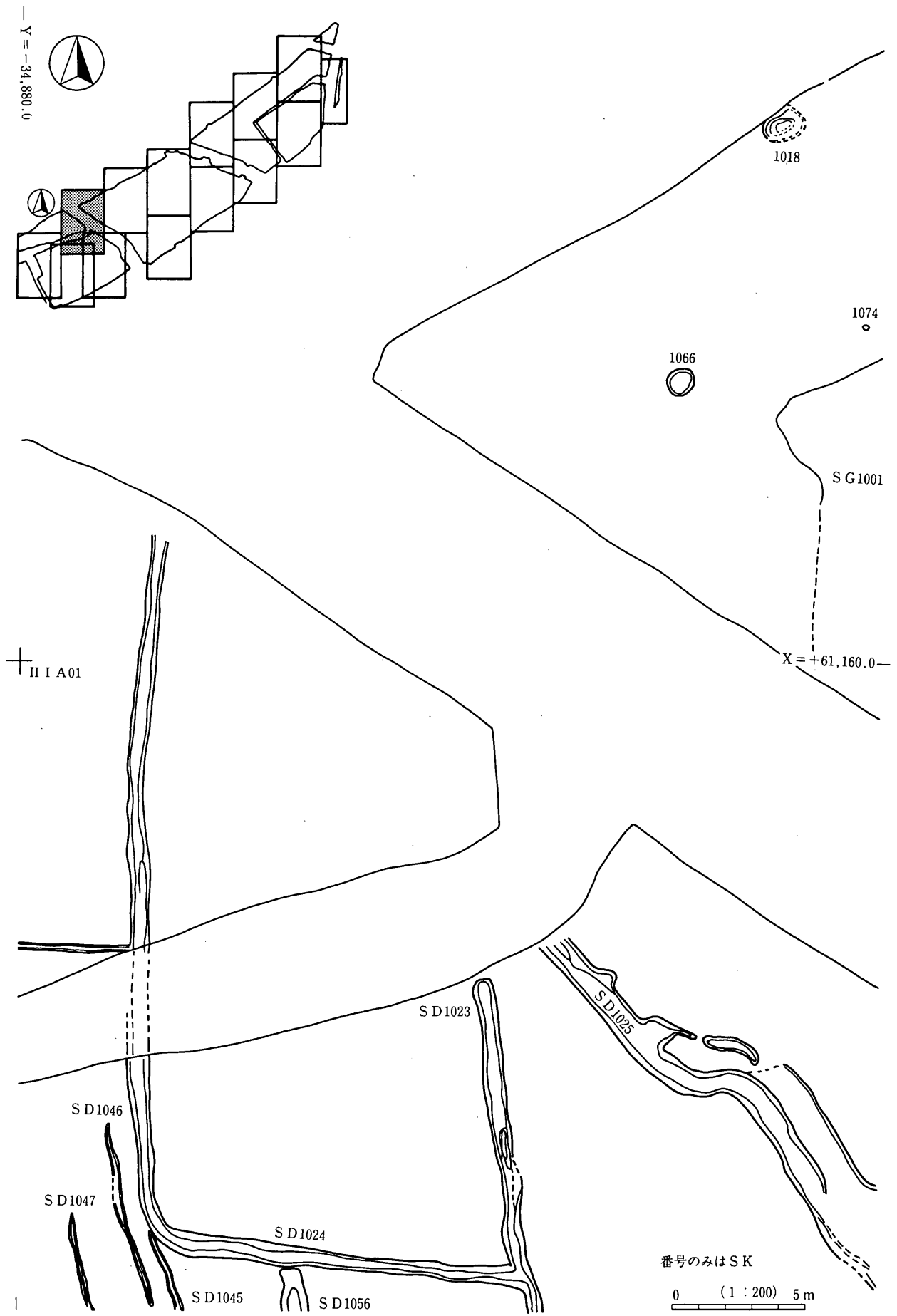
金属製品観察表

図版番号	製品名	出土遺構/地点	法量			備考
			残存長(径)	幅(厚)	重量	
37	寛永通寶	②-1区近世水田	2.4		2.25	初鑄年1636年
38	寛永通寶	②-2区近世水田	2.35		2.02	初鑄年1636年
39	寛永通寶	④区表土	2.45		2.44	初鑄年1636年
40	寛永通寶	④区表土	2.45		2.60	初鑄年1636年
41	寛永通寶	⑩-3区中世上面	2.5		3.06	初鑄年1636年
42	寛永通寶	⑫区近世水田面	2.6		3.32	初鑄年1636年
43	寛永通寶	⑮区近世水田	2.55		2.99	初鑄年1636年
44	寛永通寶	地点不明	2.45		2.24	初鑄年1636年
45	宋通元寶	④区表土	2.55		1.63	初鑄年968年
46	寛永通寶	①-1区地点不明	1.9 + $\alpha$		0.38	初鑄年1636年
47	貨幣一	⑫区近世水田面	2.1		1.77	
48	貨幣一	⑥区中世水田	2.15		2.28	
49	煙管	②-2区近世水田	6.8	1.0		
50	煙管	②-2区近世水田	5.8	1.7		
51	煙管	⑫区近世水田面	2.6	1.5		
52	煙管	⑫区近世水田面	1.8	1.55		
53	煙管	⑤-2区地点不明	1.8	1.7		
54	煙管	②-2区近世水田	2.0	0.9		
55	煙管	②-2区近世水田	9.4	1.2		
56	煙管	②-2区近世水田	5.7	0.9		
57	不明	⑧-1区A 0-15	2.8	0.8		
58	鞘把	⑯区近世水田	3.8	2.4		
59	不明	⑧-1区A 0-15	2.3	1.2		
60	不明	⑫区近世水田面	2.1	2.0		
61	不明	①-1区地点不明	4.0	0.3		
62	不明	⑦-2区S K1144	5.7	0.5		
63	八稜鏡	⑩-3区平安水田砂層上面	6.9	7.5		摩滅著しく鏡面の模様不明
64	柄鏡	⑫区近世水田	4.4	3.4		鏡面に径4mmの孔あり。摩滅著しく鏡面の模様確認できない。
65	鉄砲玉	①-1区中世水田面	1.2		9.17	
66	鉄砲玉	②-2区近世水田	1.25		9.39	
67	鉄砲玉	②-2区近世水田	1.15		8.24	
68	鉄砲玉	②-2区近世水田	1.3		12.12	
69	鉄砲玉	⑫区近世水田	1.2		9.01	
70	鉄砲玉	⑬区平安砂層	1.2		9.05	
71	鉄砲玉	⑫区近世水田面	1.2		6.97	
72	鉄砲玉	⑧-1区S K2329	1.1		6.36	



第346図 微高地域の古代以降の遺構 1

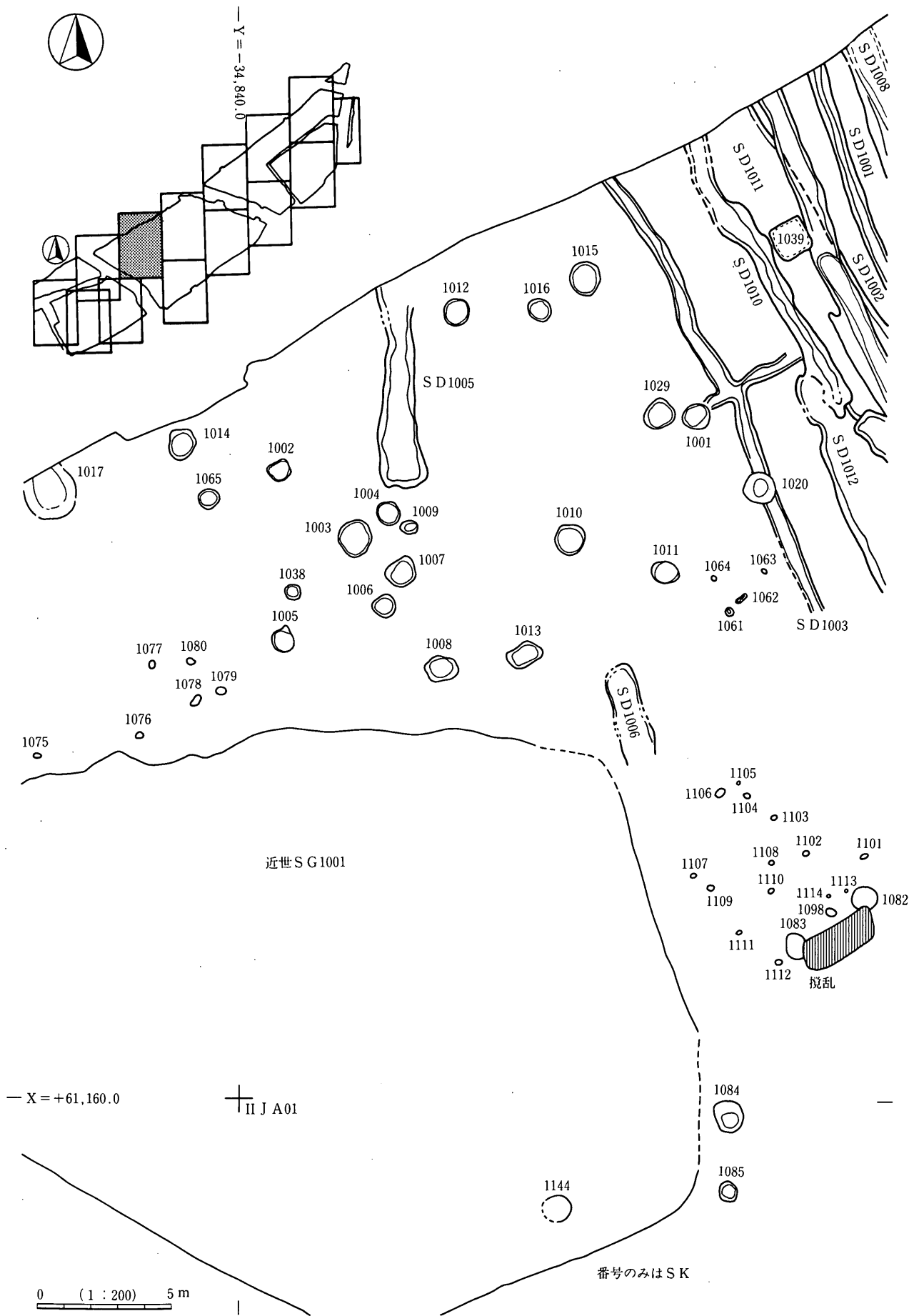




第348図 微高地域の古代以降の遺構 3

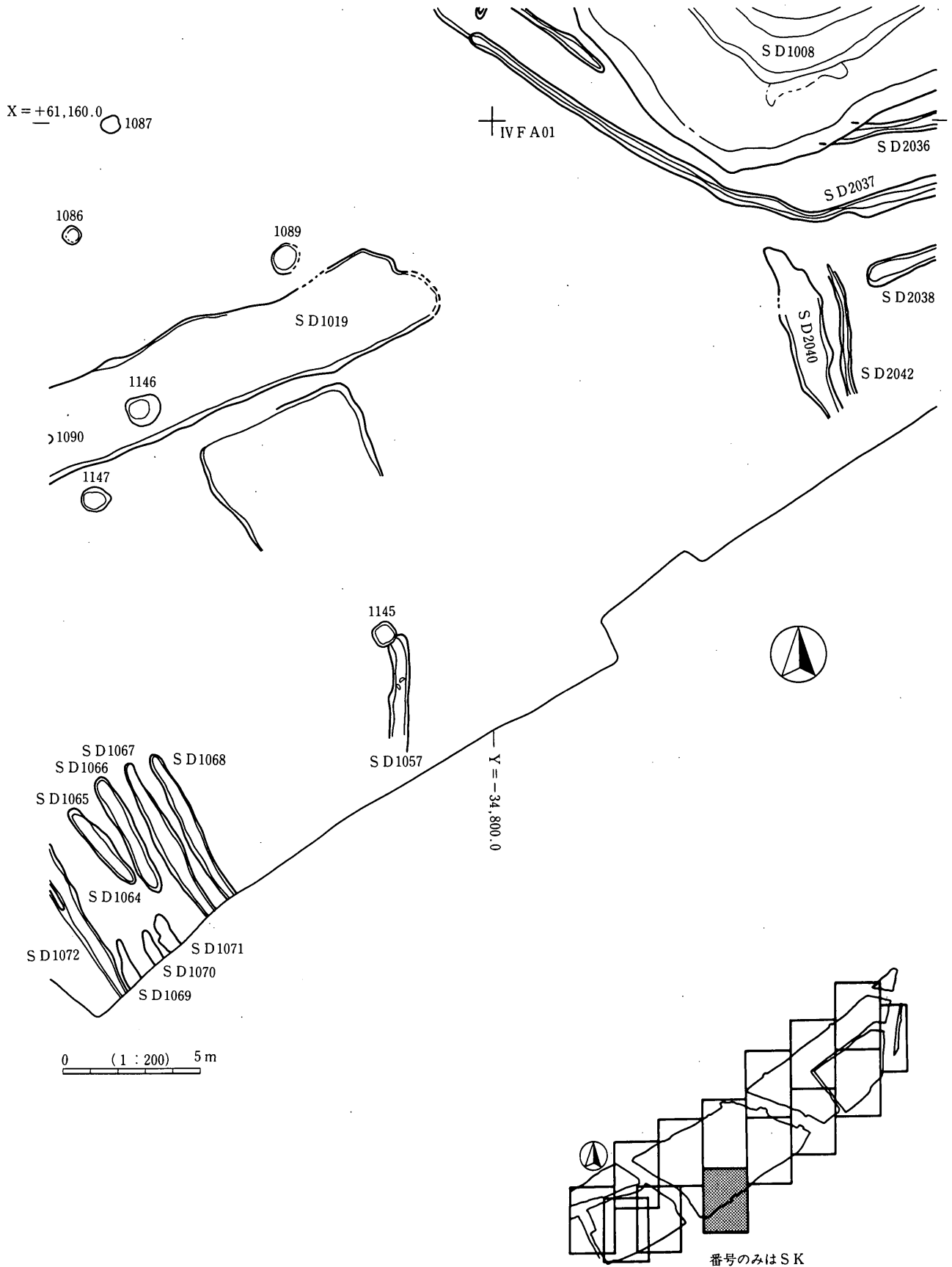




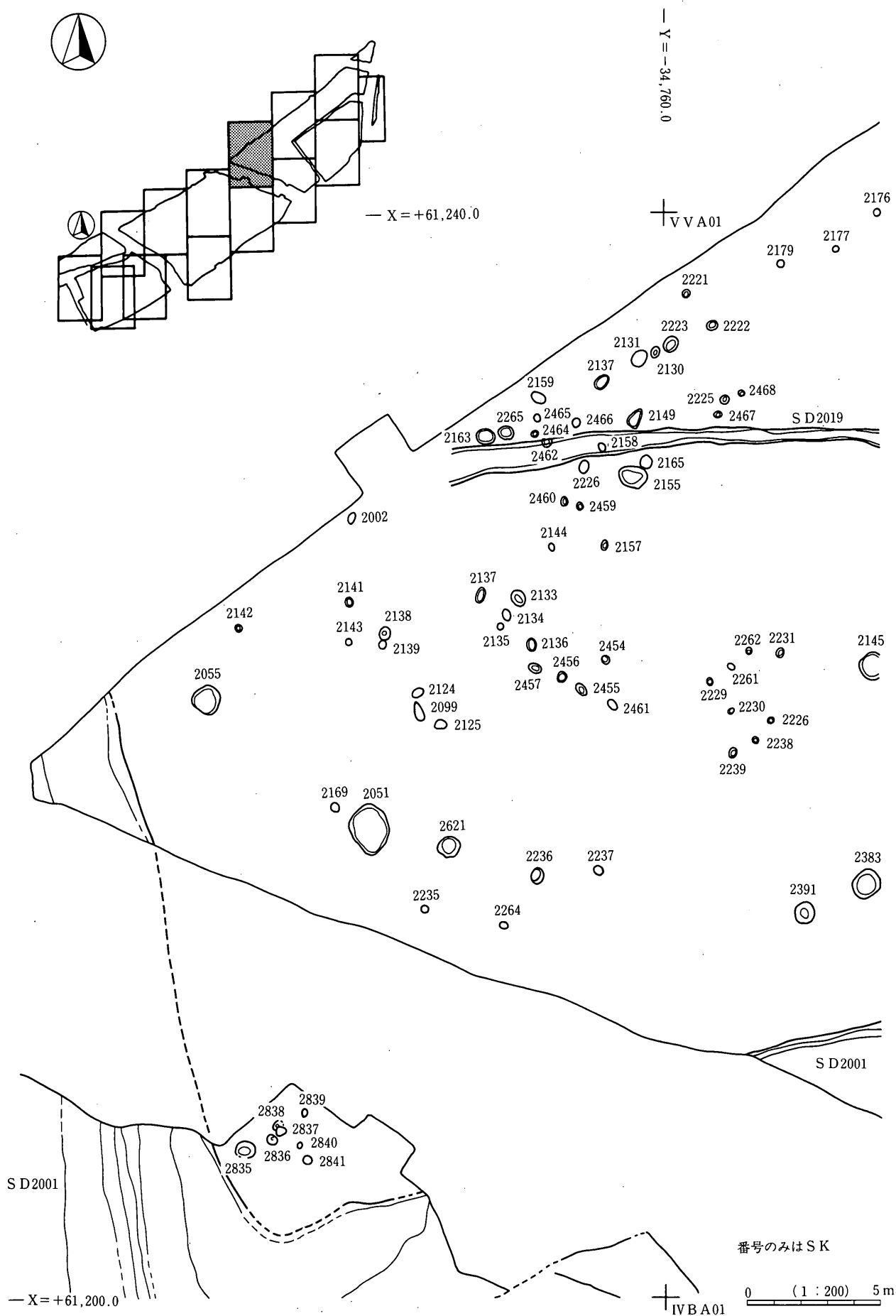


第350図 微高地域の古代以降の遺構 5 (一部時期不明遺構を含む)

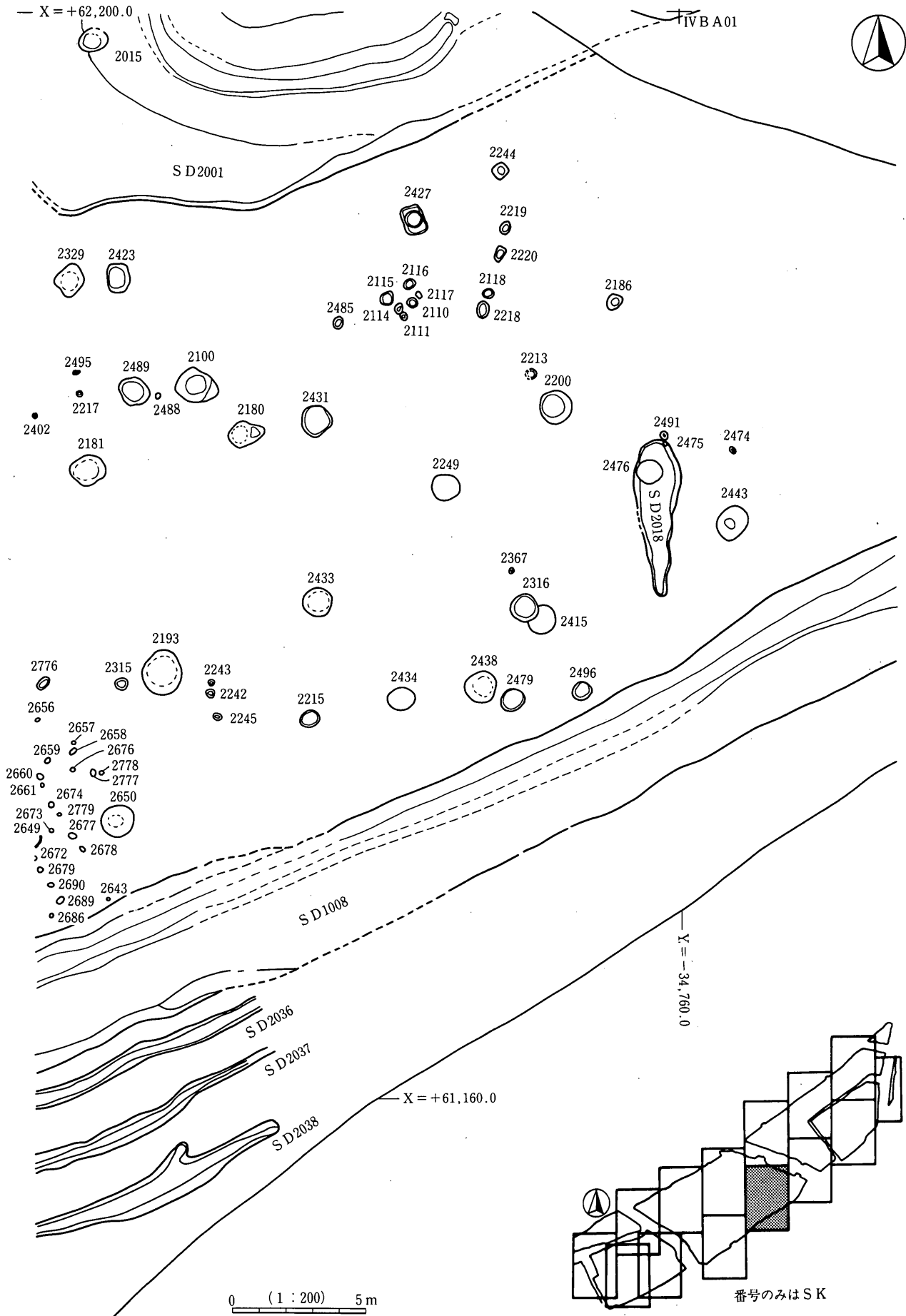




第352図 微高地域の古代以降の遺構 7 (一部時期不明遺構を含む)

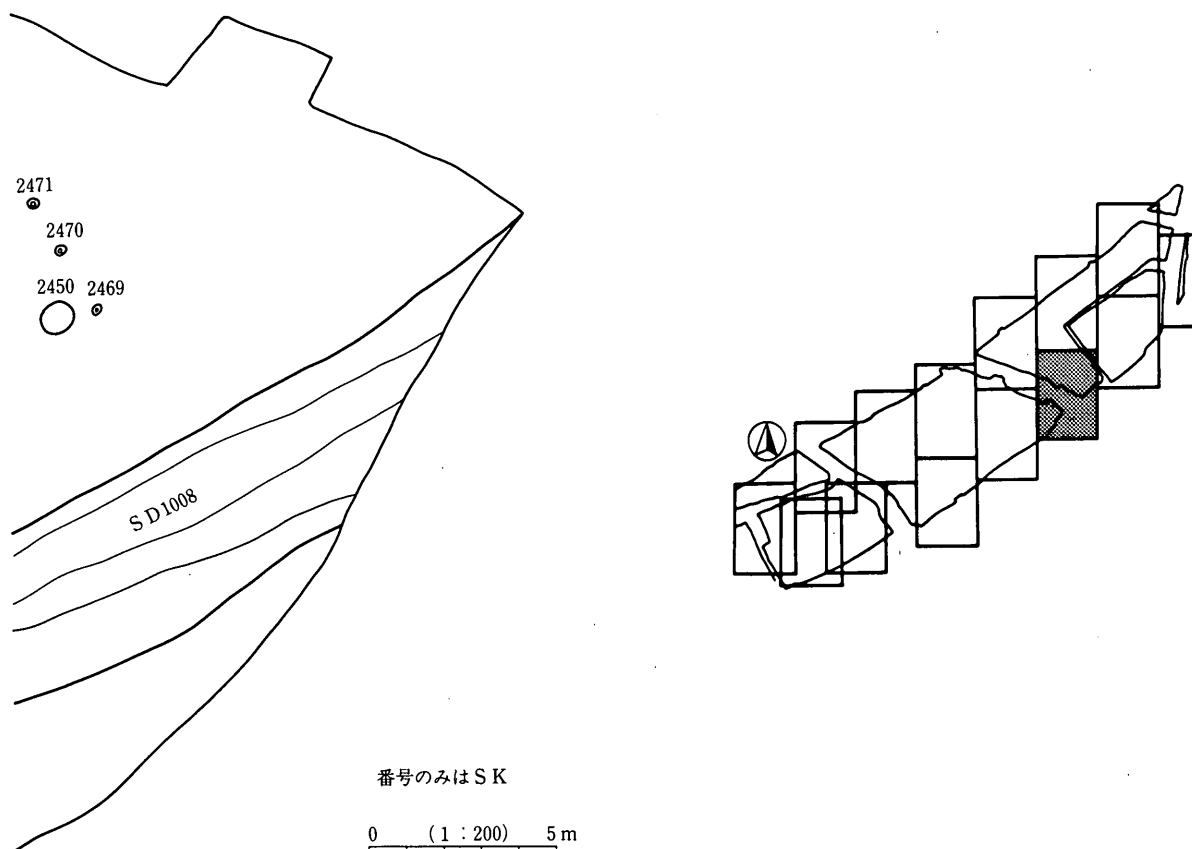
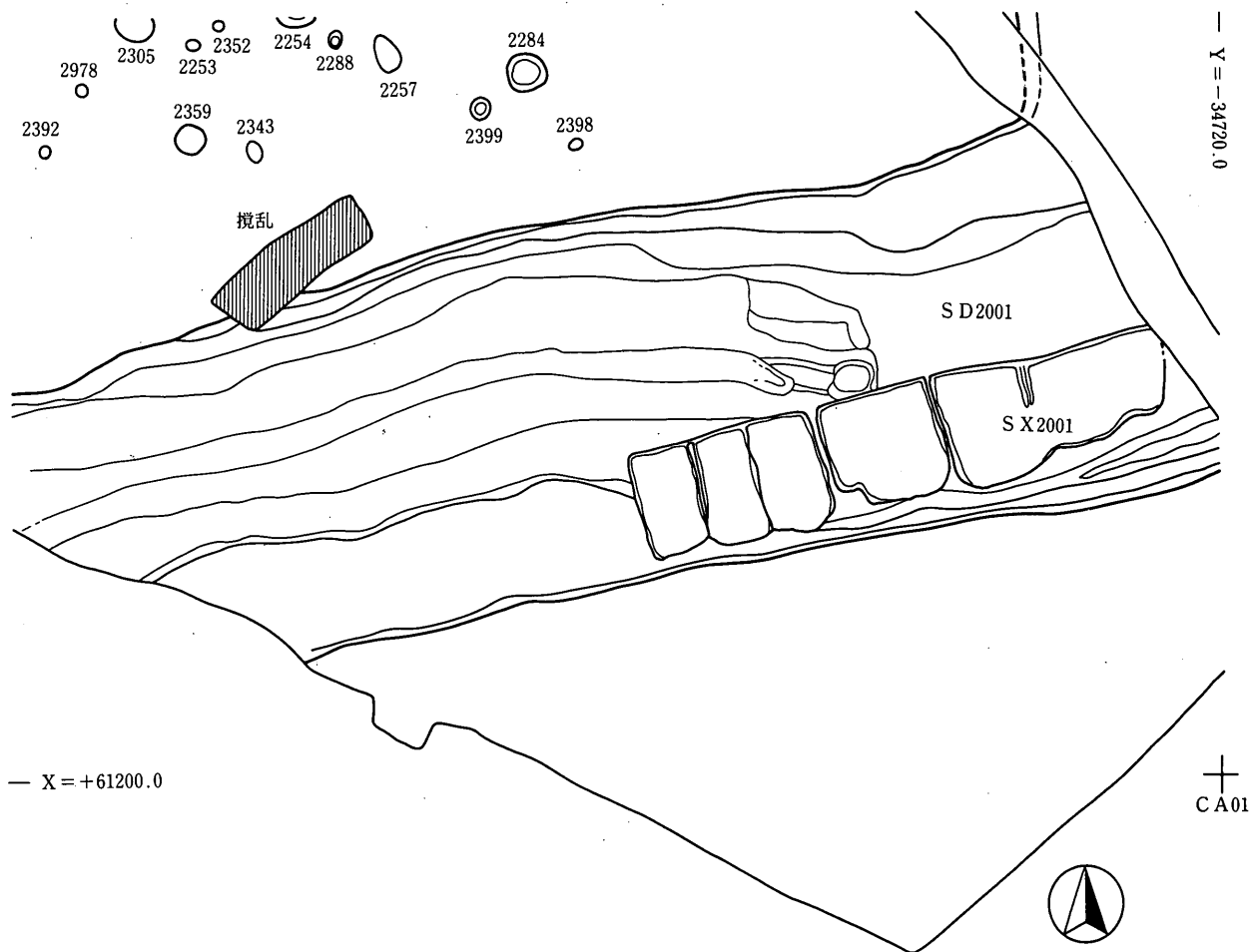


第353図 微高地域の古代以降の遺構 8 (一部時期不明遺構を含む)



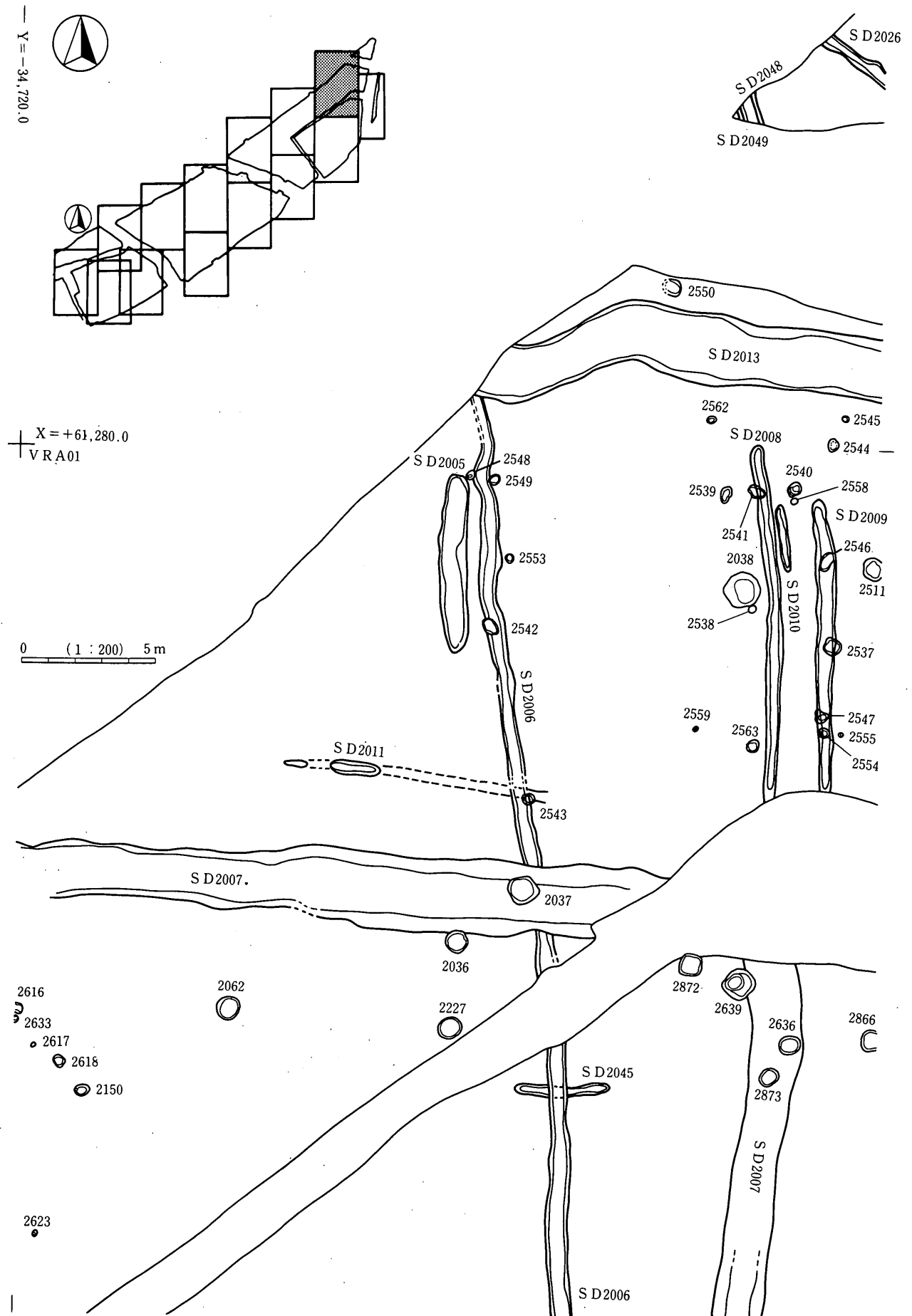
第354図 微高地域の古代以降の遺構 9 (一部時期不明遺構を含む)





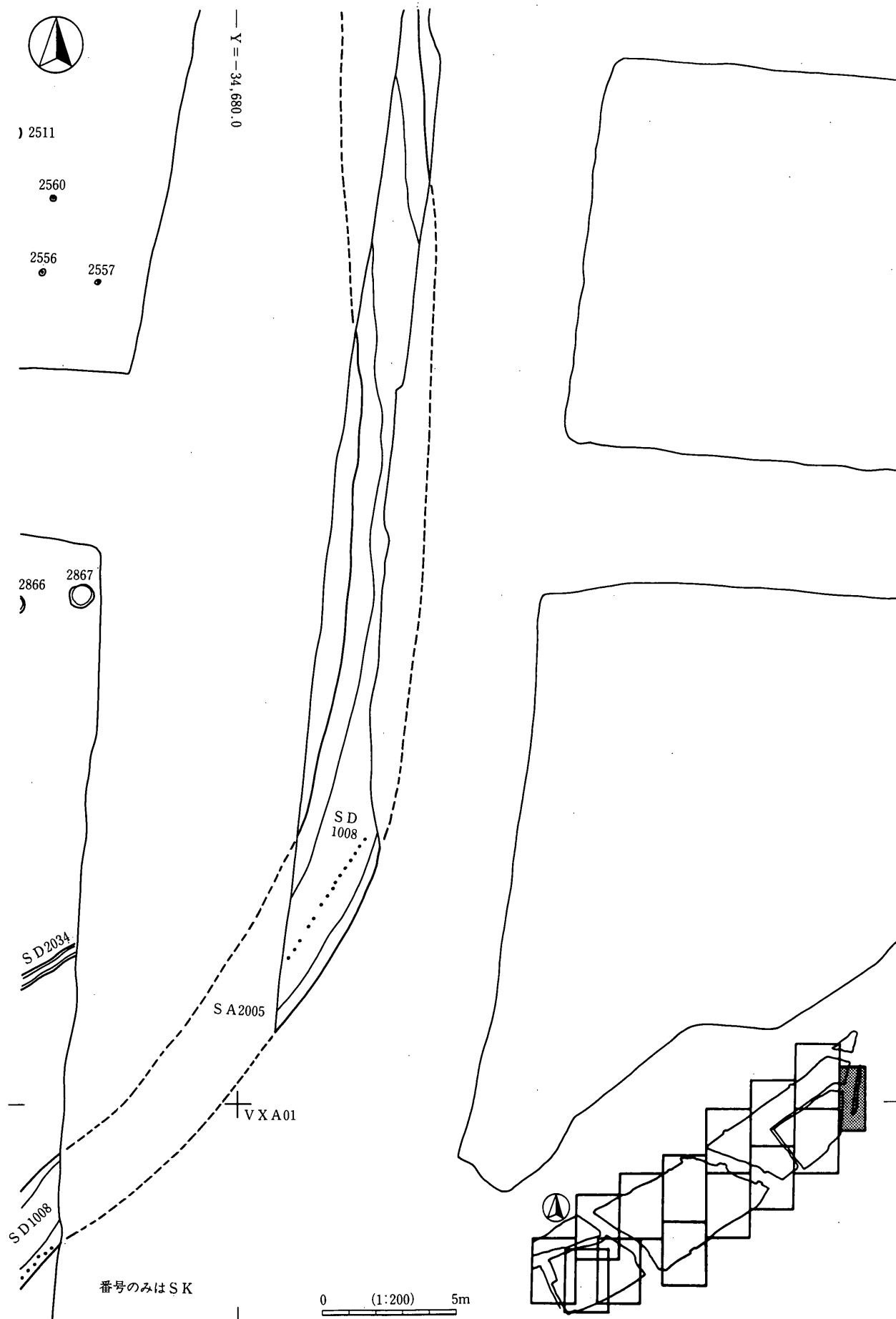
第356図 微高地域の古代以降の遺構11 (一部時期不明遺構を含む)





第357図 微高地域の古代以降の遺構12 (一部時期不明遺構を含む)





第359図 微高地域の古代以降の遺構14 (一部時期不明遺構を含む)

## 付 章 自然科学分析

### 第1節 石川条里遺跡から産出した花粉化石

新山雅広・鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

#### 1 はじめに

石川条里遺跡は長野市篠ノ井に所在し、千曲川が形成する自然堤防の西側の後背湿地に立地している。本遺跡は微高地(④・⑤・⑦・⑧・⑩調査区)と低湿地(①～③・⑥・⑪～⑬調査区)からなる地形であることが確認されており、微高地では、縄文時代、古墳時代、平安時代、中世の4時期の遺構が確認され、低湿地では、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代、近世の水田遺構が確認されている。今回は、本遺跡周辺における植生変遷を明らかにする目的で花粉化石群集の検討を行った。

#### 2 試料

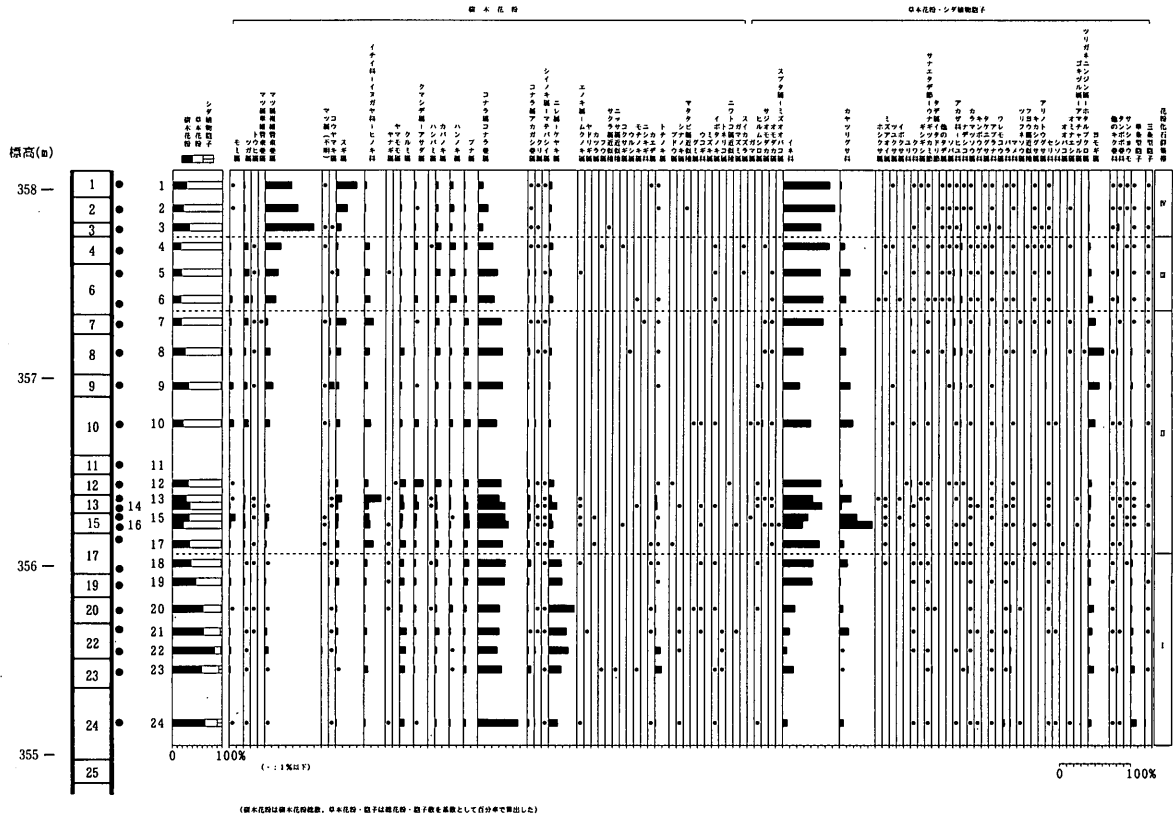
花粉化石群集の検討を行った試料は、計20地点から採取された246試料についてである。試料採取地点は以下の20地点で土層については第360図の通りである。

地点No.1 (①-1区) : 24試料	地点No.11 (⑪区) : 48試料
地点No.2 (①-2区) : 14試料	地点No.12 (⑫区) : 27試料
地点No.3 (②-1区) : 14試料	地点No.13 (⑬区) : 23試料
地点No.4 (④区) : 21試料	地点No.14 (⑬区SD3006II) : 1試料
地点No.5 (⑥区-A) : 5試料	地点No.15 (⑭区) : 27試料
地点No.6 (⑥区-B) : 7試料	地点No.16 (⑭区深堀) : 10試料
地点No.7 (⑥区-C) : 3試料	地点No.17 (⑭区SD3004) : 4試料
地点No.8 (⑦区SK2746) : 1試料	地点No.18 (⑯区) : 40試料
地点No.9 (⑧-2区) : 19試料	地点No.19 (⑯区) : 4試料
地点No.10 (⑩区縄文トレンチ) : 4試料	地点No.20 (⑯区) : 7試料

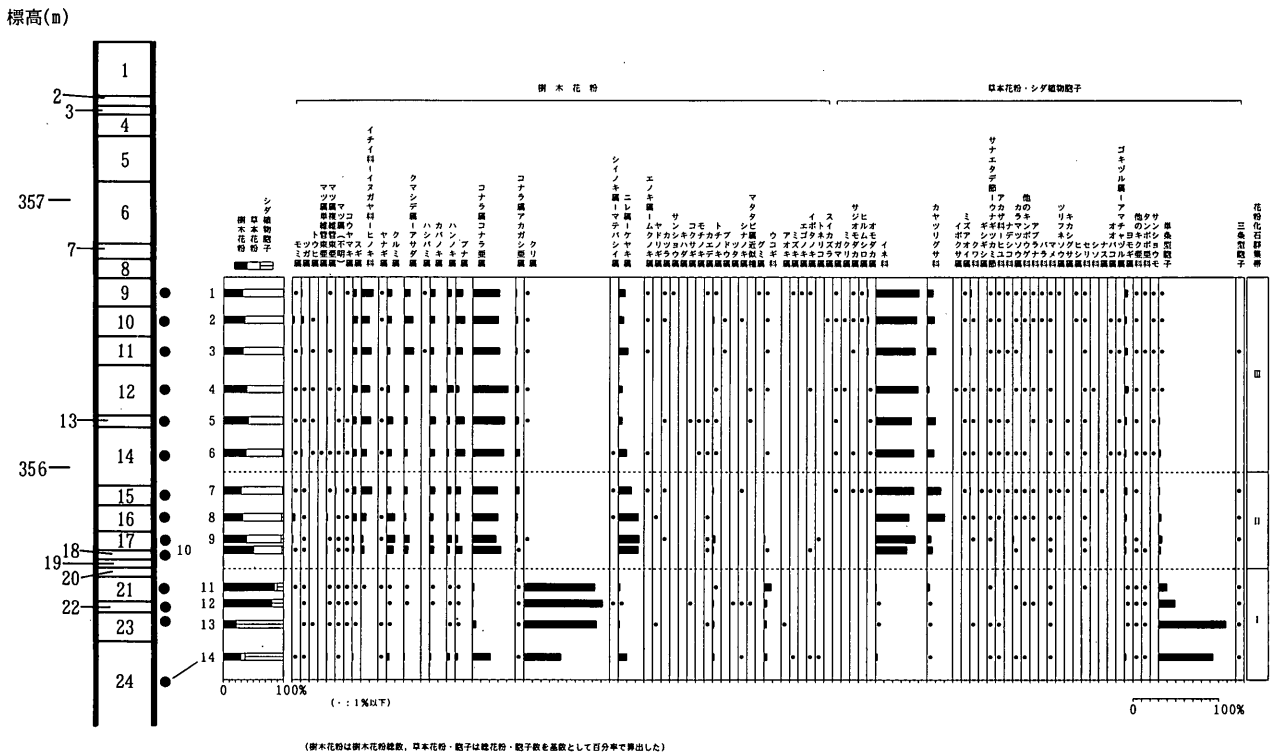
#### 3 分析方法

花粉化石の抽出は、試料2～12gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.15に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、花粉化石の保存状態や産出個数が良好な試料については、樹木花粉総数が200以上になるまで同定・計数した。その計数結果をもとにして樹木花粉総数が100以上の試料については、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシ





第361図 地点No.1 (①-1区) の花粉化石分布図



第362図 地点No.2 (①-2区) の花粉化石分布図

ダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

#### 4 花粉化石群集の記載

##### 地点No. 1 (①-1区)

同定された分類群数は、樹木花粉44、草本花粉40、形態分類を含むシダ植物胞子3、黄緑色藻類1である。他に地点No. 1 (①-1区) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より4つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯(試料18~24)：樹木花粉の占める割合は37~84%程度である。上部に向かい低率になる傾向があるが比較的高率である。コナラ属コナラ亜属が28~57%程度で優占し、次いでニレ属一ケヤキ属が13~37%程度で出現する。イチイ科一ヌガヤ科一ヒノキ科、クルミ属、カバノキ属、ブナ属、トチノキ属、シナノキ属などが出現する。草本花粉では、イネ科が上部に向かい高率となり約43%に達する。他に、カヤツリグサ科、ヨモギ属、単条型胞子が目立った出現をする。

II帯(試料7~17)：樹木花粉の占める割合は18~35%程度で低率である。引き続きコナラ属コナラ亜属が優占する(27~44%程度)。I帯で比較的高率を占めていたニレ属一ケヤキ属は2~12%程度に出現率を下げ、代わってイチイ科一ヌガヤ科一ヒノキ科、ブナ属などが出現率を上げる。他にモミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ属、クルミ属、クマシデ属一アサガ属などが出現する。草本花粉では、イネ科が24~57%程度と高率で出現し、カヤツリグサ科、ヨモギ属も比較的高率である。他に、水田雑草として普通にみられるサジオモダカ属、オモダカ属などの水生植物やアブラナ科などが低率であるが目立った出現傾向を示す。

III帯(試料4~6)：樹木花粉の占める割合は16~18%程度で低率である。引き続きコナラ属コナラ亜属が優占するが(21~27%程度)、マツ属複維管束亜属も16~22%程度と比較的高率となってくる。他に、ツガ属、イチイ科一ヌガヤ科一ヒノキ科、カバノキ属、ハンノキ属などが出現する。草本花粉では、イネ科が53~65%程度と圧倒的な高率を占める。他に、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が目立った出現をし、水田雑草として普通にみられる水生植物のミズアオイ属やソバ属、アブラナ科などが低率であるが連続して出現する。

IV帯(試料1~3)：樹木花粉の占める割合は21~33%程度で低率である。マツ属複維管束亜属の高率出現(38~70%程度)で特徴づけられる。スギ属も出現率を上げ、試料1では約29%に達する。下位帯で優占していたコナラ属コナラ亜属は大幅に出現率を下げる。草本花粉では、イネ科が54~73%程度と圧倒的な高率を占める。他に、カヤツリグサ科、ソバ属、アブラナ科、キカシグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などが低率であるが連続して出現する。

##### 地点No. 2 (①-2区)

同定された分類群数は樹木花粉41、草本花粉30、形態分類を含むシダ植物胞子3、黄緑色藻類1である。地点No. 2 (①-2区) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯(試料11~14)：樹木花粉の占める割合は20~85%程度で上部は高率である。クリ属が43~92%と圧倒的な高率を占める。他に、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、トチノキ属、ウコギ科などが出現する。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが低率で出現し、単条型胞子が10~79%程度と高率を占める。





II帯（試料7～10）：樹木花粉の占める割合は29～50%程度である。コナラ属コナラ亜属が28～34%程度で優占し、ニレ属ケヤキ属も16～25%程度と比較的高率である。他に、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科、クルミ属、クマシデ属アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属などが出現する。草本花粉ではイネ科が37～47%程度と高率である。他に、カヤツリグサ科、ヨモギ属、単条型孢子などが目立った出現をする。

III帯（試料1～6）：樹木花粉の占める割合は31～41%程度とやや低率である。コナラ属コナラ亜属が30～42%程度で優占する。II帯で比較的高率を占めていたニレ属ケヤキ属は出現率を下げ、代わってイチイ科イヌガヤ科ヒノキ科、ブナ属がやや出現率を上げて目立った出現傾向を示すようになる。他に、スギ属、クルミ属、クマシデ属アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、トチノキ属などが出現する。草本花粉では、イネ科が42～51%程度と高率であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属も目立った出現をする。他に、水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属が低率であるが連続して出現する。

#### 地点No.3 (②-1区)

同定された分類群数は樹木花粉24、草本花粉25、形態分類を含むシダ植物孢子3である。地点No.3 (②-1区)の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯（試料10）：樹木花粉の占める割合は約26%と低率である。コナラ属コナラ亜属が約23%で優占し、次いでブナ属が約18%で出現する。他に、ツガ属、スギ属などが目立った出現をする。草本花粉では、イネ科が約53%と高率であり、ヨモギ属も目立った出現をする。他に、水生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属が低率で出現する。

II帯（試料3～9）：試料3～9からは十分な花粉化石が産出しなかった。樹木花粉ではスギ属、クマシデ属アサダ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属などが僅かに産出した。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、他のキク亜科などが僅かに産出した。試料3からはマツ属複雑管束亜属、スギ属、イネ科、タンポポ亜科などが比較的多数産出した。

III帯（試料1、2）：樹木花粉の占める割合は23～40%程度で低率である。マツ属複雑管束亜属、スギ属が高率を占め、ツガ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などが出現する。草本花粉ではイネ科が45～71%と圧倒的な高率を占め、ソバ属、アカザ科ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属などが出現する。

#### 地点No.4 (④区)

同定された分類群数は樹木花粉37、草本花粉31、形態分類を含むシダ植物孢子3である。地点No.4 (④区)の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より5つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯（試料20、21）：樹木花粉の占める割合は34～65%程度である。クリ属の比較的高率な出現（24～27%程度）で特徴づけられる。コナラ属コナラ亜属、ヤナギ属も比較的高率であり、コナラ属コナラ亜属は試料20で約33%、ヤナギ属は試料21で約28%に達する。他に、ハンノキ属、ウコギ科、トネリコ属などが出現する。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、セリ科、ゴキヅル属アマチャヅル属、ヨモギ属、単条型孢子が比較的目的目立った出現をする。

II帯（試料15～19）：樹木花粉の占める割合は45～73%程度である。コナラ属コナラ亜属が29～43%程度で優占し、クリ属、ニレ属ケヤキ属が次いで出現する。他に、クマシデ属アサダ属、トチノキ属などが出現する。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ゴキヅル属アマチャヅル属、ヨモギ属、単条型孢子が目立った出現をする。

III帯（試料12～14）：十分な花粉化石が産出しなかった。ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ヨモギ属、

単条型胞子が全試料から産出した。試料12からはコナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、イネ科が比較的多産した。

IV帯（試料5～11）：樹木花粉の占める割合は20～42%程度で低率である。コナラ属コナラ亜属がII帯に引き続いて優占するが、やや出現率を下げ、上部に向かい減少する傾向にある。他に、スギ属、イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科、クマシデ属一アサダ属が目立った出現をする。草本花粉ではイネ科が23～50%程度と高率で出現し、ヨモギ属も比較的高率である。他に、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物やアブラナ科が出現する。アブラナ科は試料5では約19%に達する。

V帯（試料1～4）：樹木花粉の占める割合は28～39%程度と低率である。マツ属複雑管束亜属が47～68%程度で優占する。スギ属、カバノキ属、ハンノキ属なども目立った出現をする。下位帯で優占していたコナラ属コナラ亜属は大幅に出現率を下げる。草本花粉ではイネ科が52～60%程度で高率である。他に、ソバ属、ナデシコ科、アブラナ科などが低率であるが連続して出現する。

地点No.5 (⑥区-A)

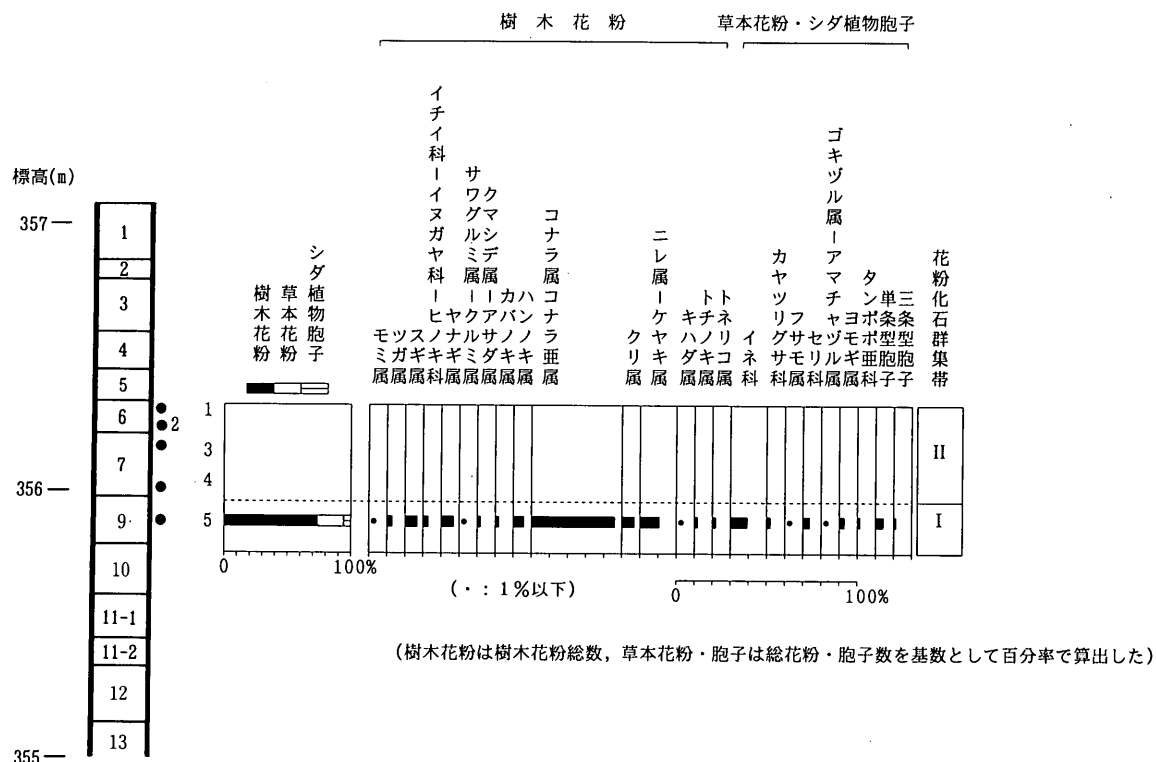
同定された分類群数は樹木花粉20、草本花粉13、形態分類を含むシダ植物胞子3である。地点No.5 (⑥区-A) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より2つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯（試料5）：樹木花粉の占める割合は約73%と高率である。コナラ属コナラ亜属が約46%で優占する。他に、ニレ属一ケヤキ属が約11%、スギ属、ヤナギ属、クリ属が約7%で出現する。草本花粉ではイネ科、セリ科、ヨモギ属、単条型胞子などが出現する。

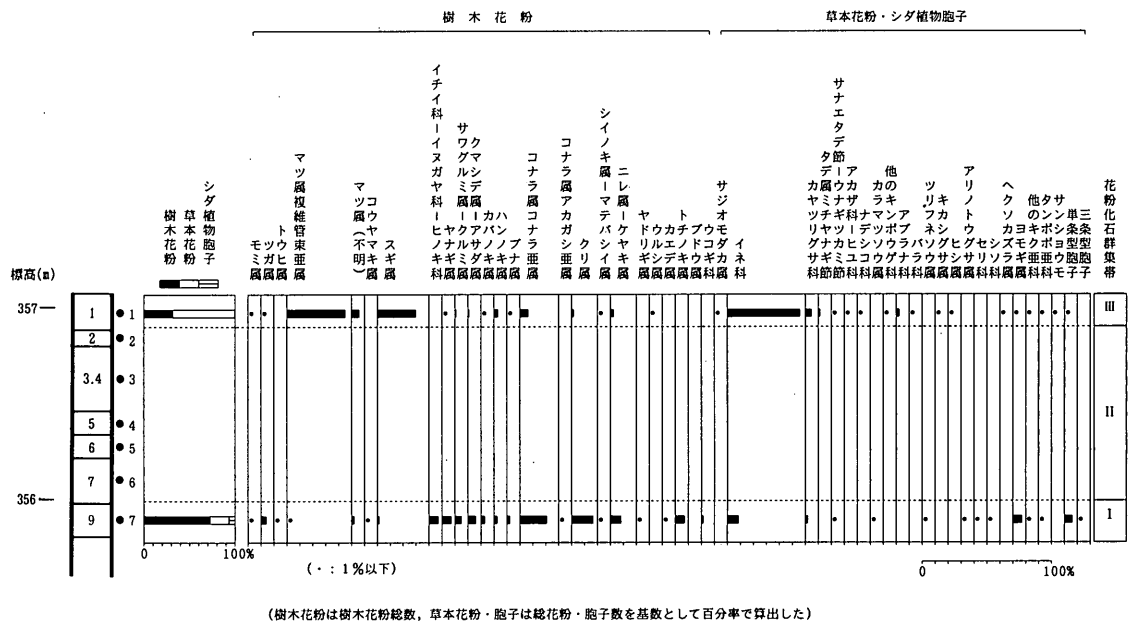
II帯（試料1～4）：十分な花粉化石は産出ししない。コナラ属コナラ亜属、イネ科、ヨモギ属が全試料から産出する。

地点No.6 (⑥区-B)

同定された分類群数は樹木花粉24、草本花粉22、形態分類を含むシダ植物胞子3である。地点No.6 (⑥



第365図 地点No.5 (⑥区-A) の花粉化石分布図



第366図 地点No.6 (⑥区-B) の花粉化石分布図

区-B) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯(試料7)：樹木花粉の占める割合は約73%と高率である。コナラ属コナラ亜属が約21%で優占し、次いでクリ属が約17%で出現する。他に、ニレ属一ケヤキ属、イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科、ヤナギ属、トチノキ属などが目立った出現をする。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、単条型胞子がやや目立った出現をする。

II帯(試料2～6)：十分な花粉化石は産出しない。コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、イネ科、ヨモギ属などが僅かに産出する。

III帯(試料1)：樹木花粉の占める割合は約31%と低率である。マツ属複維管束亜属が約45%で優占し、スギ属も約30%と高率である。他に、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属などが出現する。草本花粉ではイネ科が約56%と高率である。他に、カヤツリグサ科、タデ属ミチヤナギ節、アブラナ科などが出現する。

地点No.7 (⑥区-C)

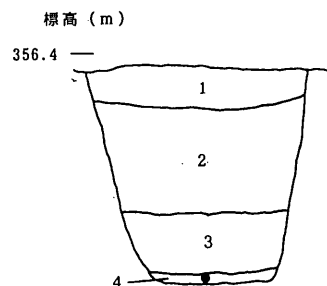
十分な花粉化石が産出しなかったため花粉化石分布図として表せなかった。マツ属(不明)、スギ属、イネ科、バラ科、単条型胞子が僅かに産出した。

地点No.8 (⑦区SK2746)

十分な花粉化石が産出しなかったため花粉化石分布図として表せなかった。コナラ属コナラ亜属、イネ科、クワ科、ヨモギ属、単条型胞子が僅かに産出した。

地点No.9 (⑧区-2)

同定された分類群数は樹木花粉34、草本花粉32、形態分類を含むシダ植物胞子3である。地点No.9 (⑧区) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より5つの花粉化石群集帯を設定すること



第367図 地点No.8 (⑦区SK2746) の断面

ができる。

I帯(試料17~19)：十分な花粉化石は産出しない。試料17からツガ属、サワグルミ属-クルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、単条型孢子が僅かに産出した。

II帯(試料15、16)：樹木花粉の占める割合は72~74%程度と高率である。ヤナギ属が40~52%程度と高率である。次いでコナラ属コナラ亜属が14~16%程度で出現し、サワグルミ属-クルミ属、クマシデ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属なども出現する。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科がやや目立った出現をし、水生植物のコウホネ属なども出現する。

III帯(試料8~14)：樹木花粉の占める割合は30~43%程度と低率である。コナラ属コナラ亜属が25~35%程度で優占し、ハンノキ属、クリ属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属などが目立った出現をする。I帯で高率を占めていたヤナギ属は大幅に出現率を下げる。草本花粉では、イネ科が比較的高率を占め、カヤツリグサ科、ヨモギ属なども出現する。単条型孢子は高率を占め、試料12では約38%に達する。

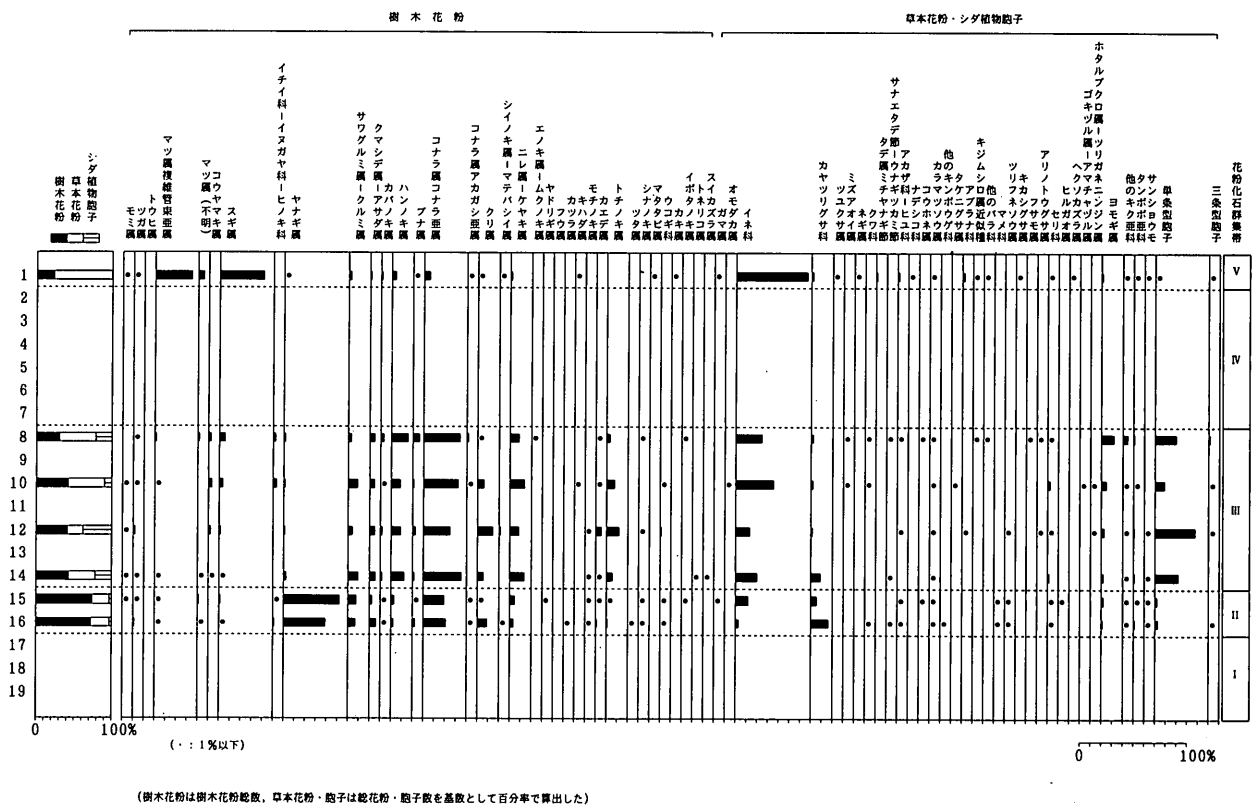
IV帯(試料2~7)：十分な花粉化石は産出しない。ツガ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、イネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属などが僅かに産出する。

V帯(試料1)：樹木花粉の占める割合は約22%と低率である。スギ属が約41%で優占し、マツ属複維管束亜属も約34%と高率である。他に、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、カキ属などが出現する。草本花粉では、イネ科が約67%と圧倒的な高率を占め、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科などが出現する。

地点No.10 (⑩区縄文トレンチ)

同定された分類群数は樹木花粉34、草本花粉19、形態分類を含むシダ植物孢子3である。

樹木花粉の占める割合は33~69%程度である。コナラ属コナラ亜属が14~23%程度で優占し、次いでニレ属-ケヤキ属が7~13%程度で出現する。他に、ヤナギ属、サワグルミ属-クルミ属、ハンノキ属、クリ属、トチノキ属などが目立った出現をする。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が目立った出現をし、



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は総花粉・孢子数を基数として百分率で算出した)

第368図 地点No.9 (⑧-2区)の花粉化石分布図

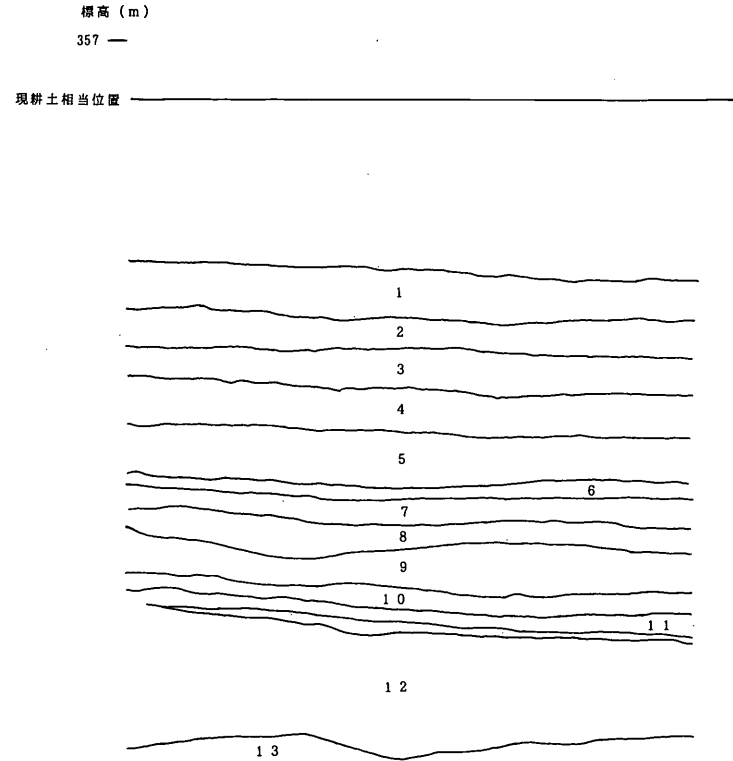
単条型孢子も比較的高率である。

地点No.11 (⑩区)

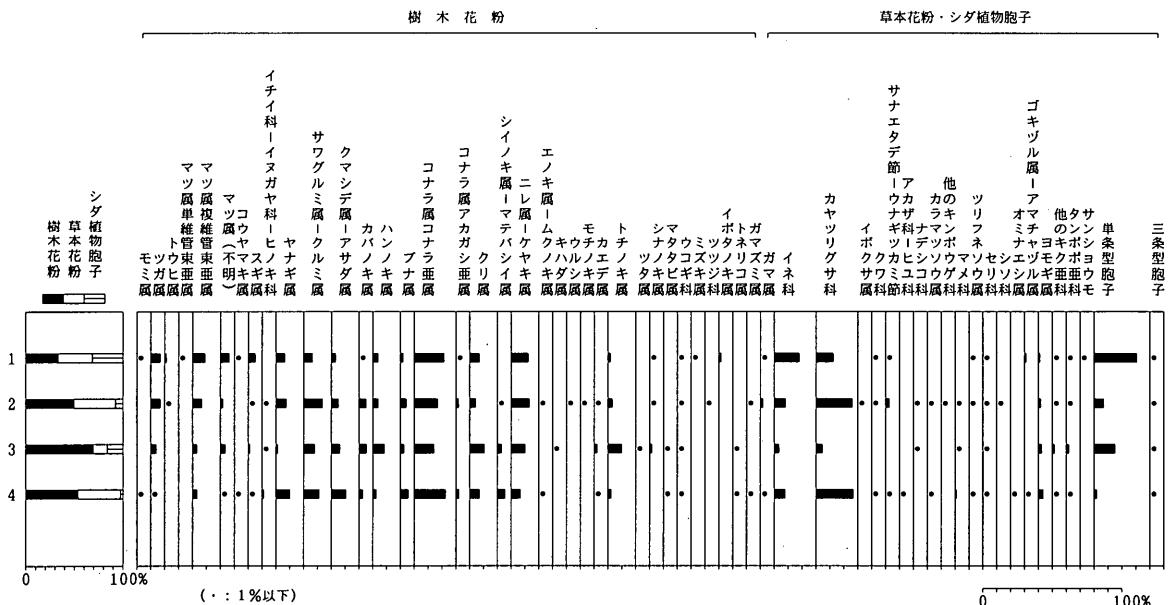
同定された分類群数は樹木花粉49、草本花粉43、形態分類を含むシダ植物孢子3である。他に、ミズゴケ属や緑藻類のクンショウモ属、黄緑色藻類が出現した。

樹木花粉の占める割合は27~52%程度である。コナラ属コナラ亜属が23~47%程度で優占し、次いでイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が3~23%程度で出現する。他に、スギ属、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などが目立った出現をし、カツラ属、カエデ属、トチノキ属なども低率であるが、概ね連続した出現傾向を示す。草本花粉ではイネ科が25~52%程度と高率を占め、カヤツリグサ科も比較的高率である。他に、クワ科、ヨモギ属などが目立った出現をし、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物も低率であるが概ね連続して出現する。

地点No.12 (⑩区)

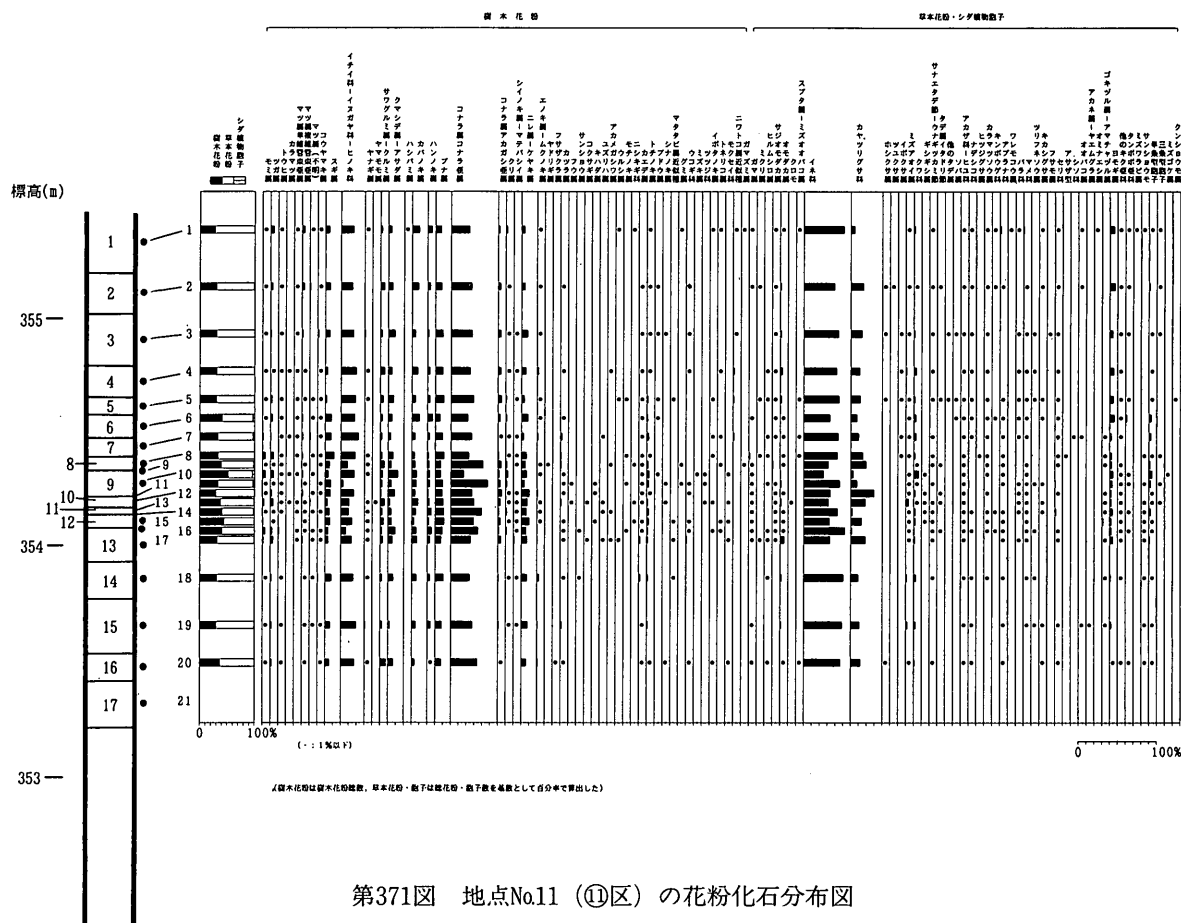


第369図 地点No.10 (⑩区縄文トレンチ) の土層断面 (1:100)



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は総花粉・孢子数を基数として百分率で算出した)

第370図 地点No.10 (⑩区縄文トレンチ) の花粉化石分布図



同定された分類群数は樹木花粉37、草本花粉34、形態分類を含むシダ植物胞子3である。地点No.12 (⑪区) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

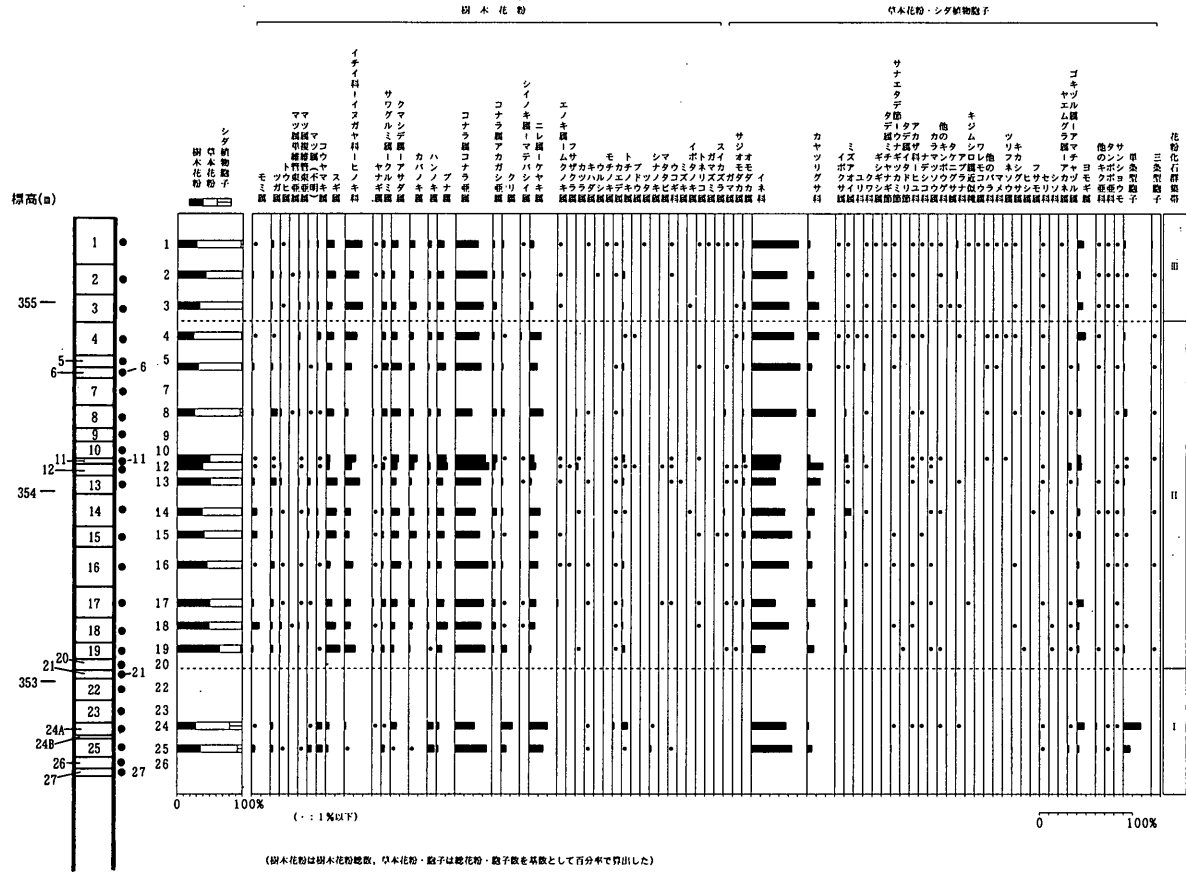
I帯(試料21~27)：樹木花粉の占める割合は28~36%程度で低率である。コナラ属コナラ亜属が21~35%程度で優占し、ニレ属-ケヤキ属も15~20%程度で比較的高率である。他に、コウヤマキ属、ハンノキ属、クリ属、トチノキ属なども目立った出現をする。草本花粉では、イネ科が38~44%程度で比較的高率であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属なども出現する。単条型胞子は比較的高率である。

II帯(試料4~20)：樹木花粉の占める割合は25~65%程度である。コナラ属コナラ亜属が18~37%程度で優占し、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などが目立った出現をする。I帯で比較的高率を占めていたニレ属-ケヤキ属は出現率を下げる。他に、カエデ属、トチノキ属などが低率であるが連続した出現をする。草本花粉では、イネ科が15~52%で比較的高率であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属も目立った出現をする。他に、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物やゴキヅル属-アマチャヅル属などが低率であるが連続して出現する。

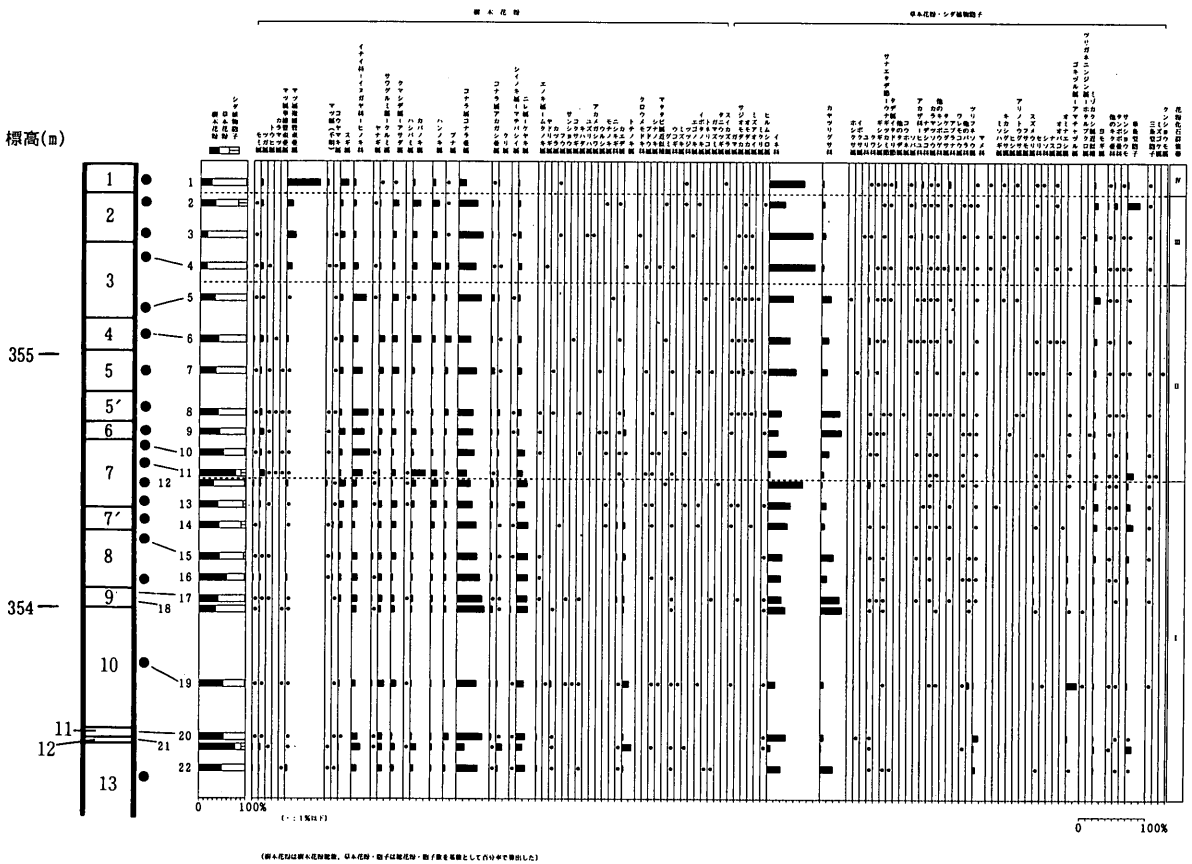
III帯(試料1~3)：樹木花粉の占める割合は29~43%程度で低率である。コナラ属コナラ亜属が25~34%程度で優占する。次いで、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が出現率を上げて15~19%程度で出現する。他に、スギ属、ブナ属などが出現する。ニレ属-ケヤキ属は更に出現率を下げる。草本花粉では、イネ科が38~50%で高率である。カヤツリグサ科、ヨモギ属も目立った出現をし、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物やアブラナ科などが低率で出現する。

地点No.13 (⑬区)

同定された分類群数は樹木花粉49、草本花粉45、形態分類を含むシダ植物胞子3である。他に、ミズゴケ属や緑藻類のクンショウモ属が出現した。地点No.13 (⑬区) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群



第372図 地点No.12 (⑫区) の花粉化石分布図

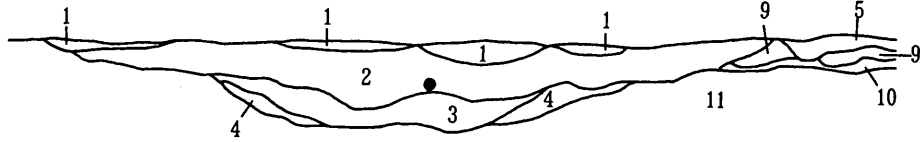


第373図 地点No.13 (⑬区) の花粉化石分布図

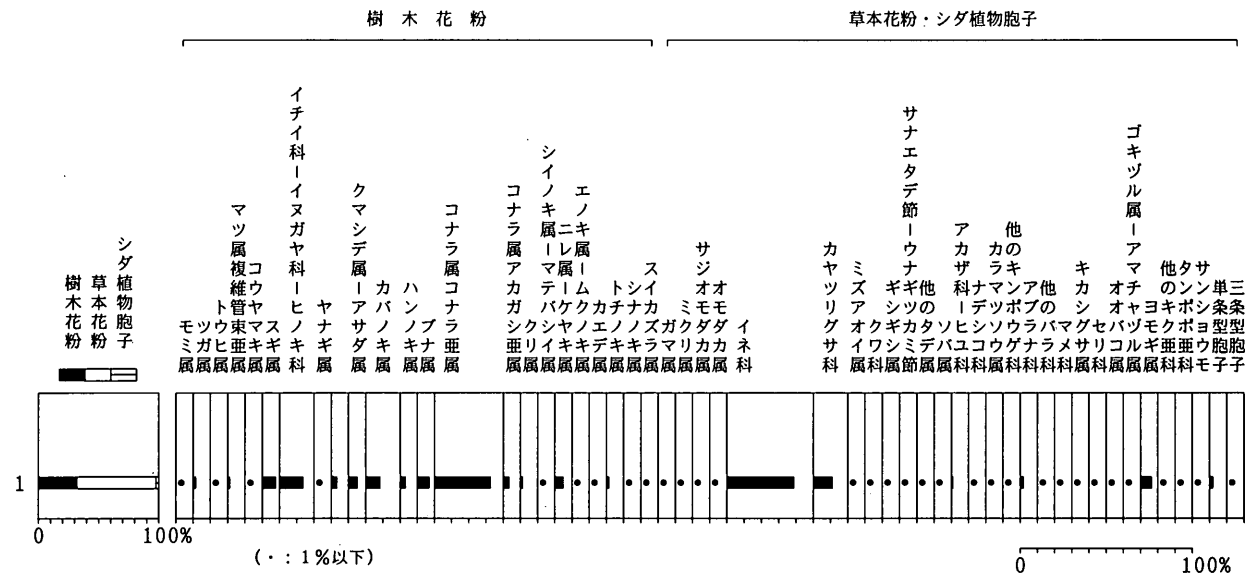
標高(m)

355.804 —

— 355.804



第374図 地点No.14 (⑬区 S D 3006) の土層断面



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

第375図 地点No.14 (⑬区 S D 3006) の花粉化石分布図

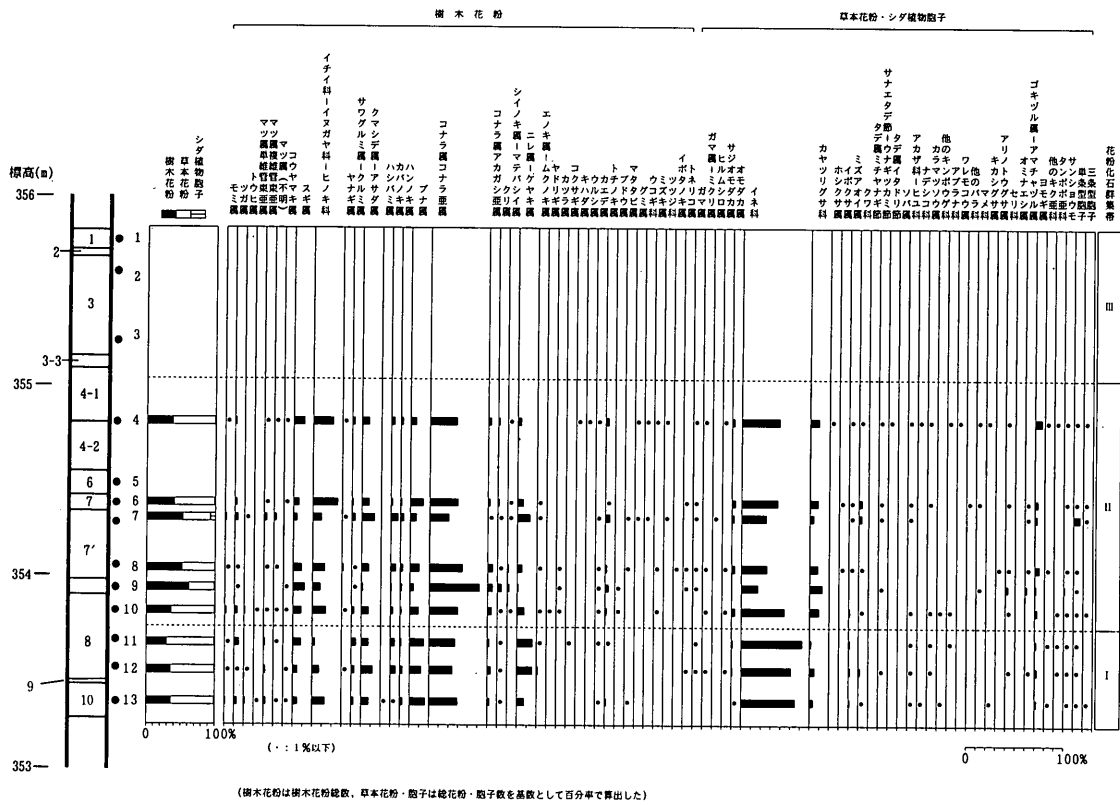
の出現率によって下位より4つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯(試料12~22)：樹木花粉の占める割合は30~77%程度である。コナラ属コナラ亜属が13~42%程度で優占し、ニレ属一ケヤキ属も10~17%程度で比較的高率である。他に、イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科、サワグルミ属一クルミ属、クマシデ属一アサダ属、トチノキ属なども出現する。草本花粉ではイネ科が比較的高率であり、上部に向かい増加して約53%に達する。カヤツリグサ科も中部では約33%に達する。他に、ゴキツル属一アマチャヅル属、ヨモギ属、単条型胞子などが出現する。

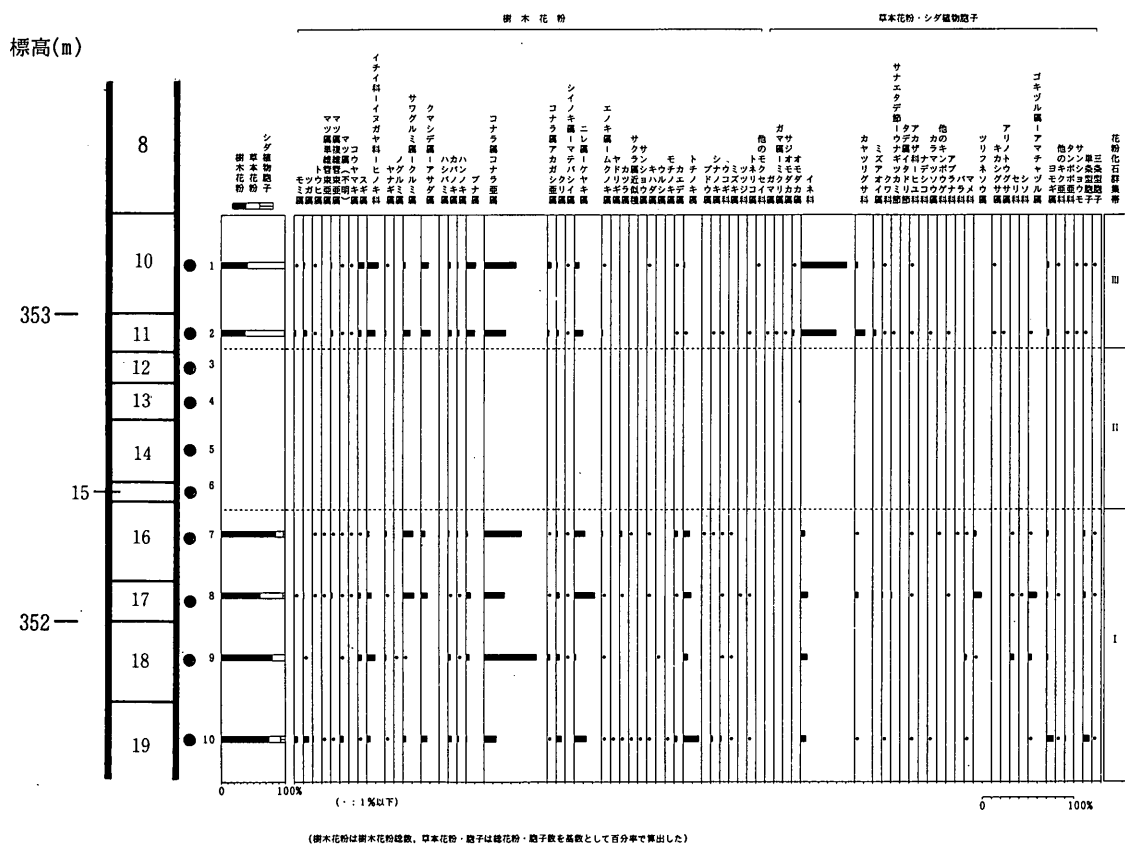
II帯(試料5~11)：樹木花粉の占める割合は32~78%程度で下部では比較的高率であるが、上部に向かい減少し、低率となる。引き続き、コナラ属コナラ亜属が15~35%程度で優占する。イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科も出現率を上げて8~27%で出現する。I帯で比較的高率を占めていたニレ属一ケヤキ属は出現率を下げる。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が比較的高率であり、サジモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物が低率であるが概ね連続して出現する。

III帯(試料2~4)：樹木花粉の占める割合は14~32%程度で低率である。引き続きコナラ属コナラ亜属が27~37%程度で優占する。マツ属複維管束亜属は出現率を上げ目立った出現をする。他に、カバノキ属、ハンノキ属などが出現する。草本花粉ではイネ科が高率で出現し、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生

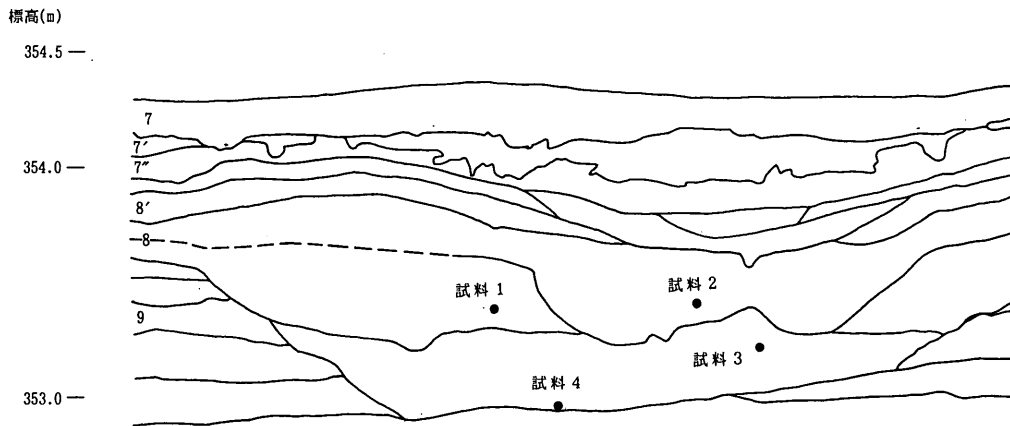




第376図 地点No.15 (⑭区) の花粉化石分布図



第377図 地点No.16 (⑭区深掘) の花粉化石分布図



第378図 地点No.17 (⑭区 S D 3004) の土層断面

植物やソバ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科などが低率で出現する。

IV帯 (試料 1) : 樹木花粉の占める割合は24%で低率である。マツ属複維管束亜属が約50%で優占し、次いでスギ属やコナラ属コナラ亜属が出現する。下位帯で優占していたコナラ属コナラ亜属は約12%と出現率を下げる。草本花粉ではイネ科が約53%と高率である。他に、アブラナ科、ナデシコ科などが目立った出現をする。

地点No.14 (⑬区 S D 3006)

同定された分類群数は樹木花粉23、草本花粉26、形態分類を含むシダ植物孢子3である。樹木花粉の占める割合は約32%と低率である。コナラ属コナラ亜属が約33%で優占し、次いでイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が約14%で出現する。他に、スギ属、カバノキ属、ブナ属などが出現する。草本花粉ではイネ科が約39%と高率であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科なども目立った出現をする。

地点No.15 (⑭区)

同定された分類群数は樹木花粉36、草本花粉31、形態分類を含むシダ植物孢子3である。地点No.15 (⑭区) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

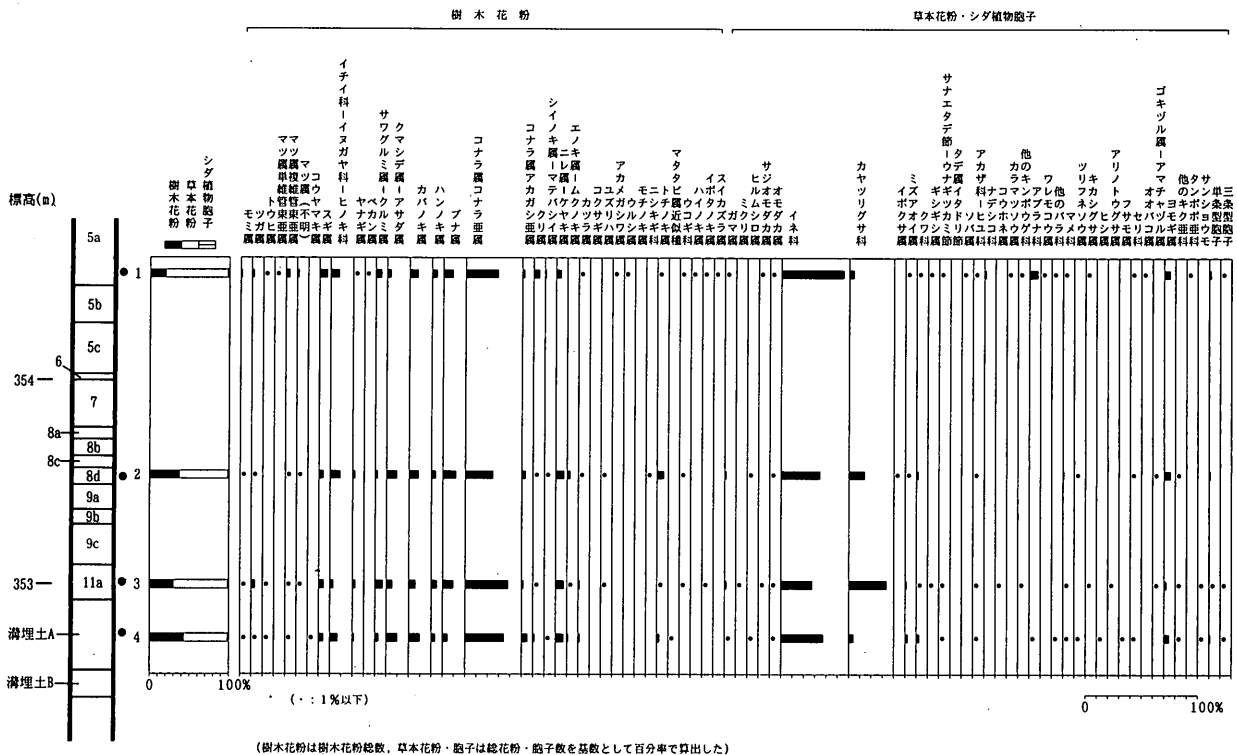
I帯 (試料11~13) : 樹木花粉の占める割合は29~36%程度で低率である。コナラ属コナラ亜属が24~30%程度で優占する。次いで、ニレ属-ケヤキ属が8~16%程度で出現し、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、ブナ属などが目立った出現をする。草本花粉ではイネ科が51~62%程度と圧倒的な高率を占め、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物やカヤツリグサ科、ヨモギ属などが出現する。

II帯 (試料 4~10) : 樹木花粉の占める割合は36~61%程度である。引き続きコナラ属コナラ亜属が20~52%程度で優占する。次いでイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が出現率を上げて8~25%で出現する。他に、スギ属、クマシデ属-アサダ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などが出現する。ニレ属-ケヤキ属はやや出現率を下げる。草本花粉ではイネ科が17~44%程度で高率を占め、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが目立った出現をする。他に、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物やソバ属などが出現する。

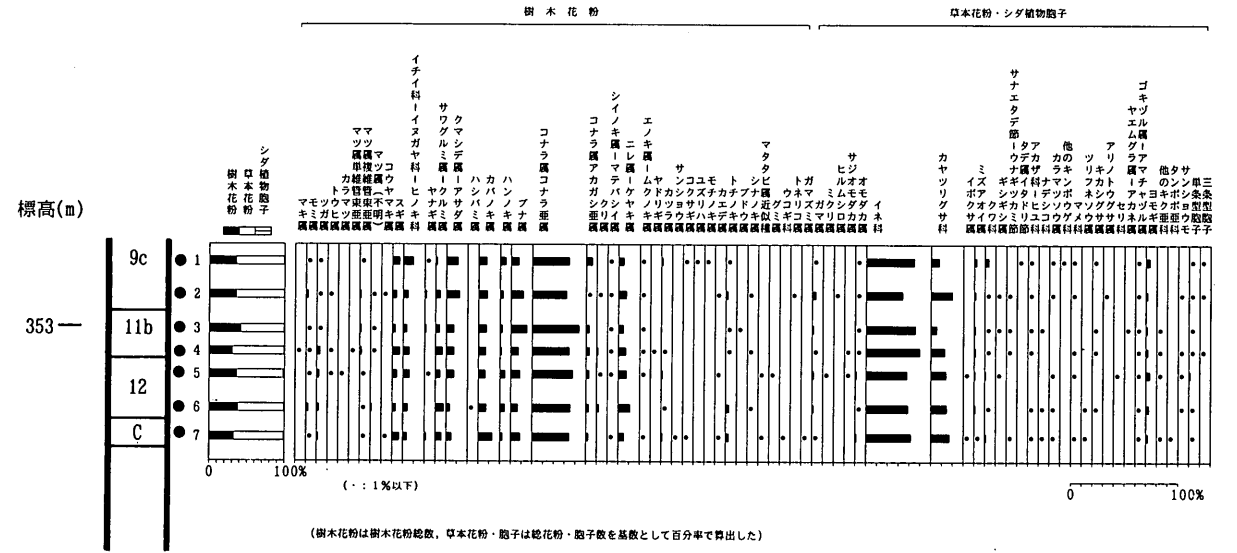
III帯 (試料 1~3) : 十分な花粉化石は産出しない。マツ属複維管束亜属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、オモダカ属、イネ科、ヨモギ属などが出現した。

地点No.16 (⑭区深堀)





第381図 地点No.19 (16区) の花粉化石分布図



第382図 地点No.20 (16区) の花粉化石分布図

同定された分類群数は樹木花粉38、草本花粉27、形態分類を含むシダ植物胞子3である。地点No.16 (14深堀) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯(試料7~10)：樹木花粉の占める割合は60~85%程度と高率である。コナラ属コナラ亜属が14~58%程度で優占し、次いでニレ属一ケヤキ属が出現し、トチノキ属なども目立った出現をする。草本花粉はイネ科、ツリフネソウ属、ゴキヅル属一アマチャヅル属などが出現する。

II帯(試料3~6)：十分な花粉化石は産出しない。ツガ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、ニレ属一ケ

ヤキ属、イネ科、ヨモギ属などが出現する。

III帯(試料1、2)：樹木花粉の占める割合は37~41%程度で低率である。コナラ属コナラ亜属が24~36%程度で優占する。他に、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、ブナ属などはやや出現率を上げ、ニレ属-ケヤキ属はやや出現率を下げる。草本花粉ではイネ科が39~51%程度と高率である。他に、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物やカヤツリグサ科、ヨモギ属などが出現する。

地点No.17 (⑭区 S D 3004)

同定された分類群数は樹木花粉38、草本花粉26、形態分類を含むシダ植物孢子3である。

樹木花粉の占める割合は37~51%程度である。コナラ属コナラ亜属が29~32%程度で優占し、次いでイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が10~22%程度で出現する。他に、スギ属、クマシデ属-アサダ属、ブナ属などが出現する。草本花粉ではイネ科が39~52%程度と高率である。他に、オモダカ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属などが出現する。

地点No.18 (⑯区)

同定された分類群数は樹木花粉49、草本花粉36、形態分類を含むシダ植物3、黄緑色藻類である。地点No.18 (⑯区) の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

I帯(試料24~29)：樹木花粉の占める割合は38~67%程度である。コナラ属コナラ亜属が26~49%程度で優占する。他に、カバノキ属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属、シナノキ属などが出現する。草本花粉ではカヤツリグサ科が比較的高率であり、上部では約38%に達する。他に、イネ科、ヨモギ属、単条型孢子が出現する。

II帯(試料17~23)：樹木花粉の占める割合は38~72%程度である。引き続きコナラ属コナラ亜属が21~35%程度で優占し、クリ属も8~25%と出現率を上げる。他に、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属などが出現する。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属、単条型孢子などが出現する。

III帯(試料1~16)：樹木花粉の占める割合は28~53%程度である。引き続きコナラ属コナラ亜属が24~44%程度で優占し、次いでニレ属-ケヤキ属が5~29%程度で出現する。他に、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、サワグルミ属-クルミ属、クマシデ属-アサダ属などが出現する。II帯で比較的高率であったクリ属は出現率を下げる。

地点No.19 (⑯区)

同定された分類群数は樹木花粉34、草本花粉34、形態分類を含むシダ植物孢子3である。

樹木花粉の占める割合は19~43%程度で低率である。コナラ属コナラ亜属が25~38%程度で優占し、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、ブナ属などが出現する。

草本花粉ではイネ科が28~55%程度と比較的高率であり、カヤツリグサ科も試料3で34%に達する。他に、オモダカ属、ミズアオイ属、ヨモギ属などが出現し、アブラナ科は試料1では約8%に達する。

地点No.20 (⑯区)

同定された分類群数は樹木花粉38、草本花粉27、形態分類を含むシダ植物孢子3である。樹木花粉の占める割合は30~41%程度で低率である。コナラ属コナラ亜属が35~41%程度で優占し、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などが目立った出現をする。他に、カツラ属、トチノキ属が低率であるが連続して出現する。草本花粉ではイネ科が34~50%程度で高率を占め、カヤツリグサ科も目立った出現をする。他に、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物やアカザ科-ヒユ科、ゴキヅル属-アマチャヅル属、ヨモギ属などが出現する。

## 5 遺跡周辺の植生変遷

コナラ属コナラ亜属優占期第Ⅰ期：地点No.4 (④区)Ⅰ帯、地点No.10 (⑩区)地点No.18(⑱)Ⅰ・Ⅱ帯に相当する。時代は縄文時代後期前半頃以前と考えられる。この時期、遺跡周辺の山地・丘陵部には落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属を主とした森林が形成されていた。そこには落葉広葉樹のクマシデ属—アサダ属、カバノキ属、ブナ属、クリ属、ニレ属—ケヤキ属などもみられた。一方、低地部との境界に近い斜面部などに落葉広葉樹のサワグルミ属—クルミ属、カツラ属、カエデ属、トチノキ属などが生育しており、低地部ではヤナギ属からなる河畔林やハンノキ属からなる湿地林がみられた。また、④・⑥・⑩区付近にはガマ属が生育するような水域があり、カヤツリグサ科などの群落もみられ、幾分乾燥した所にはカラマツソウ属、ヨモギ属、シダ植物などが生育していた。

コナラ属コナラ亜属優占期第Ⅱ期：地点No.1 (①-1区)Ⅰ帯、地点No.2 (①-2区)Ⅰ・Ⅱ帯、地点No.4 (④区)Ⅱ帯、地点No.5 (⑥区-A)Ⅰ帯、地点No.6 (⑥区-B)Ⅰ帯、地点No.9 (⑧-2区)Ⅲ帯、地点No.11 (⑪区)Ⅰ帯、地点No.13 (⑬区)Ⅰ帯、地点No.15 (⑮区)Ⅰ帯、地点No.16 (⑰区深堀)Ⅰ帯、地点No.18 (⑱区)Ⅲ帯に相当する。この時期は、引き続きコナラ属コナラ亜属が卓越し、大きな変化はみられないが、ニレ属—ケヤキ属が幾分分布を拡大したようである。ニレ属—ケヤキ属が分布を拡大する時期は、⑱区のⅡ帯からⅢ帯への移行時期であり、縄文時代後期前半頃からと思われる。このニレ属—ケヤキ属が遺跡周辺で分布を拡大した時期は、①-2区付近は比較的乾燥していたものと思われ、カラマツソウ属、ヨモギ属、シダ植物などが生育しており、クリ属やウコギ科が多くみられた(地点No.2①-2区、Ⅰ帯)。⑬、⑭区付近では水田稲作がおこなわれており、⑱区付近ではガマ属が生育するような水域がみられ、カヤツリグサ科の群落やツリフネソウ属、ゴキヅル属—アマチャヅル属がみられた(地点No.18⑱区、Ⅲ帯)。なお、①-1区Ⅰ帯試料23からフウ属、ニッサ属近似種が、⑱区Ⅲ帯試料12からフウ属が産出しているが、このフウ属やニッサ属は第三紀末あるいは第四紀初めの頃に絶滅した分類群であり、二次的に堆積したものと考えられる。

コナラ属コナラ亜属優占期第Ⅲ期：地点No.1 (①-1区)Ⅱ帯、地点No.2 (①-2区)Ⅲ帯、地点No.4 (④区)Ⅳ帯、地点No.11 (⑪区)、地点No.12 (⑫区)Ⅲ帯、地点No.13 (⑬区)Ⅱ帯、地点No.15 (⑮区)Ⅱ帯、地点No.16 (⑰区深堀)Ⅲ帯、地点No.17 (⑰区S D 3004)に相当する。この時期も引き続きコナラ属コナラ亜属が卓越するが、ニレ属—ケヤキ属に代わってイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が分布を拡大する。このイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が増加する時期は、①-1区のⅠ帯からⅡ帯への移行期(弥生時代後期～古墳時代前・中期)、①-2区のⅡ帯からⅢ帯への移行期(古墳時代前期～中期)、⑬区のⅠ帯からⅡ帯への移行期(平安時代)、⑭区のⅠ帯からⅡ帯への移行期(古墳時代)、⑰区深堀Ⅲ帯の頃(弥生時代中期～後期頃)、④区Ⅲ帯からⅣ帯への移行期頃(古墳時代前期頃)であり、およそ弥生時代後期頃～古墳時代前期頃の間である。この頃から遺跡付近の至る所で水田稲作が行われるようになり、平安時代に入って①・⑪・⑬・⑰区付近ではソバ栽培も行われるようになったものと思われる。

コナラ属コナラ亜属優占期第Ⅳ期：地点No.1 (①-1区)Ⅲ帯、地点No.13 (⑬区)Ⅲ帯に相当する。時代は近世頃と考えられる。この時期は、引き続きコナラ属コナラ亜属が卓越するが、マツ属複維管束亜属(アカマツ、クロマツの類)が分布を拡大し始める時期である。近世に入ると人間活動も活発となり二次林としてマツ属複維管束亜属が分布を拡大したものと思われる。遺跡付近では水田稲作やソバの栽培が行われており、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科なども栽培されていたものと思われる。

マツ属複維管束亜属優占期：地点No.1 (①-1区)Ⅳ帯、地点No.4 (④区)Ⅴ帯、地点No.9 (⑧-2区)Ⅴ帯、地点No.13 (⑬区)Ⅳ帯に相当する。時代は近世～近・現代である。この時期はマツ属複維管束亜属が

更に分布域をひろげ卓越する時期である。また植林によると思われるスギ属も分布を拡大する。このように近世に入ってまもなく遺跡周辺はマツ属複雑管束亜属、スギ属といった針葉樹を主とした森林になり、それまで卓越していたコナラ属コナラ亜属は衰退する。遺跡付近では、水田稲作やソバ、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などの栽培が行われており、カキ属も栽培されていたものと思われる。

## 6 おわりに

石川条里遺跡周辺における植生変遷は大きく5つに分けられ、以下のようであった。

縄文時代後期前半以前はコナラ属コナラ亜属が卓越し、多様な落葉広葉樹がみられた。その後、弥生時代後期頃から古墳時代前期頃にかけてニレ属－ケヤキ属が分布拡大し、コナラ属コナラ亜属に次いで主要な森林構成要素となる。この頃遺跡付近では水田稲作が開始される。その後、中世頃にかけてイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が分布拡大し、コナラ属コナラ亜属について主要な森林構成要素となる。この頃、遺跡付近では水田稲作と共に平安時代頃からソバの栽培も行われるようになった。近世に入ってから二次林としてのマツ属複雑管束亜属が増加し、コナラ属コナラ亜属に次いで目立つようになる。遺跡付近では水田稲作が行われており、ソバ、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科なども栽培されていた。近・現代に至ってはコナラ属コナラ亜属は衰退し、マツ属複雑管束亜属、スギ属といった針葉樹を主とした森林になっていった。遺跡付近ではカキ属なども栽培されるようになった。

第32表 地点No.1 (①-1区) から産出した花粉化石

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
<b>樹木</b>																									
モミ属	<i>Abies</i>	1	1	-	4	6	7	6	7	12	9	3	2	1	4	18	6	5	4	5	2	5	6	2	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	6	6	4	15	18	14	14	6	11	10	6	5	6	5	4	7	5	3	4	2	2	1	2	
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	-	2	1	4	2	1	1	-	2	-	1	1	1	-	1	1	-	1	1	-	-	
マツ属単純管胞型属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属複雑管胞型属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	164	175	195	53	44	31	8	17	26	10	2	4	3	1	12	10	6	1	3	3	1	11	14	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3	4	2	1	-	3	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	1	-	1	-	6	5	18	2	-	4	2	1	-	4	-	3	3	1	2	1	-	2
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	127	62	21	7	9	6	31	16	11	9	1	13	21	11	9	11	16	12	10	8	12	4	1	6
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	12	7	-	17	16	16	28	16	11	14	4	23	55	21	16	28	41	14	7	9	13	3	7	8
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クルミ属	<i>Juglans</i>	7	8	4	3	5	3	14	7	5	2	33	12	20	10	12	27	19	14	16	32	23	9	23	
クマシラ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	11	3	5	12	5	10	2	4	2	10	6	52	10	22	9	10	12	9	7	13	11	4	2	3
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カバノキ属	<i>Betula</i>	17	14	10	19	16	10	13	15	9	5	4	32	6	10	5	14	16	12	6	10	19	7	3	6
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	20	22	10	19	17	19	5	6	4	7	-	13	4	7	2	6	10	5	7	19	6	2	1	6
ブナ属	<i>Fagus</i>	6	7	3	10	7	7	14	15	23	14	6	27	6	19	17	27	17	23	12	16	7	6	5	11
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	30	52	19	50	64	46	74	77	79	39	24	128	69	122	83	139	108	119	76	118	96	68	41	182
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	4	1	1	2	5	4	2	7	4	2	1	12	8	9	10	8	10	15	5	6	3	5	7	8
クリ属	<i>Castanea</i>	4	-	1	1	3	3	1	1	-	3	1	1	3	3	2	2	1	-	-	2	1	4	-	4
シイノキ属-マラハシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	1	-	-	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
ニレ属-ウヤギ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	18	13	6	13	8	11	4	9	5	4	3	29	10	38	10	20	23	56	38	139	81	69	22	42
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	2	-	1	-	-	-	-	-	1
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カッタ属	<i>Corcidiphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アケボノ属	<i>Liquidambar</i>	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サク属-属近似種	cf. <i>Prunus</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニッサ属近似種	cf. <i>Nyssa</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コクサギ属	<i>Orixa</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	1	2	-	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	1	1	-	-	-	1	2	1	1	-	-	1	6	11	2	4	3	1	2	6	5	20	12	4
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シラカバ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マタタビ属近似種	cf. <i>Actinidia</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズギ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	1	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	1
ニワトコ属近似種	cf. <i>Sambucus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>草本</b>																									
ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	1	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サジメダカ属	<i>Alisma</i>	-	-	-	1	-	-	2	7	14	12	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	-	1	1	2	-	-	-	-	-	20	4	1	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-
スズタケ属-ミズオオバコ属	<i>Blyxa - Ottelia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	1052	1304	459	891	705	696	712	251	164	276	68	644	349	497	228	404	466	354	177	107	50	18	32	34
カヤツリグサ科	Cyperaceae	36	32	14	107	194	109	45	77	104	132	13	47	137	29	158	872	59	94	8	33	67	2	2	30
ホシコサ属	<i>Eriocaulon</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	1	3	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1	4	4	-	-	-	-	-	-	-
ツユクサ属	<i>Coccoloba</i>	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ属	<i>Anelisma</i>	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	4	-	3	7	10	6	18	4	-	3	6	19	14	4	-	5	5	-	-	-	8	4	2	-
ギンギク属	<i>Rumex</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギ草属-ウナギツクミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinoaulon</i>	1	1	-	4	2	7	1	2	9	4	-	-	-	-	1	2	-	-	-	1	3	1	-	1
タデ属イタドリ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のタデ属	other <i>Polygonum</i>	4	2	1	1	3	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	1	1	10	3	5	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	7	18																						



第33表 地点No.2 (①-2区) から産出した花粉化石

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
<b>樹木</b>															
モミ属	<i>Abies</i>	1	8	1	2	2	3	2	8	3	2	3	-	-	3
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	11	3	1	3	5	1	1	1	1	1	3	1	1
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	3	4	1	1	4	2	1	3	1	3	4	1	4	4
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	-	-	1	1	2	3	1	2	1	3	1	1	3
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	1	-	-	-	1	1	2	2	2	1	3	1	2	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	16	21	12	17	14	14	13	11	4	5	2	1	1	4
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	51	36	28	31	37	20	37	14	6	11	3	-	-	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	3	2	-	2	2	2	-	2	1	-	1	-	1	2
クルミ属	<i>Juglans</i>	21	21	9	11	23	17	15	21	22	22	5	9	4	14
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	26	39	27	17	13	13	12	6	15	14	3	1	-	5
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	22	21	11	25	22	18	18	9	10	14	8	6	-	7
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	18	8	9	24	11	7	14	4	13	9	5	9	4	14
ブナ属	<i>Fagus</i>	30	41	20	13	34	34	19	11	7	22	1	3	8	12
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	113	113	76	129	122	113	87	66	63	89	35	27	48	86
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	4	9	4	11	12	16	13	6	5	2	3	3	2	3
クリ属	<i>Castanea</i>	1	1	2	3	1	-	-	-	1	-	1234	2417	854	173
シノキ属-マテバシ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	-	-	-	-	-	3	2	1	-	-	-	1	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	29	23	27	15	15	31	46	52	56	62	36	17	17	41
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	2	1	2	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-
カツラ属	<i>Ceroidiphyllum</i>	2	1	-	-	2	-	1	-	1	-	-	-	-	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コクサギ属	<i>Orixa</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	-	-	1	1	-	1	1	1	-	-	1	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	3	5	3	2	1	2	3	-	7	3	7	31	17	8
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1
マタタビ属近似種	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	1	2	1	1	-	1	-	-	3	1	131	94	34	15
アオキ属	<i>Aucuba</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>草本</b>															
ガマ属	<i>Typha</i>	4	3	-	4	7	1	2	-	-	-	-	-	-	-
ミクリ属	<i>Sparganium</i>	-	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	1	1	1	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	3	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	16	17	12	2	1	2	3	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	584	513	346	401	334	369	446	274	273	195	21	9	19	34
カヤツリグサ科	Cyperaceae	82	90	79	19	81	69	162	145	28	34	54	1	4	12
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミスアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	6	9	1	2	6	1	1	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	22	7	9	4	2	5	10	2	2	-	-	-	1	-
ギンギン属	<i>Rumex</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ属-ウナギツカミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	1	1	1	1	2	3	2	4	5	-	2	-	2	3
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	3	1	2	4	2	5	2	3	-	-	-	-	2	4
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	-	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	1	1	4	-	1	1	4	6	4	1	-	-	3
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	2	-	3	-	1	1	1	-	-	-	1	-	1
アブラナ科	Cruciferae	6	3	-	1	1	-	2	1	1	-	-	1	-	-
バラ科	Rosaceae	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	6	2	1	1	1	1	5	2	3	3	1	2	3	5
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	-	-	-	1	2	3	-	-	-	-	-	-	-
ヒシ属	<i>Trapa</i>	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	2	1	2	3	2	1	1	1	3	2	2	-	-	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナス属	<i>Solanum</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキツル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	-	1	2	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	44	25	27	36	22	18	33	17	12	10	4	2	15	25
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	1	1	1	1	4	5	-	3	2	6	12	15	3
タンポポ科	Liguliflorae	1	-	1	-	-	1	-	-	-	1	1	2	1	9
<b>シダ植物</b>															
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	1	1	1	3	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	4	6	6	6	8	19	15	22	24	14	176	646	3942	879
三条型胞子	Trilete spore	-	-	1	-	-	-	1	1	1	-	3	5	2	1
<b>黄緑色藻類</b>															
	<i>Botryococcus braunii</i> Kutzing	1	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>樹木花粉</b>															
	Arboreal pollen	358	371	239	309	325	309	292	220	226	264	1488	2629	1003	399
<b>草本花粉</b>															
	Nonarboreal pollen	783	685	496	489	461	494	685	456	336	251	92	30	62	99
<b>シダ植物胞子</b>															
	Spores	5	7	8	9	9	20	16	23	25	14	179	651	3944	880
<b>花粉・胞子総数</b>															
	Total Pollen & Spores	1146	1063	743	807	795	823	993	699	587	529	1759	3310	5009	1378
<b>不明花粉</b>															
	Unknown pollen	25	22	14	49	54	44	59	24	48	52	48	44	38	57

第34表 地点No.3 (②-1区) から産出した花粉化石

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
<b>樹木</b>											
モミ属	<i>Abies</i>	1	-	1	-	-	-	-	-	-	7
ツガ属	<i>Tsuga</i>	8	16	3	5	-	-	-	-	-	24
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	1	2	-	-	-	-	-	4
マツ属 複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	31	59	7	1	-	-	-	-	-	2
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	84	123	13	9	-	1	-	-	-	5
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	3	-	-	-	-	1	8
スキ属	<i>Cryptomeria</i>	142	23	2	1	1	1	-	-	1	20
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	2	-	1	-	-	-	-	-	-	10
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	6	3	1	-	-	1	1	1	1	14
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	1	1	-	-	-	-	-	-	8
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	5	7	4	-	-	-	-	-	1	11
ブナ属	<i>Fagus</i>	3	-	1	1	-	-	-	-	1	41
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	8	6	3	3	-	-	3	-	9	51
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	7
クリ属	<i>Castanea</i>	-	2	-	1	1	1	-	-	1	1
シノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	4	1	-	-	-	1	-	-	6
ニシキギ属	<i>Euonymus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
<b>草本</b>											
ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	5
イネ科	Gramineae	887	274	164	80	5	7	13	3	6	465
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	1	8	18	-	-	-	-	-	17
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ミスアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
タデ属ミチヤナギ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Avicularia</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	9
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	2	8	-	-	-	-	-	-	2
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	10	8	10	3	-	1	-	-	-	9
ナデシコ科	Caryophyllaceae	3	12	14	19	-	-	-	-	-	8
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	1	2	-	-	-	-	-	1	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
アブラナ科	Cruciferae	9	7	1	2	1	1	-	-	-	5
キジムシロ属近似種	cf. <i>Potentilla</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	16
他のバラ科	other Rosaceae	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
フヨウ属近似種	cf. <i>Hibiscus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
キサシグサ属	<i>Rotala</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	7
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	1	2	1	3	4	5	-	1	2	81
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	2	5	4	-	1	-	1	1	11
タンポポ亜科	Liguliflorae	38	48	11	19	-	1	2	-	-	7
<b>シダ植物</b>											
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
単条型孢子	Monolete spore	-	1	2	1	-	1	-	-	-	3
三条型孢子	Trilete spore	1	-	1	1	-	-	-	-	-	1
<b>樹木花粉</b>											
樹木花粉	Arboreal pollen	293	244	41	28	2	4	5	1	16	225
草本花粉	Nonarboreal pollen	956	359	225	150	10	16	15	7	12	652
シダ植物孢子	Spores	2	1	3	2	0	1	0	0	0	5
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	1251	604	269	180	12	21	20	8	28	882
<b>不明花粉</b>											
不明花粉	Unknown pollen	24	17	11	12	7	5	1	3	5	21



第36表 地点No.5 (㊸区-A) 地点No.6 (㊸区-B) 地点No.7 (㊸区-C) から産出した花粉化石

和名	学名	A					B							C		
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3
<b>樹木</b>																
モミ属	<i>Abies</i>	2	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-	2	-	-	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	-	-	-	-	14	-	-	-	1	4	-	-	3	
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	
マツ属 榊亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	174	5	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	1	-	
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	23	1	-	-	-	7	-	-	1	2	-	-	-	-	
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	115	4	-	-	-	2	5	1	-	-	-	1	-	7	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	-	-	1	-	-	24	-	-	-	-	-	-	1	3	
ヤナギ属	<i>Salix</i>	1	-	-	-	-	24	-	-	-	-	-	-	-	7	
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	4	1	-	-	-	12	-	-	-	-	-	-	-	1	
カバノキ属	<i>Betula</i>	4	-	-	-	-	21	-	-	-	1	2	-	-	2	
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	1	-	-	-	10	-	-	-	2	-	-	-	2	
ブナ属	<i>Fagus</i>	13	1	-	-	-	2	9	-	-	-	-	-	-	6	
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	3	-	-	-	-	2	8	-	-	1	2	-	-	-	
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	25	1	-	3	-	19	70	-	-	2	3	6	2	47	
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	6	5	-	3	-	56	-	-	1	-	-	1	7		
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	1		
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	10	1	-	1	-	28	-	-	-	-	-	-	-	11	
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
カエデ属	<i>Acer</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	2	-	-	24	-	-	-	-	-	-	-	2	
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<b>草本</b>																
サシオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
イネ科	Gramineae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カヤツリグサ科	Cyperaceae	680	17	-	1	-	2	40	-	1	1	6	37	3	13	
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	58	-	-	-	-	9	-	-	-	-	1	-	-	3	
タデ属ミチヤナギ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Avicularia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	16	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	3	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ナデシコ科	Caryophyllaceae	10	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
アブラナ科	Cruciferae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
バラ科	Rosaceae	29	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヒシ属	<i>Trapa</i>	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
フサモ属	<i>Myriophyllum</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
シソ科	Labiatae	-	-	1	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	5	
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ゴキウ属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6	4	1	-	-	4	33	-	-	6	5	1	1	4	
タンポポ科	Liguliflorae	6	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	1	-	-	
<b>シダ植物</b>																
サシコウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	67	12	2	17	1	28	67	-	-	-	14	5	3	8	50
単葉型胞子	Monoletic spore	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	
三葉型胞子	Trilete spore	2	2	-	-	-	4	28	-	1	-	2	2	2	6	
<b>樹木花粉</b>																
樹木花粉	Arboreal pollen	384	20	0	10	0	35	336	1	0	1	10	15	7	6	100
草本花粉	Nonarboreal pollen	824	25	1	3	0	7	96	0	1	2	16	45	7	12	29
シダ植物胞子	Spores	70	14	2	17	1	33	95	0	1	0	16	8	6	8	56
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1278	59	3	30	1	75	527	1	2	3	42	68	20	26	185
<b>不明花粉</b>																
不明花粉	Unknown pollen	9	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	2

第37表 地点No.8 (㉞区SK2746) ・地点No.10 (㉟区縄文トレンチ) から産出した花粉化石

和名	学名	㉟区縄文トレンチ				㉞区SK2746
		1	2	3	4	1
<b>樹木</b>						
モミ属	<i>Abies</i>	2	-	-	2	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	16	26	9	2	-
トウヒ属	<i>Picea</i>	3	1	-	-	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	21	25	7	9	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	15	7	8	2	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	2	-	-	1	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	12	1	3	2	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.- C.	-	3	1	3	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	15	28	3	27	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	15	51	18	30	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	7	19	14	28	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	19	12	7	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	9	15	19	7	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	5	16	6	15	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	50	63	32	60	1
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	2	7	-	6	-
クリ属	<i>Castanea</i>	16	16	24	19	-
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	-	3	7	15	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	29	49	23	18	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	1	-	1	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	2	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	1	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	1	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	3	5	1	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	4	12	22	6	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	1	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	1	3	4	-	-
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	-	-	1	1	-
ウコギ科	Araliaceae	1	1	2	1	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	2	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	1	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	4	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	7	-	1	1	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	1	-	1	-
<b>草本</b>						
ガマ属	<i>Typha</i>	1	14	-	3	-
イネ科	Gramineae	127	60	11	39	5
カヤツリグサ科	Cyperaceae	88	196	15	133	-
イボクサ属	<i>Aneilema</i>	-	2	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	1	-	4	1
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	5	21	-	2	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	-	4	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	1	1	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	1	-	1	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	2	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	1	1	5	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	4	1	-	3	-
セリ科	Umbelliferae	4	1	1	1	-
シソ科	Labiatae	-	1	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	-	-	1	-
ゴキツル属-アマチャツル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	9	-	-	2	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	8	14	8	17	1
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	5	5	1	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	3	6	1	-
<b>シダ植物</b>						
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	1	-	-	-	-
単条型孢子	Monolete spore	216	52	49	10	1
三条型孢子	Trilete spore	5	4	3	2	-
<b>樹木花粉</b>						
樹木花粉	Arboreal pollen	233	373	224	265	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	250	324	48	217	7
シダ植物孢子	Spores	222	56	52	12	1
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	705	753	324	494	9
<b>不明花粉</b>						
不明花粉	Unknown pollen	19	8	13	17	0

第38表 地点No.9 (⑧-2区) から産出した花粉化石

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
<b>樹木</b>																				
モミ属	<i>Abies</i>	1	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	2	5	-	-	-	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	2	-	-	-	-	1	1	-	1	-	4	-	1	4	8	1	-	-
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属椎茸亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	170	1	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	1	4	7	-	-	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	27	3	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	6	7	-	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	2	-	-	-	-	-	3	-	8	2	5	-	1	-	-	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	204	3	-	-	-	-	-	7	-	8	2	3	-	1	6	5	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	-	-	-	-	-	-	-	3	-	8	-	-	-	-	4	8	-	-	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	1	-	-	-	-	-	-	2	-	3	-	3	-	6	263	279	-	-	-
サウグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	12	2	-	-	-	-	-	4	-	21	1	9	-	22	40	49	1	-	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	5	-	1	-	-	-	-	6	-	11	-	11	-	13	12	45	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	6	2	-	-	-	-	-	4	-	2	-	4	-	4	2	2	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	20	-	-	-	2	1	-	20	-	20	-	20	-	28	15	17	1	-	-
ブナ属	<i>Fagus</i>	2	-	-	-	-	-	-	8	-	3	-	6	-	4	3	17	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	28	11	4	-	-	-	-	43	-	75	2	55	1	80	98	151	1	-	-
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	-	-	-	-	-	-	2	-	1	1	-	-	4	2	-	-	-	-
クリ属	<i>Castanea</i>	3	3	1	-	-	-	-	1	-	14	-	32	-	13	3	65	-	-	-
シノノキ属-マデバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	2	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	8	-	-	-	-	-	-	11	-	32	-	19	-	31	24	26	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis - Aphananthe</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ノウミ属	<i>Liquidambar</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヅラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	1	1	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	12	-	2	2	8	-	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	-	-	-	-	4	-	18	-	26	1	13	2	6	-	-	-
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツルノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2	3	-	-	-
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	3	-	1	1	-	-	-	-
カキ属	<i>Diospyros</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<b>草本</b>																				
ガマ属	<i>Typha</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	1491	63	10	-	2	-	-	102	-	198	7	71	1	106	81	28	-	-	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	46	6	-	-	-	-	-	9	-	11	1	8	-	48	37	161	-	-	-
ツユクサ属	<i>Comelina</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ネギ属	<i>Allium</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-
タデ属ミチヤナギ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Avicularia</i>	25	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	41	18	2	1	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	1	2	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	3	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コウホネ属	<i>Nuphar</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	2	1	-	-	-	-	-	3	-	3	-	2	-	1	5	1	-	-	-
他のキンポウグサ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クワニグサ属	<i>Macleaya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	53	46	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キジムシロ属近似種	cf. <i>Potentilla</i>	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	6	-	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	6	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フサモ属	<i>Myriophyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	-	-	-	-	-	-	1	1	15	-	1	-	9	2	4	-	-	-
ヒルガオ属	<i>Calystegia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキツル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ホタルブクロ属-ツリガネニンジン属	<i>Campanula - Adenophora</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Arenaria</i>	28	10	3	1	3	-	-	50	-	27	1	16	-	12	16	15	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	11	1	-	-	-	-	-	20	-	3	-	3	-	3	1	3	-	-	-
タンポポ科	Liguliflorae	16	9	3	-	-	-	-	5	-	3	-	6	-	7	2	12	-	-	-
<b>シダ植物</b>																				
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	6	2	-	-	-
単葉型胞子	Monoletic spore	7	18	2	2	2	-	-	83	-	51	5	203	5	117	15	28	1	-	-
三葉型胞子	Trilete spore	6	3	1	-	-	-	-	6	-	3	-	3	-	-	-	1	-	-	-
<b>樹木花粉</b>																				
樹木花粉	Arboreal pollen	498	33	8	0	2	1	1	127	0	232	8	221	2	227	504	714	4	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	1726	161	19	2	5	0	0	201	1	271	9	112	1	188	157	242	0	0	0
シダ植物胞子	Spores	15	21	3	2	2	0	0	89	0	54	5	207	5	118	21	31	1	0	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	2239	215	30	4	9	1	1	417	1	557	22	540	8	533	682	987	5	0	0
<b>不明花粉</b>																				
不明花粉	Unknown pollen	23	19	9	0	0	1	1	28	3	27	6	35	4	32	29	35	9	1	0

第39表 地点No.11 (⑩区) から産出した花粉化石

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
樹木																						
モミ属	<i>Abies</i>	2	2	3	2	1	1	3	11	1	12	1	1	6	2	4	13	4	1	1	1	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	14	8	4	1	7	7	3	13	2	13	3	4	11	2	3	9	10	5	5	8	-
トウヒ属	<i>Picea</i>	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	-	1	1	1	-
カラマツ属	<i>Larix</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属(単葉常緑樹)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	3	1	1	1	1	2	1	1	-	1	-	-	2	1	-	1	1	-	-	-	-
マツ属(複葉常緑樹)	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	11	9	5	2	1	3	4	3	1	4	1	3	2	1	3	3	3	3	2	3	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	2	3	-	-	1	1	3	1	-	2	-	1	3	1	-	1	2	2	2	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	3	2	6	1	1	1	2	1	1	-	1	1	-	4	-	1	1	4	1	1	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	16	18	19	9	6	19	19	34	14	12	24	16	9	22	21	15	12	25	17	20	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T - C	49	42	52	54	56	43	57	55	21	51	10	38	31	41	47	25	39	51	52	63	2
ヤナギ属	<i>Salix</i>	2	-	4	2	2	-	-	-	1	2	-	-	2	3	3	2	2	1	4	1	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サウワグミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	7	15	8	15	11	6	5	7	13	9	8	3	16	10	14	9	9	7	7	27	1
カマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	12	16	28	14	21	12	9	19	11	37	14	20	7	17	15	36	16	21	7	26	2
ハンバミ属	<i>Corylus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	28	24	16	21	14	24	11	11	11	19	19	10	24	21	10	23	19	19	14	14	6
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	17	11	6	8	10	16	7	4	6	9	10	3	8	22	7	22	9	10	12	3	5
フナ属	<i>Fagus</i>	23	23	32	27	33	15	24	34	18	21	31	21	30	46	37	37	22	34	23	29	4
コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	72	76	89	68	87	53	67	68	104	49	152	63	87	164	86	138	72	76	73	128	11
クワ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	7	10	13	11	14	8	2	4	11	6	10	12	9	7	11	6	12	4	4	3	-
クリ属	<i>Castanea</i>	6	1	1	2	3	3	2	1	4	8	5	1	1	6	2	6	-	1	2	-	-
シノキ属-マテバシ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	-	-	1	1	1	-	1	1	-	-	-	1	1	2	1	1	4	1	2	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	12	13	26	16	11	21	7	19	13	20	13	24	23	27	33	25	21	23	21	23	5
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	2	1	1	6	1	1	3	-	2	2	-	3	1	1	3	-	3	9	3	4	-
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ササゲ属	<i>Eupoleia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヅラ属	<i>Coccoloba</i>	-	2	-	1	-	1	5	3	2	1	1	3	-	1	3	2	2	5	3	-	-
フウ属	<i>Liquidamber</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
コクサギ属	<i>Orixa</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アケボノ属	<i>Malotus</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	-	1	1	6	6	1	3	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	3	1	2	2	5	3	7	2	5	10	9	1	4	11	8	7	4	5	4	3	1
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	1	1	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シラカバ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マタタビ属(近似種)	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	1	3	-	-	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	2	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モクセイ科	Oleaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-
ニワトコ属(近似種)	cf. <i>Sambucus</i>	2	-	1	4	3	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本																						
ガマ属	<i>Typha</i>	1	1	-	-	-	1	-	12	5	1	1	1	5	1	5	1	5	-	1	1	-
ミクリ属	<i>Sparganium</i>	-	1	-	-	-	2	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	-	-	3	4	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
ササゲ科ガマ属	<i>Alisma</i>	4	6	3	1	2	1	1	9	-	3	1	1	1	2	1	4	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	10	13	17	27	20	2	7	3	6	17	4	14	5	6	1	47	19	11	1	-	-
クロモ	<i>Hydrilla verticillata</i> Royle.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
スプタ属-ミズオハコ属	<i>Blyxa - Ottelia</i>	1	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
イネ科	Gramineae	578	378	481	378	448	203	343	383	203	144	456	272	244	441	241	517	298	519	433	469	45
カヤツリグサ科	Cyperaceae	57	155	156	104	121	48	78	138	128	19	78	239	145	22	103	12	169	98	99	124	2
ホシクサ属	<i>Eriocaulon</i>	-	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ツユクサ属	<i>Comelina</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ属	<i>Anellema</i>	-	-	1	2	2	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	5	8	9	11	6	2	2	1	-	4	2	2	30	1	1	4	7	17	21	6	-
クワ科	Moraceae	21	9	14	32	14	19	25	14	4	37	4	14	1	23	16	10	14	30	23	12	1
キシキ属	<i>Rumex</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	1	1	1	-	-	-	-	-	-
サナエタテ属-ウナギツカミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	2	5	2	1	1	-	3	1	2	-	5	-	1	9	1	1	1	1	1	1	-
タデ属イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-
他のタデ属	other <i>Polygonum</i>	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	5	5	3	3	3	6	4	1	5	2	3	2	2	6	1	1	1	1	1	1	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	6	1	3	1	1	1	1	-	-	10	-	-	-	-	10	-	1	-	2	1	1
セツジグサ属	<i>Nymphaea</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	1	1	1	1	3	1	1	1	2	-	1	-	1	1	1	-	1	-	-	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	2	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	21	2	-	-	1	1	1	1	1	2	4	-	-	8	1	1	1	1	1	1	-
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	Rosaceae	3	-	1	1	1	2	2	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	13	2	1	1	1	2	4	-	1	5	7	1	1	2	2	5	4	2	1	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impati</i>																					







第42表 地点No.15 (⑭区) から産出した花粉化石

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
樹木														
モミ属	<i>Abies</i>	-	4	-	3	-	-	4	1	-	6	2	2	3
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	6	5	14	-	5	8	1	1	11	10	2	8
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4	-	2	3
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	3	12	1	8	-	1	7	1	-	1	3	6	6
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3	2	1	2	-	-	6	2	-	1	2	-	2
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	5	-	1	-	-	1	2	-	1	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	-	1	4	99	-	13	9	28	28	31	18	15	13
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	-	2	3	182	-	59	22	40	19	50	6	22	36
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	-	-	8	-	-	2	5	-	1	-	1	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	-	1	-	25	-	3	9	3	1	10	10	10	7
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	-	1	1	65	-	18	33	24	4	27	16	37	22
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	6	2	33	-	4	18	17	3	9	10	18	2
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	2	6	20	-	3	9	8	4	5	3	9	8
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	2	18	51	-	31	16	30	9	33	31	36	44
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	6	9	245	-	68	49	108	122	106	57	74	80
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	1	25	-	5	2	16	12	15	4	11	6
クリ属	<i>Castanea</i>	-	3	-	14	-	3	2	1	10	1	1	3	1
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	-	-	1	7	-	1	1	4	5	2	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	2	4	32	-	14	32	16	3	27	34	48	21
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	-	-	-	1	1	1	-	3	2	5	-
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	1	2	2	-	-	-	-
コクサギ属	<i>Orixa</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	4	-	2	1	2	1	1	1	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	1	-	30	-	2	12	6	8	6	1	-	4
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
マタタビ属	<i>Actinidia</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	1
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	3	-
草本														
ガマ属	<i>Typha</i>	-	-	-	1	-	3	4	1	2	-	1	2	-
ガマ属-ミクリ属	<i>Typha - Sparganium</i>	-	-	-	1	-	-	3	-	2	-	1	-	-
ビルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	3	-	12	-	-	2	-	10	-	1	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	2	1	59	-	22	12	21	-	38	9	10	2
イネ科	Gramineae	2	320	72	920	2	217	120	162	65	444	449	443	418
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	7	-	217	-	50	19	51	50	96	12	46	29
ホシクサ属	<i>Eriocaulon</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ属	<i>Anellema</i>	-	-	-	-	-	1	-	6	-	-	-	-	-
ミスアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	7	2	21	-	4	3	6	-	13	10	15	9
クワ科	Moraceae	-	-	-	13	-	21	16	3	-	2	-	14	2
タデ属ミチヤナギ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Avicularia</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	2	-	1	-	1	1	-	1	-	-	1	-
タデ属イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	2	1	5	-	1	1	-	-	5	1	2	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	27	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	1	6	-	1	-	-	-	1	1	1	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
アブラナ科	Cruciferae	2	2	-	3	-	-	-	-	-	1	2	-	-
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	2	-	1	-	-	1	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	-	6	-	10	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	-	6	-	3	-	4	11	2	-	1	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキツル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	-	-	-	-	-	1	4	4	8	-	-	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	-	13	9	172	-	20	12	30	6	27	12	20	15
他のクク亜科	other Tubuliflorae	-	2	-	16	-	-	-	2	-	-	2	-	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	-	-	2	-	-	-	-	-	1	1	1	-
シダ植物														
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	-	1	-	1	-	1	-	1	4	1	1	1	1
単条型孢子	Monolete spore	-	3	-	11	1	4	33	1	1	1	6	3	5
三條型孢子	Trilete spore	2	-	-	4	-	2	1	-	-	1	-	-	1
樹木花粉	Arboreal pollen	7	52	56	880	0	233	249	318	236	359	212	305	271
草本花粉	Nonarboreal pollen	6	399	86	1474	2	347	193	296	144	643	500	559	481
シダ植物孢子	Spores	2	4	0	16	1	7	34	2	5	3	7	4	7
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	15	455	142	2370	3	587	476	616	385	1005	719	868	759
不明花粉	Unknown pollen	0	22	8	76	2	47	25	28	5	37	5	28	46

第43表 地点No.16 (⑭区深堀)・地点No.17 (⑭区S D 3004) から産出した花粉化石

和名	学名	⑭ 深堀										S D 3004			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4
<b>樹木</b>															
モミ属	<i>Abies</i>	3	11	-	-	-	-	-	2	-	13	1	-	1	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	9	20	3	5	-	1	-	4	1	20	8	-	2	4
トウヒ属	<i>Picea</i>	1	2	-	-	-	-	1	2	-	4	2	-	1	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	-	-	-	-	-	-	1	2	-	1	-	-	1	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	6	12	-	-	-	-	2	7	-	2	2	-	1	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3	2	-	2	-	3	2	1	1	14	2	-	2	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	4	2	1	-	-	-	2	1	-	-	6	-	-	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	41	20	1	1	1	-	1	12	9	3	32	-	33	26
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.- C.	73	49	-	1	-	-	18	20	20	13	35	-	65	54
ヤナギ属	<i>Salix</i>	2	7	-	-	-	-	13	3	3	2	3	-	9	2
ノグルミ属	<i>Platycarya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	14	42	-	-	-	-	77	47	1	11	18	-	14	6
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	47	55	-	-	-	-	33	28	-	24	25	1	51	13
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	16	20	2	1	1	-	10	1	6	14	20	-	26	7
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	7	13	3	2	-	2	7	1	2	7	4	-	8	4
ブナ属	<i>Fagus</i>	61	51	1	-	-	1	13	20	8	4	46	-	35	15
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	202	126	7	5	1	3	282	89	124	47	109	-	143	72
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	25	11	-	-	-	-	5	1	7	2	13	-	10	12
クリ属	<i>Castanea</i>	7	14	4	4	1	-	12	14	9	21	1	-	14	12
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	1	1	-	-	-	-	1	1	1	-	1	-	4	4
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	30	49	2	1	2	3	80	88	4	46	18	-	31	1
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	3	7	-	-	-	-	9	1	1	3	2	-	6	1
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	18	1	-	2	1	-	9	5
サクラ属近似種	cf. <i>Prunus</i>	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	1	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	3	2	-	-	-	-	28	3	-	11	1	-	5	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	8	5	1	-	-	-	49	33	11	58	5	-	19	6
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	1	-	1	-	-	1	-	-	7	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	2	-	-	-	-	6	2	1	5	-	-	3	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-
	other Oleaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>草本</b>															
ガマ属	<i>Typha</i>	-	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマ属-ミクリ属	<i>Typha - Sparganium</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	7	37	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	9	3
イネ科	Gramineae	701	548	6	17	6	24	38	51	20	29	499	1	485	188
カヤツリグサ科	Cyperaceae	44	161	-	4	-	-	5	26	-	1	31	-	52	10
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	17	45	-	-	-	-	-	-	-	-	18	-	15	-
クワ科	Moraceae	1	6	-	-	-	-	-	7	-	3	8	-	27	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	2	-	-	-	-	-	9	-	-	1	-	4	-
タデ属イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	1	-	-	-	-	4	1	-	2	2	-	3	3
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	5	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	2	2
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	3	1
バラ科	Rosaceae	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	-	-	-	-	-	1	-	7	1	-	-	-	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	-	-	-	25	58	1	-	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	3	-
アリントウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	-	2	1	3	12	-	1	-	-	1	1
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ゴキツル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	-	11	-	-	-	5	4	59	11	1	1	-	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	33	35	3	3	1	3	15	9	4	36	11	-	54	16
他のキク亜科	other Tubuliflorae	3	-	4	1	-	1	-	2	-	4	4	-	1	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	-	1	-	2	1	-	-	-	-	5	1	-	1	1
<b>シダ植物</b>															
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	1
単糸型孢子	Monolete spore	6	7	14	6	10	5	18	18	-	33	8	-	8	7
三糸型孢子	Trilete spore	1	-	-	1	-	1	3	4	-	1	2	-	3	-
<b>樹木花粉</b>															
樹木花粉	Arboreal pollen	568	525	25	23	6	13	676	387	213	342	357	1	495	248
草本花粉	Nonarboreal pollen	810	872	13	27	9	36	98	227	55	83	587	1	664	228
シダ植物孢子	Spores	8	10	14	7	10	6	21	22	0	34	11	0	13	8
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	1386	1407	52	57	25	55	795	636	268	459	955	2	1172	484
<b>不明花粉</b>															
不明花粉	Unknown pollen	36	18	21	10	8	17	29	28	35	34	19	0	35	26

第44表 地点No.18 (㊶区) から産出した花粉化石

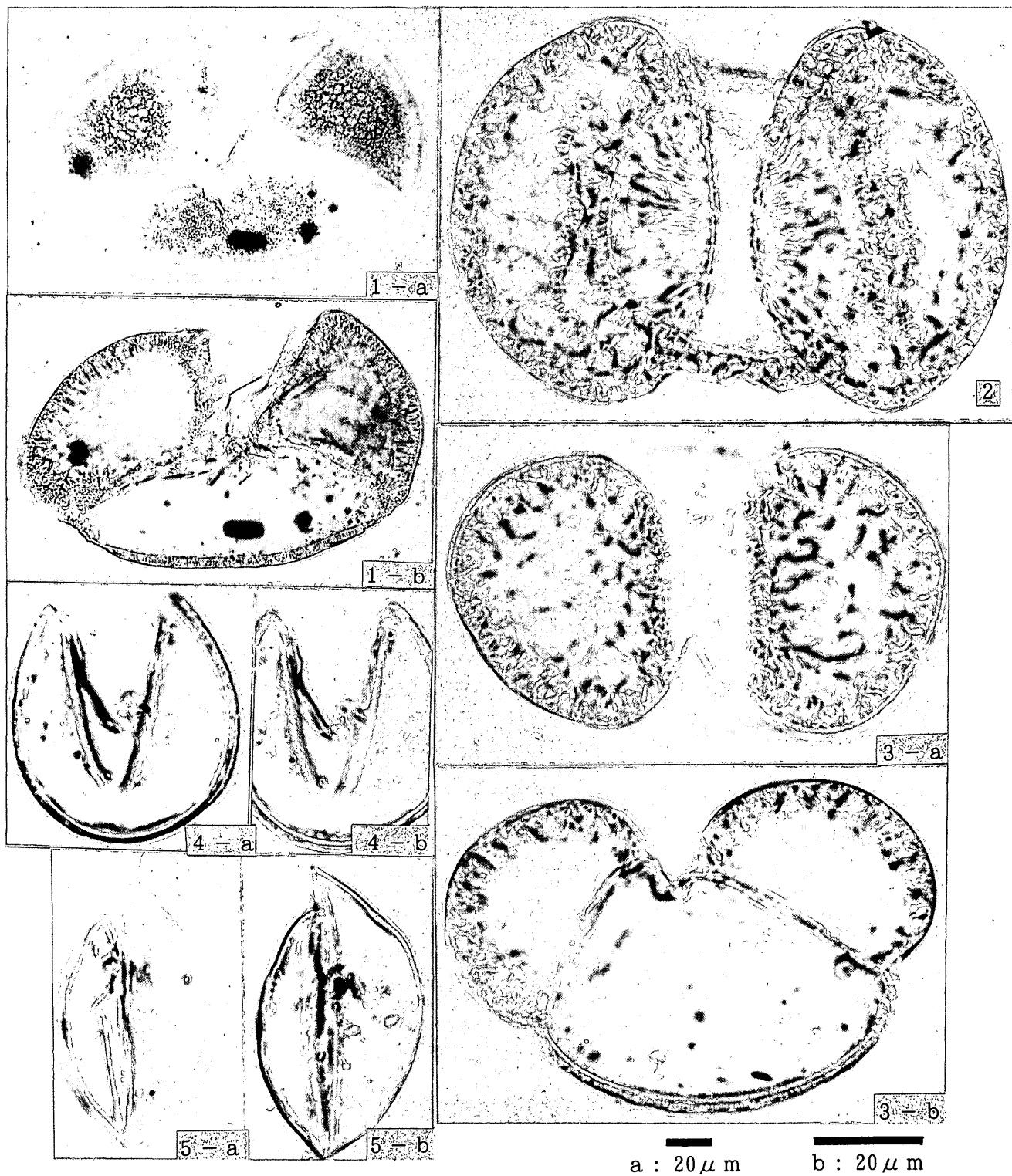
和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
樹木																			
モミ属	<i>Abies</i>	1	9	6	2	5	1	3	2	4	2	2	-	1	1	1	1	2	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	3	2	7	1	1	2	4	1	2	1	-	1	2	1	2	1	3	1
トウヒ属	<i>Picea</i>	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-
カラマツ属	<i>Larix</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属単雄管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複雄管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	2	2	1	-	1	5	-	6	2	3	7	2	1	2	1	1	2	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	-	2	1	3	3	3	1	1	1	1	1	-	1	-	-	1	-	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	1	2	1	2	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	7	14	15	2	7	9	11	8	5	12	11	9	4	4	7	4	2	9
イチイ科-イチイ科-ヒノキ科	T.- C.	26	15	16	3	6	17	8	8	8	9	18	16	5	1	6	3	-	5
ヤマギ属	<i>Salix</i>	6	1	-	-	-	3	-	10	-	5	10	21	5	3	13	2	1	9
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノグミ属	<i>Platycarya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サウグルミ属-ウルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	17	10	16	8	11	23	24	20	20	22	20	9	18	16	23	26	22	22
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	16	14	23	4	5	13	5	14	13	14	23	15	14	14	28	12	14	21
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	12	12	11	8	8	3	4	8	7	13	11	10	9	10	12	5	11	16
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	16	7	13	5	7	3	5	7	3	10	3	16	8	3	17	4	2	8
ブナ属	<i>Fagus</i>	16	6	8	-	1	3	10	4	14	5	12	4	8	8	16	10	8	10
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	61	67	67	37	72	55	98	72	91	76	59	59	100	112	87	81	48	95
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	6	2	1	-	2	1	2	-	5	1	3	4	2	9	7	5	4	8
クリ属	<i>Castanea</i>	14	3	3	2	2	-	5	5	4	12	15	25	8	17	15	16	58	21
シノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	2	1	-	-	2
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	23	38	28	29	58	57	38	28	38	28	29	12	24	34	18	27	37	20
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-aphanathe</i>	2	-	3	-	-	-	-	-	3	1	4	4	2	3	2	3	3	6
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フサクラ属	<i>Euptelea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カウラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	2	-	-	-	-	-	-	4	-	1	-	1	5	3	4	-	2	3
フウ属	<i>Liquidamber</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
サクラ属近似種	cf. <i>Prunus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
コクサギ属	<i>Orixa</i>	1	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	1
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1
カエデ属	<i>Acer</i>	1	1	2	1	2	8	3	1	1	-	1	2	-	2	7	7	9	4
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	9	7	2	3	6	4	22	7	10	19	9	9	5	6	7	7	9	4
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
マタタビ属近似種	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジンチョウゲ科	Thymelabaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	2	1	1	1
ウコギ科	Araliaceae	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクノキ属	<i>Ligustrum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
クサギ属	<i>Clerodendron</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガズミ属	<i>Viburnum</i>	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タニウツギ属	<i>Weigela</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本																			
ガマ属	<i>Typha</i>	17	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	3	-	1	3
ミクリ属	<i>Sparganium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒルシロ属	<i>Potamogeton</i>	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-
サジメガサ属	<i>Alisma</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	242	257	273	199	325	382	153	101	114	136	117	184	81	116	106	118	25	184
カヤツリグサ科	Cyperaceae	205	227	36	14	18	36	35	55	66	148	36	38	84	155	102	39	50	164
イボクサ属	<i>Anilema</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	4
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	16	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	5	5	2	-	1	2	1	4	1	20	19	19	1	2	5	1	3	4
ギンギン属	<i>Rumex</i>	4	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	1
タデ属イブトラノオ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Bistorta</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエダ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	1	-	-	2	3	3	-	4	2	1	2	-	1	1	1	2	1	1
タデ属イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	1	1	-	1	1	1	1	1	1	-	-	1	1	1	-	1	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
コウホネ属	<i>Nuphar</i>	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	-	2	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-	4	1	2	-	2
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	1	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	1	1	-	-	2	-
アブラナ科	Cruciferae	-	1	1	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	1	-	-	-	-	-	4	2	2	1	-	3	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	1	-	-	1	-	4	24	-	7	2	13	5	4	16	15	17
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒシ属	<i>Trapa</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	-	4	2	-	-	4	1	4	1	1	16	7	14	17	3	4	13
シソ科	Labiatae	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	6	1
ヤエムグラ属-アカネ属	<i>Gallium - Rubia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴキツル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	12	1	1	-	2	2	12	61	12	19	9	29	6	18	84	10	1	21
ホタルブクロ属-ツリガネニンジン属	<i>Campanula - Adenophora</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	16	18	19	27	28	12	6	2	4	4	8	9	7	13	9	5	8	9
他のクキ亜科	other Tubuliflorae	1	1	1	3	3	2	-	1	-	1	-	1	1	-	-	-	2	-
タンポポ科	Liguliflorae	-	1	1	3	-	2	2	-	-	-	-	1	-	1	1	-	1	1
シダ植物																			
サシシヨウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1	1	1	-
単条型胞子	Monolete spore	6	18	17	30	36	25	17	6	3	8	8	8	16	4	8	15	26	4
三条型胞子	Trilete spore	-	2	1	3	1	-	-	1	-	1	1	-	-	-				

第45表 地点No.18 (16区) から産出した花粉化石

和名	学名	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
<b>樹木</b>												
モミ属	<i>Abies</i>	5	-	4	-	2	2	1	3	-	3	-
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	-	6	1	-	2	1	4	-	7	-
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カラマツ属	<i>Larix</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	4	2	5	-	-	1	2	4	1	5	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3	-	1	-	-	-	-	1	1	3	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	1	2	-	-	4	1	3	2	6	5
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	2	-	1	-	-	1	-	4	-	3	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. C.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	3	-	-	-	2	2	4	2	1	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ノグルス属	<i>Platycarya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	12	2	13	-	1	14	18	26	11	10	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	12	2	10	-	-	5	5	25	1	18	1
ハンバシ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	19	6	21	6	5	20	15	31	12	22	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	3	8	7	3	10	28	7	15	10	8	5
ブナ属	<i>Fagus</i>	4	2	9	-	-	4	13	8	8	4	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	46	12	49	13	25	88	118	69	92	76	5
コナラ属アカシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	4	-	2	-	-	-	-	-	1	-	3
クリ属	<i>Castanea</i>	46	20	41	4	7	5	6	17	17	22	8
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	16	10	12	4	3	19	32	23	32	20	4
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	1	-	-	-	-	1	2	3	4	-	-
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
フサザクラ属	<i>Euptelea</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	1	3	2	-	-
フウ属	<i>Liquidamber</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サクラ属近似種	cf. <i>Prunus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コクサギ属	<i>Orixa</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	3	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	3	-	-	-	-	7	3	3	2	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	28	2	20	1	2	7	8	9	43	19	1
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	1	1	-	-	1	-	2	1	3	-
マタタビ属近似種	cf. <i>Actinidia</i>	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	3	-	1	-	-	-	1	-	2	2	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ツツジ科	Ericaceae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クサギ属	<i>Clerodendron</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
タニウツギ属	<i>Weigela</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<b>草本</b>												
ガマ属	<i>Typha</i>	2	-	-	-	-	1	1	1	-	1	-
ミクリ属	<i>Sparganium</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモガカ属	<i>Alisma</i>	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
オモガカ属	<i>Sagittaria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	39	25	9	10	7	41	57	53	24	21	7
カヤツリグサ科	Cyperaceae	13	13	-	3	124	211	211	123	101	11	3
イボクサ属	<i>Anellema</i>	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	11	1	-	-	-	1	-	4	2	4	-
ギンギン属	<i>Rumex</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
タデ属イブキトラノオ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Bistorta</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	2	-	-	-	1	1	-	-	-	-
タデ属イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-	-	-	-	5	1	-	1	2	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-
コウホネ属	<i>Nuphar</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	2	2	3	-	1	7	1	1	-	2	2
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
アブラナ科	Cruciferae	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-
他のバラ科	other Rosaceae	2	-	1	-	-	2	1	-	-	2	-
マメ科	Leguminosae	11	-	5	1	1	3	2	3	-	2	-
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	3	-	-	-	-	1	-	-	-	1
キカングサ属	<i>Rotala</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒシ属	<i>Trapa</i>	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	3	-	-	3	11	1	1	1	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヤエムグラ属-アカネ属	<i>Galium - Rubia</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	-
ゴキウ属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	3	1	1	1	1	1	7	6	4	-	-
ホタルブクロ属-ツリガネニンジン属	<i>Campanula - Adenophora</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	42	10	5	13	8	17	4	12	1	29	18
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	2	3	-	4	1	-	1	-	-	7
タンポポ科	Liguliflorae	2	6	4	4	3	-	2	1	1	1	12
<b>シダ植物</b>												
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
単葉型胞子	Monolete spore	33	18	43	26	20	46	10	12	23	36	34
三葉型胞子	Trilete spore	2	5	-	2	1	3	-	1	2	2	2
<b>角緑色藻類</b>												
	<i>Botryococcus braunii</i> Kutzing	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>樹木花粉</b>												
	Arboreal pollen	223	68	206	34	57	213	239	263	244	241	31
<b>草本花粉</b>												
	Nonarboreal pollen	135	66	36	35	149	297	302	209	137	78	50
<b>シダ植物胞子</b>												
	Spores	36	23	43	28	21	49	11	13	25	39	36
<b>花粉・胞子総数</b>												
	Total Pollen & Spores	394	157	285	97	227	559	552	485	406	358	117
<b>不明花粉</b>												
	Unknown pollen	30	10	25	10	19	16	8	19	18	35	9

第46表 地点No.19 (㊶区) ・地点No.20 (㊶区) から産出した花粉化石

和名	学名	地点No.19				地点No.20						
		1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7
<b>樹木</b>												
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	3	2	2	1	1	5	1	2	1	6	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	2	9	1	1	2	1	8	5	5	3
トウヒ属	<i>Picea</i>	2	-	1	1	-	1	-	1	1	-	-
カラマツ属	<i>Larix</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	8	1	2	1	1	3	3	4	1	2	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	4	1	1	-	-	2	1	1	-	3	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	16	10	12	11	14	9	7	17	10	9	15
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	17	22	8	18	20	11	8	14	14	11	9
ヤナギ属	<i>Salix</i>	2	5	7	4	1	4	3	-	2	-	3
ペカン属	<i>Carya</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	12	5	18	8	3	11	9	16	10	20	14
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	8	23	14	26	23	30	17	18	17	9	12
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	17	21	16	26	16	20	17	17	15	19	31
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	10	9	13	9	11	7	5	4	11	12	6
ブナ属	<i>Fagus</i>	20	29	25	12	16	28	35	18	20	17	21
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	68	61	101	91	73	78	101	84	87	91	81
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	5	8	4	14	12	2	7	8	7	7	5
クリ属	<i>Castanea</i>	12	2	2	4	-	1	-	3	1	5	-
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	3	1	-	1	1	1	2	2	1	-	1
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	10	18	19	19	11	18	11	17	18	29	13
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	7	1	3	2	1	1	2	2	-	1
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	1	1	4	4	3	-	-	2	3	1	3
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
コクサギ属	<i>Orixa</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	1	15	2	6	1	5	2	2	-	8	7
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-
マタタビ属近似種	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ウコギ科	Araliaceae	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ガズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>草本</b>												
ガマ属	<i>Typha</i>	1	10	15	1	1	24	8	6	10	9	1
ミクリ属	<i>Sparganium</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	3	-	2	-	3	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	1	-	1	-	-	-	-	2	1	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	2	4	5	3	2	5	2	6	8	3	8
イネ科	Gramineae	667	229	246	229	271	232	257	402	244	266	302
カヤツリグサ科	Cyperaceae	53	93	298	27	46	136	31	105	91	101	125
イボクサ属	<i>Anelima</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	3
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	5	2	11	15	13	10	8	11	8	9	4
クワ科	Moraceae	4	12	5	16	22	4	4	3	7	2	9
ギンギン属	<i>Rumex</i>	4	-	1	-	-	3	1	-	1	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinoacaulon</i>	2	-	1	1	-	1	1	3	-	-	3
タデ属イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	12	1	1	2	2	1	1	1	-	1	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	17	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1
コウホネ属	<i>Nuphar</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	2	-	-	-	1	1	-	-	1	1	1
他のキンポウグサ科	other Ranunculaceae	1	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	91	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	8	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	4	7	4	6	3	3	-	3	2	-	4
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	1	-	2	-	-	-	-	-	3	1
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	2	-	1	-	1	-	1	1	-	3	-
ヒシ属	<i>Trapa</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
フサモ属	<i>Myriophyllum</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	1	-	2	-	-	-	-	2	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤエムグラ属-アカネ属	<i>Galium - Rubia</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ゴキツル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	-	1	3	-	1	2	1	1	1	3	2
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	66	39	19	28	24	13	8	15	24	20	15
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	1	1	1	-	-	1	1	1	-	1
タンポポ科	Liguliflorae	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<b>シダ植物</b>												
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	-	-	1	1	-	1	-	1	1	1	-
単条型胞子	Monolete spore	23	9	6	7	2	1	2	3	8	5	6
三条型胞子	Trilete spore	3	-	1	1	1	1	-	1	-	-	-
<b>黄緑色藻類</b>												
	<i>Botryococcus braunii</i> Kutzing	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<b>樹木花粉</b>												
	Arboreal pollen	230	246	264	262	213	243	232	244	230	256	234
<b>草本花粉</b>												
	Nonarboreal pollen	952	405	616	340	390	439	326	560	403	422	483
<b>シダ植物胞子</b>												
	Spores	26	9	8	9	3	3	2	5	9	6	6
<b>花粉・胞子総数</b>												
	Total Pollen & Spores	1208	660	888	611	606	685	560	809	642	684	723
<b>不明花粉</b>												
	Unknown pollen	37	9	17	12	14	11	61	12	8	13	32



付章図版1 産出した花粉化石 (スケール; a : 1, b : 2 ~ 5)

1 : トウヒ属、地点No.12 (㊸) 試料18、PAL. MN 800

2 : マツ属単維管束亜属、地点No.12 (㊸) 試料18、PAL. MN799

3 : マツ属複維管束亜属、地点No. 6 (㊸-B) 試料1、PAL. MN794

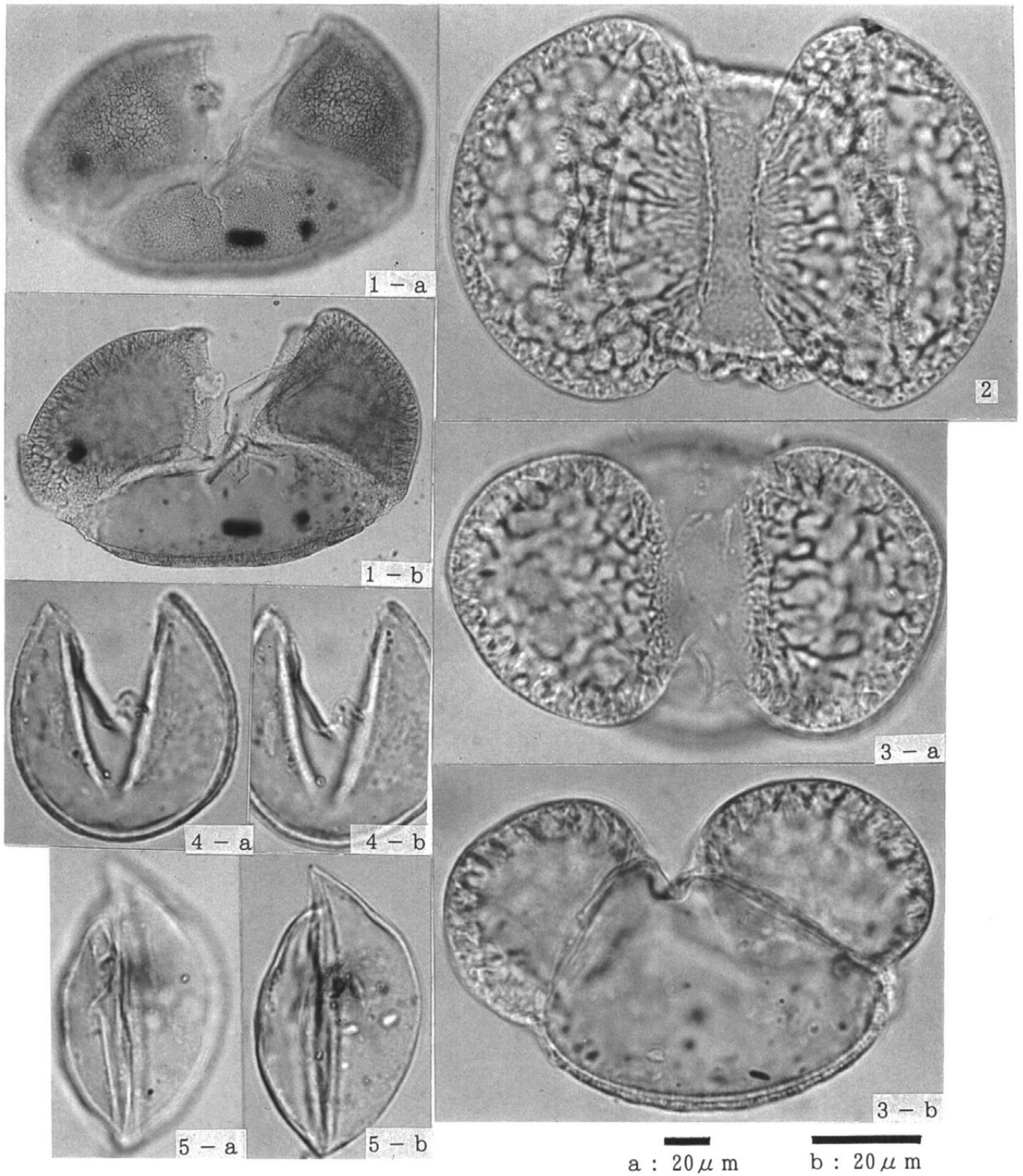
4 : スギ属、地点No. 6 (㊸-B) 試料1、PAL. MN796

5 : イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、地点No.15 (㊸) 試料6、PAL. MN805

第46表 地点No.19 (㊶区) ・地点No.20 (㊶区) から産出した花粉化石

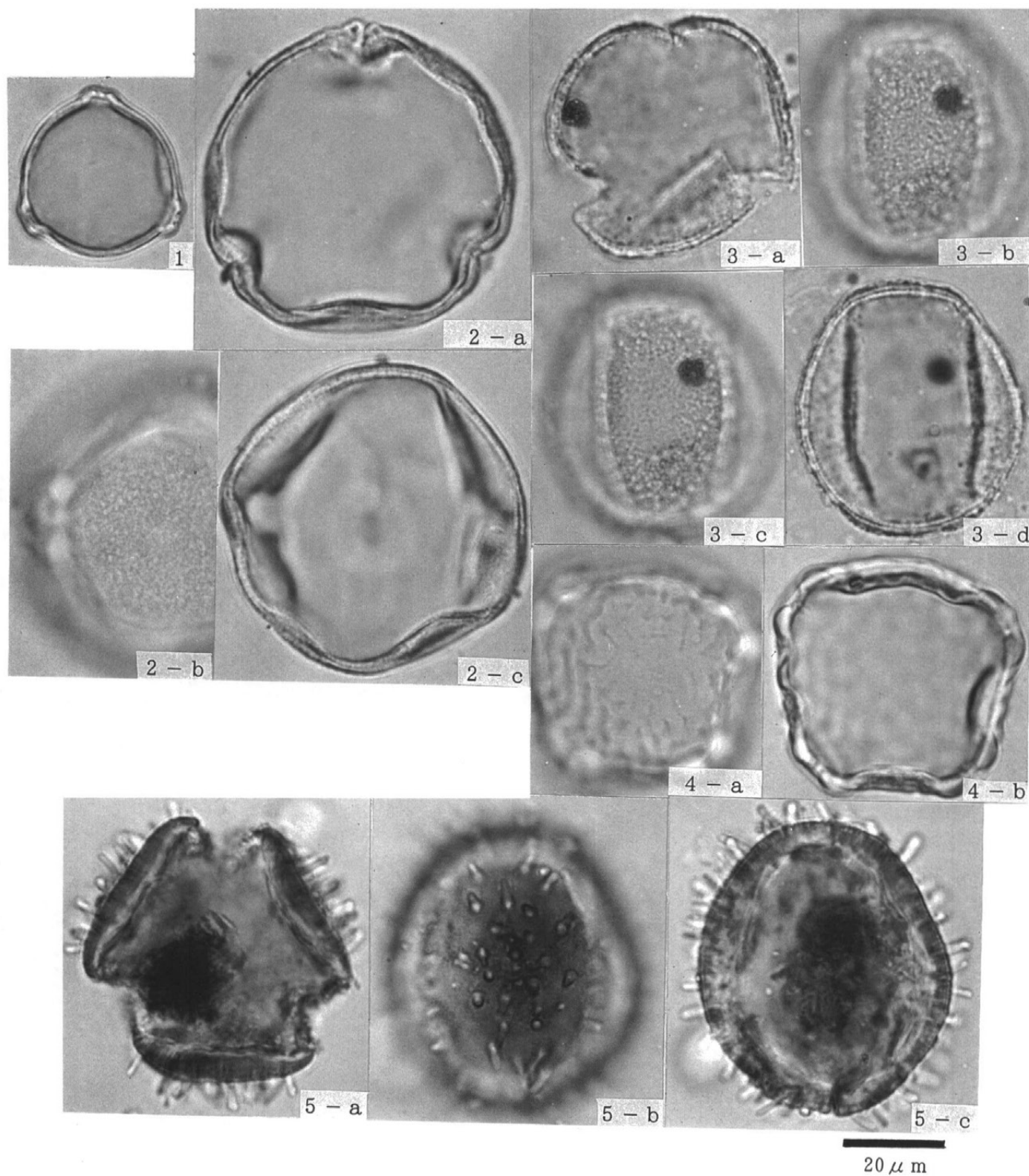
和名	学名	地点No.19				地点No.20						
		1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	7
<b>樹木</b>												
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	3	2	2	1	1	5	1	2	1	6	1
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	2	9	1	1	2	1	8	5	5	3
トウヒ属	<i>Picea</i>	2	-	1	1	-	1	-	1	1	-	-
カラマツ属	<i>Larix</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	8	1	2	1	1	3	3	4	1	2	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	4	1	1	-	-	2	1	1	-	3	-
コウヤマキ属	<i>Soiadopitys</i>	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	16	10	12	11	14	9	7	17	10	9	15
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	17	22	8	18	20	11	8	14	14	11	9
ヤナギ属	<i>Salix</i>	2	5	7	4	1	4	3	-	2	-	3
ベカン属	<i>Carya</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サウワグミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	12	5	18	8	3	11	9	16	10	20	14
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	8	23	14	26	23	30	17	18	17	9	12
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	17	21	16	26	16	20	17	17	15	19	31
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	10	9	13	9	11	7	5	4	11	12	6
ブナ属	<i>Fagus</i>	20	29	25	12	16	28	35	18	20	17	21
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	66	61	101	91	73	78	101	84	87	91	81
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	5	8	4	14	12	2	7	8	7	7	5
クリ属	<i>Castanea</i>	12	2	2	4	-	1	-	3	1	5	-
シノノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis-Pasania</i>	3	1	-	1	1	1	2	2	1	-	1
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	10	18	19	19	11	18	11	17	18	29	13
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	7	1	3	2	1	1	2	2	-	1
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	1	1	4	4	3	-	-	2	3	1	3
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
コクサギ属	<i>Orixa</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
ユズリハ属	<i>Daphniphyllum</i>	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	<i>Mallotus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	1	15	2	6	1	5	2	2	-	8	7
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
シナノキ属	<i>Tilia</i>	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-
マタタビ属近似種	cf. <i>Actinidia</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ウコギ科	Araliaceae	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<b>草本</b>												
ガマ属	<i>Typha</i>	1	10	15	1	1	24	8	6	10	9	1
ミクリ属	<i>Sparganium</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-
ヒルムシロ属	<i>Potamogeton</i>	-	3	-	2	-	3	-	-	-	-	-
サジオモガカ属	<i>Alisma</i>	1	-	1	-	-	-	-	2	1	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	2	4	5	3	2	5	2	6	8	3	8
イネ科	Gramineae	667	229	246	229	271	232	257	402	244	266	302
カヤツリグサ科	Cyperaceae	53	93	298	27	46	136	31	105	91	101	125
イボクサ属	<i>Anellema</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	3
ミスアオイ属	<i>Monochoria</i>	5	2	11	15	13	10	8	11	8	9	4
クワ科	Moraceae	4	12	5	16	22	4	4	3	7	2	9
キシギシ属	<i>Rumex</i>	4	-	1	-	-	3	1	-	1	-	-
サナエデ属-ウナギツカミ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	2	-	1	1	-	1	1	3	-	-	3
タデ属イタドリ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	12	1	1	2	2	1	1	1	-	1	2
ナデシコ科	Caryophyllaceae	17	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1
コウボネ属	<i>Nuphar</i>	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	1	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	91	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	8	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	4	7	4	6	3	3	-	3	2	-	4
マメ科	Leguminosae	-	1	-	2	-	-	-	-	-	3	1
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	2	-	1	-	1	-	1	1	-	3	-
キカシグサ属	<i>Rotula</i>	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-
ヒシ属	<i>Trapa</i>	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
フサモ属	<i>Myriophyllum</i>	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	1	1	-	2	-	-	-	-	2	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤエムグラ属-アカネ属	<i>Galium - Rubia</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ゴキツル属-アマチャヅル属	<i>Actinostemma-Gynostemma</i>	-	1	3	-	1	2	1	1	1	3	2
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	66	39	19	28	24	13	8	15	24	20	15
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	1	1	1	-	-	1	1	1	-	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<b>シダ植物</b>												
サンショウモ	<i>Salvinia natans</i> (L.) All.	-	-	1	1	-	1	-	1	1	1	-
単葉型孢子	Monolete spore	23	9	6	7	2	1	2	3	8	5	6
三葉型孢子	Trilete spore	3	-	1	1	1	1	-	1	-	-	-
<b>黄緑色藻類</b>												
	<i>Botryococcus braunii</i> Kutzing	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<b>樹木花粉</b>												
樹木花粉	Arboreal pollen	230	246	264	262	213	243	232	244	230	256	234
草本花粉	Nonarboreal pollen	952	405	616	340	390	439	326	560	403	422	483
シダ植物孢子	Spores	26	9	8	9	3	3	2	5	9	6	6
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	1208	660	888	611	606	685	560	809	642	684	723
<b>不明花粉</b>												
	Unknown pollen	37	9	17	12	14	11	61	12	8	13	32





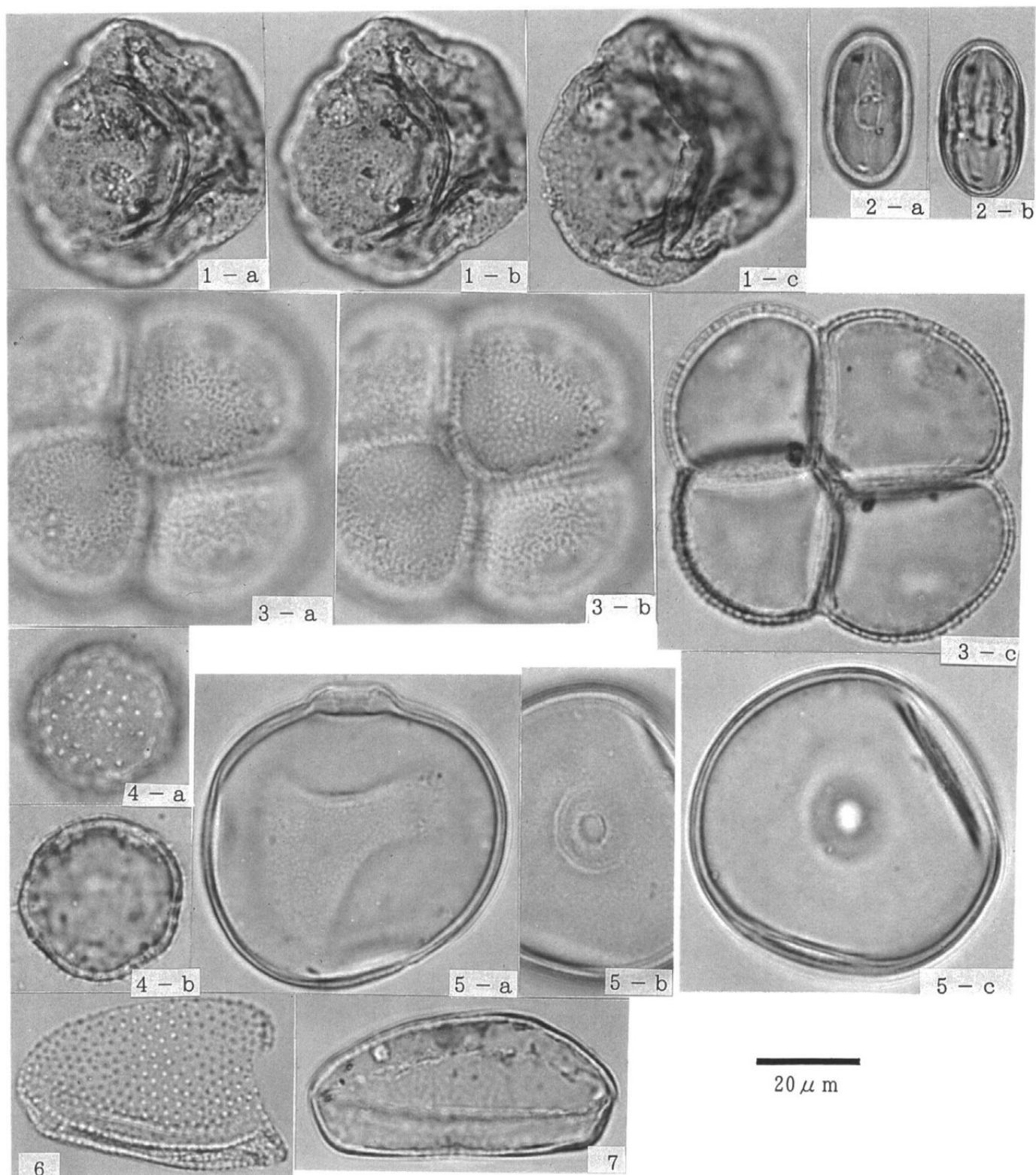
付章図版1 産出した花粉化石 (スケール; a : 1, b : 2~5)

- 1 : トウヒ属、地点No.12 (㊱) 試料18、PAL. MN 800
- 2 : マツ属単維管束亜属、地点No.12 (㊱) 試料18、PAL. MN799
- 3 : マツ属複維管束亜属、地点No. 6 (㊱-B) 試料1、PAL. MN794
- 4 : スギ属、地点No. 6 (㊱-B) 試料1、PAL. MN796
- 5 : イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、地点No.15 (㊱) 試料6、PAL. MN805



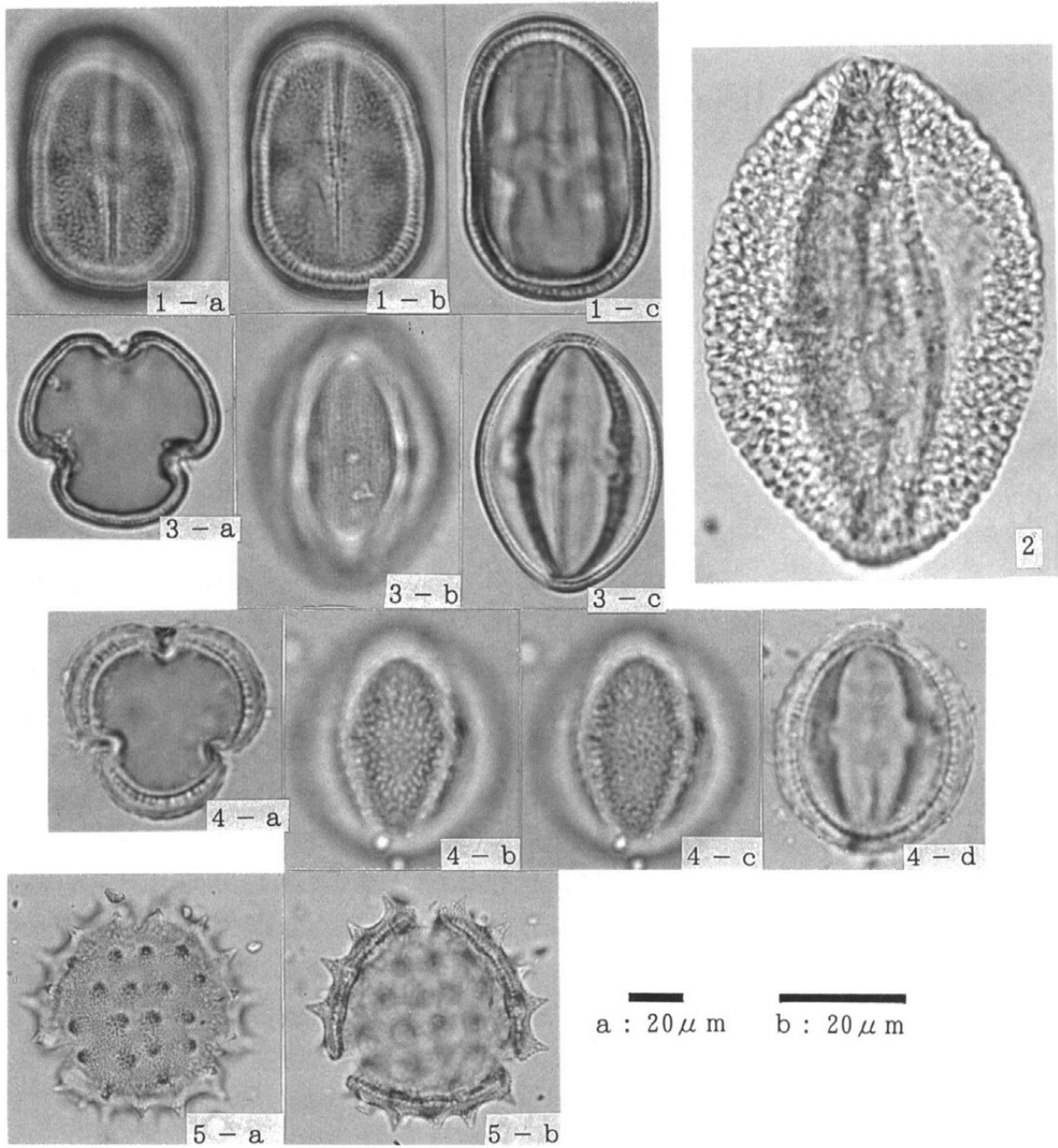
付章図版2 産出した花粉化石

- 1 : クマシテ属-アサダ属、地点No.16 (⑭深堀) 試料2、PAL. MN809
- 2 : ブナ属、地点No. 3 (②-1) 試料10、PAL. MN790
- 3 : コナラ属コナラ亜属、地点No. 3 (②-1) 試料10、PAL. MN791
- 4 : ニレ属-ケヤキ属、地点No.15 (⑭) 試料11、PAL. MN803
- 5 : ヤドリギ属、地点No. 9 (⑧-2) 試料15、PAL. MN616



付章図版3 産出した花粉化石

- 1 : フウ属、地点No. 9 (⑧-2) 試料 3、PAL. MN619
- 2 : トチノキ属、地点No. 16 (⑭深堀) 試料 2、PAL. MN808
- 3 : ガマ属、地点No. 10 (⑩縄文トレンチ) 試料 2、PAL. MN781
- 4 : オモダカ属、地点No. 4 (④) 試料 7、PAL. MN797
- 5 : イネ科、地点No. 3 (②-1) 試料 10、PAL. MN792
- 6 : イボクサ属、地点No. 4 (④) 試料 18、PAL. MN384
- 7 : ミズアオイ属、地点No. 16 (⑭深堀) 試料 2、PAL. MN807



付章図版4 産出した花粉化石 (スケール; a : 5, b : 1~4)  
 1 : タデ属ミチヤナギ節、地点No. 6 (⑥-B) 試料1、PAL. MN400  
 2 : ソバ属、地点No. 3 (②-1) 試料2、PAI. MN789  
 3 : ゴキゾル属-アマチャヅル属、地点No. 15 (⑭) 試料7、PAL. MN806  
 4 : ヨモギ属、地点No. 10 (⑩縄文トレンチ) 試料4、PAL. MN785  
 5 : キク亜科、地点No. 10 (⑩縄文トレンチ) 試料4、PAL. MN786

## 第2節 石川条里遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広・吉川純子（パレオ・ラボ）

### 1 はじめに

石川条里遺跡は長野市篠ノ井に所在し、千曲川が形成する自然堤防の西側の後背湿地に立地している。本遺跡は微高地（④・⑤・⑦・⑧・⑩区）と低湿地（①～③・⑥・⑪～⑬区）からなる地形であることが確認されており、微高地では、縄文時代、古墳時代、中世の3時期の遺構が確認され、低湿地では、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代、平安時代の水田遺構が確認されている。今回は、本遺跡周辺の古植生および栽培植物を明らかにする目的で大型植物化石の検討を行った。

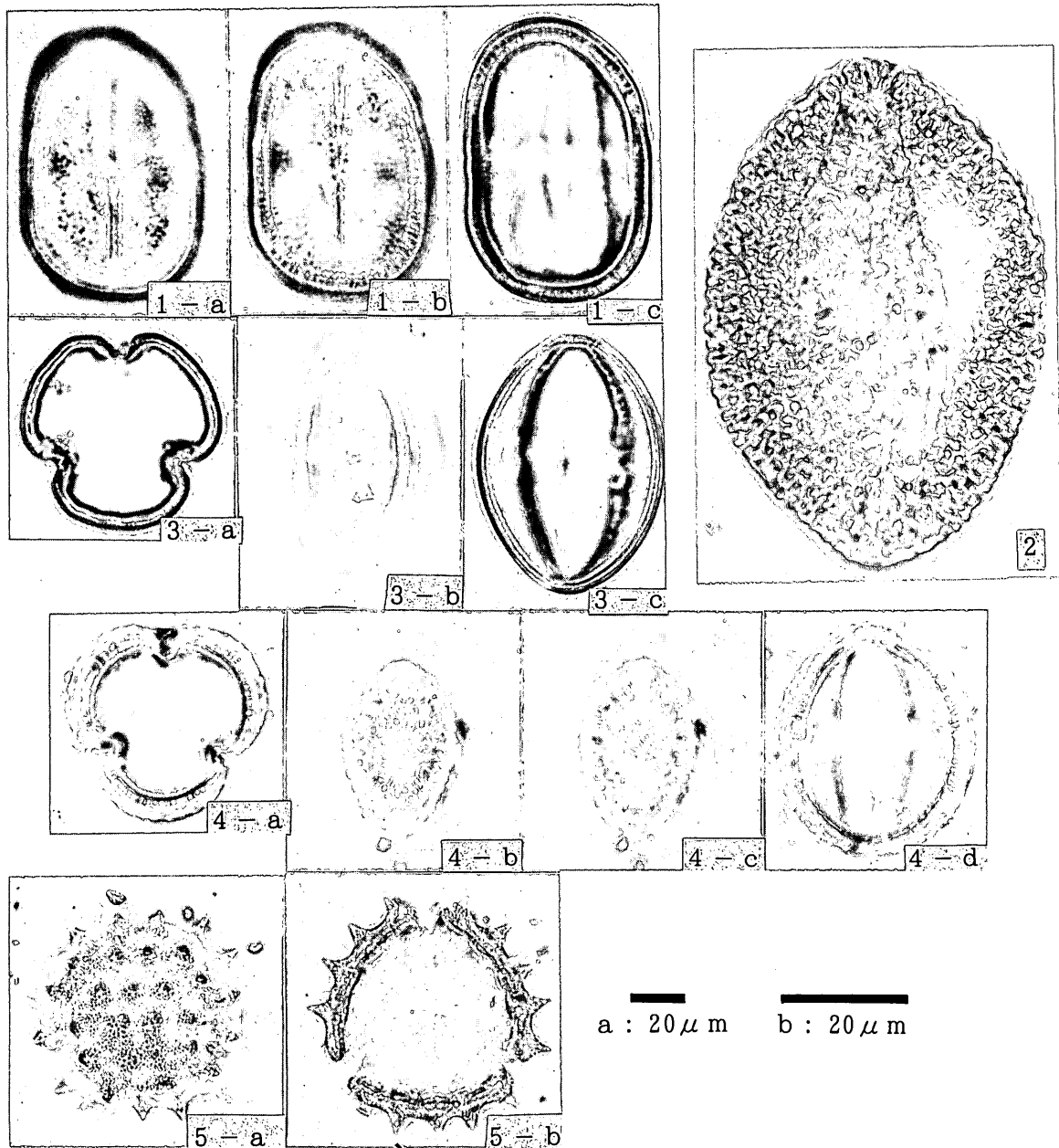
### 2 出土した大型植物化石

大型植物化石の検討は計35試料について行われた。これら各試料から出土した大型植物化石の一覧を表1に示す。出土した大型植物化石は、木本8分類群、草本18分類群である。木本では、コナラ属アカガシ亜属、スモモ、ウメ、アンズ、サクラ属、サンショウ属、トチノキ、クマノミズキ、草本では、ミクリ属、ヒルムシロ、コバノヒルムシロ、イバラモ、マルバオモダカ、オモダカ科、カヤツリグサ科、ウキヤガラ、ホタルイ属、イボクサ、コナギ、サデクサ近似種、ヒユ科、マツモ、ヒメビシ、ヒシ属、センナリヒョウタン、ベニバナ近似種を出土した。なお、不明A、不明Bは比較的多くの試料より得られており、多産しているが、いずれも果実・種子ではないと思われる。不明Aは植物組織（木本）の可能性が高いが、分類群および部位は不明である。構造が単純であることから果実・種子の可能性は低い。不明Bは、草本の根の組織と思われる。

### 3 考察

出土したものの中で栽培植物と考えられるのは、スモモ、ウメ、アンズ、センナリヒョウタン、ベニバナ近似種である。スモモは5試料（No.21、22、24、27、29）、ウメは1試料（No.23）、アンズは1試料（No.30）から出土しており、スモモは弥生時代、ウメ、アンズは古墳時代には既に栽培されていたものと思われる。センナリヒョウタンは1試料（No.19）から出土しており、平安時代には既に栽培されていたものと思われる。センナリヒョウタンを含むヒョウタン仲間観賞用、工芸用にされ、また水に関連する祭祀的な意味合いで溝や井戸などにわざわざ沈めたり、流したりすることがあるという。ベニバナ近似種は1試料（No.9）から出土しており、古墳時代には既に栽培されていたものと思われる。ベニバナは染料用などにされる。

出土したものの中で栽培植物以外のものは、木本ではコナラ属アカガシ亜属、サクラ属、サンショウ属、トチノキ、クマノミズキであり、遺跡周辺に生育していたものと思われる。草本ではミクリ属、ヒルムシロ、コバノヒルムシロ、イバラモ、マルバオモダカ、オモダカ科、ウキヤガラ、ホタルイ属、イボクサ、コナギ、サデクサ近似種、マツモ、ヒメビシ、ヒシ属など、大半が池、沼あるいは湿地などに生育するものである。イバラモ、マツモは流水中にも生育し、コナギは水田雑草として普通にみられるものである。



付章図版4 産出した花粉化石 (スケール; a : 5, b : 1~4)  
 1 : タデ属ミチヤナギ節、地点No. 6 (⑥-B) 試料1、PAL. MN400  
 2 : ソバ属、地点No. 3 (②-1) 試料2、PAI. MN789  
 3 : ゴキゾル属-アマチャヅル属、地点No. 15 (⑭) 試料7、PAL. MN806  
 4 : ヨモギ属、地点No. 10 (⑩縄文トレンチ) 試料4、PAL. MN785  
 5 : キク亜科、地点No. 10 (⑩縄文トレンチ) 試料4、PAL. MN786

## 第2節 石川条里遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広・吉川純子（パレオ・ラボ）

### 1 はじめに

石川条里遺跡は長野市篠ノ井に所在し、千曲川が形成する自然堤防の西側の後背湿地に立地している。本遺跡は微高地（④・⑤・⑦・⑧・⑩区）と低湿地（①～③・⑥・⑪～⑬区）からなる地形であることが確認されており、微高地では、縄文時代、古墳時代、中世の3時期の遺構が確認され、低湿地では、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代、平安時代の水田遺構が確認されている。今回は、本遺跡周辺の古植生および栽培植物を明らかにする目的で大型植物化石の検討を行った。

### 2 出土した大型植物化石

大型植物化石の検討は計35試料について行われた。これら各試料から出土した大型植物化石の一覧を表1に示す。出土した大型植物化石は、木本8分類群、草本18分類群である。木本では、コナラ属アカガシ亜属、スモモ、ウメ、アンズ、サクラ属、サンショウ属、トチノキ、クマノミズキ、草本では、ミクリ属、ヒルムシロ、コバノヒルムシロ、イバラモ、マルバオモダカ、オモダカ科、カヤツリグサ科、ウキヤガラ、ホタルイ属、イボクサ、コナギ、サデクサ近似種、ヒユ科、マツモ、ヒメビシ、ヒシ属、センナリヒョウタン、ベニバナ近似種を出土した。なお、不明A、不明Bは比較的多くの試料より得られており、多産しているが、いずれも果実・種子ではないと思われる。不明Aは植物組織（木本）の可能性が高いが、分類群および部位は不明である。構造が単純であることから果実・種子の可能性は低い。不明Bは、草本の根の組織と思われる。

### 3 考察

出土したものの中で栽培植物と考えられるのは、スモモ、ウメ、アンズ、センナリヒョウタン、ベニバナ近似種である。スモモは5試料（No.21、22、24、27、29）、ウメは1試料（No.23）、アンズは1試料（No.30）から出土しており、スモモは弥生時代、ウメ、アンズは古墳時代には既に栽培されていたものと思われる。センナリヒョウタンは1試料（No.19）から出土しており、平安時代には既に栽培されていたものと思われる。センナリヒョウタンを含むヒョウタン仲間は観賞用、工芸用にされ、また水に関連する祭祀的な意味合いで溝や井戸などにわざわざ沈めたり、流したりすることがあるという。ベニバナ近似種は1試料（No.9）から出土しており、古墳時代には既に栽培されていたものと思われる。ベニバナは染料用などにされる。

出土したものの中で栽培植物以外のものは、木本ではコナラ属アカガシ亜属、サクラ属、サンショウ属、トチノキ、クマノミズキであり、遺跡周辺に生育していたものと思われる。草本ではミクリ属、ヒルムシロ、コバノヒルムシロ、イバラモ、マルバオモダカ、オモダカ科、ウキヤガラ、ホタルイ属、イボクサ、コナギ、サデクサ近似種、マツモ、ヒメビシ、ヒシ属など、大半が池、沼あるいは湿地などに生育するものである。イバラモ、マツモは流水中にも生育し、コナギは水田雑草として普通にみられるものである。

#### 4 大型植物化石の記載

コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis 幼果

果実には輪状紋がある。先端部（花柱、柱頭）は欠如している。

アンズ Prunus armenica Linn. 核

核は扁平な楕円形、表面には隆起があり、やや不明瞭な網目模様をつくる。一方の側面には縫合線が発達する。

ウメ Prunus mume Linn. 核

核は完形であれば扁平な楕円形。下端にへそがあり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には小さく深い孔が散在する。

スモモ Prunus salicina Lindl. 核

核はやや扁平な楕円形、表面は滑らかで、溝や穴のような明瞭なくぼみはない。

サクラ属 Prunus 核

核は扁平な卵形、表面は滑らか。

サンショウ属 Zanthoxylum 種子破片

完形であれば側面観は楕円形、上面観は卵形。表面には網目模様がり、一方の側面にはへそがある。

トチノキ Aesculus turbinata Blume 果実破片、幼種子

果実は完形であれば側面観は円形ないし倒卵形、上面観は円形。3片に割れ易く、表面に皮目状の斑点がある。種子は側面観はやや扁平な円形、上面観は円形。光沢のある黒色の部分と光沢のない黒灰色の部分がほぼ半分ずつある。

クマノミズキ Cornus brachypoda C.A.Mey. 核破片

完形であれば、核は球形。表面には一周する1本の幅広く浅い溝と数本の浅く細い縦筋が入る。

ミクリ属 Sparganium 果実

先端の尖った卵形から狭卵形、表面は繊維状でやわらかく、縦に数本の溝がある。

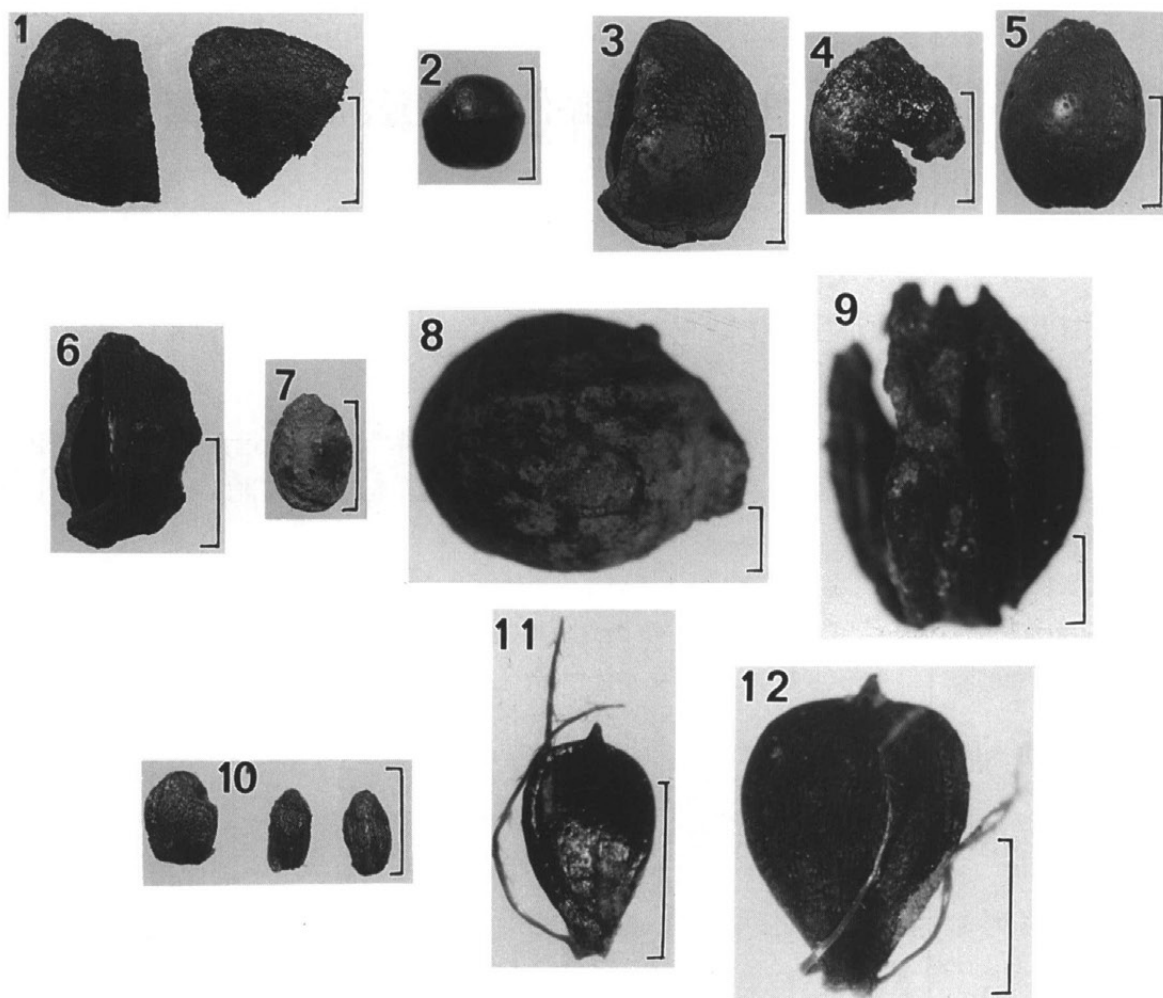
ホタルイ属 Scirpus 果実

側面観は倒卵形、上面観は片凸レンズ形、基部に花被が変形した針状の付属物がある。



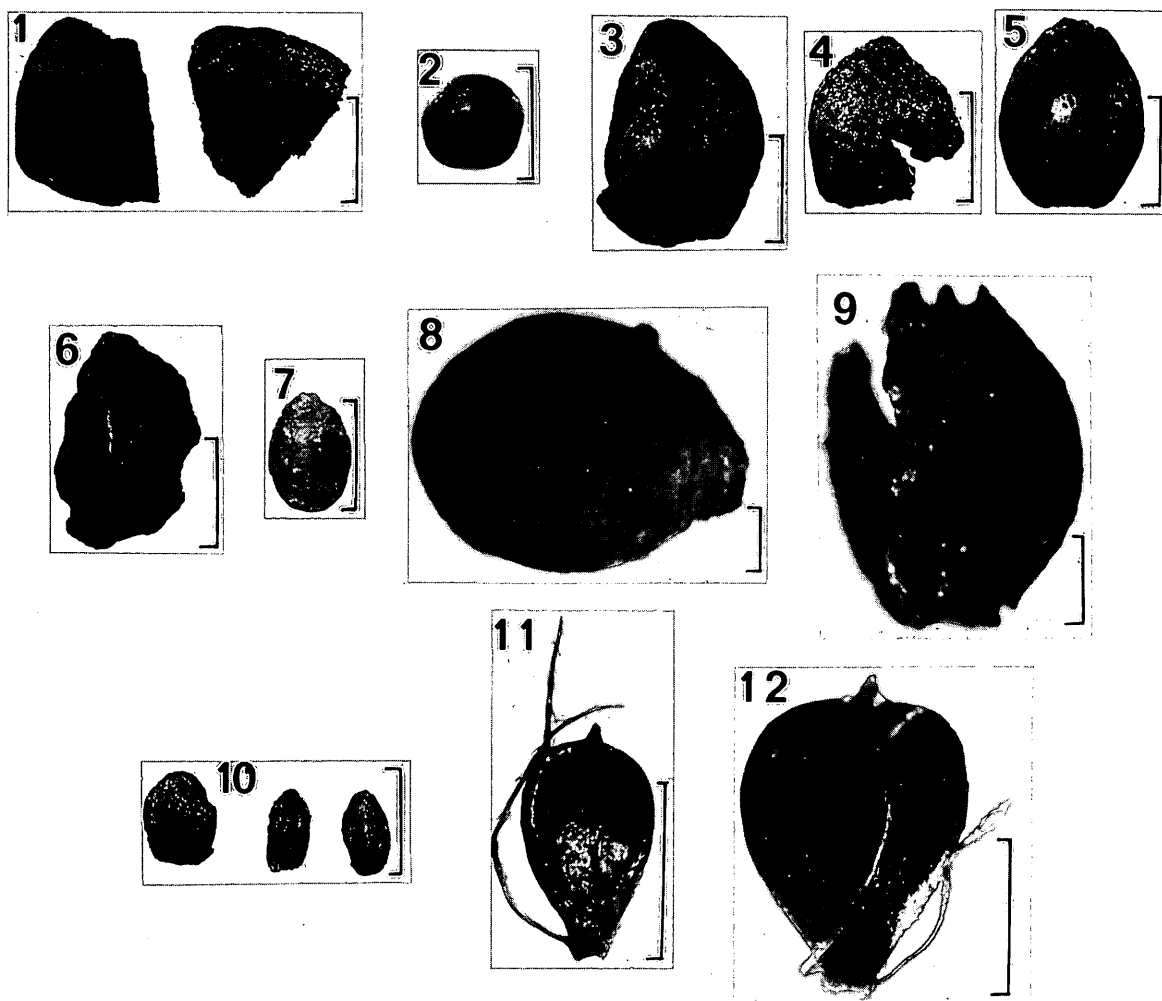
サンプル番号	分類群と個数	出土地点・層位	時代
No.1	ヒルムシロ、果実、18 ウキヤガラ、果実、70 マツモ、種子、1 不明A、1	①-1区	平安
No.2	ヒメビシ、果実、1	①-1区12層 No.9	奈良~平安
No.3	ヒルムシロ、果実、3 ウキヤガラ、果実、15 ホタルイ属、果実、9 マツモ、種子、1 不明A、20	①-1区	奈良~平安
No.4	マルバオモダカ、果実、10 オモダカ科、種子、2	⑫-1区8・9層	弥生
No.5	不明A、5	①-1区12層 No.3	奈良~平安
No.6	ヒルムシロ、果実、14 コバノヒルムシロ、果実、2 イバラモ、種子、1 カヤツリグサ属、2 ウキヤガラ、果実、137 ホタルイ属、果実、39 ヒユ科、種子、1 不明A、3	①-1区	平安
No.7	ウキヤガラ、果実、3 ホタルイ属、果実、2	⑬区10層	弥生後期
No.8	不明B、28	⑮区26下層	弥生中期
No.9	ベニバナ近似種、5	①-2区13層	古墳
No.10	不明A、27	①-1区	平安
No.11	ウキヤガラ、2 ヒユ科、種子、1	⑬区8層	古墳
No.12	マツモ、種子、2	①-1区12層 No.10	奈良~平安
No.13	ウキヤガラ、果実、8 ヒシ属、刺、2 不明A、11	①-1区12層	奈良~平安
No.14	ウキヤガラ、果実、7 サデクサ近似種、2	⑪区SA3003	古墳
No.15	ヒユ科、12	SK1020	古墳
No.16	不明A、10	①-1区12層 No.7	奈良
No.17	ヒルムシロ、果実、7	①-1区12層 No.4	奈良
No.18	不明B、12	⑮区26層 下層	弥生中期
No.19	センナリヒョウタン、種子、1	①-1区11層 No.6	平安
No.20	イバラモ、種子、9 オモダカ科、種子、14 ウキヤガラ、果実、5 ホタルイ属、果実、17 イボクサ、種子、2 コナギ、種子、38 不明A、1	⑬区7層	平安
No.21	スモモ、核、1	SD1016	古墳前期
No.22	スモモ、核、1	SD1016	古墳前期
No.23	ウメ、核、(6) …約1	⑦区SK1084	古墳
No.24	スモモ、核、1	⑭区7層内	平安
No.25	トチノキ、果実、(2) …1個未満	①-2区SC3002	平安
No.26	トチノキ、幼種子、1	⑫区SA3530 I土器集中部	弥生
No.27	スモモ、核、(5) …約1	⑫区10層上面炭化層下	弥生後期
No.28	不明	①-2区SD3002内	古墳~奈良
No.29	スモモ、核、(1)	⑫-2区3層水田	近世
No.30	アンズ、核、(1)	⑬区SD3006	中世
No.31	不明	⑬・⑭区7-1層	平安
No.32	サクラ属、核、1	⑯区8~9層	弥生~古墳
No.33	コナラ属アカガシ亜属、幼果、2 サンショウ属、種子、(2) …約1 クマノミズキ、核、(1)	⑭区SD3004 溝底砂内	弥生後期
No.34	ホタルイ属、5	⑮区26層下層土器内出土	弥生中期
No.35	ミクリ属、果実、3	⑯区11b層	弥生中期

第47表 出土した大型植物化石一覧表  
( ) 内は半分または破片の数



付章図版5 出土した大型植物化石 (スケール; 1~7、10は1cm、8・9・11・12は1mm)

- 1 トチノキ、果実破片、試料No.25
- 2 トチノキ、幼種子、試料No.26
- 3 アンズ、核、試料No.30
- 4 ウメ、核、試料No.23
- 5 スモモ、核、試料No.22
- 6 スモモ、核、試料No.29
- 7 サクラ属、核、試料No.32
- 8 サンショウ属、種子、試料No.33
- 9 クマノミズキ、核、試料No.33
- 10 ミクリ属、果実、試料No.35
- 11・12 ホタルイ属、果実、試料No.34



付章図版5 出土した大型植物化石 (スケール; 1~7、10は1cm、8・9・11・12は1mm)

- 1 トチノキ、果実破片、試料No.25
- 2 トチノキ、幼種子、試料No.26
- 3 アンズ、核、試料No.30
- 4 ウメ、核、試料No.23
- 5 スモモ、核、試料No.22
- 6 スモモ、核、試料No.29
- 7 サクラ属、核、試料No.32
- 8 サンショウ属、種子、試料No.33
- 9 クマノミズキ、核、試料No.33
- 10 ミクリ属、果実、試料No.35
- 11・12 ホタルイ属、果実、試料No.34

### 第3節 石川条里遺跡水田域（弥生時代後期～近世）出土の人骨と獣骨

京都大学霊長類研究所

茂原 信生

#### 1 はじめに

石川条里遺跡（水田域）は長野市篠ノ井塩崎にある遺跡で、弥生時代後期から近世にかけての複合遺跡である。当遺跡は長野県埋蔵文化財センターによって平成元年に調査され、本報告はその際出土したヒトを含む自然遺物についてのものである。

骨の保存状態は非常に悪く、しっかりと残っているものはウマの歯やヒトの歯だけである（第51表）。ヒトの歯の計測は藤田（1949）にしたがった。イヌの歯の計測は斎藤（1963）にしたがった。ウマの歯の計測は、Driesch（1976）にしたがったが、エナメル質で行なった。

#### 2 出土人骨の特徴

ヒトは二ヶ所から出土しているが、いずれも弥生時代後期の地層からで、残っているのは歯だけであった。

##### S K1125（付章図版6；1）

上顎左の第1および第2大臼歯（？）が残っている。ともにごくわずかに咬耗が見られる。したがって、第2大臼歯が萌出して間もない個体であると考えられ、やはり12歳前後の若い個体であろう。エナメル質減形成はみられない。

歯の大きさは、現代人男性と女性の間ミ的な大きさである。

この個体は、12歳前後と考えられるが性別は不明である。

##### S K1124（付章図版6；2）

上顎の右第1および第2大臼歯、下顎の左第1切歯（中切歯）あるいは第2切歯（側切歯）と第1大臼歯、および右第1小臼歯の合計5本である。計測できたのは3本である。

	上顎	
	M1	M2
近遠心径	10.6	9.3mm
頬舌径	11.8	11.3

第48表 歯計測値

第1大臼歯は舌側半だけが残っているがプロトコーンにわずかに咬耗が見られ、モルナー（1971）の2である。それ以外の歯の咬耗はごくわずかである。とくに下顎の中切歯に切縁結節が残っていることを考えると、現代人で第2大臼歯が萌出する12歳前後と考えられる。エナメル質減形成はみられない。

歯の大きさは、権田（1959）の現代人のデータと比較すると、上顎第2大臼歯は近遠心径・頬舌径ともに現代人女性の平均値より小さく、下顎の第1大臼歯はともに現代人男性よりも大きい。

この個体は12歳前後と考えられ、歯の小ささから判断して、女性の可能性が高い。

	上顎	下顎	
	M2	I1	M1
近遠心径	8.8	6.1	12.4mm
頬舌径	10.8		11.2

第49表 歯計測値

#### 3 出土した獣骨（第52・53表）